

柏北部東地区 埋蔵文化財発掘調査報告書7

— 柏市富士見遺跡 —
縄文時代以降編2

平成27年3月

独立行政法人 都市再生機構

公益財団法人 千葉県教育振興財団

柏北部東地区 埋蔵文化財発掘調査報告書 7

かしわ ふじみ
— 柏市富士見遺跡 —
縄文時代以降編 2



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告書第736集として、独立行政法人都市再生機構の柏北部東地区土地区画整理事業に伴って実施した柏市富士見遺跡の2冊目の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回報告するのは富士見遺跡の北側にあたるD・E地区です。すでに報告した南側のA～C地区と同様に、縄文時代前期の集落を主体とするものでしたが、これ以外に縄文時代早期・中期・後期の遺構、古墳時代の集落、多数の地下式坑や土坑を伴う中世の屋敷跡などが検出されました。南半部とは異なった様相を呈しており、この地域の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な成果が得られています。

刊行に当たり、本書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願ってやみません。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様にご心から感謝の意を表します。

平成 27 年 3 月

公益財団法人 千葉県教育振興財団
理 事 長 堀 田 弘 文

凡 例

- 1 本書は、独立行政法人都市再生機構による柏北部東地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県柏市小青田字立山、小青田字富士見、船戸字富士見ほかに所在する富士見遺跡（遺跡コード217-026）である。このうち富士見遺跡D・E地区の成果のほか、A～C地区の古墳時代、中・近世の遺構・遺物について掲載した。

富士見遺跡A～C地区の縄文時代の成果については千葉県教育振興財団調査報告第728集「柏北部東地区埋蔵文化財調査6－柏市富士見遺跡－縄文時代以降1」として刊行している。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査および整理作業の期間、担当者などについては第1章に記載した。
- 5 本書の執筆分担は下記のとおりである。

第1章 主任上席文化財主事 森本和男
第2章第1節1～7 主任上席文化財主事 森本和男・山口典子
第2章第1節8、第3章第2節 上席文化財主事 橋本勝雄
第2章第3節、第3章第3・4節 上席文化財主事 小高春雄
上記以外と編集は 山口が行った。

なお、貝類・魚類の同定は小宮 孟氏が行い、縄文時代の石器類については大工原 豊氏の御指導、御協力を得た。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、独立行政法人都市再生機構および柏市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 第1図に国土地理院1/25,000地形図「流山」(N1-54-25-1-2)・「守谷」(N1-54-25-1-1)を使用した。
- 8 図版1の遺跡周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和48年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した座標は日本測地系に基づく平面直角座標（国家標準直角座標第Ⅱ系）で、図面の方位はすべて座標北である。
- 10 整理作業にあたり遺構番号を振りなおし、第2表に調査時の遺構番号との対照表を示した。
- 11 遺物に付した番号は、平面図・写真図版に共通して使用した。土器は遺構ごとの通し番号、土製品・石製品類、石器類は縄文時代、古墳時代、中・近世の時代ごとにそれぞれ通し番号を付している。

主要な遺物の出土位置は平面図・断面図に示した。図中では土器は「・」、土器以外の遺物は「□」で示し、土製品に「D」または名称、石器に「S」または名称をそれぞれの番号に冠して土器と区別した。縄文時代の織維土器は、土器断面に「・」を付した。

本文目次

序文 凡例

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1 調査の経緯と経過	1
2 調査・整理の方法と概要	5
第2節 遺跡の位置と環境	22
1 遺跡の位置と地理的環境	22
2 周辺の遺跡	23
第2章 検出された遺構と遺物	32
第1節 縄文時代	32
1 竪穴住居	32
2 炉穴	72
3 陥穴	76
4 土坑	76
5 遺物包含層	107
6 遺構外出土縄文土器	122
7 土製品	140
8 石器	141
第2節 古墳時代	169
1 竪穴住居	169
2 円墳	178
3 土製品・石製品	180
第3節 中・近世	182
1 中世の概要	182
2 掘込区画1	182
3 掘込区画1の遺構と遺物	185
4 掘込区画2・3	212
5 掘込区画2の遺構と遺物	212
6 掘込区画3の遺構	225
7 区画外の中世遺構	228
8 近世の概要	231
9 中・近世土坑群	231
10 近世区画溝群とその関連遺構	233
11 遺構外出土の中・近世遺物	245

第3章 まとめ	259
第1節 富士見遺跡の集落について	259
1 縄文時代	259
2 古墳時代	262
第2節 縄文時代の石器-富士見遺跡の全体像-	269
1 石器組成	269
2 技術的特徴	271
3 石器石材	271
第3節 中世掘込遺構群	273
1 掘込遺構の構成と居住者の階層	273
2 類例からみた屋敷像	273
3 富士見中世遺構の性格	274
4 遺物について	276
第4節 近世溝群	280
報告書抄録	巻末

挿 図 目 次

第1図 富士見遺跡の位置と周辺の遺跡	2	第17図 SI-095、SI-096	49
第2図 柏北部東地区遺跡群位置図	3	第18図 SI-097、SI-098(1)	50
第3図 グリッド分割図	5	第19図 SI-098(2)、SI-099	52
第4図 調査地点と上層確認トレンチ設定図	6	第20図 SI-100	54
第5図 富士見遺跡全体図	8	第21図 SI-102~104、SI-108	56
第6図 D地区遺構分布図	9	第22図 SI-109	57
第7図 E地区遺構分布図	10	第23図 SI-110、SI-111、SI-112	60
第8図 D・E地区縄文時代遺構分布図	33	第24図 SI-113、SI-114	61
第9図 SI-081	34	第25図 SI-116、SI-117	63
第10図 SI-082、SI-083	36	第26図 SI-118、SI-119、SI-120	65
第11図 SI-085	38	第27図 SI-121	67
第12図 SI-088、SI-091	39	第28図 SI-122、SI-123、SI-124	69
第13図 SI-089、SI-090、SK-116	41	第29図 SI-125~SI-129	71
第14図 SI-092(1)	43	第30図 SI-130、SI-132、SI-133	73
第15図 SI-092(2)、SI-093・SI-094(1)	44	第31図 炉穴(1)	75
第16図 SI-093・SI-094(2)	47	第32図 炉穴(2)、陥穴	77

第33図 縄文時代土坑(1)	80	第65図 縄文時代石器(1)	152
第34図 縄文時代土坑(2)	82	第66図 縄文時代石器(2)	153
第35図 縄文時代土坑(3)	84	第67図 縄文時代石器(3)	154
第36図 縄文時代土坑(4)	87	第68図 縄文時代石器(4)	155
第37図 縄文時代土坑(5)	89	第69図 縄文時代石器(5)	156
第38図 縄文時代土坑(6)	92	第70図 縄文時代石器(6)	157
第39図 縄文時代土坑(7)	94	第71図 縄文時代石器(7)	158
第40図 縄文時代土坑(8)	96	第72図 縄文時代石器(8)	159
第41図 縄文時代土坑(9)	98	第73図 縄文時代石器(9)	160
第42図 縄文時代土坑(10)	101	第74図 縄文時代石器(10)	161
第43図 縄文時代土坑(11)	103	第75図 縄文時代石器(11)	162
第44図 S14グリッド出土縄文土器時期別分布 (1)	108	第76図 古墳時代遺構分布図	170
第45図 S14グリッド出土縄文土器時期別分布 (2)	109	第77図 SI-084	171
第46図 S14グリッド出土縄文土器時期別分布 (3)	110	第78図 SI-086	172
第47図 S14グリッド出土縄文土器時期別分布 (4)	111	第79図 SI-087、SI-101	174
第48図 S14グリッド出土縄文土器時期別分布 (5)	112	第80図 SI-105、SI-106	176
第49図 S14グリッド出土石器・礫分布	113	第81図 SI-107、SI-115	177
第50図 S14グリッド出土石器・礫分布拡大図	114	第82図 SI-131	179
第51図 S14グリッド出土縄文土器(1)	116	第83図 SM-001	180
第52図 S14グリッド出土縄文土器(2)	118	第84図 古墳時代土製品・石製品、遺構外出土 土器	181
第53図 S14グリッド出土縄文土器(3)	121	第85図 中・近世遺構分布図	183
第54図 S14グリッド出土縄文土器(4)	122	第86図 中世掘込区画全体図	184
第55図 D地区遺構外出土縄文土器(1)	124	第87図 掘込区画1	186
第56図 D地区遺構外出土縄文土器(2)	126	第88図 掘込区画1 地下式坑(1)	187
第57図 D地区遺構外出土縄文土器(3)	129	第89図 掘込区画1 地下式坑(2)	188
第58図 E地区遺構外出土縄文土器(1)	131	第90図 掘込区画1 地下式坑(3)	190
第59図 E地区遺構外出土縄文土器(2)	133	第91図 掘込区画1 地下式坑(4)	191
第60図 E地区遺構外出土縄文土器(3)	135	第92図 掘込区画1 地下式坑(5)	192
第61図 E地区遺構外出土縄文土器(4)	136	第93図 掘込区画1 地下式坑(6)	194
第62図 E地区遺構外出土縄文土器(5)	138	第94図 掘込区画1 地下式坑(7)	196
第63図 E地区遺構外出土縄文土器(6)	139	第95図 掘込区画1 地下式坑(8)	197
第64図 縄文時代土製品	140	第96図 掘込区画1 楕円形大形土坑(1)	199
		第97図 掘込区画1 楕円形大形土坑(2)	200
		第98図 掘込区画1 方形堅穴遺構、土坑 (1)	203
		第99図 掘込区画1 土坑(2)	206

第100図	掘込区画1 土坑(3) ……………	208	第120図	南部区画溝群(3)・北部区画溝群 (1) ……………	244
第101図	掘込区画1 土坑(4) ……………	211	第121図	北部区画溝群(2) ……………	246
第102図	掘込区画2・3 ……………	213	第122図	北部区画溝群(3) ……………	247
第103図	掘込区画2 地下式坑(1) ……………	215	第123図	近世掘立柱建物 ……………	248
第104図	掘込区画2 地下式坑(2) ……………	216	第124図	遺構外出土中世陶器 ……………	250
第105図	掘込区画2 地下式坑(3)、 大形土坑 ……………	217	第125図	中・近世遺物(土鏃・板碑・砥石・ 銭貨) ……………	251
第106図	掘込区画2 方形竪穴遺構 ……………	220	第126図	近世陶磁器・土器 ……………	252
第107図	掘込区画2 土坑(1) ……………	222	第127図	富士見遺跡縄文時代遺構分布図 ……	260
第108図	掘込区画2 土坑(2)、井戸 ……	224	第128図	富士見遺跡周辺の縄文時代遺構 分布図 ……………	263
第109図	掘込区画3 地下式坑、土坑(1) ……	227	第129図	縄文時代前期遺構分布図(1) ……	265
第110図	掘込区画3 土坑(2) ……………	229	第130図	縄文時代前期遺構分布図(2) ……	266
第111図	掘込区画外の中世土坑 ……………	230	第131図	縄文時代前期遺構分布図(3) ……	267
第112図	掘込区画外の中・近世土坑(1) ……	232	第132図	縄文時代前期遺構分布図(4) ……	268
第113図	掘込区画外の中・近世土坑(2) ……	234	第133図	富士見遺跡中世環境復元図 ……	275
第114図	南端境界溝群・南部区画溝群 ……	236	第134図	富士見遺跡中世出土遺物 ……	277
第115図	南端境界溝群(1) ……………	237	第135図	高田台牧(小青田～大室～正蓮寺)と 周辺の主な野馬除土手・堀調査例 ……	281
第116図	南端境界溝群(2) ……………	239			
第117図	南端境界溝内土坑 ……………	240			
第118図	南部区画溝群(1) ……………	242			
第119図	南部区画溝群(2) ……………	243			

表 目 次

第1表	富士見遺跡発掘調査歴(第1地点～第 50地点) ……………	7	第11表	古墳時代土製品計測表 ……………	181
第2表	富士見遺跡遺構一覧 ……………	11	第12表	古墳時代砥石類計測表 ……………	181
第3表	周辺の主な遺跡 ……………	25	第13表	中世陶磁器・土器一覧 ……………	253
第4表	貝種組成 ……………	104	第14表	近世陶磁器・土器一覧 ……………	256
第5表	貝類計測表 ……………	105	第15表	中・近世土製品計測表 ……………	258
第6表	魚類遺存体同定結果 ……………	106	第16表	中・近世石製品類計測表 ……………	258
第7表	縄文時代土製品計測表 ……………	141	第17表	銭貨計測表 ……………	258
第8表	縄文時代石器遺構別器種組成表 ……	142	第18表	富士見遺跡縄文時代石器器種組成表 ……	269
第9表	縄文時代石器石材別器種組成表 ……	144	第19表	石器の機能・用途別組成 ……………	270
第10表	縄文時代石器属性表 ……………	163	第20表	富士見遺跡縄文時代石器石材別器種組 成表 ……………	271

図 版 目 次

- | | |
|----------------------|------------------------|
| 図版1 遺跡周辺航空写真 | 図版34 縄文土器(3) |
| 図版2 縄文時代竪穴住居(1) | 図版35 縄文土器(4) |
| 図版3 縄文時代竪穴住居(2) | 図版36 縄文土器(5) |
| 図版4 縄文時代竪穴住居(3) | 図版37 縄文土器(6) |
| 図版5 縄文時代竪穴住居(4) | 図版38 縄文土器(7) |
| 図版6 縄文時代竪穴住居(5) | 図版39 縄文土器(8) |
| 図版7 縄文時代竪穴住居(6) | 図版40 縄文土器(9) |
| 図版8 縄文時代竪穴住居(7) | 図版41 縄文土器(10) |
| 図版9 縄文時代竪穴住居(8) | 図版42 縄文土器(11) |
| 図版10 縄文時代竪穴住居(9) | 図版43 縄文土器(12) |
| 図版11 炉穴、陥穴、縄文時代土坑(1) | 図版44 縄文土器(13) |
| 図版12 縄文時代土坑(2) | 図版45 縄文土器(14) |
| 図版13 縄文時代土坑(3) | 図版46 縄文土器(15) |
| 図版14 縄文時代土坑(4) | 図版47 縄文土器(16) |
| 図版15 縄文時代土坑(5) | 図版48 縄文土器(17) |
| 図版16 縄文時代土坑(6) | 図版49 縄文土器(18) |
| 図版17 古墳時代竪穴住居(1) | 図版50 縄文土器(19) |
| 図版18 古墳時代竪穴住居(2) | 図版51 縄文土器(20) |
| 図版19 古墳時代竪穴住居(3)、古墳 | 図版52 縄文土器(21) |
| 図版20 中世掘込区画、地下式坑(1) | 図版53 縄文土器(22) |
| 図版21 地下式坑(2) | 図版54 縄文土器(23) |
| 図版22 地下式坑(3) | 図版55 縄文土器(24) |
| 図版23 地下式坑(4) | 図版56 縄文土器(25) |
| 図版24 中世井戸、土坑(1) | 図版57 縄文時代石器(1) |
| 図版25 中世土坑(2) | 図版58 縄文時代石器(2) |
| 図版26 中世土坑(3) | 図版59 縄文時代石器(3) |
| 図版27 中世土坑(4)、近世土坑 | 図版60 縄文時代石器(4) |
| 図版28 溝状遺構(1) | 図版61 縄文時代石器(5) |
| 図版29 溝状遺構(2) | 図版62 縄文時代石器(6) |
| 図版30 溝状遺構(3) | 図版63 縄文時代石器(7)、縄文時代土製品 |
| 図版31 溝状遺構(4) | 図版64 古墳時代土器(1) |
| 図版32 縄文土器(1) | 図版65 古墳時代土器(2) |
| 図版33 縄文土器(2) | 図版66 中世土器・陶磁器(1) |

図版67 中世土器・陶磁器(2)

図版68 中世土器・陶磁器(3)

図版69 中世土器・陶磁器(4)

図版70 中世土器・陶磁器(5)、土製品・
石製品、錢貨

図版71 近世土器・陶磁器

第1章 はじめに

第1節 調査の概要(第1～7図、第1・2表)

1 調査の経緯と経過

東京都心の秋葉原から北東に向かって茨城県つくば市までを走る常磐新線(つくばエクスプレス)が、平成17年8月24日に開業した。常磐新線は常磐線の混雑緩和、都心と筑波研究学園都市とをむすぶ路線として計画された。また平成元年に制定された「大都市地域における宅地開発及び鉄道整備の一体的推進に関する特別措置法」により、鉄道建設と沿線の宅地開発が一体化して進められることになった。鉄道整備と一体となって実施された沿線開発は、1都3県全体で13重点地域、17地区、約3,000haの土地区画整理事業である⁽¹⁾。バブル経済で地価が高騰し、東京近郊にさらなる宅地供給を目論んだ開発計画だった。

常磐新線に関する千葉県内の開発は、南流山駅の木地区68ha(千葉県)と西平井・鱈ヶ崎地区52ha(流山市)、流山セントラルパーク駅の運動公園周辺地区232ha(千葉県)、流山おおたかの森駅の流山新市街地区286ha(都市再生機構)、柏の葉キャンパス駅の柏北部中央地区273ha(千葉県)、柏たなか駅の柏北部東地区170ha(都市再生機構)の6か所で、合計1,081haの広さに及ぶ。

鉄道沿線で開発の対象となった地域は、東京湾沿岸から約20km北上した江戸川と利根川が大きく分離し始める地点に相当する。付近一帯には、旧石器時代から近世にいたるまで、考古学的遺跡が豊富に分布している。とくに縄文時代前期の貝塚遺跡が多く分布していることから、氷河期終結後の温暖化による約6,000年前の縄文海進で、やや内陸のこの周辺近くにまで海が浸食していたと予測されている。

独立行政法人都市再生機構は常磐新線建設に関連して、茨城県との県境に近い柏たなか駅周辺で、面積169.9ha、計画人口17,000人、事業費501億円の「柏北部東地区土地区画整理事業」を計画した。事業期間は平成10年4月1日から平成31年3月31日(清算期間をふくむ)までである。開発事業の実施にあたり、千葉県教育委員会へ事業予定地内の埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した結果、予定地内には花前Ⅰ遺跡・花前Ⅱ遺跡・花前Ⅲ遺跡・矢船Ⅰ遺跡・矢船Ⅱ遺跡・館林Ⅱ遺跡・駒形遺跡・富士見遺跡・大松遺跡・原畑遺跡・小山台遺跡・寺下前遺跡・宮前遺跡・八反目台遺跡の合計14遺跡(以下、柏北部東遺跡群とする)が存在する旨、回答があった(第2図)。千葉県教育委員会は独立行政法人都市再生機構とその取扱いについて協議した結果、現状換地等により現状保存が可能な部分を除き記録保存の措置を講ずることとし、発掘調査を公益財団法人千葉県教育振興財団に委託することになった。

柏北部東地区の発掘調査は平成11年2月1日からはじまり、その後約15年を経過した現在でも続行している。調査の成果は、大松遺跡、駒形遺跡、原畑遺跡、富士見遺跡について、これまで6冊の調査報告書として刊行された。

富士見遺跡の発掘調査は平成12年度から平成24年度まで56地点にわたって実施され、縄文時代の遺構・遺物を中心に旧石器時代、縄文時代、古墳時代、中世、近世の遺構・遺物が多数検出された。整理作業は平成17年度から始まり、その内容は、平成12年度から平成22年度の第50地点の調査までの上層の調査成果を対象とした。

第50地点までの調査期間および担当者を第1表に示した。また整理の期間・担当者は次のとおりである。



大和町チサンカントリークラブ

運動公園

柏市

43 船岡山高野

船戸

2

3

4

8

5

6

10

25

26

27

28

29

30

31

32

16

18

17

21

20

23

22

24

25

26

27

28

29

30

31

32

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

54

55

56

57

58

59

60

61

62

63

64

65

66

67

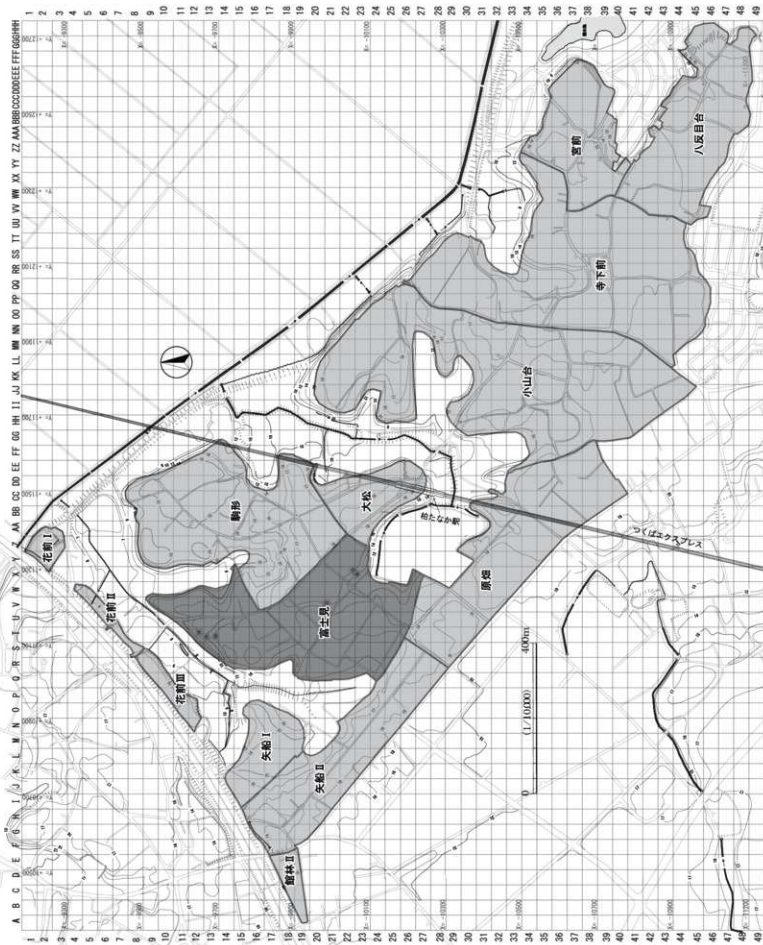
68

69

70

71

第1図 富士見遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図 柏北部東地区遺跡群位置図

平成17年度

期 間 平成17年4月1日～平成18年3月31日

調査研究部長 矢戸三男

整理課長 加藤修司

担当職員 上席研究員 横山 仁

内 容 水洗・注記、記録整理の一部

平成18年度

期 間 平成18年4月1日～平成19年3月31日

調査研究部長 矢戸三男

整理課長 郷田良一

担当職員 上席研究員 横山 仁

内 容 水洗・注記の一部、分類・記録整理の一部

平成19年度

期 間 平成19年4月1日～平成20年3月31日

調査研究部長 矢戸三男

整理課長 高田 博

担当職員 上席研究員 今泉 潔 西山太郎

内 容 分類の一部から実測・拓本の一部

平成22年度

期 間 平成22年4月1日～平成23年3月31日

調査研究部長 及川淳一

整理課長 西川博孝

担当職員 上席研究員 山田貴久 田島 新 木原高広 宮 重行

内 容 実測・拓本の一部からトレースの一部

平成24年度

期 間 平成24年4月1日～平成24年12月31日

調査研究部長 関口達彦

整理課長 高田 博

担当職員 主任上席文化財主事 大野康男 倉内郁子

内 容 実測・拓本・トレースの一部から挿図作成・原稿執筆の一部

平成25年度

期 間 平成25年7月1日～平成26年3月31日

調査研究部長 伊藤智樹

整理課長 今泉 潔

担当職員 主任上席文化財主事 山口典子

内 容 挿図作成の一部から原稿執筆の一部

平成26年度

期 間 平成26年4月1日～平成27年3月31日

調査研究部長 伊藤智樹

整理課長 今泉 潔

担当職員 主任・上席文化財主事 森本和男 山口典子

上席文化財主事 小高春雄 橋本勝雄

内 容 原稿執筆の一部から編集、報告書印刷・刊行

2 調査・整理の方法と概要

発掘調査の開始に当たり、柏北部東地区の調査対象区域全体に公共座標(旧座標 国家標準直角座標第Ⅳ系)を基準とした方眼網を設定した(第2図)。方眼は40m×40mの区画を大グリッドとし、さらにその大グリッド内を4m×4mに分割して、100個の小グリッドに細分した。大グリッドは西から東へA、B、C、・・・、北から南へ1、2、3、・・・と記号を付け、両者を組み合わせてA1、B2、・・・と呼称した。小グリッドは北西隅を起点として西から東へ00、01、02、・・・、北から南へ00、10、20、・・・と番号をつけ、南東隅が99となる(第3図)。これを大グリッドの呼称と組み合わせ、例えばY19-24のような表記になる。遺構・遺物の位置はこの方眼網にもとづいて記録した。富士見遺跡は東西がQ～Z、南北が8～27の南北に長い範囲にあたる。

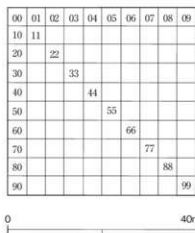
発掘調査はまず上層の確認調査・本調査を行い、続けて下層の確認調査・本調査を実施した。

上層の調査は対象面積の10%を原則にトレンチを設定し、確認調査を行って遺構および遺物の分布状況を調査した上で、本調査範囲を決定して本調査を実施した。遺構の調査は表土除去後、覆土の土層観察用のベルトを設定して掘り下げ、土層断面図や平面図などの記録を作成した。上層の本調査終了後、調査対象面積の2%を原則にグリッドを設定して下層の確認調査を実施した。その結果、一定の石器の分布状況が認められたものについては、本調査範囲を決定して本調査を実施し、発掘調査を完了した。

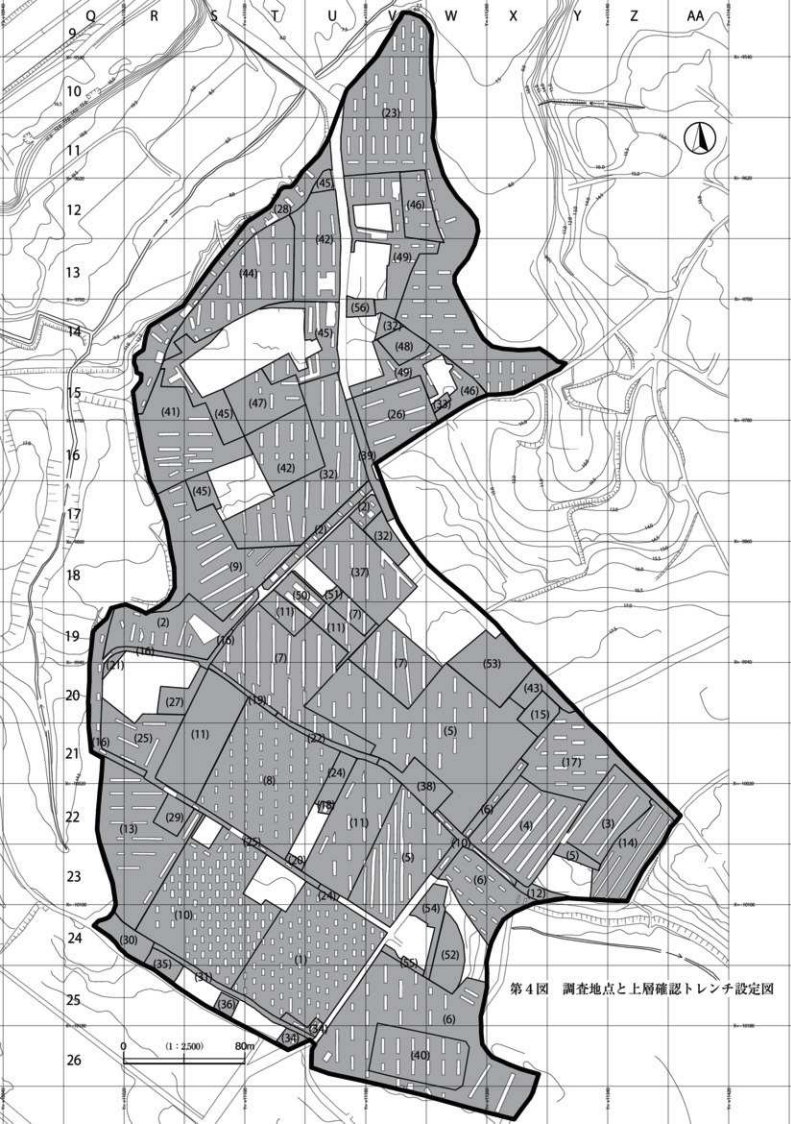
上層本調査にあたっては、調査地点ごとに遺構番号を付した。遺構番号は遺構の種類ごとの通し番号とし、堅穴住居にSI、土坑等にはSK、溝状遺構や野馬堀などにはSD、その他の遺構(遺物集中地点や地点貝塚)にはSXを付すことを原則とし、調査地点名と組み合わせて表記した。たとえば第1地点の堅穴住居001は(1)SI-001、第2地点の土坑002は(2)SK-002のように表記される。

遺構番号は、調査地点ごとに付したため、整理作業の段階で遺構の種類別の通し番号に振りなおした。この際、同一遺構を隣接する地点で別々に調査したためにそれぞれに遺構番号を付した場合があり、これらはひとつの遺構番号に改めた。遺物の注記は調査時の遺構番号で行っている。新旧の遺構番号の対照は、第2表の遺構一覧を参照されたい。なお、D・E地区の新遺構番号はすでに報告した富士見遺跡A～C地区の続き番号としている。

検出された上層遺構のほとんどが縄文時代の遺構であったため、縄文時代の集落を単位として、遺跡全体を南から北へA～Eの5地区に区分し、遺構・遺物量が多かったため、さらに2分冊に分けて報告することにした。この結果、平成25年度に富士見遺跡第1地点から第50



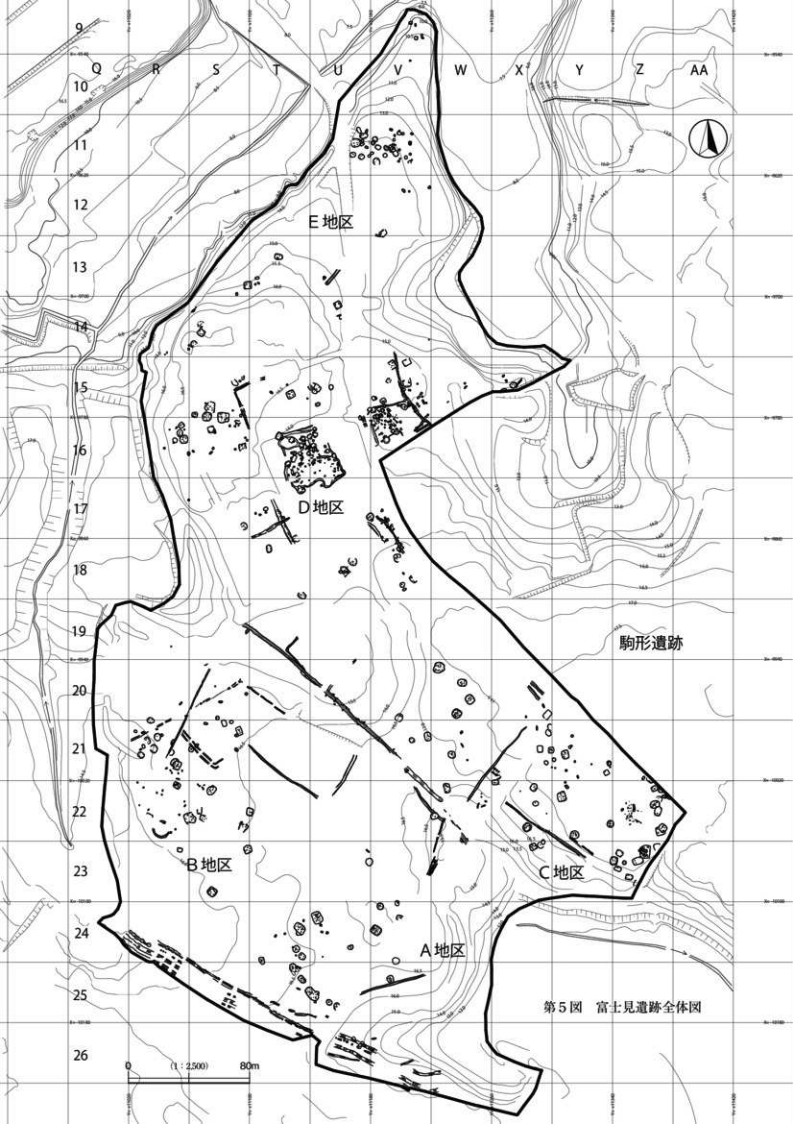
第3図 グリッド分割図



第4図 調査地点と上層確認トレンチ設定図

第1表 富士見遺跡発掘調査歴(第1地点~第50地点)

調査年度	調査地点	調査期間	調査研究部長	所長(課長)	担当者	住 所	調査対象面積㎡	埋蔵調査面積㎡			
								上層	下層	土 層	下層
平成12年度	1	13.08.09 - 13.03.29	津澤 豊	及川淳一	岡山 上中遺跡一	柏市小若田字立山158-114小	5,542	600	321	3,008	108
平成13年度	2	13.09.05 - 13.10.31	佐久間章	田坂 浩	徳島雄雄	柏市船戸字富士見13712小	2,620	322	104	0	0
平成14年度	3	15.02.03 - 15.02.28 15.03.17 - 15.03.27	森本 勝	田坂 浩	福生一夫	柏市小若田字立山230-114小	1,850	185	74	740	0
平成15年度	4	15.03.12 - 15.07.08	森本 勝	田坂 浩	堀田昌司	柏市小若田字立山229-114小	3,026	340	120	1,840	0
	5	15.07.09 - 15.10.31			堀田昌司	柏市小若田字立山191-114小	11,871	1,310	236	6,655	0
	6	15.12.15 - 16.02.17			堀田昌司 堀田貞昭 森谷章雄	柏市小若田字立山18012小	8,114	546	256	1,930	0
	7	16.03.26 - 16.03.26			木下主司	柏市小若田字立山19212小	6,341	634	128	794	0
	8	16.02.18 - 16.02.27			堀田昌司 堀田貞昭 森谷章雄	柏市小若田字立山145番地14小	5,487	540	0	0	0
平成16年度	8	16.04.06 - 16.06.15	矢口三男	田坂 浩	森谷章雄	柏市小若田字立山145番地14小	5,487	0	220	1,020	1,044
	9	16.04.06 - 16.04.28			森谷章雄	柏市船戸字富士見136212小	4,105	433	121	0	0
	10	16.04.14 - 16.06.30			田坂雄輔 堀田昌司 堀田 誠	柏市小若田字立山139-114小	6,319	726	208	200	1,673
	11	16.06.17 - 16.10.15			堀田昌司 堀田 誠	柏市小若田字立山15712小	6,367	1,717	280	1,477	702
	12	16.09.09 - 16.09.17			森谷章雄	柏市小若田字立山233-114小	241	241	8	0	0
	13	16.09.21 - 16.12.22			堀田光広	柏市小若田字立山123-714小	4,157	410	152	1,400	546
	14	16.10.08 - 16.11.30			森谷章雄	柏市小若田字立山231-114小	1,714	265	72	900	0
	15	16.11.01 - 16.11.26			堀田光広	柏市小若田字立山191-514小	466	466	20	466	0
	16	16.12.06 - 16.12.17			森谷章雄	柏市小若田字立山130-312小	963	400	104	0	0
	17	17.01.13 - 17.03.29			堀田光広	柏市小若田字立山228-114小	2,628	264	104	2,100	0
	18	17.02.14 - 17.02.21			堀田光広	柏市小若田字立山156	88	12	4	0	0
19	17.03.01 - 17.03.15	堀田光広	柏市小若田字立山193地先	200	200	8	0	0			
20	17.03.14 - 17.03.18	堀田光広	柏市小若田字立山156	47	47	4	0	0			
21	17.03.23 - 17.03.25	堀田光広	柏市小若田字立山130-1	121	121	4	0	0			
平成17年度	22	17.06.01 - 17.06.09	矢口三男	田坂 浩	中遺跡一	柏市小若田字立山156地先	272	272	8	0	0
	23	17.06.10 - 17.09.30			土層溝一部 堀田光広 中遺跡一	柏市船戸字富士見1396-114小	10,407	1,040	248	2,067	728
	24	17.07.01 - 17.07.20			土層溝一部	柏市小若田字立山15614小	467	467	20	0	0
	25	17.10.03 - 17.11.30			土層溝一部 沖松信隆	柏市小若田字富士見130-114小	1,925	250	90	1,040	0
	26	17.11.01 - 18.01.25			土層溝一部	柏市船戸字富士見1356-1	1,708	177	72	1,708	0
	27	18.02.07 - 18.02.24			堀田光広	柏市船戸字富士見130-114小	548	548	64	0	40
平成18年度	28	18.03.01 - 18.03.27	矢口三男	田坂 浩	沖松信隆	柏市船戸字富士見1383-112小	2,082	209	96	0	0
	29	18.05.01 - 18.05.19			浅澤高弘	柏市小若田字立山133-3地先	424	424	16	300	0
	30	18.05.05 - 18.06.16			浅澤高弘	柏市小若田字立山108地先	810	810	16	368	0
	31	18.07.18 - 18.08.16			西宮龍太郎	柏市小若田字立山147地先	302	302	20	0	0
	32	18.06.17 - 18.10.31			堀田光広	柏市船戸字富士見1363-912小	5,307	1,150	188	2,340	0
	33	18.12.21 - 18.12.25			浅澤高弘	柏市船戸字富士見1355	56	56	4	0	0
	34	19.03.05 - 19.03.14			堀田光広	柏市小若田字立山171-114小	269	73	12	0	0
	35	19.06.21 - 19.07.06			堀田光広	柏市小若田字立山105	311	311	28	0	0
	36	19.07.23 - 19.08.03			池田大助 堀田光広	柏市小若田字立山101	172	172	8	0	0
	平成19年度	37			19.08.06 - 19.09.25	矢口三男	及川淳一	堀田光広	柏市小若田字立山21514小	2,291	274
38		19.08.21 - 19.09.13	福生一夫 川勝夏史	柏市小若田字立山191-114小	696			696	21	406	0
39		19.09.26 - 19.10.03	堀田光広	柏市船戸字富士見1356-214小	433			433	16	0	0
40		19.11.01 - 19.11.16	川勝夏史	柏市小若田字立山180番地14小	2,000			460	4	0	0
41		19.12.25 - 20.02.28	堀田光広	柏市船戸字富士見138214小	3,033			626	100	1,440	80
平成20年度	42	20.02.13 - 20.03.27	大原正義	及川淳一	石倉亮治 堀田光広	柏市船戸字富士見1358-114小	4,050	558	76	417	0
	43	20.03.11 - 20.03.18			福生一夫	柏市小若田字立山191-1014小	427	427	16	0	0
	44	20.04.01 - 20.04.23			堀田光広	柏市船戸字富士見1358-114小	4,050	0	0	579	0
	45	20.04.24 - 20.06.18			堀田光広	柏市船戸字富士見1385-114小	3,040	360	96	670	0
	46	20.06.12 - 20.10.10			堀田光広	柏市船戸字富士見136714小	3,021	1,160	100	840	0
	47	20.09.24 - 20.11.10			沖松信隆	柏市船戸字富士見134814小	1,571	457	64	0	0
	48	20.11.11 - 20.12.19			沖松信隆	柏市船戸字富士見1361	1,359	518	88	695	170
	49	21.03.16 - 21.03.27			西野勝人	柏市船戸字富士見1354-2	515	515	16	0	0
平成21年度	49	21.12.15 - 22.01.21	尾田淳一	藤本勝彦	沖松信隆	柏市船戸字富士見1386-1地先14小	2,762	293	88	482	0
平成22年度	50	23.01.20 - 23.02.04	尾田淳一	藤本勝彦	関口 亮	柏市小若田字立山206-114小	471	176	8	80	0





第6图 D地区遺構分布图



第7图 E地区遺構分布图

第2表 富士見遺跡遺構一覧

地区	遺構番号	地点	旧番号	位置	種別	時期	備考
A	SI-001	(1)	SI-001	T25	竪穴住居	縄文前期	
A	SI-002	(1)	SI-002	T25	竪穴住居	縄文前期	
A	SI-003	(1)	SI-003	U24	竪穴住居	縄文前期	
A	SI-004	(1)	SI-004	U24	竪穴住居	縄文前期	
A	SI-005	(1)	SI-005	T24	竪穴住居	縄文前期	
A	SI-006	(1)	SI-006	T24	竪穴住居	縄文前期	
A	SI-007	(1)	SI-007	T24	竪穴住居	縄文前期	
A	SI-008	(1)	SI-008	U25	竪穴住居	縄文前期	
A	SI-009	(1)	SI-009	U25	竪穴住居	縄文前期	
A	SI-010	(1)	SI-010	V24	竪穴住居	縄文前期	
A	SI-011	(1)	SI-011	U24	竪穴住居	縄文前期	
A	SI-012	(1)	SI-012	U25	竪穴住居	縄文前期	
A	SI-013	(1)	SI-013	T24	竪穴住居	縄文前期	
A	SI-014	(1)	SI-014	U25	竪穴住居	縄文前期	
A	SI-015	(5)	SI-009	V24	竪穴住居	縄文前期	
A	SI-016	(5)	SI-010	V24	竪穴住居	縄文前期	
A	SI-017	(5)	SI-011	V24	竪穴住居	縄文前期	
A	SI-018	(6)	SI-001	V25	竪穴住居	縄文前期	
A	SI-019	(6)	SI-002	V24	竪穴住居	縄文前期	
A	SI-020	(11)	SI-001	V23	竪穴住居	縄文前期	
B	SI-021	(8)	SI-001	T22	竪穴住居	縄文前期	
B	SI-022	(8)	SI-002	S22	竪穴住居	縄文前期	(11) SI-002と同
B	SI-023	(8)	SI-003	S21	竪穴住居	縄文前期	(11) SI-005と同
B	SI-024	(10)	SI-001	T23	竪穴住居	縄文前期	
B	SI-025	(10)	SI-002	S23	竪穴住居	縄文前期	
B	SI-026	(11)	SI-003A	R21	竪穴住居	縄文前期	
B	SI-027	(11)	SI-003B	R21	竪穴住居	縄文中期	
B	SI-028	(11)	SI-004	R21	竪穴住居	縄文前期	
B	SI-029	(13)	SI-001	R22	竪穴住居	縄文前期	
B	SI-030	(13)	SI-002	S22	竪穴住居	縄文前期	(29) SI-001と同
B	SI-031	(13)	SI-003	S22	竪穴住居	縄文前期	
B	SI-032	(13)	SI-004	S22	竪穴住居	縄文前期	
B	SI-033	(25)	SI-001	R21	竪穴住居	縄文前期	
B	SI-034	(25)	SI-002	R21	竪穴住居	縄文前期	
B	SI-035	(25)	SI-003	R21	竪穴住居	縄文前期	
B	SI-036	(25)	SI-004	R21	竪穴住居	縄文前期	
B	SI-037	(25)	SI-005	R22	竪穴住居	縄文前期	
B	SI-038	(25)	SI-006	S22	竪穴住居	縄文前期	
B	SI-039	(25)	SI-007	R21	竪穴住居	縄文前期	
B	SI-040	(25)	SI-008	R21	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-041	(3)	SI-001	Y22	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-042	(3)	SI-002	Z22	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-043	(3)	SI-003	Z22	竪穴住居	縄文前期	(14) SI-012と同
C	SI-044	(4)	SI-001	Y22	竪穴住居	縄文前期	(17) SI-005と同
C	SI-045	(4)	SI-002	X22	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-046	(4)	SI-003	X22	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-047	(4)	SI-004	X23	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-048	(4)	SI-005	X23	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-049	(5)	SI-001	W20	竪穴住居	縄文前期	(11) SI-001と同
C	SI-050	(5)	SI-002	W20	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-051	(5)	SI-003	W20	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-052	(5)	SI-004	W21	竪穴住居	縄文前期	

地区	遺構番号	地点	旧番号	位置	種別	時期	備考
C	SI-053	(5)	SI-005	V21	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-054	(5)	SI-006	V21	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-055	(5)	SI-007	V21	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-056	(5)	SI-008	X22	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-057	(5)	SI-012	W22	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-058	(7)	SI-001	W20	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-059	(14)	SI-001	Z23	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-060	(14)	SI-002	Z23	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-061	(14)	SI-003	Z23	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-062	(14)	SI-004	Z23	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-063	(14)	SI-005	Z23	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-064	(14)	SI-006	Z23	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-065	(14)	SI-007	Z23	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-066	(14)	SI-008	Z23	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-067	(14)	SI-009	Z22	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-068	(14)	SI-010	Z22	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-069	(14)	SI-011	Z22	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-070	(14)	SI-013	Z22	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-071	(15)	SI-001	X20	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-072	(17)	SI-001	X21	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-073	(17)	SI-002	Y21	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-074	(17)	SI-006	Y21	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-075	(17)	SI-007B	Y21	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-076	(17)	SI-008	X21	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-077	(17)	SI-009	Z22	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-078	(17)	SI-010	Z22	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-079	(17)	SI-011	Z22	竪穴住居	縄文前期	
C	SI-080	(38)	SI-001	W22	竪穴住居	縄文前期	
D	SI-081	(44)	SI-002	S13	竪穴住居	縄文前期	
D	SI-082	(44)	SI-004	T13	竪穴住居	縄文前期	
D	SI-083	(44)	SI-003	S12	竪穴住居	縄文後期	
D	SI-085	(45)	SI-004	S14	竪穴住居	縄文前期	
D	SI-088	(47)	SI-001	S15	竪穴住居	縄文早期	
D	SI-089	(41)	SI-004	S15	竪穴住居	縄文前期	
D	SI-090	(45)	SI-005A	S15	竪穴住居	縄文早期	
D	SI-091	(41)	SI-005	S16	竪穴住居	縄文前期	
D	SI-092	(41)	SI-003	S15	竪穴住居	縄文前期	
D	SI-093	(45)	SI-003A	S16	竪穴住居	縄文前期	
D	SI-094	(45)	SI-003B	S16	竪穴住居	縄文早期	
D	SI-095	(41)	SI-006	R16	竪穴住居	縄文前期	
D	SI-096	(41)	SI-009	R16	竪穴住居	縄文前期	
D	SI-097	(41)	SI-007	R16	竪穴住居	縄文前期	
D	SI-098	(41)	SI-008	R16	竪穴住居	縄文前期	
D	SI-099	(41)	SI-002	S16	竪穴住居	縄文前期	(45) SI-005Aと同
D	SI-100	(41)	SI-001	S16	竪穴住居	縄文前期	
D	SI-102	(32)	SI-001	U15	竪穴住居	縄文前期	
D	SI-103	(32)	SI-002	U15	竪穴住居	縄文前期	
D	SI-104	(32)	SI-003	U15	竪穴住居	縄文前期	
D	SI-108	(26)	SI-003	V15	竪穴住居	縄文前期	
D	SI-109	(26)	SI-001	V15	竪穴住居	縄文前期	
D	SI-110	(26)	SI-002	V15	竪穴住居	縄文前期	
D	SI-111	(32)	SI-005	S17	竪穴住居	縄文前期	
D	SI-112	(32)	SI-004	T18	竪穴住居	縄文	
D	SI-113	(9)	SI-001	T18	竪穴住居	縄文前期	

地区	遺構番号	地点	旧番号	位置	種別	時期	備考
D	SI-114	(2)	SI-001	V17	竪穴住居	縄文前期	(32) SI-006と同
D	SI-116	(50)	SI-001	T19	竪穴住居	縄文前期	
D	SI-117	(37)	SI-004	U18	竪穴住居	縄文前期	
D	SI-118	(32)	SI-008	V18	竪穴住居	縄文前期	
D	SI-119	(32)	SI-009	V18	竪穴住居	縄文前期	
D	SI-120	(32)	SI-010	V18	竪穴住居	縄文前期	(37) SI-002と同
D	SI-121	(37)	SI-001	V18	竪穴住居	縄文前期	
D	SI-122	(37)	SI-003	V18	竪穴住居	縄文前期	
E	SI-123	(23)	SI-012	U11	竪穴住居	縄文早期	(23) SK-032を変更
E	SI-124	(23)	SI-008	V11	竪穴住居	縄文早期	
E	SI-125	(23)	SI-010	V11	竪穴住居	縄文中期	
E	SI-126	(23)	SI-009	V11	竪穴住居	縄文	
E	SI-127	(23)	SI-005	U11	竪穴住居	縄文前期未定	
E	SI-128	(23)	SI-004	V11	竪穴住居	縄文早期	
E	SI-129	(23)	SI-003	V11	竪穴住居	縄文早期	
E	SI-130	(23)	SI-011	V11	竪穴住居	縄文早期	(23) SK-024を変更
E	SI-132	(23)	SI-001	V11	竪穴住居	縄文前期	
E	SI-133	(23)	SI-002	X15	竪穴住居	縄文後期	
D	SF-001	(28)	SK-003	S14	竪穴	縄文早期	
D	SF-002	(28)	SK-002	S14	竪穴	縄文早期	2基重複
D	SF-003	(28)	SK-001	S14	竪穴	縄文早期	3基重複
D	SF-004	(47)	SK-001	T15	竪穴	縄文早期	
D	SF-005	(9)	SF-001	R14	竪穴	縄文早期	
E	SF-006	(23)	SF-002	V11	竪穴	縄文早期	(23) SK-003と同
E	SF-007	(23)	SF-001	V11	竪穴	縄文早期	
E	SF-008	(23)	SF-005	V11	竪穴	縄文早期	(23) SK-001、013と同
E	SF-009	(23)	SF-003	X15	竪穴	縄文早期	(23) SF-004と同
A	SK-001	(1)	SK-001	T24	土坑	縄文	
A	SK-002	(1)	SK-002	T24	土坑	縄文	
A	SK-003	(1)	SK-003	T25	土坑	縄文	
A	SK-004	(1)	SK-005	U24	土坑	縄文	
A	SK-005	(1)	SK-006	T24	土坑	縄文	
A	SK-006	(1)	SK-007	T24	土坑	縄文	
A	SK-007	(1)	SK-008	T25	土坑	縄文	
A	SK-008	(1)	SK-009	U24	土坑	縄文	
A	SK-009	(1)	SK-010	U24	土坑	縄文	
A	SK-010	(1)	SK-011	U24	土坑	縄文	
A	SK-011	(1)	SK-012	T25	土坑	縄文	
A	SK-012	(1)	SK-013	T25	土坑	縄文	
A	SK-013	(1)	SK-014	T24	土坑	縄文	
A	SK-014	(1)	SK-015	U25	土坑	縄文	
B	SK-015	(11)	SK-002	S20	土坑	縄文	
B	SK-016	(11)	SK-003	S20	土坑	縄文	
B	SK-017	(11)	SK-004	S21	土坑	縄文前期	
B	SK-018	(11)	SK-005	S21	土坑	縄文後期	
B	SK-019	(11)	SK-006	S20	土坑	縄文前期	
B	SK-020	(11)	SK-007	S20	土坑	縄文	
B	SK-021	(11)	SK-008	R21	土坑	縄文	
B	SK-022	(11)	SK-009	R21	土坑	縄文	
B	SK-023	(11)	SK-010	R21	土坑	縄文	
B	SK-024	(11)	SK-011	R21	土坑	縄文	
B	SK-025	(11)	SK-012	R21	土坑	縄文	
B	SK-026	(11)	SK-013	R21	土坑	縄文	
B	SK-027	(11)	SK-014	R21	土坑	縄文	

地区	遺構番号	地点	旧番号	位置	種別	時期	備考
B	SK-028	(11)	SK-017	S22	土坑	縄文	
B	SK-029	(11)	SK-018	S22	土坑	縄文	
B	SK-030	(11)	SK-019	S22	土坑	縄文前期	
B	SK-031	(11)	SK-020	S22	土坑	縄文	
B	SK-032	(13)	SK-001	R22	土坑	縄文	
B	SK-033	(13)	SK-002	R22	土坑	縄文	
B	SK-034	(13)	SK-003	R22	土坑	縄文	
B	SK-035	(13)	SK-004	R22	土坑	縄文	
B	SK-036	(13)	SK-005	R22	土坑	縄文	
B	SK-037	(13)	SK-006	R22	土坑	縄文	
B	SK-038	(13)	SK-007	R22	土坑	縄文	
B	SK-039	(13)	SK-008	R22	土坑	縄文	
B	SK-040	(13)	SK-009	R23	土坑	縄文前期	(13) SI-006と同
B	SK-041	(16)	SK-001	R19	土坑	縄文前期	
B	SK-042	(19)	SK-001	S20	土坑	縄文	
B	SK-043	(25)	SK-001	R21	土坑	縄文	
B	SK-044	(25)	SK-002	R21	土坑	縄文	
B	SK-045	(25)	SK-003	R21	土坑	縄文前期	
B	SK-046	(25)	SK-004 (a)	R21	土坑	縄文	
B	SK-047	(25)	SK-004 (b)	R21	土坑	縄文	
B	SK-048	(25)	SK-005	R21	土坑	縄文	
B	SK-049	(25)	SK-006	R21	土坑	縄文	
B	SK-050	(8)	SK-002	S21	土坑	縄文	(11) SK-021と同
B	SK-051	(27)	SK-001	R20	土坑	縄文	
B	SK-052	(29)	SK-001	R22	土坑	縄文前期	
B	SK-053	(27)	SK-002	R20	土坑	縄文	
B	SK-054	(29)	SK-002	R22	土坑	縄文前期	
B	SK-055	(29)	SK-003	R22	土坑	縄文前期	
B	SK-056	(29)	SK-004	R22	土坑	縄文前期	
B	SK-057	(27)	SK-003	S20	土坑	縄文	
C	SK-058	(3)	SK-001	Z22	土坑	縄文前期	
C	SK-059	(3)	SK-002	Z22	土坑	縄文前期	
C	SK-060	(4)	SK-001	X23	土坑	縄文前期	
C	SK-061	(5)	SK-005	W22	土坑	縄文	
C	SK-062	(5)	SK-006	W22	土坑	縄文	
C	SK-063	(5)	SK-007	W22	土坑	縄文	
C	SK-064	(5)	SK-008	Z23	土坑	縄文	
C	SK-065	(5)	SK-009	W21	土坑	縄文	
C	SK-066	(14)	SK-001	Z23	土坑	縄文	
C	SK-067	(14)	SK-002	Z23	土坑	縄文	
C	SK-068	(15)	SK-002	X20	土坑	縄文前期	
C	SK-069	(15)	SK-005	X21	土坑	縄文	
C	SK-070	(17)	SK-001	X21	土坑	縄文前期	
C	SK-071	(17)	SK-002	Y21	土坑	縄文前期	
C	SK-072	(17)	SK-004A	Y21	土坑	縄文前期	
C	SK-073	(17)	SK-004B	Y21	土坑	縄文	
C	SK-074	(17)	SK-005	Y21	土坑	縄文	
C	SK-075	(17)	SK-006	Y21	土坑	縄文	
C	SK-076	(17)	SK-007	Y21	土坑	縄文	
C	SK-077	(17)	SK-008	Y21	土坑	縄文	
C	SK-078	(17)	SK-009	Y21	土坑	縄文	
C	SK-079	(17)	SK-010	Y21	土坑	縄文	
C	SK-080	(17)	SK-011	Y22	土坑	縄文	
C	SK-081	(17)	SK-012	Y22	土坑	縄文	

地区	遺構番号	地点	旧番号	位置	種別	時期	備考
C	SK-082	(17)	SK-014	Y21	土坑	縄文	
C	SK-083	(17)	SK-016	Y21	土坑	縄文	
C	SK-084	(17)	SK-017	AA22	土坑	縄文	
C	SK-085	(17)	SK-018A	Z22	土坑	縄文	
C	SK-086	(17)	SK-018B	Z22	土坑	縄文	
C	SK-087	(17)	SK-019	Z21	土坑	縄文前期	
A	SK-088	(1)	SK-004	T25	陥穴	縄文早期	
A	SK-089	(1)	SK-016	T25	陥穴	縄文早期	
A	SK-090	(6)	SK-005	V26	陥穴	縄文早期	
A	SK-091	(11)	SK-022	U23	陥穴	縄文早期	
B	SK-092	(8)	SK-001	S21	陥穴	縄文早期	
B	SK-093	(11)	SK-001	S21	陥穴	縄文早期	
C	SK-094	(5)	SK-001	W21	陥穴	縄文早期	
C	SK-095	(5)	SK-002	W21	陥穴	縄文早期	
C	SK-096	(5)	SK-003	W22	陥穴	縄文早期	
C	SK-097	(5)	SK-004	W22	陥穴	縄文早期	
C	SK-098	(15)	SK-003	X21	陥穴	縄文早期	
C	SK-099	(15)	SK-001	X20	陥穴	縄文早期	
C	SK-100	(38)	SK-001	V21	陥穴	縄文早期	
D	SK-101	(32)	SK-005	U15	陥穴	縄文早期	
E	SK-102	(23)	SK-006	V09	陥穴	縄文早期	
D	SK-103	(44)	SK-004	S13	土坑	縄文前期	
D	SK-104	(44)	SK-005	T13	土坑	縄文中期	
D	SK-105	(44)	SK-003	T13	土坑	縄文	
D	SK-106	(44)	SK-001	T13	土坑	縄文前期	
D	SK-107	(44)	SK-002	T13	土坑	縄文	
D	SK-108	(28)	SK-006	R14	土坑	縄文	
D	SK-109	(28)	SK-004	R14	土坑	縄文	
D	SK-110	(28)	SK-005	R14	土坑	縄文	
D	SK-111	(45)	SK-008	R14	土坑	縄文前期	
D	SK-112	(45)	SK-007	R14	土坑	縄文前期	
D	SK-113	(45)	SK-009	S14	土坑	縄文後期	
D	SK-114	(47)	SK-001	S15	土坑	縄文早期	
D	SK-115	(47)	SK-002	S15	土坑	縄文早期	
D	SK-116	(41)	SK-016	S15	土坑	縄文前期	
D	SK-117	(45)	SK-006	S15	土坑	縄文早期	
D	SK-118	(47)	SK-004	S15	土坑	縄文早期	
D	SK-119	(47)	SK-005	T15	土坑	縄文早期	
D	SK-120	(47)	SK-003	T15	土坑	縄文早期	
D	SK-121	(32)	SK-044	U15	土坑	縄文	
D	SK-122	(32)	SK-004	U15	土坑	縄文	
D	SK-123	(41)	SK-015	R16	土坑	縄文前期	
D	SK-124	(41)	SK-013	R16	土坑	縄文	
D	SK-125	(41)	SK-007	R16	土坑	縄文	
D	SK-126	(41)	SK-006	R16	土坑	縄文	
D	SK-127	(41)	SK-014	R16	土坑	縄文	
D	SK-128	(41)	SK-009	R16	土坑	縄文	
D	SK-129	(45)	SK-005	S16	土坑	縄文前期	
D	SK-130	(45)	SK-004	S16	土坑	縄文早期	
D	SK-131	(45)	SK-001	S16	土坑	縄文早期	
D	SK-132	(45)	SK-002	S16	土坑	縄文	
D	SK-133	(45)	SK-002	S16	土坑	縄文	
D	SK-134	(45)	SK-003	S16	土坑	縄文	
D	SK-135	(41)	SK-001	S16	土坑	縄文	

地区	遺構番号	地点	旧番号	位置	種別	時期	備考
D	SK-136	(41)	SK-004	S16	土坑	縄文	
D	SK-137	(41)	SK-003	S16	土坑	縄文	
D	SK-138	(41)	SK-002	S16	土坑	縄文	
D	SK-139	(41)	SK-010	S16	土坑	縄文前期	
D	SK-140	(41)	SK-005	S16	土坑	縄文	
D	SK-141	(41)	SK-008	S16	土坑墓	縄文中期	
D	SK-142	(41)	SK-011	S16	土坑	縄文中期	
D	SK-143	(41)	SK-012	S16	土坑	縄文	
D	SK-144	(32)	SK-006	T17	土坑	縄文	
D	SK-145	(32)	SK-009	T17	土坑	縄文	
D	SK-146	(32)	SK-008	T17	土坑	縄文	
D	SK-147	(32)	SK-007	T17	土坑	縄文	
D	SK-148	(26)	SK-044	V15	土坑	縄文	
D	SK-149	(32)	SK-055	V15	土坑	縄文	
D	SK-150	(32)	SK-013	V17	土坑	縄文	
D	SK-151	(32)	SK-010	V17	土坑	縄文	
D	SK-152	(32)	SK-011	V17	土坑	縄文	
D	SK-153	(32)	SK-012	V17	土坑	縄文	
D	SK-154	(32)	SK-015	V17	土坑	縄文	
D	SK-155	(32)	SK-019	V17	土坑	縄文	
D	SK-156	(32)	SK-019	V17	土坑	縄文	
D	SK-157	(32)	SK-016	V17	土坑	縄文	
D	SK-158	(32)	SK-049	V18	土坑	縄文	
D	SK-159	(32)	SK-014	V18	土坑	縄文	
D	SK-160	(32)	SK-018	V18	土坑	縄文	
D	SK-161	(32)	SK-020	V18	土坑	縄文	
D	SK-162	(32)	SK-017	V18	土坑	縄文	
D	SK-163	(37)	SK-003	V18	土坑	縄文	
D	SK-164	(37)	SK-001	V18	土坑	縄文	
E	SK-165	(23)	SK-004	V09	土坑	縄文	
E	SK-166	(23)	SK-005	V09	土坑	縄文中期	
E	SK-167	(23)	SK-007	V09	土坑	縄文	
E	SK-168	(23)	SK-008	V09	土坑	縄文	
E	SK-169	(23)	SK-018	V10	土坑	縄文	
E	SK-170	(23)	SK-033	U11	土坑	縄文早期	
E	SK-171	(23)	SK-042	U11	土坑	縄文前期	
E	SK-172	(23)	SK-031	U11	土坑	縄文	
E	SK-173	(23)	SK-030	U11	土坑	縄文	
E	SK-174	(23)	SK-041	U11	土坑	縄文早期	
E	SK-175	(23)	SK-017	U11	土坑	縄文	
E	SK-176	(23)	SK-037	V11	土坑	縄文早期	
E	SK-177	(23)	SK-038	V11	土坑	縄文早期	
E	SK-178	(23)	SK-035	V11	土坑	縄文前期	
E	SK-179	(23)	SK-034	V11	土坑	縄文	
E	SK-180	(23)	SK-015	V11	土坑	縄文	
E	SK-181	(23)	SK-036	V11	土坑	縄文	
E	SK-182	(23)	SK-009	V11	土坑	縄文前期	
E	SK-183	(23)	SK-039	V11	土坑	縄文前期	
E	SK-184	(23)	SK-040	V11	土坑	縄文早期	
E	SK-185	(23)	SK-010	V11	土坑	縄文前期	
E	SK-186	(23)	SK-012	V11	土坑	縄文早期	
E	SK-187	(23)	SK-026	V11	土坑	縄文	
E	SK-188	(23)	SK-025	V11	土坑	縄文	
E	SK-189	(23)	SK-011	V11	土坑	縄文早期	

地区	遺構番号	地点	旧番号	位置	種別	時期	備考
E	SK-190	(23)	SK-016	V11	土坑	縄文	
E	SK-191	(23)	SK-028	V11	土坑	縄文	
E	SK-192	(23)	SK-023	V11	土坑	縄文	
E	SK-193	(23)	SK-022	V11	土坑	縄文	
E	SK-194	(23)	SK-014	V11	土坑	縄文早期	
E	SK-195	(23)	SK-019	V11	土坑	縄文	
E	SK-196	(23)	SK-030	V11	土坑	縄文	
E	SK-197	(23)	SK-021	V11	土坑	縄文	
E	SK-198	(49)	SK-001	V12	土坑	縄文	
E	SK-199	(46)	SK-004	V12	土坑	縄文前期	
E	SK-200	(46)	SK-003	V12	土坑	縄文前期	
E	SK-201	(46)	SK-003	V12	土坑	縄文	
E	SK-202	(42)	SK-002	U13	土坑	縄文	
E	SK-203	(42)	SK-001	U13	土坑	縄文	
E	SK-204	(48)	SK-001	X15	土坑	縄文	
E	SK-205	(46)	SK-002	W15	土坑	縄文	
E	SK-206	(46)	SK-001	W15	土坑	縄文	
E	SK-207	(46)	SX-001	W15	土坑	縄文後期	
E	SK-208	(33)	SK-001	W15	土坑	縄文	
E	SK-209	(23)	SK-002	X15	土坑	縄文前期	
D	S14グリッド	(44)	包含解1	S14	雑集中	縄文	
D	SI-084	(44)	SI-001	S14	竪穴住居	古墳中期	
D	SI-086	(45)	SI-001	U14	竪穴住居	古墳中期	
D	SI-087	(45)	SI-002	U14	竪穴住居	古墳中期	
D	SI-101	(47)	SI-002	T15	竪穴住居	古墳前期	
D	SI-105	(49)	SI-001	V15	竪穴住居	古墳中期	
D	SI-106	(49)	SI-003	V15	竪穴住居	古墳中期	
D	SI-107	(49)	SI-002	V15	竪穴住居	古墳中期	
D	SI-115	(32)	SI-007	V17	竪穴住居	古墳前期	
E	SI-131	(49)	SI-004	V12	竪穴住居	古墳中期	
G	SM-001	(13)	SM-001	R22	円墳		(29) SM-001と同
D	掘込区画1	(32)	SZ-001		掘込区画	中世	(42) SZ-001と同
D	掘込区画2	(26)	SZ-001		掘込区画	中世	
D	掘込区画3				掘込区画	中世	
D	SK-301	(42)	SK-003	T16	地下式坑	中世	
D	SK-302	(42)	SK-023	T16	地下式坑	中世	
D	SK-303	(42)	SK-030	T16	地下式坑	中世	
D	SK-304	(42)	SK-028	U16	地下式坑	中世	
D	SK-305	(42)	SK-034	U16	地下式坑	中世	
D	SK-306	(42)	SK-032A・B	T16	地下式坑	中世	
D	SK-307	(42)	SK-027	U16	地下式坑	中世	
D	SK-308	(42)	SK-036	T16	地下式坑	中世	
D	SK-309	(42)	SK-026	T16	地下式坑	中世	
D	SK-310	(42)	SK-021	T16	地下式坑	中世	
D	SK-311	(42)	SK-029	U16	地下式坑	中世	
D	SK-312	(32)	SK-002	U16	地下式坑	中世	
D	SK-313	(42)	SK-022	T16	地下式坑	中世	
D	SK-314	(42)	SK-004	T16	地下式坑	中世	
D	SK-315	(42)	SK-030	T16	大形楕円形土坑	中世	(42) SX-001と同
D	SK-315	(42)	SX-001	T16	大形楕円形土坑	中世	(42) SK-030と同
D	SK-316	(42)	SX-001	T17	楕円形土坑	中世	
D	SK-317	(42)	SK-033A	U16	方形竪穴遺構	中世	
D	SK-318	(42)	SK-012	U16	方形竪穴遺構	中世	
D	SK-319	(42)	SK-033B	U16	長方形土坑	中世	

地区	遺構番号	地点	旧番号	位置	種別	時期	備考
D	SK-320	(42)	SK-016	T16	長方形土坑	中世	
D	SK-321	(32)	SK-045	T16	長方形土坑	中世	
D	SK-322	(32)	SK-027	U16	長方形土坑	中世	
D	SK-323	(42)	SK-008	T16	長方形土坑	中世	
D	SK-324	(42)	SK-007	T16	長方形土坑	中世	
D	SK-325	(32)	SK-036	U16	長方形土坑	中世	
D	SK-326	(42)	SK-025	T16	長方形土坑	中世	
D	SK-327	(42)	SK-038	T16	長方形土坑	中世	
D	SK-328	(42)	SK-043	U16	長方形土坑	中世	
D	SK-329	(42)	SK-006	T16	長方形土坑	中世	
D	SK-330	(32)	SK-026	U16	長方形土坑	中世	
D	SK-331	(32)	SK-029	U16	長方形土坑	中世	
D	SK-332	(42)	SK-040	T16	長方形土坑	中世	
D	SK-333	(32)	SK-033	U17	長方形土坑	中世	
D	SK-334	(42)	SK-005A	T16	長方形土坑	中世	
D	SK-335	(42)	SK-005B	T16	長方形土坑	中世	
D	SK-336	(42)	SK-041	T16	長方形土坑	中世	
D	SK-337	(42)	SK-050	U16	長方形土坑	中世	
D	SK-338	(32)	SK-039	T17	長方形土坑	中世	
D	SK-339	(32)	SK-021	U16	長方形土坑	中世	
D	SK-340	(32)	SK-022	U16	楕円形土坑	中世	
D	SK-341	(32)	SK-030	U16	方形土坑	中世	
D	SK-342	(32)	SK-032	U17	方形土坑	中世	
D	SK-343	(42)	SK-037	T16	方形土坑	中世	
D	SK-344	(42)	SK-009	T16	方形土坑	中世	
D	SK-345	(42)	SK-048	T16	土坑	中世	
D	SK-346	(32)	SK-047	U17	方形土坑	中世	
D	SK-347	(42)	SK-045	T16	方形土坑	中世	(42) SK-046と同一
D	SK-348	(32)	SK-038	U17	楕円形土坑	中世	
D	SK-349	(42)	SK-042	T16	方形土坑	中世	
D	SK-350	(32)	SK-003	U16	楕円形土坑	中世	
D	SK-351	(42)	SK-017	T16	円形土坑	中世	
D	SK-352	(42)	SK-031A	T16	楕円形土坑	中世	
D	SK-353	(42)	SK-031B	T16	楕円形土坑	中世	
D	SK-354	(42)	SK-031C	T16	楕円形土坑	中世	
D	SK-355	(32)	SK-042	T17	円形土坑	中世	
D	SK-356	(42)	SK-035	U16	楕円形土坑	中世	
D	SK-357	(42)	SK-013	U16	楕円形土坑	中世	(42) SK-051と同一
D	SK-358	(32)	SK-037	U16	楕円形土坑	中世	
D	SK-359	(42)	SK-011	T16	楕円形土坑	中世	
D	SK-360	(42)	SK-044	U16	方形土坑	中世	
D	SK-361	(42)	SK-039	T16	長方形土坑	中世	
D	SK-362	(32)	SK-028	U16	楕円形土坑	中世	
D	SK-363	(32)	SK-031	U16	楕円形土坑	中世	
D	SK-364	(42)	SK-024	T16	土坑	中世	
D	SK-365	(32)	SK-040	T17	長方形土坑	中世	
D	SK-366	(32)	SK-041	T17	土坑	中世	
D	SK-367	(42)	SK-049	U16	楕円形土坑	中世	
D	SK-368	(42)	SK-047	T16	土坑	中世	
D	SK-369	(32)	SK-024	U16	円形土坑	中世	
D	SK-370	(42)	SK-015	T16	円形土坑	中世	
D	SK-371	(32)	SK-025	U16	楕円形土坑	中世	
D	SK-372	(32)	SK-024	U16	楕円形土坑	中世	
D	SK-373	(32)	SK-023	U16	長方形土坑	中世	

地区	遺構番号	地点	旧番号	位置	種別	時期	備考
D	SK-374	(32)	SK-046	T16	楕円形土坑	中世	
D	SK-375	(42)	SK-018	T16	方形土坑	中世	
D	SK-376	(26)	SK-042	V15	地下式坑	中世	
D	SK-377	(26)	SK-019	V15	地下式坑	中世	
D	SK-378	(26)	SK-008	U15	地下式坑	中世	
D	SK-379	(26)	SK-009	U16	地下式坑	中世	
D	SK-380	(26)	SK-006	V15	長方形竪穴遺構	中世	
D	SK-381	(26)	SK-007	U15	長方形竪穴遺構	中世	
D	SK-382	(39)	SK-001	U16	土坑	中世	
D	SK-383	(26)	SK-020	V15	方形竪穴遺構	中世	
D	SK-384	(26)	SK-033	V15	方形竪穴遺構	中世	
D	SK-385	(26)	SK-010	V15	方形竪穴遺構	中世	
D	SK-386	(26)	SK-011	V15	長方形竪穴遺構	中世	
D	SK-387	(26)	SK-012	V15	方形竪穴遺構	中世	
D	SK-388	(26)	SK-025	V15	方形土坑	中世	
D	SK-389	(26)	SK-021	V16	大形方形土坑	中世	
D	SK-390	(26)		U16	大形方形土坑	中世	
D	SK-391	(26)	SK-001	V16	長方形土坑	中世	
D	SK-392	(26)	SK-002	V16	長方形土坑	中世	
D	SK-393	(26)	SK-017	V16	長方形土坑	中世	
D	SK-394	(26)	SK-023	V16	長方形土坑	中世	
D	SK-395	(26)	SK-003	V16	長方形土坑	中世	
D	SK-396	(26)	SK-004	V16	長方形土坑	中世	
D	SK-397	(26)	SK-036	V16	長方形土坑	中世	
D	SK-398	(26)	SK-028	V15	長方形土坑	中世	
D	SK-399	(26)	SK-029	V15	長方形土坑	中世	
D	SK-400	(26)	SK-024	V15	長方形土坑	中世	
D	SK-401	(26)	SK-015	V16	方形土坑	中世	
D	SK-402	(26)		V16	長方形土坑	中世	
D	SK-403	(26)	SK-022	V16	方形土坑	中世	
D	SK-404	(26)	SK-030	V16	長方形土坑	中世	
D	SK-405	(26)	SK-016	V16	方形土坑	中世	
D	SK-406	(26)	SK-014	V16	方形土坑	中世	
D	SK-407	(26)	SK-035	V16	円形土坑	中世	
D	SK-408	(26)	SK-036	V15	楕円形土坑	中世	
D	SK-409	(26)	SK-027	V16	楕円形土坑	中世	
D	SK-410	(26)	SK-031	V15	楕円形土坑	中世	
D	SK-411	(39)	SK-002	U16	土坑	中世	
D	SK-412	(26)	SK-013	V16	円形土坑	中世	
D	SK-413	(26)		V16	楕円形土坑	中世	
D	SK-414	(26)	SK-005	V15	地下式坑	中世	
D	SK-415	(26)	SK-037	V15	土坑墓	中世	
D	SK-416	(26)	SK-038	V15	土坑墓	中世	
D	SK-417	(26)	SK-043	V15	長方形土坑	中世	
D	SK-418	(26)	SK-034	V15	長方形土坑	中世	
D	SK-419	(26)	SK-050 (a)	V15	長方形土坑	中世	
D	SK-420	(26)	SK-040	V15	長方形土坑	中世	
D	SK-421	(26)	SK-039	V15	長方形土坑	中世	
D	SK-422	(26)	SK-053	V15	長方形土坑	中世	
D	SK-423	(26)	SK-045	V15	方形土坑	中世	
D	SK-424	(26)	SK-046	V15	長方形土坑	中世	
D	SK-425	(26)	SK-051	V15	土坑	中世	
D	SK-426	(26)	SK-056	V15	方形土坑	中世	
D	SK-427	(26)	SK-052	V15	楕円形土坑	中世	

地区	遺構番号	地点	旧番号	位置	種別	時期	備考
D	SK-428	(26)	SK-047	V15	楕円形土坑	中世	
D	SK-429	(26)	SK-054	V15	楕円形土坑	中世	
D	SK-430	(26)	SK-050(b)	V15	楕円形土坑	中世	
D	SK-431	(26)	SK-032	V15	土坑	中世	
D	SK-432	(26)	SK-057	V15	土坑	中世	
D	SK-433	(37)	SK-002	U18	土坑	中世	(37) SX-001と同
D	SK-434	(32)	SK-048	T17	長方形土坑	中世	
D	SK-435	(32)	SK-043	T17	円形土坑	中世	
B	SK-436	(25)	SK-007	R20	方形土坑	中世	
B	SK-437	(11)	SX-001	S21	方形土坑	中世	
B	SK-438	(11)	SX-002	S21	長方形土坑	中世	
D	SK-439	(26)	SK-018	V15	方形土坑	近世	
C	SK-440	(4)	SK-002	X22	隅丸方形土坑	近世	
B	SK-441	(30)	SK-002	R24	大形土坑	近世	
B	SK-442	(30)	SK-001	R24	大形土坑	近世	
B	SK-443	(31)	SK-002	R24	大形土坑	近世	
B	SK-444	(31)	SK-001	R24	大形土坑	近世	
A	SK-445	(6)	SK-001	U26	土坑	近世	
A	SK-446	(6)	SK-002	U26	大形土坑	近世	
A	SK-447	(6)	SK-003	U26	土坑	近世	
A	SK-448	(6)	SK-004	V26	土坑	近世	
D	SE-001	(26)	SE-001	V16	井戸	中世	
D	SB-001	(37)	SB-001	U18	掘立柱建物	近世	
C	SB-002	(5)	SH-001	X21	掘立柱建物	近世	
D	掘込区画1内溝1	(42)	SD-002	U16	溝状遺構	中世	
D	掘込区画1内溝2	(42)	SK-014	U16	溝状遺構	中世	
B	南端境界溝1	(30)	SD-001	R24	溝状遺構	近世	
B	南端境界溝1	(35)	SD-001	R25	溝状遺構	近世	
A	南端境界溝1	(36)	SD-001	S25	溝状遺構	近世	
A	南端境界溝1	(6)	SD-006	U26	溝状遺構	近世	
A	南端境界溝1	(40)	SD-001	V26	溝状遺構	近世	
A	南端境界溝2	(6)	SD-003	U26	溝状遺構	近世	
B	南端境界溝2	(30)	SD-002	R24	溝状遺構	近世	
A	南端境界溝2	(34)	SD-001	T26	溝状遺構	近世	
B	南端境界溝2	(35)	SD-002	R24	溝状遺構	近世	
A	南端境界溝2	(36)	SD-002	S25	溝状遺構	近世	
A	南端境界溝2	(6)	SD-005	V27	溝状遺構	近世	
B	南端境界溝3	(30)	SD-003	R24	溝状遺構	近世	
B	南端境界溝3	(30)	SD-004	R24	溝状遺構	近世	
A	南端境界溝3	(31)	SD-003	U26	溝状遺構	近世	
A	南端境界溝3	(31)	SD-004	S25	溝状遺構	近世	
B	南端境界溝3	(35)	SD-003	R24	溝状遺構	近世	
A	南端境界溝3	(36)	SD-003	S25	溝状遺構	近世	
A	南端境界溝3	(31)	SD-001	T25	溝状遺構	近世	
A	南端境界溝3	(31)	SD-002	T26	溝状遺構	近世	
A	南端境界溝3	(6)	SD-004	U26	溝状遺構	近世	
A	南端境界溝4	(6)	SD-002	U26	溝状遺構	近世	
A	南端境界溝4	(31)	SD-005	R24	溝状遺構	近世	
A	南端境界溝4	(31)	SD-007	R24	溝状遺構	近世	
A	南端境界溝4	(40)	SD-002	V26	溝状遺構	近世	
A	南端境界溝5	(31)	SD-006	R24	溝状遺構	近世	
A	南端境界溝5	(1)	SD-001	T25	溝状遺構	近世	
A	南端境界溝5	(34)	SD-002	U25	溝状遺構	近世	
C	中央部東西大溝	(5)	SD-001B	V22	溝状遺構	近世	

地区	遺構番号	地点	旧番号	位置	種別	時期	備考
C	中央部東西大溝	(5)	SD-001A	U19	溝状遺構	近世	
C	中央部東西大溝	(5)	SD-002	U20	溝状遺構	近世	
B	中央部東西大溝	(7)	SD-001	S19	溝状遺構	近世	
C	中央部東西大溝	(38)	SD-001	V21	溝状遺構	近世	
C	中央部東西大溝	(7)	SD-002	T18	溝状遺構	近世	
C	中央部東西大溝	(7)	SD-003	S19	溝状遺構	近世	
A	南側区両溝群	(6)	SD-001	U25	溝状遺構	近世	
B	南側区両溝群	(8)	SD-001	T21	溝状遺構	近世	
B	南側区両溝群	(11)	SD-001	R21	溝状遺構	近世	
B	南側区両溝群	(11)	SD-002	R21	溝状遺構	近世	
B	南側区両溝群	(11)	SD-003	R21	溝状遺構	近世	
B	南側区両溝群	(19)	SD-001	T20	溝状遺構	近世	
B	南側区両溝群	(24)	SD-001	U21	溝状遺構	近世	
B	南側区両溝群	(25)	SD-002	R21	溝状遺構	近世	
B	南側区両溝群	(27)	SD-001	S20	溝状遺構	近世	
B	南側区両溝群	(25)	SD-001	R21	溝状遺構	近世	
C	北側溝群	(3)	SD-001	Y22	溝状遺構	近世	
C	北側溝群	(4)	SD-001	X22	溝状遺構	近世	
C	北側溝群	(4)	SD-002	Y23	溝状遺構	近世	
C	南北道路跡	(5)	SD-003	X21	道路跡	近世	
C	南北道路跡	(5)	SD-004	W22	道路跡	近世	
C	東西道路跡	(5)	SD-005	V23	道路跡	近世	
C	東西道路跡	(5)	SD-006	V23	道路跡	近世	
C	東西道路跡	(5)	SD-007	V23	道路跡	近世	
C	東西道路跡	(10)	SD-001	W22	道路跡	近世	
C	東西道路跡	(10)	SD-002	W22	道路跡	近世	
D	道階溝群	(32)	SD-003	V17	溝状遺構	近世	
D	道階溝群	(32)	SD-004	V17	溝状遺構	近世	
C	道階溝群	(43)	SD-001	X20	溝状遺構	近世	
C	道階溝群	(43)	SD-002	X20	溝状遺構	近世	
D	西側南北溝	(32)	SD-002	T17	溝状遺構	近世	
D	西側南北溝	(47)	SD-001	S15	溝状遺構	近世	
D	東側南北溝	(26)	SD-001	V15	溝状遺構	近世	
D	東側南北溝	(49)	SD-001	V14	溝状遺構	近世	
D	中央東西溝	(26)	SD-002	V15	溝状遺構	近世	
D	北部溝 1	(32)	SD-001	T17	溝状遺構	近世	
E	北部溝 2	(42)	SD-001	T16	溝状遺構	近世	
E	北部溝 3	(23)	SD-001	X16	溝状遺構	近世	
D	北部溝 4	(39)	SD-001	U16	溝状遺構	近世	
D	北部溝 5	(26)	SD-003	V16	溝状遺構	近世	
D	北部溝 6	(26)	SD-006	V16	溝状遺構	近世	
D	北部溝 6	(26)	SD-007	V16	溝状遺構	近世	
E	北部溝 7	(49)	SD-002	V13	溝状遺構	近世	

地点までのA～C地区に位置する縄文時代の遺構・遺物を取録した『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書6－柏市富士見遺跡－縄文時代以降編1』千葉県教育振興財団調査報告第728集を刊行した。今回報告するのは、D・E地区の縄文時代の遺構・遺物、A～E地区の縄文時代以降の遺構・遺物についてである。

また、前回の報告と同じように遺構内出土の土器の説明は遺構とともに記述したが、出土点数の少ない土器以外の土製品・石製品類、石器などは、集落内での傾向が把握しやすいように時代ごとにまとめて説明した。

第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と地理的環境

房総半島の地理は、標高20m～60mの平坦な台地が広がる半島北部の下総台地と、やや急峻な丘陵が連続する半島中南部の房総丘陵との、2つの大きな特徴に分けられる。両者の相違は、おもに地質的に異なる形成過程に由来する。中南部の房総丘陵の形成は、新第三紀の中新世初期に、北アメリカ・プレートとフィリピン海・プレートの沈み込む付近に嶺岡帯が陸地化してからはじまった。その頃は、現在の三浦半島と嶺岡山地は地続きでつながり、その南北両側は海だった。鮮新世後期には嶺岡帯を核とする陸地が広がり、北側は依然として関東構造盆地の広い海だった。

約200万年前から第四紀更新世がはじまって海では上総層群の堆積が顕著となった。更新世中期から後期にかけて、年代的には50万年ないし40万年前から約10万年前まで、古東京湾が関東地方に大きく広がり、湾口が東側に、現在の鹿島灘から九十九里海岸付近に向いていた。湾内には下総層群が堆積しはじめ、氷期、間氷期とともに古東京湾の海は海進、海退を繰り返した。海底が次第に隆起して浅海となり、海域も狭くなり、古東京湾は消滅した。

更新世中後期に富士山や箱根山の火山活動が活発となり、火山灰が降りそそいで厚く堆積して、関東ローム層となった。関東ローム層は古い順に下末吉ローム層、武蔵野ローム層、立川ローム層に分けられ、一番新しい立川ローム層は厚さ2m～3mあり、約3万年～1万年前に降り積もった火山灰とされている。更新世末期の約2万年前は最終氷期に相当し、海面は現在よりも130m～140mも低かった。東京湾は完全に干し上がり、昔の荒川や利根川が古東京川となって東京湾の西側を南下していた。陸地では地形の開析により小支谷の形成が進んだと考えられる。最終氷期は、考古学的には旧石器時代に相当する。寒冷な気候の下で北方からモミ、ツガ、トウヒなどを主体とする亜寒帯針葉樹林が南下したが、関東地方では冷温帯針広混交林が広がっていたであろう。

地質年代的に見ると、房総半島中南部の丘陵地帯が数百万年前から隆起して陸地化していたのに対して、半島北部は海域であった期間が長く、陸地化したのは比較的新しい。古東京湾が浅海となって消滅し、さらに火山灰が堆積して平坦な下総台地が形成された。更新世に繰り返された氷期により、台地上に細かい小支谷が広がったのである。

最終氷期が約1万年前に終結すると、温暖化によって海面が急速に上昇し、縄文海進といわれる海進が約6,000年～5,000年前にピークに達した。現在の海面よりも2mないし4mほど高くなったといわれている。この海進によって東京湾の北側奥地にまで海面が広がり、現在の川口市、八潮市、三郷市付近は大きな内湾の海底、江戸川東岸の東葛台地は多数の谷が入り組む湾岸となっていた。一方、鹿島灘から西側奥

地にも、霞ヶ浦から手賀沼、印旛沼、鬼怒川あたりまで海面が広がり、現在の利根川にそうように蛇行した細長い入江がのびていた。この細長い入江は古鬼怒湾といわれている。関東地方の台地上では落葉広葉樹林が優勢だった。

縄文海進の時期は、考古学的には縄文時代前期に当たるため、海進で関東地方奥地に広がった海岸に縄文時代前期の貝塚が多数形成された。その頃は狩猟採集活動が基本で、季節的に居住地点を換えながらテリトリー内を移動する生活を営んでいたと考えられる。後水期の温暖化で植生が豊かになり、付近の海岸で多様な海洋生物の捕獲・採取が可能となった。この豊潤な自然環境の出現で、狩猟採集を基本とする人間活動が活発となり、その結果多くの貝塚遺跡が残ったのである。

柏市は、江戸川と利根川が大きく分岐しはじめる下総台地の北西端に位置する。柏北部東地区の宅地造成地は、利根川南岸の河岸台地先端にあり、標高は16m～18m、河川周辺の低地との比高は8m～10mで、付近の利根川の標高は約5mである。縄文海進の頃は、東から広がる古鬼怒湾に接近できる一方、西へ約7km行くと南から続く東京湾が見渡せたはずである。

柏北部東地区の造成地である河岸台地縁辺は、小支谷が入り組む複雑な地形となっていて、小支谷で分離された台地上には約10か所の遺跡が分布していた。そのうち富士見遺跡は、事業地内の中央やや西側で島状に突出した台地の西側に位置している。同じ台地上で富士見遺跡の東側に胸形遺跡、南に大松遺跡の2遺跡が南北に連なっている。ともに富士見遺跡と同様の縄文時代前期の集落跡が検出された。

縄文時代前期を過ぎて中期、後期になると、周辺一帯に貝塚の分布は見られなくなり、また遺跡の数も減少した。稲作を取り入れたとされる弥生時代の遺跡も少数しか分布していない。古墳時代後期になると下総台地北西端でも、古墳や集落が増加し、古代律令制の成立する時期にはさらに集落が発展した。

平安時代前期(9世紀後半)に東海道の経路が換わり、市川の下総国府から手賀沼の西岸そして北岸を通過して、霞ヶ浦北西の常陸国府へと向かうようになった。東国および東北蝦夷地の経営にこの幹線は不可欠となり、手賀沼の西と北に位置する柏、我孫子は幹線の要衝として、地理的重要性が増した。

平将門は鬼怒川水系沼沢地帯の北西に位置する豊田、猿島を基盤にしていた。また将門の遺領を継いだ千葉氏や相馬氏が鎌倉幕府の有力御家人になったように、平安時代から鎌倉時代に、鬼怒川水系から霞ヶ浦の一帯は東日本でも有力な勢力となった。

近世初頭に、東京湾に流入していた利根川に流路変更の大工事を施工した。利根川は現在の千葉県と茨城県の県境にそって東へ流れるようになり、河口は太平洋側の銚子となった。この利根川東遷事業は、関東地方の水運ルートを整備するのが大きな目的だったといわれている。利根川東遷により、東北から江戸へ向かう物流輸送、とくに米の輸送は房総半島を大回りせずに、銚子から利根川をさかのぼって関宿、逆川を通過して江戸川を下る内陸ルートへと変わった。水運ルートの拡充により、江戸の周縁地だった柏周辺では、大消費地へ生活物資を供給する近郊農業が興隆した。

近代になって、物流が水運から鉄道主体の陸運に代わっても、大都市近郊の性格に変化はなかった。戦後1954年に柏市が誕生して高度経済成長の時代となると、大都会東京の近郊都市として人口が激増した。

2 周辺の遺跡(第1図、第1表)

富士見遺跡は利根川の河岸台地に位置し、周辺には旧石器時代から現代にいたるまで、多数の遺跡が分布している。高度経済成長のはじまる1960年代後半から、開発にともなう発掘調査が多くなった。常磐自動車道、つくばエクスプレス、および鉄道沿線の宅地開発である柏北部東地区、柏北部中央地区などの公

共事業で大規模な発掘調査が実施された。その他に市街地では小規模な調査が毎年行われている。この半世紀あまりの発掘調査の結果、多くの知見が得られたのである。

旧石器時代の比較的古い遺跡として、立川ローム層最下層のX層ないし武蔵野ローム層最上層のX層付近から石器群が出土し、この地方で最古の人間活動の痕跡をとどめている。中山新田Ⅱ遺跡(29)の第11ユニット、聖人塚遺跡(31)の第5文化層、原山遺跡(23)の第Ⅰ文化層がこの時期に相当する。

その次に古い遺跡として、X層～Ⅷ層付近から石器の出土した遺跡が挙げられる。中山新田Ⅰ遺跡(28)下層の環状ブロックの石器群、聖人塚遺跡(31)の第4文化層の環状ブロック、原山遺跡(23)の第Ⅱ文化層の環状ブロック、大松遺跡(9)の第Ⅰ文化層の環状ブロック、農協前遺跡(16)の第Ⅰ文化層の環状ブロック、大割遺跡(20)の第Ⅰ文化層、須賀井遺跡(21)の第Ⅰ文化層である。Ⅶ～Ⅵ層付近から石器が出土した遺跡には、水砂Ⅰ遺跡(26)のA～Cブロック、聖人塚遺跡(31)の第3文化層、原山遺跡(23)の第Ⅲ文化層があり、ナイフ形石器のともなう例が多い。

硬質のハードローム層であるⅣ層から石器が出土した遺跡は、溜井台遺跡(22)の第3、4文化層、原山遺跡(23)の第Ⅳ文化層、元割遺跡(32)の第2文化層、矢船Ⅰ遺跡(27)の第3文化層、館林遺跡(25)のC、Dブロック、須賀井遺跡(21)の第2文化層がある。軟質のソフトローム層であるⅢ層から石器の出土した遺跡は、氷河期末期の時期に相当し、しばしば細石刃が出土する。この時期の遺跡には花前Ⅲ遺跡のA～Dブロック、水砂Ⅰ遺跡(22)のDブロック、中山新田Ⅰ遺跡(28)の上層、鴻ノ巣遺跡(33)のB～4区がある。

旧石器時代の遺跡は河岸台地のやや縁辺寄りに比較的多く点在し、台地内部にさほど分布は見られない。氷河期の冷温な厳しい環境の下で、常陸川および周辺の小川川で開析が進んでいたと考えられる。

氷河期の終結とともに旧石器時代から縄文時代となり、遺跡の数量は増加し、分布範囲も拡大した。縄文時代早期の遺跡について、中山新田Ⅲ遺跡(30)、花前Ⅱ遺跡(3)、駒形遺跡(8)のA～E地区から炉穴が検出され、花前Ⅲ遺跡では熱糸文系縄文土器の包含層、炉穴が、水砂Ⅱ遺跡では土坑が検出された。早期後半の条痕文系縄文土器の時期になると、山神宮裏遺跡(34)で竪穴住居が検出され、また駒形遺跡のF～J地区では集石土坑と、複数の住居からなる集落が確認されて、定住化に向けて住居の出現が見受けられた。聖人塚遺跡、中山新田Ⅰ遺跡、原山遺跡(35)、小山台遺跡(11)、田中小遺跡(36)でも、同じく条痕文系の時期と見られる炉穴、野外炉、土坑、ピット群などが検出された。

縄文時代前期になると、周辺一帯に集落遺跡が激増し、なかには土坑や竪穴住居に貝殻が投棄されて地点貝塚となっている遺跡もある。とくに黒浜式の時期の遺跡が多い。後氷期の温暖化により海進が進み、柏付近にまで南から東京湾、東から古鬼怒湾が浸入した。良好な住環境の下で人間活動も活発になったと考えられる。縄文時代前期の遺跡分布および生産活動が、「柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書2」の最終章で詳述された。また「柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書3」の第1章でも、黒浜式の時期に限定した周辺の遺跡分布が示されているので、ここでは概略を記しておく。

河岸台地縁辺に位置する柏北部東地区では、駒形遺跡、富士見遺跡、大松遺跡、原畑遺跡、小山台遺跡で黒浜式期前後の集落が検出された。駒形遺跡、原畑遺跡では貝層の分析が行われ、マガキ、オキシジミ、ハマグリ、ハイガイ、アサリなどの貝種や、スズキ属、マダイなどの魚骨が確認された。柏北部東地区で実施された広範囲な発掘調査の結果、集落変遷、貝塚分析による生産活動の動態など、多くの新しい知見がもたらされている。

第3表 周辺の主な遺跡

番号は第1図と対応

番号	遺跡名	文献	番号	遺跡名	文献
1	富士見遺跡	10・50	36	田中小道跡	31・35・
2	花前Ⅰ遺跡	2			41・44・52
3	花前Ⅱ遺跡(花前Ⅱ-2遺跡)	3	37	上留遺跡	21・26・38
4	花前Ⅲ遺跡(花前Ⅱ-1遺跡)	3	38	香取神社遺跡	37
5	矢船Ⅰ遺跡	3	39	宿速寺遺跡	42
6	矢船Ⅱ遺跡		40	北柏遺跡	55
7	館林Ⅱ遺跡	1	41	松ヶ崎Ⅱ遺跡	61
8	胸形遺跡	6・9	42	寺前遺跡	18
9	大松遺跡	5・8	43	高砂遺跡	62
10	原畑遺跡	7・53・54	44	呼塚遺跡	19・25・29・
11	小山台遺跡	52			32・39・43・
12	寺下前遺跡				49・54
13	宮前遺跡		45	八幡遺跡	58
14	八反目台遺跡		46	田中中学校敷地遺跡	23
15	大室字大木戸1152-5先野馬廻	40	47	尾井戸遺跡	57
16	農協前遺跡	13	48	殿内遺跡	59
17	北花崎遺跡		49	松ヶ崎見崎遺跡	17
18	屋敷内遺跡		50	塚原古墳群	23
19	内山遺跡			花野井庄左衛門桶荷古墳	
20	大割遺跡	14		やまもと古墳・大塚古墳群	
21	須賀井遺跡	14	51	腰巻古墳群	46
22	溜井台遺跡	11	52	松ヶ崎泉遺跡	17・48
23	原山遺跡	12・15	53	松ヶ崎城跡	27・45・46
24	箭原遺跡		54	大室城跡	57
25	館林遺跡	1	55	かたぎ山古墳	20
26	水砂Ⅱ遺跡	1・22・34	56	西下ノ台塚	43
27	水砂Ⅰ遺跡		57	花野井字上留留626-16地先野馬除土手	52
28	中山新田Ⅰ遺跡	4・35	58	花野井字丸山1041地先野馬土手	36
29	中山新田Ⅱ遺跡	2	59	十余二鴻ノ巣・字灰塚野馬土手	21・43・47・
30	中山新田Ⅲ遺跡	2			49・50
31	聖人塚遺跡	4	60	松ヶ崎字香取野馬土手	49・50
32	元割遺跡	4	61	高田三勢遺跡	16
33	鴻ノ巣遺跡	56	62	十余二字下大塚380-153地先野馬除土手	36
34	山神宮裏遺跡	60	63	十余二字赤坂418-38地先野馬除土手	48
35	原遺跡	30・33			

柏北部東地区の北側に隣接する花前Ⅰ遺跡で黒浜式期および浮島式期の竪穴住居、花前Ⅱ遺跡と花前Ⅲ遺跡で諸磯式期の竪穴住居と竪穴、さらに少し北側に離れた山神宮裏遺跡で黒浜式期の竪穴住居、そして西側に位置する中山新田Ⅲ遺跡で黒浜式期の土坑が検出された。

柏北部東地区の南側に位置する原山遺跡で黒浜式期の竪穴住居、田中小遺跡で縄文時代前期の竪穴住居、土坑および貝塚、寺前遺跡(42)で黒浜式期の竪穴住居と貝塚、上前留遺跡(37)で黒浜式期の竪穴住居、香取神社遺跡(38)で黒浜式期の竪穴住居、原遺跡で黒浜式期～浮島式期の土坑群、鴻ノ巣遺跡で黒浜式期の竪穴住居と貝塚、北柏遺跡(40)で前期の竪穴住居と貝塚、宿連寺遺跡(39)で前期の竪穴住居と貝塚、松ヶ崎Ⅱ遺跡(41)で黒浜式期の竪穴住居と貝塚が検出された。これらの遺跡は、河岸台地の縁辺から台地やや内側の支谷に位置し、台地の内奥には分布していなかった。貝塚をとまなう事例も多いことから、海生資源の活用に適した場所を選んで、人々が居住していたといえるだろう。

縄文時代中期の遺跡は、前期にくらべて減少する。柏北部東地区の大松遺跡では、阿玉台式期～加曾利E式期の竪穴住居と土坑からなる集落、原畑遺跡では加曾利E式期の竪穴住居と土坑からなる集落、小山台遺跡で中期の小竪穴、土坑が検出された。小山台遺跡では現在も発掘調査が続いていて、竪穴住居や小竪穴からなる環状集落が確認されている。

柏北部東地区の北側に隣接する水砂Ⅱ遺跡で阿玉台式期の竪穴住居と土坑、中山新田Ⅰ遺跡で阿玉台式期の竪穴住居と土坑、中山新田Ⅱ遺跡でも阿玉台式期の竪穴住居が検出された。聖人塚遺跡では阿玉台式期と、勝坂式期～中韓式期の2時期の竪穴住居が検出された。北側にやや離れて位置する高砂遺跡(43)では、五領ヶ台式期もしくは阿玉台式期の陥穴が検出された。柏北部東地区の南側にある田中小遺跡で阿玉台式期の竪穴住居、原遺跡で加曾利E式期の竪穴住居と土坑が検出された。

縄文時代後期の遺跡はさらに減少する。すでに刊行された柏北部東地区の遺跡報告書では、出土した後期の土器について報告されているのだが、遺構についての明確な報告はない。今後も現地でも発掘調査が続いても、縄文時代後期の遺構検出数は少ないと思われる。周辺の遺跡を見ると、柏北部東地区の北側に隣接する花前Ⅰ遺跡で堀之内式期の竪穴住居、花前Ⅱ遺跡でも堀之内式期の竪穴住居と土坑、中山新田Ⅰ遺跡で堀之内式期の竪穴住居が検出された。これ以外に、周辺遺跡から縄文時代後期の遺構検出を伝える報告例は見当たらない。

縄文時代前期の海進の時期に、河岸台地の縁辺周辺を基盤とする人間活動が盛況となり、多数の遺跡が形成された。その後中期に環状集落が出現するものの、総じて人間活動は希薄になっていき、縄文時代後期になると遺跡の数量がかなり減少してしまったのである。

弥生時代については、後期の遺跡が少数知られている。柏北部東地区の南側にある田中小遺跡で北関東系の長岡式期の竪穴住居が検出された。さらに南側に位置する鴻ノ巣遺跡で同じく長岡式期の竪穴住居、北柏遺跡で後期の竪穴住居、西から東へ手賀沼にそそぐ大堀川流域の呼塚遺跡(44)で後期の竪穴住居が検出された。柏北部東地区周辺では、縄文時代後期以降ほとんど人跡は途絶えてしまい、弥生時代後期になって、ふたたびわずかながらも人煙がもどったのである。

古墳時代前期になると、柏北部東地区の胸形遺跡で竪穴住居が検出された。南側に位置する田中小遺跡、原遺跡、八幡遺跡(45)でも竪穴住居が検出された。大堀川流域の呼塚遺跡では、大形住居をふくむ多くの住居からなる集落を溝が囲み、溝内には儀礼用土器が多数廃棄されていた。また前期の竪穴住居から製鉄関連の遺物が出土して注目されている。この遺跡は、手賀沼に流入する水上交通の要所に出現した首長

居館(宅)の萌芽的なものと解釈された。

古墳時代中期の遺跡として柏北部東地区の原畑遺跡で、堅穴住居が検出された。柏北部東地区の北側に隣接する花前Ⅲ遺跡と矢船Ⅰ遺跡でも、堅穴住居が検出されている。南側に隣接する田中小遺跡と田中中学校敷地遺跡(46)で堅穴住居、南東側の河岸台地縁辺に近い尾井戸遺跡(47)で堅穴住居が検出された。さらに南側に位置する鴻ノ巣遺跡で堅穴住居が検出された。南側の大堀川流域では、呼塚遺跡の集落が、弥生時代後期から古墳時代中期になっても絶えることなく存続していた。大堀川の対岸にある松ヶ崎見崎遺跡(49)、やや上流の殿内遺跡(48)で堅穴住居が検出された。

古墳時代後期の遺跡は少ない。柏北部東地区では大松遺跡、そして北側に隣接する花前Ⅱ遺跡、花前Ⅲ遺跡、水砂Ⅱ遺跡で堅穴住居が検出された。南側にある田中小遺跡、南東側にある尾井戸遺跡で堅穴住居8軒が検出された。尾井戸遺跡を除いて、検出された古墳時代後期の堅穴住居は単独ないしは少数で、大きな集落を形成するほどではなかった。遺跡自体の数量も少ないことから、この時期に人間の活動はさほど活況ではなかったのだろう。

古墳は、おもに利根川に面する河岸台地縁辺と、手賀沼に流入する大堀川流域に少数分布している。柏北部東地区の南東側に位置する尾井戸遺跡で、台地先端に墳丘を削平された円墳があった。

さらに南東へ河岸台地縁辺の先端に数基の古墳からなる塚原古墳群(50)があった。そのうち北から南へと花野井庄左衛門稲荷古墳、花野井やまもと古墳、花野井大塚古墳群が並んでいた。北に位置する花野井庄左衛門稲荷古墳は方墳で、割竹形木棺がほぼ中央に埋葬されていた。時期は6世紀初頭とされた。中央に位置するやまもと古墳(塚原古墳)については、墳形は不明で、横穴石室が残存していた。南側の大塚古墳群は2基の円墳からなり、そのうち、1号墳の主体部は木棺直葬で、直刀・短甲・胡籬などが副葬され、鳥形埴輪なども出土した。塚原古墳群に近い原遺跡は河岸台地縁辺の支谷に位置し、円墳もしくは帆立貝式前方後円墳の周溝が確認された。馬形埴輪、靴形埴輪が出土し、6世紀後半の古墳とされた。

大堀川流域の古墳として台地先端に位置する腰巻古墳群(51)があり、3基の円墳が確認されている。

奈良時代の遺跡は、柏北部東地区の北側に隣接する花前Ⅰ遺跡で奈良時代から平安時代にかけて、堅穴住居と掘立柱建物からなる集落である。さらに北西側に隣接する館林遺跡、水砂Ⅱ遺跡、中山新田Ⅱ遺跡、中山新田Ⅲ遺跡で堅穴住居および掘立柱建物が検出された。水砂Ⅱ遺跡では小鍛冶跡も見つかった。このうち中山新田Ⅲ遺跡を除いて、他の3遺跡は奈良時代にどまらず、平安時代になっても存続した。柏北部東地区の南東側にある尾井戸遺跡、北柏遺跡で堅穴住居が検出された。

平安時代の遺跡は、奈良時代から継続する遺跡も含めると、やや増加したように見受けられる。北側に隣接する花前Ⅰ遺跡、館林遺跡、水砂Ⅱ遺跡、中山新田Ⅱ遺跡、中山新田Ⅲ遺跡では、奈良時代からの集落が続いていた。花前Ⅱ遺跡では製鉄工房をまじえた新しい集落が形成された。柏北部東地区の駒形遺跡、および北西側に隣接する中山新田Ⅰ遺跡、聖人塚遺跡では、単独もしくは数軒の堅穴住居が検出された。その他、南側の鴻ノ巣遺跡で、製鉄関連の堅穴住居が検出された。

南側の大堀川流域では、呼塚遺跡で堅穴住居に似た特殊遺構、対岸の台地上に位置する松ヶ崎泉遺跡では、鍛冶炉のある堅穴住居が検出された。平安時代の遺跡には、製鉄関連の遺構をふくむ事例が多い。東海道が手賀沼西岸と北岸を通過するようになり、流通経路の変動とともに、柏北部東地区周辺も鉄製品を供給する生産過程に組み込まれたのかもしれない。

中世に、柏北部東地区周辺は相馬郡であったと思われる。「香取の海」と呼ばれた手賀沼周辺が、引き

続いて幹線の要衝として活況を帯びていただろう。手賀沼西端地域には、柏市中馬場遺跡をはじめ、中世の遺跡が多い。柏北部東地区周辺は幹線経路から外れ、その後背地に相当して人煙も少なかったと予測される。近年になって少数の中世遺跡が報告された。

柏北部東地区の駒形遺跡で、中世の地下式坑、土坑、溝状遺構・道路状遺構が検出され、また南東側の寺前遺跡で、台地整形区画、堀・溝、土坑、火葬跡、地下式坑が検出された。2遺跡は利根川に面した河岸台地の縁辺付近に位置し、範囲を画した墓地もあった。

手賀沼に流入する大堀川の流域に松ヶ崎城(53)があり、主郭、土塁、堀、虎口などが現存している。この城は、15世紀後半から16世紀前半には築造されていたと考えられている。けれども、築造の開始や城主の実態などは不明である。柏北部東地区の南東側、利根川の河岸台地縁辺に大室城(54)があったという伝承が残っているが、真偽は不明である。その伝承地付近から土師器や埴輪が出土したので、古墳が存在したことは明らかだろう。柏市域の城館跡については、その名を記した古文書・古記録などが存在しないため、いついかなる人物・勢力によって、何を目的に築かれたのか、まったく不明とされている⁽²⁾。

近世になると、柏周辺には関宿のほか大名の居城はなく、布施、花野井、大室、正連寺、小青田、船戸、山高野、松ヶ崎、篠籠田、藤心、増尾、逆井の各村、あるいはその一部は、駿河田中藩本多氏の飛地領となり、若柴、宿連寺は旗本大沢氏、戸張に三橋氏の知行地あり、柏、根戸は代官支配地、豊四季、十余二は幕府直轄地小金牧となった⁽³⁾。

生活遺跡のほかに、柏北部東地区の北側に隣接する花前Ⅲ遺跡で、田中藩領邑8ヶ村(花野井、大室、正連寺、小青田、船戸、山高野、若柴、大青田)の第25代代官だった増田半兵衛の本屋敷跡が検出された。母屋、土蔵、溝、流し溜、井戸などが確認され、当時の富農の生活を彷彿とさせるものだった。柏北部東地区の南東側にある寺前遺跡で、掘立柱建物、井戸跡からなる屋敷跡が検出された。この遺跡から南西約50m離れた地点を、南東から北西へ古くからの街道と思われる県道我孫子・関宿線が通っていて、街道筋にそった居住空間の一部だったかもしれない。

生活遺跡のほかに、塚と野馬除土手・堀が挙げられる。塚は、柏北部東地区から南側の離れた地点に、かたぎ山古墳(55)と西下ノ台塚(56)があった。塚は邪気や悪霊の追い払いを意図して村境に築造されることもある。市街化の進んだ柏市周辺で昔日の村落の面影を見出すのは困難であるが、これらの塚も村境に相当する場所だった可能性があるだろう。

近世の牧について柏周辺には、上野牧と高田台牧が広がっていた。千葉県教育委員会編「房総の近世牧跡」によると⁽⁴⁾、高田台牧の捕込は、柏市十余二工業団地付近に古込、柏市伊勢原に新込があったとしている。高田台牧の北東辺に沿う成田街道(県道我孫子・関宿線)には、柏市の大室村に大木戸(現大室の柏市立田中小学校付近)という小字が見られ、木戸が設けられていたとの伝承がある。柏市域の野馬水呑場は、こんぶくろ池(正連寺)、高田字三勢、十余二字鴻ノ巢の他、南柏駅付近の流山と柏の市境の「ゴテンの湧き水」と呼ばれたという場所に伝承が残るといふ。そして高田台牧・上野牧の復元地図によると、柏北部東地区は高田台牧の北端に相当する。

柏北部東地区の富士見遺跡南端にそって野馬堀が検出された。この野馬堀は高田台牧・上野牧の復元図から、高田台牧の北端を区画する堀の可能性が考えられる。柏北部東地区に隣接する水砂遺跡、中山新田Ⅱ遺跡、元割遺跡で検出された野馬除土手・堀も、同じように高田台牧北端付近を区画する野馬除土手・堀であろう。柏北部東地区の南側にある大室字大木戸1152-5先野馬堀(15)は、木戸推定付近の堀である。

周辺では市街化が進み、野馬堀に相伴する土手は、ほとんどの場所で削平されてしまった。

野馬除土手・堀は県道我孫子・関宿線にそって南東に伸び、花野井字上前留626-16地先野馬除土手(57)で高田台牧の東端付近の堀が検出されている。また、街道にそって花野井字丸山1041地先野馬土手(58)で野馬堀が検出されている。この地点は高田台牧の外側になり、堀は牧に伴うものではなく、単なる害獣除けであろう。

南側に離れて位置する十余二鴻ノ果・字庚塚の野馬土手(59)は、高田台牧の南東端のやや北側の土手に、また松ヶ崎字香取野馬土手(60)は高田台牧の南東端の土手に相当する。

南西側の台地奥地にある高田三勢遺跡(61)、十余二字下大塚380-153地先野馬除土手(62)、十余二字赤坂台418-38地先野馬除土手(63)周辺は高田台牧の南西部に位置する。高田三勢遺跡では鍵型状の野馬除土手が検出され、古絵図との照合で、その西に休息用御林、南に溜池があったと推測された。高田三勢遺跡から西側、十余二字下大塚380-153地先野馬除土手から南側へ交わる付近に捕込があったと考えられている。

その他近世の遺構として、花前Ⅱ遺跡で炭窯が検出された。隣接する花前Ⅲ遺跡で代官屋敷跡が検出されたので、富農経営に関連する炭窯と示唆されたが、炭窯の年代は近代以降に下る可能性もあるだろう。

柏北部東地区は、総じて原始古代から現代にいたるまで利根川河岸台地の特性を受けている。縄文時代前期の縄文海進の時期に、台地縁辺を主体にきわめて濃密に遺跡が分布した以外、常にこの周辺地域は「香取の海」と称された手賀沼の後背地として、さほど人跡の目立たない場所だったといえるだろう。戦後の高度経済成長で郊外型ベッドタウンとなって人口が急増しはじめてから、人間活動が顕著となったのである。

注

- (1) 高津俊司・堀川 淳・橋本浩史・佐藤馨一 2005「つくばエクスプレス線の建設における鉄道と都市との一体整備に関する考察」『第32回土木計画学研究発表会・講演集』(318) 土木学会
- (2) 柏市教育委員会 1997「柏市史」原始・古代・中世編 pp.841 柏市史編さん委員会
- (3) 柏市役所 1980「柏市史年表」pp.12 柏市史編さん委員会
- (4) 千葉県教育委員会 2006「房総の近世牧跡」

第3表 周辺の主な遺跡 参考文献

- 1 (財)千葉県文化財センター 1982「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」
- 2 (財)千葉県文化財センター 1984「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」
- 3 (財)千葉県文化財センター 1985「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」
- 4 (財)千葉県文化財センター 1986「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」
- 5 (財)千葉県教育振興財団 2008「柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ」
- 6 (財)千葉県教育振興財団 2009「柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」
- 7 (財)千葉県教育振興財団 2011「柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ」
- 8 (財)千葉県教育振興財団 2011「柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ」
- 9 (公財)千葉県教育振興財団 2013「柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ」

- 10 (公財)千葉県教育振興財団 2014「柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書6」
- 11 (財)千葉県教育振興財団 2007「柏北部中央地区埋蔵文化財発掘調査報告書1」
- 12 (財)千葉県教育振興財団 2009「柏北部中央地区埋蔵文化財発掘調査報告書2」
- 13 (財)千葉県教育振興財団 2011「柏北部中央地区埋蔵文化財発掘調査報告書3」
- 14 (財)千葉県教育振興財団 2012「柏北部中央地区埋蔵文化財発掘調査報告書4」
- 15 (公財)千葉県教育振興財団 2013「柏北部中央地区埋蔵文化財発掘調査報告書5」
- 16 柏市教育委員会 1986「柏市埋蔵文化財調査報告書12」
- 17 柏市教育委員会 1992「柏市埋蔵文化財調査報告書20」
- 18 柏市教育委員会 1992「柏市埋蔵文化財調査報告書22」
- 19 柏市教育委員会 1995「柏市埋蔵文化財調査報告書29」
- 20 柏市教育委員会 1995「柏市埋蔵文化財調査報告書30」
- 21 柏市教育委員会 1996「柏市埋蔵文化財調査報告書31」
- 22 柏市教育委員会 1997「柏市埋蔵文化財調査報告書33」
- 23 柏市教育委員会 2001「柏市埋蔵文化財調査報告書44」
- 24 柏市教育委員会 2002「柏市埋蔵文化財調査報告書48」
- 25 柏市教育委員会 2003「柏市埋蔵文化財調査報告書50」
- 26 柏市教育委員会 2006「柏市埋蔵文化財調査報告書54」
- 27 柏市教育委員会 2007「柏市埋蔵文化財調査報告書59」
- 28 柏市教育委員会 2007「柏市埋蔵文化財調査報告書61」
- 29 柏市教育委員会 2008「柏市埋蔵文化財調査報告書62」
- 30 柏市教育委員会 2010「柏市埋蔵文化財調査報告書67」
- 31 柏市教育委員会 2011「柏市埋蔵文化財調査報告書68」
- 32 柏市教育委員会 2012「柏市埋蔵文化財調査報告書71」
- 33 柏市教育委員会 2013「柏市埋蔵文化財調査報告書74」
- 34 柏市教育委員会 1988「昭和62年度 市内道路発掘調査報告書」
- 35 柏市教育委員会 1989「昭和63年度 市内道路発掘調査報告書」
- 36 柏市教育委員会 1990「平成元年度 市内道路発掘調査報告書」
- 37 柏市教育委員会 1991「平成2年度 市内道路発掘調査報告書」
- 38 柏市教育委員会 1992「平成3年度 市内道路発掘調査報告書」
- 39 柏市教育委員会 1994「平成5年度 市内道路発掘調査報告書」
- 40 柏市教育委員会 1997「平成7年度 市内道路発掘調査報告書」
- 41 柏市教育委員会 1998「平成8年度 市内道路発掘調査報告書」
- 42 柏市教育委員会 1998「平成9年度 市内道路発掘調査報告書」
- 43 柏市教育委員会 2002「平成12年度 市内道路発掘調査報告書」
- 44 柏市教育委員会 2003「平成13年度 市内道路発掘調査報告書」
- 45 柏市教育委員会 2004「平成14年度 市内道路発掘調査報告書」
- 46 柏市教育委員会 2005「平成14 15年度 市内道路発掘調査報告書」

- 47 柏市教育委員会 2005 「平成15年度 市内道跡発掘調査報告書」
- 48 柏市教育委員会 2007 「平成17年度 市内道跡発掘調査報告書」
- 49 柏市教育委員会 2008 「平成18年度 市内道跡発掘調査報告書」
- 50 柏市教育委員会 2009 「平成19年度 市内道跡発掘調査報告書」
- 51 柏市教育委員会 2010 「平成20年度 市内道跡発掘調査報告書」
- 52 柏市教育委員会 2011 「平成21年度 市内道跡群発掘調査報告書」
- 53 柏市教育委員会 2011 「平成22年度 市内道跡発掘調査報告書」
- 54 柏市教育委員会 2012 「平成23年度 市内道跡発掘調査報告書」
- 55 北柏道跡発掘調査団 1973 「北柏道跡」
- 56 千葉県都市公社 1974 「柏市鴻ノ果道跡」
- 57 尾井戸道跡調査団 1980 「尾井戸道跡」
- 58 柏市教育委員会 1980 「柏市埋蔵文化財調査報告書」
- 59 殿内道跡調査団 1981 「殿内道跡調査報告書」
- 60 柏市教育委員会 1983 「山神宮裏道跡・高野台道跡」
- 61 松ヶ崎(Ⅱ)道跡調査会 1983 「松ヶ崎(Ⅱ)道跡発掘調査報告」
- 62 柏市教育委員会 1983 「高砂道跡・林台道跡」
- 63 手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会 2000 「手賀沼が海だった頃」 たけしま出版

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 縄文時代(第8図)

富士見遺跡の北西部にあたるD・E地区で検出された縄文時代の遺構は、竪穴住居44軒、炉穴9群、陥穴2基、土坑107基である。D地区は富士見遺跡北西部でもにも西側に入り込む谷に面した地区、E地区は北東部で、駒形遺跡との境となる小支谷に面した地区にあたる。D地区の内訳は竪穴住居34軒、炉穴4群、陥穴1基、土坑62基、E地区の内訳は竪穴住居10軒、炉穴5群、陥穴1基、土坑45基である。

1 竪穴住居

SI-081 (44) SI-002(第9図、図版2・32・35)

D地区北西の緩斜面にあたるS13-89に位置する。南北方向に軸を向ける方形で、規模は南北軸・東西軸とも5.14m、確認面からの深さは0.41mを測る。床面は凹凸があるが堅く締まっている。覆土上層には暗褐色土、下層にはローム粒子を多量に含む明褐色土が水平に堆積していた。中央西寄りに少量の焼土を伴う炉を検出した。炉の規模は0.36m×0.27mである。柱穴と考えられるピットは11基検出した。炉を挟み、東側と西側にそれぞれ南北に並んでいる。床面からの深さは、0.09m~0.62mと大きく差があるが、北側の床面は低くなっており、ピット底面の標高で比べると隣に位置するP5・P6が浅く、東西壁のそれぞれ中央に位置するP4・P8が深いほかはほぼ一定である。

遺物は中央部分を中心に出土した。土器のほか石鏃未成品・楔形石器・磨製石斧・磨石類を各1点、石皿3点、剥片類10点を出土し、このうち石鏃未成品(第65図48)・石皿(第73図177)各1点を図示した。石皿は破片で、床面近くから出土している。

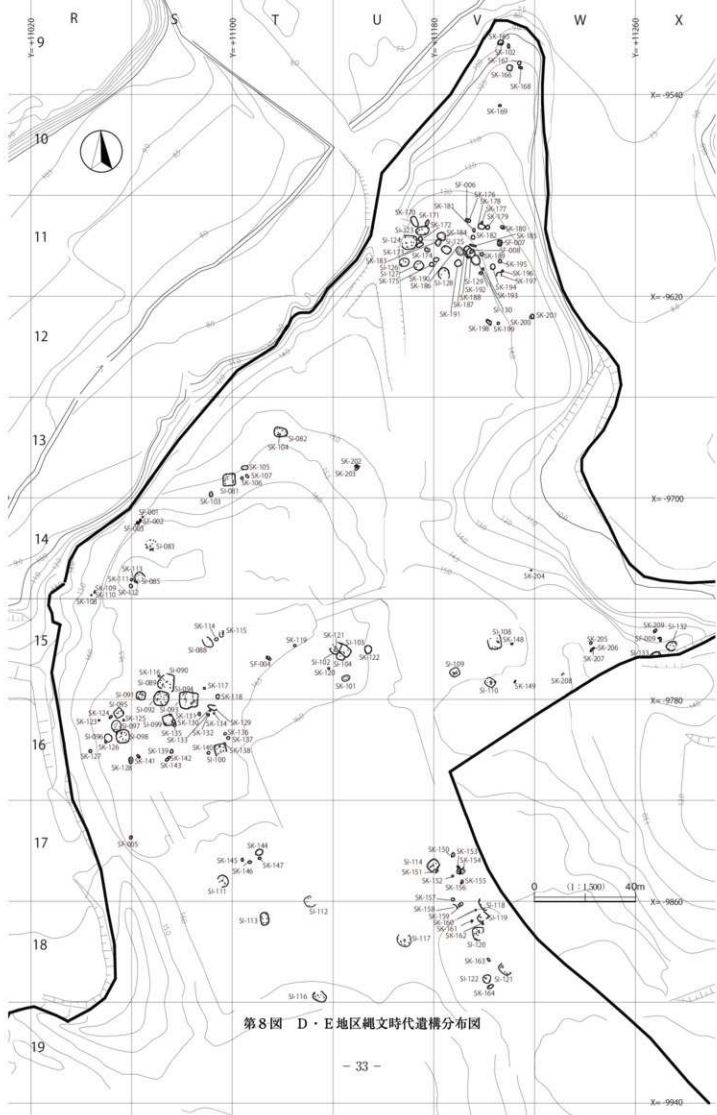
土器は16点を図示した。1~3は浮島Ib式土器である。1はハマグリを原体とする波状貝殻文を施す。2は口縁下部に輪積み痕を残し、地文として波状貝殻文、口縁端にキザミを施文する。3は推定口径23.0cm、遺存高23.9cmを測る。口縁下部に輪積み痕を残し、刺突文を重畳施文することで凹凸文を構成しており、胴部には波状貝殻文を地文として施している。

4~7は諸磯a式土器である。4は波頂部を欠くが、4単位の波状緑深鉢である。推定口径36.2cm、遺存高13.9cmで、単節RL(直前段多条)を地文として施文後、第一次区画文として単列の爪形文を口縁下と頸部に施し、この区画内に半載竹管による葉脈状文を描き、交点に円形竹管による刺突を施文する。5も波状緑で、地文縄文単節RLを施文後、半載竹管で「非多重米字文」を施す。6は胴部片で、地文縄文単節RL(直前段多条)を施文後、やはり半載竹管で「非多重米字文」を施している。7は地文縄文単節RL(直前段多条)のみを施す。

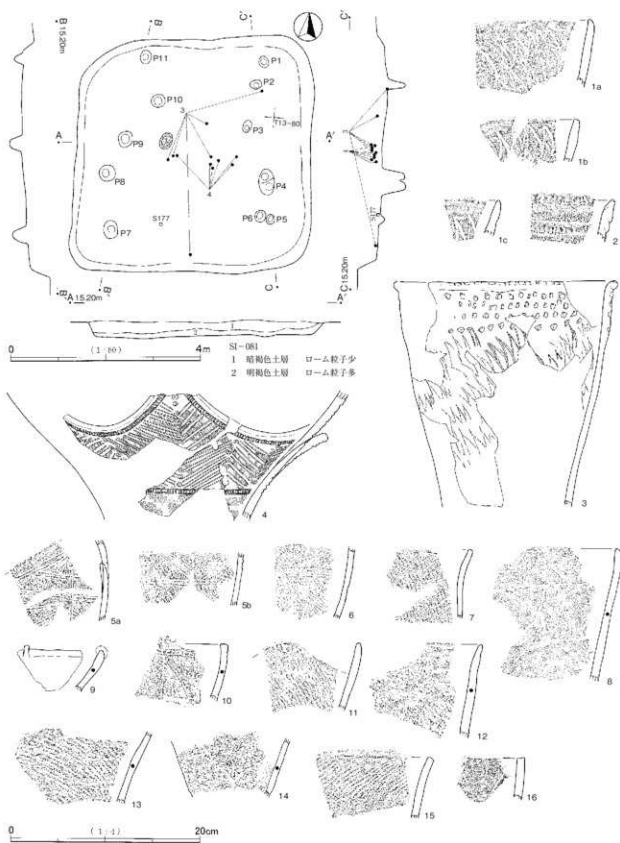
8~14は黒浜式土器である。8は沈線で不規則な格子目文を描く。9は無文の鉢形土器で、口唇部上に小突起を付す。10は貝殻腹縁文を地文とし、爪形文で意匠を施す。11~14は地文縄文のみを施したもので、使用原体は12~14が単節RL、11は単節RL(前々段多条)である。

15・16は前期末葉の縄文系粗製土器である。15は口唇部上から胴部にかけて地文縄文を施す。使用原体は単節LRで、横位の結節縄文が施文される。16は原体側面圧痕により装飾を施す。

いくつかの時期の土器が混在しているが、本跡の帰属時期は、床面直上および覆土2層中から出土したものが接合した3の土器の時期である浮島Ib式期と考えられる。



第8図 D・E地区縄文時代遺構分布図



第9図 SI-081

SI-082 (44) SI-004 (第10図、図版2・36)

D地区の北端のT13-34に位置する。中央部に縄文時代の土坑SK-104が重複している。土坑からは縄文時代中期の土器が出土し、土層の断面観察からも本跡の方が古いと考えられる。確認面から浅く、壁の立ち上がりがわずかであるため遺構の範囲は不明瞭であったが、柱穴と考えられるピットの配置や床の硬化範囲から長軸5.56m、短軸4.06mの東西に長い楕円形を呈していたと判断した。長軸が東西を向く。覆土はほとんど遺存しておらず、下層にロームブロックを主体とする締まった明褐色土を検出した。炉は検出されず、土坑に壊された可能性もある。柱穴と考えられるピットは中央付近に3基、北壁に沿って4基検出された。確認面からの深さはP4が0.01mと浅く、これ以外は0.70m～0.33mである。硬化面を挟んで位置するP3・P6が0.25m・0.33mと深い。

中央部分に貝ブロックを検出した。床面からわずかに上から堆積しており、厚さ0.20mである。ハマグリを主体としていた(第4表)。

出土した遺物は多くない。土器のほかに図示しなかったが剥片類1点を出土した。

1～6、8～10は黒浜式土器である。1は平縁深鉢で、口唇上にキザミを施し、地文縄文として単節LR/RLで羽状縄文を施す。2も平縁で、頸部と胴部の境に括れを有し、内外面ともに器面調整のみが施される。3は口唇上に小突起を付した波状縁で、地文として燃糸R/付加条縄文(軸不明。R1条付加)で羽状縄文を施文後、口縁部に2列の爪形文を施す。4は地文として単節LR/燃糸Rで羽状縄文を施している。6は波状縁で、地文縄文単節RLを施文後、やはり口縁部に2列の爪形文を施している。胎土中の繊維含有量は僅少である。8～10は底部である。8は遺存高5.6cm、推定底径10.0cmで、地文は単節LRを用いる。9は推定底径10.0cm、遺存高2.5cmの浅鉢で、内外面とも器面調整のみを施す。10は推定底径9.0cm、遺存高3.1cmを測る。付加条縄文(軸不明。R1条付加)を地文として施す。

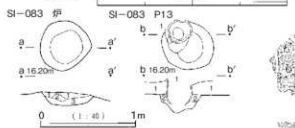
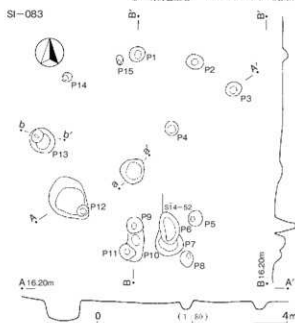
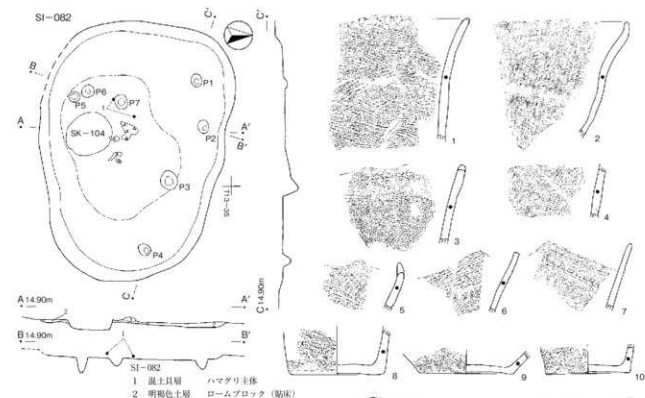
7は諸磯a式土器である。波状縁深鉢で、地文として縄文単節LR(直前段多条)施文後、2列の爪形文を施す。

覆土下層から出土した1の時期である黒浜式期が本跡の帰属時期であろう。

SI-083 (44) SI-003 (第10図、図版2・32・36)

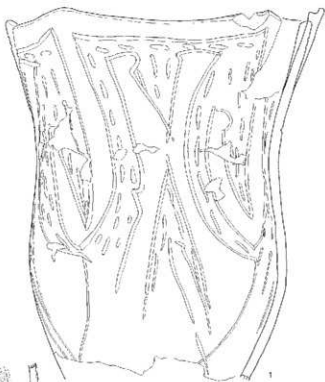
台地西側の縁辺部にあたるS14-41・42に位置する。床の硬化面や壁の立ち上がりは検出されず、炉と埋壺を伴うピット、柱穴と考えられるピット群が検出され、竅穴住居であったと推定される。炉は柱穴に囲まれた範囲の南西寄りに位置し、径0.52mで焼土の検出量は少ない。ピットは15基検出された。このうちP13には深鉢(1)が口縁部を上埋納されていた。ピットの規模は径0.56m×0.50m、確認面からの深さは0.50mである。土器は底部を欠損し、下半部のみがピット内に埋まった状態で検出されたが、本来は土器全体がピット内に埋められていたと考えられ、本来の床面は確認面より0.18m上であったと推定される。また南側には、P6～P8とP9～P11が2列にハの字状に張り出すように並んでおり、出入り口に伴う施設と考えられる。深さは順に、0.22m、0.14m、0.52mと0.45m、0.13m、0.19mである。これら以外のピットは円を描くように並び、P12が径1.02m×0.78m、深さ0.52mである以外は、径0.20m～0.40m、深さ0.12m～0.38mである。以上のことから本跡は径5m程度の円形の南側にハの字状の張り出し部をもつ形態の竅穴住居であったと考えられる。

確認面から浅く、覆土が遺存していなかったため、1の埋壺を除く出土遺物はわずかであった。遺存状態が悪く図示していないが、土器のほかにチャート製石鏃2点、剥片類1点を出土した。



- SI-083 P13
- 1 暗赤褐色土層 焼土粒子・ローム粒子少
 - 2 赤褐色土層 焼土粒子主体
 - 3 褐色土層 ローム粒子・焼土粒子少

- SI-083 P13
- 1 褐色土層
 - 2 褐色土層



第10図 SI-082、SI-083

土器は7点を図示した。1～3は称名寺式土器である。1は緩やかな波状縁深鉢で、P13内に埋納されていた。口縁部の一部と底部を欠損する。推定口径34.4cm、遺存高が39.3cmである。波頂部下に基幹文様のJ字文を描くが、列点は意匠内ではなく、外側の描線との間に施される。2は意匠内に列点を充填するものである。3は意匠内に縄文を充填する。細別形式としては3が称名寺Ⅰ式、1・2が称名寺Ⅱ式に位置づけられる。

4は黒浜式土器で、地文縄文として単節LRを施す。

5は口縁下に斜方向の条線を施した浮島Ⅲ式土器である。

6は加曾利EⅢ式土器で、「沈文系意匠充填系土器」である。意匠内には縄文単節RLを充填施文する。

7は堀之内Ⅰ式土器である。多条沈線を文様描線として意匠を施す。

本跡の帰属時期は、埋壙である1の土器の時期である称名寺Ⅱ式期である。

SI-085 (45) SI-004 (第11図、図版2・32・36)

台地西側の縁辺部のS14-70・80に位置する。南側が調査区外になるため、南北方向は4.07mの範囲まで検出した。東西軸は4.24mで、南北に長い楕円形を呈すると推定される。西壁際に縄文時代の土坑SK-113が重複していた。出土遺物から縄文時代後期の土坑と判断され、本跡の方が古い。確認面からの深さは0.36mを測る。覆土はローム粒子を含む暗褐色土を主体にし、ほぼ水平に堆積していた。調査範囲内では炬は検出されなかった。柱穴と考えられるピットは10基検出し、このうち南西壁際に位置するP5は規模0.48m×0.41m、深さ0.26m、これ以外の深さはP2が0.61mと深いほかは0.08m～0.26mである。

出土遺物は多く、遺構全体に散らばっていた。土器のほか北壁際から側面調整際(第74図189)1点、図示しなかったが磨石類1点と剥片類6点を出土した。

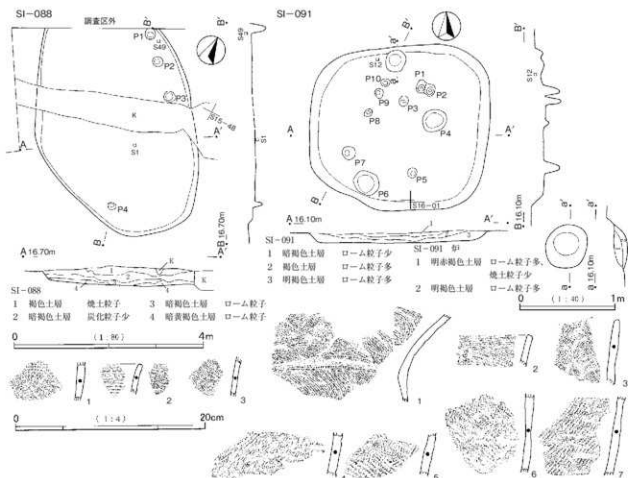
土器は26点を図示した。1～3は諸磯a式土器である。1は頸部から胴部下半部で、遺存高28.0cmを測る。主要施文域は口縁部から頸部で、頸部下に横位の爪形文を巡らして区画し、横線肋骨文をやや密に施して交点に円形竹管による刺突文を垂下する。胴部以下には地文縄文単節RL(直前段多条)を施す。2は半截竹管による平行沈線を描線として「連携木葉文」を描く。3は地文縄文単節RL(直前段多条)を施した胴部片である。

4～11は浮島Ⅰa式土器である。4～6は複合口縁で、口縁部下端にキザミを施す。4は遺存高16.6cm、推定口径22.4cmである。地文(捺糸Rか)を施文後、頸部に基幹文様の「多段矢羽根状文」を描く。5は遺存高13.8cm、推定口径20.8cmを測る。地文として疎らな捺糸Rを施文後、頸部施文域の上下端を2条の平行沈線で画し、基幹文様の木葉文を描く。6は口縁部・頸部に上下の噛み合わない山形文を施文する。7は口縁部に山形文を重畳施文後、刺突文を垂下する。8は胴部片で、地文として付加条縄文(軸不明。L2条付加)施文後、「鋸歯状文」を描く。9は単口縁で、地文として疎らな捺糸Rを施文後、頸部に山形文を描く。10は地文として疎らな捺糸Lを施文した胴部片である。11は刺突文と沈線を施す。

12～21は黒浜式土器である。12は平縁で、口縁下に鈎状隆線を貼付する。地文には付加条縄文(軸不明。L1条付加)を施している。13・14・19は波状縁で、13は地文縄文の単節RLを施す。14は地文縄文単節RLを施文後、半截竹管で葉脈状文を描き、交点に円形竹管による刺突文を垂下する。19は推定口径22.0cm、遺存高14.9cmで、地文縄文単節LRを施文後、胴部に横位の円形竹管による刺突文を巡らす。20は平縁で、地文縄文単節LRを施す。18は地文として付加条縄文(軸不明。R1条付加)を施した胴部片である。21は胴部下半部から底部で、遺存高10.4cm、推定底径9.0cmを測る。上げ底気味で、胴部には地文



第11图 SI-085



第12図 SI-088、SI-091

として単節RLを施す。

22・23は大木2 a式土器と思われるもので、同一個体である。地文として網目状燃糸文を施している。胎土中の繊維含有量は少な目で、白色粒子の含有がやや目立つ。

24は幅広の爪形文を描線として意匠を描くもので、諸磯b式土器である。25は平縁で、横位に刺突文を施した浮島II式土器である。26は貝殻緑文を施した後、沈線で意匠を描いて磨り消しを行った磨消貝殻文を施す。興津I式土器に位置づけられる。

本跡の帰属時期は、床面付近および覆土下層中から出土した4の土器の時期である浮島I a式期と推定される。

SI-088 (47) SI-001 (第12図、図版3・37)

D地区の中央部のS15-37・47に位置する。北側が調査区外となるため、南北を向いている長軸方向は4.82mの範囲まで検出した。短軸は3.82mで、不整楕円形を呈する。II層中に掘り込まれており、覆土は炭化粒子や焼土粒子を含む暗褐色土を主体としていた。床面は平坦で、中央部に東西にはしる溝状の攪乱があり、検出範囲では炉は確認されなかった。柱穴と考えられるビットは4基検出され、このうちP1～P3は東壁に沿って並び、P4は南壁際に位置している。床面からの深さは0.16m～0.29mで、いずれも深くはない。

出土した遺物は少ない。土器のほか石鏃・石鏃未成品各2点、剥片類10点を出土し、遺存状態のよい石鏃(第65図1)・石鏃未成品(第65図49)各1点を図示した。

土器は破片3点を図示した。1は細沈線を描線として意匠を描くもので、早期中葉の三戸式土器に位置づけられる。2は内外面に横方向を主とする貝殻条痕を施した口縁部片で、早期後葉の鶴ガ島台式土器に位置づけられよう。

3は黒浜式土器で、胎土に繊維を含有し、地文縄文単節RLを施文した胴部小片である。

以上の土器小片はいずれも覆土中から出土したもので、時期決定の資料とするのは難しい。遺構の形状その他の属性から見て、大枠ながらも早期の所産と推定される。

SI-089、SI-90、SK-116 (41)SI-004、(45)SI-005A、(41)SK-016(第13図、図版3・37)

S15-73・83付近の台地西側に位置する。西側の楕円形のSI-089、東側の方形のSI-090の2軒の堅穴住居が重複していると考えられるが、確認面からの深さが0.20mと浅く、木根などにより攪乱を受けていること、調査が2回に分けて行われたことなどから、遺構の輪郭は不明瞭で、2軒の境界ははっきりしない。床面はいずれも平坦で硬く、床の高さは同じである。西寄りに検出した炉はSI-089のものと考えられ、規模は0.72m×0.58mである。火床部は被熱によりローム土がブロック化しており凸凹が著しく、よく使い込まれている。柱穴の可能性のあるピットは11基検出された。P2・P3・P8～P11は炉を囲むように円形に並び、深さは0.10m～0.41mの間に分布する。その東側に、P1・P4・P6・P7が1.50m～2.00mの間隔で弧状に並ぶ。床面からの深さは0.14m～0.22mを測る。P5のみ東に離れて検出されている。西端の壁際に0.60m×0.40mの範囲で焼土が検出された。

土器のほか石鏃10点、石鏃未成品22点、楔形石器16点、二次加工ある剥片6点、打製石斧1点、局部磨製石斧1点、磨石類1点、石皿1点、台石1点、側面調整礫1点、石核1点のほか剥片類を1,397点出土し、剥片の分布範囲は、先述の弧状のピット列の南西側にほぼ収束することから、SI-089の遺構の中心となる部分はおおむね4.0m×6.0mの楕円形を呈すと推測され、東側のSI-090を壊していると考えられ、西から南東の土層断面の観察からもこれを裏付けられる。遺物の出土状況からSI-089は石器製作跡であろう。また、北西側に剥片が集中して出土した部分があり、わずかに窪んでいたため、これは土坑SK-116として調査され、SI-089との関連が考えられる。出土したのは剥片類のみであった。

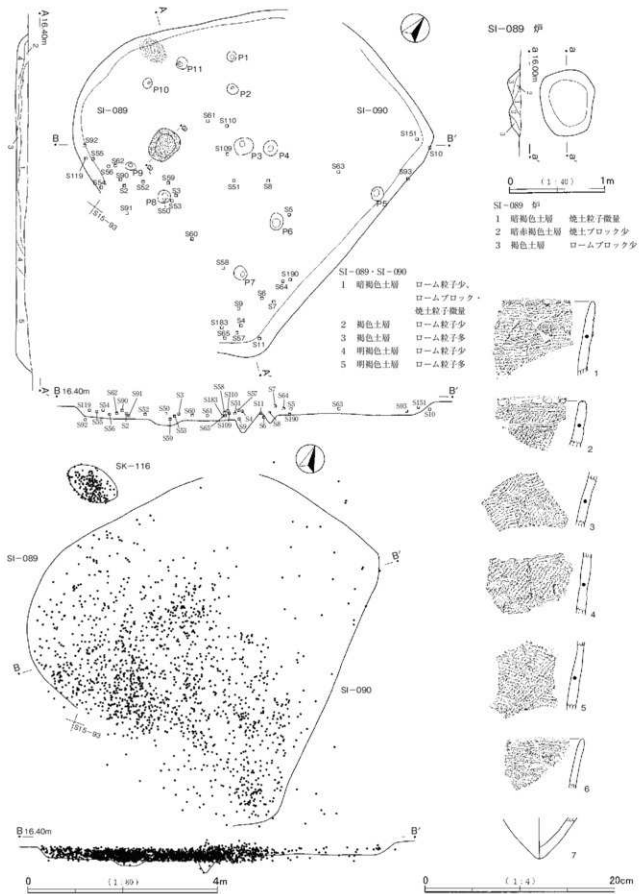
図示したのは土器7点と石器類の中で遺存状態のよい石鏃10点(第65図2～11)、石鏃未成品16点(第65図50～65)、楔形石器4点(第66図90～93)、二次加工ある剥片2点(第67図109・110)、打製石斧(第68図119)・台石(第73図183)各1点である。

石器類に比べ、出土した土器はわずかであった。図示できたのは7点である。1～5がSI-089、6・7はSI-090に伴う可能性が高い。

1～5は黒浜式土器である。1・2は同一個体で、地文縄文に無節Rを施文後、口縁下に半截竹管による平行沈線を2条施す。3・4も同一個体で、地文縄文に無節Rを施文した胴部片である。5は無節LとRで羽状縄文を施す。

6は器面調整のみが施された口縁部片で、早期中葉の沈線文系土器のいずれかに該当しよう。7は底部で、鋭角ではない尖底を呈する。器内外面とも器面調整のみが施されており、胎土中に若干の繊維を含有する。早期後葉の子母口式土器に位置づけられる。

土器群の出土状態から、SI-089は同一個体が遺棄されていた黒浜式期、SI-090は大枠ながらも早期と



第13図 SI-089、SI-090、SK-116

推定される。

SI-091 (41) SI-005 (第12図、図版3・37)

台地西側のS15-90・91に位置する。3.61m×3.81mの隅丸方形を呈し、確認面からの深さは0.22mを測る。短軸が南北を向いている。覆土はローム粒子を多量に含む褐色土・明褐色土が主体で、レンズ状に堆積している。北壁際中央に炉を検出した。規模0.43m×0.47mの円形で、覆土にはローム粒子を多量に含むが、焼土粒子の混入は少なく、被熱の度合いも弱い。ピットは10基検出された。P1～P3・P5・P7・P9・P10は径0.20m～0.30m、深さ0.30m～0.41mとほぼ同規模である。これ以外のP4は規模0.51m×0.46m、深さ0.13m、P6は規模0.55m×0.46m、深さ0.16mとやや大きく、P8は径0.19m、床面からの深さが0.11mと小規模である。P7～P10が南北に1列に並んでいる。

出土した遺物は少ない。土器のほかに石鏃(第65図12)1点と剥片類1点を出土した。

図示できた土器は7点で、いずれも破片である。1・2は諸磯a式土器である。1は口縁部を欠くが、主要施文域の頸部から一部胴部上半が残存する。頸部は大きく外反して立ち上がり、地文縄文単節RL(直前段多条)を施文後、施文域下端を単列の爪形文で画し、爪形文を描線として「入組木葉文」を施す。2は半載竹管で葉脈状文を描き、交点に円形竹管による刺突文を垂下する。

3～7は黒浜式土器である。3は地文として付加条縄文(軸不明。L1条付加)を施す。4は地文縄文単節LRを施文後、ヘラなどの先による刺突文を充填する。5は地文縄文単節LRを施文後、半載竹管による平行沈線形で不規則な意匠ないし装飾を施す。6は地文縄文単節RLを施文した胴部片で、7は地文縄文単節LRを施した胴部片である。

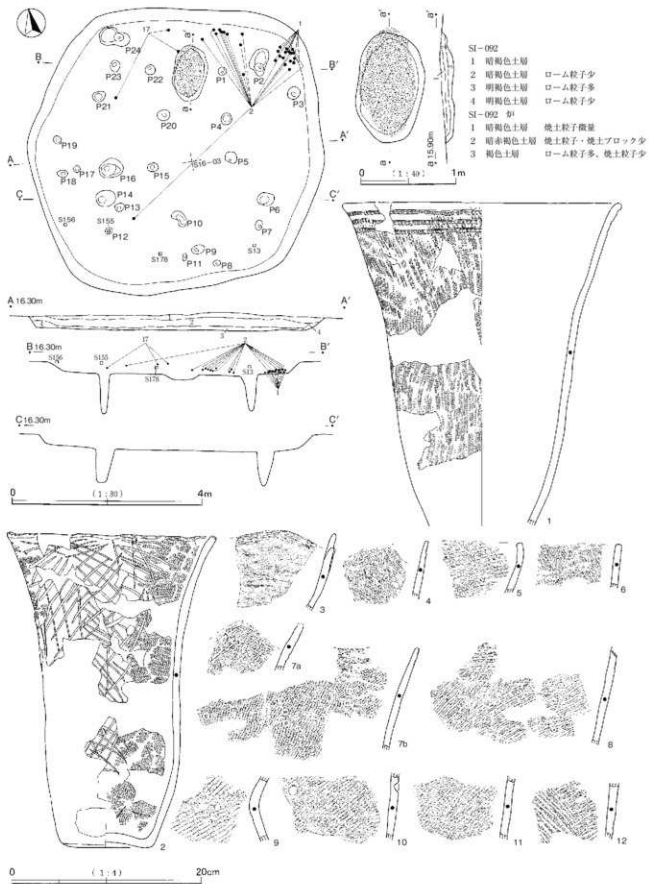
土器はいずれも覆土中から出土しているため、本跡の帰属時期決定の資料とするには十分とはいえないが、接合された資料から、1の土器の時期である諸磯a式期の可能性が高い。

SI-092 (41) SI-003 (第14・15図、図版3・4・32・37)

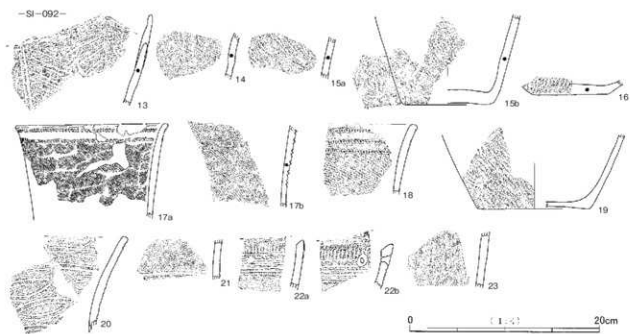
S15-92・93に位置する。SI-089・090の南側にあたり、西にはSI-091、東にはSI-093・094、南にはSI-099が検出されており縄文時代の竪穴住居が密集している。南北軸が6.08m、東西軸が6.26mで、東西壁中央が膨らんだ方形を呈する。確認面からの深さは0.38mで、上層に暗褐色土、壁際から下層に明褐色土が水平に堆積する。住居の南北軸上の北寄りに炉を検出した。1.17m×0.74mの南北に長い楕円形で、火床部に被熱した痕跡が認められるが、覆土に焼土ブロックが少なく、灰とともにかき出された結果と思われる。柱穴と考えられるピットは24基と多数検出された。このうち床面から0.69m～0.95mと比較的深く掘り込まれているP2・P6・P14・P16・P23・P24は隣近くに位置し、一辺約3.4mの正方形の対角線上に当たり、主柱穴と考えられる。そのほかのピットは遺構全体に散在し、大半が床面からの深さが0.13m～0.27mである。

遺物は多数出土し、特に北東隅にまとまっていた。土器のほかに石鏃1点(第65図13)、磨石類2点(第70図155・156)、石皿1点(第73図178)がいずれも南壁近くから出土している。また、遺存状態が悪く図示しなかったが石鏃・石鏃未成品各1点、軽石2点、剥片類87点も出土した。

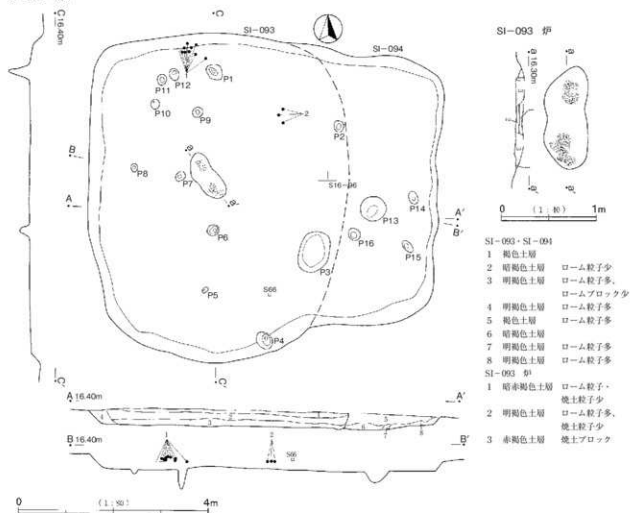
土器は23点を図示した。1～16は黒浜式土器である。1は北東隅の床面から出土した平縁の深鉢である。底部を欠損し、推定口径28.8cm、推定器高34.1cmで、口縁部に向かって外反気味に立ち上がる。地文縄文単節RL(直前段多条)を斜回転施文後、口縁下に3列の爪形文を施す。胎土中の繊維含有量は僅少である。2は北壁際から北東隅にかけて出土した。口径21.3cm、底径9.5cm、推定器高33.2cmを測る。施文は、



第14図 SI-092 (1)



SI-093・094



第15図 SI-092(2)、SI-093・SI-094(1)

縦位に器面を4分割して、3区画に地文縄文単節RLを施してから、残りの1区画のみに肋骨文を施すという不規則なものである。3は小波状縁を呈し、器内外面とも器面調整のみを施す。4は波状縁で、地文縄文単節RL(直前段多条)を施した後、口縁部に2列の爪形文を施す。5は地文として燃糸Lを施している。6は貝殻腹縁文を横位施文する。7は波状縁深鉢で、地文縄文単節LRを施した後、口縁下に2列の爪形文を施し、波頂部と波底部下に円形竹管による刺突文を垂下する。8は地文縄文無節Lを施した後、口辺部に平行沈線を巡らし、さらに円形竹管による刺突文を垂下している。9～11は地文縄文のみを施したもので、使用原体は9が無節R、10・11は単節RLである。12・13は木葉文を施したもので、13は波状縁になる。14は木葉文がやや変形したものである。15・16は底部で、15が遺存高9.4cm、推定底径9.6cm、16は遺存高1.5cm、底径8.0cmを測る。いずれも単節RLで地文縄文を施している。

17～19は諸磯a式土器である。17は平縁深鉢で、推定口径15.6cm、遺存高10.1cmを測る。地文縄文単節RL(直前段多条)を施した後、口縁下に2列の爪形文を施す。19は底部で、推定底径11.6cm、遺存高7.8cmを測る。地文縄文として単節RL(直前段多条)を施文する。

20は浮島Ia式土器である。平縁深鉢で、地文として燃糸Lを施してから、半截竹管の内側を用いて木葉文を重畳施文する。21は燃糸文を地文として施文後、沈線を施したもので、浮島I式に属するが、細別型式は不明である。

22・23は五領ヶ台式土器である。22aは口縁部片で、口縁直下に縦位の細沈線を施し、その下に横位の交互刺突文、さらに沈線を重畳施文し、下端に三角形刺突を巡らせている。22bは同一個体で、補修孔が穿たれている。23は縦位の沈線を不規則に垂下させている。

床面から覆土3層中に出土した1・2の土器の時期である黒浜式期が本跡の帰属時期であろう。17の諸磯a式土器は覆土2層中に遺棄されたものと考えられ、東西に位置する諸磯a式期のSI-091・093と関連するものであろう。その他の五領ヶ台式の土器片などは、埋没過程における流入と解釈される。

SI-093、SI-094 (45)SI-003A・B(第15・16図、図版4・33・38)

D地区西側のS15-95、S16-05付近に位置し、SI-092の東に隣接している。2軒の堅穴住居が重複して検出された。

SI-093はSI-094を壊して西側に構築されている。長軸6.95m、短軸は推定で5.50m、確認面からの深さは0.37mを測る。隅丸長方形を呈し、長軸は南北を向いている。覆土は壁際にローム粒子を多量に含む明褐色土が堆積し、上層から褐色土、暗褐色土、明褐色土が水平に堆積していた。炉は中央に位置し、長軸1.09m、短軸0.46mの長楕円形を呈する。掘り込みはわずかで、底面から0.10m上に被熱により硬化した焼土ブロックを両端に検出し、作り替えを行った可能性がある。柱穴と考えられるピットは12基検出した。このうちP2はSI-094に属す可能性もある。P3は規模が0.88m×0.61m、深さ0.17mを測り、これ以外も確認面からの深さは0.09m～0.45mまでとばらつきがある。大半が炉より西側、特に炉と北西隅の間に集中する。

SI-094は西側をSI-093により壊される。長軸は5.74m、短軸方向は2.32mの範囲を確認した。覆土はローム粒子を多量に含む明褐色土を主体に堆積していた。確認面からの深さは0.35mを測り、方形を呈すと思われる。検出範囲では炉は確認できなかった。ピットは4基検出され、P14～P16は径0.27m～0.30m、深さ0.24m～0.40mで、柱穴と考えられる。P13は規模が0.55m×0.52m、深さ0.22mで、南北方向の中央付近に位置している。

SI-093出土遺物 SI-093からは、土器のほか石燼未成品2点、剥片類17点を出土し、うち石燼未成品1点(第65図66)を図示した。

1～5は諸磯a式土器である。1は北壁際から出土した。推定口径21.6cm、遺存高25.9cmを測る。口縁部が外反気味に立ち上がる長胴気味の平縁深鉢で、地文縄文単節RL(直前段多条)を施文し、横位の結節縄文が幾段が見られる。2は推定口径28.6cm、遺存高18.4cmを測る。口縁部が外反し、胴中位がふくらむ平縁深鉢で、口縁端部にキザミを施し、地文縄文として単節RL(直前段多条)を施す。3は地文縄文単節RLを施文後、下端を2列の爪形文で画し、半載竹管による平行沈線を描線として肋骨文を描き、交点に凹形竹管による刺突文を施すものである。4は地文縄文単節RL(直前段多条)を施文後、爪形文を施す。5は地文縄文単節RL(直前段多条)を施した底部付近の破片である。

6～21は黒浜式土器である。6は小波状縁を呈すると思われ、口縁下に2列の爪形文を施す。7は平縁深鉢で、地文として付加条縄文(軸不明。R1条付加)を羽状施文する。8～12は意匠の精粗はあるものの、肋骨文を基幹文様として施したものである。13～18は地文縄文のみを施したもので、使用原体は、14・15が無節L、13・16・19・20は付加条縄文で、16・19・20が軸不明でL1条付加、13は軸不明でR1条付加である。17・18は燃糸文で、ともに燃糸Lを用いる。21は底部で、推定底径9.0cm、遺存高4.8cmである。地文縄文として無節Rを施す。

以上の状況から、SI-093の帰属時期は、壁際の三角堆積土である4層中から出土した1の時期である諸磯a式期と推定される。

SI-094出土遺物 1～3は条痕文系土器で、いずれも器内外面に貝殻条痕を施す。1は口縁部片で、条痕は外面が横位、内面は斜方向を主とする。2の条痕は外面が斜方向、内面は横位を主としている。3は内外面とも斜方向の条痕を主とする。以上のことから、条痕文土器群のうち野鳥式をおもに、一部鶴ガ島台式にかかる時期と捉えておきたい。

時期決定をするには資料が少ないが、遺構の破壊状況や土器群の時的的なまとまりなどから、早期後葉の野鳥式期から鶴ガ島台式期を帰属時期とするのが穏当と考えられる。

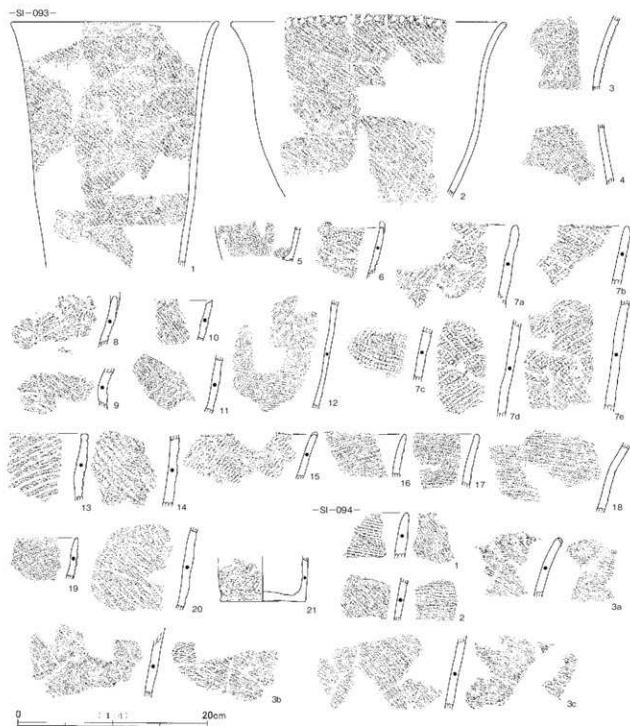
SI-095 (41) SI-006(第17図、図版4・33・38)

台地西縁のR16-18に位置する。長軸3.88m、短軸3.62mの隅丸方形で、確認面からの深さは0.28mである。覆土は上層にローム粒子を少量含む暗褐色土、下層にローム粒子を多量に含む明褐色土を主体に水平に堆積していた。炉は中央に検出された。掘り込みはほとんどなく床面が被熱しているにとどまる。北西壁寄りに床に被熱痕跡が認められた。こちらも炉の可能性はあるが、やはり掘り込まれてはいない。ピットは北東壁寄りと南西壁寄りに2基ずつ合わせて4基検出し、これらが柱穴であろう。P3が深さ0.54mと深いが、ほかは深さ0.22m～0.26mである。

中央付近に貝の小ブロックを検出した。床面からの厚さは0.15mでハマグリとサルボオを主体としていた(第4表)。

遺物は全体に散在し、北隅にまとまりがみられた。土器のほかに打製石斧(第68図120)、磨石類(第70図157)、石核(第75図198)を出土した。打製石斧は南西隅付近、磨石類は北隅のいずれも下層から出土したものである。

土器は12点を図示した。1～5・10は黒浜式土器である。1は波状縁深鉢の口縁部の破片で、地文縄文単節LRを施文後、半載竹管による平行沈線を描線として「米字文」を描き、交点などに凹形竹管による



第16図 SI-093・SI-094(2)

刺突を施す。3は地文として付加条縄文(軸不明。R1条付加)を施文後、口縁下に3条の平行沈線を施す。本例は胎土中の繊維含有量が僅少である。4は貝殻腹縁文を地文とする。2・5は地文縄文のみが施されたもので、使用原体は2が単節LR、5は無節L(反燃か)となる。10は底部で、炉東側から出土した。推定底径9.0cm、遺存高10.0cmを測り、地文縄文として単節RLを施す。

6～9、11・12は諸磯a式土器である。6は地文縄文単節RL(直前段多条)を施文後、口辺に3列の爪

形文を施し、半載竹管による平行沈線を描線として肋骨文を描き、交点などに円形竹管による刺突を施す。7は地文縄文単節RLを施した後、集合沈線で意匠を描く。8は地文縄文単節RL(直前段多条)を施した後、2列の爪形文を施す。9は波状縁深鉢で、地文縄文単節RL(直前段多条)を施した後、口縁部下に2列の爪形文を巡らせ、両列の間を磨り消す。11・12は底部である。11は推定底径10.0cm、遺存高9.6cmを測る。地文縄文単節RL(直前段多条)を施文する。12は推定底径9.0cm、遺存高9.6cmを測る。地文縄文単節RL(直前段多条)を施文する。本例は胎土中の繊維含有量が微量である。

以上の土器群の出土状態から床面付近から覆土下層にかけて出土した10の時期である黒浜式期が本跡の帰属時期であろう。

SI-096 (41) SI-009(第17図、図版4・33・38)

R16-37に位置する。南側に縄文時代の土坑SK-126が重複し、土層断面から、土坑の方が本跡より新しいと考えられる。長軸3.39m、短軸3.27mの円形を呈し、確認面からの深さは0.19mを測る。上層に褐色土、下層にローム粒子を多量に含む明褐色土が水平に堆積していた。がやビットなどの施設は検出されず、床面は平坦だが軟質である。

出土した遺物は少ない。図示できた土器は2点であった。遺存状態が悪く、図示しなかったが、碟器・石皿を各1点出土している。

1・2はともに黒浜式土器である。1は平縁深鉢の口縁部片で、地文縄文単節LRを施文する。2も平縁深鉢で、胴下半部を中心に地文縄文単節RLを施文後、口頭部には単沈線を描線とする不規則な蛇行沈線文を幾条も垂下する。

いずれも覆土中から出土したものであるが、他の時期の土器片の混入もないため、図示した2点の資料が示す黒浜式期が本跡の帰属時期であろう。

SI-097 (41) SI-007(第18図、図版4・38)

台地西縁のR16-28に位置する。南端が南に位置する縄文時代の堅穴住居SI-098の北西隅を壊している。長軸5.01m、短軸3.97mの楕円形を呈し、確認面からの深さは0.17mを測る。長軸は地形に沿って南北を向いている。上層に暗褐色土、下層にローム粒子を多量に含む明褐色土が水平に堆積していた。床面の北西側と南側が低く傾斜があるが、凸凹は少なく、低い部分以外は踏み締められていて硬い。中央北寄りに炉を検出した。規模は0.38m×0.25m、掘り込みは0.20mと浅く、焼土の堆積も少ない。使用された様子はあまり認められない。柱穴と考えられるビットは炉より南に8基検出された。径は0.19m～0.26mで、南西隅に位置するP8は径0.36mとほかのビットに比較して規模が大きい。床面からの深さは0.10m～0.25mの範囲に収束する。

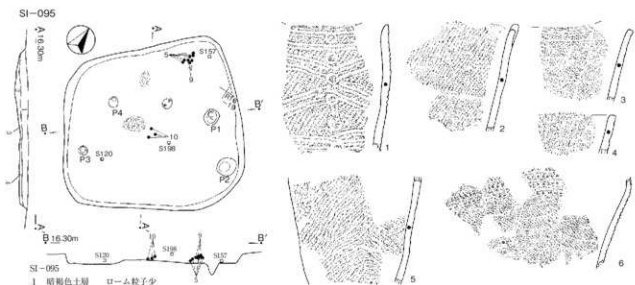
中央から南寄りにハマグリからなる小規模な貝ブロックを検出した(第4表)。

土器のほかに石燄未成品(第65図67)、側面調整礫(第74図191)をそれぞれ1点図示したほか、石皿・剥片を各1点出土した。石燄未成品はP3付近、側面調整礫はP8付近の床面近くから出土した。

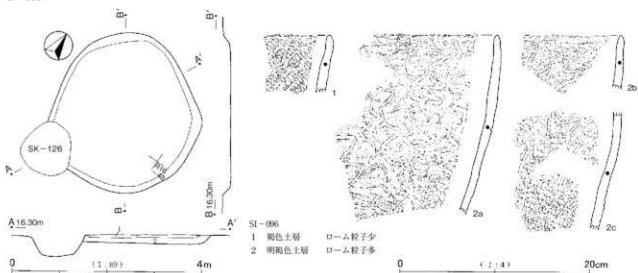
土器は5点を図示した。1～4は黒浜式土器である。1は口縁から胴部にかけての大破片で、口縁部に幅広の無文部をはさみ、地文の捺糸Rを羽状施文する。4も地文は捺糸Rを施す。2は単節LRとRLを用いて羽状施文する。3は地文として付加条縄文(軸不明。R2条付加)を施文する。

5は波状貝殻文を重畳施文した胴部片で、浮島Ⅱ式土器である。

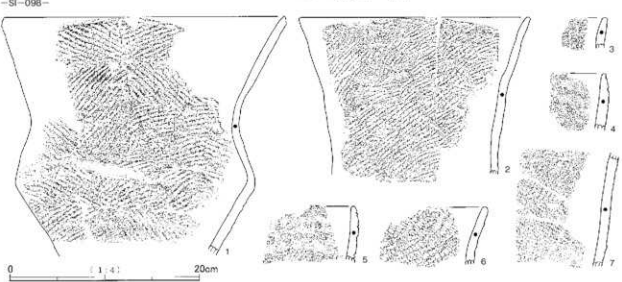
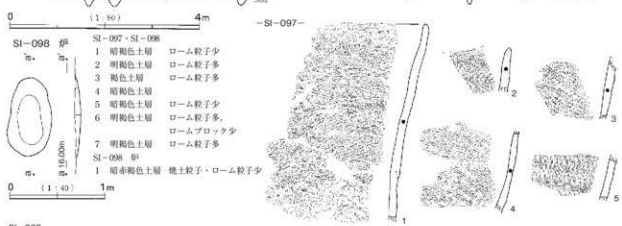
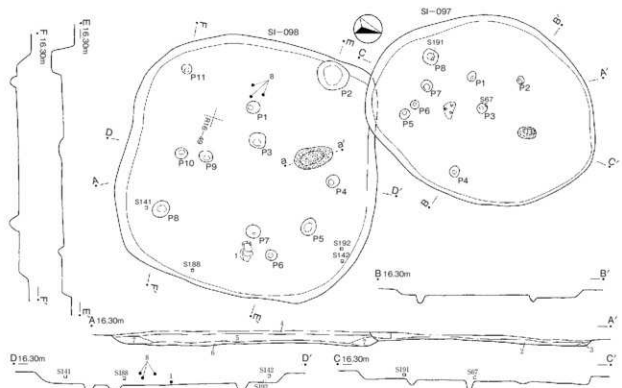
図示した土器は、いずれも覆土中から出土したものである。ただ、1のような大破片の土器資料から、



SI-096



第17図 SI-095、SI-096



第18図 SI-097, SI-098 (1)

黒浜式期が本跡の帰属時期と推定されよう。浮島Ⅱ式土器は、埋没過程における流入と解釈されよう。

SI-098 (41) SI-008 (第18・19図、図版5・33・39)

D地区西寄りのR16-39に位置する。北側の縄文時代の竪穴住居SI-097と重複し、北西隅をSI-097に壊される。5.49m×5.48mの隅丸正方形を呈し、確認面からの深さは0.30mを測る。覆土は水平に堆積するローム粒子を少量含む暗褐色土を主体とし、壁際にローム粒子を多量に含む明褐色土が流れ込むように堆積していた。床面は平坦で、堅く締まっている。北壁寄り中央に炉を検出した。0.84m×0.46mの南北に長い楕円形で、掘り込みは浅い。焼土・焼土ブロックの堆積が少なく、強い熱を受けた様子はない。柱穴と考えられるピットは11基検出された。P3以外は壁に沿って配置されている。深さはP7が0.90m、P1が0.52mを測る以外は0.08m～0.21mの範囲に収束する。北隅に位置するP2は規模0.84m×0.46m、深さ0.24mでやや大きい。

1の土器がP7東の床面にまとも出土した。土器のほかに磨製石斧2点(第69図141・142)、軽石石製品(第74図188)、側面調整礫(第74図192)などの石器類を南東隅から北東隅にかけての東壁際から出土し、図示した以外にも石鏃未成品・磨石類が出土している。軽石石製品は、側面形が石冠状の形態のもので、C地区でも2点出土した。

土器は17点を図示し、1～16は黒浜式土器である。1は胴中位が張る深鉢で、底部を欠損し、推定口径29.6cm、遺存高25.2cmを測る。地文として無節LとRで羽状施文する。2は口縁部から胴部の破片で、遺存高16.6cm、推定口径24.0cmを測る。地文として無節Lを施す。3・14は貝殻文土器で、貝殻縁線文を施す。4・5・7は円形竹管ないし竹管による刺突文を施すものである。地文は5が無節R、7は単節RLを羽状施文する。6・13・15は地文として縄文を施文するもので、使用原体は6が単節RL(0段多条)、13は単節LR、15は付加条縄文(軸不明、L2条付加と軸不明、R2条付加)を用いて羽状施文している。8～10は同一個体で、波状縁の深鉢である。地文縄文単節RL(0段多条)を施文後、胴中位にコンパス文を施す。11は格子目文、12は肋骨文を施文する。16は底部で、推定底径9.8cm、遺存高5.4cmである。地文縄文として単節RLを施文する。

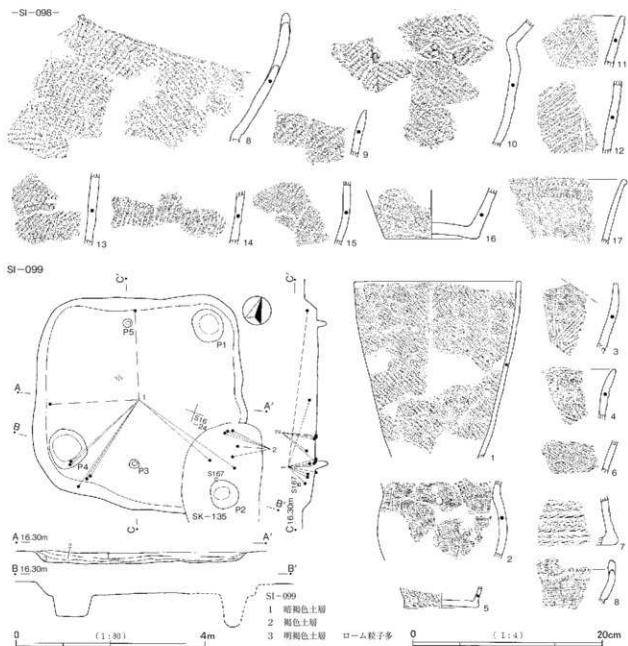
17は諸磯a式土器である。平縁深鉢で、地文縄文単節RL(直前段多条)を施文後、口縁下に2列の爪形文を施す。

床面上から出土した1の土器の時期である黒浜式期が本跡の帰属時期であろう。

SI-099 (41) SI-002・(45) SI-005A (第19図、図版5・33・39)

SI6-23に位置する。南東隅に縄文時代の土坑SK-135が重複する。新旧関係は不明であったが、土坑の方が深く掘り込まれていたため、南東隅は検出できなかった。長軸4.61m、短軸4.54mで正方形に近い方形を呈し、長軸は南北を向いている。壁は緩やかに立ち上がり、深さは0.26mである。床面は軟質であった。覆土は上層に暗褐色土、下層に褐色土が堆積し、壁際から床面上にはローム粒子を多量に含む明褐色土が薄く堆積していた。中央より西に径0.15mの小規模な焼土の堆積を検出した。掘り込みは浅いが傍であろう。ピットは5基検出され、柱穴と思われる。P3・P5は長軸上の南北に位置し、どちらも径0.20m前後で、床面からの深さはそれぞれ0.27m、0.19mを測る。北東隅のP1は径0.70m、深さ0.56m、南西隅のP4は径0.80m、深さ0.46mである。土坑内から検出したP2はP1・P4と同じように隅部に位置するピットと判断した。

出土遺物はあまり多くはない。西側にまとも出土していた。土器のほかに石鏃未成品・楔形石器・磨製石斧・



第19図 SI-098 (2)、SI-099

敲石・石皿・剥片類を出土し、敲石1点(第71図167)を図示した。

土器は8点を図示した。1～5は黒浜式土器である。1は底部から口縁部に向かって開いて立ち上がる比較的単純な器形の平縁深鉢で、底部が欠損する。推定口径29.6cm、遺存高18.7cmを測る。地文縄文として単節RL(直前段多条)を施文する。2は頸部が緩やかにくびれる形態で、口縁部と胴下半部が欠損する。遺存高8.3cmを測る。平行沈線で意匠を施してから、くびれ部に円形刺突文を施文する。3は波状縁の深鉢で、肋骨文を施文する。4は地文縄文単節RLを施文後、複数列の刺突文を施す。5は底部で、上げ底である。推定底径8.0cm、遺存高2.3cmで、地文縄文単節RLを施文する。

6は地文縄文単節RL(直前段多条)を施文後、竹管で波状文を描いた諸磯a式土器である。

7は浮線文を施した諸磯b式土器の底部である。

8は口唇上に突起を付し、口縁端部にキザミを施したもので、五領ヶ台式土器である。

以上の土器群の出土状態から、床面上ないし覆土3層下部から出土した1・2の時期である黒浜式期が本跡の帰属時期と考えられる。五領ヶ台式土器などは、埋没過程における流入と解釈されよう。また1・2の土器は住居内出土のものが土坑上面から出土したものと接合しており、このことから土坑埋没後に住居がつくられた可能性が考えられる。

SI-100 (41) SI-001 (第20図、図版5・33・39)

S16-48に位置する。南側は調査区外となり、検出できなかった。北東隅には縄文時代の土坑SK-137が重複する。短軸は4.84m、長軸は推定4.60mの方形を呈する。深さは0.28mで、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は上層に暗褐色土、下層に褐色土が堆積し、壁際から床面上にはローム粒子を多量に含み、少量のロームブロックを含む明褐色土が薄く堆積していた。床面は多少の凹凸があるものの、炉の周囲を中心によく踏み固められている。炉は、南北軸上の北寄り中央の2か所に検出した。北寄りの炉Aは0.77m×0.46m、中央の炉Bは径0.25mを測る。炉Aは焼土範囲が広がっているが、厚く堆積している訳ではなく、短期間の使用と推定される。柱穴と考えられるピットは9基検出された。床面からの深さは、0.15m～0.59mの間に分布する。P7・P8が北西隅に位置するほかは、炉Bを囲むように配置されており、このうちP4～P6・P9が深さ0.43m～0.59mと深い。

土器以外に石鏃未成品2点や剥片類4点を出土し、二次加工ある剥片1点(第67図111)、磨製石斧1点(第69図143)を图示した。

土器は4点を图示し、いずれも黒浜式土器である。1は中央南に位置するP4周辺から出土した。推定口径23.6cm、遺存高24.2cm、を測る。口縁部が大きく広がる波状4単位の深鉢で、底部を欠損するが胴部下半付近まで残存する。半載竹管を用いて波頂部と波底部に縦位の平行沈線垂下し、これを起点に同一施文を用いて肋骨文を描く。2は平縁深鉢の口縁部片で、半載竹管を用いて肋骨文を描いている。3・4は地文として付加条縄文を施すものである。使用原体は3が軸不明・L1条付加、4は軸不明・R1条付加である。4は波状緑で、地文を施文後、波頂部に盲孔状の円形刺突を施す。

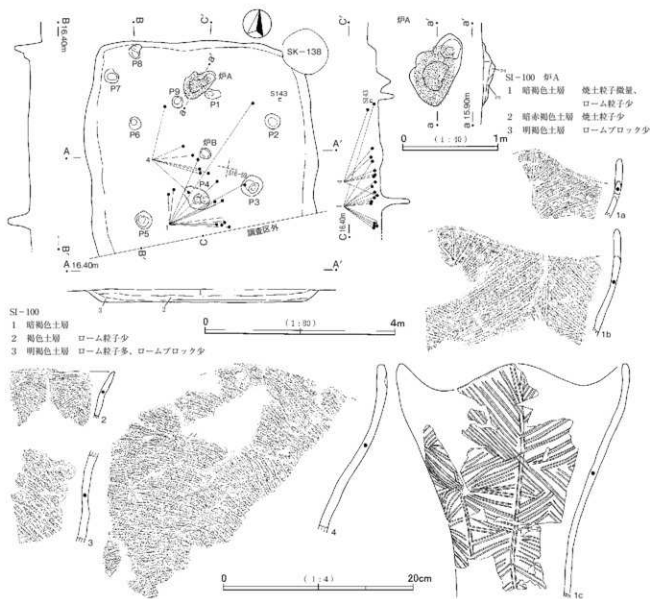
覆土2層下部から出土した1・4の土器の時期である黒浜式期が本跡の帰属時期と思われる。

SI-102、SI-103、SI-104 (32) SI-001、SI-002、SI-003 (第21図、図版5・39)

U15-40・50・51付近に位置する。D地区中央にあたり、3軒の堅穴住居が重複していた。これら以外には周辺に堅穴住居は検出されていない。

SI-102は東側にSI-103・SI-104が重複し、3軒の中では最も新しい。また、中央に縄文時代の土坑SK-121が重複している。両者の新旧関係は不明である。北西側は調査区外となり、検出できなかった。長軸5.37m、短軸は推定4.26mで、現状からは東隅が角張る不整楕円形であったと推定される。確認面からの深さは0.43mで、覆土上層に暗褐色土、下層にローム粒子を多量に含む明褐色土が水平に堆積していた。調査範囲内では炉は検出されなかった。柱穴と考えられるピットは8基検出された。P3・P6・P7が中心部に位置し、これ以外が壁に沿って位置している。床面からの深さは0.12m～0.24mの間に分布する。

SI-103は、西側がSI-102、南側がSI-104と重複し、調査記録ではSI-102より古く、SI-104より新しい。SI-102に壊される長軸方向は5.29m以上、短軸は4.10mの隅丸方形を呈し、確認面からの深さは0.31mである。上層に暗褐色土、下層にローム粒子を多量に含む明褐色土が水平に堆積していた。検出した範



第20図 SI-100

囲では炉は確認されなかった。柱穴と考えられるピットは8基検出した。床面からの深さは、0.13m~0.39mの間に分布する。

SI-104は、北側がSI-102、SI-103に壊されている。遺存する部分から短軸3.58mの隅丸方形を呈していたと推定される。確認面からの深さは0.28mで、覆土は上層に褐色土、下層にローム粒子を多量に含む明褐色土が水平に堆積していた。南側が広範囲に攪乱されており、調査範囲では炉は検出されなかった。柱穴と思われるピットは1基で、床面からの深さは0.22mである。

遺物は3軒分をまとめて取り上げている。全体に散在していたが、出土量が多かったのはもっとも新しいSI-102である。しかし、大きく復元できるものはなかった。

土器のほかに、石鏃9点、石鏃未成品4点、楔形石器6点、二次加工ある剥片6点、砥石1点、石核1点、剥片類226点を出土し、このうち遺存状態のよい石鏃6点(第65図14~19)、石鏃未成品4点(第65

・66図68～71)、二次加工ある剥片(第67図112)・砥石(第72図172)・石核(第75図199)各1点を図示した。これらのことからSI-102は石鏃製作跡であったと考えられる。

土器は7点を図示した。破片ばかりで遺存状態のよいものはない。1～3は黒浜式土器である。1は口縁部片で、地文として摺糸Rを施す。2は胴部片で、地文として無節Lを施文する。3は底部で、遺存高3.2cm、推定底径11.2cmを測る。地文として単節RLを羽状施文する。

4は諸磯b式土器で、幅広い爪形文で意匠を施すものである。

5は前期末葉の縄文系粗製土器で、横位の結節縄文を重畳施文する。6は底部で、推定底径10.0cm、遺存高3.5cmを測る。前期後半の所産であろう。

7は称名寺式ないしは堀之内式土器に伴う粗製土器の類である。

以上のように出土した土器には各時代のものが混在し、また破片資料ばかりであることから、遺構の時期決定の資料とするのは難しい。また重複する土坑からは早期・中期の土器片が出土し、やはり新旧関係は不明であった。ただ、土層の断面観察から3軒の竪穴住居の新旧関係は、104→103→102の順で新しくなることが明らかになっている。

SI-108 (26) SI-003 (第21図、図版5・39)

V15-45・46のD地区の東端に位置し、中世の掘込区画3の北側にあたる。本跡のほかにSI-109・SI-110の3軒の縄文時代の竪穴住居がまともって検出されている。北西隅を中世土坑SK-432によって壊され、北側が調査区外となるため北端部分を調査できなかった。長軸は推定5.60m、短軸5.26mで隅丸方形を呈し、長軸が南北を向く。確認面からの深さは0.05mで浅く、覆土はローム粒子を含む暗褐色土を主体に堆積していた。東壁寄り中央に炉を検出した。1.28m×0.66mの楕円形を呈する。炉の覆土には焼土粒子を多量に含み、炭化物が少量混入する。柱穴と思われるピットは南壁に沿って3基、北壁に沿って2基がいずれも短軸である東西軸に平行に並んで検出した。床面からの深さはP2が0.33m、P3が0.11m、ほかは0.20m～0.21mである。

出土した土器は少なく、図示できたのは土器片1点である。

1は関山Ⅱ式土器の胴部片で、還付末端を2段以上施す。

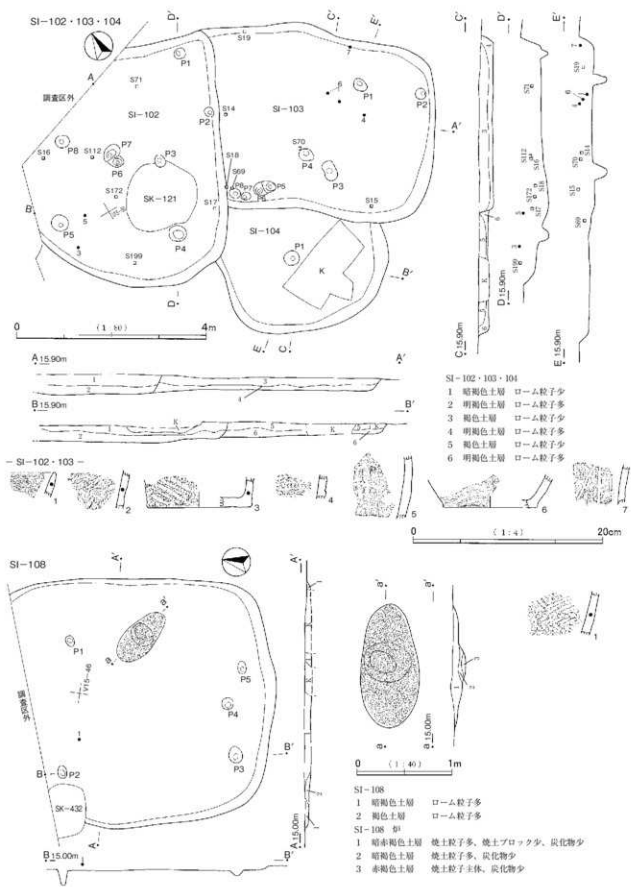
図示できた土器が1点であり、遺構の時期決定の資料としては少ないが、周辺の竪穴住居の状況から関山Ⅱ式が本跡の帰属時期である可能性が考えられる。

SI-109 (26) SI-001 (第22図、図版5・6・33・34・39)

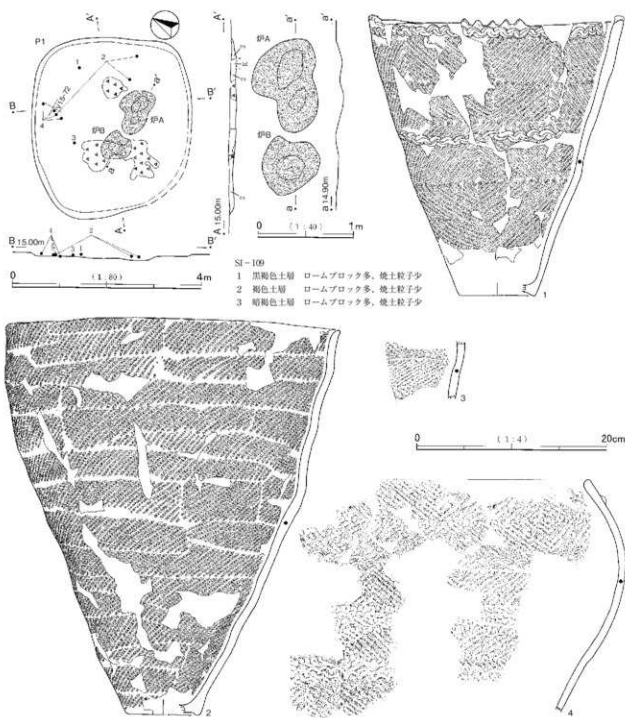
北東に向かって傾斜する緩斜面のV15-72に位置する。南隅の壁立ち上がりは一部残存していなかったが、長軸3.68m、短軸3.42mの隅丸長方形を呈す。確認面からの深さは0.05mで、覆土は上層に黒褐色土、壁際に暗褐色土が堆積し、どちらにも多量のロームブロックと焼土粒子を少量含んでいた。炉は中央に2か所、長軸方向にあたる東西に並んで検出された。炉Aは1.00m×0.66m、炉Bは0.52m×0.62mを測る。柱穴と思われるピットは検出されなかった。

床面直上に貝ブロックを2か所検出した。西側の貝ブロックは炉Bの上を覆うように堆積していた。ハマグリ・アサリ・サルボオ・ハイガイ・オキシジミ・マテガイ・シオフキ・マガキ・アカニシ・ウミニナなど多種類で構成される(第4表)。貝サンプル中から魚骨も採集され、1点がスズキと同定された(第6表)。

土器のほかに二次加工ある剥片、剥片などを出土し、石鏃未成品1点(第66図72)を図示した。



第21図 SI-102~104、SI-108



SI-109
 1 黒褐色土層 ロームブロック多、焼土粒子少
 2 褐色土層 ロームブロック多、焼土粒子少
 3 暗褐色土層 ロームブロック多、焼土粒子少

第22図 SI-109

土器4点を図示した。いずれも関山Ⅱ式土器である。1は北隅付近にまとまって出土した。一部を欠損するが、遺存状態がよく口径27.0cm、底径7.9cm、器高29.5cmを測る。平縁深鉢で、口唇上に「集合角状の突起」を付す。地文縄文として単節LRとRLで羽状施文後、口縁部下と胴部中に横位のコンパス文を巡らす。2も口縁部の一部と底部中央を欠損するのみで、口径35.1cm、底径7.9cm、器高41.8cmを測る。

平縁深鉢で、地文縄文として複節LRLを施文する。3は胴部片で、還付末端を施す。4は口縁部から頸部の破片で、口縁が内湾気味に立ち上がる。地文として単節LRとLRで羽状施文後、頸部と胴部にコンパス文を施す。頸部に1段、胴上部に4段の還付末端が施される。

以上の土器群は、4が床面直上、2は床面直上と覆土2層下部、1・3が覆土2層下部より出土しているため、図示した土器の時期である関山Ⅱ式期が本跡の帰属時期であると考えられる。

SI-110 (26) SI-002 (第23図、図版6・39)

V15-85に位置する。中世の掘込区画2内に位置し、北西壁を中世の長方形土坑SK-418によって切られる。長軸3.88m、短軸3.28mの隅丸長方形を呈し、確認面からの深さは0.09mである。覆土は壁に沿った周縁部にローム粒子を多量に含む暗褐色土、中央に暗褐色土が堆積していた。中央南東寄りに炬を検出した。1.06m×0.50mの楕円形で、長軸方向が堅穴住居長軸と一致している。炬内2か所に著しい被熱痕跡が認められ、平面形に緩やかにくびれが見られることから作り替えを行っている可能性がある。柱穴と考えられるピットは5基検出した。炬を中心に分布し、床面からの深さは0.14m～0.28mの深さである。

北隣の床面直上から貝ブロックを検出した。4ブロックに分かれているが、近接しており、本来は同時に遺棄されたものであろう。SI-109と同じようにハマグリ・アサリ・サルボオ・ハイガイ・オキシジミ・マテガイ・シオフキ、マガキ・アカニシ・ウミニナなど多種類で構成される(第4表)。

土器のほか石鏃1点(第65図21)、砥石1点(第72図173)を図示した。どちらも西壁近くの床面から出土した。このほか剥片1点が出土している。また土器はおもに炬周辺と貝ブロック周辺から出土している。

土器は破片11点を図示した。いずれも関山Ⅱ式末から黒浜式初頭の土器である。1は平縁深鉢で、地文として単節LRとRLを羽状施文し、口縁下に2段、胴中に3段の還付末端を施す。2・5は地文として単節LRとRLを羽状施文している。2はさらに円形貼付文を付して平行沈線を施し、5は還付末端を1段施す。3・4は単節RLで羽状施文し、還付末端を施すものである。6は地文として単節LRを施す。7は口頸部に貝殻背圧痕、胴部に単節RLを施文する。8も同様の構成となる。9は貝殻背圧痕を地文とする。10・11は底部で、ともに顕著な上げ底となる。10は推定底径10.3cm、遺存高2.7cmで、地文は単節LRである。11は推定底径9.3cm、遺存高4.7cmで、地文として単節RL(0段多条)を底部外面まで施している。

石器を含めたほとんどの資料が床面直上または覆土下層から出土しており、関山Ⅱ式期末から黒浜式初頭が本跡の帰属時期であろう。

SI-111 (32) SI-005 (第23図、図版6・40)

S17-89に位置する。D地区の南西にあたり、台地西縁に面している。西側が調査区外となるため一部を検出できなかった。長軸4.90m、短軸は推定4.00mの楕円形を呈し、確認面からの深さは、0.30mである。覆土は上層から褐色土、暗褐色土、明褐色土が水平に堆積していた。中央部に規模が0.73m×0.59m、床面からの深さが0.13mの窪みを検出した。焼土などは認められなかったが、炬と考えられる。ピットは3基検出され、いずれも炬から等距離に位置する。深さはP1が0.30m、P2は0.49m、P3は0.33mを測る。

出土遺物は少なく、土器片1点を図示した。このほか図示しなかったが剥片1点が出土している。

図示したのは深鉢の胴部片で、地文として単節LRを施文する。黒浜式土器である。

本跡は遺構確認面からの掘り込みが深いにも関わらず、遺物の出土量は僅少で、いずれも覆土中から出

土したものであった。図示した黒浜式土器は、埋没過程における流入と解釈され、遺構の時期決定の資料にするのは難しい。

SI-112 (32) SI-004 (第23図、図版6)

T18-07に位置する。遺構上部を削平され、また、東側を掘削により失っている。炉と柱穴と推定されるピット5基を検出したため、直径4m前後の円形ないしは楕円形を呈する堅穴住居と推定した。炉は攪乱により半分を失っており、確認できる長径は0.58mである。柱穴は炉を円形に囲むように位置し、床面からの深さは0.12m～0.48mの間に分布する。

掘り込みがないため出土した遺物はなく、遺構の時期の確定は難しい。

SI-113 (9) SI-001 (第24図、図版6・40)

台地西縁のT18-13・23に位置する。長軸5.05m、短軸3.40mの楕円形を呈し、長軸方向が南北を向く。確認面からの深さは0.11mで、覆土は上層に暗褐色土、壁際から下層にロームブロックを含む暗黄褐色土が堆積していた。ピットは6基検出され、長軸方向に3基ずつ2列に並ぶ。直径はいずれも0.30m前後、深さはP2が0.80m、残りの5基は0.14m～0.18mに収束する。炉は検出されなかったが、短軸上の西寄りに位置するP5周辺の覆土中にわずかながら焼土粒子の混入が見られたことからP5が炉であった可能性も考えられる。

土器は5点を図示した。いずれも黒浜式土器である。1は平縁深鉢の口縁部で、地文として摺糸Lを施す。2は深鉢の胴部片で、地文として摺糸Lと付加条縄文(軸無節R、L2条付加)で羽状施文する。3～5は地文縄文を施文した胴部片で、使用原体は3が単節RL(0段多条)、4は単節RL、5は無節Rである。

以上の土器群は、2層中ないし2層下部より出土している。図示した土器資料の時期である黒浜式期が本跡の帰属時期であろう。

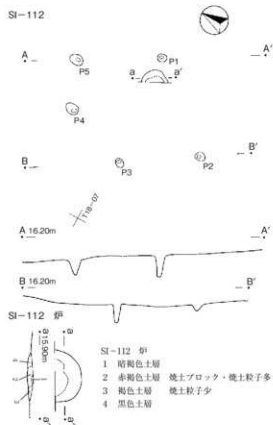
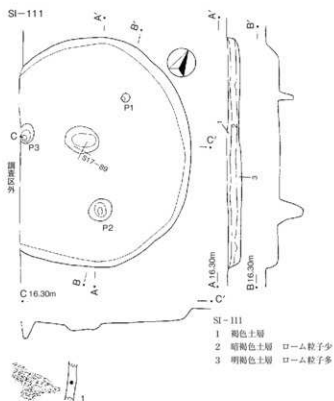
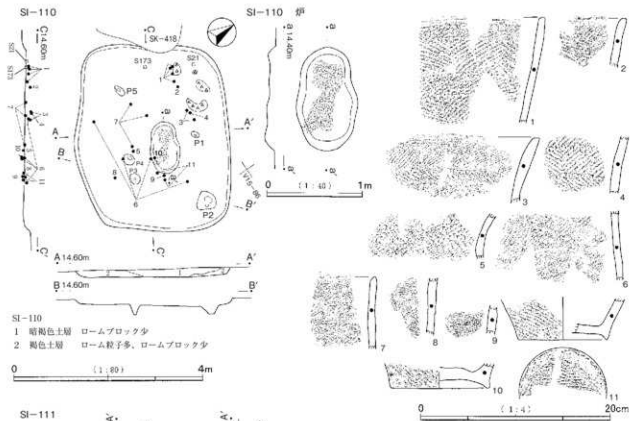
SI-114 (2) SI-001・(32) SI-006 (第24図、図版7・34・40)

U17-69・V17-60に位置する。D地区の南端にあたる。2回にわたって調査が行われたこと、攪乱が広範囲に広がることから、壁の立ち上がり明瞭でない部分もあるが、平面形は長軸4.94m、短軸が推定で4.20mの隅丸方形を呈すと思われる。確認面からの深さは最も深い中央部で0.42mを測る。覆土上層はローム粒子・ロームブロックを多量に含んだ黒褐色土で埋め戻し土の可能性もある。また下層にはローム粒子を多量に含んだ暗褐色土、壁際には暗褐色土が堆積していた。炉は中央に設けられ、規模は0.62m×0.52mを測る。柱穴と考えられるピットは5基検出した。床面からの深さは0.19m～0.56mとばらつきがある。P1～P3が炉を含めて長軸上に並んでいる。

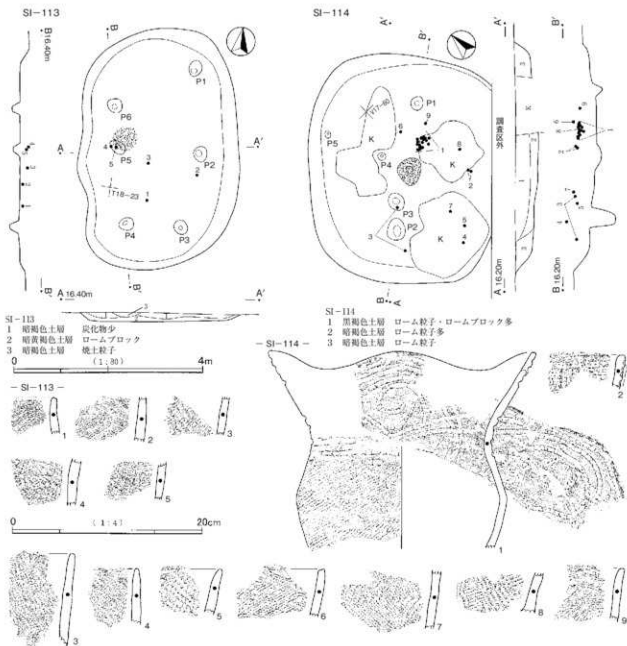
土器のほかに、遺存状態が悪く図示しなかったが、楔形石器2点、剥片4点を出土した。

土器は9点を図示した。1は有尾系土器である。住居中央部の覆土中から出土した。推定口径28.0cm、遺存高20.4cmを測る。4単位の水波縁深鉢で、口頸部に爪形文を描線として崩れた菱形文を描き、意匠内に渦巻文の装飾を施す。頸部のくびれ部にあたる施文域の下端を複列の爪形文で区画し、胴部には地文として無節Lを施す。

2～9は黒浜式土器である。2は深鉢の口縁部片で、口縁下に横位の隆線を貼付後、縦位の隆線を2条付し、しかる後に横位の爪形文を充填する。3～9は地文縄文を施文したもので、使用原体は3～5が単節RL、6～9は羽状施文で、6は摺糸R、7は付加条縄文(軸不明、L1条付加)、8は単節RL、9は摺



第23図 SI-110、SI-111、SI-112



第24図 SI-113、SI-114

糸LとRでそれぞれ施文している。

土器のほとんどが覆土2層上面から出土している。本跡は廃絶後、間を置かず埋め戻しを行ったと考えられ、これらの資料は1層の土砂を投棄する直前に遺棄されたものである可能性が高い。図示した土器資料の時期である黒浜式期が本跡の帰属時期であろう。

SI-116 (50) SI-001 (第25図、図版7・34・40)

D地区のもっとも南のT18-98に位置する。B地区・C地区の境目付近に当たる。北隅を攪乱によって壊される。長軸は5.55m、短軸は4.25mの隅丸方形を呈し、長軸は東西を向いている。確認面からの深さは0.10mで、上層に暗褐色土、壁際から下層にローム粒子を多量に含む明褐色土が堆積していた。床面は

しまりがない。炉は中央西寄りから検出された。住居の長軸方向と同じ東西が長軸となる楕円形を呈し、規模は0.62m×0.40mである。北西寄りが強く熱を受けていた。柱穴と考えられるピットは7基検出した。P4が中央に位置するほかは壁に沿って配置されている。確認面からの深さはP1が0.18mと浅く、P3が0.76mと深い。これ以外は深さ0.29m～0.41mである。

貝ブロックを2か所検出した。東側のブロックはP3上にある。ウミナツメタガイからなる(第5表)。

土器片25点を図示した。いずれも黒浜式土器である。1は波状縁深鉢で、地文縄文RL施文後、平行沈線を引き、円形刺突を充填する。2は胴中位付近の破片で、地文縄文RL施文後、竹管を用いた刺突文を2列巡らす。3は平縁深鉢で、細めの竹管の内側を用いた平行沈線を描線として、かなり崩れた木葉文ないし肋骨文を施す。4は地文縄文の無節Lを施文後、沈線で意匠を施すが、小破片のため意匠は不明である。5も同様に意匠を特定できない。6～25は地文縄文のみを施したものを中心とする。使用原体は6が無節L、7・10・19は単節LR、20～23が単節RL、18は単節LRとRLで羽状施文する。21は地文施文後に竹管で円文を施す。8・9・11・12は還付末端を施す。13～15・17は付加糸縄文で、13が軸不明、L1条付加。17は軸不明、L2条付加。14が軸不明、R2条付加。15は軸不明、L1条付加と軸不明、R2条付加で羽状施文するものである。23～25は底部で、23は遺存高5.2cm、底径8.0cmを測る。上げ底で、地文縄文単節RLを施す。24は遺存高6.4cm、推定底径8.1cmを測る。底径は小さめで、やや極端な上げ底を呈し、地文縄文単節RLを施す。25は遺存高6.4cm、推定底径8.4cmを測る。底面の大半を欠くため、平底か否かは不明である。地文は付加糸縄文(軸不明、L1条付加)と撚糸Lで羽状施文する。

以上の土器群は、いずれも覆土中から出土したものであるが、他の時期の土器片の混入がないため、本跡の帰属時期は黒浜式期であると考えられる。

SI-117 (37) SI-004 (第25図、図版7)

U18-37に位置する。床面に及ぶ削平と耕作により、壁の立ち上がりは遺存しておらず、炉と柱穴と考えられるピット14基を検出したため、堅穴住居が存在したと判断した。柱穴の配置から堅穴住居の平面形は7.00m×5.50mの楕円形を呈したと推定される。炉の規模は0.78m×0.67mを測る。ピットの床面からの深さは、東側のP3が0.62m、P8が0.10mであった以外は0.21m～0.43mの間に収束する。

覆土が遺存しなかったため、出土した遺物はなく、時期の確定は難しい。

SI-118 (32) SI-008 (第26図、図版7・40)

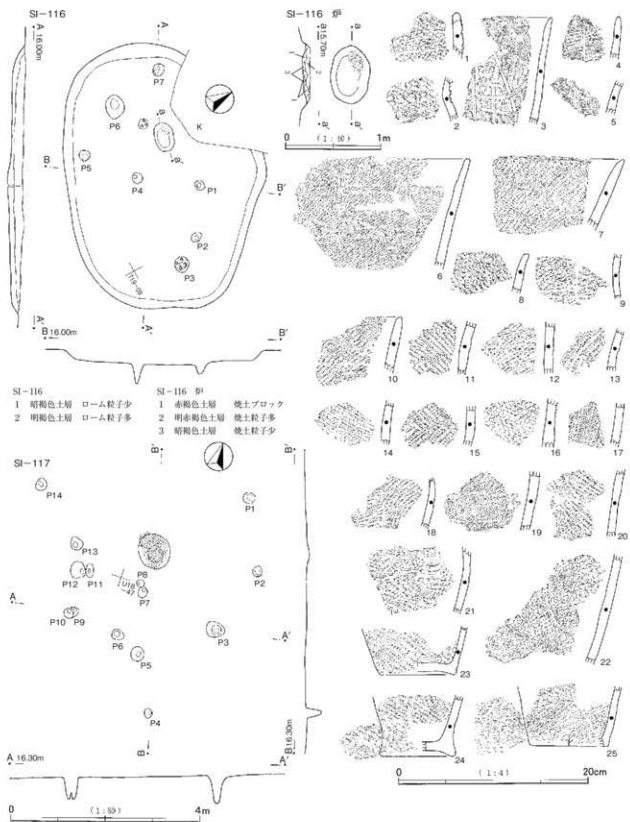
V18-04付近に位置する。南西側が近世の溝状遺構(32)SD-004に接し、北東は調査区外にかかるため、調査できたのはその間の5.20m×1.50mの範囲で、全体の1/4程度である。平面形は楕円形を呈すと推定され、確認面からの深さは0.27mである。柱穴と考えられるピットを3基検出した。遺存する西壁に沿って並んでおり、床面からの深さは0.42m～0.46mとほぼ均一である。炉は検出されなかった。

遺存部分が少ないため、出土した遺物は少ない。

土器4点を図示した。1・2は黒浜式土器である。ともに地文縄文を施した胴部片で、使用原体は1が単節LR、2は単節RLである。

3・4は諸磯a式土器である。3は浅鉢の胴部片で、地文縄文単節RL(直前段多条)を施文後、竹管による平行沈線を施す。4は地文縄文単節RL(0段多条)を施した胴部片である。

土器群はいずれも覆土中から出土したもので、点数も少ないため堅穴住居の帰属時期決定の資料とするのは難しいが、諸磯a式期の頃には埋没が完了していたと解釈できよう。



第25図 SI-116、SI-117

SI-119 (32) SI-009 (第26図、図版7・8・40)

V18-14付近、縄文時代前期の堅穴住居SI-118の南側に位置する。東側は駒形遺跡との境である。遺構中央を近世の溝(32)SD-004が南北にはしる。また南隅付近に縄文時代の土坑SK-162がわずかに重複しているが新旧関係は不明である。4.29m×3.17mの隅丸長方形を呈し、確認面からの深さは0.26mを測る。覆土は上層に暗褐色土、壁際から下層にローム粒子を多量に含む明褐色土が堆積していた。溝状遺構に壊された可能性も考えられるが炉は検出されなかった。検出されたピットのうち、P1とP2は本跡のものと考えられる。床面からの深さは0.19m・0.18mを測る。P2・P4は深さがそれぞれ0.59m・0.72mであるが、形状と深さが(32)SD-004のものと同様など本跡に属すると断定できない。東隅覆土中に貝の投棄が見られ、規模は長軸1.50m、短軸は最大で0.70mのブロックを形成している。床面からは0.10m浮いている。ハマグリを主体とし、サルボオ・マガキ・アサリなども混入していた(第4表)。出土遺物も貝ブロック周辺に集中して見られた。

溝に壊されていることもあり出土遺物は少なく、近世の砥石なども混入していた。図示できた土器は2点であった。土器のほかに石鎌未成品1点、覆土上層から石核1点(第75図200)を出土した。

図示できた土器2点は、どちらも黒浜式土器である。1は地文縄文単節LRを施した後、爪形文を施す。2は底部の破片で、遺存高3.2cm、推定底径8.4cmを測る。上げ底で、地文縄文単節LRを施す。

土器群はいずれも覆土中から出土したもので、点数も少ないため、時期決定の資料とするのは難しいが、ほかの時期の土器片の混入がないため、黒浜式期が本跡の帰属時期であった可能性が高い。

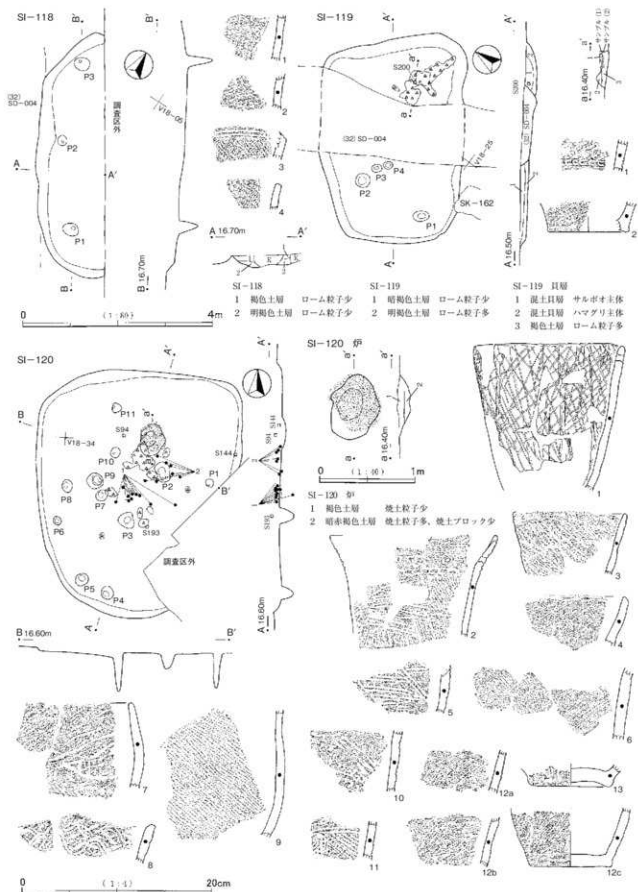
SI-120 (32) SI-010・(37) SI-002 (第26図、図版8・34・40)

V18-34付近に位置する。南東側の一部は調査区外であったため、調査できなかった。また、調査区境界を挟んで2次にわたって調査が行われたため、遺構の輪郭が明瞭でない部分もあるが、平面形は長軸5.49m、短軸は推定で3.76mの隅丸方形を呈すと思われる。確認面からの深さは0.16mである。床面は凹凸があるが、よく踏み固められている。長軸線上の北寄りに炉を検出した。0.71m×0.53mの楕円形である。柱穴と思われるピットは11基検出された。遺構の形状に沿って位置するものと、炉周辺に位置するものがある。床面からの深さが0.68m～0.84mのP1・P7・P9・P10は炉周辺に分布し、遺構の形状に沿ったP4～P6・P8・P11は0.14m～0.48mを測る。

炉周辺の床面から浮いた状態の貝ブロックを検出した。マガキを主体とし、ハマグリ・サルボオからなる(第4表)。

確認面から浅かったが遺物を多数出土した。貝ブロックとともに炉南側を中心にまとまっていた。土器のほかに土製円板2点(第64図11・12)、磨製石斧3点、側面調整礫2点などを出土し、石器類は楔形石器(第66図94)、磨製石斧(第69図144)、側面調整礫(第74図193)を図示した。

図示した13点の土器は黒浜式土器である。1は推定口径15.4cm、遺存高15.5cmの平縁深鉢で、一本描き(単沈線)による格子目文化した肋骨文を施す。口縁下に補修孔が認められる。2は推定口径17.3cm、遺存高10.7cmの波状縁深鉢で、口頸部に爪形文を3列施文し、胴部以下には平行沈線を描線として意匠を施す。やはり口縁下に補修孔が認められる。3は推定口径12.1cm、遺存高6.5cmの平縁深鉢で、木葉文の類を施文する。4は口縁部片でやはり木葉文を施す。5・6は肋骨文を施文した胴部片である。7は平縁深鉢で、地文として付加条縄文(軸不明。R1条付加)を施す。8は地文縄文の単節LRを施した後、平行沈線を描線として波状文を描いている。9は地文縄文の単節RLを施した胴部片である。10は爪形文と平行



第26図 SI-118、SI-119、SI-120

沈線で意匠を施している。11は地文縄文の単節RLを施文後、爪形文で意匠を描く。12は地文として貝殻腹縁文を施文した貝殻文土器で、推定底径8.6cm、遺存高6.3cmを測る。13は底部で、推定底径8.6cm、遺存高2.3cmを測る。上げ底を呈し、竹管による平行沈線を施す。

以上の土器群の出土状態から、床面付近から出土した1・2の時期である黒浜式期が本跡の帰属時期であると考えられる。

SI-121 (37) SI-001 (第27図、図版8・34・41)

V18-66付近に位置する。D地区の南東端にあたる。北東側約1/3は調査区外となるため調査できなかった。長軸5.40m、短軸は2.64mの範囲までを検出し、隅丸方形を呈すると推定される。確認面からの深さは0.20mを測る。長軸線上の北寄りに炉を検出した。規模は1.15m×0.80mで、楕円形を呈し、長軸は住居の長軸方向と一致する。壁に沿って配置されたピット5基は柱穴と考えられる。ピットの床面からの深さは、0.11m～0.76mの間に分布する。

遺構中央部に貝ブロックを検出した。床面から堆積しており、中央部分は純貝層であった。住居の廃絶からあまり間をおかずに投棄されたと考えられる。サルボオ・ハマグリ・マガキからなり、サルボオを主体とする(第4表)。

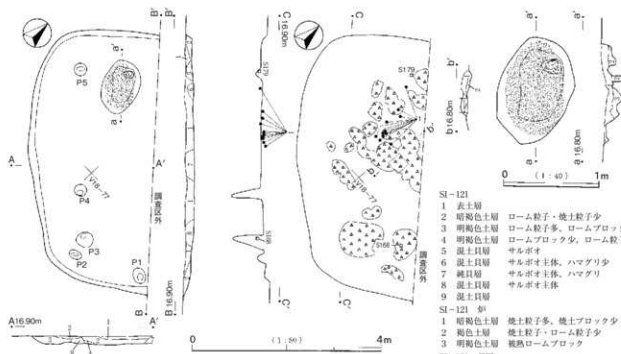
土器のほかには敲石(第71図168)、石皿(第73図179)、剥片類を出土した。

土器は15点を図示し、いずれも黒浜式土器である。1は推定口径29.0cm、遺存高25.3cmの平縁深鉢で、地文として撚糸LとRで羽状施文する。口縁下に2個一対の補修孔を穿つ。2は推定口径21.0cm、遺存高20.4cmを測る。頸部がくびれる平縁深鉢で、地文として付加条縄文(軸不明、L1条付加と軸不明、R1条付加)で羽状施文する。3～5・12・13は肋骨文を施文したもので、3・13は竹管による平行沈線を描線とし、その他は一本描き(単沈線)による。13は胴下半から底部までが残存し、推定底径8.0cm、遺存高12.0cmを測る。底面の大半を欠くため、上げ底か否かは不明である。10は平縁深鉢の口縁片で、竹管による押引文を施す。6・11は地文縄文のみを施したもので、使用原体は6が単節LR、11は単節RLとなる。7～9はいずれも有文で、地文には付加条縄文(軸不明、R1条付加)を施文する。7は平縁深鉢で、口縁直下に爪形文を単列、その下に大振りなボタン状の突起を付す。8は竹管で山形文を描き、9は平行沈線を描線として意匠を描く。14・15は胴下半部から底部である。14は推定底径9.0cm、遺存高8.2cmで、地文として付加条縄文(軸不明、R1条付加)を施す。15は推定底径7.0cm、遺存高7.2cmで、地文として単節RLを施文する。底面は比較的平坦である。

床面付近から出土した1の時期である黒浜式期が本跡の帰属時期であろう。貝類の投棄も、まだ床面が埋まらない時期に行われたものであろう。土器類の投棄との先後関係は不明であるが、時間差は僅少であったと思われる。

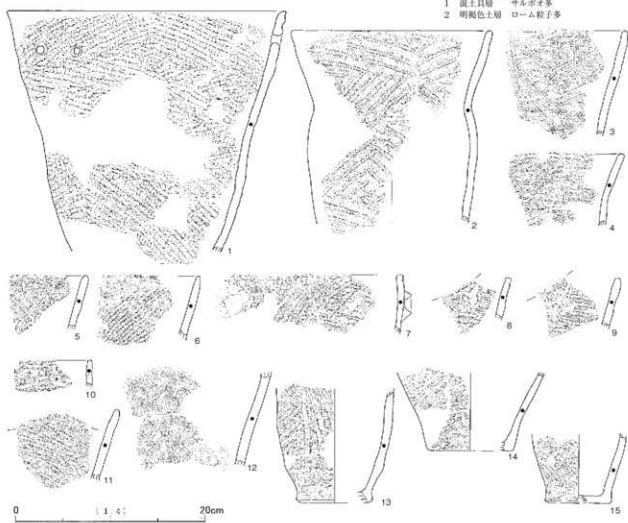
SI-122 (37) SI-003 (第28図、図版9)

V18-75付近に位置する。D地区の南端にあたる。規模は小さく3.33m×3.53mの円形を呈する。確認面からの深さは0.06mで浅く、覆土はほとんど遺存していなかった。北西寄りに炉を検出した。規模0.75m×0.51mの楕円形である。炉の東側の床面に焼土ブロックが0.70m×0.60mの範囲で分布していた。焼土下に掘り込みは確認できなかったが、床面の凹凸が著しかった。また焼土ブロックとP3の間に0.60m×0.50mの範囲の硬化面を検出した。柱穴と考えられるピットは壁際から4基検出された。炉を中心とする対角線上に配置されている。床面からの深さは、東側のP2・P3が0.05m・0.08m、西側のP1・P4が



- SI-121
- 1 表土層
 - 2 暗褐色土層
 - 3 明褐色土層
 - 4 明褐色土層
 - 5 混土貝層
 - 6 混土貝層
 - 7 純貝層
 - 8 混土貝層
 - 9 混土貝層
- SI-121 少
- 1 暗褐色土層
 - 2 褐色土層
 - 3 明褐色土層
- SI-121 貝層
- 1 混土貝層
 - 2 明褐色土層

ローム粒子・焼土粒子少
 ローム粒子多、ロームブロック少
 ローム粒子多、ロームブロック少
 ロームブロック少、ローム粒子多
 サルゴオ
 サルゴオ主体、ハマグリ少
 サルゴオ主体、ハマグリ
 サルゴオ主体
 焼土粒子多、焼土ブロック少
 焼土粒子・ローム粒子少
 焼熱ロームブロック
 サルゴオ
 ローム粒子多



第27図 SI-121

0.31m・0.22mである。

覆土が遺存しなかったため、出土遺物は少なく、図示できる遺物はなかった。時期の確定は難しい。

SI-123 (23) SI-012 (第28図、図版9・41)

台地先端部の西側、U11-38・39に位置する。E地区に含まれる。南西側に縄文時代の竪穴住居SI-124がある。形状は楕円形で、長軸が東西方向に向き、規模は長軸4.75m、短軸3.96m、深さ0.28mである。上層に褐色土、下層にロームブロックを含む暗褐色土、床面近くにロームブロックを多量に含む暗黄褐色土が堆積していた。炬はなく、柱穴と考えられるピットが6基検出された。P1・P2・P4・P6は壁際に対角線上に配置されている。深さは、P1が0.50m、P2が0.39m、P3が0.40m、P4が0.38m、P5が0.34m、P6が0.42mである。

出土した遺物は少ない。土器のほか床面から石鏝1点(第65図22)、二次加工ある剥片1点、剥片類3点を出土した。

図示できた土器は3点で、3点とも貝殻で土器の表裏面を調整した貝殻条痕文系の胴部片である。鵜ガ島台式になろう。

本跡の帰属時期は鵜ガ島台式期になろう。

SI-124 (23) SI-008 (第28図、図版9・41)

台地先端部の西端、U11-47に位置する。北西隅が調査区外となるため調査できなかった。北東側にSI-123、南西側にSI-126がある。どちらも縄文時代早期の竪穴住居である可能性が高い。平面形は隅丸方形に近い形態で、長軸が東西方向に向いていた。規模は長軸が6.06m遺存し、短軸は5.67m、深さは0.17mだった。覆土上層は焼土粒子・炭化粒子を含む黒褐色土、中層にはロームブロックを多量に含む褐色土、壁際から床面上にかけてロームブロックを多量に含む暗黄褐色土が堆積していた。炬はなく、柱穴と考えられるピットが10基検出され、P4・P8が中央に、それ以外は壁に沿って配置されている。柱穴の深さは、P6が0.27mで浅く、P9が0.61mで深い。これ以外は0.35m～51.6mである。

出土した遺物は少なく、土器片4点を図示した。土器の1は単節RLを施文した夏島式、2・3は早期条痕文系の鵜ガ島台式、4は半載竹管による平行沈線が施文された浮島式の土器片だった。

本跡の時期は鵜ガ島台式期であろう。

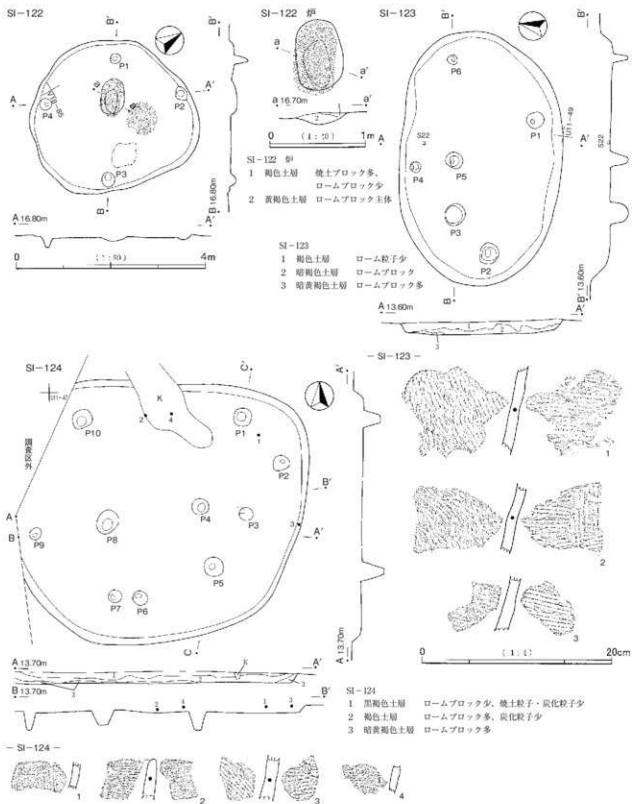
SI-125 (23) SI-010 (第29図、図版9・41)

E地区にあたる台地先端部のV11-50・51に位置する。先端部にまとまって検出された縄文時代の竪穴住居群の中央にある。形状は隅丸方形で、長軸が北西から南東の方向に向く。規模は長軸3.66m、短軸3.10m、深さ0.19mで、覆土は上層に焼土粒子・炭化粒子を含む黒褐色土、中層にロームブロックを含む暗褐色土、床面上にロームブロックを少量含む暗黄褐色土が堆積していた。炬はなく、北西寄りに柱穴と考えられるピットが1基検出され、深さは0.39mだった。

出土した遺物はあまり多くはない。住居周縁部を中心に土器と礫が出土した。

図示した土器は5点である。1・2は五領ヶ台式である。1は口縁部で、内湾する口縁部下に横位の沈線を巡らせ、その下に縄文を施文する。胎土には長石粒子、雲母粒子が含まれている。2は単節の縄文が施文されている。

3は鵜ガ島台式の土器片、4は黒浜式の口縁部で口縁端下部に半載竹管による爪形文を巡らせ、その下に縄文と円形刺突文を縦位に施文する。5は浮島式土器で、平行沈線文が不規則に施される。



第28図 SI-122、SI-123、SI-124

本跡は下層から出土した1・2の土器の時期から五領ヶ台式期の竪穴住居であった可能性が考えられる。

SI-126 (23) SI-009 (第29図、図版9)

台地先端部の南西、U11-66・67に位置する。北側に縄文時代早期の竪穴住居SI-124、東側には時期が確定できないがやはり縄文時代の竪穴住居SI-127がある。調査区端にあたるために西壁を検出できなかったが、形状は楕円形で、長軸が東西方向に向く。規模は遺存する長軸長が3.69m、短軸長3.66m、深さ0.19mで、覆土上層に黒褐色土、下層に暗黄褐色土が堆積していた。炉はなく、柱穴と考えられるピット3基が検出された。深さは、北東隅から南西隅を結んだ軸上に位置するP1が深さ0.51m、P2が0.50mでいずれもしっかりとした掘り込みである。P3が深さ0.36mでやや浅いものであった。

出土した遺物はなかったが、覆土の状態から縄文時代早期に帰属する可能性が高い。

SI-127 (23) SI-005 (第29図、図版9・41)

台地先端部の南西側、U11-68・78に位置する。西側にSI-126、東側にSI-128がある。どちらも縄文時代早期の竪穴住居と考えられる。形状は円形で、規模は長軸3.98m、短軸3.70m、深さ0.21mである。覆土は上層中央に褐色土、壁際に暗黄褐色土、下層に暗褐色土が堆積していた。炉はなく、長軸上に柱穴と考えられるピットが3基検出された。深さは、P1が0.43m、P2が0.55m、P3が0.40mである。

出土した遺物は少ない。

土器3点を図示した。1は口縁部で、口縁部の上下端を横位の原体側面圧痕で区画し、その間に鋸歯文、下部には横位の連続刺突文を施文する。胎土に長石粒子、雲母粒子を含む。大木6式土器である。2も口縁部で、細沈線で意匠を描き、貝殻腹線文を充填する。早期沈線文系の三戸式土器である。3は地文縄文単節RLを施文した前期末葉の粗製土器である。

いずれも覆土中から出土した破片で、時期決定の資料とするのは難しい。

SI-128 (23) SI-004 (第29図、図版10・41)

台地先端部の南側中央、V11-70・71に位置する。南側は調査区外であったため未調査である。西側にSI-127、北側にSI-125がある。どちらも縄文時代の竪穴住居である。形状は楕円形で、規模は長軸の遺存長3.94m、短軸4.30m、深さ0.21mである。炉はなく、柱穴と考えられるピット3基が住居の平面形に沿うように検出された。柱穴の深さは、P1が0.33m、P2が0.40m、P3が0.47mだった。

覆土中から出土した土器7点を図示した。1～3は条痕文系の縄ガ島台式～茅山下層式の土器片である。4～7は撚糸文系の夏島式で、4は撚糸Lを施文し、他は単節RLを施す。

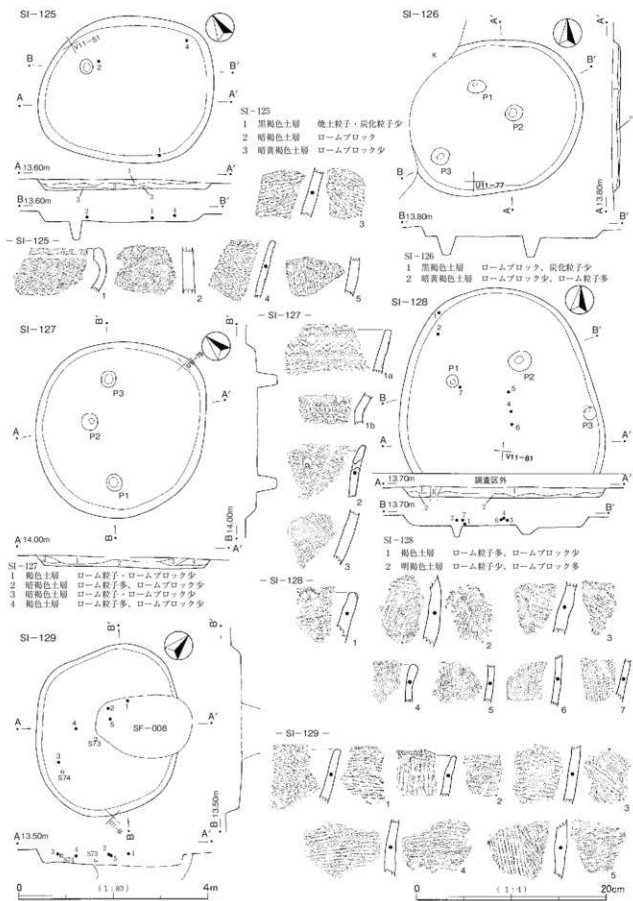
縄ガ島台式～茅山下層式の竪穴住居の可能性が考えられる。

SI-129 (23) SI-003 (第29図、図版10・41)

台地先端部の東側、V11-53・63に位置する。北東側が炉穴SF-008、南東側が縄文時代の竪穴住居SI-130と重複していた。新旧関係は炉穴SF-008の方が本跡より新しく、竪穴住居SI-130が古い。また縄文時代の土坑SK-187・SK-188とも重複するが新旧関係は不明である。形状は楕円形で、規模は長軸3.50m、短軸3.08m、深さ0.28mだった。炉および柱穴はなかった。

土器のほかに石織未成品2点(第66図73・74)を出土した。

図示した土器片5点は全て条痕文系である。このうち、1・2・5は重複していた炉穴SF-008出土遺物である可能性が高い。1は外面に縄文、内面に貝殻条痕を施した茅山下層式土器である。



第29図 SI-125～SI-129

SI-130 (23) SI-011 (第30図、図版10・34・42)

台地先端部の南東側、V11-63・64に位置する。北西側が縄文時代の竪穴住居SI-129とわずかに重複し、SI-129が新しい。形状は不整楕円形で、規模は長軸4.12m、短軸3.53m、深さ0.25mだった。炉および柱穴はなかった。

覆土中から出土した土器2点を図示した。1は条痕文系土器、2は田戸下層式の尖底部である。

SI-132 (23) SI-001 (第30図、図版10・42)

東側のX15-43・53に位置する。北東側は北から入り込む谷に面している。南西側に縄文時代後期の竪穴住居SI-133がある。形状は不整楕円形で、長軸は北東から南西の方向を向いている。規模は長軸4.12m、短軸3.68m、深さ0.19mだった。炉はなく、柱穴と考えられるビット6基が検出された。深さは、P1が0.26m、P2が0.68m、P3が0.29m、P4が0.52m、P5が0.32m、P6が0.44mであった。もっとも深いP2が中央に位置し、それ以外は平面形に沿って配置されている。

覆土中から土器と石器類が出土し、石器は磨製石斧1点(第69図145)を図示した。

土器は16点を図示した。1~10、15・16は黒浜式の土器片である。1はルーブ文を施し、2~9は地文縄文のみを施す。10は単節LRとルーブ文を施文後、羽状縄文に半截竹管による横位の爪形文を施文する。

11~14は称名寺Ⅱ式土器である。11は沈線で意匠を描き刺突文を充填する。

主体となるのは黒浜式土器であり、称名寺Ⅱ式土器は隣接するSI-133からの混入品と考えられる。

SI-133 (23) SI-002 (第30図、図版10・42)

東側のX15-51・52に位置する。南半分は調査区外で未調査である。北東側に縄文時代前期の竪穴住居SI-132がある。長軸は北東から南西の方向を向いている。規模は確認できた長軸長が1.98m、短軸4.06m、深さ0.13mだった。中央に炉があり、やはり北半部しか調査できなかったが、長軸0.64mの瓢箪型をしていた。柱穴と考えられるビット4基が検出された。深さは、P1が0.60m、P2が0.26m、P3が0.66m、P4が0.52mで、北壁に沿って配置される。

覆土中から土器と石器類が出土した。石器は磨石類1点(第70図158)、石皿1点(第73図180)を図示した。

土器は4点を図示した。いずれも称名寺Ⅱ式土器である。2には沈線で意匠を描き、刺突文を充填する。3は沈線で意匠を描くが、刺突文などの充填は行わない。4は格子文系粗製土器である。称名寺Ⅱ式期が本跡の帰属時期であろう。

2 炉穴

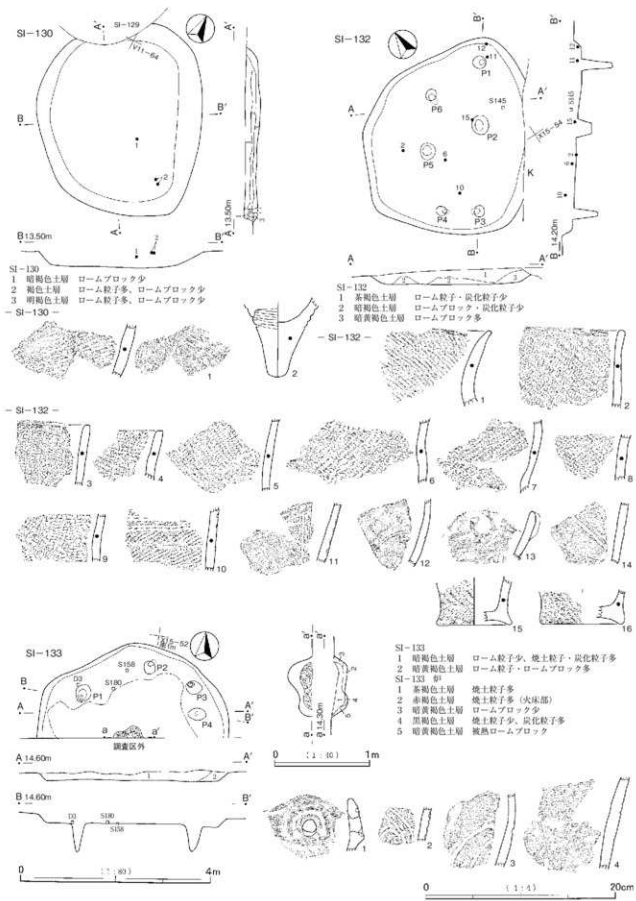
SF-001 (28) SK-003 (第31図、図版11)

D地区の北西側、台地辺縁部にあたるS14-11に位置する。南西側1.00mにSF-002があり、SF-001~SF-003の3基が斜面部に群をなしている。形状は楕円形で、規模は長軸1.38m、短軸1.30m、深さ0.32mであった。北西側半分に焼けて赤化した炉部が見受けられた。

遺物は出土しなかった。

SF-002 (28) SK-002 (第31図、図版11・42)

D地区の北西側、台地辺縁部S14-20に位置する。北東側1.0mにSF-001、南西側1.0mにSF-003がある。北側の不整円形と南側の楕円形の2基の炉穴からなる。規模は北側が長軸0.75m、短軸0.70m、深さ0.15m、南側が長軸1.55m、短軸0.70m、深さ0.42mであった。南側の長軸は斜面に直交する。焼けて赤化した炉部がそれぞれに1か所ずつ見受けられた。



第30図 SI-130、SI-132、SI-133

少量の土器が南側の炉穴から出土した。図示した1～4は、条痕文系の鶴ガ島台式～茅山下層式土器に位置づけられるものであろう。

SF-003 (28) SK-001 (第31図、図版11)

D地区の北西側、台地辺縁部のS14-20に位置する。北西部分が削平されていた。北東側1.0mに炉穴SF-002がある。焼けて赤化した炉部が4か所見受けられ、4基以上が重複していた炉穴群と考えられ、複雑な形状をしていた。遺存部分での規模は長軸1.52m、短軸0.70m、深さ0.24mであった。

遺物は出土しなかった。

SF-004 (47) SX-001 (第31図、図版11)

D地区の中央やや北側、T15-52に位置する。規模は長軸1.15m、短軸0.65m、深さ0.21mであった。西端が焼けて赤化した炉部である。

遺物は出土しなかった。

SF-005 (9) SF-001 (第31図、図版11)

D地区の南西側、R17-89・99に位置する。台地西縁にあたる。形状は楕円形で、規模は長軸1.30m、短軸1.16m、深さ0.31mであった。底面の中央やや北東側に焼けて赤化した炉部が見受けられた。

遺物は出土しなかった。

SF-006、SK-176 (23) SF-002・SK-003、SK-037 (第31図、図版11)

E地区の中央やや北側、V11-23に位置する。周辺の10m～15m四方に炉穴SF-005・SF-008が検出されている。炉穴と土坑が重複しており、西側が炉穴SF-006、東側が縄文時代の土坑SK-176である。新旧関係は不明だが出土遺物からほとんど時期差がないものと考えられる。SF-006の規模は長軸1.26m、短軸1.26m、深さ0.45mで、底面西側に焼けて赤化した炉部が見受けられた。SK-176の規模は長軸0.96m以上、短軸1.55m、深さ0.31mであった。

SF-006から出土した遺物はなく、SK-176から出土した石鎌1点(第65図26)と土器4点を図示した。1～4は条痕文系土器の茅山下層式土器であろう。1は角鉢の底部から胴下半部である。平底の底部は隅丸長方形を呈する。希少な例である。

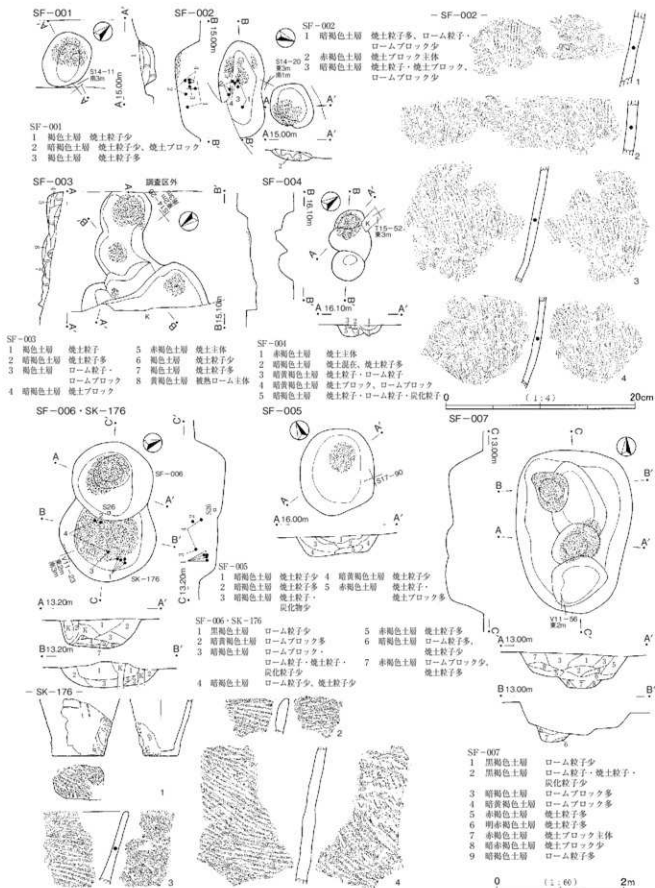
SF-007 (23) SF-001 (第31図、図版11)

E地区の中央やや北東側、V11-46に位置する。形状は不整楕円形で、規模は長軸2.59m、短軸1.81m、深さ0.55mである。長軸が南北を向いている。底面に4基のピットが重複しており、このうち2基の底面が焼けて赤化した炉部となっている。2基以上の炉穴が重複していたと考えられる。

出土した遺物はわずかで、図示できるものはなかったが、条痕文系の土器片を含んでいた。

SF-008 (23) SF-005 (第32図、図版10・42)

E地区の中央、V11-53に位置する。規模は長軸2.59m、短軸1.81m、深さ0.55mであった。縄文時代の堅穴住居SI-129の床面を切って構築している。平面形は楕円形で、足場部は外側へ突出している。天井部と煙道部が良好な形で遺存していた。規模は長軸2.08m、短軸1.41m、深さ1.10mであった。炉部は底面南側に位置し、よく焼けて赤化しており、その上を覆う形で天井部が存在する。煙道部は南端中央やや東寄りに設けられている。覆土はローム粒子、ロームブロック、焼土粒子を含んだ明褐色土・暗褐色土を主体としており、足場側から流れ込むように堆積している。炉部手前の底面に堆積した11層はロームブロックを主体としており、崩落した天井部の一部であろう。



第31図 埴穴(1)

少量の遺物が出土し、土器片3点を図示した。1～3は条痕文系土器の茅山下層式に位置づけられる。1は5層下部を中心に出土しており、本跡の帰属時期を示すものである。SI-129出土とした土器の一部は本跡に帰属する可能性がある。

SF-009 (23) SF-003・004 (第32図、図版11)

E地区の南東端、X15-32・42に位置する。駒形遺跡との境界にあたり、東から南側が駒形遺跡である。楕円形の炉穴2基の足場を重複させ、90°向きを変えて構築されているが、新旧関係は不明である。規模は南北方向の炉穴が長軸2.0m、短軸1.59m、深さ0.35m、東西方向のものが長軸1.60m、短軸1.30m、深さは0.24mであった。それぞれの底面の南端と西端に焼けて赤化した炉部が見受けられ、斜面の低い側を足場としている。

出土した遺物はなかった。

3 陥穴

SK-101 (32) SK-005 (第32図、図版11)

D地区の中央やや北側、U15-71・81に位置する陥穴である。形状は楕円形で、長軸を東西に向ける。規模は長軸3.32m、短軸2.35m、深さ2.08mであった。底面は平坦で、壁は中位で屈曲し、広がって立ち上がる。底面の長軸線上には棒杭を立てたと思われる小ピットが2基検出された。

少量の遺物が出土したが図示できる遺物はなかった。

SK-102 (23) SK-006 (第32図、図版11・42)

E地区最北端の台地先端、V9-57に位置する陥穴である。形状は楕円形で、長軸は南北を向き、等高線に直交する。規模は長軸1.86m、短軸0.90m、深さ1.88mであった。平坦な底面で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。暗褐色土が堆積し、中位以下にはロームブロックが多量に混入していた。

縄文土器片3点を出土したが混入品であろう。

4 土坑

SK-103 (44) SK-004 (第33図、図版11・42)

D地区の北西側、S13-97・98に位置する。形状は楕円形で、長軸2.11m、短軸1.54m、深さ0.68mであった。底面は平坦で、壁面はやや傾斜する。

少量の遺物が出土した。図示できたのは土器1点で、沈線文を施した黒浜式土器である。

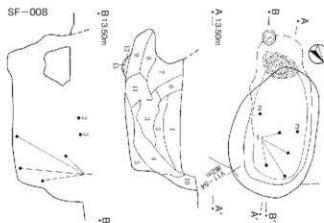
SK-104 (44) SK-005 (第33図、図版2・34)

D地区の北側、T13-34に位置する。縄文時代前期の堅穴住居SI-082の南壁付近で検出された。SI-082を壊して構築している。形状は楕円形で、長軸1.01m、短軸0.96m、深さ0.25mであった。底面は平坦で、壁面はやや傾斜する。北壁付近に縄文土器が伏せた状態で検出された。土器の出土状況から土坑墓であったと考えられる。

図示した土器は、完形品に近い深鉢形土器で、口径25.1cm、高さ30.1cm、底径12.2cmであった。口縁下部に半截竹管による押引文が横位に4段施文され、蛇行気味に縦位の平行沈線を垂下する。五領ヶ台式土器である。

SK-105 (44) SK-003 (第33図、図版11)

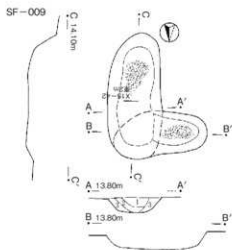
D地区の北西側、T13-61・71に位置する。南側に縄文時代の土坑であるSK-106とSK-107があり、土坑3基は群をなしている。形状は楕円形で、長軸2.81m、短軸1.63m、深さ0.17mで浅く、ローム粒子



SF-008

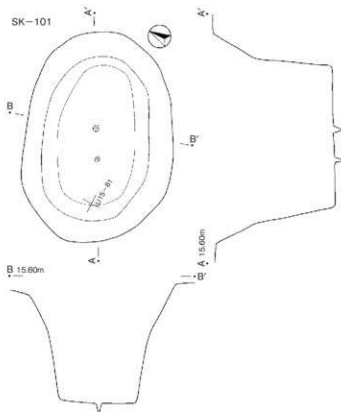
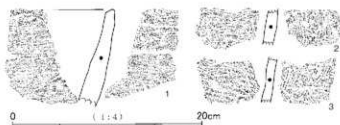
- 1 暗褐色土層 ローム粒子
- 2 明褐色土層 ロームブロック少、ローム粒子多
- 3 暗褐色土層 ロームブロック・ローム粒子少
- 4 褐色土層 ロームブロック・ローム粒子多
- 5 暗褐色土層 ローム粒子・焼土ブロック少
- 6 明褐色土層 ローム粒子主体
- 7 明褐色土層 ローム粒子主体、ロームブロック少

- 8 暗褐色土層 ローム粒子少
- 9 明褐色土層 焼土ブロック少
- 10 褐色土層 ローム粒子多、焼土ブロック少
- 11 明褐色土層 ロームブロック主体
- 12 暗赤褐色土層 焼土ブロック、炭化物少
- 13 褐色土層 焼土粒子少

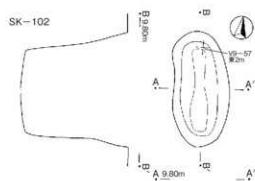


SF-009

- 1 暗褐色土層 ローム粒子、焼土粒子少
- 2 暗褐色土層 ロームブロック・焼土粒子少
- 3 暗褐色土層 ロームブロック多



SK-101



SK-102

- 1 暗褐色土層 炭化粒子多
- 2 暗褐色土層 ローム粒子多、焼土粒子・炭化粒子少
- 3 暗褐色土層 ローム粒子多、炭化粒子少
- 4 暗褐色土層 ロームブロック少
- 5 暗褐色土層 ロームブロック多
- 6 暗褐色土層 ロームブロック多



0 (1:40) 2m

第32図 炉穴(2)、陥穴

を多量に含む褐色土が堆積していた。底面はほぼ平坦で、壁面は傾斜している。

少量の遺物が出土したが図示できる遺物はなかった。

SK-106 (44) SK-001 (第33図、図版11・42)

D地区の北西側、T13-70・80に位置する。東側にSK-107、北側にSK-105があり、縄文時代の土坑3基が群をなしている。形状は円形で、長軸1.15m、短軸1.10m、深さ0.36mであった。壁際にローム粒子を多量に含む明褐色土、中央に暗褐色土が堆積していた。底面はほぼ平坦で、壁面はやや傾斜する。覆土1層中に少量であるが貝が混入していた。ハマグリを主体とし、サルボオ・アサリを含む(第4表)。

少量の遺物が出土し、土器1点を図示した。単節RLを施した黒浜式土器の胴部である。

SK-107 (44) SK-002 (第33図、図版11)

D地区の北西側、T13-71・81に位置する。西側にSK-106、北側にSK-105があり、縄文時代の土坑3基が群をなしている。形状は楕円形で、長軸1.70m、短軸0.96m、深さ0.31mであった。上層から暗褐色土、褐色土、明褐色土が堆積し、下層ほどローム粒子混入の割合が多くなる。底面は平坦で、壁面は傾斜している。

少量の遺物が出土したが図示できる遺物はなかった。

SK-108 (28) SK-006 (第33図、図版11)

D地区の北西側、台地縁辺のR14-86に位置する。東側にSK-109、SK-110があり、縄文時代の土坑3基が群をなしている。いずれも小型の楕円形で浅く、底面が平坦で、被熱痕跡がある点が共通するが、炉穴ではないと考えられた。本跡は、長軸0.90m、短軸0.60m、深さ0.12mである。

出土した遺物はなかった。

SK-109 (28) SK-004 (第33図、図版11)

D地区の北西側、台地縁辺のR14-96に位置する。南側にSK-110、SK-108があり、縄文時代の土坑3基が群をなしている。形状は円形で、長軸0.45m、短軸0.45m、深さ0.15mであった。底面の一部が焼けていた。

出土した遺物はなかった。

SK-110 (28) SK-005 (第33図、図版12)

D地区の北西側、台地縁辺のR14-96に位置する。北側にSK-109、西側にSK-108があり、縄文時代の土坑3基が群をなしている。形状は円形で、長軸0.68m、短軸0.65m、深さ0.14mであった。底面は焼けていた。

出土した遺物はなかった。

SK-111 (45) SK-008 (第33図、図版12・43)

D地区の北西側、R14-89、S14-80に位置する。南側にSK-112、南東側にSK-113があり、縄文時代の土坑3基が群をなしている。形状は楕円形で、長軸1.04m、短軸0.96m、深さ0.24mであった。底面は平坦だった。

少量の遺物が出土し、土器3点を図示した。1は地文縄文を施した黒浜式、2は半截竹管による横位の爪形文を重畳施文した諸磯b式、3は称名寺式の格子文系粗製土器である。いずれも小破片で、本跡の時期決定の資料とするのは難しい。

SK-112 (45) SK-007 (第33図、図版12・42)

D地区の北西側、R14-89、S14-80に位置する。北側にSK-111、北東側にSK-113があり、3基の縄文時代の土坑が群をなしている。形状はほぼ円形で、長軸1.61m、短軸1.38m、深さ0.17mであった。壁際に明褐色土、中央に褐色土が堆積していた。底面は平坦だった。

少量の遺物が出土し、土器2点を図示した。1は単節RLを施した諸磯a式土器、2は波状貝殻文を施した浮島Ⅱ式ないしⅢ式土器であろう。

SK-113 (45) SK-009 (第33図、図版12・43)

D地区の北西側、S14-80に位置する。北西側にSK-111、南西側にSK-112があり、3基の縄文時代の土坑が群をなしている。また東側に縄文時代前期の竪穴住居SI-085が隣接していた。形状は円形で、長軸0.82m、短軸0.81m、深さ0.26mであった。底面はほぼ平坦だった。

少量の遺物が出土し、いずれも破片ではあるが、土器5点を図示した。1は波状緑深鉢の口縁部で、波頂部に円孔が穿たれ、それをほさむ形で盲孔を穿ち、C字状沈線を施す。2は把手で波頂部と波底部に盲孔を穿つ。4は意匠内に細い平行沈線状の条線を充填する。5は小形深鉢の底部と思われる。

出土した1～5の土器は称名寺Ⅱ式土器で、浮島Ⅰa式土器を主体とするSI-085の方が古い。

SK-114 (47) SK-001 (第33図、図版3・12・43)

D地区の中央西側、S15-38・48に位置する。北東側に土坑SK-115、西側に竪穴住居SI-088がある。どちらも縄文時代に属する。形状は楕円形で、長軸1.49m、短軸1.26m、深さ0.23mであった。上層に暗褐色土、壁際から下層に暗黄褐色土が堆積していた。底面はほぼ平坦だった。

小破片のため図示できなかった土器片1点と上層から磨石類1点(第71図159)を出土した。

SK-115 (47) SK-002 (第34図、図版12・43)

D地区の中央西側、S15-38・39に位置する。南西側に縄文時代の土坑SK-114がある。北西部は調査区外になり、未掘である。また、東側は攪乱されて原形をとどめていなかった。推定される形状は楕円形で、遺存部分で、長軸2.63m、短軸1.55m、深さ1.04mであった。西から東へ階段状に掘り込まれ、西壁は緩い傾斜となっている。

覆土中から少量の遺物が出土し、土器5点と石鏝未成品1点(第66図75)を図示した。土器の1は口縁部で、口縁下部に円形竹管による刺突文を重畳施した黒浜式土器である。2は捺糸Lを施した捺糸文系の夏島式土器である。3～5は条痕文系の子母口式土器の可能性はある。

いずれも覆土中からの出土品で、本跡の帰属時期決定の資料とするのは難しい。

SK-117 (45) SK-006 (第34図、図版12・43)

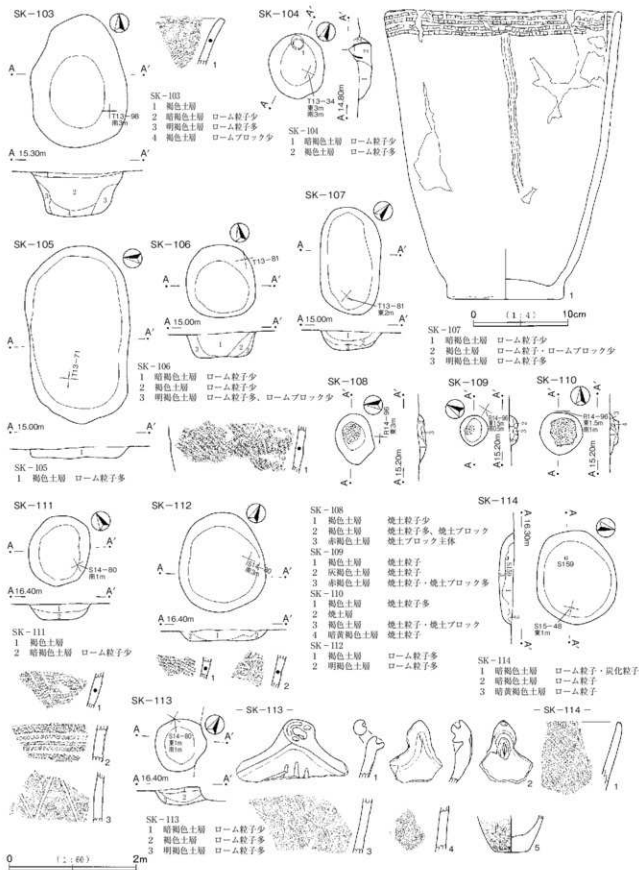
D地区の中央西側、S15-87に位置する。形状は円形で、長軸1.00m、短軸0.89m、深さ0.45mであった。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は暗褐色土を主体とし、壁際と下層に明褐色土が堆積する。

少量の遺物が出土し、土器1点を図示した。条痕文系の野島式土器と思われる。

SK-118 (47) SK-004 (第34図、図版12・43)

D地区の中央西側、S15-98に位置する。形状は不整楕円形で、長軸1.95m、短軸1.50m、深さ0.35mであった。底面にやや凹凸がある。

少量の遺物が出土し、土器片2点を図示した。1は条痕文系の野島式土器、2は胎土中に繊維を含み、



第33図 縄文時代土坑(1)

地文として羽状縄文を施した黒浜式土器である。

SK-119 (47) SK-005 (第34図、図版12)

D地区の中央、T15-46に位置する。西側の一部が攪乱によって破壊されていた。形状は不整形で、長軸1.10m、短軸1.02m、深さ0.55mであった。平坦な底面で、壁面は垂直に立ち上がる。

出土した遺物はなかった。

SK-120 (47) SK-003 (第34図、図版12・43)

D地区の中央、T15-69に位置する。形状は不整形で、長軸0.94m、短軸0.79m、深さ0.39mであった。底面にやや凹凸があり、壁面は傾斜していた。

少量の遺物が出土し、土器1点を図示した。口縁部の破片で、条痕文系の子母口式～野島式土器であろう。

SK-121 (32) SK-044 (第34図、図版5)

D地区の中央、U15-50に位置する。縄文時代の竪穴住居SI-102の床面南側から検出された。竪穴住居との新旧関係は明らかにできなかった。形状は不整形で、長軸1.61m、短軸1.50m、深さ0.21mである。底面は平坦ではなく、緩やかな傾斜で立ち上がる浅い土坑である。

遺物は出土しなかった。

SK-122 (32) SK-004 (第34図、図版12・43)

D地区の中央、U15-43・53に位置する。形状は不整形で、長軸3.54m、短軸2.95m、深さ0.32mであった。ほぼ平坦な底面だった。

少量の遺物が出土し、石鎌1点(第65図23)と土器2点を図示した。1は縄文単節RLが施された加曾利E式土器、2は条痕文系の子母口式～野島式土器であろう。

SK-123 (41) SK-015 (第34図、図版12・34)

D地区の西端、台地縁部のR16-26に位置する。形状は円形で、長軸0.86m、短軸0.72m、深さ0.34mであった。

覆土中から出土した土器2点を図示した。どちらも胴下半部から底部で、1は底径11.1cmで、内外面とも器面調整のみを施す。2は底径8.8cmであった。2にはやや疎らに縦位の結節縄文を施す。1、2ともに五領ヶ台式土器である。

SK-124 (41) SK-013 (第35図、図版12)

D地区の西端、台地縁部のR16-17・18に位置する。東側にSI-095、南側にSI-097がある。どちらも縄文時代前期の竪穴住居である。形状は楕円形で、長軸1.65m、短軸0.89m、深さ0.50mであった。

少量の遺物が出土したが、図示できる遺物はなかった。

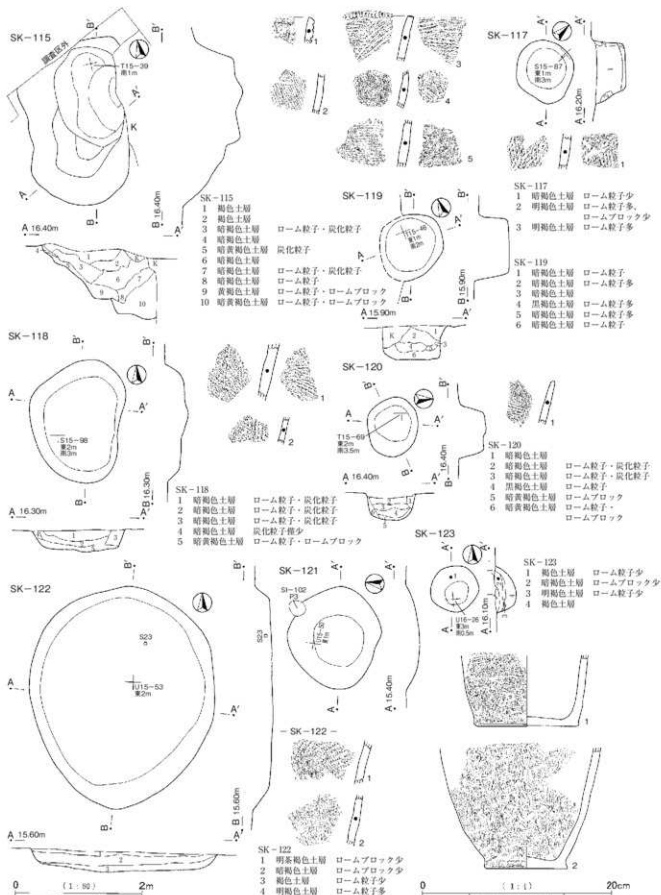
SK-125 (41) SK-007 (第35図、図版13)

D地区の西端、台地縁部のR16-29に位置する。北側にSI-095、西側にSI-097がある。どちらも縄文時代前期の竪穴住居である。形状は円形で、長軸0.86m、短軸0.78m、深さ0.24mであった。平坦な底面で、壁が垂直に立ち上がる。

少量の遺物が出土したが、図示できる遺物はなかった。

SK-126 (41) SK-006 (第35図、図版4・43)

D地区の西端、台地縁部のR16-47に位置する。SI-096の南西壁で検出され、縄文時代前期の竪穴住



第34図 縄文時代土坑(2)

居であるSI-096を壊して構築していると考えられる。形状は不整形で、長軸1.12m、短軸1.04m、深さ0.45mであった。1・2層に暗褐色土、3層に褐色土が水平に堆積していた。平坦な底面で、壁が垂直に立ち上がる。

少量の遺物が出土した。図示できたのは平行沈線文を施した黒浜式土器の胴部破片である。SI-096からの混入品の可能性がある。

SK-127 (41) SK-014 (第35図、図版12)

D地区の西端、台地縁道のR16-55・56に位置する。形状は円形で、長軸1.41m、短軸1.30m、深さ0.50mであった。底面に凹凸がある。

少量の遺物が出土したが、図示できる遺物はなかった。

SK-128 (41) SK-009 (第35図、図版13)

D地区の西端、台地縁道のR16-59・69に位置する。東側に縄文時代中期の土坑SK-141がある。形状は不整形円形で、長軸2.80m、短軸1.79m、深さ0.66mであった。底面も不整形で、凹凸があった。

少量の遺物が出土したが、図示できる遺物はなかった。

SK-129 (45) SK-005 (第35図、図版12・43)

D地区の中央西側、S16-07・08に位置する。北東端は調査区外となり、未調査である。南側にSK-130、SK-132、SK-133といずれも縄文時代の土坑が所在する。形状は不整形円形で、長軸3.99m、短軸2.16m、深さ0.35mであった。底面は平坦ではなく、浅いピットが検出された。

少量の遺物が出土し、土器4点を図示した。1～3は黒浜式土器である。1は付加条縄文(軸不明。R1条付加)、3は単節LR、2は不規則に沈線を施す。4は条痕文系の子母口式～野島式土器になろうか。

SK-130 (45) SK-004 (第35図、図版12・43)

D地区の中央西側、S16-17に位置する。北側にSK-129、南西側にSK-132・SK-133、南東側にSK-134といずれも縄文時代の土坑が位置している。形状は不整形円形で、長軸0.75m、短軸0.57m、深さ0.39mであった。

少量の遺物が出土し、土器1点を図示した。条痕文系の土器片で、胎土中の繊維の含有量は比較的小さい。内外面とも擦痕に近い調整を施す。子母口式土器であろう。

SK-131 (45) SK-001 (第35図、図版13・43)

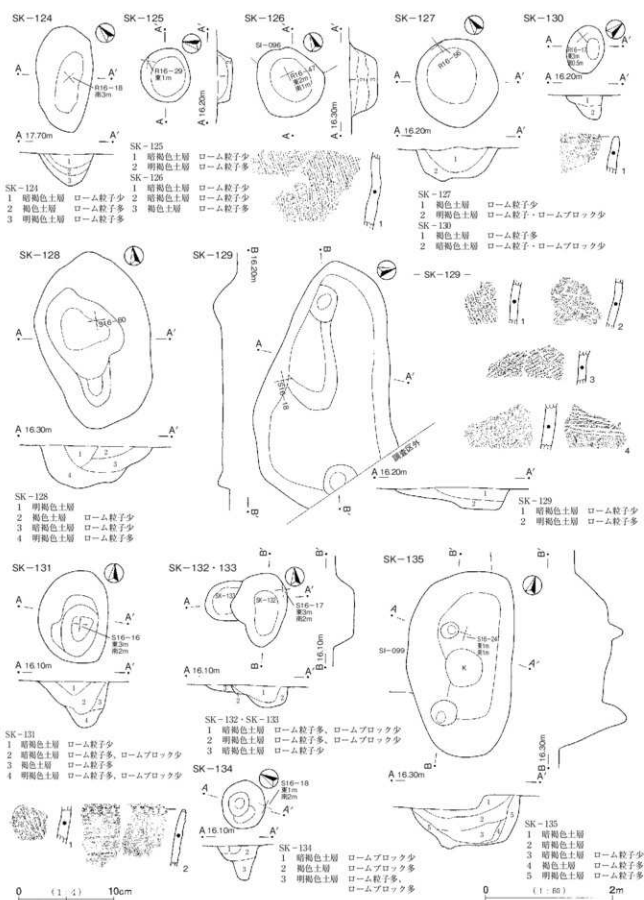
D地区の中央西側、S16-16に位置する。北側に縄文時代前期の竪穴住居SI-093、東側に縄文時代の土坑SK-132・SK-133がある。形状は不整形円形で、長軸1.49m、短軸1.10m、深さ0.72mであった。底面も不整形であった。

少量の遺物が出土し、土器2点を図示した。1は条痕文系の子母口式～野島式土器になろうか。2は早期の条痕文系の土器片で、胎土中の繊維の含有量は少ない。内外面とも擦痕に近い調整を施し、口唇上にキザミ、口縁下に3条の細降線を付す。条痕文系の子母口式土器(あるいは田戸上層式土器の終末か)である。

SK-132、SK-133 (45) SK-002 (第35図、図版13)

D地区の中央西側、S16-17に位置する。北にSK-130、東にSK-134、西にSK-131がある。いずれも縄文時代の土坑と考えられる。不整形円形の土坑が2基重複し、土層断面からSK-132が新しい。SK-132は長軸1.30m、短軸0.90m、深さ0.34m、SK-133は長軸0.45m、短軸0.65m、深さ0.10mであった。

少量の遺物が出土したが図示できるものはなかった。



第35図 縄文時代土坑(3)

SK-134 (45) SK-003 (第35図、図版13)

D地区の中央西側、S16-18に位置する。西側にSK-132・SK-133、北西側にSK-130、北側にSK-129がある。いずれも縄文時代の土坑である。小型の円形で、規模は長軸0.72m、短軸0.70m、深さ0.55mであった。

出土した遺物はなかった。

SK-135 (41) SK-001 (第35図、図版5)

D地区の中央西側、S16-24に位置する。縄文時代前期の竪穴住居SI-099の南東端と重複している。新旧関係は不明であったが、SI-099の土器の接合状況の検討から本跡が埋まってから竪穴住居が構築されたと考えられる。形状は不整楕円形で、長軸2.95m、短軸1.65m、深さ0.77mであった。平坦な底面に、2基の小ピットが縦列していた。中央のピットはSI-099の柱穴と判断した。

少量の遺物が出土したが、図示できる遺物はなかった。

SK-136 (41) SK-004 (第36図、図版13・43)

D地区の中央西側、S16-39に位置する。南東側に縄文時代の土坑SK-137が並んでいる。形状はほぼ円形で、長軸1.18m、短軸0.99m、深さ0.78mであった。平坦な底面で、壁がほぼ垂直に立ち上がる。下層にローム粒子・ロームブロックを多量に含む明褐色土が水平に堆積していた。

少量の遺物が出土し、土器1点を図示した。1は口縁部片で、附加条縄文(軸不明。L1条付加)を地文として施した黒浜式土器である。

SK-137 (41) SK-003 (第36図、図版13)

D地区の中央西側、S16-39に位置する。北西側に縄文時代の土坑SK-136がある。形状はほぼ円形で、長軸1.30m、短軸1.29m、深さ0.70mであった。やや傾斜した底面で、壁がほぼ垂直に立ち上がる。SK-136と同じように下層にローム粒子・ロームブロックを多量に含む明褐色土が水平に堆積していた。

少量の遺物が出土したが、図示できる遺物はなかった。

SK-138 (41) SK-002 (第36図、図版5)

D地区の中央西側、S16-49に位置する。縄文時代前期の竪穴住居SI-100の北東隅と重複していたが新旧関係は明らかにできなかった。形状は円形で、長軸0.92m、短軸0.90m、深さ0.35mであった。平坦な底面で、壁がほぼ垂直に立ち上がる。

少量の遺物が出土したが、図示できる遺物はなかった。

SK-139 (41) SK-010 (第36図、図版12・43)

D地区の中央西側、S16-54に位置する。南西側にSK-142・SK-143が並列している。どちらも縄文時代の土坑である。形状は不整楕円形で、長軸1.70m、短軸1.26m、深さ0.32mであった。底面北側に浅い小ピットがあった。壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土し、土器1点を図示した。1は波状口縁で、斜条線を施文後、口縁下部に半截竹管による爪形文を2段施した黒浜式土器である。胎土中に繊維を含む。

SK-140 (41) SK-005 (第36図、図版12)

D地区の中央西側、S16-57に位置する。東側に縄文時代前期の竪穴住居SI-100がある。形状は円形で、長軸1.25m、短軸1.21m、深さ0.53mであった。平坦な底面で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

少量の遺物が出土したが、図示できる遺物はなかった。

SK-141 (41) SK-008 (第36図、図版13・35)

D地区の西側、S16-50に位置する。西側に縄文時代の土坑SK-128がある。形状は楕円形で、長軸1.82m、短軸1.04m、深さ0.36mであった。底面は長軸方向である北西に向かって傾斜し、壁は斜めに立ち上がる。中央の窪みに焼土粒子を含む暗赤褐色土が堆積していた。北西端に1の深鉢が立てかけられるように出土し、堅穴住居の跡であった可能性が高い。

土器1点を図示した。底部を欠損する以外は遺存状態が良好で、口径22.4cm、現存する器高33.0cmである。被熱により内外面が荒れているほか、上半部にはススが附着する。口縁下部に刺突文の施された細い隆帯を巡らし、これをはさみ形でコンパス文を横位に施文する。五領ヶ台式土器である。

SK-142 (41) SK-011 (第36図、図版13・43)

D地区の西側、S16-53に位置する。南西側にSK-143が隣接し、北側にSK-139がある。どちらも縄文時代の土坑である。形状は不整楕円形で、長軸1.15m、短軸0.99m、深さ0.23mであった。平坦な底面で、壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土し、土器片1点を図示した。胴上半部の破片で、地文縄文として「正反の合」による羽状縄文を施文後、U字状文を描いて画線内を磨消す。加曾利EⅢ式土器の「横位連携弧線文土器」である。

SK-143 (41) SK-012 (第36図、図版13)

D地区の西側、S16-53に位置する。北東側に縄文時代の土坑SK-142が隣接する。形状は不整楕円形で、長軸1.60m、短軸1.11m、深さ0.23mであった。平坦な底面で、壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土したが、図示できる遺物はなかった。

SK-144 (32) SK-006 (第36図、図版13・43)

D地区の中央やや南西側、S17-52に位置する。南西側にSK-146、南側にSK-147があり、どちらも縄文時代の土坑である。形状は楕円形で、長軸3.18m、短軸2.52m、深さ0.40mであった。やや平坦な底面で、壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土した。図示できたのは土器1点である。口縁部片で、内外面とも器面調整のみを施す。縄文時代前期後半の所産と考えられる。

SK-145 (32) SK-009 (第36図、図版13)

D地区の中央やや南西側、S17-50に位置する。東側に縄文時代の土坑SK-146がある。形状は楕円形で、長軸1.38m、短軸1.00m、深さ0.22mであった。やや平坦な底面で、壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土したが図示できる遺物はなかった。

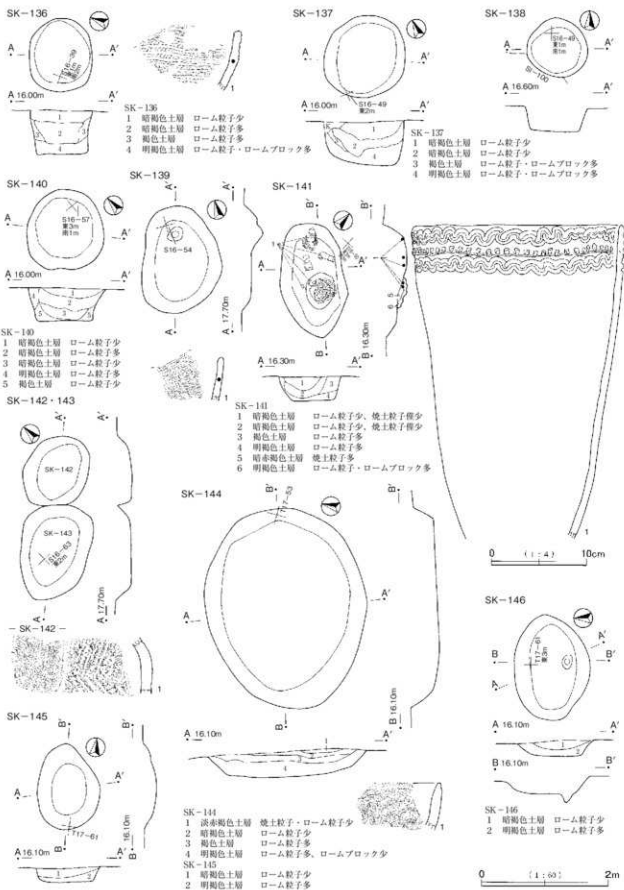
SK-146 (32) SK-008 (第36図、図版13)

D地区の中央やや南西側、S17-61に位置する。西側にSK-145、東側にSK-147がある。どちらも縄文時代の土坑である。形状は楕円形で、長軸1.69m、短軸1.21m、深さ0.25mであった。やや平坦な底面で、壁は斜めに立ち上がる。底面の南側に小ピットが1基あった。

少量の遺物が出土したが図示できる遺物はなかった。

SK-147 (32) SK-007 (第37図、図版13)

D地区の中央やや南西側、S17-42に位置する。西側にSK-146、北側にSK-144土坑がある。どちらも縄文時代の土坑である。形状は楕円形で、長軸1.31m、短軸1.19m、深さ0.35mであった。やや傾斜し



第36図 縄文時代土坑(4)

た底面で、壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土したが図示できる遺物はなかった。

SK-148 (26) SK-044 (第37図、図版13)

D地区の東端、V15-47に位置する。形状は不整楕円形で、長軸1.00m、短軸0.78m、深さ0.24mであった。南東隅に小ピットを検出した。

少量の遺物が出土したが図示できる遺物はなかった。

SK-149 (26) SK-055 (第37図)

D地区の東端、V15-88に位置する。形状は細長い楕円形で、長軸1.24m、短軸0.42m、深さ0.18mであった。南西端にピット1基を検出した。

図示できる遺物はなかったが、覆土中に黒浜式に比定できる土器片を含んでいた。

SK-150 (32) SK-013 (第37図、図版13)

D地区の南東側、V17-41・51に位置する。形状は不整楕円形で、長軸2.00m、短軸1.34m、深さ0.67mであった。西側の壁はほぼ垂直に立ち上がり、これ以外の壁は斜めに立ち上がる。

底部付近にローム粒子・ロームブロックを少量含む褐色土、壁際に明褐色土、上層から中層に暗褐色土・褐色土が堆積する。自然堆積であろう。

出土した遺物はなかった。

SK-151 (32) SK-010 (第37図、図版13)

D地区の南東側、V17-70に位置する。北側に縄文時代前期の竪穴住居SI-114がある。形状は楕円形で、長軸1.45m、短軸0.62m、深さ0.18mであった。平坦な底面で、北西の壁はほぼ垂直に、他の壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土したが図示できる遺物はなかった。

SK-152 (32) SK-011 (第37図、図版14)

D地区の南東側、V17-71に位置する。北東側に縄文時代の土坑SK-153がある。形状は不整円形で、長軸1.04m、短軸0.91m、深さ0.15mであった。平坦な底面で、底面の東側に小ピットがある。

出土した遺物はなかった。

SK-153 (32) SK-012 (第37図、図版14・34)

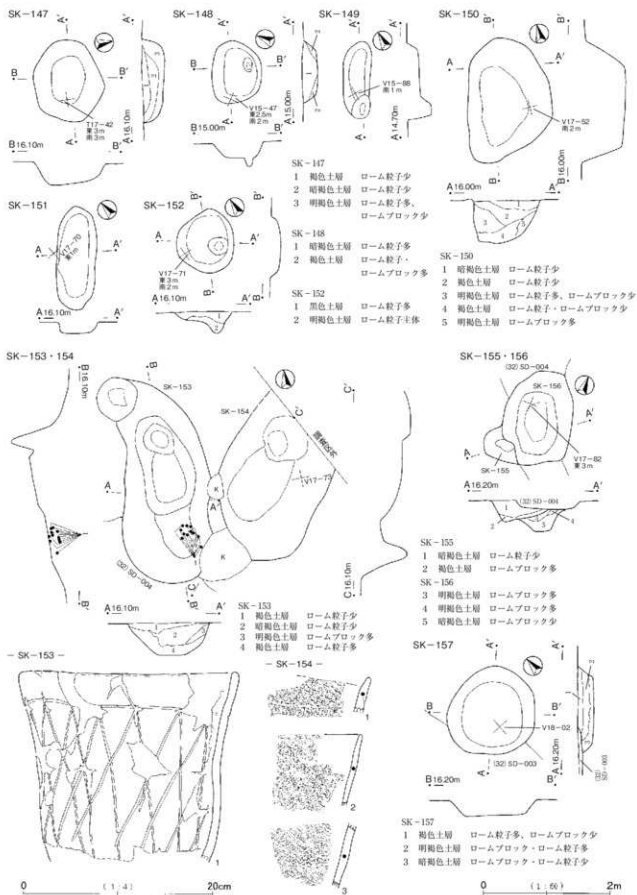
D地区の南東側、V17-62・72に位置する。南側は近世の溝(32)SD-004と重複する。また東側には縄文時代の土坑であるSK-154が隣接する。形状は不整楕円形で、長軸3.45m、短軸1.34m、深さ0.5mであった。底面は北に向かって傾斜し、小ピットが2基あった。壁は斜めに立ち上がる。

覆土4層下部を中心に、土器が出土し、1点を図示した。口径23.4cmの深鉢土器の上半部で、口縁下部から胴部にかけて、太い沈線で格子文を描く。称名寺Ⅱ式土器である。

SK-154 (32) SK-015 (第37図、図版14・43)

D地区の南東側、V17-62・72に位置する。西側に縄文時代の土坑SK-153が隣接する。東側は調査区外のため未調査で、駒形遺跡との境となる。形状は不整楕円形で、長軸2.05m以上、短軸1.66m、深さ0.64mであった。底面は北に向かって傾斜し、壁は斜めに立ち上がる。

土器は3点を図示した。黒浜式土器の破片である。1・2は口縁部で、地文として単節RLを施文する。3には付加条縄文(軸不明。R1条付加)が施文されていた。このほかに土器片1点(第64図4)を出土



第37図 縄文時代土坑(5)

した。

SK-155・SK-156 (32) SK-019 (第37図、図版31)

D地区の南東側、V17-82に位置する。東側に古墳時代前期の竪穴住居SI-115がある。2基の土坑が重複し、土層断面からSK-155の方が新しい。形状は楕円形で、SK-155は遺存する長軸0.50m、短軸0.55m、深さ0.35m、SK-156は長軸1.5m、短軸1.09m、深さ0.36mであった。

SK-156から石鏝1点を出土したが、破片のため図示しなかった。

SK-157 (32) SK-016 (第37図、図版31)

D地区の南東側、V17-92に位置する。西側は近世の溝(32)SD-003である。形状は円形で、長軸1.40m、短軸1.39m、深さ0.24mであった。平坦な底面で、壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土したが図示できる遺物はなかった。

SK-158 (32) SK-049 (第38図)

D地区の南東側、V18-02に位置する。北側にSK-157、北東側にSK-159がある。どちらも縄文時代の土坑である。南西側半分は調査区外のため未調査である。形状は楕円形で、長軸2.46m、短軸0.51m以上、深さ0.17mであった。底面は平坦で浅く、壁は斜めに立ち上がる。

出土した遺物はなかった。

SK-159 (32) SK-014 (第38図、図版14)

D地区の南東側、V18-02に位置する。南西側にSK-158がある。形状は楕円形で、長軸2.12m、短軸0.82m、深さ0.72mであった。底面は丸く、壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土したが図示できる遺物はなかった。

SK-160 (32) SK-018 (第38図)

D地区の南東側、V18-04に位置する。北東側に縄文時代の竪穴住居であるSI-118、南東側に縄文時代前期の竪穴住居SI-119がある。形状は楕円形で、長軸0.77m、短軸0.56m、深さ0.18mであった。平坦な底面で、壁は斜めに立ち上がる。底面の北端に浅い小ピットがあった。

出土した遺物はなかった。

SK-161 (32) SK-020 (第38図、図版14)

D地区の南東側、V18-13・23に位置する。東側にSI-119、南東側にSI-120がある。どちらも縄文時代前期の竪穴住居である。開口部の形状は不整楕円形で、底面は三角形である。長軸1.06m、短軸0.85m、深さ0.28mであった。やや凹凸のある底面で、壁は斜めに立ち上がる。底面の三角形の各角には小ピットがあった。

少量の遺物が出土したが図示できる遺物はなかった。

SK-162 (32) SK-017 (第38図、図版14・43)

D地区の南東側、V18-24に位置する。縄文時代前期の竪穴住居SI-119と南西端が重複していたが新旧関係は不明である。形状は不整楕円形で、長軸1.31m、短軸0.67m、深さ0.46mである。平坦な底面で、北壁はほぼ垂直に立ち上がるが、ほかは斜めに立ち上がる。北壁両端に小ピットを検出した。

少量の遺物が出土し、土器片1点を図示した。口縁部片で、口縁下部に半截竹管による爪形文が2段施文され、その下に入組文などを施す。諸磯a式土器である。

SK-163 (37) SK-003 (第38図、図版14・43)

D地区の南東側、V18-55に位置する。形状は楕円形で、長軸1.65m、短軸0.81m、深さ0.29mであった。平坦な底面で、壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土し、土器片3点を図示した。1・3には葉脈状文を描き、2は地文として単節RLを施す。いずれも黒浜式土器である。

SK-164 (37) SK-001 (第38図、図版14・43)

D地区の南東側、V18-85に位置する。北側に縄文時代の竪穴住居SI-122がある。形状は楕円形で、長軸2.76m、短軸1.52m、深さ0.34mであった。平坦な底面で、壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土し、土器片3点を図示した。1は突起を貼付した口縁で、口縁下部に平行沈線文を施文する。2も口縁部で、単節RLの縄文を施し、3は無節Rを施文する黒浜式土器である。

SK-165 (23) SK-004 (第38図、図版14)

E地区の北端、台地最先端の斜面にあたるV09-46に位置し、確認面の標高が9.7mである。富士見遺跡のもっとも北に位置する遺構である。南東側に陥穴SK-102が検出されている。形状は不整楕円形で、長軸2.42m、短軸1.95m、深さ0.56mであった。平坦な底面で、西壁と南壁下部に浅い溝、南西端に浅い小ピットがあった。

少量の遺物が出土したが図示できる遺物はなかった。

SK-166 (23) SK-005 (第38図、図版14・43)

E地区の北端、台地最先端の斜面にあたるV09-77に位置し、確認面の標高が10mほどである。東側に縄文時代の土坑であるSK-167・SK-168がある。形状は不整正方形で、長軸2.32m、短軸2.30m、深さ0.24mであった。平坦な底面で、壁は斜めに立ち上がる。1層と2層下部から遺物が出土した。

少量の遺物が出土した。1～3は内外面に貝殻条痕を施した、条痕文系の野鳥式土器である。4は縦位のルーズな結節縄文を施文した胴部片で、5の底部の底径は8.2cmであった。4・5ともに五領ヶ台式土器で、2層下部出土の4が本跡の帰属時期となろう。

SK-167 (23) SK-007 (第39図、図版14・43)

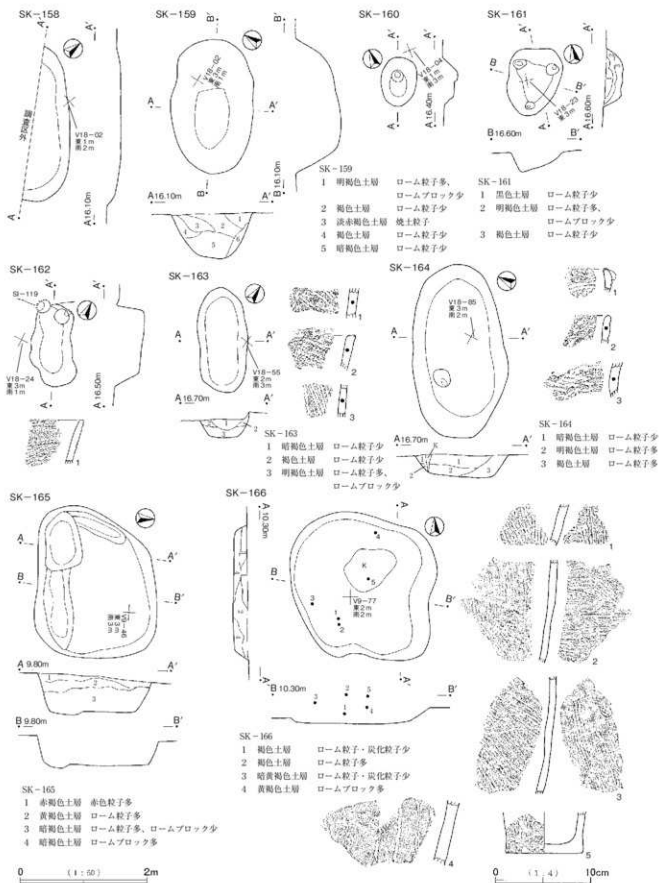
E地区の北端、台地最先端の斜面にあたるV09-68に位置する。確認面の標高が10.2mである。西側に縄文時代の土坑SK-166がある。形状は楕円形で、長軸1.56m、短軸1.32m、深さ0.44mであった。平坦な底面で、壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土し、2点を図示した。1は田戸下層式土器である。細沈線で区画した中に横位の刺突文を充填する。2は諸磯a式土器で、口縁下部に2段の爪形文が横位に施文されていた。

SK-168 (23) SK-008 (第39図、図版14・43)

E地区の北端、台地最先端の斜面部V09-78に位置する。西側にSK-166、北側にSK-167がある。どちらも縄文時代の土坑である。形状は楕円形で、長軸1.65m、短軸1.02m、深さ0.62mであった。底面西側は、一段低くなっていた。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は暗黄褐色土を主体とし、いずれにもローム粒子、ロームブロックなどを多量に含んでおり、埋戻しをしている可能性が高い。

少量の遺物が出土し、土器片6点を図示した。1は口縁部で、口縁下に盲孔を巡らす。2は地文縄文単節LRを施文後、蛇行する太い沈線文を施す。1・2ともに堀之内I式土器で、本跡の帰属時期を示すものである。3は半截竹管による変形爪形文を施文する。4は波状貝殻文を施す。3は浮島II式、4は浮島



第38図 縄文時代土坑(6)

Ⅲ式土器か。5・6は諸議a式土器であろう。

SK-169 (23) SK-018 (第39図、図版14)

E地区の北端、台地先端部のV10-16に位置する。もっとも近い縄文時代の土坑SK-166の南14mのところ
に単独で存在する。形状は楕円形で、長軸1.16m、短軸1.02m、深さ0.32mであった。平坦な底面で、壁
は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土したが図示できる遺物はなかった。

SK-170 (23) SK-033 (第39図、図版14・44)

E地区の西側、台地先端部のU11-28に位置する。南側に縄文時代早期の堅穴住居SI-123、東側に縄
文時代の土坑と考えられるSK-171がある。形状は長軸4.36m、短軸2.19m、深さ0.23mの楕円形で、規模
が大きい。平坦な底面で、壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土し、表裏に条痕がある土器片2点を図示した。2点とも鶴ガ島台式～茅山下層式土器
に位置づけられよう。2は床面近くから出土しており、出土土器は本跡の帰属時期を示すと考えられる。

SK-171 (23) SK-042 (第39図、図版14)

E地区の西側、台地先端部のU11-29に位置する。南側に縄文時代早期の堅穴住居SI-123、西側に縄
文時代の土坑と考えられるSK-170がある。形状は楕円形で、長軸2.70m、短軸1.37m、深さ0.45mであ
った。平坦な底面で、壁は傾斜して立ち上がる。

少量の遺物が出土したが図示できる遺物はなかった。

SK-172 (23) SK-031 (第39図、図版14)

E地区の西側、台地先端部のU11-48に位置する。北側にSI-123、西側にSI-124があり、どちらも縄
文時代早期の堅穴住居である。また南側に縄文時代の土坑SK-173がある。形状は不整楕円形で、長軸2.15
m、短軸1.78m、深さ0.26mであった。平坦な底面で、壁は傾斜して立ち上がる。

出土した遺物はなかった。

SK-173 (23) SK-030 (第39図、図版14)

E地区の西側、台地先端部のU11-48に位置する。西側に縄文時代早期の堅穴住居SI-124、北側にSK
-172、南東側にSK-174があり、土坑はどちらも縄文時代である。形状は不整楕円形で、長軸2.98m、短
軸1.61m、深さ0.23mであった。平坦な底面で、壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土したが図示できる遺物はなかった。

SK-174 (23) SK-041 (第40図、図版14・44)

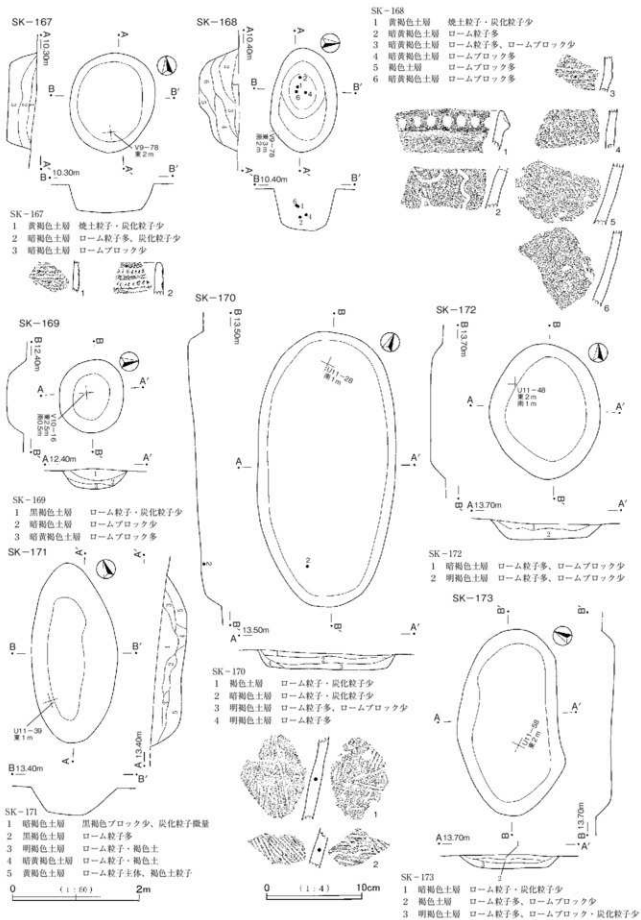
E地区の西側、台地先端部のU11-59に位置する。北西側にSK-173、北東側にSK-183、南東側にSK
-175とSK-190、南西側にSI-127がある。いずれも縄文時代の土坑と堅穴住居である。形状は不整楕円
形で、長軸2.09m、短軸1.51m、深さ0.46mであった。平坦な底面で、壁は斜めに立ち上がる。

覆土中から少量の遺物が出土し、土器片2点を図示した。1は夏島式土器で、単節LRを施文する。2
は条痕文を施したもので、茅山下層式土器に位置づけられよう。

覆土中から出土したもので、破片であるため土坑の時期決定の資料とするのは難しい。

SK-175 (23) SK-017 (第40図、図版15)

E地区の西側、台地先端部のU11-69に位置する。北東側にSK-190、南東側にSI-128、西側にSI-
127があり、いずれも縄文時代に帰属する遺構である。形状は円形で、長軸1.84m、短軸1.72m、深さ0.30



第39図 縄文時代土坑(7)

mであった。平坦な底面で、壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土したが図示できる遺物はなかった。

SK-177 (23) SK-038 (第40図、図版15・44)

E地区の北東側、台地先端部のV11-24に位置する。南側にSK-178、南東側にSK-179がある。どちらも縄文時代の土坑である。形状は楕円形で、長軸0.90m、短軸0.84m、深さ0.19mであった。平坦な底面で、壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土した。土器片1点を図示し、これは条痕文系の茅山下層式土器に位置づけられよう。

SK-178 (23) SK-035 (第40図、図版15・44)

E地区の北東側、台地先端部のV11-34に位置する。北側にSK-177、東側にSK-179、南西側にSK-181があり、いずれも縄文時代に帰属する遺構である。形状は隅丸長方形で、長軸2.76m、短軸2.09m、深さ0.32mであった。平坦な底面で、壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土し、土器3点を図示した。1は胴部片で、無節LとRで羽状縄文を施す。2は波状口縁で、口縁下に鐮状の隆線がまわる。ともに黒浜式土器である。3は捺糸文を施した胴部片で、浮島I a式であろう。

SK-179 (23) SK-034 (第40図、図版15)

E地区の北東側、台地先端部のV11-35に位置する。西側に縄文時代の土坑SK-178がある。形状は隅丸長方形で、長軸1.81m、短軸1.56m、深さ0.26mであった。平坦な底面で、壁は斜めに立ち上がる。

出土した遺物はなかった。

SK-180 (23) SK-015 (第40図、図版15・44)

E地区の北東側、台地先端部のV11-36に位置する。形状は不整楕円形で、長軸1.94m、短軸1.35m、深さ0.36mであった。平坦な底面の東側に小ピットが1基あった。壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土し、土器片2点を図示した。1は口縁部で、平行沈線文が横位に施文されていた。黒浜式土器である。2も口縁部で、口縁頂部には指頭による刺突文を施す。浮島式土器であろう。

SK-181 (23) SK-036 (第40図、図版15・44)

E地区の北東側、台地先端部のV11-33・34に位置する。北東側にSK-178、南側にSK-182があり、いずれも縄文時代に帰属する土坑と考えられる。形状は不整三角形で、長軸1.46m、短軸1.13m、深さ0.39mであった。平坦な底面で、壁は垂直に立ち上がる。

少量の遺物が出土した。図示できたのは土器片1点で、条痕文が施される。縄ガ島台式～茅山下層式土器である。

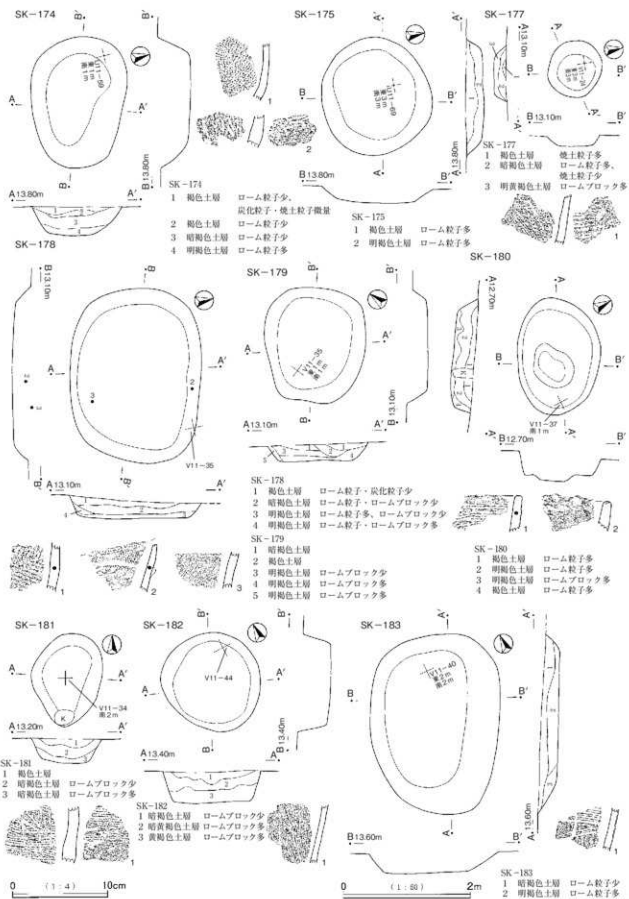
SK-182 (23) SK-009 (第40図、図版15・44)

E地区の中央付近、台地先端部のV11-43に位置する。北側にSK-181、南側にSK-185がある。どちらも縄文時代の土坑である。形状は円形で、長軸1.61m、短軸1.60m、深さ0.49mであった。平坦な底面で、壁は垂直に立ち上がる。覆土の1層は自然堆積土であるが、2・3層はロームブロックを多量に含む埋戻しである。

少量の遺物が出土し、土器片1点を図示した。沈線文が施文されている胴部片で、浮島式土器であろう。

SK-183 (23) SK-039 (第40図、図版15・44)

E地区の中央付近、台地先端部のV11-40に位置する。北側に縄文時代の土坑SK-184、南東側に縄文



第40図 縄文時代土坑(8)

時代中期の竪穴住居SI-125がある。形状は不整楕円形で、長軸2.82m、短軸2.00m、深さ0.28mであった。平坦な底面で、壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土した。図示した土器片1点は沈線文が施文された沈線文系の田戸下層式土器である。

SK-184 (23) SK-040 (第41図、図版15)

E地区の中央付近、台地先端部のV11-30・40に位置する。南西に縄文時代の土坑SK-183がある。形状は不整楕円形で、長軸3.65m、短軸3.19m、深さ0.31mであった。平坦な底面で、壁は斜めに立ち上がる。覆土にローム粒子のほか炭化粒子・焼土粒子を少量含んでいるという特徴がある。

少量の遺物が出土したが図示できる遺物はなかった。

SK-185 (23) SK-010 (第41図、図版15・44)

E地区の中央付近、台地先端部のV11-43に位置する。南側に縄文時代の土坑SK-187、炉穴SF-008、縄文時代早期の竪穴住居SI-129がある。形状は細長い不整楕円形で、長軸2.8m、短軸0.74m、深さ0.52mであった。平坦な底面で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

少量の遺物が出土し、土器片1点を図示した。燃糸文が施文される浮島I a式土器である。

SK-186 (23) SK-012 (第41図、図版15・44)

E地区の中央、台地先端部のV11-52に位置する。西側に縄文時代中期の竪穴住居SI-125、南側にSK-191、東側にSK-187がある。形状は楕円形で、長軸3.74m、短軸2.75m、深さ0.46mであった。すり鉢状の底面で、壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土し、土器2点と石鏝1点(第65図24)を図示した。また図示しなかったが二次加工ある剥片1点が出土している。土器は2点とも表裏面に条痕が施される。鶴ガ島台式～茅山下層式土器であろう。

SK-187 (23) SK-026 (第41図、図版15)

E地区の中央、台地先端部のV11-53に位置する。南東がSI-129と重複していたが床面の高さはほぼ同じで、新旧関係は不明である。形状は隅丸長方形で、長軸2.30m、短軸1.55m以上、深さ0.24mであった。平坦な底面で、壁は傾斜して立ち上がる。

少量の遺物が出土したが図示できる遺物はなかった。

SK-188 (23) SK-025 (第41図、図版15・44)

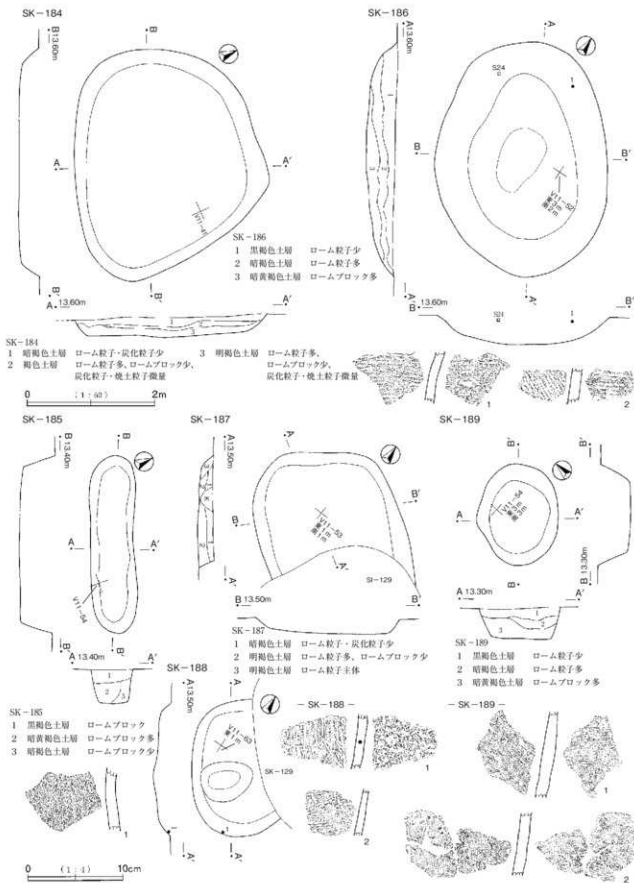
E地区の中央、台地先端部のV11-63に位置する。東側が縄文時代早期の竪穴住居SI-129と重複していたが新旧関係は不明である。形状は隅丸長方形で、長軸2.14m、短軸1.06m以上、深さ0.26mであった。平坦な底面で南東側に浅い小ピットがあり、壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土し、土器片2点を図示した。1は条痕文系の土器片で、南壁際から出土した。SI-129の混入品の可能性がある。2には貝殻文が施文されており、浮島式～興津式土器である。

SK-189 (23) SK-011 (第41図、図版15・44)

E地区の中央、台地先端部のV11-54に位置する。南西側に縄文時代早期の竪穴住居SI-130がある。形状は不整楕円形で、長軸1.62m、短軸1.30m、深さ0.50mであった。平坦な底面で、壁は垂直に立ち上がる。

少量の遺物が出土した。図示した1・2は条痕文系の土器片である。鶴ガ島台式～茅山下層式に位置づけられよう。



第41図 縄文時代土坑(9)

SK-190 (23) SK-016 (第42図、図版15)

E地区の中央、台地先端部のV11-60に位置する。南西側にSK-175がある。形状は不整楕円形で、長軸2.35m、短軸1.70m、深さ0.29mであった。平坦な底面で、壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土したが図示できる遺物はなかった。

SK-191 (23) SK-028 (第42図、図版15)

E地区の中央、台地先端基部のV11-62に位置する。北側に縄文時代の土坑SK-186、南西側に縄文時代早期の竪穴住居SI-128がある。形状は隅丸正方形で、長軸2.94m、短軸2.79m、深さ0.24mであった。平坦な底面で、壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土したが図示できる遺物はなかった。

SK-192 (23) SK-023 (第42図、図版15)

E地区の中央、台地先端部のV11-74に位置する。北東側に縄文時代の土坑SK-193がある。形状は不整楕円形で、長軸1.35m、短軸1.29m、深さ0.32mであった。平坦な底面で、壁は斜めに立ち上がる。

出土した遺物はなかった。

SK-193 (23) SK-022 (第42図、図版16)

E地区の中央、台地先端部のV11-74に位置する。南西側に縄文時代の土坑であるSK-192がある。形状は楕円形で、長軸1.05m、短軸0.80m、深さ0.30mであった。底面は狭く、壁は斜めに立ち上がって、すり鉢状の土坑である。

少量の遺物が出土したが図示できる遺物はなかった。

SK-194 (23) SK-014 (第42図、図版16・44)

E地区の中央東側、台地先端部のV11-75に位置する。周辺にはSK-193・SK-195～SK-197などの縄文時代の土坑がまぎれあって検出されている。形状は略円形で、長軸2.30m、短軸1.96m、深さ0.44mであった。平坦な底面で、壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土した。土器は2点を図示した。1は口唇上にキザミを施し、横位の条線を施文する。興津I式土器である。2は条痕文系の土器片である。土器のほかに土製球状耳飾の破片1点(第64図1)を出土した。いずれも覆土中から出土したものである。

SK-195 (23) SK-019 (第42図、図版16)

E地区の中央東側、台地先端部のV11-66に位置する。周辺に縄文時代の土坑が検出されており、南西にSK-194、南側にSK-196・SK-197がある。形状は円形で、長軸1.46m、短軸1.39m、深さ0.37mであった。平坦な底面で、壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土したが図示できる遺物はなかった。

SK-196 (23) SK-020 (第42図、図版16)

E地区の中央東側、台地先端部のV11-76に位置する。南西側にSK-197、北側にSK-195がある。どちらも縄文時代の土坑である。形状は円形で、長軸0.95m、短軸0.86m、深さ0.23mであった。平坦な底面で、壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土したが図示できる遺物はなかった。

SK-197 (23) SK-021 (第42図、図版16)

E地区の中央南東側、台地先端部のV11-76に位置する。南半分が調査区外となり、未調査である。北

東側にSK-196、北西側にSK-194がある。どちらも縄文時代の土坑である。形状は楕円形で、長軸1.96m、短軸0.92m以上、深さ0.31mであった。平坦な底面で、壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土したが図示できる遺物はなかった。

SK-198 (49) SK-001 (第42図、図版16・44)

E地区の南側、台地先端部のV12-25に位置する。西端は攪乱を受けていた。東側に縄文時代の土坑SK-199がある。形状は不整楕円形で、長軸2.82m以上、短軸1.54m、深さ0.58mであった。底面の西端と北端に小ピットがあった。壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土し、土器片7点を図示した。1は口縁下端にキザミを施し、押し引き状の連続刺突で格子文を描く。条痕文系の茅山下層式土器である。2～4は黒浜式土器で、2は口縁下に2列の爪形文を施す。5は横位の結節縄文を施した諸磯a式土器、6は浮島式土器である。7は斜位に燃糸Rを施文した晩期末葉の粗製土器と思われる。

SK-199 (46) SK-004 (第43図、図版16・44)

E地区の南側、台地先端部のV12-26に位置する。西側に縄文時代の土坑SK-198がある。形状は隅丸正方形で、長軸1.10m、短軸1.04m、深さ0.40mであった。底面にはやや凹凸があり、壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土し、土器片4点を図示した。1の口縁には、口縁下部に幅広い平行沈線文が横位に施文され、その下部に単節RL(直前段多条)を施す。2にも平行沈線文が横位に施文する。3は単節LR施す。以上は諸磯a式土器である。4は燃糸Rを施した黒浜式土器である。

SK-200、SK-201 (46) SK-003 (第43図、図版16・44)

E地区の東側、台地先端部のV12-27に位置する。東側は谷に面している。1基の土坑として調査したが、楕円形の土坑であるSK-200の西側に、もう1基浅い土坑SK-201が重複していた。土層断面からSK-200がSK-201を壊している。SK-200は長軸1.98m、短軸1.92m、深さ0.64m、SK-201は遺存する長軸が1.09mであった。SK-200は平坦な底面で、壁は垂直に立ち上がる。

少量の遺物が出土した。土器片5点を図示した。1～3は黒浜式土器である。1と2には平行沈線による葉脈状文が施文され、3には付加条縄文(R1条付加)で羽状縄文を施す。4・5は諸磯a式土器である。4は地文縄文単節RL(直前段多条)を施文後、横位に爪形文を2列施す。SK-200は床面から出土した1の土器から黒浜式期であったと考えられる。

SK-202、SK-203 (42) SK-002、(42) SK-001 (第43図、図版16)

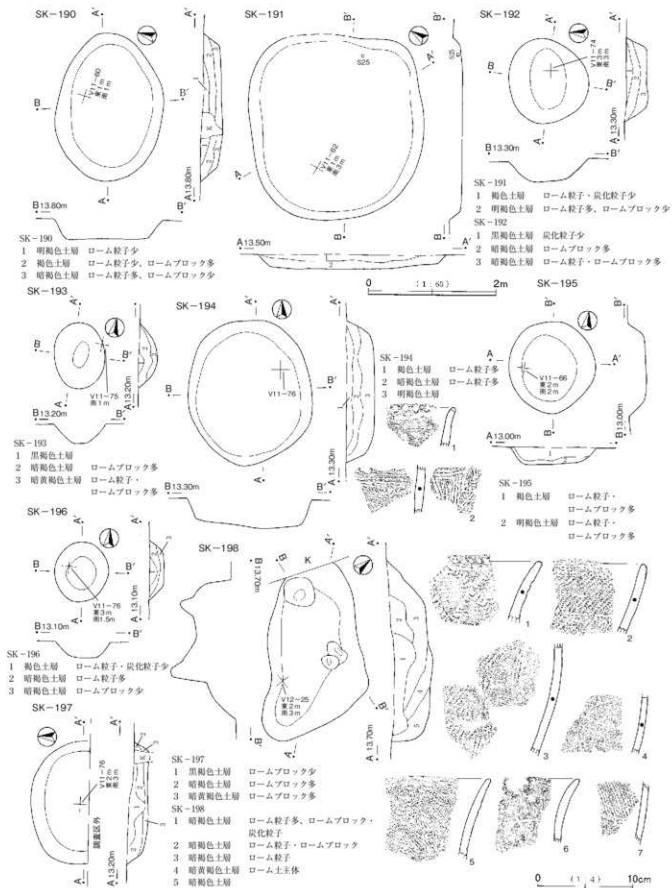
E地区の南西のU13-62・72に位置する。SK-202・SK-203の2基の土坑が並列して検出された。ほかの縄文時代の遺構とは離れている。形状は両者とも楕円形で、SK-202は長軸2.54m、短軸0.95m、深さ0.42m、SK-203は長軸1.41m、短軸0.80m、深さ0.23mであった。底面には凹凸があり、壁は斜めに立ち上がる。

いずれからも少量の遺物が出土したが図示できるものはなかった。

SK-204 (48) SK-001 (第43図、図版16)

E地区南寄りV14-79に単独で位置する。北東側の谷に面している。長軸0.67m、短軸0.61mの円形の土坑で、わずかに窪み、焼土が検出された。

出土した遺物はなかった。



第42図 縄文時代土坑(10)

SK-205 (46) SK-002 (第43図、図版16)

E地区南東のW15-45に位置する。南側に縄文時代の土坑SK-206・SK-207がある。形状は不整楕円形で、長軸1.26m、短軸0.96m、深さ0.30mであった。平坦な底面の中央に小ピット1基を検出した。壁は垂直に立ち上がる。

出土した遺物はなかった。

SK-206 (46) SK-001 (第43図、図版16)

E地区南東のW15-45に位置する。南西側にSK-207が接し、北側にSK-205がある。どちらも縄文時代の土坑である。形状は不整円形で、長軸0.89m、短軸0.66m、深さ0.27mであった。底面には凹凸があり、壁は斜めに立ち上がる。遺構の上面および覆土上層に焼土が分布していた。竪穴住居の跡であったと考えられ、周辺のSK-205や埋壘を出土したSK-207も竪穴住居を構成する施設の一部であった可能性がある。

少量の遺物が出土したが図示できるものはなかった。

SK-207 (46) SX-001 (第43図、図版16・34)

E地区南東のW15-46に位置する。北東側に焼土を含んだ縄文時代の土坑SK-206が接している。2基の不整円形の土坑が結合した形状で、長軸1.93m、短軸1.25m、深さ0.61mであった。底面は丸く、壁は斜めに立ち上がる。南西側の浅い底面から縄文土器の底部が出土し、竪穴住居の埋壘のような状況であった。覆土には焼土や炭化粒子がふくまれていた。周辺に所在する土坑であるSK-205、跡の可能性があるSK-206などととも竪穴住居を構成していた可能性が考えられる。

出土したのは上半部を欠損した深鉢で、底径は9.4cmである。沈線で意匠を描き、円形刺突を充填する。称名寺Ⅱ式土器である。

SK-208 (33) SK-001 (第43図、図版16)

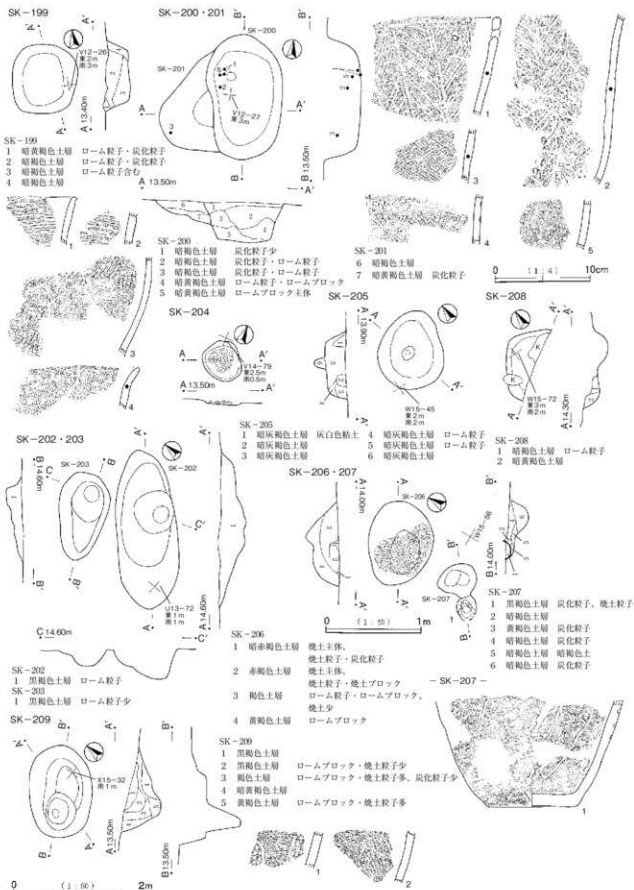
E地区南東のW15-72に位置する。南東側部分が未調査で、数か所の攪乱部分があった。形状は隅丸正方形で、長軸約1.00m、深さ約0.25mであった。平坦な底面で、壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土したが図示できるものはなかった。

SK-209 (23) SK-002 (第43図、図版16・44)

E地区南東の東側の台地縁辺、X15-31・32に位置する。南東に竪穴SF-009がある。形状は不整楕円形で、長軸1.48m、短軸0.98m、深さ約0.63mであった。平坦な底面の南西側に深い小ピットが1基あった。壁は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土し、土器片2点を図示した。1は沈線で意匠を描き、円形刺突をやや密に充填する。晩期の安行3c式土器で、2はそれに伴う粗製土器であろう。



第43図 縄文時代土坑(11)

第5表 貝類計測表

SI-082

	ウニニナ期 殻高	サルボオガイ殻長		ナミマゴシワガイ殻長		アサリ殻長		ハマグリ殻長	
		左	右	左	右	左	右	左	右
試料数	1	5	3	1	0	7	6	38	50
平均	16.17	31.72	28.53	21.94		27.91	23.83	31.84	30.19
標準偏差		5.10	5.31			5.91	4.93	7.00	8.63
最小	16.17	25.99	25.21	21.94	0	21.88	20.10	22.25	17.76
最大	16.17	38.43	34.65	21.94	0	37.42	33.33	50.71	57.48

SI-095

	サルボオガイ殻長		ナミマゴシワガイ殻長		マガキ殻長		アサリ殻長		ハマグリ殻長		オキシジミ殻長	
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右
試料数	6	10	1	0	0	1	0	2	6	7	1	0
平均	30.85	31.24	24.75			30.34		24.28	29.62	29.09	30.10	
標準偏差	7.65	5.51						1.60	7.42	4.17		
最小	20.22	22.65	24.75	0	0	30.34	0	23.13	20.72	23.80	30.10	0
最大	41.83	41.92	24.75	0	0	30.34	0	25.39	40.80	35.21	30.10	0

SI-109

	ウニニナ期		アサリ殻長		ハイガイ殻長		サルボオガイ殻長		マガキ殻長		ハマグリ殻長		オキシジミ殻長	
	殻高	殻高	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右
試料数	1	1	3	6	16	12	31	30	30	30	30	12	9	
平均	11.11	71.79	34.52	31.05	30.30	37.66	48.02	41.02	35.60	35.97	36.24	34.25		
標準偏差			28.34	5.80	5.11	3.73	5.55	9.95	14.97	7.98	5.98	3.27	3.19	
最小	11.11	42.03	28.37	26.00	33.02	25.08	32.73	12.92	23.63	27.39	30.03	28.30		
最大	11.11	117.61	39.88	38.80	45.22	43.32	70.31	67.35	62.52	51.50	42.53	38.33		

SI-110

	ハマグリ殻長	
	左	右
試料数	33	39
平均	35.21	34.30
標準偏差	6.43	5.31
最小	22.06	22.95
最大	50.70	47.66

SI-116

	ウニニナ期		ツノガイ殻長	
	殻高	殻高	左	右
試料数	3	1		
平均	18.82	32.24		
標準偏差	4.70			
最小	13.44	32.24		
最大	22.09	32.24		

SI-119 カット1

	ウニニナ期		サルボオガイ殻長		マガキ殻長		アサリ殻長		ハマグリ殻長		オキシジミ殻長	
	殻高	殻高	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右
試料数	1	23	25	21	46	1	1	7	14	1	0	
平均	12.34	33.11	31.08	30.94	24.77	25.48	22.05	30.54	34.57	41.14		
標準偏差		7.68	6.36	8.00	6.25			5.80	7.97			
最小	12.34	20.50	22.90	19.31	13.52	25.48	22.05	22.48	20.03	41.14	0	
最大	12.34	53.63	32.62	44.13	36.43	25.48	22.05	40.37	49.97	41.14	0	

SI-119 カット2

	ウニニナ期		サルボオガイ殻長		マガキ殻長		ハマグリ殻長	
	殻高	殻高	左	右	左	右	左	右
試料数	3	21	19	4	8	6	6	6
平均	15.95	31.21	31.50	27.54	24.33	27.89	28.45	
標準偏差	4.21	5.83	6.11	3.72	4.28	3.22	1.80	
最小	13.25	21.64	21.08	22.62	17.69	24.69	25.95	
最大	20.80	44.19	43.37	33.63	30.08	33.77	30.62	

SI-119 カット3

	サルボオガイ殻長		ハマグリ殻長	
	左	右	左	右
試料数	2	3	1	1
平均	31.85	32.02	24.00	34.43
標準偏差	2.70	2.83		
最小	29.94	28.91	24.00	34.43
最大	33.76	34.44	24.00	34.43

SI-119 カット4

	ウニニナ期		サルボオガイ殻長		ナミマゴシワガイ殻長		マガキ殻長		アサリ殻長		ハマグリ殻長		オキシジミ殻長	
	殻高	殻高	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右
試料数	5	59	54	23	0	17	37	2	2	100	100	2	1	
平均	14.53	33.58	30.36	35.25		27.69	24.83	23.67	20.31	30.18	31.16	31.90	33.36	
標準偏差	2.64	4.83	6.32	11.63		7.17	7.52	4.88	8.70	6.65	6.86	4.41		
最小	10.86	20.86	12.65	16.83	0	15.33	15.73	20.22	14.16	21.73	21.33	28.81	33.36	
最大	18.11	44.49	44.69	58.22	0	42.21	44.01	27.12	26.46	34.68	55.05	35.94	33.36	

SI-120

	ウニニナ期		サルボオガイ殻長		ナミマゴシワガイ殻長		マガキ殻長		カサガイ殻長		ハマグリ殻長		オキシジミ殻長	
	殻高	殻高	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右
試料数	1	1	3	3	19	0	97	100	0	1	18	20	28	33
平均	18.20	33.58	29.64	36.77			32.96	32.80		51.31	28.86	31.40	36.44	35.64
標準偏差		6.50	3.43	8.25			8.08	6.79			6.52	7.79	3.18	4.79
最小	18.20	21.90	25.68	15.21	0	13.78	16.25			51.31	20.21	17.82	23.65	25.27
最大	18.20	48.35	31.83	50.19	0	57.04	62.77			51.31	41.36	31.65	45.06	44.76

SI-121 カット1

	ウニシナ期		アサリ殻底		ハイガイ殻底		サルボオガイ殻底		ナニマゴシワガイ殻底		マゴキ殻底		シオキガイ殻底	
	殻高	殻長	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右
試料数	10	1	0	1	100	100	28	0	36	72	0	1		
平均	20.18	73.01		36.03	34.68	32.50	22.39		33.85	26.88		40.94		
標準偏差	6.68				4.79	5.02	4.83		8.59	7.45				
組小	9.43	73.01	0	36.03	21.36	17.92	12.06	0	19.38	11.59	0	40.94		
組大	31.50	73.01	0	36.03	49.13	44.58	34.72	0	62.89	43.26	0	40.94		

	アサリ殻底		ハマグリ殻底		キキシイ殻底	
	左	右	左	右	左	右
試料数	16	15	33	43	0	1
平均	22.11	21.54	24.76	24.89		37.62
標準偏差	6.78	4.92	4.47	5.50		
組小	13.25	13.17	17.44	15.72	0	37.62
組大	38.13	30.94	41.15	30.06	0	37.62

SI-121 カット2

	ウニシナ期		サルボオガイ殻底		ナニマゴシワガイ殻底		アサリ殻底		ハマグリ殻底	
	殻高	殻長	左	右	左	右	左	右	左	右
試料数	1	55	51	23	0	2	0	7	7	
平均	28.78	31.71	31.43	19.78		32.55		26.28	28.42	
標準偏差		4.38	5.09	4.25		7.46		5.90	5.56	
組小	28.78	24.67	23.40	13.98	0	27.27	0	19.85	21.89	
組大	28.78	43.66	44.85	28.86	0	37.82	0	38.57	39.15	

SI-121 カット3

	ウニシナ期		サルボオガイ殻底		ナニマゴシワガイ殻底		マゴキ殻底		アサリ殻底		ハマグリ殻底	
	殻高	殻長	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右
試料数	1	95	102	22	0	1	1	9	3	17	13	
平均	9.72	29.69	29.08	23.66		26.08	27.38	18.73	18.83	21.86	26.13	
標準偏差		4.17	4.19	4.68				2.10	2.14	3.74	4.84	
組小	9.72	17.13	18.67	15.05	0	26.08	27.38	16.21	16.32	17.19	19.65	
組大	9.72	39.52	39.15	30.99	0	26.08	27.38	21.77	21.32	33.17	33.60	

SI-121 カット4

	サルボオガイ殻底		ナニマゴシワガイ殻底		マゴキ殻底		ハマグリ殻底	
	左	右	左	右	左	右	左	右
試料数	21	15	5	0	0	1	4	4
平均	30.63	28.85	21.34			17.36	23.67	24.96
標準偏差	4.30	4.15	7.64				4.31	2.73
組小	21.36	23.72	8.06	0	0	17.36	16.62	21.46
組大	37.83	36.24	36.35	0	0	17.36	28.47	28.08

SK-106

	マゴキ殻底		ハマグリ殻底	
	左	右	左	右
試料数	0	1	1	0
平均		31.58	22.72	
標準偏差				
組小	0	31.58	22.72	0
組大	0	31.58	22.72	0

第6表 魚類遺存体同定結果

SI-109

種名	同定部位	左右	メッシュ寸法(mm)			
			9.52	4.0	2.0	1.0
スズキ属	耳石	左	1			
		右	1			

5 遺物包含層

(1) 遺物包含層(第44~50図)

D地区北西側の台地縁辺にあたる第44・45地点で調査したR14、S13・14、T12~14で、遺構外から縄文土器と石器・礫が多量に出土したため、遺物包含層として調査を行った。第44・45地点の調査範囲の南東側は調査区外であったため、遺物包含層の範囲はさらに広がる可能性も考えられる。

遺物の分布状態を把握するため、出土した遺物の重量を計測した。総計で縄文土器が73.7kg、石器・礫が37.6kg、合計重量111.3kgであった。

縄文土器は時期別に分類し、小グリッド単位で重量を計測した。本書の縄文土器の分類は、「柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書6-柏市富士見遺跡-縄文時代以降編1」に準じており、次項の第2章第1節6で説明したとおりであるが、重量計測時の土器の分類はこれと一部異なるため、対応関係を()内に示した。

縄文土器の時期別重量は、早期撚糸文系(第1群1類)150g、早期沈線文系(第1群2類)475g、早期条痕文系(第1群3類)2865g、前期前半(第2群1類~4類)16,430g、前期後半(第2群5類・6類)39,615g、中期前半(第3群1類)8,825g、中期後半(第3群5類)1,055g、後期前葉(第4群1類)4,030g、後期中葉(第4群3類)55g、晩期末葉(第5群2類)200gであった。

前期後半(第2群5類・6類)の土器が最も多く、全体の約半分を占める。次に多いのが前期前半で、これらのほとんどが第2群4類に該当する。重量の多寡のみでは解釈できない問題を内包していることに注意しなければならないが、前期前半と後半を合わせると前期の土器の重量が約4分の3を占め、縄文時代前期を主体とする遺物包含層であったととらえることができよう。

縄文土器の分布状況を時期別・グリッド別に示したのが第44~48図である。

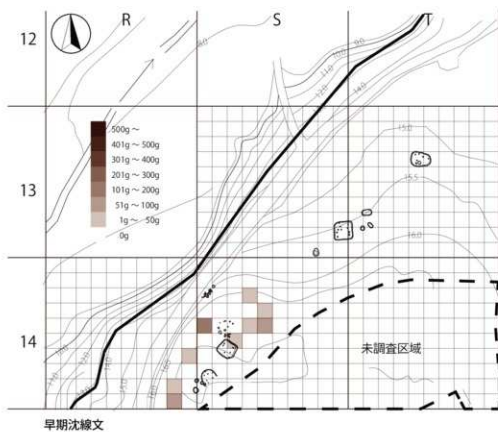
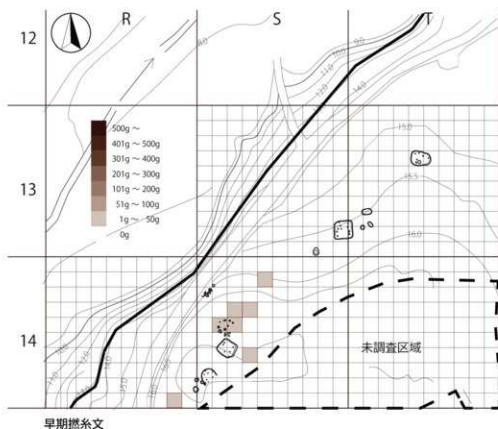
早期撚糸文系土器(第1群1類)は、おもにS14西側の竅穴住居SI-083付近に分布していた。早期沈線文系土器(第1群2類)もまた、撚糸文系土器とはほぼ同様な分布状況であった。SI-083は後期前半の称名寺Ⅱ式期の竅穴住居であるため、設営時に土砂が掘り返され、本来の埋没地点から移動している可能性を考慮する必要がある。

早期条痕文系(第1群3類)はR14、S13~14、T13で出土し、前代に比べて分布範囲が広がっている。また、竅穴住居SI-083の北東側の1か所に、かなりの分量が集中して出土した。しかし、1・2類と同様に、SI-083設営時に土砂が掘り返され、本来の埋没地点から移動している可能性を考慮する必要がある。

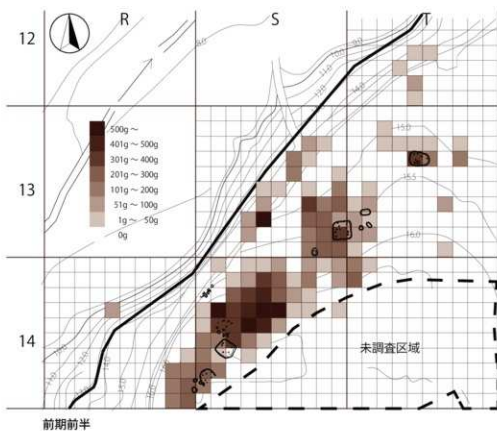
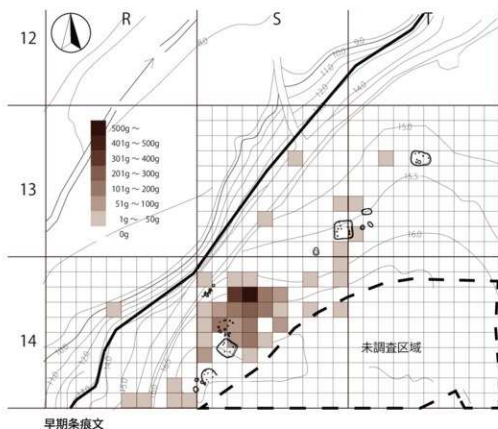
前期前半(第2群4類)はR14、S13~14、T12~14の広い範囲で出土し、集中する地点が数か所見られた。本来はある種の廃棄域があったものと解釈される。SI-085の西側SK-112付近、SI-085からSI-083付近、SI-081付近、SI-081の北西側台地縁辺付近、SI-082付近、SI-082の北側台地縁辺付近に比較的集中していた。ただし、SI-081は前期後半の浮島Ib式期、SI-083は後期前半の称名寺Ⅱ式期の竅穴住居であるため、設営時に土砂が掘り返され、本来の埋没地点から移動している可能性を考慮する必要がある。

前期後半(第2群5類・6類)の分布は前期前半とはほぼ同じ分布状況であったが、2倍以上の重量の土器が出土した。SI-081は浮島Ib式期、SI-085が浮島Ia式期の竅穴住居であるため、これらの住人達の廃棄域であったことが考えられる。ただし、後述するように、中期前半(第3群1類)の分布域とも重なるため、本来の埋没地点が移動してしまっている可能性も否定できない。

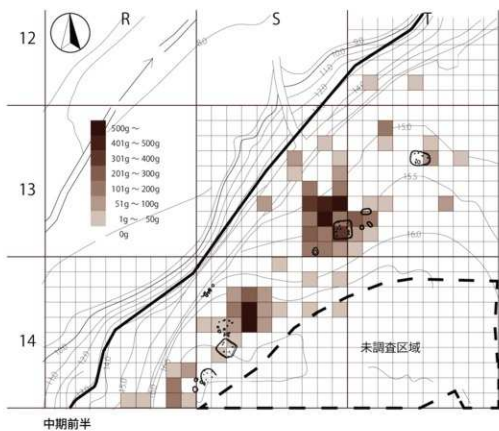
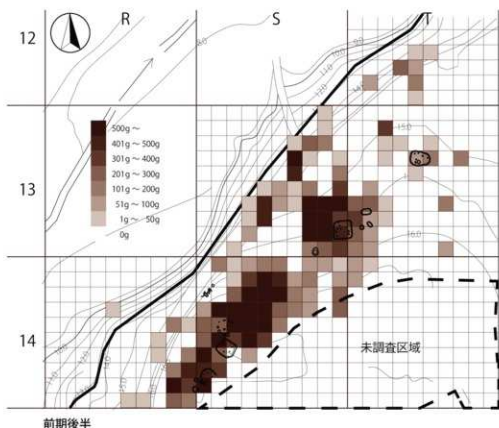
中期前半(第3群1類)はおもにS13・14から出土し、SI-083東側付近とSI-081付近の2か所に比較



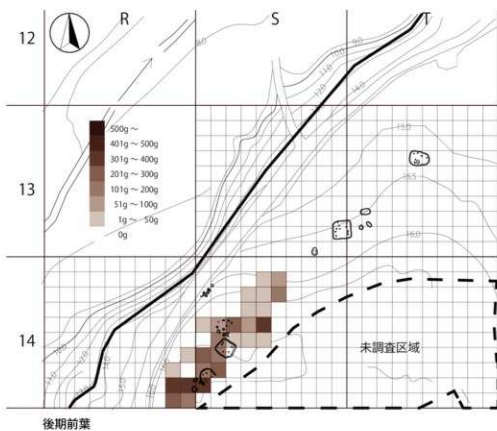
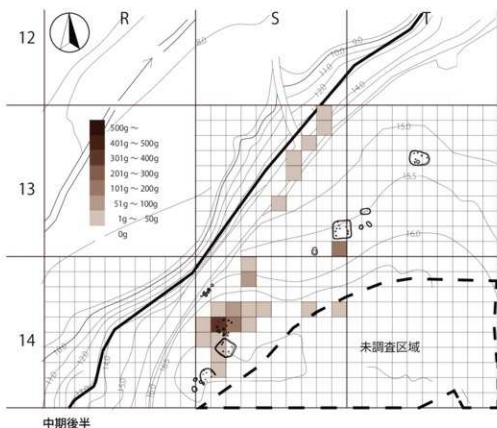
第44図 S14グリッド出土縄文土器時期別分布(1)



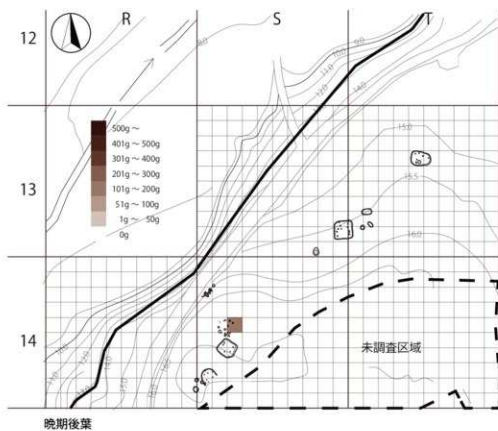
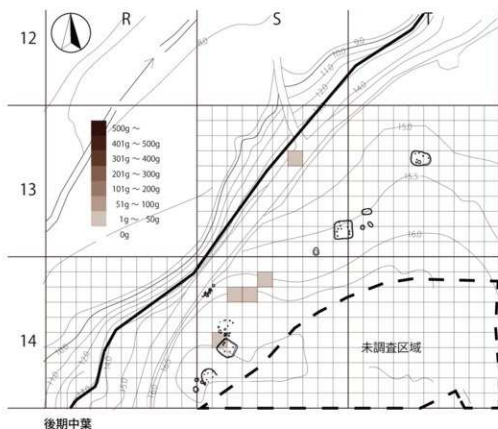
第45図 S14グリッド出土縄文土器時期別分布(2)



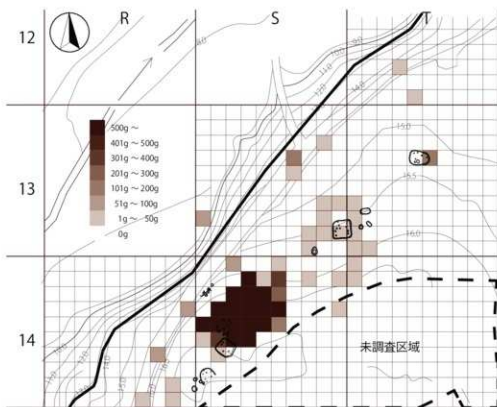
第46図 S14グリッド出土縄文土器時期別分布(3)



第47図 S14グリッド出土縄文土器時期別分布(4)



第48図 S14グリッド出土縄文土器時期別分布(5)



第49図 S14グリッド出土石器・礫分布

的集中していた。ある種の廃棄域であった可能性が高い。ただし、S14に関しては、SI-083設置時などに土砂が掘り返され、本来的な埋没地点から移動している可能性を考慮する必要がある。

中期後半(第3群5類)の出土土器量は比較的微量で、SI-083付近とSI-081北側の台地縁辺付近から出土した。

後期前葉(第4群3類)はR14、S14から出土し、おもに縄文時代の土坑SK-112から古墳時代の竪穴住居SI-085、縄文時代後期の竪穴住居SI-083にかけて分布していた。SI-083が当該期の竪穴住居であるため、住人による廃棄行為が行われたものと解釈される。後期中葉の土器片は、極めて微量しか出土しなかった。今回報告するD・E地区全体を通して出土量は僅少で、この時期この台地(小支台)上を活動領域としてあまり利用しなかったのであろう。

晩期末葉(第5群2類)は、S14-42から200gが出土しただけで、その他のグリッドからは出土しなかったが、逆に廃棄ブロック的な解釈も可能である。

石器・礫については時期別に分類できなかった。焼礫や風化した礫が主体である。これを重量に換算してグリッド別に見ると、S14から98%が出土し、土器の分布と比較して、1か所に集中する傾向がある。緩斜面であり、南西に称名寺式期(SI-083)、古墳時代中期(SI-085)の竪穴住居が存在するため、これらの設置にあたる移動や散逸した可能性も考えられる。遺構としては確認できなかったが、集積遺構であった可能性がある。

(2) 遺物包含層(S14)出土縄文土器(第51~54図、図版35・45~48)

遺構外出土縄文土器については、特に集中していたS14出土縄文土器を遺物包含層出土縄文土器としてこの項で説明し、その他のグリッドから出土した縄文土器、古墳時代や中・近世の遺構に混入していた縄文土器をD地区・E地区に分けて次項で説明することとする。

第1群土器

1類(1~6)

燃糸文系土器を一括する。

1は燃糸Rを縦位に密接施文する。井草Ⅱ式の燃糸施文型(いわゆる大丸式)である。2は単節LRを縦位施文する。夏島式の縄文施文型である。3は単節RLを縦位施文する。4・5は燃糸Lを縦位施文する。これらはいずれも条間が密接しておらず、3は稲荷台式の縄文施文型、4・5は稲荷台式の燃糸施文型である。6は燃糸条痕を施したもので、稲荷台式に位置づけられよう。

2類(7・8)

沈線文系土器を本類とする。

7は口縁で、口縁端部に刺突文を施す。8は太沈線で意匠を施すもので、胴部下半以下は器面調整のみとなる。田戸下層式に位置づけられる。

3類(9~16)

条痕文系土器を一括する。

9~15は内外面に貝殻条痕ないし擦痕による器面調整を施したものである。9・10は擦痕を施した口縁部片で、10の口唇上には角頭状の工具による刺突を巡らす。11は疎らな貝殻条痕を施すが、外面では部分的に磨り消している。これら3点は子母口式に位置づけられよう。12~14もまた子母口式に位置づけられようか。15は波状縁を呈し、口唇上にキザミを施す。内外面とも斜方向を主とする貝殻条痕を施している。野鳥式に位置づけられる。

16は隆線を貼付し、口頸部には浅目の沈線で格子目文を描く。胎土中の繊維の含有量は比較的多い。茅山下層式に位置づけられる。

第2群土器

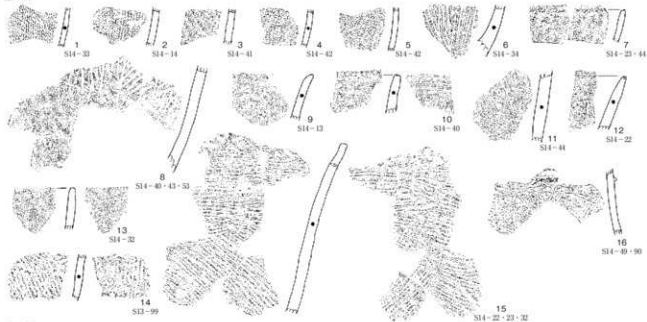
4類(17~20)

黒浜式土器を一括する。

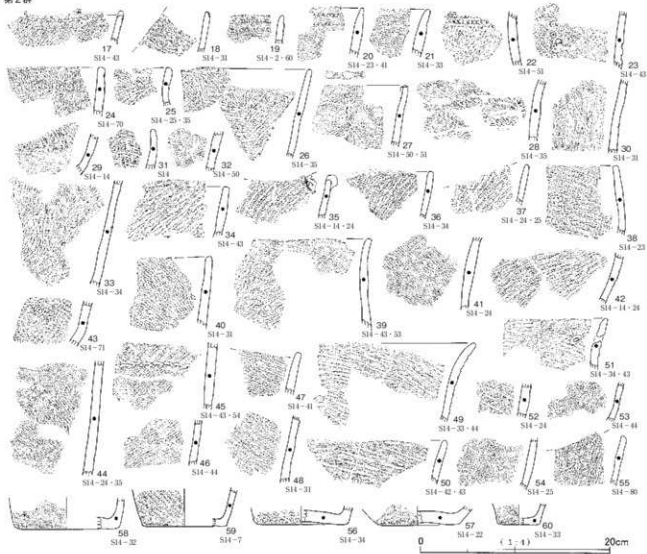
17は波状縁深鉢で、地文縄文単節LRを施文後、口縁下に2列の爪形文を施す。18も波状縁で、地文縄文単節RL施文後、口縁端部と斜行して爪形文を施している。19は地文縄文単節RL施文後、口縁下に2列の爪形文を施す。20・21は同一個体で、地文縄文の単節RL(直前段多条)を施文後、口縁下に2列の爪形文を施す。胎土中の繊維の含有量は僅少である。22は地文縄文の単節RLを施文後、爪形文を施す。23は地文縄文の単節LRを施文後、円形竹管による刺突文を垂下する。24の口縁下部には横位の刺し切り状の刺突文を3段施文する。25は一本描き(単沈線)で矢羽状の意匠を施す。26~31は肋骨文ないし木葉文を施すものである。文様描線は26・27・31が半截竹管による平行沈線で、その他は一本描き(単沈線)を用いる。32は地文縄文単節RLを施文後、胴部下半に細沈線を密接施文する。

33~54は地文縄文を施したものである。使用原体は33が無節L(0段多条)、34は無節Rとなる。35は波状口縁深鉢の口縁部片で、波頂部下に突起を付す。地文は単節RLを用いる。36~46はいずれも単節RL

第1群



第2群



第51図 S14グリッド出土縄文土器(1)

地文とするが、41はRL(直前段多条)、45・46では横位の結節縄文を施している。なお、45・46は胎土中の繊維の含有量が僅少である。47～52は付加条縄文を施しており、47が軸不明でR1条付加、48～51は軸不明でL1条付加、52は付加条第3種を用いる。

55は貝殻文土器で、縦位の貝殻腹縁文を地文とする。

56～60は底部である。56は推定底径10.0cm・遺存高1.9cm、57は推定底径9.0cm・遺存高1.9cm、58は推定底径11.0cm・遺存高3.3cm、59は推定底径9.0cm・遺存高4.1cm、60は推定底径4.6cm・遺存高2.2cmの小形土器である。

5類(61～81)

浮島式・興津式を一括する。

61は波状縁で、地文として疎らな燃糸文を施文後、変形爪形文に近い描線で意匠を施す。浮島Ⅰa式であろう。

62は波状縁の深鉢で、波頂部にキザミを施した装飾的な突起を付す。65は変形気味な爪形文を施す。これらは胎土も後述する諸磯式土器、また浮島式土器とも異なる。折衷現象を考慮すべきかも知れない。

63は波状縁の深鉢で、地文として貝殻腹縁文を施文後、半載竹管による平行沈線で意匠を施す。浮島Ⅰb式に位置づけられる。

64・66～72は胴部片を集めた。64・66・67は地文として疎らな燃糸文を施文後、平行沈線を描線に木葉文や波状文を描く。66は半載竹管による横位の爪形文を2段施している。浮島Ⅰa式に位置づけられる。

68・69は地文を施さず、平行沈線と変形爪形文で意匠を施すもので、70は地文として胴部以下に貝殻腹縁文を施文し、幅広い変形爪形文と平行沈線で意匠を描く。3点は浮島Ⅱ式に位置づけられる。

71は地文として疎らな燃糸文が施文された胴部片で、浮島Ⅰ式に位置づけられるものである。

72～74は平縁深鉢の口縁部片で、72は口縁下に斜位の条線を施す。73・74は口辺に輪積み痕を残し、凹凸文を施すもので、3点は浮島Ⅲ式に位置づけられよう。

75は地文として横位を主とする波状貝殻文を施す。浮島Ⅱ式～Ⅲ式に位置づけられるものであろう。

76は平縁深鉢の口縁部片で、口縁下に縦位の条線を施す。77・78も平縁深鉢の口縁部片で、口唇上に刺突を巡らし、口縁下から間隔のやや細かい波状貝殻文を施文する。79は口唇上の装飾を施さないが、前記2点とはほぼ同様の属性を有する。以上の4点は、興津Ⅰ式に位置づけられる。

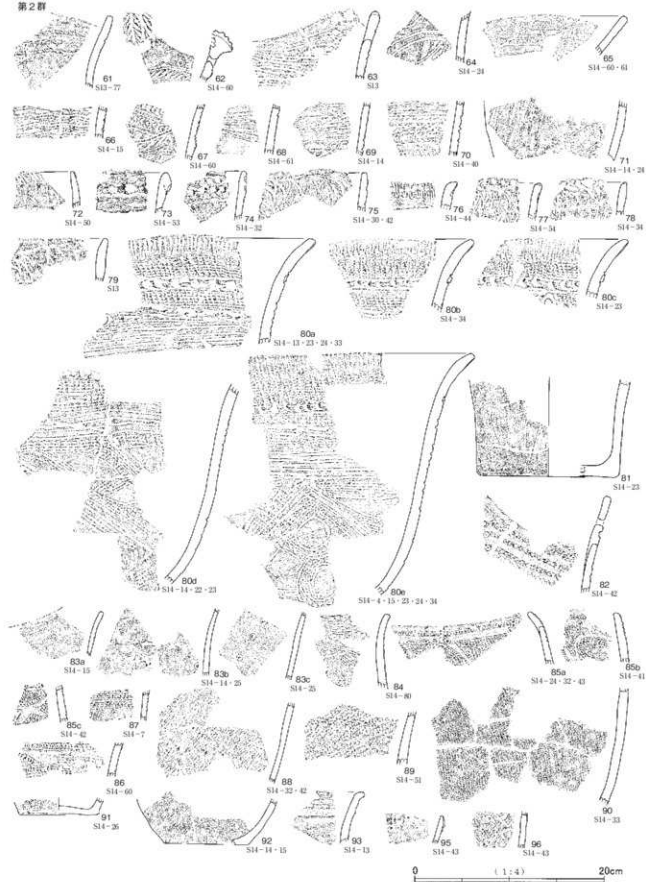
80a～eは同一個体であると考えられる。80aは口頸部までしか遺存しないが、地文として間隔が細かい縦位の貝殻腹縁文を施文し、口縁下に縦位の条線を施してから、横位の磨り消しを行う。地文部には太い竹管による粗目の押し文と、刺し切り状の横位の刺突を巡らし、この下は平行沈線を重畳施文する。80b・cも同様で、口縁部の条線帯が幅狭で、磨り消しあまり顕著ではない。80d・eでは胴部下半まで器形がわかる。口縁が外反して立ち上がり、胴中位がやや膨らみ、胴部下半へ向かってすぼまる深鉢である。施文その他は口縁部と同様で、平行沈線で区画した下側に磨消貝殻文を施している。意匠の構図は菱形文と円文などを組み合わせているが、全体像は不明である。興津Ⅱ式に位置づけられる。

81は底部で、遺存高10.4cm、推定底径15.0cmを測る。内外面とも器面調整を施すのみで、浮島・興津式期の底部である。

6類(82～118)

諸磯式を一括する。82は波状縁深鉢の口縁部片で、地文縄文の単節RLを施文後、口縁下に3列の爪形

第2群



第52図 S14グリッド出土縄文土器(2)

文を施し、波頂部から円形竹管による刺突を垂下する。83も波状縁深鉢の口縁部片で、細かな平行沈線を描線として「多重米字文」を描き、交点には円形竹管による刺突を施す。84も波状縁深鉢の口縁部片で、地文縄文の単節LRを施文後、平行沈線で崩れ気味の鋸歯状文を描く。85 a～cは同一個体で、浅鉢の可能性もある。地文縄文の単節RL(直前段多条)を施文後、口縁下に単列の爪形文を巡らし、その下は爪形文を描線として「短冊木葉文」を描き、余白を磨り消す。86は胎土中に小石片を含み、太めの爪形文を描線として意匠を描く。87は地文縄文の単節LRを施文後、2列の爪形文を巡らす。88～91は地文のみが施されたものである。使用原体は88が無節L(0段多条)、89は単節LR、90は単節RL(直前段多条)となる。以上は諸磯a式である。

92は胎土・焼成その他の観察所見から本類としたが、細別型式は不明である。

94は、地文縄文の単節RLを施文後、太めの爪形文を描線として意匠を描く。諸磯b式(古い部分)に位置づけられる。

95は平縁深鉢口縁部片で、地文の集合条線を施文後、装飾として口縁部に縦位の貼付文を付し、キザミを施す。96は地文の集合条線が格子状に施される。97は胴部下半の破片で、地文として集合条線を施す。以上3点は諸磯c式に位置づけられる。

98～117は、群別別上は浮島式・興津式の次に挿図を組むべきであるが、一部興津式に併行する資料を含むものの、そのほとんどが興津式以降の前期末葉に属するため、中期初頭との脈絡も考慮し、6類の後に並べた。

100は結節縄文が施文された口縁である。101は縄文の地文に、口縁端部に刺突文が巡らされていた。102は結節縄文が施文された口縁である。103と104は同一個体の折り返し口縁で、口縁端部から縄文が施文されている。107・108は口縁下部に結節縄文が施文されていた。109は折り返し口縁で、無節の縄文が施文されていた。110には、4段の摺糸文が横位に施文されていた。114には刺突文の施された薄い隆帯が横位に巡り、その下に縄文が施文されていた。117の底部には、羽状縄文が施文されていた。

118は波状縁深鉢の口縁部片で、口縁下部に大振りなボタン状の突起を付し、「の」字状の沈線を施す。口縁端部にキザミを施し、口縁下に2列の結節浮線文を貼付し、その間に鋸歯状のソーメン状浮線文を付す。ボタン状貼付文の内部にはソーメン状浮線文を格子状に付し、貼付文の外側にも剥落が目立つとはいえ、ソーメン状浮線文などによる施文が見られる。以上の属性から、十三菩提式に位置づけられる。

第3群土器

1類(119～134)

五領ヶ台式を一括する。

119は沈線文と三角形印刻を重畳施文後、橋状把手を付してから、単節LRを施す。120・121は細線文系で、いずれも細線を充填後、120は沈線と三角形印刻、121は沈線で意匠を描く。122・123は平縁深鉢の口縁部片で、口縁は外反気味に立ち上がり、口縁端部は内傾して内稜を有する。広狭の差はあるが、ともに口縁部を無文帯とし、頸部以下を主要な施文域とする。123は平行沈線を重畳施文し、その間に交互刺突文を施す。124 a～dは同一個体で、頸部以上は外反気味に立ち上がり、胴部は比較的円筒状に近い器形を呈すると思われる。口頸部の境に平行沈線を重畳施文し、胴部は5本一組の沈線を垂下し、柱状の区画を構成する。中央に縦位の交互刺突文を施し、両外側の沈線に沿って三角形刺突文を施している。125は頸部が膨らみ、口縁が外反する器形を呈する深鉢の頸部ないしは胴上部の破片で、平行沈線と三角形刺突

文で意匠を施す。126～128は平行沈線を重畳施し、円形ないし三角状の刺突列を充填するものである。129は平縁深鉢の口縁部片で、口縁直下からフネガイ属の貝殻を原体とした縦位の貝殻腹縁文を横列施文（現存部では2列）する。130は平縁深鉢の口縁部片で、口縁は外反気味に立ち上がり、口縁端部は外側に肥厚し、比較的狭小な内縁を有する。口縁直下から地文縄文の単節LRを施文している。胎土中に雲母粒子と長石粒子が目立つ。131は口頸部が外反気味に立ち上がり、口縁は内縁を有する。口唇上にキザミを施し、頸部と胴部の境には横位の隆線を付してキザミを巡らす。胎土中に長石粒子および石英粒子が目立つ。132は器面調整のみを施した平縁の小形土器で、胎土・焼成、その他の属性から本類に位置づけた。133・134は底部である。133は推定底径7.0cm、遺存高3.2cm、134は底径9.8cm、遺存高5.3cmを測る。口辺が外反気味に立ち上がる浅鉢で、内外面とも器面調整のみを施し、胎土中に長石粒子がやや目立つ。

5類 (135～145)

加曾利E式（連弧文土器および曾利系を含む）を一括する。

135～138は同一個体で、キャリバー形深鉢の胴部片である。地文縄文の単節LRを施文後、2本一組の沈線を垂下し、画線内を磨り消す「胴部磨消懸垂文」を単位文として施し、単位文間には蛇行沈線を垂下する。139は地文縄文の単節LRを施文後、沈線で区画文を描いてから画線内を磨り消す。140は地文縄文の単節LRを施文後、弧線文を描いてから余白を磨り消す。以上は加曾利EⅡ式に位置づけられる。

141は深鉢ないしは浅鉢の口頸部で、口縁部を地文縄文のみとし、主要な施文域は頸部とする。上端を横位の隆線で画してから、隆線で区画文を構成する。地文は最終工程で無節Lを施文している。142は隆線で意匠を施すほかは器面調整のみで、注口付などの可能性がある。143は内外面とも器面調整のみを施した浅鉢である。以上2点は加曾利EⅢ式に位置づけられよう。

144は連弧文土器である。地文として縦位の条線を施文後、口縁下に2列の円形刺突文を施す。

145は曾利式系土器である。深鉢の胴部片で、地文として縦位の条線を施文後、縦位の隆線を付してから竹管による刺突を垂下する。

第4群土器

1類 (146～155)

称名寺式を一括する。

146は波状縁深鉢の口縁部片で、波頂部にボタン状の貼付文を付してから盲孔を施す。その左右にも盲孔を穿ち、そこを起点に1条の沈線を引いて狭小な施文域を構成する。147は胴上部の破片で、沈線でJ字文を描いてから地文縄文の単節LRを充填し、余白を磨り消す。本例は称名寺Ⅰ式に位置づけられよう。

148は器面の乾燥が進んだ段階で沈線による意匠を描き、列点を充填し、149も沈線で意匠を描いてから、条線を充填する。150～154は沈線で意匠を描くのみで、意匠内には何も充填しない。155は条線文系粗製土器の胴部片で、条線文を大柄の格子状に施している。以上は称名寺Ⅱ式に位置づけられる。

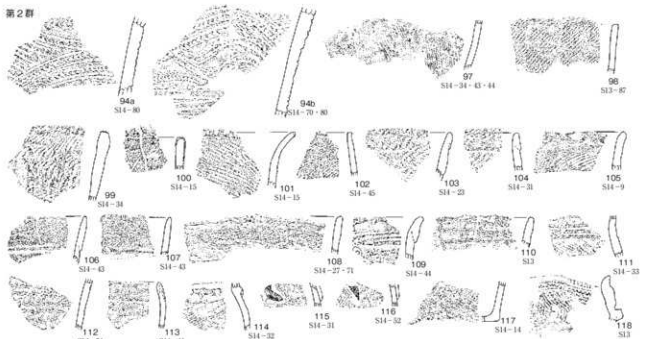
第5群土器

2類 (156・157)

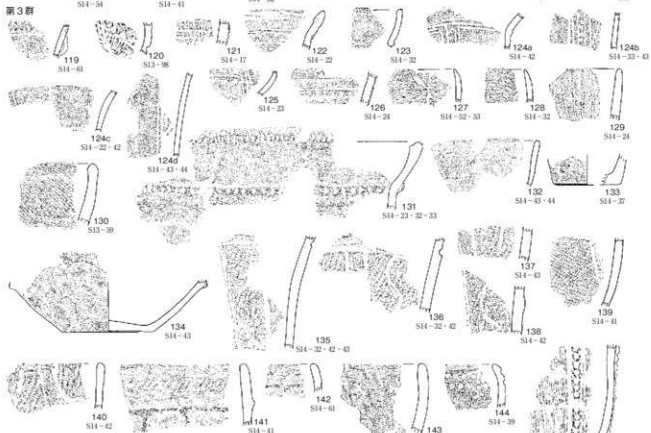
晩期後半の土器を一括する。

156・157ともに平縁の粗製深鉢で複合口縁を呈し、口縁端部は内側に若干肥厚する。口縁部下から縦位を主とする条痕（刷毛目状）を密接施文し、口唇上に裝飾として胴部の条痕と同一の工具を用い、縦位のキザミを施す。156もほぼ同様の構成となる（同一個体か）。荒海式に位置づけられる。

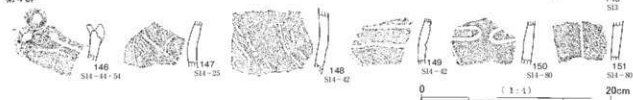
第2群



第3群

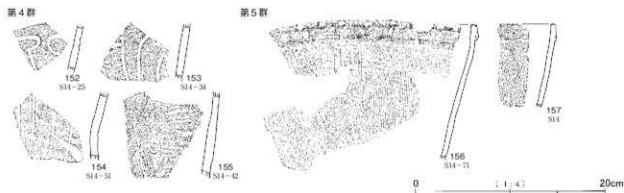


第4群



0 (1:1) 20cm

第53図 S14グリッド出土縄文土器(3)



第54図 SI4グリッド出土縄文土器(4)

6 遺構外出土縄文土器

富士見遺跡は縄文時代の遺構を主体としており、集落のまとまりからA～Eの5地区に区分することができる。各地区とも縄文時代前期中葉の黒浜式期が集落の中心となり、花積下層式期から興津式期まで時期による盛衰はあるものの、縄文時代前期を通じて集落が営まれたことがわかっている。

掲載した遺構外出土土器の説明に際し、事実記載のための便宜的分類を提示する。今回の調査では早期燃糸文土器から晩期まで断続的に出土しているが、主体は黒浜式を中心とした前期中葉の土器である。

なお、今回の報告では出土していない土器型式もあるが、隣接する胸形遺跡との整合性を鑑みた分類として提示した。

第1群 早期の土器	第3群 中期の土器
1類 燃糸文系土器	1類 五領ヶ台式
2類 沈線文系土器	2類 阿玉台式
3類 条痕文系土器	3類 勝坂式
第2群 前期の土器	4類 中峠式
1類 花積下層式	5類 加曾利E式
2類 ニツ木式	第4群 後期の土器
3類 関山式	1類 称名寺式
4類 黒浜式	2類 堀之内式
5類 浮島式・興津式・前期末縄文土器	3類 加曾利B式・曾谷式
6類 諸磯式・十三菩提式	4類 安行式
7類 大木式	第5群 晩期の土器
	2類 晩期後半

(1) D地区(第55～57図、図版48～51)

第1群土器

2類(1・2)

早期沈線文系土器を一括する。1は平縁深鉢の口縁部片で、口唇上に貝殻腹縁文を施し、口頸部には下端を横位の貝殻腹縁文で区画してから、細沈線で入組文を描き、貝殻腹縁文を充填する。田戸上層式であ

る。2は尖底土器の底部で、胎土中に石英・白色粒子が目立ち、器表面には擦痕調整が施される。竹之内式ないし三戸式に位置づけられる。

3類(3~16)

早期条痕文土器を本類とする。3は胎土中の繊維の含有量が比較的少なく、貝殻条痕というよりはむしろ、擦痕状の器面調整を施す。子母口式に位置づけられよう。

4~8は細隆起線で意匠を描くもので、器面調整の貝殻条痕は内面に認められるが、顕著ではない。9~12は器内外面に貝殻条痕を施すもので、波状緑の9や平緑の10では、口唇上にキザミを施している。条痕は外面では縦方向ないし斜方向を主とし、内面も同様であるが、9・10は横方向を主とする。以上の4~12は野島式土器に位置づけられる。

13~16はやや器壁が厚くなり、胎土中の繊維の含有量が増加する。13は波状緑で、口唇上にキザミを施し、口頸部の境に段を有する。施文としては段上に隆線を巡らし、波底部から段にかけて隆線を垂下するものである。14~16は内外面に貝殻条痕を施すもので、14が内外面とも横方向、他は斜方向を主とする。以上のうち、13は茅山下層式土器、14~16は鞆ガ島台式~茅山下層式土器に位置づけられよう。貝殻条痕のみの土器は、決定的な属性に乏しく、分別は困難を極めたため、このような位置づけとなった。

第2群土器

1類(17)

花積下層式土器を本類とする。

17は波状緑深鉢で、複合口縁を呈し口縁下端がやや張り出し気味となる。器内外面ともやや粗目の擦痕状の器面調整を施しており、胎土中の繊維の含有量は比較的少ない。装飾として口縁下端にキザミを巡らす。本例は花積下層式土器ではなく、時期的に若干先行する土器群に位置づけられる。

3類(18~40)

関山式土器を本類とする。

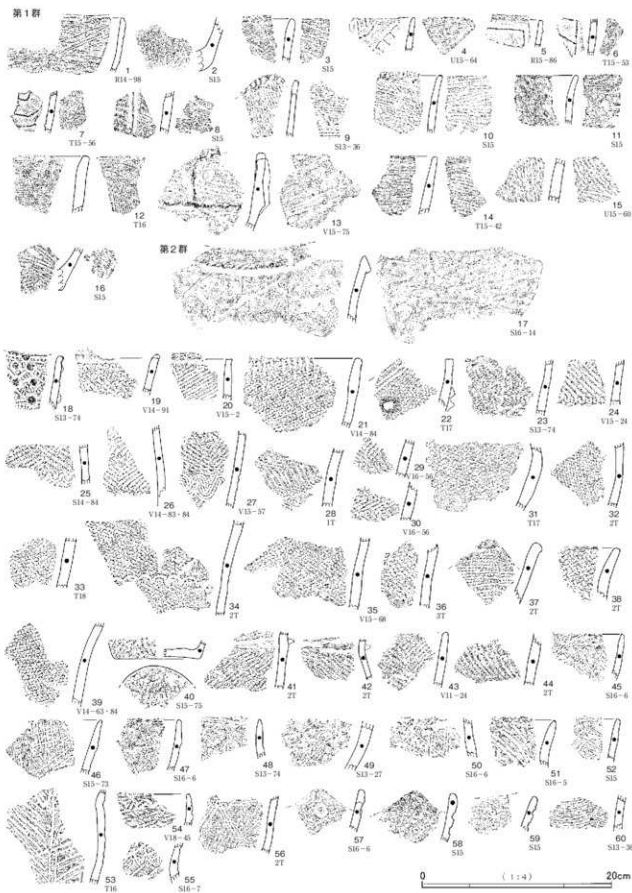
18は波状緑深鉢の口縁部片で、平行沈線で基幹文様を描き、短沈線を充填後、貼付文を付す。関山Ⅰ式である。

19~39は地文縄文のみを施文し、装飾や文様が比較的乏しい一群である。このうち19~21は平緑深鉢の口縁部片となる。19は口唇上に突起(形状不明)を付し、いわゆる「幅狭等間隔施文多段ループ」を施す。20は口唇上を含め単節RLを施文する。21は地文縄文複節LRLを施文後、口縁下に条線を施す。22は波状緑深鉢の口縁部片で、地文として組紐を施文後、口縁下に平行沈線を引き、さらにボタン状の突起を付す。23は「幅狭等間隔施文ループ」を施す。24は「幅広異間隔施文単段ループ」を施文する。25は地文縄文施文後、真正コンパス文を施し、27は上下コンパス文を施す。26は「幅広異間隔施文ループ」を施し、29・30は「幅狭等間隔施文単段ループ」を施している。31~36は地文として組紐を施文し、34は胴中位にコンパス文を施す。38の地文は「異節縄文」か。39は複節LRLを地文とする。40は底部で、推定底径9.0cm、遺存高2.0cmを測る。上げ底を呈し、胴部下半から底面にかけて単節RLを施す。以上は関山Ⅱ式に位置づけられる。

4類(41~95)

黒浜式土器を一括する。

41・42は地文縄文施文後、鈎状隆線を付すもので、使用原体は41が無節L、42は単節RLとなる。43・



第55图 D地区遺構外出土縄文土器(1)

44はループ文を施す。45～53は構図が崩れたものも含め、肋骨文ないし木葉文を施文した一群である。このうち、文様描線が平行沈線の53を除き、他は一本描き(単沈線)を描線とする。54～56は地文として縄文を施文後、54・55はコンパス文、56は平行沈線で山形文を施す。

57・58は波状緑深鉢の口縁部片で、57は波頂部下に大振りな凹形竹管による刺突を施し、58は口縁下に3列の爪形文を施文後、凹形竹管の刺突文を垂下する。59は平縁深鉢の口縁部片で、口縁下に爪形文を施文後、凹形竹管の刺突文を垂下している。60は比較的整った肋骨文を施文後、交点に凹形竹管の刺突文を垂下する。61は地文縄文の単節RL(直前段多条)を施文後、凹形竹管の刺突文を垂下している。62は胴部下半から底部付近の破片で、地文縄文の単節RL(直前段多条)を施文する。63は地文として無節Lを施文後、やや不規則な横位の平行沈線を引き、画線内を磨り消している。以上の7点は、胎土中の繊維の含有量が僅少ないし少な目のものである。

64～87は地文縄文のみを施した一群である。使用原体は64～66は同一個体で無節R、67は単節LR、68～72は単節RLで、73は単節LRの羽状施文である。74～82は付加条縄文で、74・76は軸不明・L1条付加、78は軸不明・R1条付加、75・79もまた軸縄は不明ながらR1条付加であろうか。81は軸不明・R2条付加、77は軸不明・L1条付加と軸不明・L2条で羽状施文、80・82は軸不明・L2条付加と軸不明・R2条付加、83は撚糸Lと軸不明・R1条付加で羽状施文するものである。84～87は撚糸を地文とし、86が撚糸R以外は撚糸Lを施す。

88～90は貝殻文土器で、88が貝殻腹縁文、その他は貝殻背圧痕文を施文している。

91・92は爪形文などで意匠を施すもので、91は単列を用い、92は交互刺突気味に施しており、ともに有尾系土器の可能性はある。

93～95は底部で、93は胴部下半から底面にかけて貝殻背圧痕を施す。94は推定底径9.4cm、遺存高2.2cmを測る。地文として無節Rを施す。95は推定底径8.0cm、遺存高11.6cmを測る。上げ底を呈し、地文として単節LRを施文している。

5類(96～111)

浮島式・興津式・前期末縄文土器を一括する。

96は縦位を中心とする貝殻腹縁文を地文に、平行沈線で意匠を描く。浮島Ⅰa式土器に位置づけられる。97・98は地文を施さず、平行沈線で意匠を描く。浮島Ⅰb式土器に位置づけられよう。99は平縁深鉢の口縁部片で、口唇上にキザミを施し、口頭部には横位の変形爪形文を重畳施文する。浮島Ⅱ式土器に位置づけられる。100・101は地文として横位を中心とする貝殻腹縁文を施したもので、浮島Ⅱ式～Ⅲ式に位置づけられよう。

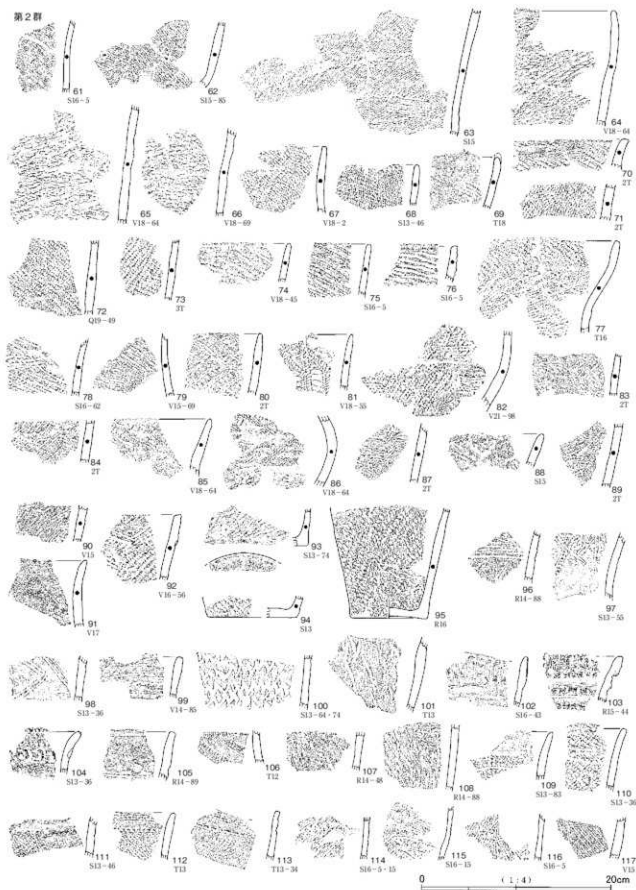
102は複合口縁を呈し、口縁部に縦位の条線を施す。103も複合口縁で、口縁部に縦位の条線を施し、その下は輪積み痕を残してキザミを巡らす。104は反外気味に立ち上がり、口縁端部にキザミを施し、地文として横位の貝殻腹縁文を施文後、単列の刺突文を巡らせる。105は横位の凹凸文を施したもので、以上の4点は興津Ⅰ式土器に位置づけられる。106は磨消貝殻文を施した胴部片で、興津Ⅱ式土器に位置づけられる。107・108は貝殻腹縁文を地文とした胴部片で、細分はしないが興津式土器に位置づけられる。

109の地文は単節LR、110は単節RL、111は単節LRで横位の結節縄文を施す。

6類(112～129)

諸磯式土器を一括する。

第2群



第56图 D地区遺構外出土縄文土器(2)

112～123は諸磯a式土器で、112は地文として単節RL(直前段多条)を施文後、口縁下に2列の爪形文を施す。113もほぼ同様な施文であるが、地文は単節LR(直前段多条)となる。114～117は葉脈文を施文するもので、半截竹管の内側を用いた平行沈線を描線とする。117も近いが、斜線肋骨文を施す。なお、116・117は胎土中に繊維を含まないとしたが、厳密には微量ないし僅少含んでいる可能性を有している。118～121は基幹文様として半截竹管を用いた鋸歯状文を施したものである。118は「多重鋸歯状文」と呼ばれるもので、3条一組の平行沈線内に鋸歯状文を施文し、交点などに円形竹管による刺突を施す。119は文様描線がやや太めの4条一組の平行沈線を用いており、諸磯b式に下がる可能性がある。120・121は文様描線が細い平行沈線を用いるもので、鋸歯状文を重畳施文する。122・123は地文縄文のみを施したもので、使用原体はともに単節LR(直前段多条)となる。128は底部で、遺存高1.9cm、推定底径9.4cmを測る。地文として単節RLを施文する。

124～127・129は諸磯b式土器である。124・125は太めの爪形文を描線として意匠を描くもので、古手の資料となる。126・127は浮線文を描線として意匠を描くもので、浮線には126がキザミ、127は縄文を施文し、両者には時期差が存在するが、中頃の資料として扱う。129は細沈線による集合沈線を施すもので、中頃から新しの資料である。

7類(130・131)

前期大木式土器を一括する。130は単沈線を文様描線として横位の山形文を重畳施文し、131は縦位にも施す。これらは大木5式土器に位置づけられる。搬入品と思われる。

第3群土器

1類(132～145)

五領ヶ台式土器を一括する。

132～134は波状縁深鉢の口縁部片で、波頂部の形状は概ね富士山形を呈する。132は幅狭の内縁を有しており、地文縄文を施文後、波頂部に3条のキザミを施し、口縁下に沈線を多条施文する。133はやや幅広いの内縁を有し、口縁下にボタン状の貼付文を付す。134は波頂部を窪ませており、地文として単節RLを施す。135～139は平縁深鉢の口縁部片で、136は口縁下に粗目の条線、その下には交互刺突文を施す。137は複列の刺突文を巡らし、139は平行沈線間にキザミを充填する。138は推定口径19.6cm、遺存高4.5cm、を測る。口辺が椀状に膨らみ、頸部以下ですぼまる器形を呈する。口縁下にキザミを巡らし、地文縄文を施文後、頸部には沈線で渦巻文を描き、その両脇に三角形印刻文を施す。140は浅鉢の口縁部片で、外面はキザミ列と円形刺突列、内面には多条化した結節沈線を描線として楕円形区画文を施している。141～144は胴部片で、多条化施文した沈線と交互刺突文、刺突文を施す。145は底部で、遺存高5.0cm、底径10.4cmを測る。底部周縁が張り出し気味で、底面には部分的に網状痕が見られる。

2類(146～151)

阿玉台式土器を一括する。

146～148は平縁深鉢の口縁部片で、146は隆線で区画文を描き、単列の押引文を沿わせるもので、阿玉台I a式か。

147は口縁下に付した突起を起点に隆線で枠状の区画文を描き、単列の結節沈線を沿わせるもので、阿玉台I a～I b式に位置づけられる。

148はやや幅広い内縁を有し、隆線による区画文に単列の結節沈線を沿わせる。149～151は深鉢の胴部

片で、149・151は波状文、150はひだ状の隆起を施し、隆線を蛇行状に垂下する。これら3点は阿玉台I b式に位置づけられる。

5類 (152~155)

加曾利E式土器を一括する。

152・153はキャリバー形深鉢の胴部片で、地文縄文を施文後、152は3本、153は2本一組の描線で懸垂文を描き、区画内を磨り消す。ともに加曾利EⅡ式に位置づけられる。

154・155は「浮文系意匠充填系土器」で、瓢形深鉢となる。ともに基幹文様の描線は複浮線(隆線)で、隆線の両脇にナゾリを施す。加曾利EⅢ式に位置づけられる。

第4群土器

1類 (156~158)

称名寺式土器を一括する。いずれも深鉢の胴部片で、沈線で意匠を描いてから、意匠内に列点を充填する。これらは称名寺Ⅱ式に位置づけられる。

2類 (159~169)

堀之内式土器を一括する。

159は波状縁深鉢の口縁部で、内側に屈曲気味の口縁下に横位の隆線を付し、キザミを施してから上端に単沈線を沿わせる。波頂部下には装飾として上下左右の4か所に盲孔を穿つ。上記の隆線で頸部以下を画し、地文縄文の単節LRを施文後、波頂部からは2本の沈線を垂下して画線内を磨り消しており、波底部には蕨手文を描いてから、同様に画線内を磨り消し、さらにボタン状の貼付文を付す。160も波状縁深鉢の口縁部であるが159とは異なり、幅広の口縁部文様帯を有する。下端を隆線で画するのは同様であるが、波頂部からはC字状貼付文を、波底部には鎖状隆線を付し、その内側に沈線を沿わせることにより、杵状の区画文を構成する。頸部以下は波底部の鎖状隆線の下端を起点に、盲孔を穿ってから囲むようにJ字文を描き、画線内を磨り消す。地文は単節LRである。161は波頂部および波底部近くに盲孔を穿ち、これを起点に沈線で意匠を施すほか、貫通孔を有することから、把手的な機能も具備する。162は内側に屈曲した口縁部、それも波頂部下に3個一組の盲孔を穿つ。口縁以下は地文として単節LRを施す。163は深鉢の胴部片で、地文縄文の単節LRを施文後、沈線でJ字文などを描き、画線内を磨り消す。164は平縁深鉢で、地文縄文の単節LRを施文後、多条化沈線を描線として意匠を描く。165も多条化沈線を描線として意匠を描くが、地文は施さない。166は深鉢の胴部片で、地文縄文の単節LRを施文後、沈線で渦巻文を描く。167・168は条線文系粗製土器で、167は口縁下に横位の沈線を引いて無文部を作出後、格子状に条線を施す。168は条線を蛇行気味に垂下する。以上は堀之内Ⅰ式に位置づけられる。

169は平縁の朝顔形深鉢の口縁部片で、口縁下に横位の組線(隆線)を付し、キザミを施す。その下は無文部を挟み、磨消縄文が展開する。このほか、口縁内面に内沈線を1条巡らせている。本例のみ堀之内Ⅱ式に位置づけられる。

第5群土器

2類 (170~174)

晩期後半(終末)の土器を一括する。

170は精製土器で、地文の条痕(刷毛目状)を施文後、断面が略三角形の沈線を描線として意匠を施す。

171~173は地文として条痕(刷毛目状)を施した粗製土器である。171は口唇をひだ状にしている。173



第57图 D地区遺構外出土縄文土器(3)

は胴部下半の破片であるが、底部付近にいくにつれ、条痕をケズリとナデで消しているのがわかる。以上は荒海式土器に位置づけられる。

174は小形で薄手の浅鉢ないし鉢形土器の口辺部で、地文縄文の単節LR(細縄文)を施文後、沈線で意匠を施す。胎土および焼成などの属性から本類に分類したが、断定はできない。

(2) E地区(第58～63図、図版35・52～56)

第1群土器

1類(1～15)

早期燃糸文系土器を一括する。

1～4は口縁部片で、口縁がやや外反気味に立ち上がり、口縁端部は外側に肥厚するという特徴を有する。施文域に関しては、1が口縁部と頸部に単節RLを、口縁直下には横位の原体側面圧痕を施す。2は口縁下に幅狭の指頭圧痕を巡らせ、頸部には単節RLを羽状施文する。3・4は口縁部と頸部に単節RLを施文し、口縁下には指頭圧痕を巡らせる。5は口縁部の肥厚がなく、口唇上と口縁部に単節RLを施文し、口縁下を無文とする。6～9は胴部片で、6・7は単節RLを条間が密接するように斜回転施文する。8も同様で、使用原体は単節LRを用いる。9は燃糸Lを縦位に密接施文する。以上は井草式土器に位置づけられる。施文的には、9が燃糸施文型(Y型)であるほかは縄文施文型(J型)に該当する。

10～14は口縁部片で、口縁の外反や肥厚は少なく、口縁断面系は円頭状に近いものがある。施文域に関しては、狭小な無文部を挟み、口縁下から地文縄文(燃糸文)を施文するという特徴を有する。使用原体は10が単節LR、11・12は単節RL、13が燃糸L、14は燃糸Rとなる。以上は夏島式土器に位置づけられる。施文的には、10～12が縄文施文型(J型)で、13・14は燃糸施文型(Y型)に該当する。

15は条間の疎らな単節縄文RLを施文した胴部片である。これのみ稲荷台式土器の縄文施文型(J型)に該当する。

2類(16～40)

早期沈線文系土器を一括する。

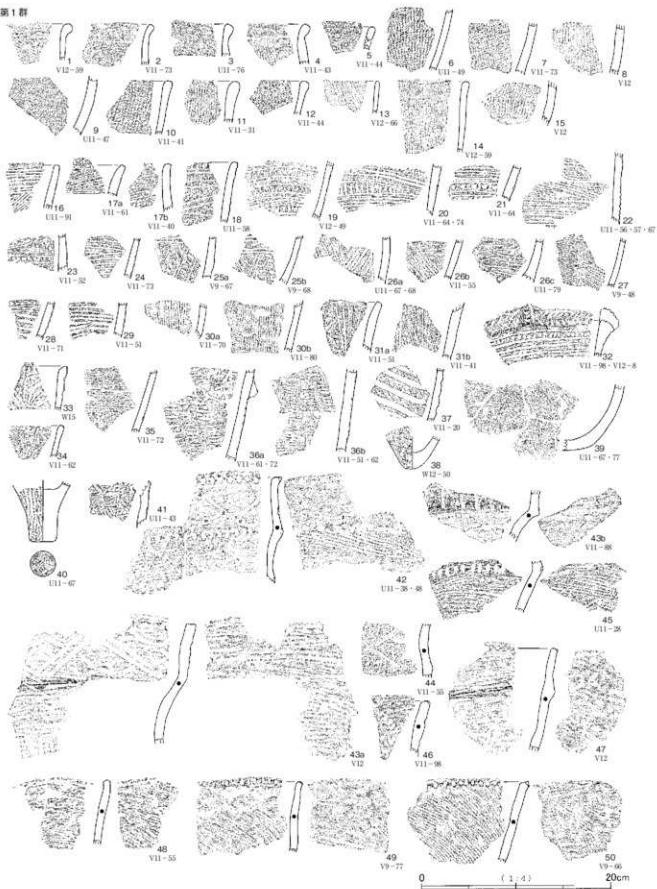
16はほぼ口縁直下から横位の細沈線を重畳施文し、その下には細沈線を描線として菱形文を描く。三戸式土器の古い部分ないしは、いわゆる竹之内式土器に位置づけられる。

17～29は細沈線を描線とし、19・21・28のように細沈線帯とキザミ列を交互に重畳施文するものや、17・20・22～24のように、キザミのみならず貝殻腹縁文を充填するものがある。25・26は胴部下半付近の破片であるが、細沈線で鋸歯状文を描き、25はキザミを充填する。30は器外面に縦位の貝殻条痕を施す。以上は三戸式土器に位置づけられる。

31は細沈線を描線として用いるが、上記の三戸式よりはややたく、かつ浅目である。32は波状縁で、口縁端部は外側に肥厚気味となり、口唇形態は外削ぎ状に近い。口唇上に短沈線で綾杉文を施す。33の口唇部形態は内削ぎ状を呈するが、文様描線はための沈線を用いる点などで、前代とは区別される。34は口縁端部にキザミを施す以外は無文となる。35は横位の沈線を重畳施文した沈線帯とキザミを巡らすものであるが、前代に比較して雑な施文である。36は横位の短沈線を重畳施文し、さらに突起を付す。37は太沈線を文様描線として用いる。以上は田戸下層式土器に位置づけられる。

38～40は尖底部で、38・39ともに外面に擦痕状の器面調整を施す。三戸式土器に位置づけられる可能性が高い。40は天狗鼻状の尖底を呈し、極端な厚底で、外面と狭小な底面に条痕を施す。これのみ田戸下層

第1群



第58图 E地区遺構外出土縄文土器(1)

式土器に位置づけられる。

3類 (41～64)

早期条痕文系土器を一括する。

41はタスキ状文を描き、細かな刺突を充填してから、交点に円形竹管による刺突を施す。鶴ガ島台式土器に位置づけられる。42は口頸部が2段の括れを有し、口縁端部と段上にキザミを巡らす。主要な施文域は1段目で、太沈線でやや崩れた菱形文を描き、交点に円形竹管による刺突を施す。43も2段の括れを有する器形で、1段目は太沈線による崩れた菱形文を描き、2段目には太沈線による縦位の短沈線を施す。44は太沈線で格子目文を描く。45は頸部から胴上部で、段上にキザミを巡らせる。46は口縁端部にキザミを施し、口頸部に半截竹管による格子目文を施す。47～56は口辺部の破片で、基本的には器内外面ともに貝殻条痕を施しており、装飾として口縁端部にキザミを施す程度、という点で共通する一群である。48・49は小波状縁を呈し、ともに口縁端部にキザミを施す。50～52は平口縁を呈し、ともに口縁端部にキザミを施す。53～56は平口縁を呈し、器内外面とも横方向を主とする貝殻条痕を施しており、一切の装飾は施されない。57～61は胴部片で、器内外面とも貝殻条痕を施す。このうち、58は原体に用いた貝殻の放射肋の幅が狭いため、細い貝殻条痕となっている。62は遺存高19.7cmを測り、内外面に貝殻条痕を施す。63は遺存高8.8cmを測り、器面調整は62とほぼ同様である。64は底部で、底径6.4cm、遺存高7.1cmを測る。端部が張り出し、底面は小さめで、上げ底気味の平底を呈する。以上は鶴ガ島台式土器～茅山下層式土器に位置づけられる。飾られたもの(文様を有する土器)は過渡期的な様相が目立ち、分別は困難であった。同様にして飾られないもの(ほぼ貝殻条痕のみの土器)も決定的な属性に乏しく、分別は困難で、このような位置づけとなった。

第2群土器

3類 (65～68)

関山式土器を一括する。

65は地文縄文単節RL(0段多条)を施文後、真正コンパス文を施す。66は「幅狭等間隔施文ループ」を施している。67は地文として異条斜縄文を施文した胴部片である。68は口縁が小波状を呈し、口縁下に条線帯、その下はループ文を多段化施文する。以上は関山Ⅱ式に位置づけられる。

4類 (69～86)

黒浜式土器を一括する。

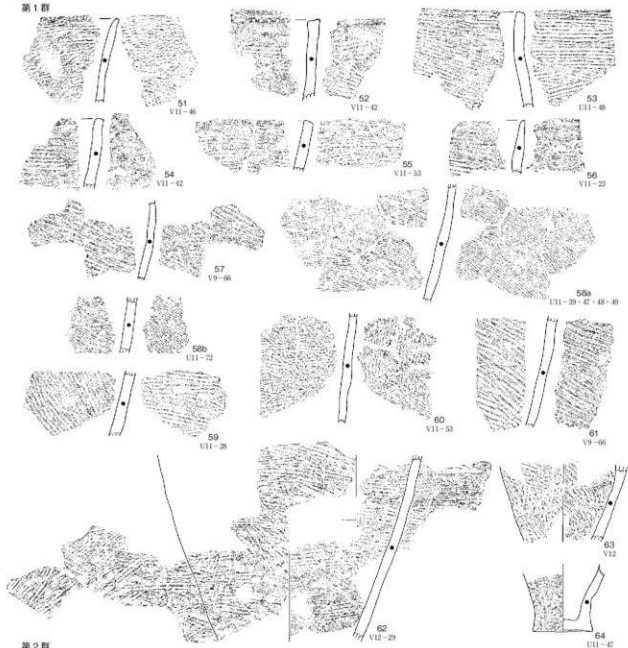
69は平縁深鉢の口縁部片で、器面が荒れていて地文がわりにくいが、ループ文の多段施文か。70は不規則な斜沈線を多条施文する。71は地文縄文の無節Lを施文後、横位の沈線を引く。72もほぼ同様な施文となる。73は平行沈線で意匠を描くものである。74は地文を施さず、平行沈線を描線として肋骨文を描く。75も同様であるが、地文縄文の単節LRを施文している点が異なる。76は地文縄文の単節RLを施文後、爪形文を3段施し、さらに円形竹管による刺突文を加える。77は地文縄文の単節RLを施文後、円形竹管による刺突文を垂下する。

78～84は地文縄文のみが施されたものを集めた。使用原体は78が単節LR、79・80・82が単節RLで、81・83は単節LRとRLで羽状施文する。84は単節RL燃系L(2条巻き)で羽状施文するものである。

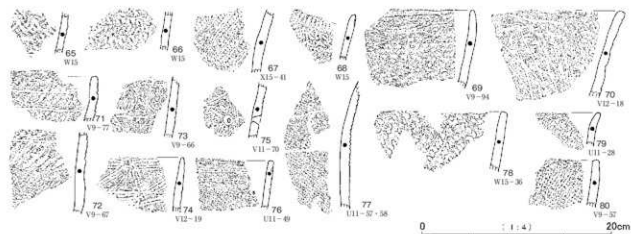
85は貝殻文土器で、地文として貝殻腹縁文を施す。

86は台付土器の台部で、推定台径10.0cm、遺存高4.6cmを測る。地文として燃系Rを施文する。

第1群



第2群



0 : 1 : 4 20cm

第59图 E地区遺構外出土縄文土器(2)

5類 (87~126)

浮島式・興津式・前期末縄文土器を一括する。87は波状かつ複合口縁の深鉢で、波頂部から隆線を垂下させ、口縁部に3列の爪形文、口縁端部にキザミを巡らせる。頸部以下は地文として疎らな捺糸Rを施文後、爪形文で葉脈文を描き、円形竹管による刺突を垂下する。89・90は地文として疎らな捺糸Rを施文後、爪形文を施す。91・98は地文として疎らな捺糸文を施文後、平行沈線で菱形文を描く。92・93は地文として疎らな捺糸Rを施文後、沈線で意匠を施す。95は地文として疎らな捺糸文を施文後、円形竹管による刺突文を施している。96・97は地文として疎らな捺糸文を施文後、平行沈線で木葉文を描く。99・100は地文として貝殻腹縁文を施文後、爪形文で意匠を施す。以上は浮島Ⅰa式に位置づけられる。

101は波状口縁の深鉢で、平行沈線と「凸形変形爪形文」で意匠を施す。102は貝殻腹縁文を地文として施文後、「凹形変形爪形文」で意匠を描く。104~107は平行沈線を文様描線とするものである。これらのうち、101・103・104は浮島Ⅰb式に位置づけられる。102はその属性から浮島Ⅱ式に位置づけられよう。105~112は浮島Ⅰa式~浮島Ⅱ式に伴う粗製の土器であろう。

113・114は口縁部に縦位の条線帯を施文する。117ではこの下に地文の波状貝殻文が施される。118は複合口縁を呈し、かつ頸部に輪積み痕を残した上で、指頭圧痕を巡らせる。120は凹凸文を施文するが、前代よりも弛緩している。113~121はその属性から興津式土器に位置づけられるが、その中の細分は果たせなかった。

122~126は縄文系粗製土器を集めた。122は遺存高19.8cm、推定口径16.6cmを測る。単口縁かつ円筒形に近い深鉢で、横位の結節縄文を重畳施文する。わずかに残存する底面には網代痕が見られる。124は複合口縁で、地文縄文として付加条縄文(軸LR。L1条付加)を施文する。125・126は横位の結節縄文を重畳施文するものである。

6類 (127~158)

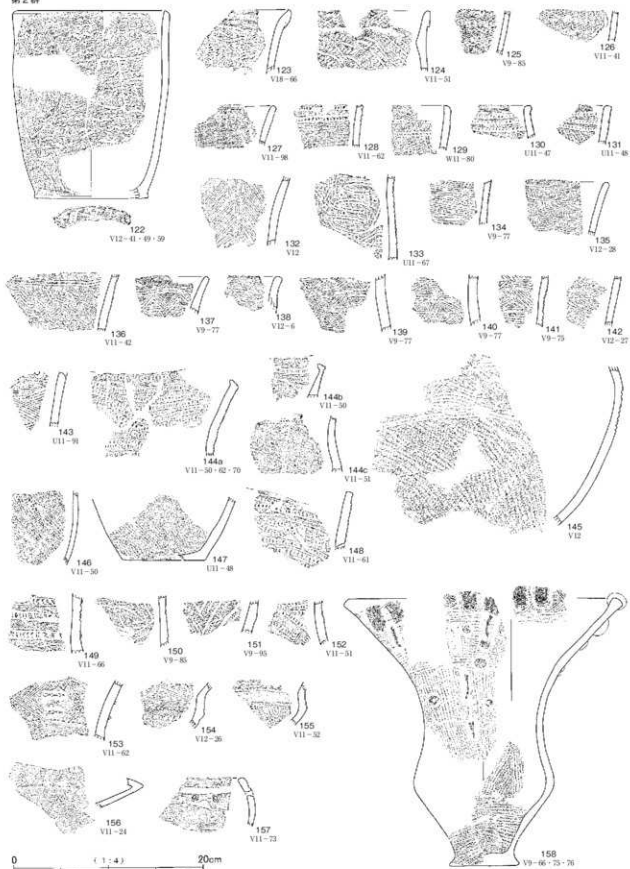
諸磯式土器を一括する。

127~131は地文縄文を施文後、口縁部に複列ないし3列の爪形文を施す。132は多条化沈線を描線として葉脈文を描く。133は平行沈線で入組木葉文を描き、さらに円形竹管による刺突文を充填する。134は横位の多条化沈線を施文後、円形竹管による刺突文を垂下している。135・136は波状文を描く。137~140は「多重鋸歯状文」を描くもので、141・143は菱形文を描いたものと思われる。144はやや幅狭な爪形文を描線として意匠を描く。145は鉢形土器で、平行沈線で意匠を描くが、構成は乱れがちである。146は深鉢の胴部片で、地文として単節RL(直前段多条)を施文する。147は底部で、推定底径10.6cm、遺存高6.8cmを測る。地文として単節RL(直前段多条)を施す。154・155は浅鉢で、後者は2列の爪形文の間を磨り消している。以上は諸磯a式に位置づけられる。この中でも127~132は古手のもので、144などは爪形文が幅狭である以外は次期の様相の萌芽が認められ、新手なものとして捉えられる。

148~152は幅広爪形文を文様描線として意匠を描くものを集めた。156・157は浅鉢で、156は胴中位が算盤玉状に屈曲する。157は無頸の壺に近い器形を呈するもので、口縁は内湾気味に立ち上がる。口縁下に狭小な無文部を画すように横位の沈線を引き、その下に一對の貫通孔を穿つ。以上は諸磯b式に位置づけられる。深鉢を見る限り、いずれも幅広爪形文を文様描線とする属性から、古手のものとして捉えられる。

158は同一個体の破片を図上で復元したものである。口縁が外反して立ち上がり、胴部は括れてその下

第2群



第61图 E地区遺構外出土縄文土器(4)

半部で膨らみ、底部に向かってすぼまるが、底部の裾に至って外側に張り出すという器形を呈する。地文として集合条線を施すが、口縁部が矢羽根状、頸部は横位、胴部は縦位を主とし、その下半で再び横位となる。装飾は口唇をまたぐように耳状突起を細かい単位で貼付し、頸部および胴部は縦位の貼付文とボタン状突起を、やはり比較的細かい単位で貼付する。推定口径28.0cm、底径7.4cm、器高は復元で28.8cmである。以上の属性から、諸磯c式に位置づけられる。胎土・焼成はもとより、そのほかの諸属性から、搬入品である。

第3群土器

1類 (159~185)

五領ヶ台式土器を一括する。

159~162は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片である。159は波頂部の外面に、中央部分がやや突出した「人面的な略ハート形の突起」を付し、中央部分の両側に眼窩状の浅い盲孔を穿つ。内面には逆「の」字状の太沈線を施しており、外面の施文は沈線による区画文に沿って、三角形印刻文を施す。160は口唇に半円形の突起を付してから貫通孔を穿つほか、外面に突起を付す。161・162は3本一組の沈線で区画文を描くもので、162には地文として単節RLを施す。163~165は平縁深鉢の口頸部片である。器形的には165がほぼ単純な深鉢で、163・164は頸部が碗状に膨らむ。施文は163が地文として単節RLを施文後、口縁下に沈線を巡らせており、164は頸部に平行沈線と三角形印刻文を組み合わせたもので意匠を施す。165は口縁の内側が肥厚する。166~170は深鉢の胴部片で、いずれも平行沈線間に交互刺突文を施すほか、166のように三角形刺突文を沿わせるものがある。171~175は地文縄文を施文後、隆線を貼付するもので、173のように隆線の脇に沈線を沿わせるものも含む。

176~184は粗製土器を集めた。176は口縁端部にキザミを施すほかは器面調整のみとなる。177~183は縄文系粗製土器である。177は単口縁、178・179は複合口縁を呈し、地文縄文は口縁端部にも施している。180~183は縦位に結節縄文が施された胴部片で、使用原体は180・181が単節RL、182・183や先述の177は無節縄文、それも撚りの緩さから見て、「反撚り」を用いている可能性が高い。185は底部付近の破片であるが、縦位の結節縄文が施されている。184はフネガイ科の貝殻を原体とする貝殻腹縁文を縦につながるように施文しており、それが幾条にも垂下している様は、縦位の結節縄文と同様の施文原理を読み取ることができる。このため、貝殻腹縁文を地文としているにもかかわらず、前期後半や前期末葉に位置づけなかった。

2類 (186)

阿玉台式土器を一括する。

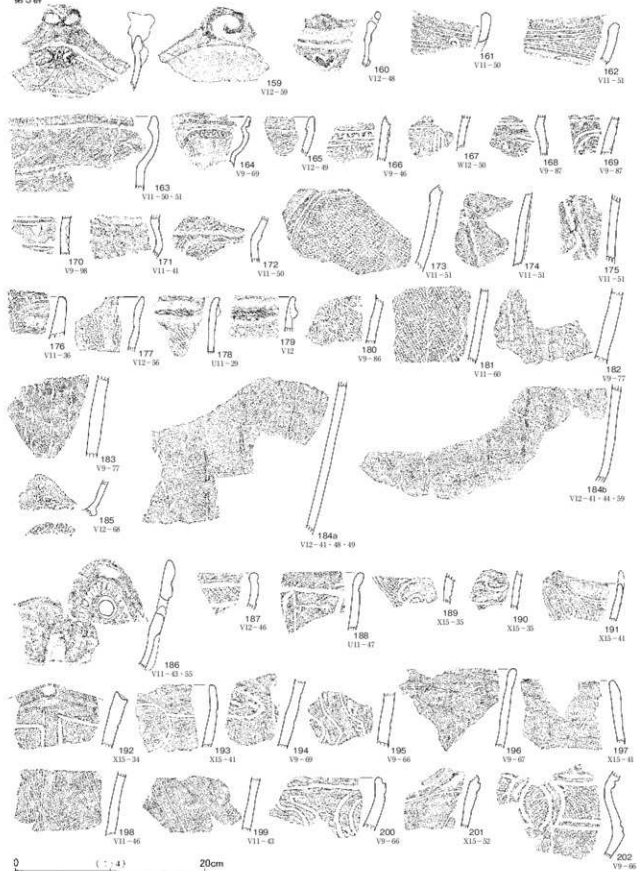
186は非対称な双頭状の波状口縁を呈する。大波状部の中央には貫通孔を穿ち、肥厚した口縁に沿って幅広い爪形文を施す。小波状部は肥厚した口縁に沿って幅広い爪形文のみが施される。阿玉台Ⅲ式に位置づけられる。

5類 (187)

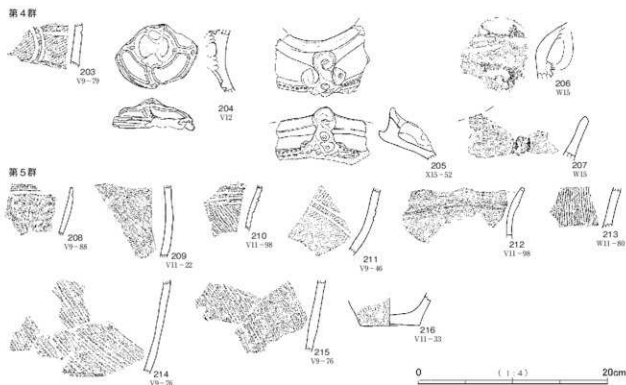
加曾利E式土器を一括する。

187はキャリバー形深鉢の口縁部片で、地文縄文の単節RLを施文後、隆線で区画文を描き、内側に沈線を沿わせる。本例では区画文の隆線が低平化を示しており、加曾利EⅡ式に位置づけられよう。

第3群



第62图 E地区遺構外出土縄文土器(5)



第63図 E地区遺構外出土縄文土器(6)

第4群土器

1類(188~199)

称名寺式土器を一括する。

188~190は磨消縄文で意匠を描くものである。188はそのうちでも最も古く、「帯状施文」「文様描線の不交差」「交互施文」という施文原理に慣れておらず、かなり不規則な施文となっている。189・190はより後出のもので、基幹文様であるJ字文を磨消縄文で描く。これらは称名寺I式に位置づけられる。

191~195は意匠内に列点を充填するものと、沈線による意匠のみを施すものを集めた。191~193を見る限り、いずれも文様描線が交差しており、施文原理の規範の崩壊過程がうかがわれる。これらは称名寺II式の終末期のものとして位置づけられる。

196~199は格子目文系粗製土器およびその他を集めた。196の沈線は浅く、198・199では条線文系粗製土器とも区別し難いような、手抜きとも見える描き方をしている。これらの属性から見て、191~195に伴う粗製土器として解釈するのが妥当であろう。

2類(200~207)

堀之内式土器を一括する。

個体数および器形的にも限定されたものばかりである。200・201は地文を施さず、沈線のみで意匠を描くもので、西関東の影響がうかがわれる。逆に波状口縁深鉢の口縁部片の207はC字状貼付文など、東関東や南東北の影響がある。同様にして、頸部が張る深鉢の202・203、壺ないし注口付土器の蓋である204、壺ないし注口付土器となる205・206も東関東や南東北の影響抜きでは成立しない器種である。これらを網取式土器と捉えるか否かはともかく、現状では堀之内I式として位置づけておきたい。

第5群土器

2類 (208~216)

晩期後半(終末)の土器を一括する。

208・209は地文として捺糸Rを施した粗製土器である。208は口縁下に横位の沈線を引いて以下を直し、口縁部にのみ横方向の捺糸文を施す。209は捺糸文を地文として施した胴部片となる。これらは千網式土器に伴う粗製土器に位置づけられる。

210は断面が三角形を呈する沈線で意匠を施し、刺し切り状の細かな刺突文を充填する。211は地文縄文を施した後、断面が角頭的な沈線で意匠を施す。212は口唇がひだ状を呈し、口縁端部が外側にやや肥厚する粗製鉢形土器となる。213~215は地文として条痕(刷毛目状)を施した粗製土器で、いずれも器形は鉢形ないし深鉢になるものと思われる。216は底部で、底径6.0cm、遺存高2.7cmを測る。底面近くまで条痕(刷毛目状)を施す。これらは荒海式土器に伴う粗製土器に位置づけられる。

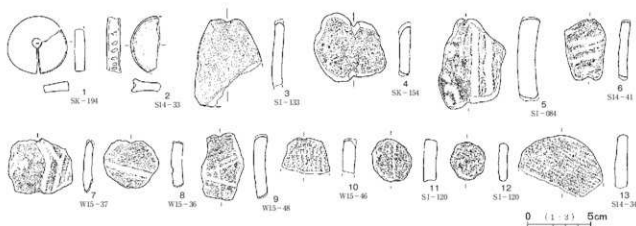
7 土製品 (第64図、図版63、第7表)

出土した縄文時代の土製品は、土製塊状耳飾、土器片錘、土製円板である。遺構外出土品がほとんどである。

1・2は土製塊状耳飾である。どちらも表裏面が平坦で、断面形は中央部に向かって薄くなる台形を呈している。1は、縄文時代の土坑SK-194から出土しているが、覆土中のため、混入品である可能性が高い。1/4の破片で、復元すると直径4.5cm~4.7cmになる。3は1/2の破片で、復元径は4.50cmである。側面を溝状に窪め、刺突文を巡らしている。遺構外出土品である。

3~10は土器片錘であるが遺構に伴うものはない。3は側面の一部を研磨している。

11~13は土器片の周囲を調整して円形に仕上げた土製円板である。11・12は縄文時代前期の竪穴住居SI-120から出土し、遺構に伴うものであろう。黒浜式土器を使用している。



第64図 縄文時代土製品

第7表 縄文時代土製品計測表(第64図、図版63)

番号	遺構番号		遺物番号	種類	長cm	幅cm	厚cm	孔径mm	重量g
	(23)	(44)							
1	SK-194	(23)SK-014	0001	球状耳飾	[3.50]	[2.00]	0.70	(8.00)	[6.08]
2	S14-33	(44)S14-33	0001	球状耳飾	[4.40]	[2.20]	1.05		[9.68]
3	SI-133	(23)SI-002	0004	土器片錘	[6.90]	[5.05]	0.80		[30.10]
4	SK-154	(32)SK-015	0008	土器片錘	5.40	5.50	0.90		27.15
5	SI-084	(44)SI-001	0026	土器片錘	7.00	4.90	1.50		58.22
6	S14-41	(44)S14-41	0001	土器片錘	4.90	3.30	0.80		13.88
7	W15-37	(46)W15-37	0001	土器片錘	4.40	5.10	0.70		19.06
8	W15-36	(46)W15-36	0003	土器片錘	3.80	4.40	0.90		15.28
9	W15-48	(46)W15-48	0001	土器片錘	5.40	3.30	1.00		18.24
10	W15-46	(46)W15-46	0001	土器片錘	[2.90]	[3.80]	1.00		[11.50]
11	SI-120	(37)SI-002	0001	円板	3.50	3.00	1.00		10.84
12	SI-120	(37)SI-002	0001	円板	3.00	2.70	0.75		5.57
13	S14-34	(44)S14-34	0001	円板	[4.80]	[6.60]	1.00		[27.03]

8 石器(第65~75図、図版57~63、第8~10表)

富士見遺跡D・E区では、縄文時代の石器は合計2935点出土した。そのうち石核、剥片類及び軽石を除いた利器(狭義の石器)は大別20種、計445点を数える。

内訳は、石鏃(石鏃未成品61点を含む)123点、楔形石器82点、石匙2点、石錐1点、二次加工ある剥片35点、使用痕ある剥片1点、打製石斧26点、磨製石斧21点、局部磨製石斧2点、礫器12点、磨石類39点、敲石23点、砥石5点、石皿49点、台石1点、石錘2点、石棒1点、有孔石製品1点、軽石石製品1点及び側面調整礫18点である。

先の調査成果(A~C区)に照らし合わせれば、今回の石器組成には、新たに礫器、台石、石錘、石棒、有孔石製品が加わっている。

以上の石器の出土数量と内訳については、遺構と器種の対応関係を第8表に、石材と器種の対応関係を第9表にそれぞれ示したので、適宜、参照されたい。

(1) 石鏃(1~89)

遺構内から34点、遺構外から28点出土した。有茎鏃1点と基部が直線的な平基無茎鏃(三角形)5点のほかは、すべて基部に抉りのある凹基無茎鏃となっている。

主体をなす凹基無茎鏃は抉りの深浅、長幅関係及び尖頭部周辺の形状により、さらに細分が可能である。

有茎鏃(20)は、先端部と茎が欠損している。器面が押圧剝離による精緻で平坦な剝離面構成され、良質のチャートを用材としている。関東地方の有茎石鏃は東北地方から伝播し、その出現は後期中葉と言われている。したがって、本品の帰属時期は後期以降に該当する可能性が高い。25は凹基無茎鏃の一種であるが、先端が錐のように細長い、特異な「先端突出形」である。この形態は縄文時代草創期にはすでに登場しており、その存続時期は縄文時代の全般にわたる。

完形品の大きさは、長さ1.2cm~3.3cm、幅0.6cm~1.7cm、厚さ0.3cm~0.5cm、重量0.3g~2.0gの範囲にあり、平均値は長さ2.0cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、重量は0.9gとなっている。

鈴木道之助によれば、縄文時代前期には、基部の抉りの深い凹基無茎鏃が主体を占め、長さは1cm~3cm、重量は0.5g~2.0gに集中するというが、この見解とよく調和する(鈴木1983)。なお、加工が粗雑な6と9については未成品の可能性がある。

通稱名/部種		石鏤	石鏤毛皮品	磨削石部	一石鏤	石鏤	石鏤毛皮品	磨削石部	二次加工/心之薄片	打削石部	磨削石部	磨削石部	磨削石部	磨削石部	磨削石部	手持/風石	砥石	石鏤	白石	石鏤	石鏤	石鏤	石鏤	石鏤	石鏤	石鏤	石鏤	石鏤	計		
SI-084	44	SI-001		1											1		1										1	4			
SI-101	47	SI-002																										1	1		
SK-301	42	SK-003													1														1		
SK-303	42	SK-030																											1		
SK-304	42	SK-028																										1	1		
SK-305	42	SK-034									1				1				1										3		
SK-307	42	SK-027													1														1		
SK-314	42	SK-004								1																			1		
SK-315	42	SK-030									1								1										2		
SK-315	42	SK-001							1																				1		
SK-316	32	SK-001																	1										1		
SK-317	42	SK-033	1																										1		
SK-300	32	SK-003																									1		1		
SK-380	26	SK-006								2																			2		
SK-381	26	SK-007													1														1		
SK-433	37	SK-002															1												1		
47	SD-001			3				1																	1			14	19		
26	SD-001									1																			1		
26	SD-006										1																	2	3		
32	SD-002								1																				1		
32	SD-004																		1										1		
49	SD-001			1																									1		
機爪	23	SI-006													1														1		
R13		R13													1														1		
R14		R14																									5		2	8	
R15		R15	1	1			1																			1			1	5	
R16		R16																											1	1	
R19		R19																											2	2	
S13		S13																											14	15	
S14		S14	2	6				1	3	1		2	5	1				14			1			3	1			14	54		
S15		S15	7	12	13			11	1	5			1	2				1	2					1	4			400	500		
S16		S16	2	2	3			2					1	1	1			1								1			18	32	
S17		S17			1					1																			5	7	
T12		T12			2																								1	3	
T13		T13			3					1																			3	8	
T14		T14																											4	4	
T15		T15	1							1							2												3	7	
T16		T16	1	3				1	1						1											2			1	10	
T17		T17	1																								1		6	7	
T18		T18																											2	2	
T20		T20								1																				1	1
U11		U11	2	1	2	1				1					1	1				1	2								7	19	
U12		U12			2										1															1	4
U15		U15	2		2																									2	7
U16		U16								4	2		1	6	8											1				30	
U18		U18													1															1	2
U19		U19																												1	1
V11		V11	2		4						1	1		3	1												1	1		12	25
V12		V12			1					1	1		1	1	1															3	9
V14		V14	1		2																									1	4
V15		V15								1																				1	2
V17		V17									1																			1	2
Y09		Y9	4		2	1								1	3												1		7	19	
W11		W11													1															1	1
W15		W15																												2	2
X15		X15	1												1															1	2
5T		5T	1							1																				1	2
9T		9T															1													1	1
表1-3-955		表1-3-955	1												1															2	5
表面採集		表面採集																												1	4
遺蹟列小計			28	19	50	2	1	0	19	1	24	10	1	11	28	20	0	3	33	0	2	1	1	0	12	18	0	0	625	0	909
総計			62	63	82	2	1	0	35	1	26	21	2	12	39	23	0	5	49	1	2	1	1	1	18	22	0	0	2465	3	2935

第9表 縄文時代石器石材別器種組成表

器種/石材	石 鎌	石 鎌 未 成 品	楔 形 石 器	石 砧	石 錘	二 次 加 工 有 り の 剥 片	他 出 処 有 り の 剥 片	打 割 石 器	磨 製 石 器	短 形 磨 製 石 器	磨 部	磨 石 類	磨 石	砥 石	石 皿	台 石	石 錘	石 錘 類	石 小 形 磨 製 品	石 小 形 磨 製 品	磨 製 磨 製 磨 製	石 砧	剥 片 類	磨 石	計	
ガラス質黒色安山岩		1			1																				2	
チャート	53	58	71	1	1	27	1	1															16	2333	2584	
パシレイ岩									1																1	
カルンフェルス				1		1		9	1		1	2												7	22	
メノウ	1		1																					1	3	
安山岩								4			2	15	1	1	20									4	47	
花崗岩								1			1	2	2	4											10	
凝灰岩			1						2	1					1								1	1	7	
玉髄																								1	1	
結晶頁岩																								3	3	
輝石																					1			3	4	
結晶片岩								1																2	3	
絹雲母片岩																			1						1	
絹雲母片岩				1		1																			2	
黒曜石	5	2	4			3																	3	64	81	
砂岩								3	1	1	4	14	10	3	2	1							13	10	64	
石英			1																						2	3
石英片岩								1			2	1	3												9	
手板岩																									1	1
粗粒玄武岩								1																	1	
多孔質安山岩												2		21											23	
粘板岩			1						1															1	3	
頁岩																								7	7	
滑石凝灰岩									1																1	
凝灰岩	1		1			2		1			2	3	2	1	1	1	1						3	1	7	27
凝灰岩質凝灰岩			1																					1	1	2
緑色岩								4	13				3												20	
緑色凝灰岩								1																	1	
凝灰片岩																			1						1	
合 計	62	61	82	2	1	33	1	36	21	2	12	39	23	5	49	1	2	1	1	1	1	18	22	2462	3	2935

遺存状況については、完形品が28点、欠損品34点となっており欠損率は約54%である。欠損部位は先端7点、片脚18点、先端+片脚1点、先端+両脚2点、両脚1点、先端+基部1点、片側1点のほか、断片3点(脚部2点・胴部断片1点)となっている。石鎌などの刺突具に特有の衝撃剥離(先端部の使用痕)、縦溝状剥離が4例(14・32・38ほか)に見られた。

石材はチャート55点、黒曜石5点、メノウ・流紋岩各1点で構成される。主要なチャートは小円礫であり両極打法によって素材が生産されている。黒曜石には信州系と神津島産の2種が見られる。

調整技術については総じて両面加工を基調としており、押圧剥離により平坦な器面と直線的な二側縁が作られている。

一方、石鎌の未成品が遺構内から42点、遺構外から19点出土した。この中には楔形石器を素材とした例が15点(49・52・66・67・69~71・75・79・80・82~84・87・89)あり、素材生産の様相を探る上で特筆される。

欠損品は、わずか4点(74ほか)で遺存率が高い。完形品57点の大きさの平均値は長さ2.8cm、幅2.0cm、厚さ0.8cm、重量4.9gである。いずれの値も石鎌を上回っており、特に厚さと重量の差異が顕著である。

石材の内訳は、チャート58点、黒曜石2点、ガラス質黒色安山岩1点となっており、チャート主体の構成は、石鎌等の剥片石器や楔形石器の石材傾向とよく調和する。

(2) 楔形石器 (90~105)

楔形石器は両極打法の所産でありピエス・エスキーユとも呼ばれる。遺構内から32点、遺構外から50点出土した。

このうち99については両極打撃とは別の二次加工が見られ、石鏃未成品と見なすことも可能であるが、全体的には両面ないしは片面に礫面をとどめ、かつ薄手であることから、その大半が扁平な小円礫を素材としていたことがわかる。

石材はチャート71点、黒曜石4点のほかメノウ・ホルンフェルス・石英・流紋岩・流紋岩質凝灰岩・凝灰岩・粘板岩各1点で構成される。チャート偏重の傾向は石鏃と同様である。

長さは1.3cm~5.6cm、幅0.9cm~5.3cm、厚さ0.4cm~3.6cm、重量は0.8g~60.4gの範囲にあり、完形品72点の大きさの平均値はそれぞれ2.9cm、2.5cm、1.1cm、10.2gとなっている。

平面形は四辺形を基本とし、全長が幅の2倍を超えるものは7点(91・96ほか)があるが、少数派である。また、扁平なものが多く、上下両端ないしは左右両端は階段状の小剥離痕が対をなし、側面形は紡錘形を呈する。

以上の技術形態学的特徴から、楔形石器は両極打法の所産であることは確実であるが、機能については石核とする説、それ自体を利器とする説に大別される。

これに対して、本遺跡の場合には、未成品のあり方から、主として扁平なチャートの小円礫をもとに石鏃の素材生産が行われたことは明白である。

その技術基盤である両極打法は、石核が剥離の進行に伴い小型化した場合や、原材料が小型で通常の方法では剥片の剥離が困難な場合に用いられたようである。そして、剥離の途上で生じた両極剥片・削片と最終的に残された扁平な石核(楔形石器)の双方が使われている。このように本遺跡の場合には石核か利器かという二者択一の問題ではないようである。

(3) 石匙 (106・107)

遺構外から2点出土した。石匙は縄文時代草創期後半(爪形文期)に登場した後、早期末葉に一般化し前期に盛行するようであるが、本遺跡では少数にとどまる。

形態は縦型(縦長)と横型(横長)各1点となっており、石材は硬質頁岩・チャート各1点である。

106は縦型の石匙である。表裏に磨耗痕とポリッシュ(光沢)が見られる、おそらく何らかの使用痕であろう。硬質頁岩製の大型剥片を素材としており、表面の二次加工は全周にわたるが、裏面はつまみ部の作出にとどまっている。表面左下細縁の二次加工は急角度であり、旧石器時代のナイフ形石器の刃漬し加工に近いが、それ以外は比較的平坦な剥離面で覆われている。石材が縄文時代の石器には、あまり使用されない東北産の硬質頁岩であることと、二次加工面と第一次剥離面の風化の程度に明瞭な差異が見られることから、縄文人が採集した旧石器を再利用したものと判断される。このような石材の二次的な利用は、硬質の石材に恵まれない千葉県下では、しばしば見られる現象である。

107は横型の石匙である。横長剥片を素材としており、つまみ部と下端部を加工している。第一次剥離面が広く残されており、形態も不整形で粗雑な印象は拭えない。石材はチャートである。

(4) 石鏃 (108)

遺構外から1点出土した。108の平面形は、あたかも有茎鏃のようであるが、分厚い棒状を呈しており形態的に区別される。二次加工は比較的急角度である。先端部は、あまり尖鋭ではないが、磨耗痕(使用痕)

が観察される。石材はチャートである。

(5) 二次加工ある剥片(109~118)・使用痕ある剥片

二次加工ある剥片とは加工が部分的であるため定形的な石器から除外されたものをいう。この中には何らかの器種の未成品が含まれている可能性が高い。

遺構内から16点、遺構外から19点出土した。

石材はチャート27点、黒曜石3点、流紋岩2点、ホルンフェルス・硬質頁岩・ガラス質黒色安山岩各1点である。大半は石蕨の未成品の可能性が高いが断定はできない。ただし、114は二次加工面と第一次剥離面の風化度に明瞭な差異が見られ、用材もガラス質黒色安山岩で通常の縄文石器と異なることから、石匙(106)と同様に、旧石器の再加工品の可能性が高い。

なお図示していないが、関連資料として使用痕ある剥片が遺構外から1点出土した。横長剥片の一側縁に連続的な刃こぼれが観察される。石材は良質なチャートである。

(6) 打製石斧(119~140)

遺構内から2点、遺構外から24点出土した。石材はホルンフェルス9点、安山岩4点、緑色岩4点、砂岩3点、流紋岩・石英斑岩・花崗岩・結晶片岩・チャート・緑色凝灰岩各1点であり、ホルンフェルスの多用が特徴的である。

完形品の大きさの平均値は長さ9.0cm、幅5.0cm、厚さ2.5cm、重量178.1gとなっている。

剥片の中に石斧の調整段階を示すものがなく未成品もないことから、基本的に完形品として遺跡内に搬入された模様である。扁平な礫を素材としており、二次加工は平坦剥離に近いものの、大半は素材の礫面や主要剥離面を残しており、加工の範囲は両側縁と刃部に集中する傾向にある。

縄文時代の打製石斧の形態には、短冊形(長方形)、撥形(三味線の撥に似た形態のもの)、及び分銅形(上下両端が張り出し中央部両側縁に挟りがあるもの)の3つの形態があり、短冊形は中期を中心に前期後葉から中期末葉に、撥形は前期を中心に早期後葉から前期中葉に、分銅形は後期を中心に中期中葉から晩期にかけて登場する。

本遺跡では、短冊形(137・140)のほか、扁平礫の一端に刃部を作出した礫石斧(120・121・124・129・132~134ほか)、筈状石器に類似した片刃石斧(119・127・131・138・139)、大型剥片素材の不定形石斧(125)がある。

撥形はないが、全体的に定形化しておらず分銅形も欠落していることから、おおむね縄文時代前期の一般的な特徴を備えている。

転用例は8例見られた。うち7例(122・123・126・130・135~137)には、両面に研磨面が残されており、磨製石斧からの転用例であることがわかる。石材は緑色岩4点(122・123・135・136)、緑色凝灰岩(126)・結晶片岩(137)・ホルンフェルス(130)各1点である。125は敲石の断片を再利用しており、片面に礫面と敲打痕を残している。石材はホルンフェルスである。

(7) 磨製石斧(141~150)・局部磨製石斧(151・152)

磨製石斧は、遺構内から11点、遺構外からは10点出土した。総計21点のうち完形品はわずか3点(142・144ほか)にすぎず、基部や刃部などの断片的な資料が大半を占めている。

一般に縄文時代の磨製石斧は、形態から定角式磨製石斧、乳棒状磨製石斧及びその他の石斧に区分される。定角式磨製石斧は二側縁及び頂部が研磨されたもので断面は隅丸長方形である。これに対して乳棒状

磨製石斧は、身が円筒状、頭部は細い棒状で断面が楕円形を呈する。刃部は分厚い両刃(蛤刃)である。

本遺跡出土の磨製石斧の内訳は、乳棒状磨製石斧8点(142・144・146・148・150ほか)、定角式磨製石斧1点(147)、その他の形態と断片資料(形態不明)13点(141・145・149ほか)となっている。また石材は乳棒状磨製石斧と定角式磨製石斧が緑色岩、その他が緑色岩4点及び凝灰岩2点のほか、粘板岩・粗粒玄武岩、溶結凝灰岩・砂岩・ホルンフェルス・ハンレイ岩各1点となっている。

磨製石斧はホルンフェルスを主体とする打製石斧とは異なり比重が大きく、より堅牢な緑色岩を多用しているが、このことは両者の機能的差異をよくあらわしている。

その一方で使用頻度の高さにより、その多くは欠損しており、完形品はわずか3点(142・144ほか)にすぎず、基部や刃部などの断片的な資料が大勢を占めている。また再加工品が3点(142・143・144)ある。

いずれの資料も刃部には、刃こぼれ、敲打痕、欠損などの損傷が認められるが、その中で141には刃部の表裏に線状痕が見られる。線状痕は刃部に対してやや斜めに交差しており、しかも両面に見られる。縦斧の機能を明確に示しており特筆される。

関東地方では、定角式石斧が後期、乳棒状磨製石斧が前期(黒浜期)から一般化するといわれているが、本遺跡でも磨製石斧の用材に乳棒状に関連の深い緑色岩が多用されておりこの趨勢とよく合致する。

このほか関連資料として、局部磨製石斧が遺構の内外から各1点(151・152)出土した。いずれも小型の扁平礫を素材としており、一端を加工して刃部(片刃)を作出し、研磨が施されている。いわゆる「礫石斧」といえよう。石材は凝灰岩と砂岩である。

(8) 礫器(153・154)

遺構内から1点、遺構外から11点出土した。いずれも円礫を素材としており、一端に粗雑で部分的な加工が施されている。刃部は153と154のように片刃を基本とする。石材は、砂岩4点、流紋岩2点、石英斑岩2点、安山岩2点のほか花崗岩とホルンフェルスが各1点となっており比較的多様である。

一般に礫器は、関東では早期にしばしば見られ、前期以降は定型化した打製石斧やスクレーパーがこれに替わるといふ(鈴木1991)。帰属時期については、いずれも遺構外出土のため決め手に欠けるが、このような一般的傾向から本例も早期に帰属する可能性がある。

(9) 磨石類(155~165)

磨耗痕のほか、敲打痕や凹み痕が認められるものを抽出した。遺構内から11点、遺構外から28点出土した。完形品17点の平均的な大きさは長さ9.1cm、幅7.0cm、厚さ4.5cm、重量は450.8gである。素材は拳大の円礫であり、形態は隅丸方形(155・160・164)、楕円形(159・161~163・165)、円形(156~158)の3種に区分される。石材は安山岩(多孔質安山岩を含む)が約45%(17点)を占め、セット関係にある石皿のそれとよく合致する。

さて磨石とされるものの多くは磨耗痕の他に敲打痕あるいは凹石とも捉えられる縁辺の敲打痕や敲打による凹み痕が存在する。また逆に敲打による凹み痕を目安にすると、本遺跡の凹石は、すべて磨耗痕を伴うため単一の器種と考えることはできない。したがって、ここでは磨石類に統合し、単に敲打痕のみ存在する器種を敲打石として記述したい。以上のような器種分類がむしろ実情に即しているものと考えられる。

本遺跡の磨石類は、欠損資料を除けば、磨耗痕、敲打痕及び凹み痕の共存関係から以下のように分類される。

I類 器面に磨耗痕を残すもの(狭義の磨石) 1点

Ⅱ類 器面に磨耗痕と凹み痕を残すもの	4点
Ⅲ類 器面に磨耗痕と敲打痕を残すもの	14点
Ⅳ類 器面に磨耗痕、敲打痕、凹み痕を残すもの	5点
その他(不明)	14点

これらの数量比からもわかるように、狭義の磨石(Ⅰ類)は僅少である。このことは取りも直さず、磨く、敲くという行為が連続的な作業として成立していたことを物語っている。

ちなみに図示した中にはⅠ類とⅡ類はなく、Ⅲ類は157・159・162・163・165、Ⅳ類は155・160・161・164であり156は破片のため識別不能であった。注目すべきことに163は表裏に楔形石器の製作痕跡をとどめていた。

(10) 敲石(166～171)

磨耗痕や凹み痕がなく礫の一端ないしは両端に敲打痕が残存するものである。遺構内から3点、遺構外から20点出土した。この中には乳棒状磨製石斧の転用例3点(167ほか)が含まれている。石材は砂岩10点、石英斑岩5点、緑色岩3点、流紋岩2点、花崗岩2点、安山岩1点となっている。

(11) 砥石(172～176)

遺構内から2点、遺構外から3点出土した。大型例2点(172・176)と小型例3点(173～175)とに大きさが二極化しており、前者を置き砥石、後者を手持ち砥石と言い換えることも可能である。石材は砂岩3点、流紋岩・安山岩各1点となっている。

172は遺構内から出土した。不整形の大型礫の一边に、顕著な研磨痕が見られる。重量は約5kg(4940g)であり、大きさから考えれば磨製石斧の研磨に供された公算が大きい。176は長方形の扁平礫を素材としており、表裏の長軸方向に研磨痕をとどめる。

小型例のうち、174と175には細い筋状の損傷がある。175は全周、174は片面中央部に見られるが、その成因は明確ではない。173は遺構内から出土した。片面の長軸方向に幅の広い溝状の研磨痕をとどめる。

(12) 石皿(177～182)

石皿は旧石器時代にも散見されるが、一般化するのには縄文時代前期以降、と言われている。そして、早期以前の石皿が扁平な自然の形状そのものであるのに対して、前期中葉以降は意図的に成形され、円形や楕円形で周囲に縁取るようになるという(鈴木1991)。

本遺跡では、遺構内から16点、遺構外から33点出土した。互いに接合せず、残りの個体は搬出されたものと考えられる。いずれも原形をとどめておらず、全体の形状は明確ではないが、楕円形又は隅丸方形に近い平面形が想定される。

一方、断面形については、両面に磨面があり、片面のみ凹んだもの(178・179・181・182)、両面とも平坦なものの2種があり、蜂の巣状の小孔(181・182)も見られる。

石材は安山岩類(多孔質安山岩21点を含む)41点、花崗岩4点、砂岩2点、流紋岩・凝灰岩各1点となっている。特に安山岩類に対する高い嗜好性が指摘される。石皿は対象物を粉砕するために比較的粗粒の石材が採用されている。特に多孔質安山岩は孔隙率が大きいため加工しやすく、しかも比重が小さく軽量であるため重用されたようである。

(13) 台石(183)

遺構内から1点出土した。183は平坦な2面にそれぞれ研磨痕と敲打痕が見られる。後者は楔形石器の

製作時の損傷の可能性がある。これら2種の使用痕から砥石と台石の併用が想定される。

(14) 石錘 (184・185)

遺構外から2点出土した。185は扁平礫の両端を打ち欠いた、いわゆる礫石錘である。礫石錘は、時代を問わず存在するが、機能については漁網錘と編み物を編む際の重しの二説があり決着がつかっていない。184は断片的であるが擦り切り溝(紐掛け)が残されている。

(15) 石棒 (186)

遺構外から1点出土した。186は細身の石棒の断片で石材は絹雲母片岩を使用している。石棒は前期前半に出現し中期以降に一般化する(原田2005)。かりに当該資料の帰属時期が前期前半ならば希少性が高いが、遺構外出土のため断定はできない。

(16) 有孔石製品 (187)

遺構外から1点出土した。187は緑泥片岩の小型扁平礫を素材としている。欠損資料であり全体の形状は不明であるが、おそらく楕円形を呈するものと考えられる。装飾品や護符の可能性があるが定かではない。

(17) 軽石石製品(「軽石製摩擦具」) (188)

遺構内から1点出土した。188は側面形が石冠状を呈する。紐とくびれをもち、底面がほぼ平坦に磨減している。全体の約30%が欠損している。用材の軽石は黄白色で軟質である。この種の石製品は前期前半(黒浜期)に顕著に見られるようであり、先の「A～C地区」でも2点出土している。関連遺跡は、本遺跡をはじめ、千葉県我孫子市柴崎遺跡、同船橋市飯山満東遺跡、同柏市鴻ノ巣遺跡、同南房総市加茂遺跡、埼玉県富士見市水子・大応寺前貝塚、同春日部市米島貝塚、東京都品川区居木橋遺跡など牧挙にいとまがない(酒詰ほか1940、松本ほか1952、柳田ほか1965、古内ほか1974・1975、古宮ほか1976、吉田ほか1991、石川ほか2011)。

(18) 側面調整礫 (189～196)

扁平小円礫の側縁に敲打痕や磨耗痕が見られる。ただし、敲打痕は砥石のように対象物に打撃を加えたのではなくあくまでも器面の整形を目的とした調整であり、また磨耗痕も研磨というよりも擦痕に近い。

遺構内から6点、遺構外から12点出土した。形態は長方形や円形もあるが楕円形を基本としている。大きさは、長さ5.5cm～13.2cm、幅4.2cm～9.1cm、厚さ1.1cm～7.2cm、重量45.5g～733.3gの範囲にある。

いずれも表面が赤く変色(赤化)するまで焼成されており、なかには黒色タール状付着物も見られる。石材は砂岩(15点)を主体としており流紋岩(3点)がこれに次ぐ。

敲打痕等は赤化した面を切っており焼成後に使用に供されたことは明らかである。調整の部位には、ほぼ全周にわたる例(189～191・193・195)、二側縁(194)、及び一側縁(192・196)という3つのタイプがある。欠損率は約10%(2/18)であり比較的低い。なお、189の表裏中央には直線状の敲打痕が見られる。楔形石器による損傷の可能性が考えられる。

(19) その他

1) 石核

遺構内から4点、遺構外から18点出土した。剥離面の状況から横長剥片が生産された模様である。石材はチャートを主としている。

数量が楔形石器(計82点)に比して極端に少ないが、このことは本遺跡における剥片生産技術の主体が

両極打法にあったことを、よく物語っている。

2) 剥片類

素材剥片と二次加工の際に生じる碎片(調整剥片)が都合2,465点出土した。遺構内出土が1,840点、遺構外出土が625点となっている。剥片の大きさや形状に統一性がなく横長剥片が大半である。横長剥片の背面の剥離面は複数の方向から打撃された痕跡をとどめ、先端は主要剥離面に向かって湾曲している。

基本的に、すべて剥片石器の製作に関わるものであり、石材もチャートが90% (2,353/2,465) を超える。

3) 軽石

遺構内から3点出土した。浮標(うきぶし)の一部、あるいは、何らかの素材の可能性も否めないが、断片的なため検討に堪えない。

引用参考文献

酒池祐男ほか・東京考古学会縄文式部会水貝塚研究分科会 1940 P29参照「埼玉県入間郡水谷村水子・大応寺前貝塚調査報告」『考古学』第11巻第2号 pp.90-116 東京考古学会

松本信廣・藤田亮策・清水潤三・江坂輝彌 1952『加茂遺蹟-千葉縣加茂岡木舟出土遺蹟の研究-』三田史学会

柳田敏司・小林達雄ほか 1965『米島貝塚』庄和町教育委員会

古内 茂・矢戸三男 1974『柏市鴻ノ巣遺跡』財団法人 千葉県都市公社

古内 茂ほか 1975『飯山溝東遺跡-下総台地における縄文前期を主とする集落址の調査-』

財団法人 千葉県都市公社

古宮隆信・竹崎真夫 1976『我孫子市柴崎遺跡調査報告書(第3次・第4次)』我孫子市教育委員会

小田静夫 1976『縄文中期の打製石斧』『季刊とるめん』10号 pp.44-57 J I C C 出版局

鈴木次郎ほか 1977『尾崎遺跡 酒匂川総合開発計画に伴う調査』神奈川県教育委員会

佐原 真 1977『石斧論-横斧から縦斧へ-』『考古論集-慶祝 松崎寿和先生六十三歳記念論文集-』pp.45-86

小林康男 1978『縄文時代の磨石』『中部高地の考古学 長野県考古学会15周年記念論文集』pp.136-158

長野県考古学会

佐原 真 1982『石斧再論』『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』pp.161-186

鈴木次郎 1983『打製石斧』『縄文文化の研究7 道具と技術』pp.48-59 雄山閣出版株式会社

鈴木道之助 1983『石鏃』『縄文文化の研究7 道具と技術』pp.88-95 雄山閣出版株式会社

岡村道雄 1983『ピエスエスキュー、楔形石器』『縄文文化の研究7 道具と技術』pp.106-116 雄山閣出版株式会社

矢島國雄・前山精明 1983『石鏃』『縄文文化の研究7 道具と技術』pp.117-128 雄山閣出版株式会社

安達淳三 1983『石皿』『縄文文化の研究7 道具と技術』pp.129-139 雄山閣出版株式会社

古内 茂・小宮 孟・高田 博・橋本勝雄・櫛原弘二・田形孝一 1986『千原台ニュータウンⅢ(草刈遺跡B区)』

財団法人 千葉県文化財センター

三浦和信 1987『3.石器』『房総考古学ライブラリー3 縄文時代(2)』pp.16-35 財団法人 千葉県文化財センター

山本 薫 1989『縄文時代の石器製作における石材の利用について』『筑波大学先史学・考古学研究』第1号

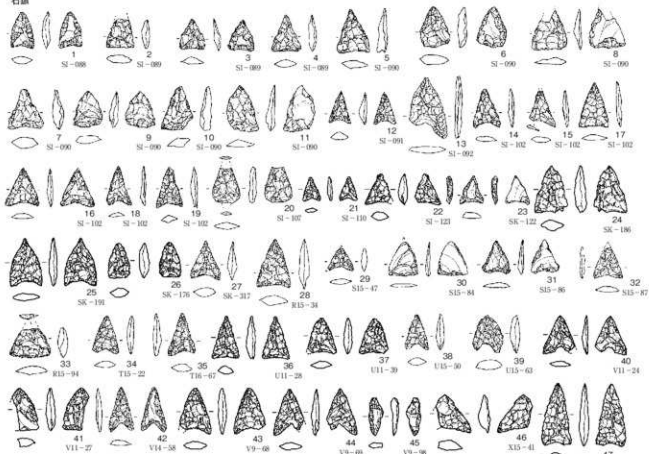
pp.45-96 筑波大学歴史・人類学系

鈴木道之助 1991『図録・石器入門事典(縄文)』柏書房株式会社

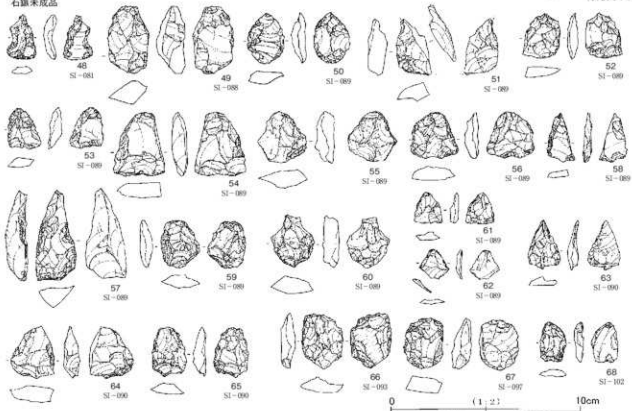
吉田 浩ほか 1991『居木橋遺跡3(B・D区)』品川区遺跡調査会

- 大工原 豊 2004 「(6)生活用の石器」『千葉県の歴史 資料編 考古4(遺跡・遺構・遺物)』pp.398-411
財団法人 千葉県史料研究財団編 千葉県
- 原田昌幸 2005 「石棒、玉類などの分布からみた交易」『日本の考古学-ドイツで開催された「曙光の時代」展』
pp.67-68 小学館
- 柴田 徹 2008 「剥片石器に利用可能な石材の比重値について-関東地方を中心として-」『石器に学ぶ』第10号
pp.149-162 石器に学ぶ会
- 石川博行ほか 2011 「東京都品川区居木橋遺跡(A地区)-居木橋遺跡第11次発掘調査報告書-」加藤建設株式会社

石鏃

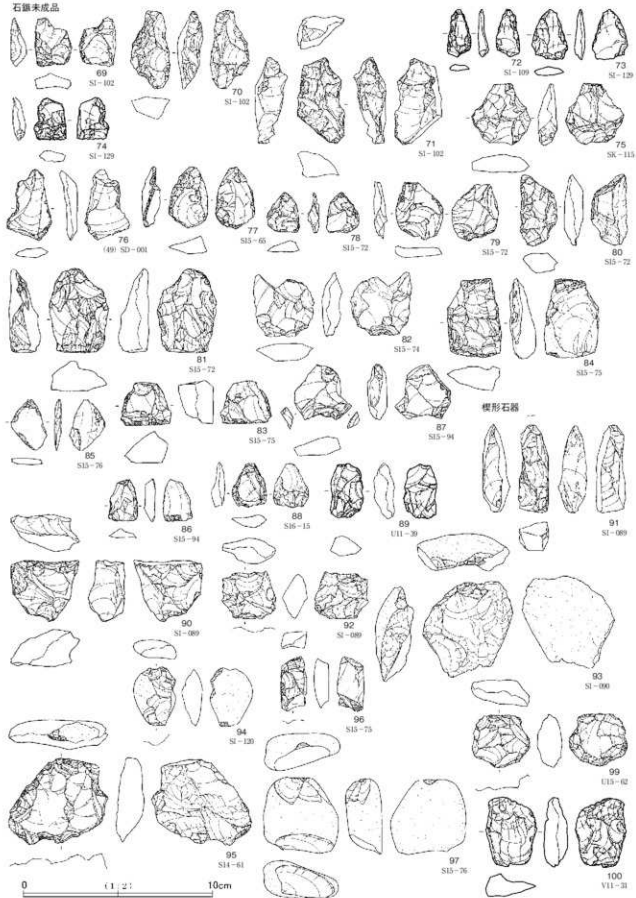


石鏃未成品



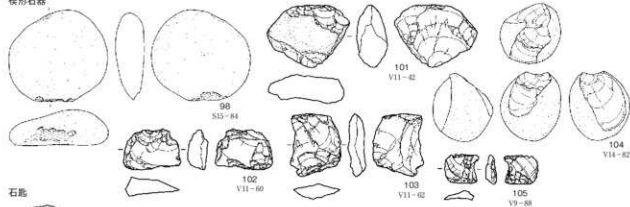
第65図 縄文時代石器(1)

石鏢未成品



第66圖 縄文時代石器(2)

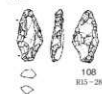
楕形石器



石器



石鏢



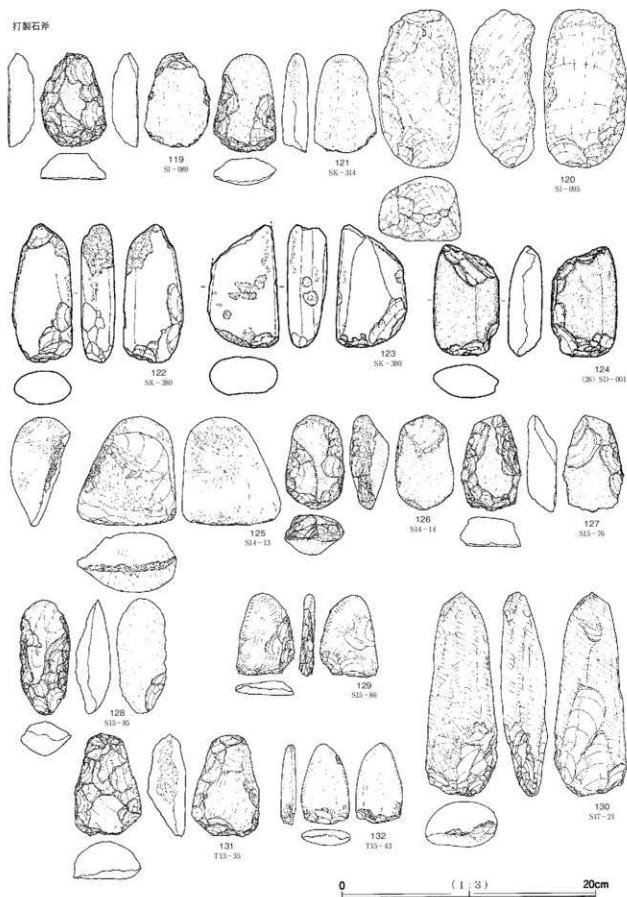
二次加工ある剥片



0 (1:2) 10cm

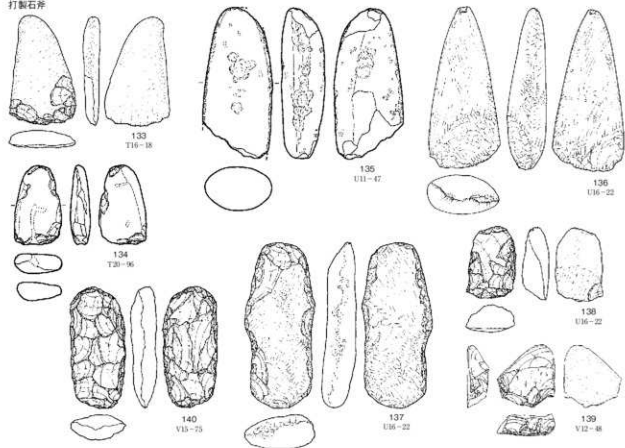
第67図 縄文時代石器(3)

打製石斧

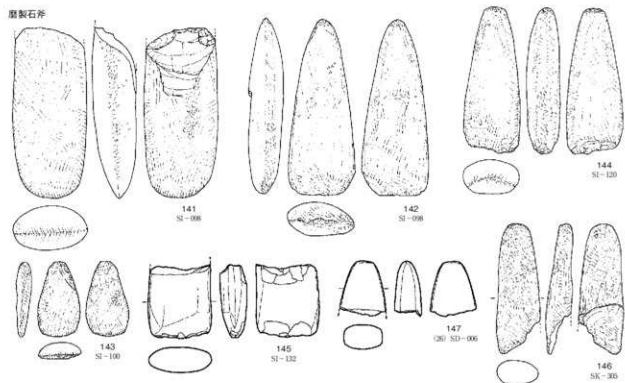


第68図 縄文時代石器(4)

打製石斧



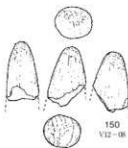
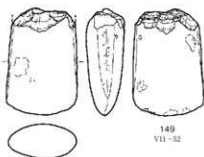
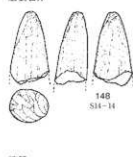
磨製石斧



0 (1:3) 20cm

第69圖 縄文時代石器(5)

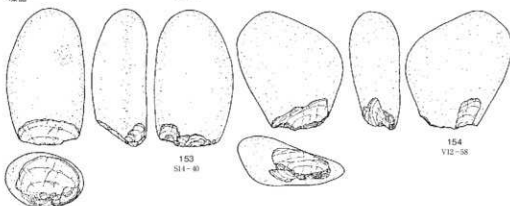
磨製石斧



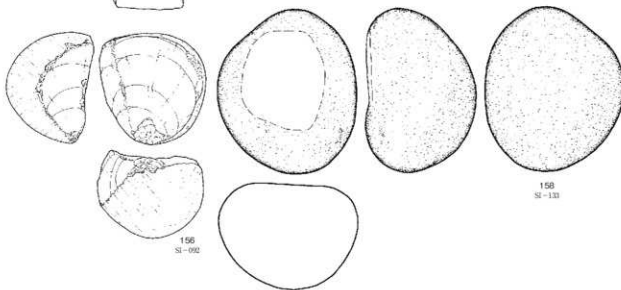
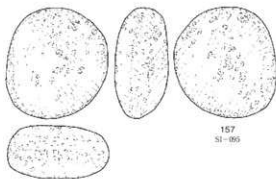
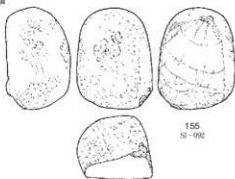
局部磨製石斧



石器



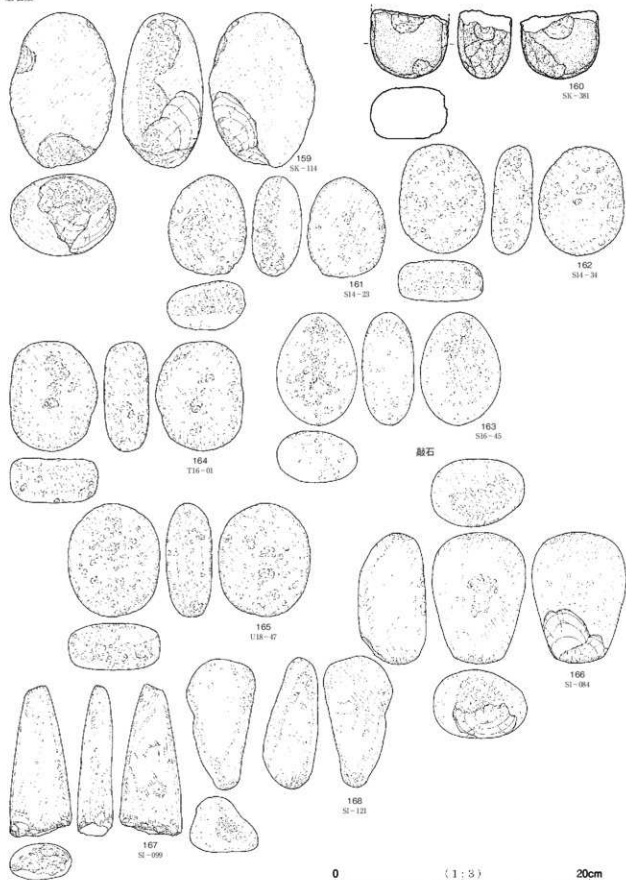
磨石楯



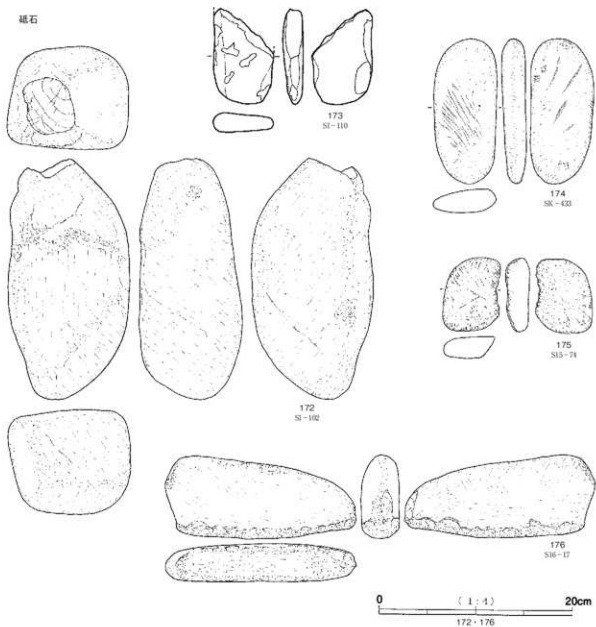
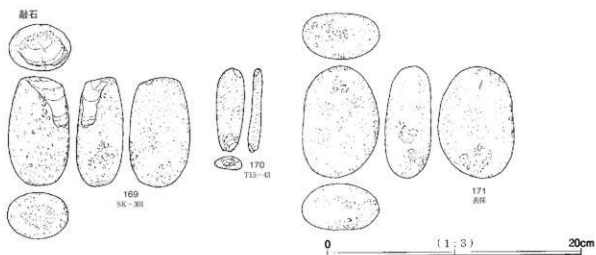
0 (1:3) 20cm

第70圖 縄文時代石器(6)

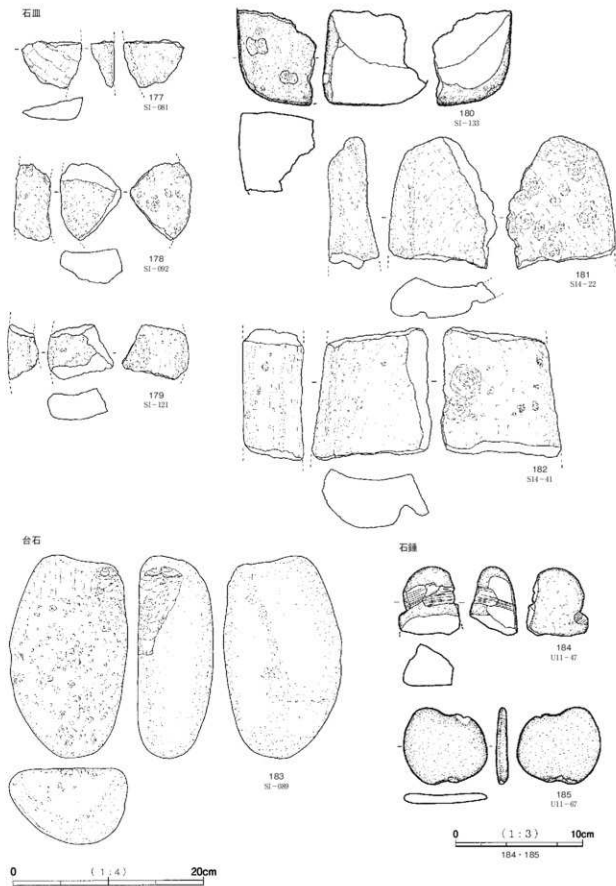
磨石類



第71図 縄文時代石器(7)

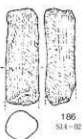


第72図 縄文時代石器(8)



第73図 縄文時代石器(9)

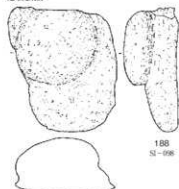
石棒



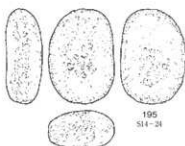
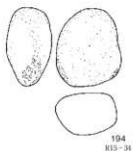
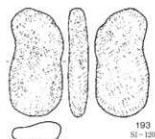
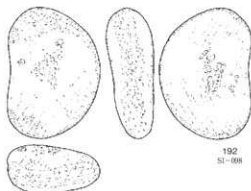
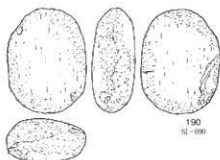
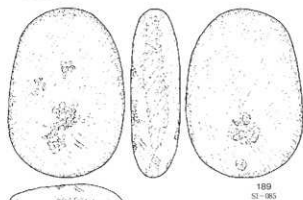
有孔石製品



軽石製品



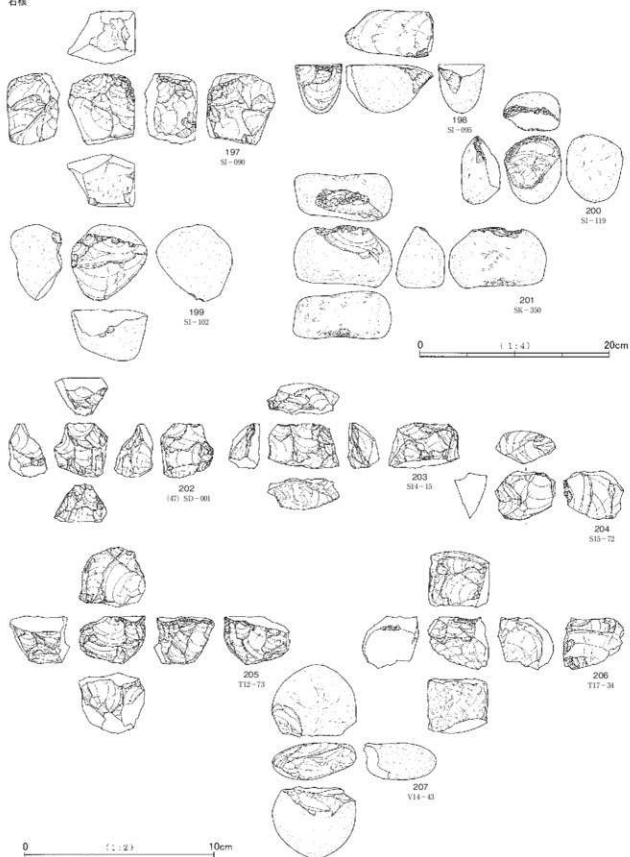
側面頭整様



0 (1:3) 20cm

第74図 縄文時代石器(10)

石核



第75図 縄文時代石器(11)

第10表 縄文時代石器属性表

洞窟	探洞	番号	遺跡番号	遺物番号	器種	石材	最大径 mm	最大厚 mm	最大重 g	備考	
		SI-083	44	FSI-001	0005	石礫	2.2	1.4	0.4	片斷欠	
		SI-083	44	FSI-001	0011	石礫	1.8	1.3	0.3	0.6	
		SI-088	47	FSI-001	0008	石礫	1.7	0.9	0.2	0.3	
57	65	1	SI-088	47	FSI-001	0012	石礫	1.9	1.2	0.4	0.9
		SI-089	41	FSI-004	0177	石礫	1.6	1.4	0.4	0.8	
57	65	3	SI-089	41	FSI-004	0265	石礫	1.6	1.3	0.4	0.6
57	65	4	SI-089	41	FSI-004	0664	石礫	1.9	1.5	0.4	0.9
57	65	5	SI-090	45	FSI-005	0029	石礫	2.3	1.7	0.5	1.3
57	65	6	SI-090	45	FSI-005	0182	石礫	2.1	1.5	0.5	1.6
57	65	7	SI-090	45	FSI-005	0184	石礫	2.1	1.9	0.6	1.6
57	65	8	SI-090	45	FSI-005	0211	石礫	2.1	1.8	0.3	1.1
57	65	9	SI-090	45	FSI-005	0257	石礫	1.9	1.5	0.4	1.2
57	65	10	SI-090	45	FSI-005	0294	石礫	2.3	1.7	0.6	1.6
57	65	11	SI-090	45	FSI-005	0296	石礫	2.5	1.9	0.5	1.5
57	65	12	SI-091	41	FSI-005	0011	石礫	1.7	1.1	0.4	0.5
57	65	13	SI-092	41	FSI-001	0025	石礫	1.5	1.1	0.3	1.4
		SI-092	41	FSI-001	0039	石礫	1.5	1.7	0.4	0.9	
57	65	14	SI-102	32	FSI-001	0071	石礫	2.0	1.4	0.3	0.7
57	65	15	SI-102	32	FSI-001	0103	石礫	1.9	1.4	0.3	0.5
		SI-102	32	FSI-001	0111	石礫	1.4	0.9	0.3	0.3	
		SI-102	32	FSI-001	0124	石礫	1.0	1.2	0.2	0.3	
57	65	16	SI-102	32	FSI-001	0136	石礫	2.0	1.7	0.3	0.8
57	65	17	SI-102	32	FSI-001	0187	石礫	2.3	1.5	0.3	1.0
57	65	18	SI-102	32	FSI-001	0218	石礫	2.0	1.3	0.3	0.5
57	65	19	SI-102	32	FSI-001	0264	石礫	2.1	1.4	0.4	0.7
57	65	20	SI-102	32	FSI-001	0268	石礫	1.6	1.3	0.2	0.5
57	65	20	SI-107	40	FSI-002	0001	石礫	1.8	1.5	0.3	0.9
57	65	21	SI-110	26	FSI-002	0002	石礫	1.3	0.9	0.2	0.1
57	65	22	SI-123	23	FSI-012	0005	石礫	1.5	1.3	0.5	0.8
57	65	23	SK-122	32	FSK-004	0002	石礫	1.5	1.3	0.3	0.5
		SK-130	32	FSK-019	0001	石礫	1.5	1.2	0.3	0.4	
57	65	24	SK-136	32	FSK-012	0001	石礫	2.5	1.7	0.5	2.1
57	65	25	SK-194	23	FSK-028	0004	石礫	2.6	1.7	0.4	1.4
57	65	26	SK-176	23	FSK-037	0010	石礫	1.9	1.1	0.4	1.0
57	65	27	SK-317	42	FSK-033	0001	石礫	2.0	1.5	0.5	1.0
57	65	28	R15-34	28	R15-34	0002	石礫	2.6	1.8	0.5	1.7
57	65	29	S15-47	47	S15-47	0001	石礫	1.2	1.4	0.3	0.4
		S15-51	45	S15-51	0001	石礫	1.3	1.3	0.3	0.6	
57	65	30	S15-84	45	S15-84	0004	石礫	1.8	1.5	0.3	0.7
57	65	31	S15-86	45	S15-86	0001	石礫	1.6	1.3	0.3	0.6
57	65	32	S15-87	45	S15-87	0002	石礫	1.6	1.5	0.3	0.6
57	65	33	S15-94	45	S15-94	0003	石礫	2.0	1.8	0.4	1.5
		S15-97	45	S15-97	0001	石礫	2.2	1.6	0.4	1.2	
		S16-09	47	S16-09	0001	石礫	1.8	1.1	0.3	0.5	
		S16-93	45	S16-93	0001	石礫	2.1	1.4	0.5	1.4	
57	65	34	T15-22	47	T15-22	0002	石礫	2.0	1.4	0.3	0.9
57	65	35	T16-67	42	T16-67	0001	石礫	2.1	1.4	0.4	0.9
		T17-53	32	T17-53	0001	石礫	2.1	1.7	0.5	1.3	
57	65	36	U11-28	23	U11-28	0001	石礫	2.2	1.4	0.4	0.9
57	65	37	U11-39	23	U11-39	0001	石礫	1.9	1.5	0.4	1.0
57	65	38	U15-50	32	U15-50	0001	石礫	1.9	1.2	0.4	0.6
57	65	39	U15-63	32	U15-63	0001	石礫	1.9	1.6	0.5	1.3
57	65	40	V11-24	23	V11-24	0001	石礫	1.9	1.7	0.3	0.7
57	65	41	V11-27	23	V11-27	0001	石礫	2.2	1.7	0.5	1.2
57	65	42	V14-58	40	V14-58	0001	石礫	2.3	1.3	0.3	0.7
57	65	43	V9-68	23	V9-68	0001	石礫	2.3	1.7	0.4	1.5
57	65	44	V9-69	23	V9-69	0001	石礫	2.3	1.6	0.4	1.0
		V9-88	23	V9-88	0005	石礫	0.7	1.0	0.2	0.1	
57	65	45	V9-96	23	V9-96	0004	石礫	2.0	0.7	0.3	0.5
57	65	46	X15-41	23	X15-41	0001	石礫	2.3	1.5	0.6	1.6
		Y1-1		Y1-1		石礫	1.4	0.6	0.3	0.3	
57	65	47	Y1-3	9	Y1-3	0001	石礫	3.3	1.4	0.4	2.0
57	65	48	SI-081	44	FSI-002	0001	石礫未成品	2.4	1.5	0.6	1.8
		SI-088	47	FSI-001	0000	石礫未成品	2.0	1.5	0.6	2.8	
57	65	49	SI-088	47	FSI-001	0021	石礫未成品	3.6	2.3	1.6	11.0
		SI-089	41	FSI-004	0046	石礫未成品	1.8	1.3	0.6	1.2	
57	65	50	SI-089	41	FSI-004	0125	石礫未成品	2.6	1.9	0.8	4.0
57	65	51	SI-089	41	FSI-004	0157	石礫未成品	2.9	1.9	0.9	4.3
		SI-089	41	FSI-004	0241	石礫未成品	2.3	1.2	0.3	1.0	
57	65	52	SI-089	41	FSI-004	0299	石礫未成品	2.1	1.9	0.5	2.8
57	65	53	SI-089	41	FSI-004	0351	石礫未成品	2.2	1.8	0.6	2.6
57	65	54	SI-089	41	FSI-004	0443	石礫未成品	3.4	2.7	0.7	8.3
57	65	55	SI-089	41	FSI-004	0472	石礫未成品	2.7	2.5	1.0	6.1
57	65	56	SI-089	41	FSI-004	0607	石礫未成品	2.4	2.5	0.7	3.9
		SI-089	41	FSI-004	0612	石礫未成品	2.5	1.9	0.7	2.7	
57	65	57	SI-089	41	FSI-004	0633	石礫未成品	4.8	2.1	1.1	9.5
57	65	58	SI-089	41	FSI-004	0653	石礫未成品	2.5	1.5	0.4	1.4
		SI-089	41	FSI-004	0669	石礫未成品	1.7	1.4	0.5	1.1	
57	65	59	SI-089	41	FSI-004	0731	石礫未成品	2.5	2.0	0.6	3.2
57	65	60	SI-089	41	FSI-004	0843	石礫未成品	2.8	2.2	0.8	5.2
57	65	61	SI-089	41	FSI-004	0882	石礫未成品	1.6	1.4	0.4	0.9
57	65	62	SI-089	41	FSI-004	0933	石礫未成品	1.5	1.5	0.3	0.6

凡例	詳細	番号	通商番号	品名	品種	石材	最大尺	最大幅	最小厚	重量	備 考		
		SI-089	41	FSI-004	1016	石版完成品	チヤート	3.2	1.9	0.9	5.5		
57	65	63	SI-000	45	FSI-005	0094	石版完成品	チヤート	2.6	1.7	0.5	1.8	
57	65	64	SI-000	45	FSI-005	0173	石版完成品	チヤート	2.8	2.4	0.8	3.6	
		SI-000	45	FSI-005	0308	石版完成品	チヤート	3.0	1.8	0.7	3.6		
57	65	65	SI-000	45	FSI-005	0311	石版完成品	チヤート	2.5	1.8	0.6	3.0	
		SI-000	45	FSI-005	0328	石版完成品	チヤート	1.5	1.1	0.4	0.8		
		SI-003	45	FSI-003	0017	石版完成品	チヤート	2.0	2.3	0.9	5.0		
57	65	66	SI-003	45	FSI-003	0038	石版完成品	チヤート	2.9	2.2	0.8	5.3	複形石器素材
57	65	67	SI-007	41	FSI-007	0015	石版完成品	チヤート	2.6	2.1	0.9	6.2	複形石器素材
		SI-008	41	FSI-008	0027	石版完成品	チヤート	2.3	2.0	0.5	2.4		
		SI-009	41	FSI-002	0029	石版完成品	チヤート	2.6	1.3	0.4	1.7		
		SI-100	41	FSI-001	0044	石版完成品	チヤート	2.3	1.7	0.6	1.9		
		SI-100	41	FSI-001	0084	石版完成品	チヤート	2.7	3.0	0.7	6.2		
57	65	68	SI-102	32	FSI-001	0001-2	石版完成品	チヤート	2.1	1.4	0.5	1.9	
57	66	69	SI-102	32	FSI-001	0084	石版完成品	チヤート	2.5	2.0	0.7	3.6	複形石器素材
57	66	70	SI-102	32	FSI-001	0096	石版完成品	チヤート	4.2	2.2	1.2	9.1	複形石器素材
57	66	71	SI-102	32	FSI-001	0267	石版完成品	チヤート	4.6	2.9	1.3	15.3	複形石器素材
57	66	72	SI-109	26	FSI-001	0001	石版完成品	チヤート	2.4	1.3	0.4	1.4	
		SI-119	32	FSI-009	0025	石版完成品	チヤート	1.5	1.3	0.5	1.0		
57	66	73	SI-129	23	FSI-003	0013	石版完成品	ナリ埋当面非	2.7	1.8	0.5	2.3	
57	66	74	SI-129	23	FSI-003	0014	石版完成品	チヤート	2.5	1.7	0.6	2.8	先端部欠
57	66	75	SIK-115	49	FSK-002	0005	石版完成品	チヤート	3.2	3.1	1.0	9.2	複形石器素材
57	66	76			FSO-001	0001	石版完成品	チヤート	3.7	2.3	0.7	5.3	
		SI15-44	28	FS15-44	0001	石版完成品	埋曜石	1.7	1.1	0.8	1.5		
		SI4-19	44	FS4-19	0001	石版完成品	チヤート	3.1	1.4	0.7	2.8		
		SI4-35	44	FS4-35	0003	石版完成品	チヤート	2.8	1.8	0.7	3.0		
57	66	77	SI5-65	45	FS5-65	0004	石版完成品	チヤート	3.7	2.1	1.0	5.3	
57	66	78	SI5-72	41	FS5-72	0009	石版完成品	チヤート	2.1	1.8	0.6	1.7	
57	66	79	SI5-72	41	FS5-72	0013	石版完成品	チヤート	3.3	2.1	0.6	1.9	複形石器素材
57	66	80	SI5-72	41	FS5-72	0051	石版完成品	チヤート	2.8	2.0	1.0	7.9	複形石器素材
57	66	81	SI5-72	41	FS5-72	0161	石版完成品	チヤート	4.5	3.1	1.6	23.7	
		SI5-72	41	FS5-72	0287	石版完成品	チヤート	1.2	1.2	0.4	0.6	割片	
57	66	82	SI5-74	45	FS5-74	0009	石版完成品	チヤート	3.8	3.3	0.9	10.6	複形石器素材
57	66	83	SI5-75	45	FS5-75	0013	石版完成品	チヤート	2.9	2.8	1.7	10.4	複形石器素材
57	66	84	SI5-75	45	FS5-75	0032	石版完成品	チヤート	4.2	2.8	1.4	16.5	複形石器素材
57	66	85	SI5-76	45	FS5-76	0001-1	石版完成品	チヤート	2.7	1.7	0.3	1.7	
57	66	86	SI5-94	45	FS5-94	0003	石版完成品	チヤート	2.2	1.5	0.6	1.9	
57	66	87	SI5-94	45	FS5-94	0021	石版完成品	チヤート	2.9	3.1	1.0	8.4	複形石器素材
57	66	88	SI6-15	45	FS6-15	0001	石版完成品	チヤート	2.3	1.8	0.6	2.6	
		SI6-30	41	FS6-30	0001	石版完成品	チヤート	1.7	1.3	0.3	0.6	片割欠	
57	66	89	I11-39	23	FU11-39	0001	石版完成品	チヤート	2.8	1.7	1.0	5.5	複形石器素材
		SI-081	44	FSI-002	0001	複形石器	チヤート	3.5	2.7	1.1	13.3		
		SI-084	44	FSI-001	0023	複形石器	チヤート	3.6	2.4	0.8	8.4		
58	66	90	SI-089	41	FSI-004	0011	複形石器	チヤート	3.3	2.8	1.8	17.5	
		SI-089	41	FSI-004	0187	複形石器	チヤート	2.5	1.6	0.7	3.1		
		SI-089	41	FSI-004	0264	複形石器	チヤート	2.1	2.1	0.8	3.2		
58	66	91	SI-089	41	FSI-004	0146	複形石器	チヤート	4.7	1.5	1.5	12.5	
		SI-089	41	FSI-004	0614	複形石器	板取削	3.7	4.6	1.0	17.6		
		SI-089	41	FSI-004	0608	複形石器	チヤート	1.7	1.8	1.0	2.9	下平部欠	
		SI-089	41	FSI-004	0823	複形石器	チヤート	1.4	2.0	0.8	1.9	下平部欠	
		SI-089	41	FSI-004	0847	複形石器	チヤート	2.3	2.2	0.8	3.9		
		SI-089	41	FSI-004	0888	複形石器	チヤート	2.1	1.5	0.5	1.7		
		SI-089	41	FSI-004	1081	複形石器	顔面背面埋曜	1.9	1.0	1.5	1.3		
58	66	92	SI-089	41	FSI-004	1167	複形石器	チヤート	2.8	2.5	1.4	8.9	
		SI-000	45	FSI-005	0047	複形石器	チヤート	2.1	1.6	0.7	2.6		
		SI-000	45	FSI-005	0051	複形石器	チヤート	2.2	1.8	0.6	3.0		
		SI-000	45	FSI-005	0136	複形石器	チヤート	1.5	2.0	0.6	1.6		
		SI-000	45	FSI-005	0171	複形石器	チヤート	2.0	2.1	0.8	2.1		
58	66	93	SI-000	45	FSI-005	0125	複形石器	チヤート	4.7	4.9	1.8	42	
		SI-009	41	FSI-002	0001	複形石器	チヤート	2.4	1.6	1.2	3.7		
		SI-009	41	FSI-002	0111	複形石器	チヤート	4.8	2.3	1.2	13.5		
		SI-102	32	FSI-001	0022	複形石器	埋曜石	1.6	2.2	1.2	4.1	洋洋品	
		SI-102	32	FSI-001	0038	複形石器	チヤート	4.4	2.2	1.6	13.6		
		SI-102	32	FSI-001	0039	複形石器	チヤート	1.5	1.2	0.8	1.5	下平部欠	
		SI-102	32	FSI-001	0123	複形石器	チヤート	1.7	3.7	0.7	4.6		
		SI-102	32	FSI-001	0125	複形石器	チヤート	2.3	2.1	0.4	2.3	下平部欠	
		SI-102	32	FSI-001	0179	複形石器	チヤート	1.2	1.5	0.6	1.5		
		SI-114	2	FSI-001	0007	複形石器	チヤート	2.4	1.5	0.7	2.8	薄素材	
		SI-114	2	FSI-001	0074	複形石器	チヤート	3.4	1.5	0.8	5.0	薄素材	
58	66	94	SI-120	32	FSI-010	0002	複形石器	チヤート	3.1	3.3	0.9	8.6	扁平薄素材
		SI-129	23	FSI-003	0021	複形石器	チヤート	1.1	1.0	0.7	1.3	割片	
		SI-130	23	FSI-024	0006	複形石器	チヤート	2.2	3.9	0.8	7.0	(23) SI-010に变更	
		SK-196	49	FSK-001	0001-1	複形石器	チヤート	2.4	3.0	0.6	4.0	扁平薄素材	
		SK-197	22	FSK-006	0002	複形石器	チヤート	3.3	2.2	1.3	8.3	平分欠	
		47	FSO-001	0002	複形石器	チヤート	2.5	2.0	0.9	8.2			
		47	FSO-001	0002-2	複形石器	チヤート	2.8	2.9	0.8	7.4			
		47	FSO-001	0002-3	複形石器	チヤート	2.4	1.6	0.7	2.9			
		SI4-33	44	FS4-33	0028	複形石器	埋曜石	2.0	1.6	0.7	2.3	右平分欠	
		SI4-34	44	FS4-34	0014	複形石器	チヤート	3.0	3.2	1.4	11.8		
		SI4-34	44	FS4-34	0021	複形石器	チヤート	2.7	2.1	0.8	5.1		
		SI4-32	44	FS4-32	0033	複形石器	チヤート	2.7	1.8	0.9	5.9	扁平薄素材	
		SI4-33	44	FS4-33	0008	複形石器	埋曜石	1.3	0.9	0.5	0.8	洋洋品	
58	66	95	SI4-61	45	FS4-61	0001	複形石器	チヤート	5.6	4.4	1.4	35.9	洋洋品
		SI5-72	41	FS5-72	0285	複形石器	チヤート	3.2	2.1	0.8	5.1		

国産	洋回	番号	通商番号	品物	品様	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		
			S15-74	45	S15-74	0001-1	楕形石	チャート	2.4	2.0	0.9	48	下半部欠
			S15-75	45	S15-75	0020	楕形石	チャート	3.3	4.1	1.6	28.1	
58	66	96	S15-75	45	S15-75	0035	楕形石	チャート	2.8	1.2	0.8	4.1	
58	66	97	S15-76	45	S15-76	0001-2	楕形石	凝灰岩	4.2	4.0	1.8	36.2	
			S15-76	45	S15-76	0010	楕形石	チャート	3.1	3.2	1.5	17.3	
			S15-76	45	S15-76	0020	楕形石	チャート	1.8	1.5	0.5	1.3	
58	67	98	S15-84	45	S15-84	0077	楕形石	チャート	1.2	0.3	1.9	60.4	
			S15-85	45	S15-85	0014	楕形石	チャート	3.5	2.1	1.0	6.8	
			S15-94	45	S15-94	0006	楕形石	チャート	2.5	2.0	1.0	5.4	
			S15-94	45	S15-94	0009	楕形石	チャート	2.5	1.7	0.8	2.5	
			S15-96	45	S15-96	0001-1	楕形石	チャート	2.6	3.1	1.1	10.0	
			S15-97	45	S15-97	0001-1	楕形石	チャート	4.0	2.8	0.8	13.1	
			S16-14	44	S16-14	0001-1	楕形石	チャート	2.6	2.3	0.5	3.6	半分欠
			S16-36	45	S16-36	0001	楕形石	チャート	2.7	1.8	0.7	3.3	
			S16-17	45	S16-17	0001	楕形石	チャート	2.2	1.3	0.5	2.0	
			S17-69	32	S17-69	0001	楕形石	チャート	2.3	3.3	1.3	10.7	
			T12-73	28	T12-73	0001	楕形石	チャート	2.6	3.0	0.5	5.0	
			T12-94	44	T12-94	0001	楕形石	チャート	2.2	2.5	0.8	4.6	
			T13-70	44	T13-70	0001	楕形石	ホムツメス	3.8	2.9	1.2	11.3	
			T13-90	44	T13-90	0001	楕形石	チャート	3.9	1.8	2.4	22.8	
			T13-91	44	T13-91	0001	楕形石	チャート	3.1	4.1	1.6	16.4	
			T16-19	42	T16-19	0001	楕形石	チャート	2.8	1.4	0.7	5.3	
			T16-34	42	T16-34	0001	楕形石	チャート	2.3	3.8	1.1	9.9	
			T16-36	42	T16-36	0001	楕形石	チャート	1.9	2.7	1.1	1.3	
			U11-39	23	U11-39	0001	楕形石	チャート	4.3	2.0	1.0	14.2	
			U11-89	23	U11-89	0001	楕形石	凝灰岩	1.9	1.9	0.6	2.1	半分欠
			U12-03	45	U12-03	0001	楕形石	石炭	3.4	3.9	1.9	29.4	
			U12-03	45	U12-03	0001	楕形石	チャート	3.4	2.7	1.1	9.5	
			U13-32	32	U13-32	0001	楕形石	チャート	3.1	2.0	0.9	5.4	
58	66	99	V11-62	23	V11-62	0001	楕形石	チャート	2.8	3.1	1.3	13.4	石炭未成品?
58	66	100	V11-31	23	V11-31	0001	楕形石	チャート	3.7	2.6	1.0	11.3	
58	67	101	V11-42	23	V11-42	0001	楕形石	チャート	3.3	4.4	1.3	21.5	
58	67	102	V11-60	23	V11-60	0002	楕形石	チャート	3.0	2.1	1.0	7.0	
58	67	103	V11-62	23	V11-62	0001	楕形石	チャート	3.2	2.8	0.8	7.4	
			V12-18	46	V12-18	0007	楕形石	メノウ	3.2	1.1	1.0	2.9	
			V14-72	40	V14-72	0001	楕形石	チャート	4.5	2.1	1.2	15.3	
58	67	104	V14-82	40	V14-82	0001	楕形石	チャート	2.5	3.1	1.5	42.0	
			V9-67	23	V9-67	0002	楕形石	チャート	4.0	1.9	0.8	5.1	
58	67	105	V9-88	23	V9-88	0007	楕形石	閃輝石	1.5	1.8	0.5	1.0	鉄質系
58	67	106	U11-38	23	U11-38	0001	石炭	凝灰岩	7.5	3.3	1.0	27.8	凝灰岩、旧石物の転用(再加工)
58	67	107	V9-66	23	V9-66	0005	石炭	チャート	3.5	0.3	0.8	11.7	鉄質
58	67	108	R15-28	45	R15-28	0001	石炭	チャート	2.7	1.3	0.6	2.5	
58	67	109	SE-089	41	SE-089	0010	流紋火山岩	チャート	3.3	2.9	0.9	6.7	
			SE-089	41	SE-089	0027	流紋火山岩	チャート	3.6	1.9	2.9	2.9	
58	67	110	SE-089	41	SE-089	0793	流紋火山岩	チャート	3.7	2.1	0.7	3.0	
			SE-089	41	SE-089	0885	流紋火山岩	チャート	1.7	2.4	1.2	4.0	
			SE-089	41	SE-089	1084	流紋火山岩	チャート	1.2	2.6	0.6	1.9	
			SE-090	45	SE-090	0168	流紋火山岩	チャート	1.7	1.7	0.5	1.4	
58	67	111	SE-100	41	SE-100	0021	流紋火山岩	チャート	4.8	3.4	1.5	24.8	
58	67	112	SE-102	32	SE-102	0017	流紋火山岩	チャート	4.6	2.3	1.3	9.2	未成品
			SE-102	32	SE-102	0031	流紋火山岩	チャート	3.4	2.0	0.5	3.4	
			SE-102	32	SE-102	0035	流紋火山岩	チャート	3.3	2.9	0.5	2.7	
			SE-102	32	SE-102	0037	流紋火山岩	チャート	1.7	1.7	0.8	0.4	
			SE-102	32	SE-102	0205	流紋火山岩	チャート	4.3	2.0	1.6	10.0	
			SE-102	32	SE-102	0240	流紋火山岩	チャート	2.4	1.5	0.8	3.0	
			SE-109	26	SE-109	0001	流紋火山岩	閃輝石	0.8	1.2	0.3	0.2	
			SE-123	23	SE-123	0002	流紋火山岩	チャート	2.3	2.4	0.9	4.6	断片
			SE-186	23	SE-186	0005	流紋火山岩	チャート	1.8	1.2	0.3	0.6	
58	67	113	SE-090	42	SE-090	0002-16	流紋火山岩	チャート	4.0	3.3	1.9	42.4	
							凝灰岩質	2.2	1.7	0.5	1.8	半分欠	
							閃輝石	5.3	3.8	1.2	24.8	旧石物の転用	
67	114		S14-06	44	S14-06	0001	流紋火山岩	チャート	2.5	2.9	1.0	16.1	
			S15-72	41	S15-72	0042	流紋火山岩	チャート	6.8	3.9	1.9	110.1	
			S15-74	45	S15-74	0001-2	流紋火山岩	チャート	3.6	2.2	1.0	8.3	
			S15-74	45	S15-74	0006	流紋火山岩	チャート	3.0	1.6	1.0	4.1	断片
			S15-77	45	S15-77	0005	流紋火山岩	凝灰岩	3.1	3.1	1.1	11.6	
			S15-82	45	S15-82	0003	流紋火山岩	チャート	2.8	1.3	1.3	10.5	
			S15-84	45	S15-84	0008	流紋火山岩	チャート	2.5	1.9	0.7	2.2	
58	67	115	S15-84	45	S15-84	0070	流紋火山岩	チャート	6.1	3.1	1.4	33.8	
67	116		S15-84	45	S15-84	0076	流紋火山岩	チャート	6.4	4.1	1.0	33.9	
			S15-85	45	S15-85	0008	流紋火山岩	チャート	4.5	2.6	1.1	13.0	
58	67	117	S15-85	45	S15-85	0006	流紋火山岩	凝灰岩	4.8	3.3	1.6	24.0	
			S15-86	45	S15-86	0008	流紋火山岩	ホムツメス	1.8	2.9	1.4	39.2	所在不明
			S16-26	41	S16-26	0001	流紋火山岩	閃輝石	1.8	2.9	1.4	3.5	特許品
			S16-93	45	S16-93	0001	流紋火山岩	閃輝石	2.1	0.9	0.8	1.6	特許品
			T16-26	42	T16-26	0001	流紋火山岩	チャート	1.9	1.7	0.4	1.3	
58	67	118		42	S17	0001	流紋火山岩	チャート	2.5	1.6	1.2	3.4	
			S15-72	41	S15-72	0101	流紋火山岩	チャート	2.9	2.7	1.2	5.2	
59	68	119	SE-089	41	SE-089	0473	打撃石	チャート	7.4	4.9	2.0	92.7	片岩
59	68	120	SE-085	41	SE-085	0322	打撃石	花崗岩	12.4	6.3	4.5	610.1	
59	68	121	SK-314	42	SK-314	0001	打撃石	ホムツメス	7.7	4.9	1.9	102.7	片岩
59	68	122	SK-380	26	SK-380	0001	打撃石	緑色岩	0.8	4.7	2.5	263.2	流紋状凝灰石片岩片岩質資料の転用
59	68	123	SK-380	26	SK-380	0001	打撃石	緑色岩	9.4	5.5	3.0	215.5	流紋状凝灰石片岩片岩質資料の転用
59	68	124		26	SK-001	0001	打撃石	ホムツメス	8.3	5.1	2.6	159.7	凝灰岩

国/県	種別	番号	測量番号	遺物	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考		
			U16-22	32	F16-22	0001	磨石	8.0	6.0	3.9	1427	磨片	
61	71	165	U18-47	37	F18-47	0001	磨石	8.9	7.0	3.6	3406	磨片、表面の中央に縦線	
			V11-62	23	FV11-62	0001	磨石	5.4	6.8	4.1	1667	半分欠	
			V11-62	23	FV11-62	0001	磨石	10.5	7.0	6.1	3941	磨片	
			V11-80	23	FV11-80	0001	磨石	6.0	7.6	4.4	2672	半分欠、磨片	
			V19-25	22	FV19-25	0001	磨石	9.3	7.2	3.3	3168	凹み部	
			V19-27	22	FV19-27	0041	磨石	7.6	7.9	5.2	3276	半分欠	
			V19-94	23	FV19-94	0002	磨石	10.2	7.0	4.2	4616		
			W11-90	23	FW11-90	0001	磨石	5.9	5.3	4.9	2362	両面に凹み各1	
			表面採集	44	表面採集	0001	磨石	6.8	3.9	2.5	458	磨片	
61	71	166	SE-084	44	FSE-001	0013	磨石	10.3	7.1	3.2	5796	上下両面に縦打痕、中央に磨石と器種並の磨痕	
			SE-084	41	FSE-002	0020	磨石	6.6	6.9	4.1	2554		
61	71	167	SE-089	41	FSE-002	0117	磨石	11.7	4.8	2.8	2518	先端部欠損後磨石に転用	
61	71	168	SE-121	37	FSE-001	0124	磨石	10.3	5.3	3.8	2814	上下両面に縦打痕	
61	71	169	SK-308	42	FSK-003	0001	磨石	8.6	4.8	3.7	2187		
			SK-307	42	FSK-027	0001	磨石	4.4	4.6	2.8	849	半分欠	
			S14-42	44	F14-42	0024	磨石	10.6	7.2	5.8	3857	半分欠	
			S16-06	45	F16-06	0001	磨石	10.6	6.4	3.0	1587	磨片	
			T15-42	47	FT15-42	0001	磨石	7.7	4.6	4.1	2063	上下両面に縦打痕	
61	72	170	T15-43	47	FT15-43	0001	磨石	6.5	2.2	1.0	195	上下両面に縦打痕	
			U16	32	F16	0001	磨石	11.3	5.2	5.2	5317	半分欠	
			U16	32	F16	0001	磨石	6.8	5.9	3.4	2808		
			U16	32	F16	0001	磨石	8.6	6.3	3.2	3658	磨片石芥の転用	
			U16-22	32	F16-22	0001	磨石	10.4	8.7	3.9	3836	磨片	
			U16-22	32	F16-22	0001	磨石	9.7	6.4	5.0	3648	一側縁	
			U16-22	32	F16-22	0001	磨石	6.4	8.7	4.7	3597	磨片	
			U16-22	32	F16-22	0001	磨石	7.2	5.6	3.8	2510	半分欠	
			U16-22	32	F16-22	0001	磨石	7.7	7.4	3.3	2869	半分欠	
			V11-41	22	FV11-41	0001	磨石	10.8			1684		
			V12-49	44	FV12-49	0002	磨石	8.5	6.9	5.6	4217	上下両面に縦打痕	
				42	FPT	0001	磨石	5.5	4.5	2.9	771	上下両面に縦打痕	
			表面採集	44	表面採集	0001	磨石	8.0	7.4	5.0	4249		
61	72	171	表面採集	44	表面採集	0001	磨石	8.7	5.9	3.5	2760	磨片	
62	72	172	SE-102	32	FSE-001	0142	砥石	24.9	12.6	10.7	49480	片面に横磨痕、一端欠損	
61	72	173	SE-110	26	FSE-002	0045	砥石	7.7	4.7	1.6	641	磨片	
61	72	174	SE-433	37	FSE-002	0001	砥石	11.4	3.9	1.9	1500	片面中央に縦状磨片の集合	
61	72	175	S15-74	44	F15-74	0005	砥石	5.9	4.6	1.8	614	磨片石芥の転用	
62	72	176	S16-17	45	F16-17	0001	砥石	30.2	8.2	4.0	10865	表面に縦磨痕、一側縁・両面に縦打痕	
			SE-084	44	FSE-001	0011	右皿	多孔質安山岩	4.2	4.4	3.8	367	磨片(平・凸)、凹み部1
			SE-081	44	FSE-002	0028	右皿	多孔質安山岩	4.4	4.9	4.7	668	
			SE-081	44	FSE-002	0070	右皿	多孔質安山岩	5.5	5.5	2.5	268	
62	73	177	SE-081	44	FSE-002	0081	右皿	安山岩	4.8	5.9	2.0	508	磨片(形状不明)
			SE-089	41	FSE-004	0063	右皿	安山岩	10.4	4.6	1.9	794	磨片
			SE-090	45	FSE-005	0013	右皿	安山岩	3.3	6.0	1.7	343	磨片(右側半分)
62	73	178	SE-092	41	FSE-003	0008	右皿	多孔質安山岩	7.9	6.2	3.5	1308	磨片(凹・凸)
			SE-097	41	FSE-007	0012	右皿	磨片	7.7	5.9	3.5	2317	磨片
			SE-097	41	FSE-009	0004	右皿	多孔質安山岩	4.9	5.6	3.9	803	
			SE-099	41	FSE-002	0002	右皿	多孔質安山岩	3.4	3.1	2.2	218	磨片
			SE-099	41	FSE-002	0013	右皿	安山岩	7.3	7.2	3.0	1353	磨片
			SE-099	41	FSE-002	0018	右皿	多孔質安山岩	5.3	2.9	2.7	255	磨片
62	73	179	SE-121	37	FSE-001	0014	右皿	多孔質安山岩	5.6	6.6	2.8	894	磨片(凹・凸)
			SE-132	23	FSE-001	0003	右皿	磨片	9.4	4.9	1.7	1079	磨片
62	73	180	SE-133	23	FSE-002	0003	右皿	花崗岩	10.0	8.8	7.8	9627	磨片(形状不明)
			SK-164	37	FSE-001	0001	右皿	安山岩	9.1	4.1	6.4	2456	
			SK-162	32	FSE-017	0001	右皿	多孔質安山岩	6.5	3.2	7.2	1758	
			SE-006	42	FSE-030	0001	右皿	安山岩	8.3	6.0	6.1	4308	両面平打、両面に凹み部
			SK-305	42	FSE-034	0001	右皿	安山岩	5.6	10.1	6.0	3286	磨片(凹・平)
				32	FSD-004	0001	右皿	多孔質安山岩	2.8	3.6	4.0	478	凹み部
			S13-20	44	F13-20	0001	右皿	多孔質安山岩	4.4	3.9	3.4	1617	両面平打、凹み部
			S14-22	44	F14-22	0004	右皿	安山岩	5.5	4.9	3.3	679	磨片
			S14-22	44	F14-22	0004	右皿	安山岩	3.4	2.8	2.1	1150	磨片
			S14-22	44	F14-22	0006	右皿	花崗岩	4.9	5.7	5.9	2370	磨片(平・凸)
62	73	181	S14-22	44	F14-22	0016	右皿	多孔質安山岩	13.7	11.1	5.2	6144	磨片(凹・凸)、表面に凹み部1
			S14-23	44	F14-23	0004	右皿	安山岩	6.1	5.1	2.9	1086	凹み部1
			S14-23	44	F14-23	0005	右皿	花崗岩	5.6	10.8	4.3	3488	磨片(両面平打)
			S14-23	44	F14-23	0005	右皿	花崗岩	6.2	6.2	5.4	2721	磨片(右側半分)
			S14-24	44	F14-24	0005	右皿	安山岩	6.0	5.1	6.4	2215	凹み部1
			S14-24	44	F14-24	0007	右皿	安山岩	5.7	4.3	3.8	1188	磨片(平・凸)
62	73	182	S14-41	44	F14-41	0001-1	右皿	安山岩	12.7	12.0	5.3	10059	磨片(凹・平)、表面に凹み部1
			S14-44	44	F14-44	0011-1	右皿	多孔質安山岩	3.8	5.4	4.7	752	磨片(凹・平)、凹み部2
			S14-32	44	F14-32	0019	右皿	多孔質安山岩	4.0	3.0	3.0	218	磨片
			S14-32	44	F14-32	0035	右皿	多孔質安山岩	8.5	5.5	2.8	1394	磨片(裏面凹)、凹み部3
			S14-32	44	F14-32	0045	右皿	多孔質安山岩	4.6	4.3	1.9	367	磨片
			S14-32	44	F14-32	0047	右皿	多孔質安山岩	4.1	2.7	2.1	215	磨片
			S15-74	45	F15-74	0040	右皿	多孔質安山岩	7.3	4.9	3.0	533	磨片(凹・平)
			S15-94	45	F15-94	0001-1	右皿	多孔質安山岩	4.8	5.5	1.9	280	磨片(凹・平)
			U11-47	23	FU11-47	0001	右皿	多孔質安山岩	7.7	5.5	4.5	1311	
			U16	32	F16	0001	右皿	花崗岩	4.9	6.8	4.4	1618	
			U16-22	32	F16-22	0001	右皿	安山岩	9.7	10.1	6.0	6883	磨片(凹・平)
			U16-22	32	F16-22	0001	右皿	安山岩	11.6	10.0	2.8	4364	両面平打
			U16-22	32	F16-22	0001	右皿	安山岩	7.5	7.2	6.3	4358	磨片(凹・凸)
			U16-22	32	F16-22	0001	右皿	安山岩	6.8	9.0	5.5	3610	磨片、417・追加と接合
			U16-22	32	F16-22	0001	右皿	安山岩	6.0	5.0	3.7	2234	磨片、416・追加と接合
				42	FSE-001	0001	右皿	安山岩				2876	416・417と接合

区画	種目	番号	測量番号	建物	設備	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備 考		
			U16-22	32	FU16-22	0001	石積	縦向き	9.0	5.6	4.8	1939	↑
			U16-22	32	FU16-22	0001	石積	安山岩	3.8	6.7	1.9	626	↑
			U18-47	37	FU18-47	0001	石積	多孔質安山岩	4.4	3.8	3.6	253	↑
			V17	2	FV17	0001	石積	安山岩	8.3	6.4	5.7	2749	↑
62	73	183	SI-089	41	FSI-004	0637	白石	流紋岩	21.0	12.3	7.8	27527	↑
63	73	184	SI11-47	23	FS11-47	0001	石積	砂岩	3.8	2.1	1.8	137	↑
61	73	185	SI11-67	23	FS11-67	0001	石積	流紋岩	8.7	5.9	6.8	461	↑
61	74	186	SI4-02	28	FS4-02	0001	石積	粗面母片岩	7.5	2.8	2.4	806	↑
61	74	187	T13-70	44	FT13-70	0001	若石工製品	凝灰岩	4.5	2.6	0.5	104	↑
61	74	188	SI-086	41	FSI-006	0063	若石工製品	軽石	10.1	7.9	4.1	481	↑
63	74	189	SI-085	45	FSI-004	0015	前面調整産	砂岩	13.2	9.1	3.9	7333	↑
63	74	190	SI-080	45	FSI-005	0186	前面調整産	砂岩	8.2	6.1	3.3	2417	↑
63	74	191	SI-087	41	FSI-007	0008	前面調整産	流紋岩	6.7	5.2	2.4	1119	↑
63	74	192	SI-088	41	FSI-008	0677	前面調整産	砂岩	10.1	7.2	3.4	3710	↑
63	74	193	SI-120	32	FSI-010	0130	前面調整産	砂岩	8.4	4.2	1.5	773	↑
			SI-120	37	FSI-002	0001	前面調整産	砂岩	2.9	2.3	1.4	132	↑
			SK-303	42	FSK-030	0001	前面調整産	砂岩	6.0	4.4	7.2	1169	↑
63	74	194	R15-34	28	FR15-34	0001	前面調整産	砂岩	6.4	5.5	3.8	1977	↑
			SI4-13	44	FS4-13	0009	前面調整産	流紋岩	5.5	4.2	1.5	455	↑
63	74	195	SI4-24	44	FS4-24	0002	前面調整産	砂岩	7.4	5.1	2.8	1942	↑
			SI4-42	44	FS4-42	0029	前面調整産	砂岩	8.6	6.5	2.2	2081	↑
			SI5-97	43	FS5-97	0001	前面調整産	砂岩	7.8	4.6	1.4	662	↑
			T16-00	47	FT16-00	0001	前面調整産	流紋岩	6.8	5.4	1.9	949	↑
			T16-07	42	FT16-07	0001	前面調整産	砂岩	7.8	4.8	1.8	914	↑
			U16	32	FU16	0001	前面調整産	砂岩	11.0	7.3	2.8	3564	↑
			Y11-72	23	FV11-72	0001	前面調整産	砂岩	6.7	5.7	2.1	1094	↑
63	74	196	V12	46	FV12	0001	前面調整産	砂岩	6.7	2.6	1.7	564	↑
				9	2階2トレンナ	0001	前面調整産	砂岩	4.9	4.2	1.6	388	↑
58	75	197	SI-080	43	FSI-001	0103	石積	チャート	4.0	4.1	2.6	482	↑
58	75	198	SI-085	41	FSI-006	0016	石積	縦向き	5.1	9.4	4.8	3215	↑
58	75	199	SI-102	32	FSI-001	0109	石積	チャート	3.9	3.8	3.1	472	↑
58	75	200	SI-119	32	FSI-009	0041	石積	チャート	7.0	6.9	4.6	2166	↑
58	75	201	SK-300	32	FSK-003	0001	石積	流紋岩	10.1	6.1	5.0	4724	↑
58	75	202		47	FSI-001	0002	石積	チャート	2.7	2.6	1.9	134	↑
			R14-39	28	FR14-39	0001	石積	チャート	4.5	2.8	2.5	423	↑
			R14-39	28	FR14-39	0001	石積	チャート	2.7	2.5	1.5	110	↑
			R14-67	28	FR14-67	0002	石積	チャート	5.8	3.7	1.3	360	↑
			R14-96	28	FR14-96	0001	石積	黒曜石	1.5	2.0	1.1	3.8	↑
			R14-98	45	FR14-98	0001	石積	チャート	3.7	4.1	2.2	281	↑
58	75	203	SI4-15	44	FS4-15	0011	石積	チャート	3.6	2.3	1.5	164	↑
			SI5-38	47	FS5-38	0001	石積	チャート	2.0	3.2	1.2	85	↑
58	75	204	SI5-72	41	FS5-72	0018	石積	チャート	3.3	2.6	1.7	126	↑
			SI5-74	45	FS5-74	0017	石積	チャート	1.8	2.4	1.1	54	↑
			SI5-75	43	FS5-75	0001-1	石積	チャート	3.2	3.9	1.6	191	↑
			SI6-19	47	FS6-19	0001	石積	チャート	2.6	3.5	1.1	117	↑
58	75	205	T12-73	28	FT12-73	0002	石積	黒曜石	2.5	3.3	3.8	289	↑
58	75	206	T17-34	32	FT17-34	0002	石積	黒曜石	3.1	3.6	2.8	290	↑
			V11-71	23	FV11-71	0001	石積	流紋岩黒色岩	2.1	3.8	2.7	197	↑
58	75	207	V14-43	32	FV14-43	0001	石積	チャート	3.6	4.4	1.9	415	↑
			V9-77	23	FV9-77	0044	石積	チャート	2.9	2.0	1.0	93	↑
			SI-082	41	FSI-003	0063	軽石	軽石				74	↑
			SI-082	41	FSI-003	0252	軽石	軽石				63	↑
			SK-101	32	FSK-005	0001	軽石	軽石				83	↑

第2節 古墳時代

富士見遺跡で検出した古墳時代の遺構は、竪穴住居9軒と円墳1基である。竪穴住居はD地区で8軒、E地区で1軒、円墳はB地区で検出された。そのほかの地区では、遺構は検出されておらず、遺構外からも当該期の遺物はほとんど出土していない。

1 竪穴住居

SI-084 (44) SI-001 (第77図、図版17・64)

S14-51・61に位置する。D地区北西部の台地西縁にあたる。規模は5.04m×4.53mで、南東壁が影らむ方形を呈し、長軸は北西を向く。壁は北西を除き開き気味に立ち上がっており、確認面からの深さは0.49mを測る。壁際に焼土粒子を含む明褐色土、上層に暗褐色土、中層に褐色土、下層に明黄褐色土が堆積し、いずれにも焼土粒子や炭化粒子を含んでいる。床面は凹凸があるが、堅く締まっている。長軸線上の北西壁寄りに炉を検出した。規模は0.29m×0.26mで、掘り込みは浅く、焼土が薄く堆積する。柱穴と推定されるピットは6基検出された。配置は不規則で、床面からの深さは、炉の北側のP1が0.46m、P2は0.47m、南東側のP3は0.41m、P4は0.31m。南西側のP6は0.63m。南側のP5は0.23mを測る。

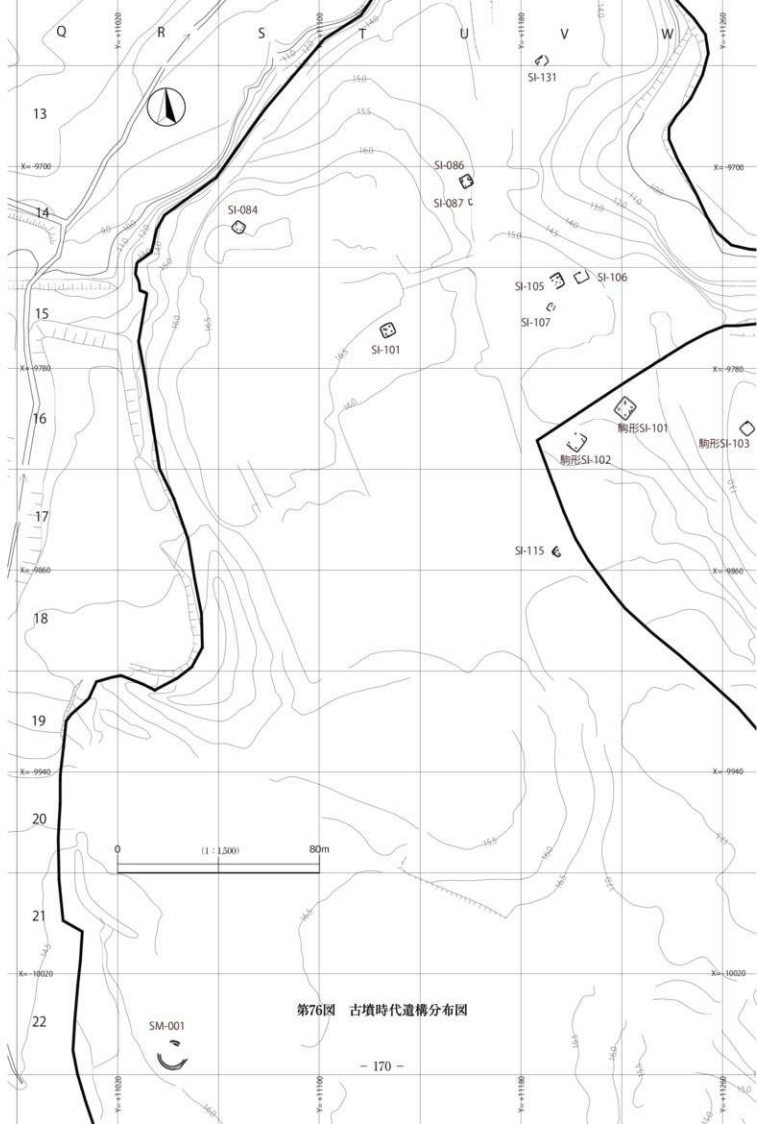
出土遺物の点数は多くないが、遺存状態の良好な土器を含んでいた。炉の周囲と南隅にまともっており、覆土下層から床面にかけて出土している。

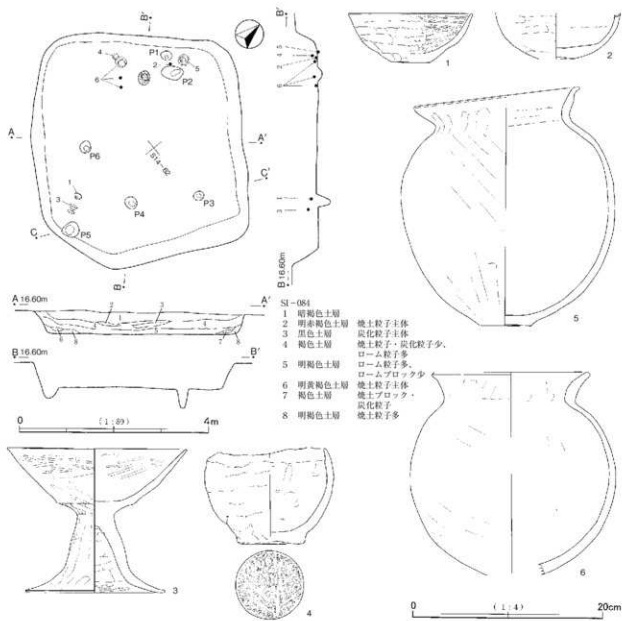
図示したのは土師器6点で、坏2点、高坏1点、鉢1点、甕2点である。

1は完形品に近い平底の坏である。3の高坏と並んで南隅から出土した。外面はヘラ削り後ナデ、内面は磨いている。口径13.0cm、底径5.2cm、器高4.0cmである。2は、5の甕と並んでP2横から出土した。底部は遺存するが、体部はわずかに遺存するのみで復元実測している。底径は3.6cmである。外面はヘラ削り後なでている。3は1の坏と並んで出土した高坏で、一部を欠損するのみで完形品に近いものである。坏下部に稜をもつ形態で大きく開いて立ち上がり、脚部も大きく開く形態である。脚部内面以外磨いて仕上げている。口径18.8cm、脚部半径14.8cm、器高15.3cmである。4は手捏ねの鉢で、底部に木葉痕が観察できる。口縁部から体部の一部を欠損するが遺存状態はよい。口径12.3cm、底径7.2cm、器高10.2cmである。内湾しながら立ち上がる形態で、外面に輪積痕が明瞭に残る。5・6は甕である。どちらも一部を欠損するものの完形品に近く、球形に近い胴部で、口縁部は外反して立ち上がる。5は口径17.3cm、底径5.5cm、器高25.1cm、6は口径16.2cm、器高は推定21.3cmである。

SI-086 (45) SI-001 (第78図、図版17・64・65)

U14-14に位置する。東側は駒形遺跡との境になる谷が北側から入り込み緩斜面となる。規模4.60m×4.84mの方形を呈す。短軸は北東を向いている。壁はわずかに傾斜して立ち上がり、壁溝が全周する。確認面からの深さは0.36mで、上層に黒色土、中層に暗褐色土、壁際にローム粒子を多量に含む褐色土が堆積する。北東壁際の中央とその西寄りの2か所に炉を検出した。壁際の炉Aは0.62m×0.49m、西側の炉Bは0.68m×0.55mを測る。いずれも掘り込みは浅いが、炉Bの方が強く被熱している。東隅に貯蔵穴を検出した。床面での規模は0.74m×0.68mの隅丸方形を呈す。深さは0.30mである。壁際から下層にかけてローム粒子やロームブロックを含む褐色土・明褐色土が堆積し、上層に炭化材を多量に混入する暗褐色土が堆積していた。柱穴は対角線上の4か所に設けられている。確認面での規模は径0.30m～0.33m、深さは0.35m～0.58mである。床面は凹凸が多く、中央部分が低くなっている。南西壁近くのP3脇に高さ0.20cm、上面の規模が0.50m四方のベッド状の高まりを検出した。入り口施設に関連する可能性が考えら





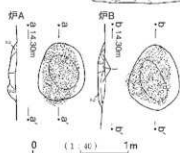
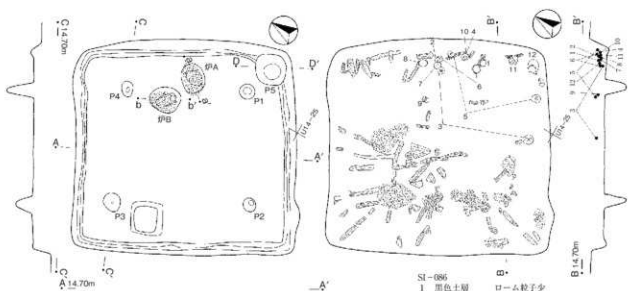
第77図 SI-084

れる。

焼失住居で、覆土下層から多量の焼土と炭化材を検出した。炭化材は北東壁寄りと、西側半分に多く、西側では放射状に出土している。

出土遺物は多く、炉から貯蔵穴周辺の東壁から南壁際覆土下層から床面に集中していた。図示したのは土師器12点で、内訳は坏2点、高坏5点、鉢1点、壺2点、甕2点である。

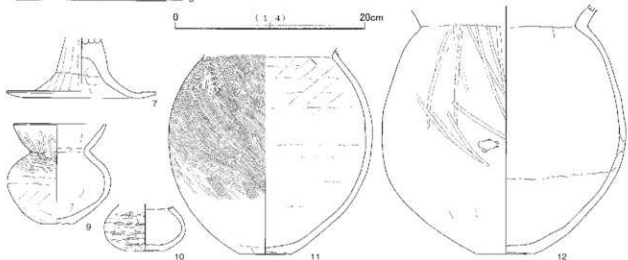
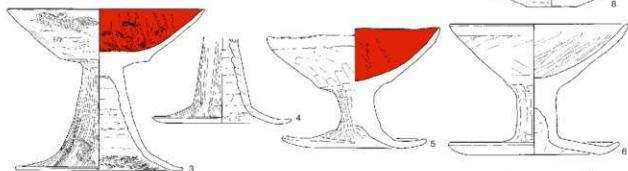
1・2は坏で、完形品に近い。どちらも平底で大きく開いて立ち上がり、口縁部はわずかに内湾する。1は内外面をヘラミガキし、2はヘラナデで仕上げている。1は口径129cm、底径4.0cm、器高5.3cm、2は口径12.8cm、底径5.6cm、器高5.8cmである。3～7は高坏である。3・5・6は完形品ではないが遺存状態がよい。3の坏部は体部下端に明瞭な稜をつくり、直線的に大きく広がって立ち上がる。脚部は大き



- SI-086 01A
 1 暗赤褐色土層 焼土粒子多
 2 明褐色土層 ローム粒子多、ロームブロック少
- SI-086 01B
 1 暗褐色土層 ローム粒子・焼土粒子少
 2 明褐色土層 ローム粒子多
 3 暗赤褐色土層 焼土・硬化した焼土ブロック (火床部)

- SI-086 01B
 1 暗褐色土層 ローム粒子少
 2 暗褐色土層 ローム粒子少
 3 暗褐色土層 ローム粒子多、ロームブロック多
 4 暗赤褐色土層 焼土粒子多、炭化材
 5 明褐色土層 ローム粒子多
 6 明褐色土層 ローム粒子・ロームブロック多

0 1:40 4m



第78図 SI-086

く開いており、内面に明瞭な輪積痕が観察される。5も坏部に稜があり、内湾して緩やかに立ち上がる形態である。脚部は柱状で、裾部が大きく広がっている。6は坏部が内湾して立ち上がり、脚部は柱状で、裾部はやはり横に大きく広がる。3・5は坏部内面が赤彩されている。3は口径20.6cm、器高17.6cm、5は口径18.7cm、器高17.6cm、6は口径18.2cm、器高12.7cmである。4・7は坏部を欠損した脚部である。8は完形品の鉢である。平底で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部は短く外反する。器面が荒れており明瞭ではないが、外面の底部付近を除き、赤彩していると考えられる。9・10は小型の壺である。9は完形品で、10は口縁部を欠損する以外はよく遺存している。9は平底で、胴中位に最大径がある。口縁部はわずかに内湾して開いて立ち上がる。口径9.5cm、器高10.6cmである。10も平底で胴部中位に最大径があるが、9と比べると上からつぶしたような形態で、楕円形の断面形となる。11・12は甕で、どちらも貯蔵穴上から出土し、口縁部を欠損している。11は最大径が中位よりやや上に位置する。外面は上から下へハケメ調整する。内面はヘラナデにより仕上げているが、輪積み痕跡が明瞭に残る。12は最大径が中位よりやや下にある。胴部中位を内側から穿孔している。

SI-087 (45) SI-002 (第79図、図版17・18・65)

U14-35に位置する。SI-086の南側になる。東側が調査区外、北側を溝状の攪乱により壊されるため、調査できたのは2.30m×1.40mの範囲であった。一辺2.70m程度の方形を呈すると推定され、確認面からの深さは0.42mである。壁際にローム粒子・焼土粒子を多量に含む明褐色土、床上に褐色土が堆積するほかは、暗褐色土を主体とする覆土である。床面は平坦でよく締まっている。南西隅寄りに径0.17m、深さ0.07mの浅いピットを検出したほかは、炉や柱穴などの施設は検出されなかった。西壁際の床面に3か所の焼土の堆積が認められる。炭化物は検出できなかったが、焼失住居の可能性がある。

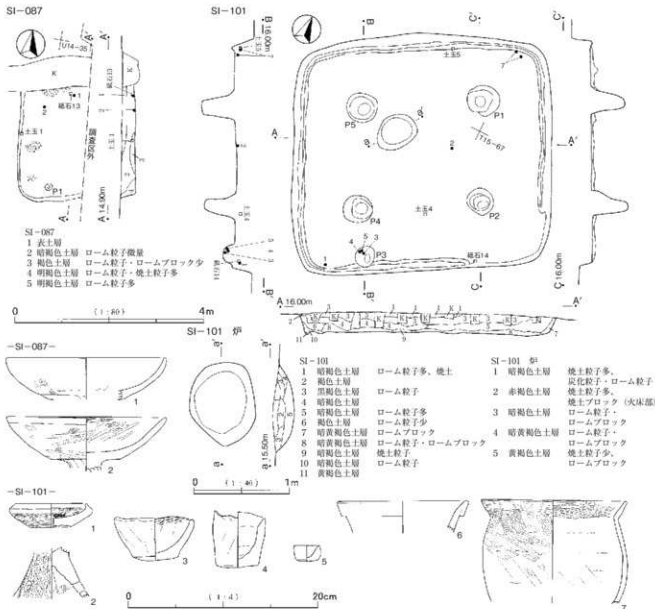
出土遺物は少なく、土師器高坏2点と土玉・砥石各1点を図示した(第84図1・13)。1は坏部の破片、2は脚部を欠損するものの坏部は完存している。どちらも坏部下部に明瞭な稜をもち、わずかに内湾しながら大きく開いて立ち上がる形態である。1は推定口径16.4cm、2は口径16.7cmである。

SI-101 (47) SI-002 (第79図、図版18・65)

T15-66に位置する。規模5.14m×5.54mの方形を呈する。確認面からの深さは0.43mを測る。短軸は北西を向く。覆土は上層に暗褐色土、中層に黒褐色土、下層に暗褐色土が堆積する。床面には0.10mの厚さの貼り床を施し、壁溝は南東隅を除いて全周する。炉は中央より西に寄った柱穴P5の脇から検出し、規模0.78m×0.71mの楕円形である。主柱穴は対角線上の4か所に設けられており、床面からの深さは0.64m～0.71mである。P4南東の南東壁際から検出したP3は貯蔵穴と考えられる。床面での規模は0.46m×0.32m、深さ0.24mである。

遺物は土師器7点、土玉4点(第84図2～5)、砥石1点(第84図14)を図示した。土器は北西隅から1、中央から2、貯蔵穴内から3～5、北東隅から7が出土した。砥石は南壁際から出土したものである。

土器の1・2は器台で、1は受部、2は脚部である。脚部には円形の透かし孔がある。3～5は手捏ねの小型土器で、3が一部を欠損する以外は完形品である。貯蔵穴底面にまともであった。6は折り返し口縁の壺の口縁部破片である。7は甕で、胴下半部から底部を欠損する。口縁部下から頸部にかけてハケメを施し、口縁部は折り返し状に成形される。



第79図 SI-087、SI-101

SI-105 (49 SI-001 (第80図、図版18・65))

V15-13に位置する。東側にSI-106、南西にSI-107が検出された。いずれも古墳時代中期の竪穴住居である。西壁側は調査区外になるため2/3を検出できなかった。東壁の上部は溝状遺構により壊されている。方形を呈し、遺存する南北軸は5.65mを測る。深さは遺存のよいところでは0.52mで、壁は垂直に立ち上がり、壁溝がまわっていた。覆土は上層に暗褐色土、中層に黒褐色土、床面上に暗黄褐色土が堆積し、壁際には暗黄褐色土、その上に暗褐色土が流れ込むように堆積していた。ロームブロックにより貼り床されて床面は平坦である。炉は南北軸上の北西寄りと中央の2か所に検出された。北西寄りの炉Aは強い被熱により火床部が明瞭で、炉Bは覆土にローム粒子を含むが、明瞭な火床部の範囲を確認できなかった。ピットは9か所検出した。対角線上に位置するP1～P4が柱状穴である。P2・P3は掘乱から検出したため、本来の規模は不明であるが、P1は径0.75m・深さ0.74m、P4は径0.61m・深さ0.63mである。

P1は土層の断面観察で抜柱されていたと考えられる。このほかに壁際に径0.32m～0.39m、深さ0.14m～0.15mで、主柱穴より規模が小さいP5～P7があり、壁溝中にさらに小型で浅い径0.19m・0.22m、深さ0.08m・0.12mのP8・P9を確認した。

出土した遺物は少ない。このうち南壁際にまとまっていた土師器3点を図示した。

1・2は高坏である。1は坏部、2は脚部である。1は1/4ほどの破片で、復元実測している。坏部下部に明瞭な稜をつくり、大きく開いて立ち上がる形態である。器面が荒れていて調整は不明瞭だが、外面はナデ調整、内面はミガキ調整で仕上げている。2も復元実測している。柱状部が中空で、裾部が大きく横に広がる形態で、内面には輪積み痕跡が明瞭に観察できる。外面はヘラズリ後丁寧になでている。3は甕で、口縁部から胴部の2/3が遺存していた。底部は欠損する。最大径は胴部中位にあり、口縁部は外反して立ち上がる。内面の一部に輪積み痕跡が観察される。

SI-106 (49) SI-003 (第80図、図版18)

V15-05・06に位置する。古墳時代中期の竪穴住居SI-105の東に隣接して立地する。北隅と南東壁の一部を攪乱により壊されているが、短軸4.08m、長軸5.29mの横長の方形を呈する。南西壁際の一部に壁溝を検出した。深さは遺存のよいところが0.13mで、覆土は暗褐色土を主体とし、壁際や床面直上に黄褐色土が堆積していた。炉は短軸上の北西壁際中央から検出した。壁に沿って長い楕円形で、規模は0.79m×0.53mである。覆土上層中央に焼土ブロックが堆積していた。壁に接していることからカマド火床部の可能性もあるが、カマドの構築材は検出しておらず、カマドへの移行期の炉であろう。ピットは南壁際から2か所で検出した。P1は斜めに掘り込まれ、周辺の床面が硬化していることから入り口施設であろう。南隅に位置しているP2は0.42m×0.38mの円形で、深さは0.82mある。貯蔵穴と考えられる。柱穴は検出されなかった。

確認面から浅く、出土遺物は少ない。

図示できたのは高坏2点で、1は坏部破片、2は柱状の脚部の一部である。2は外面を赤彩している。

SI-107 (49) SI-002 (第81図、図版18・65)

V15-32・33に位置する。西隅と南隅を攪乱によって壊されているが、長軸3.23m、短軸2.80mの隅丸方形を呈する。深さは0.40mで、上層に黒褐色土、中層に暗褐色土が堆積し、壁際や下層には中層よりローム粒子の混入が多い暗褐色土が堆積していた。床面は平坦で、南から南西壁際の一部で壁溝を部分的に確認した。炉は長軸線上の北西寄りから検出した。0.48m×0.36mの楕円形で、覆土上層は焼土粒子を多量に含む褐色土で、北寄りと南寄りから焼土ブロックを検出した。炉以外には柱穴などの施設は確認されなかった。

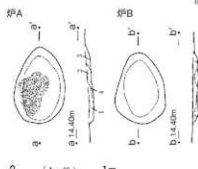
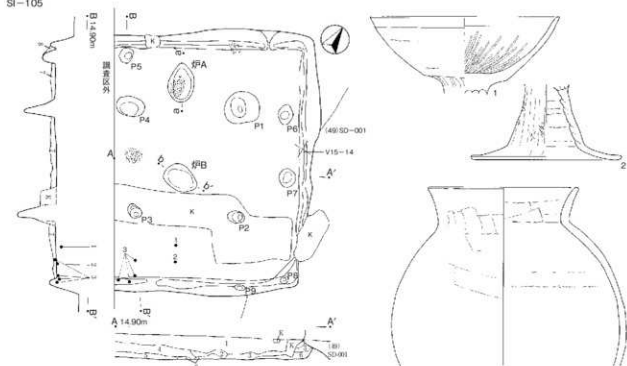
出土遺物は少なく、土師器壺1点と土製門板1点(第84図10)を図示した。

1は口縁部から肩部と胴部の一部を欠損する。平底で中位に最大径をもつ球形の胴部である。胴部外面は横方向に磨いて仕上げしており、上半部は特に細かいミガキ痕跡が観察できる。内面は横方向にヘラナデしている。

SI-115 (32) SI-007 (第81図、図版19・65)

V17-83に位置する。D地区とC地区の境目付近に当たり、道路を挟んで東側は胸形遺跡になる。西隅は近世の溝状遺構(32)SD-004と重複し、東側約1/4が調査区外にかかるため調査できなかった。3.40m×3.62mの方形を呈し、確認面からの深さは0.28mを測る。覆土は上層から黒色土、暗褐色土、褐色土

SI-105



SI-105

- | | | |
|---|--------|-----------------------|
| 1 | 暗褐色土層 | 焼土粒子少、ローム粒子 |
| 2 | 黒褐色土層 | ローム粒子 |
| 3 | 暗褐色土層 | ローム粒子多、ローム粒子・ロームブロック少 |
| 4 | 黒褐色土層 | ローム粒子・焼土粒子・ロームブロック |
| 5 | 暗褐色土層 | 焼土粒子少、ローム粒子 |
| 6 | 暗黄褐色土層 | ローム粒子・ロームブロック |
| 7 | 暗褐色土層 | ローム粒子、ロームブロック主体 |
| 8 | 暗褐色土層 | ローム粒子・ロームブロック |

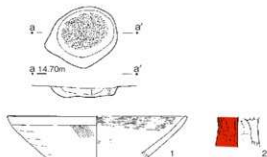
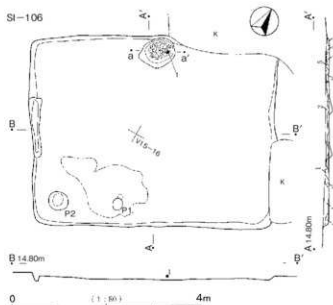
SI-105 炉A

- | | | |
|---|-------|----------------------|
| 1 | 暗褐色土層 | 焼土粒子多、焼土ブロック・ロームブロック |
| 2 | 暗褐色土層 | 焼土粒子少、ローム粒子 |
| 3 | 暗褐色土層 | ロームブロック少、ローム粒子・焼土 |
| 4 | 赤褐色土層 | 焼土ブロック主体 (火床部) |

SI-105 炉B

- | | | |
|---|--------|---------------|
| 1 | 暗黄褐色土層 | 焼土粒子 |
| 2 | 黄褐色土層 | 焼土粒子少、ロームブロック |

SI-106



SI-106

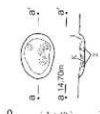
- | | | |
|---|--------|-------------|
| 1 | 暗褐色土層 | ローム粒子多 |
| 2 | 暗褐色土層 | ローム粒子 |
| 3 | 黄褐色土層 | ローム粒子少 |
| 4 | 黄褐色土層 | |
| 5 | 暗褐色土層 | 焼土粒子 |
| 6 | 暗黄褐色土層 | 焼土粒子少、ローム粒子 |
| 7 | 褐色土層 | ローム粒子少、焼土粒子 |
| 8 | 黄褐色土層 | 焼土粒子少 |

SI-106 炉A

- | | | |
|---|-------|-------------|
| 1 | 赤褐色土層 | 焼土主体 |
| 2 | 黄褐色土層 | ローム粒子・焼土粒子少 |

第80図 SI-105、SI-106

SI-107



SI-107

- | | | |
|---|-------|----------------------|
| 1 | 黒褐色土層 | ローム粒子 |
| 2 | 暗褐色土層 | ローム粒子・ロームブロック、焼土粒子微量 |
| 3 | 暗褐色土層 | ローム粒子多 |
| 4 | 暗褐色土層 | ローム粒子多 |
| 5 | 暗褐色土層 | ローム粒子・ロームブロック少 |
| 6 | 暗褐色土層 | ローム粒子少 |
| 7 | 暗褐色土層 | ローム粒子 |
| 8 | 暗褐色土層 | 焼土粒子 |

SI-107 歩

- | | | |
|---|-------|--------------------------|
| 1 | 褐色土層 | ローム粒子・ロームブロック・炭化粒子、焼土粒子多 |
| 2 | 黄褐色土層 | ロームブロック |

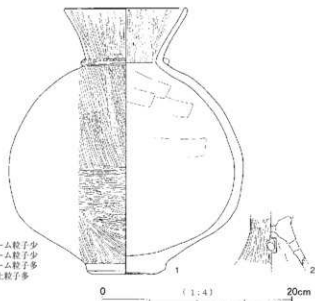


SI-115



SI-115

- | | | |
|---|--------|--------|
| 1 | 黒色土層 | ローム粒子少 |
| 2 | 暗褐色土層 | ローム粒子少 |
| 3 | 褐色土層 | ローム粒子多 |
| 4 | 暗赤褐色土層 | 焼土粒子多 |



第81図 SI-107、SI-115

が水平に堆積していた。壁は垂直に立ち上がり、壁溝は調査範囲部分では全周する。床面は比較的平坦でよく踏み固められている。竈は北東壁寄りに検出され、一部が調査区外にかかるため、 $0.82\text{m} \times 0.39\text{m}$ の範囲のみ検出した。また西側の隅に貯蔵穴P4を検出した。方形で、規模は床面で $0.76\text{m} \times 0.66\text{m}$ 、深さ 0.50m である。このほか複数のピットが検出されているが、覆土や土層断面の観察によりP1・P5・P6は後世の掘り込みの可能性がある、本跡に所属することが確実なのは南西壁に沿って並んで検出されたP2・P3である。深さは 0.20m 、 0.14m である。また、P7～P9は壁柱穴と考えられる。深さは $0.24\text{m} \sim 0.30\text{m}$ である。

壁際で炭化材を検出した。立った状態で検出されたものもあり、貯蔵穴P4中にも落ち込んでいた。明瞭な焼土の分布は認められなかったが、床面上に焼土粒子を多量に含む暗赤褐色土が薄く堆積している部分があり焼失住居であろう。

出土した遺物は少なく土師器2点を図示した。

1は壺形土器である。2/3が遺存し、口径 12.8cm 、底径 8.3cm 、器高 28.0cm である。口径部は外傾して

立ち上がり、頸部に刻目を施した突帯を巡らしている。胴部最大径は下半部にあり、下膨れの形態である。外面は丁寧に磨いている。2は高坏脚部である。遺存高5.2cmで、透かし孔は4か所にあったと推定される。

SI-131 (49) SI-004 (第82図、図版19・65)

E地区にあたるV12-91・92に位置する。北隅は調査区外で、南隅は近世の溝(49)SD-002に埋されている。3.70m×4.70mの方形で、掘り込みは浅く、壁の立ち上がりは不明瞭である。炉は北西壁中央の炉Aとそのすぐ東側の炉B、西側の炉Cの3か所が検出された。炉A・炉Bは掘り込みが浅く、立ち上がりが不明瞭である。北西壁に沿って広がる楕円形を呈している。炉Cは掘り込みが明瞭な円形で、焼土ブロックが堆積するが被熱痕跡は認められなかった。また炉Aと炉Cの間の床面に被熱部分があり、焼土の堆積が認められた。北隅、西隅周辺にも焼土が広がっていた。柱穴は検出されなかった。床面は平坦だが軟弱で、炉の周囲など一部に硬化面が認められた。

遺物は炉の周辺から西隅を中心に出土した。掘り込みが浅いこともあるが、いずれも床面近くから出土している。

土玉1点(第84図6)と土師器12点を図示した。1は坏、2～6は高坏、7～10は壺、11は瓶、12～14は甕である。1は口縁部から体部の1/3周ほどの破片で丸底になると考えられる。2は内湾して立ち上がり、口縁部が強く外反する鉢形の坏部に柱状の脚部がつく。脚下半部が欠損している。3～5は坏下端部に明瞭な稜をもち、坏部が大きく開いて立ち上がる形態の高坏坏部で、いずれも脚部を欠損するが、脚部の形態は、柱状の脚に大きく外に開く脚裾部をもつ6のような形態であったと考えられる。3は口径17.8cm、4は20.5cmである。7は小型の壺の口縁部片で、内面を赤彩している。8は、口縁部を欠損するが球形の胴部に小さい平底がつく形態であろう。9・10は折り返し口縁の壺の口縁部と口縁部から肩部の一部である。復元口径は、9が14.4cm、10は20.5cmである。11は鉢形の甕であろう。口縁部から体部の1/3周で、下半部から底部は欠損する。口縁部を折り返している。12～16は甕で、13は遺存状態がよい小型品で、口径16.0cm、高さ18.8cmである。口径と胴部径がほぼ同じである。どの個体も被熱により器面が荒れている。

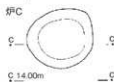
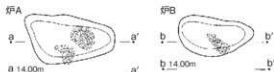
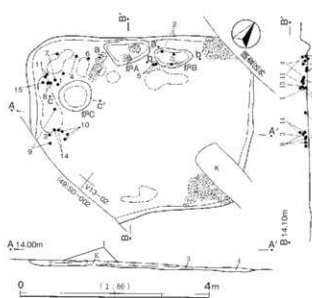
2 円墳

SM-001 (13) SM-001・(29) SM-001 (第83図、図版19)

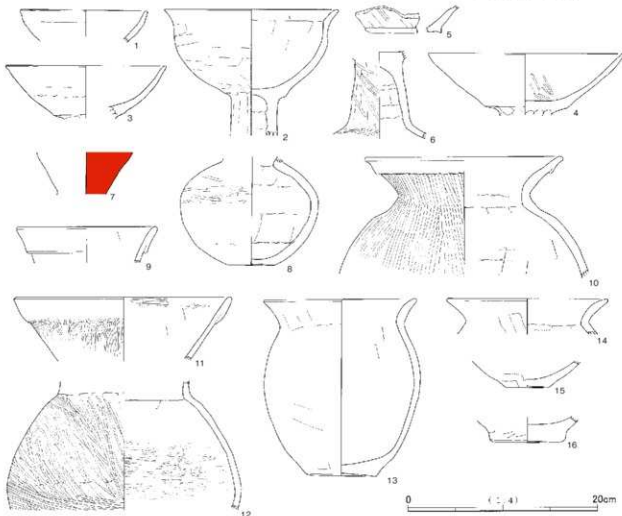
R22-64～97に位置する円墳である。B地区の南西にあたる台地縁辺に近いところで、谷奥部に面する。周辺からは古墳時代の遺構は検出されておらず、単独で所在する。全体の1/3が攪乱を受けており、遺存状態が悪く、周溝の一部しか検出できなかった。

周溝の内径は9.10m～9.20mである。周溝の幅は0.85m～1.60m、深さは確認面から0.33m～0.75mである。底面は平坦で、壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形状である。周溝の南西部に1か所、0.16mの段差が認められる部分があるがそのほかに大きな深さの変化はなく、最も深い南側から東側、西側に向かって徐々に浅くなっていく。周溝内の覆土はレンズ状に堆積し、下層のローム粒子を多く含む暗褐色土の上に、灰褐色砂質粘土を含む層が全体に見られた。また、南側覆土上層の0.60m×0.30mの範囲に焼土ブロックが確認された。

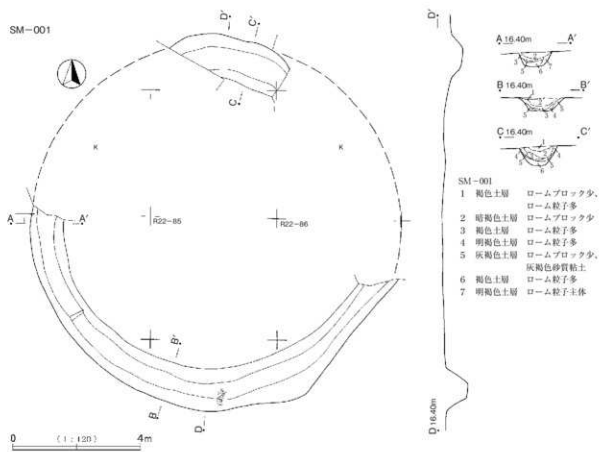
遺物は覆土中から縄文土器片が出土したが、本遺構に伴うと見られる遺物はなかった。



- | | | |
|------------|---------|---------------|
| SI-131 | 1 褐色土層 | ローム粒子 |
| | 2 褐色土層 | ローム粒子少 |
| | 3 暗褐色土層 | ローム粒子・ロームブロック |
| | 4 黄褐色土層 | |
| SI-131 9/A | 1 褐色土層 | 焼土粒子・焼土ブロック |
| | 2 黄褐色土層 | 焼土粒子 |
| | 3 褐色土層 | 焼土粒子・焼土ブロック |
| | 4 黄褐色土層 | 焼土粒子 |
| SI-131 9/B | 1 赤褐色土層 | 焼土主体・焼土ブロック少 |
| | 2 黄褐色土層 | 焼土粒子 |
| SI-131 9/C | 1 褐色土層 | 焼土粒子・焼土ブロック |
| | 2 暗褐色土層 | 焼土粒子 |
| | 3 黄褐色土層 | 焼土粒子 |



第82図 SI-131



第83図 SM-001

3 土製品・石製品(第84図、図版70)

古墳時代の所産と考えられる土製品・石製品は土玉8点、勾玉形土製品1点、土製円板3点、砥石2点、土器転用砥石1点である。このうち遺構に伴うのは土玉1～6と砥石13・14である。これら以外は古墳時代以外の遺構に混入していたもの、または遺構外などから出土したものであった。

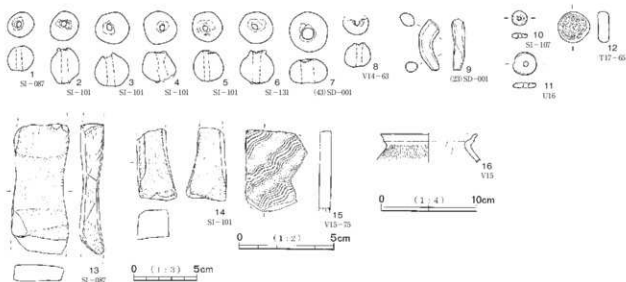
1～8は土玉である。1はSI-087、2～5はSI-101から出土した。SI-101から出土した4点はほぼ同じ大きさで、いずれも穿孔部分の整形を行っていない。6はSI-131から出土したもので、やはり穿孔部分の整形を行っていない。7は近世の溝、8は遺構外から出土したものである。

6は勾玉形土製品で、頭部を欠損する。棒状の粘土を曲げただけの雑な作りである。10・11は扁平な円板状の土製品で、平玉の模造品であろう。大きさが違うがよく似た作りである。10はSI-107から出土した。12は土師器片の周囲を磨って円形の円板状にしたものである。厚さから、甕などの大形土器の破片を利用したものであろう。

13・14は砥石である。13はSI-087から出土した。両端を欠損し、中央部が使用により薄くなっている。14はSI-101から出土した。研ぎ減って細くなった中央部から破損している。

15は須恵器片の断面の1辺が研磨されたものである。大甕の頭部を利用したものであろう。

遺構外出土土器で図示できたのは1点である。16はS字状口縁台付甕の口縁部で、V15から出土した。



第84図 古墳時代土製品・石製品、遺構外出土土器

第11表 古墳時代土製品計測表(第84図、図版70)

破損部分は遺存値

番号	遺構番号	遺物番号	種類	色調	長cm	幅cm	厚cm	孔径mm	重量g	備考
1	SI-087	(45)SI-002	土玉	赤褐色	2.00	2.10		4.0	[7.29]	
2	SI-101	(47)SI-002	土玉	赤褐色	2.85	2.35		5.0	12.36	
3	SI-101	(47)SI-002	土玉	赤褐色	2.65	2.70		5.0	14.04	
4	SI-101	(47)SI-002	土玉	赤褐色	2.50	2.75		5.0	[13.42]	
5	SI-101	(47)SI-002	土玉	赤褐色	2.40	2.45		3.5	13.16	
6	SI-131	(49)SI-004	土玉	赤褐色	2.65	2.70		5.5	14.38	
7	(43)SD-001	(43)SD-001	土玉	赤褐色	1.90	3.20		9.0	[15.58]	
8	V14-63	(48)V14-63	土玉	赤褐色	1.85	2.10		3.5	[4.15]	
9	(23)SD-001	(23)SD-001	勾玉形	赤褐色	[4.00]	1.25	0.90		[4.96]	
10	SI-107	(49)SI-002	円板	赤褐色	1.15	1.20	0.35	2.5×2.5	0.57	有孔
11	U16	(32)U16	円板	赤褐色	1.80	1.85	0.40	4.0×3.5	1.56	有孔
12	T17-65	(32)T17-65	円板	赤褐色	2.40	2.50	0.85		5.51	土御器転用

第12表 古墳時代砥石類計測表(第84図、図版70)

破損部分は遺存値

番号	遺構番号	遺物番号	種類	材質	色調	最大長mm	最大幅mm	厚mm	重量g	備考
13	SI-087	(45)SI-002	砥石	粘板岩	灰白色	102.9	45.1	19.5	135.79	
14	SI-106	(47)SI-002	砥石	凝灰岩	灰緑色	56.9	31.1	28.4	65.93	
15	V15-75	(26)V15-75	砥石	須恵器片	黒褐色	6.5	4.8	0.9		須恵器転用

第3節 中・近世

1 中世の概要(第85・86図)

富士見遺跡D・E区における中世の遺構は台地北側中央部に所在する2つの方形区画内に集中する。この区画は台地の向きと整合し、近世の土地利用においても継承されているので、合理的な占地形態なのであろう。この種の遺構には台地縁を選んで平坦な区画地を造る場合と、台地中央を掘り込むかたちで区画地とする場合に大きく二分されるが、当遺跡ではとりわけ西側区画に明らかなように、周辺より深く外縁部が空白となっていることなど、後者に相当すると思われる。ただし、東側東半部では区画を示す明瞭な掘り込みラインは確認されず、構成する遺構や内容も異なるので区画としての意識が薄かったのかもしれない。これらを西側から順次、掘込区画1→掘込区画2→掘込区画3と呼んだが、2と3については僅かな空白地を隔てるのみで、一連の区画としての意識も窺える。

西側掘込区画1内の遺構は地下式坑14、大形楕円形土坑2(井戸含む)、方形竪坑遺構2、長方形土坑22、楕円形土坑19、方形土坑6、円形土坑4、その他土坑4、溝状遺構2であるがピットについては省略した。掘込区画2内には地下式坑4、(長)方形竪坑遺構7、大形(長)方形土坑3、長方形土坑9、方形土坑6、楕円形土坑3、円形土坑2、その他土坑4、井戸1であるが、同様ピットについては省略した。一方、東に隣接する掘込区画3内では地下式坑1、長方形土坑9、方形土坑3、楕円形土坑3、円形土坑2、その他土坑3であり、単純な構成となっている。

遺構内には北側に地下式坑や方形竪坑遺構、南側に土坑群というのが基本的ながら、区画1では縁部部に集中するのに対し、区画2では火葬土坑や土坑墓を含む多様な様相がみとめられる。また、最も東側の区画3では地下式坑は1基のみで、土坑墓が主体と思われることから、墓域として把握されよう。

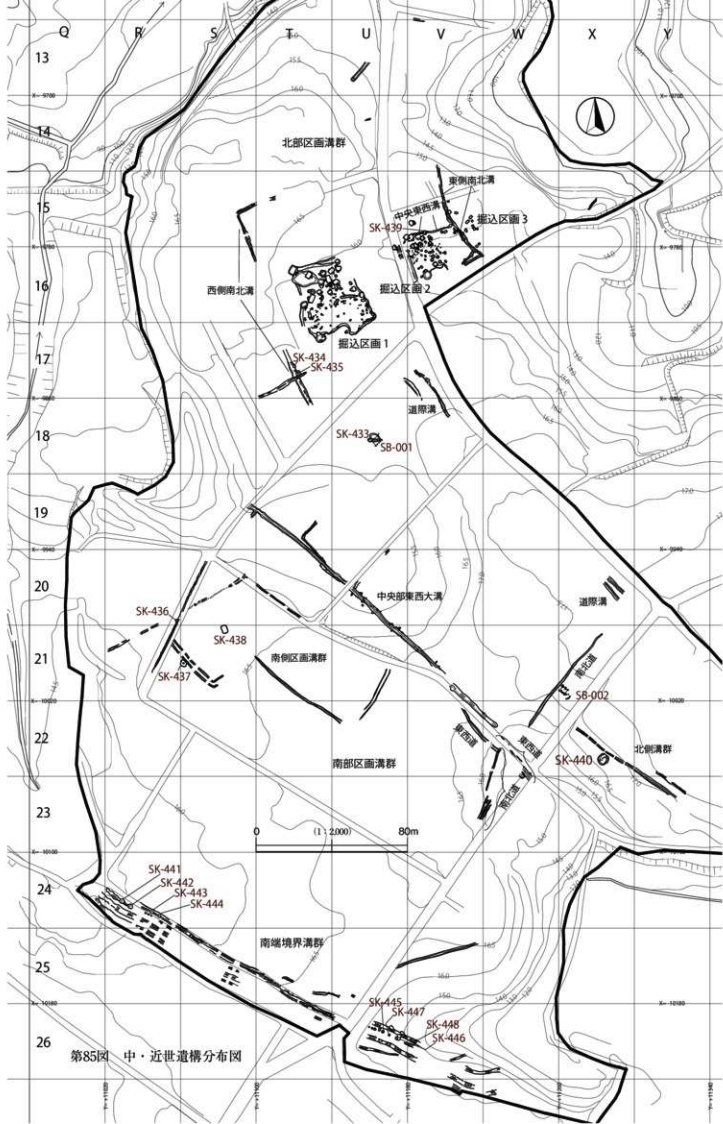
2 掘込区画1(第87図、図版20)

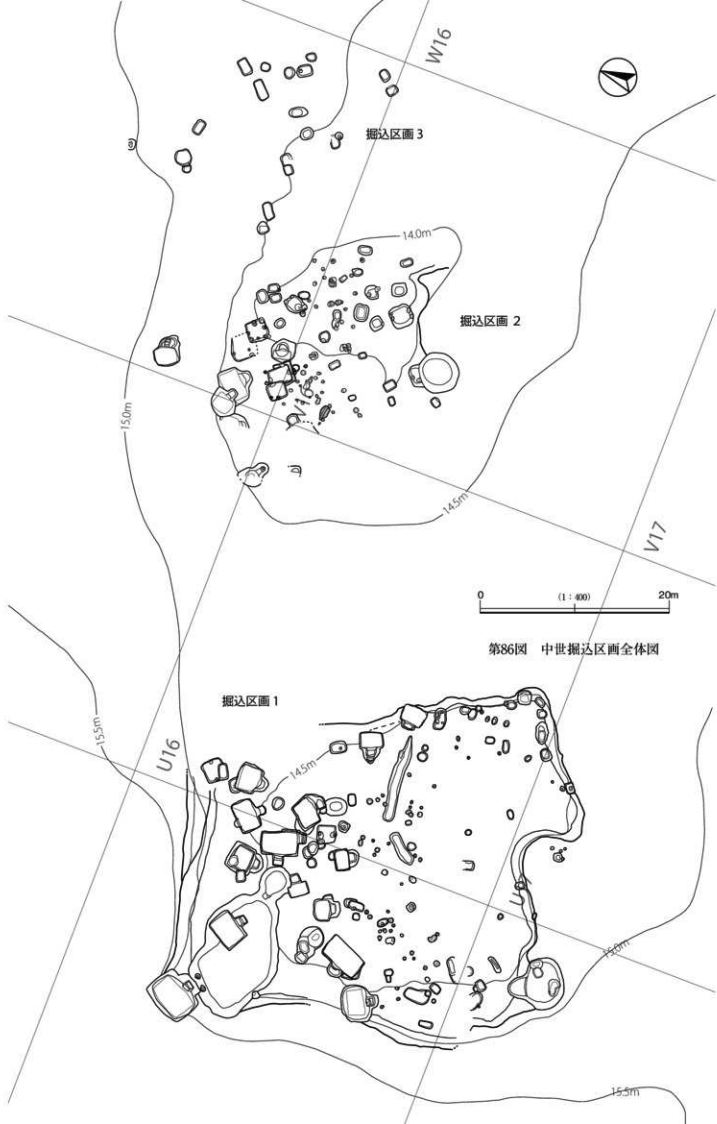
東西方向に浅い谷が入る富士見遺跡北部の台地中央T16・17～U16・17に位置する。形状は多少歪な長方形であり、規模は南北35m～40m、東西30mである。また、主軸方位は台地の向きと同じ北北西にとる。周囲一帯は縄文時代の遺構の希薄地に当たり、遺構自体の重複も少ないので、ひとまとまりの遺構として捉えられる。区画の中央はローム面で標高14.2m～14.3mであるのに対し、周囲の壁上面は同じくローム面で凡そ14.8m～15.1mの幅のなかにあって、大体0.6m～0.8m位の比高がある。もちろん、北東隅のように比高がほとんど感じられない箇所や南西隅のように底面が立ち上がって比高0.3m前後にすぎない場所もあるなど必ずしも一様でない。なお、これは調査後のローム面上で測った結果であるので、掘った土を周囲に盛り上げたとすれば(そのためか区画沿いには該期の遺構は見当たらない)、土手に囲まれていたかも知れない状況を示していると考えられる。

内部の空間構成は北側に地下式坑が集中する反面、南側が遺構希薄地ないし周縁に土坑が分布するというかたちであるが、北西隅の楕円形掘込状遺構と地下式坑との重複、また、地下式坑間にも非常に近接した例があるなど、いずれにせよこの区画がある程度の年代幅をもって活用されたことの表れであろう。

覆土は一部の観察では壁寄り下部にロームブロックを含む褐色土層が見られるほかは均一な暗褐色土層であり、自然堆積と思われる。しかし、区画全体を通した土層断面図をとっていないのであくまでも部分的な様相である。

区画1から出土した遺物は在地産土器(掘鉢、内耳土鍋)を主体として、僅かな古瀬戸や常滑陶器、砥石、石臼等の遺物が見られるのみであった。





第86図 中世掘込区画全体図

3 掘込区画1の遺構と遺物

(1) 地下式坑

SK-301 (42) SK-003 (第88図、図版20)

区画内北西コーナーに位置し、大形楕円形竪穴遺構SK-315と重複する。土層断面図の検討から当遺構が古い。方位は北西をとり、コーナーに見合った向きから、区画に伴うものであろう。共に横長の竪坑と地下室からなり、竪坑と地下室底面とは2段の明瞭な段差を有する。竪坑は入口部を広くとって深さ1.3m程斜めに掘り込んだ後に、長方形の箱形としており、その規模は横幅1.0m、縦幅0.8m、深さ0.85mである。竪坑の前にはビット2つが並列する。果たして伴うものかどうかかわからないが図示する。地下室は上面が外膨らみの形状を呈するもので、これは崩落というより当初からの形状であろう。規模は底面で、横幅4.0m、奥行2.1mながら、高さは1.8m程になろうか。なお、現存ローム面からの深さは3.0mである。

覆土は底面から1m近くロームブロック層の堆積が見られることから、廃棄後程なくかまたは使用中の段階で天井部の崩落があったものと思われる。その後、間を置いて天井周縁部の崩落を繰り返した後に安定した窪みとなり、最後に腐植土起源の暗褐色土が堆積している。

遺物は出土しなかった。

SK-302 (42) SK-023 (第89図、図版20・67・68、第16表)

区画内北西コーナー寄りに位置し、大形楕円形竪穴遺構SK-315と重複する。土層断面図の検討から当遺構が古い。方位は北西をとり、位置関係からして、区画に伴う可能性が高い。共に横長の竪坑と地下室からなり、竪坑と地下室底面とは2段の明瞭な段差を有する。竪坑は箱形に直に掘り込まれており、その規模は縦横共に幅1.0m、深さ約0.8mであるが、深さについては楕円形遺構底面からの計測であるので、本来は1.7m位になろう。地下室は大形かつ横長矩形状の形状を呈し、規模は底面で横幅3.2m、奥行2.25mであり、高さについては楕円形竪穴遺構に上面を壊されているため不明である。なお、現存ローム面からの深さは2.5m前後となる。

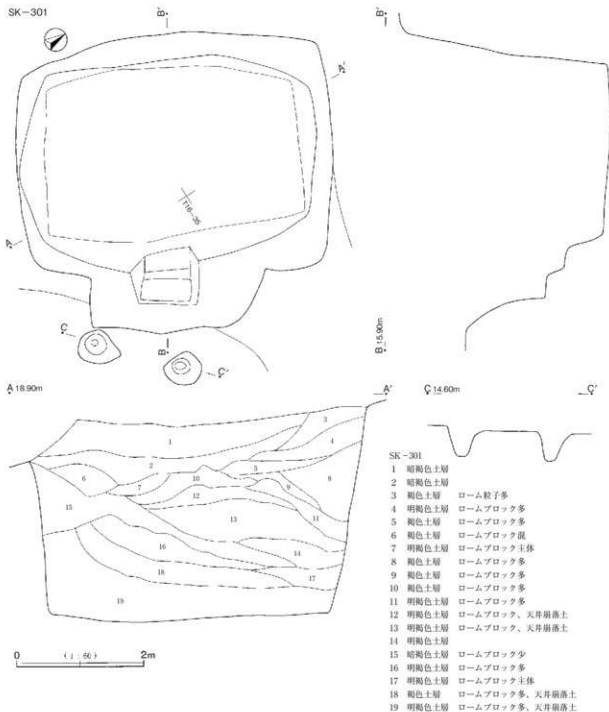
覆土は底面から1m近くロームブロック層の堆積が見られることから、廃棄後程なく天井部の崩壊があったと思われるが、覆土の堆積状況は乱れており、埋め戻した可能性もある。地下式坑SK-313と類似する例であり、あるいは方形竪穴遺構とすべきかもしれない。しかし、上面が大きく失われている現状ではその可能性を指摘するに留めざるを得ない。

遺物は覆土中から3点出土した。1は常滑甕口縁部片である。2は常滑片口底部片であり、内面には木口状工具による調整痕跡が認められる。3は在地産内耳土鍋口縁部片であるが、重複するSK-315出土の2点と接合した。当遺構のほうが古いことから復元後の図はここで図示する。

SK-303 (42) SK-020 (第89図、図版21・66～68・70)

区画内中央北端寄りに位置し、中世の土坑SK-326と重複する。調査所見から当遺構が古いと判断される。方位はほぼ真北をとり、区画の主軸とは多少ずれている。横長の竪坑と方形の地下室からなり、竪坑と地下室底面とは明瞭な段差を有する。竪坑は入口部を広くとって深さ0.8m程斜めに掘り込んだ後、箱形かつ直に掘り込まれており、その規模は横幅1.1m、縦幅0.6m、深さ1.3mである。地下室は底面については方形ながら上面は多少外膨らみを呈し、周溝が全体に巡る。また、北西コーナーに深さ10cm程の円形ビットを付設する。その規模は底面で、横幅2.4m、奥行2.3mであり、高さは1.3m(天井残存部から推測)である。なお、現存ローム面からの深さは2.1mである。



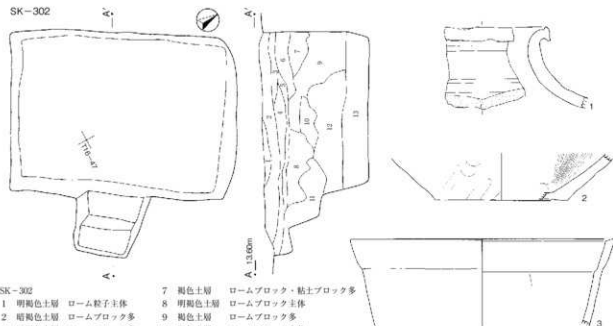


第88図 掘込区画1 地下式坑(1)

覆土は底面に腐植土起源の堆積層が見られない一方、1.1m程ロームブロック層が堆積していることから、使用中ないしは廃棄後程なく天井部の崩壊があったと思われる。また、その上に粘土層次いで砂土体の土層が順次堆積しており、人為的な埋め戻しがなされたようである。

遺物は5点出土した。4は鉄軸祖母懷茶壺肩部片である。5は在地産錚鉢約1/4個体を復元・図示した。6は在地産土鍋口縁部片であり、縦耳が付く。7は在地産内耳土鍋底部片である。8は在地産錚鉢底部である。9は玉髓の火打石であり、1個縁を使用している。10は4面使用の凝灰岩の砥石折損品である。

SK-302

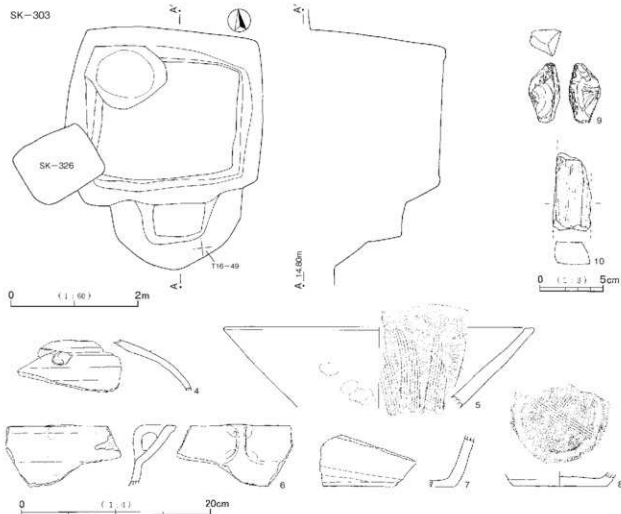


SK-302

- 1 明褐色土層 ローム稜子主体
 2 暗褐色土層 ロームブロック多
 3 暗褐色土層 ロームブロック多
 4 明褐色土層 ロームブロック主体
 5 褐色土層 ロームブロック多
 6 褐色土層 ロームブロック多

- 7 褐色土層 ロームブロック・粘土ブロック多
 8 明褐色土層 ロームブロック主体
 9 褐色土層 ロームブロック多
 10 褐色土層 ロームブロック主体
 11 褐色土層 ロームブロック主体
 12 明褐色土層 ロームブロック主体
 13 黄褐色土層 ロームブロック主体

SK-303



第89図 掘込区画1 地下式坑(2)

SK-304 (42) SK-028 (第90図、図版21・66)

区画内北東端近くに位置し、小土坑SK-367と重複する。土層断面図の状況から当遺構が古いと判断される。方位は北西をとり、区画とは多少のズレがある。方形の堅坑と長方形の地下室からなり、堅坑と地下室底面とは明瞭な段差を有するも、多少緩やかに傾斜する。堅坑は箱形に直に掘り込まれており、その規模は横幅1.0m、縦幅0.6m、深さ1.3mである。地下室は各辺共直線ながら、コーナー部は多少の丸みを有する。規模は底面で横幅3.1m、奥行2.0mであり、高さは1.8m(僅かに遺る天井残存部から推測)である。なお、現存ローム面からの深さは2.1mである。

覆土は底面に腐植土起源の堆積層がまったく確認されず、2m近くのロームブロック層の堆積が一様に観察された。天井部の崩落土としては厚すぎる堆積状況であるが、天井遺存部がほとんどないことなど意図的な廃棄がなされた結果であろうか。

遺物は覆土中から古瀬戸平埴口縁部片1点が出土したのみである。

SK-305 (42) SK-034 (第90図、図版21、第16表)

区画内北東コーナー近くに位置し、長方形土坑SK-337と重複するが、新旧関係は不明である。方位はほぼ真北をとるが、その位置からして区画に伴うものであろう。台形の堅坑と方形の地下室からなり、堅坑と地下室底面とは明瞭な段差を有する。堅坑は入口部を広くとらずに深さ1.2m程多少斜めに掘り込んだ後、箱形に直に掘り込まれている。その規模は横幅0.6m~1.2m、縦幅0.5m、深さ0.5mであるが、本例のように入口部と本体が連動している場合は、横幅1.5m、深さ2.0mとするのが妥当かもしれない。地下室は底面・上面共に多少崩れた方形プランであり、その規模は底面で横幅2.5m、奥行2.0m、高さは1.3m(天井残存部から推測)である。なお、現存ローム面からの深さは2.0mである。地下室底面は常総粘土層まで掘り込まれていた。

覆土は堅坑部~地下室にかけて暗褐色土が堆積後、天井の一部崩落があったが、その後空洞状態の横穴に粘土混じりの暗褐色土→ロームブロック層(再度天井の崩落か)→褐色土というように、堆積状況の変化が読みとれる。

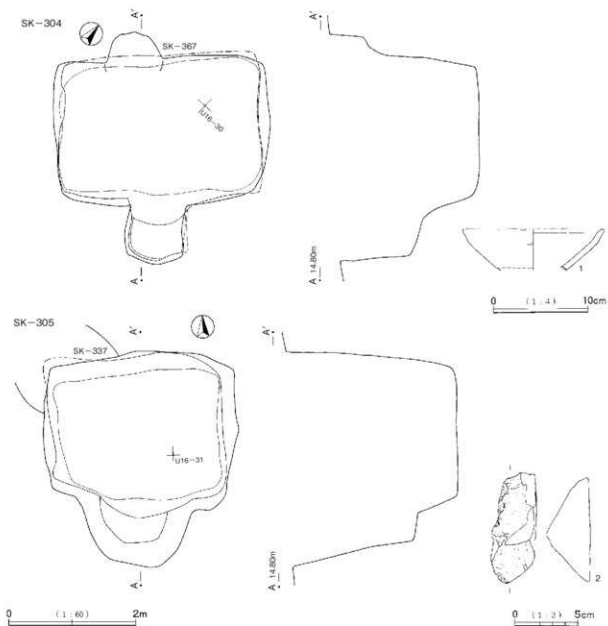
遺物は凝灰岩の砥石(2面未使用)が1点出土したのみである。

SK-306 (42) SK-032 (第91図、図版21・66)

区画内中央北寄りに位置し、方形土坑SK-360と重複するが、新旧関係は不明である。方位は東北東をとり、地下室東西方向と区画南北ラインとが一致する。方形の堅坑2基と長方形の地下室からなり、堅坑と地下室底面とは明瞭な2段の段差を有する。堅坑は西側中央と南側東端にあり、共に箱形かつ直に掘り込まれている。規模は西側が横幅1.1m、縦幅1.0m、深さ2.1m、南側が横幅1.2m、縦幅0.7m、深さ1.3mである。地下室は長方形の矩形を呈し、その規模は底面で横幅3.7m、奥行2.3mであり、高さは1.8m(僅かに遺る天井残存部から推測)である。なお、現存ローム面からの深さは2.7mである。

覆土は底面から約80cm上からの観察ではあるが、堅坑部~地下室にかけて暗褐色土が堆積後、天井の一部崩落があったようである。その後、空洞状態の横穴に粘土混じりの暗褐色土→ロームブロック層(再度の天井崩落か)→褐色土というように、堆積状況の変化が読みとれる。

遺物は覆土中から古瀬戸平埴口縁部片が1点出土したのみである。

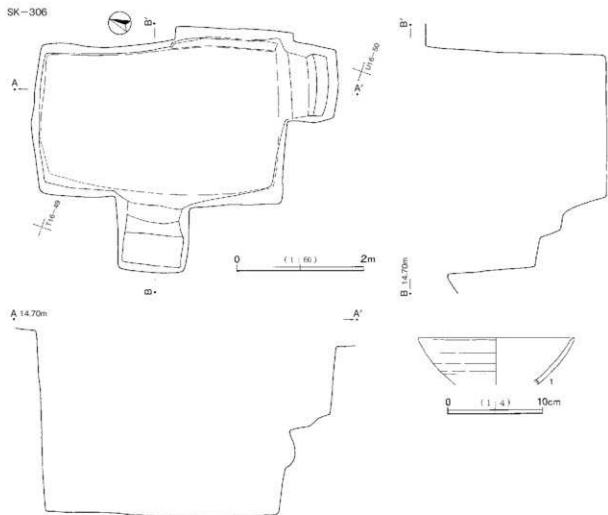


第90図 掘込区画1 地下式坑(3)

SK-307 (42) SK-027(第92図、図版21・66~68)

区画内北東寄りに位置し、土坑数基と重複する。新田関係は方形土坑SK-360が新しいが、楕円形土坑SK-357については不明である。方位は北西をとり、区画の向きとは一致しない。方形の竪坑と長方形の地下室からなり、竪坑と地下室底面とは段差を有する。この竪坑の向きは、地下室の方位と一致せず、その右手部分は影らみながら地下室のコーナーに至っているなど特異な形状であり、あるいは土坑等が重複した結果かもしれない。重複を考慮した場合、その復元規模は横幅1.3m、縦幅1.1m、深さ0.95mとなる。地下室は底面・上面共に多少崩れた長方形であり、その規模は底面で、横幅2.7m、奥行1.9mであり、高さは約1.0m(天井残存部から)である。なお、現存ローム面からの深さは1.8mである。

覆土は底面から約60cm程上からの観察である。天井部と思われるロームブロック層が50cm程水平に堆積後、炭化物を含む薄い暗褐色土層が見られるので、一時期ながら空洞状態があったのだろう。その後、厚いロームブロック層が全体を覆うという状況ではあるが、上面はせり出した天井部が部分的ながら遺存し



第91図 掘込区画1 地下式坑(4)

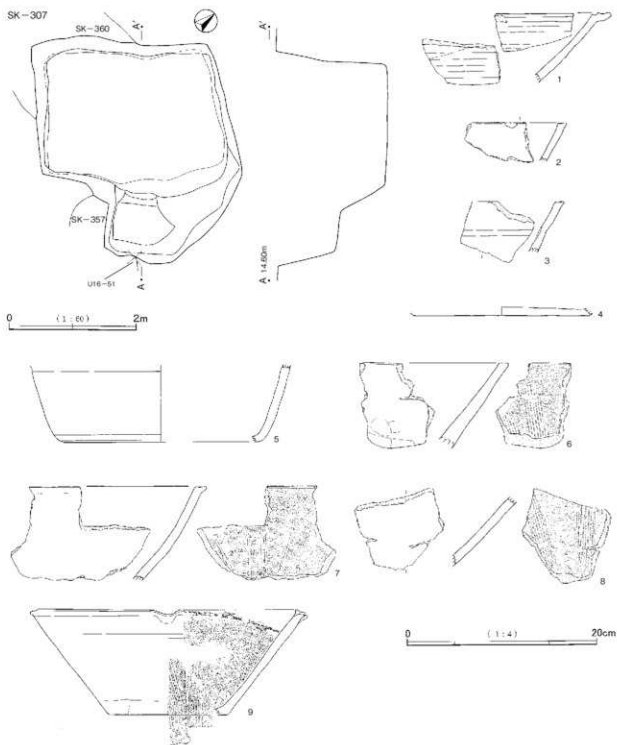
ており、当遺跡では珍しい例といつてよい。

遺物は覆土中から10点(単体では17点)出土した。1は古瀬戸灰釉折縁深皿口縁部片であり、2点が接合した。2・3は在地産内耳土鍋口縁部片である。4は在地産内耳土鍋底部完形品であり、破損状況は底部から体部へ至る成形時の痕跡を示すものであろう。5は在地産土鍋体部～底部片から径を復元・図示した。6・7は在地産播鉢口縁部片(播目共に7条)、8は同体部片(播目8条)、9は同口縁部～体部約1/2個体(播目5条)である。なお、9は(32)SD-002、T17出土片と接合したが、中世の遺構という点からこちらに含めた。

SK-308 (42)SK-036(第93図、図版21)

区画内北西寄りに位置し、大形楕円形土坑SK-315と重複する。両者の新旧関係は不明である。方位は南南西をとり、区画の向きとは一致しない。方形の竪坑と長方形の地下室からなり、竪坑と地下室底面とは明瞭な段差を有する。竪坑はローム面からほぼ直に1m程掘り込まれ、底面は平坦であった。規模は横幅1.0m、縦幅0.8m、深さ1.0mである。地下室は横長矩形の長方形プランであり、その規模は底面で横幅1.9m、奥行1.3m、深さは1.65mである。なお、地下室の高さ、覆土の状態は不明である。

遺物は在地産播鉢体部片1点のみ出土し、SK-314の6(第95図)と接合した



第92图 掘込区画1 地下式坑(5)

SK-309 (42) SK-026 (第93図、図版22・67)

区画内中央に位置する。方位は北西をとり、区画よりやや西に傾いている。大きな方形の竪坑と、多少横長の地下室からなる。また、竪坑と地下室底面とは段差を有する。竪坑は入口部上面を広くとって掘削した後、箱形に掘り込んでおり、その規模は横幅1.1m、縦幅0.8m、深さ0.7mである。地下室は整った長方形を呈し、規模は横幅2.1m、奥行き1.4m、高さ1.27m(天井残存部から推測)、現存ローム面からの深さ1.86mである。

覆土は水平方向にロームブロック主体の明褐色土～褐色土の堆積が見られたが、確認面から1.3m程までの観察に留まっているため、天井の崩落状況などは不明のままである。

遺物は覆土中から在地産挿鉢体部片が出土したのみである。

SK-310 (42) SK-021 (第93図、図版22・66)

区画内中央北西寄りに位置する。方形土坑SK-349と南東部で重複するが、より古いと思われる。方位は区画と同様北北西である。大きな方形の竪坑と多少横長の地下室からなり、竪坑と地下室底面とは段差を有する。竪坑は入口部上面を広くとって斜めに掘削した後、箱形に掘り込んでおり、その規模は横幅1.1m、縦幅0.5m、深さ0.9mである。地下室は多少外膨らみの長方形を呈し、規模は横幅2.1m、奥行き1.65m、高さ1.0m(天井残存部から推測)、現存ローム面からの深さ1.9mである。

覆土は竪坑から地下室にかけて斜めに自然堆積層が形成された後に天井の崩落があり(厚さ約50cm)、その後はロームブロック主体の土砂によって埋没が進み、最後に浅い窪みとなったところで腐植土起源の褐色土が覆っているという状況であった。

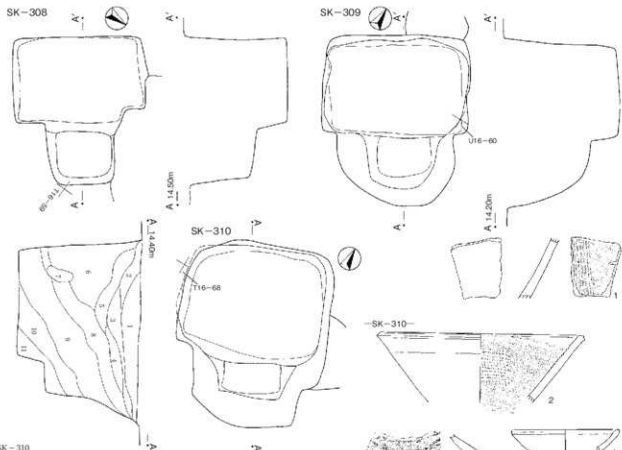
遺物は覆土中から5点出土した。2は在地産鉦目付大皿口縁部片であり、胎土に砂礫を含んでいる。3は口広有耳壺肩部片であり、この他に同一個体と思われる胴部片1点がある。また、SK021、SK030でも同一個体と思われる破片が出土している。4は古瀬戸縁軸小皿口縁部片である。5はカワラケ底部片である。

SK-311 (32) SK-029 (第93図、図版22・67・68・70、第16表)

区画内中央東端壁際に位置する。方位は西北西をとり、区画東壁に直交することから区画に伴って造られたものであろう。大きな方形の竪坑と、多少横長の地下室からなる。また、竪坑と地下室底面とは段差を有する。竪坑は入口部上面を広くとって中程まで斜めに掘削した後、箱形に掘り込まれており、その規模は横幅1.05m、同縦幅0.6m、深さ0.8mである。なお、降り口には階段状の凹凸が見られる。地下室の規模は横幅2.3m、奥行き1.55m、高さ1.2m(天井残存部から推測)、現存ローム面からの深さ2.1mである。

覆土は竪坑から地下室にかけて斜めに暗褐色土の自然堆積層が形成された上に、粗いロームブロック主体の明褐色土が厚く(約1m)堆積していた。恐らく天井部の崩落層であろう。その後、埋没が進み浅い窪み(中央で約0.5mの深さ)となったところで、腐植土起源の暗褐色土が堆積している。

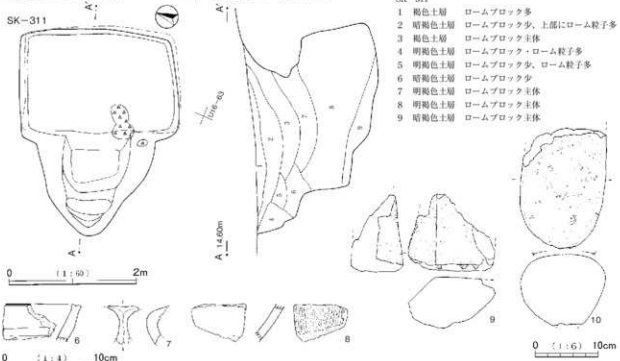
中世の遺物は覆土中から3点出土した。6は在地産挿鉢口縁部片である。7は在地産内耳土鍋鈎手部であり、竪坑になろう。8は在地産挿鉢体部片であり、挿目は6条以上である。9は砂岩の砥石破損品である。10は安山岩の台石欠損品であり、平らな面に敲打痕が見られ、広範囲に被熱のため黒く変色する。金床石であろうか。



- SK-310
- 1 褐色土層 ローム粒子・ロームブロック少
 - 2 褐色土層 ロームブロック多
 - 3 暗褐色土層 ロームブロック少
 - 4 明褐色土層 ロームブロック主体
 - 5 明褐色土層 ロームブロック主体
 - 6 明褐色土層 ロームブロック多

- 7 明褐色土層 ロームブロック主体
- 8 褐色土層 ロームブロック多
- 9 明褐色土層 ロームブロック多、天井崩落土
- 10 褐色土層 ロームブロック主体
- 11 明褐色土層 ロームブロック多

- SK-311
- 1 褐色土層 ロームブロック多
 - 2 暗褐色土層 ロームブロック少、上部にローム粒子多
 - 3 褐色土層 ロームブロック主体
 - 4 明褐色土層 ロームブロック・ローム粒子多
 - 5 明褐色土層 ロームブロック少、ローム粒子多
 - 6 暗褐色土層 ロームブロック少
 - 7 明褐色土層 ロームブロック主体
 - 8 明褐色土層 ロームブロック主体
 - 9 暗褐色土層 ロームブロック主体



第93図 掘込区画1 地下式坑(6)

SK-312 (32) SK-002 (第94図、図版22・68)

区画内東南寄りの壁際に位置する。方位は北東をとり、区画東壁の方向とは幾分ずれているが、地下室もほぼ壁内に収まっており、やはり区画に伴うものであろう。共に横長の竪坑と地下室からなる。また、竪坑と地下室底面とは段差を有する。竪坑は初めに入口部を中程の深さまで斜めに掘削した後、箱形に掘り込んでいる。規模は横幅1.0m、縦幅0.45m、深さ0.65mである。地下室は奥に行くに従って多少外に開く形状である。規模は横幅2.5m～2.7m、奥行1.8m、高さ1.2m(天井残存部から推測)、現存ローム面からの深さ2.1mである。

覆土は地下室底面に30cm程褐色土の堆積が見られた後、天井部の崩落が起こり、その後浅い窪みとなったところで、暗褐色土が堆積したようである。

遺物は覆土中から在地産内耳土鍋口縁部大破片が出土したのみであり、径を復元・図示した。

SK-313 (42) SK-022 (第94図、図版22)

区画内中央西側壁寄りに位置する。天井部が遺存した痕跡が薄いことから、あるいは長方形竪穴遺構の可能性もあろう。方位は東南東をとり、この区画内では珍しい例である。丸みを帯びた竪坑と角張った長方形の地下室からなり、竪坑と地下室底面とは2段の段差を有する。竪坑は直に掘り込まれ、規模は横幅1.6m、縦幅1.1m、深さ0.49mである。なお、内部にもう一段あり、一段目との段差は0.33m、地下室との段差は0.74mとなるので、そのままでは降りるのに困難を伴う。地下室は大形かつ横長矩形状を呈し、規模は底面で、横幅4.2m、奥行2.35m、現存ローム面からの深さ1.55mである。

覆土は中央部底面に黒色土の堆積が見られたが、その上を厚くロームブロック層が覆っていた。崩落土ととれないこともないが、層の堆積状況などは他の地下式坑と明らかに異なっており、埋め戻した可能性がある。

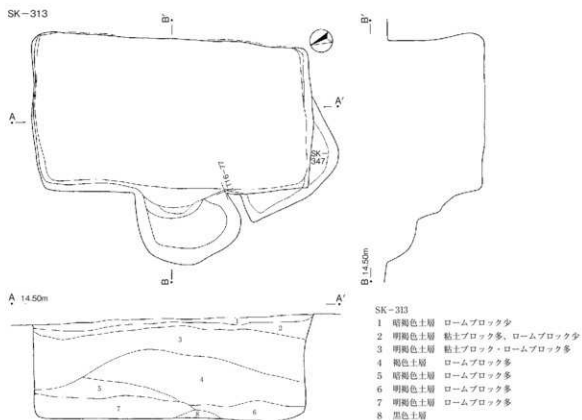
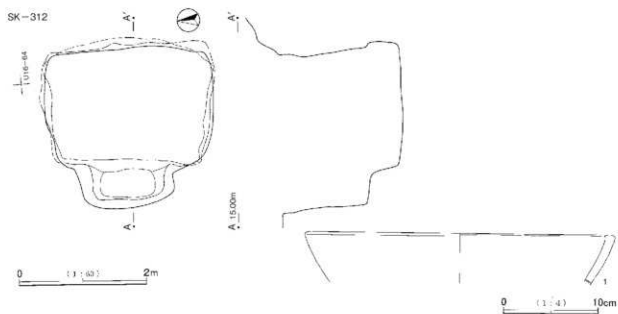
遺物は出土しなかった。

SK-314 (42) SK-004 (第95図、図版22・66～70、第15・16表)

区画内中央西側壁際に位置する。方位は北北西をとり、区画西壁とはズレがあるが、地下室もほぼ壁内に収まっており、区画に伴うものであろう。共に横長の竪坑と地下室からなる。また、竪坑と地下室底面とは2段の段差を有する。竪坑は入口側を深さ50cm～60cmまで広く斜めに掘り込んだ後、長方形の箱形としており、規模は横幅1.0m、縦幅0.5m、深さ0.4mである。地下室は上面が外膨らみの形状を呈するもので、これは崩落というより当初からの形状であろう。規模は底面で横幅2.1m、奥行1.8m、高さ1.2m(天井残存部から推測)、現存ローム面からの深さは2.1mだが、上面の膨らみを考慮すると、横幅3.5m、奥行2.5m程となる。

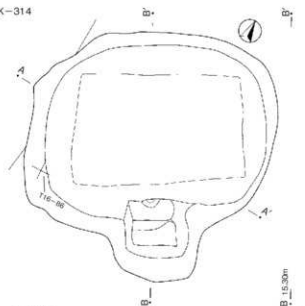
覆土は地下室底面手前に褐色土の堆積が見られた後、先ず中央天井部、次いで少し時間をおいたのちに周縁天井部が壁面も加えて崩落が起こったようで、恐らく地下室の跡は大きな窪みとしてしばらく遺っていたのではなかろうか。貝層(厚み約20cm)がこの中央天井部崩落層上に形成されている。

覆土中から大きな破片を含む10点の遺物が出土したのは窪地に投げ込まれた結果であろう。1は古瀬戸灰軸平埴底部である。2は古瀬戸灰軸卸目付大皿口縁部片である。3は古瀬戸大皿の底部～体部大破片より径を復元・図示した。2と同一個体になるかもしれない。4は常滑片口底部片であり、遺存部から底径を復元・図示した。5は常滑片口約1/5個体から全体を復元・図示した。6は在地産挿鉢約1/2個体である。凡そ19m南東の長方形土坑SK-325出土遺物と接合した。7の在地産挿鉢体部～底部片は、SK-



第94図 掘込区画1 地下式坑(7)

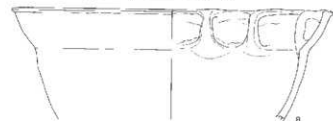
SK-314



A 15.30m

B 15.30m

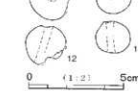
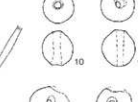
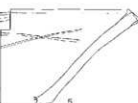
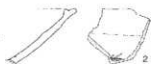
0 (1:50) 2m



0 (1:4) 10cm

SK-314

- | | | |
|----|-------|-----------------|
| 1 | 暗褐色土層 | ローム粒子少 |
| 2 | 明褐色土層 | |
| 3 | 暗褐色土層 | ローム粒子少 |
| 4 | 褐色土層 | ロームブロック少 |
| 5 | 暗褐色土層 | ロームブロック少 |
| 6 | 暗褐色土層 | ロームブロック少 |
| 7 | 明褐色土層 | ロームブロック多 |
| 8 | 明褐色土層 | ロームブロック主体 |
| 9 | 明褐色土層 | ローム粒子多、ロームブロック少 |
| 10 | 明褐色土層 | ローム粒子・ロームブロック多 |
| 11 | 明褐色土層 | ロームブロック多 |
| 12 | 明褐色土層 | ロームブロック多 |
| 13 | 褐色土層 | ロームブロック多 |
| 14 | 泥土貝層 | |
| 15 | 明褐色土層 | ロームブロック多 |
| 16 | 暗褐色土層 | ロームブロック多 |



0 (1:2) 5cm



0 (1:3) 5cm

第95図 掘込区画1 地下式坑(8)

308出土遺物と接合しており、径を復元・図示した。8は在地産内耳土鍋口縁部大破片から径を復元した。縦耳2個で一つの釣手を構成するタイプである。9は同じく在地産内耳土鍋片であり、体部片ながら意図的な穿孔があることから掲載した。この他図示しなかったが、常滑甕肩部片と在地産内耳土鍋片各1が出土した。10～13は土玉(球状土錘)である。古墳時代のもとの類似するが、覆土中からの一括出土である。14は凝灰岩の砥石破損品である。15は安山岩の石臼(下臼)破損品であり、描目はかろうじて確認できる。なお、破損後に熱を受けたためか、部分的に赤色また黒色に変色している。16は緑色片岩の板碑片であり、両面のみかろうじて旧状を遺している。

(2) 大形楕円形土坑

SK-315 (42) SX-001・SK-030 (第96図、図版23・66・68～70、第15表)

区画北西隅に位置し、縁を区画に掛けるように掘られている。地下式坑SK-301・SK-302と重複しており、当遺構が新しい。また、東端に設けられた土坑は調査時に別遺構として番号を付しているが、この土坑は3.5m以上の深さ(2.5m程調査)があることから、井戸と想定される。両者は長軸や掘形の方が一致していることから同一遺構と考えられ、一緒に扱った。方位は長軸をほぼ東西にとり、これは区画の隅に寄せた結果であろう。形状は多少歪な楕円形であり、断面形状は楕円状となる。規模は長径16.8m、短径約8.8m、深さは中央部で約1.3m、壁際に約1mである。井戸とそれに付属する大形の土坑ないし窪地と考えられる。

覆土は中位まではロームブロック主体の明褐色土、それより上位は腐植土を含む褐色～黒褐色土となることから、楕円状の窪みとなったところで徐々に埋没したのでであろう。なお、井戸部分の下層は水平に、上層ではV字状に堆積状況が変化しており、井戸の廃絶後は自然堆積に任せられた結果と思われる。

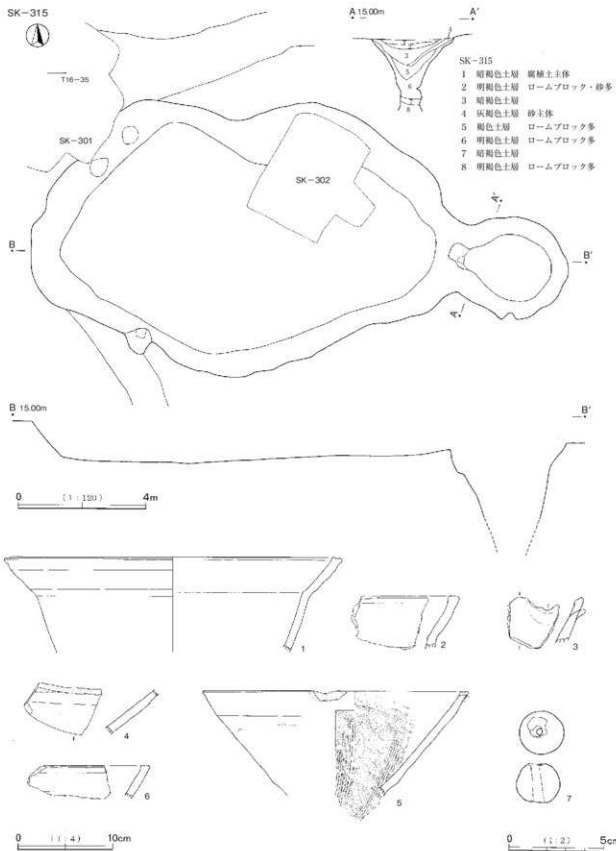
遺物は井戸内から5点(単体では8点)、大形土坑から4点の計9点出土した。1～3は井戸内から出土した。1は在地産内耳土鍋口縁部～体部大破片、2・3は同口縁部片2点であるが、ほかに非掲載の在地産内耳土鍋体部大破片があり、おそらく2と接合するものでであろう。なお、口広有耳壺肩部および胴部細片も出土しているが、地下式坑SK-310、長方形土坑SK-317で同一個体と思われるものが出土(より大破片)しているのでここでは非掲載とした。4～7は楕円形大形土坑覆土中から出土した。4は古瀬戸折縁深皿体部片、5は在地産楕円口縁部～体部片1/4個体を復元・図示した。描目は8条である。6は在地産内耳土鍋口縁部片である。7は土玉(球状土錘)である。

SK-316 (42) SX-001 (第97図、図版24)

区画南西隅近くに位置し、多くが区画外に掛かっている。方位は南南東をとり、区画の向きとはほぼ一致する。楕円形の大形土坑北側に半円形の別な土坑が付設する形状であるが、後者は緩やかに奥に向け傾いており、入口部になろう。一見地下式坑に類似するものの、その深さや断面形から土坑の一つと考えられる。その規模は大形土坑が横幅5.9m、縦幅3.9m、深さ0.3m～0.8m、入口部土坑が横幅2.2m、縦幅2.0m、深さ0.2mである。土坑内には計3か所小土坑が確認され、その深さ(40cm～70cm)や区画外の周辺状況から伴うものとしてよいであろう。

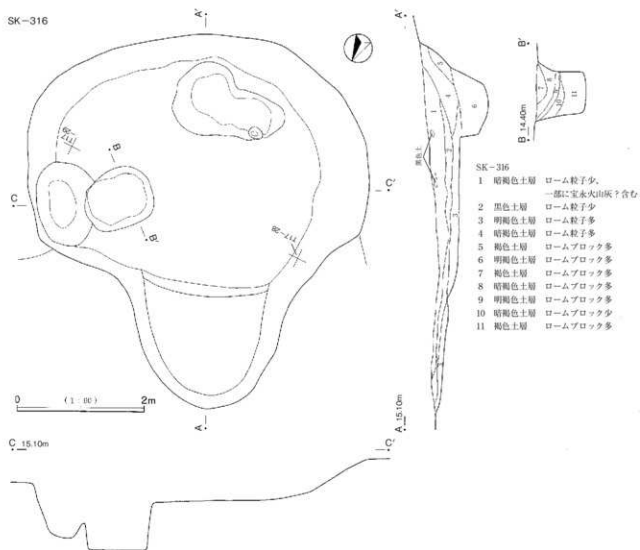
覆土は凹レンズ状に明褐色土から、黒色土次いで黒褐色土と推移しており自然堆積と思われるが、小土坑については粗いロームブロック主体の土で占められ、埋め戻し土と判断される。なお、覆土最上位に黒色土と注記されているブロック(宝永火山灰?)が見られるので、近世に属する可能性もある。

遺物は出土しなかった。



第96図 掘込区画1 楕円形大形土坑(1)

SK-316



第97図 掘込区画1 楕円形大形土坑(2)

(3) 方形竪穴遺構

SK-317 (42) SK-033A (第98・126図、図版24・66・71)

区画南東壁際に位置する方形竪穴遺構である。長方形土坑SK-319によって坑底の一部を壊されており、より古いと考えられる。規模は長径2.5m、短径2.3m、深さは確認面から30cmである。南北の中央壁際に柱穴と思われるピットが一对存在し、坑底は平らである。

覆土はローム粒子主体の単一層であった。遺物は古瀬戸口広有耳壺胴部片が1点出土したのみである。

SK-318 (42) SK-012 (第98図、図版21・66)

区画中央北寄りに位置する方形竪穴遺構であり、一部土坑SK-354と重複する。規模は縦横2.0m、深さ25cmである。南北中央壁際に柱穴と思われる深いピットを伴う。ピットの深さは坑底から南北それぞれ70cmと50cmである。覆土は水平に堆積する明褐色土、ついで褐色土であるが、柱部分は乱れており抜き取られた結果であろうか。遺物は折縁深皿口縁部片1点が出土した。

(4) 土坑

SK-319 (42) SK-033B (第98図、図版24)

区画北東壁際に位置する長方形土坑である。方形竪穴遺構SK-317の坑底を壊していることから、より新しい。規模は長径1.7m、短径1.0m、深さは確認面から27cmである。

覆土は重複する方形竪穴遺構SK-317と同様ローム粒子主体の単一層であった。

遺物は出土しなかった。

SK-320 (42) SK-016 (第98図、図版24)

区画中央壁際に位置する長方形土坑である。底面中央に小ピット(坑底からの深さ13cm)を有する。規模は長径1.8m、短径1.2m、深さ26cmである。

覆土は凹レンズ状の3層の堆積を示すが、組成・色調共に大きく異なっており、埋め戻した結果であろうか。遺物は出土しなかった。

SK-321 (32) SK-045 (第98図)

区画南東壁際に位置する長方形土坑である。規模は長径2.3m、短径1.2m、深さ45cmである。底面に小ピットが4つ伴う。ピットの配置に規則性はなく、大きさ・深さ共に10cm～55cmである。

覆土の状況は不明で、遺物は出土しなかった。

SK-322 (32) SK-027 (第98図、図版24)

区画南東コーナー寄りに位置する長方形土坑で、規模は長径1.4m、短径0.7m、深さ約35cmである。

覆土は凹レンズ状の堆積で、下層にロームブロックを含み、上層に至って焼土や炭化物が僅かに見られる。人為堆積であろうか。遺物は出土しなかった。

SK-323 (42) SK-008 (第98図、図版24)

区画中央西寄りに位置する長方形土坑である。同じく長方形土坑SK-324と重複するが、遺構の検出状況からしてより新しいと推測される。西壁中央に小ピット(坑底からの深さ20cm)を有する。

覆土はロームブロック主体の褐色土であり、下層に炭化物を含む。調査時の所見では埋め戻しかとされる。

遺物は出土しなかった。

SK-324 (42) SK-007 (第98図、図版24)

区画中央西寄りに位置する長方形土坑である。長方形土坑SK-323と重複する。遺構の残存状況からしてより古いと推測される。規模は長径1.3m、短径1m、深さ63cmである。

覆土はロームブロック主体の明褐色～褐色土であり、調査時の所見では埋め戻しかとされる。

遺物は出土しなかった。

SK-325 (32) SK-036 (第98図、図版24)

区画中央南寄りに位置する長方形土坑である。調査区の接点に当たり、北側の成果を欠く。規模は長径1m以上、短径1.0m、深さは確認面から約25cmである。

覆土は中層に炭化物粒子を多く含み、人為堆積と思われる。

遺物は出土しなかった。

SK-326 (42) SK-025 (第98図、図版21)

区画北側中央壁寄りに位置する長方形土坑である。地下式坑SK-303と重複するが、土層断面の観察から、当遺構が新しい。規模は長径1.2m、短径1m、深さ約50cmである。

覆土は間に粘土層を含むなど人為的要素が強いと思われる。

遺物は出土しなかった。

SK-327 (42) SK-038 (第98図)

区画南西壁近くに位置する浅い長方形土坑である。規模は長径1.5m、短径0.7m、深さ7cmである。

覆土の状況は不明で、遺物は出土しなかった。

SK-328 (42) SK-043 (第98図)

区画中央東寄りに位置する長方形土坑である。規模は長径1.3m、短径0.8m、深さ10cmである。

覆土の状況は不明で、遺物は出土しなかった。

SK-329 (42) SK-006 (第99図、図版24)

区画中央西寄りに位置する隅丸の長方形土坑である。中央に小ピット(深さは坑底から30cm)を伴う。規模は長径1.2m、短径0.7m、深さ25cmである。

覆土の状況は不明で、遺物は出土しなかった。

SK-330 (32) SK-026 (第99図)

区画南東コーナー寄りに位置する長方形土坑である。規模は長径1.0m、短径0.7m、深さ約10cmである。

覆土の状況は不明で、遺物は出土しなかった。

SK-331 (32) SK-029 (第99図、図版24)

区画南東壁際に位置する隅丸の長方形土坑である。規模は長径1.2m、短径0.8m、深さ約10cmである。

覆土の状況は不明で、遺物は出土しなかった。

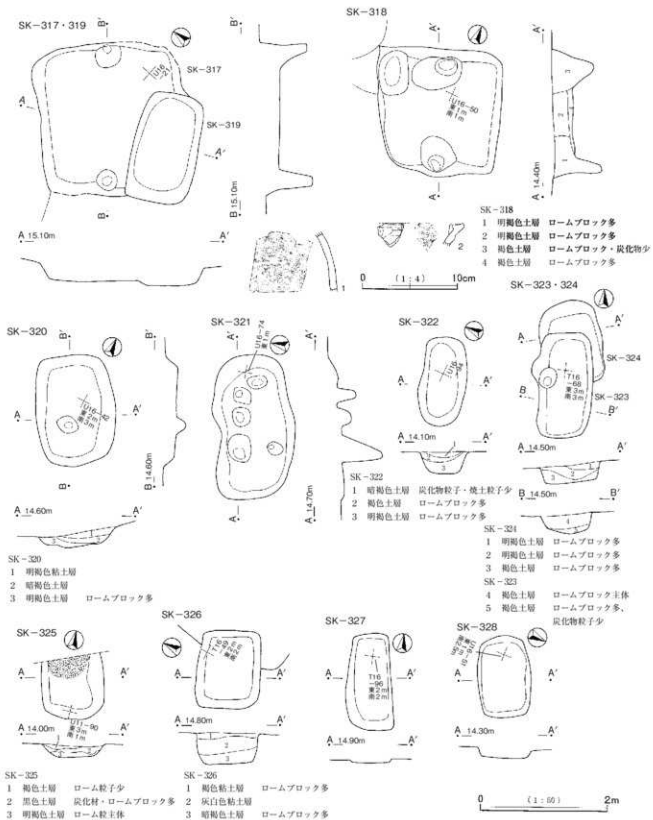
SK-332 (42) SK-040 (第99図)

区画南西壁寄りに位置する浅い長方形土坑である。規模は長径1.25m以上、短径0.9m、深さ約10cmである。

覆土の状況は不明で、遺物は出土しなかった。

SK-333 (32) SK-033 (第99図、図版24)

区画南東壁際に位置する長方形土坑であり、坑底中央に小ピット(深さ坑底から約30cm)を有する。規



第98図 掘込区画1 方形竪穴遺構、土坑(1)

横は長径1.2m、短径8.5m、深さ約35cmである。遺物は出土しなかった。

SK-334 (42) SK-005A (第99図、図版24)

区画中央西寄りに位置する長方形土坑である。長方形土坑SK-335と重複し、土層断面図の検討から当遺構が古いと思われる。規模は長径0.7m(以上)、短径0.5m、深さ20cmである。

覆土は褐色土のはは単層である。遺物は出土しなかった。

SK-335 (42) SK-005B (第99図、図版24)

区画中央西寄りに位置する長方形土坑である。SK005Aと重複し、土層断面図の検討から当遺構が新しいと思われる。規模は長径約1m、短径0.7m、深さ40cmである。

覆土はロームブロック主体の明褐色土が多くを占め、調査時の所見では埋め戻しかとする。

遺物は出土しなかった。

SK-336 (42) SK-041 (第99図)

区画南西寄りに位置し、坑底に段差(26cm)を有する長方形土坑(あるいは別遺構との重複か)である。南東側が調査区の狭間にあつたため、幅については推測である。規模は長径2.8m、短径(幅)約1m、深さは南側が20cm、北側が50cmである。

覆土の状況は不明で、遺物は出土しなかった。

SK-337 (42) SK-050 (第99図、図版21)

区画北東寄りに位置する長方形土坑である。地下式坑SK-305と重複するが、新旧関係は不明である。規模は長径約1.5m、短径1.0m、深さ0.5mで、重複部分も同じくらいになろうか。

覆土の状況は不明で、遺物は出土しなかった。

SK-338 (32) SK-039 (第99図、図版24)

区画南西隅寄りに位置する長方形土坑である。堅坑らしきピットが付属する地下式坑のような形状であるが、その規模や深さからピットが重複した結果(新旧不明)と判断される。規模は長径1.3m、短径1.0m、深さ0.4mである。

覆土の状況は不明で、遺物は出土しなかった。

SK-339 (32) SK-021 (第99図)

区画南東壁際に位置する隅丸の長方形土坑であり、地下式坑SK-340と一部重複するが新旧関係は不明である。規模は長径1.2m、短径0.8m、深さ50cmである。

覆土はロームブロックを多く含む人為的な堆積の可能性がある。

遺物は出土しなかった。

SK-340 (32) SK-022 (第99図)

区画南東壁際に位置する楕円形土坑であり、SK-339と一部重複するが、新旧関係は不明である。規模は長径1.2m、短径0.9m、深さ30cmである。

覆土は東側にロームブロックを多く含む土が厚く堆積するなど人為的な要素が認められる。

遺物は出土しなかった。

SK-341 (32) SK-030 (第99図、図版24)

区画南東壁際に位置する深い楕円ないし方形土坑である。規模は縦横約1.0m、深さ約60cmである。

覆土は5層に分かれるが、土質に違いがなく、褐色また明褐色土である。

遺物は出土しなかった。

SK-342 (32) SK-032 (第99図、図版24)

区画南東壁際に位置する方形土坑である。規模は、長径1.3m、短径1.1m、深さ約65cmである。

覆土は緩い凹レンズ状に下から褐色土、明褐色土、褐色土と堆積する。自然堆積であろう。

遺物は出土しなかった。

SK-343 (42) SK-037 (第99図、図版70)

区画中央やや南西寄りに位置する方形土坑であるが、断面は葉研状を呈する。規模は長径0.9m、短径0.8m、深さ35cmである。

覆土の状況は不明である。遺物は北宋銭の熙寧元寶(第17表)が出土した。

SK-344 (42) SK-009 (第99図、図版24)

区画中央西寄りに位置する浅い方形土坑である。規模は縦横共に0.8m、深さ約10cmである。

覆土は深さからして僅かではあるが粘土ブロックを含み、上下で異なるなど、埋め戻しを窺わせるものであった。遺物は出土しなかった。

SK-345 (42) SK-048 (第99図)

区画中央北寄りに位置する多角形の浅い土坑である。規模は縦横共に径約1.0m、深さ10cmである。覆土の状況は不明で、遺物は出土しなかった。

SK-346 (32) SK-047 (第99図)

区画南側範囲外の約2m南に位置する方形土坑である。規模は縦横1.0m、深さ30cmである。

覆土の状況は不明で、遺物は出土しなかった。

SK-347 (42) SK-045・046 (第94図、図版22)

区画西側中央壁寄りに位置する方形土坑であり、地下式坑SK-313と重複する。僅かではあるが両者を通した土層断面に該当する落ち込みが確認できないことから、本跡が古いと思われる。規模は南北1.8m、深さ約20cmである。覆土の状況は不明で、遺物は出土しなかった。

SK-348 (32) SK-038 (第99図、図版24)

区画南側中央壁際に位置する楕円形土坑である。規模は長径1.0m、短径0.8m、深さ5.0cmである。

覆土は最下層に粘土を多く含み、中層～上層はロームブロック多く含む。人為堆積であろう。

遺物は出土しなかった。

SK-349 (42) SK-042 (第99図、図版22)

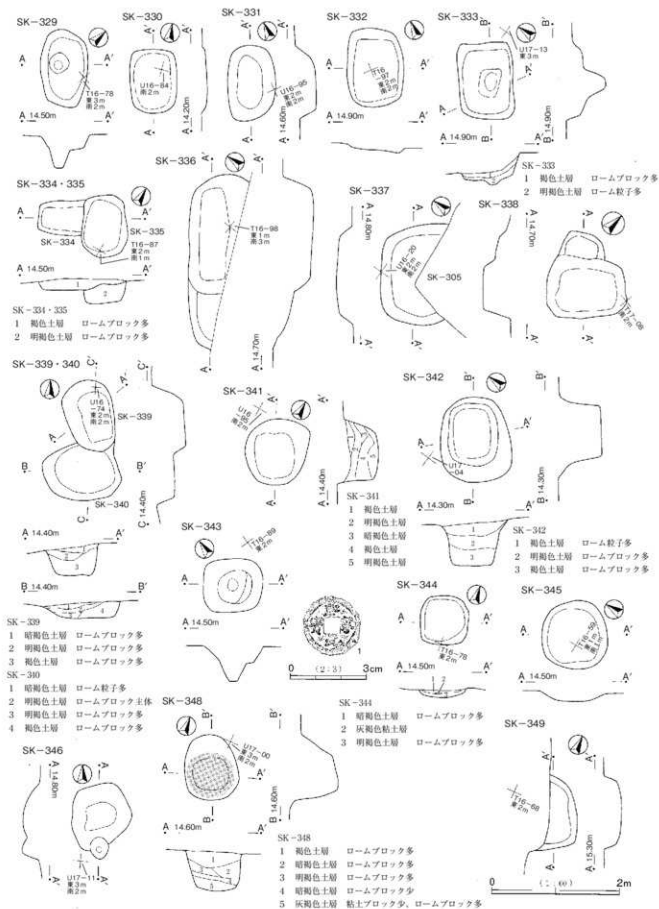
区画中央北西寄りに位置する土坑である。地下式坑SK-310と重複するが、新旧関係は不明である。形状は地下式坑土層断面に当土坑が確認されないことから、正方形ないし多少横長の長方形ということになろう。規模は南北1.2m、深さ30cmである。覆土の状況は不明であり、遺物は出土しなかった。

SK-350 (32) SK-003 (第100図、図版24・69)

区画南東壁際に位置する楕円形土坑であり、壁方向に段差を有する。規模は長径1.5m、短径1.4m、深さ30cmである。

覆土は東側壁際からロームブロック主体の暗褐色土が流れ込むような状況であった。

遺物は覆土中から2点出土した。1は在地産内耳土鍋体部～底部大破片を復元・図示した。2は同じく在地産内耳土鍋約1/4個体を復元・図示した。



第99図 掘込区画1 土坑(2)

SK-351 (42) SK-017 (第100図、図版24)

区画南東寄りに位置する円形土坑である。規模は径約1.0m、深さ約30cmである。

覆土は単一の褐色土であった。遺物は出土しなかった。

SK-352 (42) SK-031A (第100図、図版21)

区画中央北寄りに位置する楕円形土坑である。同じく楕円形土坑SK-353と重複するが、土層断面の検討から当遺構が古いと判断される。規模は長径1.2m、短径は不明で、深さは約30cmである。

遺物は出土しなかった。

SK-353 (42) SK-031B (第100図、図版21)

区画中央北寄りに位置する楕円形土坑である。楕円形土坑SK-352と重複し、土層断面に攪乱された様子が見られないことから、新しいと判断した。規模は、長径1.5m、短径1.2m、深さ約55cmである。

覆土は細かいロームブロック主体の褐色土であり、埋め戻しと推測される。

遺物は出土しなかった。

SK-354 (42) SK-031C (第100図、図版21)

区画中央北寄りに位置し、直に掘り込まれた楕円形土坑である。楕円形土坑SK-352・353と重複するが、新旧関係は不明である。両者と重複箇所が多く規模についても、長径0.6m以上、短径凡そ0.7m、深さ18cmというにすぎない。

覆土の状況は不明であり、遺物も出土しなかった。

SK-355 (32) SK-042 (第100図)

区画南西壁寄りに位置する円形土坑と思われる。調査区の境界に位置したために、北側半分が未調査となった。規模は径1mになろうか。深さは15cmである。覆土の状況は不明であり、遺物は出土しなかった。

SK-356 (42) SK-035 (第100図、図版25)

区画北東部に位置する楕円形土坑であり、壁面は緩やかに傾斜し坑底に至る。規模は長径1.4m、短径1.2m、深さ0.4mである。覆土は北側壁付近の流れ込みから始まり、暗褐色次いで褐色土と短期間に埋没が進んだようである。

遺物は出土しなかった。

SK-357 (42) SK-013・051 (第100図、図版21・69)

区画中央やや北東寄りに位置する。断面が楕円状を呈する大形楕円形土坑である。地下式坑SK-307と一部重複するが、新旧関係は不明である。規模は長径2.4m、短径1.4m、深さ約60cmである。

覆土は凹レンズ状に堆積する明褐色土次いで暗褐色土であり、均質なことから自然堆積と思われる。

遺物は1の在産内耳土鍋口縁部片と2の同底部片である。

SK-358 (32) SK-037 (第100図、図版25)

区画中央南寄りに位置する楕円形土坑である。規模は長径1.1m、短径0.7m、深さ5cmである。

覆土は僅かではあるが、坑底から検出面まで炭化物で占められていた。

遺物は出土しなかった。

SK-359 (42) SK-011 (第100図)

区画中央に位置する楕円形土坑である。坑底内中央にビット(坑底からの深さ約15cm)を有する。規模は長径1.2m、短径1.0m、深さ約20cmである。

覆土は周縁から流れ込む明褐色土、次いで中央部を埋める暗褐色土である。

遺物は出土しなかった。

SK-360 (42) SK-044 (第100図、図版21)

区画中央北寄りに位置する隅丸方形土坑である。地下式坑SK-307と重複し、当遺構が新しい。形状は地下式坑を斜めに切るかたちで設けた土層断面に土坑らしき落ち込みが確認されなかったことから、隅丸方形と判断した。規模は縦横2m、深さ約60cmであり、断面は漏斗状を呈する。

覆土内に厚さ20cm～30cmの貝層が見られた。貝の種類はハマグリ・アカニシである。

遺物は出土しなかった。

SK-361 (42) SK-039 (第101図)

区画南西壁寄りに位置する浅い大形長方形土坑である。北側で小土坑と重複するが、新旧関係は不明である。規模は長径2.6m、短径1.4m、深さ5cm前後である。

覆土の状況は不明であり、遺物は出土しなかった。

SK-362 (32) SK-028 (第101図)

区画南東壁際に位置する楕円形土坑であり、小ピットは別遺構と思われるが一緒に掲載した。規模は長径1.1m、短径1m、深さ約10cmである。

覆土の状況は不明であり、遺物は出土しなかった。

SK-363 (32) SK-031 (第101図、図版25)

区画南東壁際に位置する底面有段(段差12cm)の楕円形土坑である。規模は長径2.4m、短径1.4m、深さ約40cmである。

覆土は緩い凹レンズ状に下から明褐色土、褐色土、暗褐色土と堆積する。自然堆積であろう。

遺物は出土しなかった。

SK-364 (42) SK-024 (第101図、図版25・66)

区画北西に位置する串団子状の土坑群であり、土層断面の検討から一連のものと考えられる。規模は長径4.2m、短径1.2m～2.5m、深さは0.5m～1.0mである。

覆土の堆積状況は先ず各底面をロームブロック主体の明褐色土が覆ったのち、褐色土が西側から入り込み、次に炭化物を含む褐色土が全体を覆い、最後に暗褐色土が低い窪みを埋めている。比較的大きな遺構にもかかわらず遺物が少ないことなど、自然堆積の結果であろうか。

遺物は古瀬戸灰釉中皿体部片が出土した。

SK-365 (32) SK-040 (第101図・図版24)

区画南西壁寄りに位置する多少歪な長方形土坑である。調査区の境界に位置したために、北側一部が未調査となった。規模は長径1.5m以上、短径1.5m、深さ23cmである。

覆土はロームブロックを多く含む単層であり、埋め戻しであろうか。

遺物は出土しなかった。

SK-366 (32) SK-041 (第101図)

区画南西コーナー寄りに位置する細長い土坑である。規模は長径2.0m、短径0.6m、深さ20cmである。

覆土の状況は不明であり、遺物は出土しなかった。

SK-367 (42) SK-049 (第101図)

区画北東壁寄りに位置する楕円形土坑であり、地下式坑SK-304と重複する。新旧関係は不明ながら、より古い遺構と推測される。規模は径0.8m、深さ54cmである。

覆土の状況は不明であり、遺物は出土しなかった。

SK-368 (42) SK-047 (第101図、図版22)

区画中央に位置する楕円形の浅い土坑である。地下式坑SK-309と重複する。根拠には欠けるが、地下式坑覆土の埋没状況からして恐らくそれ以前の所産と推測される。規模は長径約1m、深さ約10cmであり、短径は0.8m程になろうか。

遺物は出土しなかった。

SK-369 (旧番号なし) (第87図)

区画南東壁際に位置する浅い円形土坑である。規模は径約0.7m、深さ約15cmである。覆土の状況は不明であり、遺物も出土しなかった。

SK-370 (42) SK-015 (第87図)

区画中央やや南寄りに位置し、溝状遺構1 ((42) SD-002)と接する円形土坑である。規模は径約0.9m、深さは約15cmである。

覆土は凹レンズ状に堆積する明褐色土次いで褐色土であった。

遺物は出土しなかった。

SK-371 (32) SK-025 (第87図、図版25)

区画南東コーナー寄りに位置するビット状の楕円形土坑である。規模は長径0.7m、短径0.6m、深さ約65cmである。

覆土の状況は不明で、遺物は出土しなかった。

SK-372 (32) SK-024 (第87図)

区画南東コーナー寄りに位置する楕円形土坑である。規模は長径0.8m、短径0.6m、深さは40cmである。

覆土はロームブロック主体の上下2層であり、下層には焼土を含む。

遺物は出土しなかった。

SK-373 (32) SK-023 (第87図)

区画南東壁近くに位置する浅い皿形の長方形土坑である。規模は長径1.3m、短径0.7m、深さ約10cmである。

覆土はロームブロック、白色粘土ブロック、炭化物からなるものであった。遺物は出土しなかった。

SK-374 (32) SK-046 (第87図)

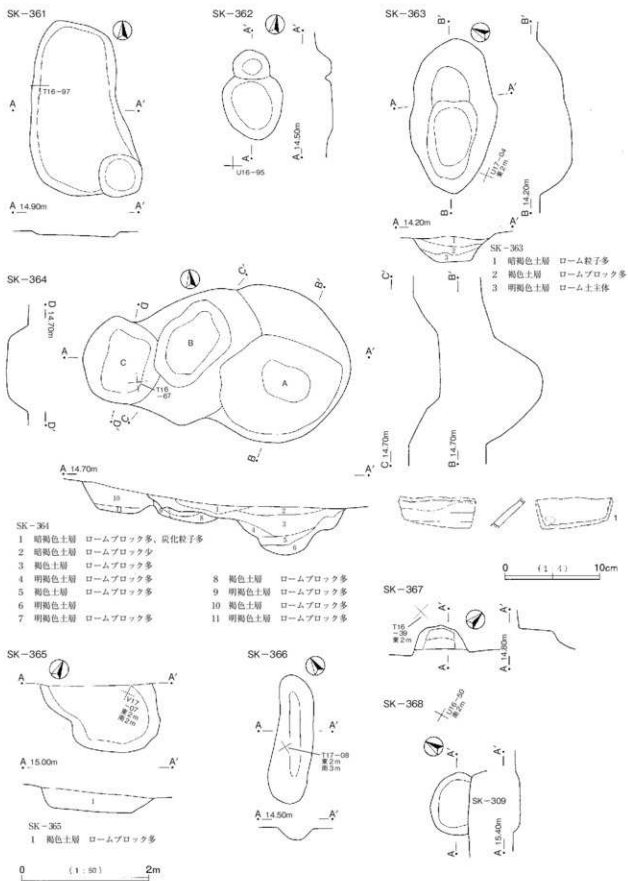
区画南東コーナー寄りに位置する楕円形土坑である。規模は長径0.8m、短径0.6m、深さ20cmである。

覆土の状況は不明であり、遺物は出土しなかった。

SK-375 (42) SK-018 (第87図、図版24)

区画南東寄りに位置する方形土坑である。規模は径約0.6m、深さ約20cmである。

覆土は単一の暗褐色土であった。遺物は出土しなかった。



第101図 掘込区画1 土坑(4)

(5) 溝状遺構

掘込区画1内溝状遺構1 (42)SD-002(第87図)

区画中央を東西に走る溝状遺構であるが、東側はさらに続いていた可能性がある。規模は長さ10m(以上)、幅1.0m、深さ20cm～30cmである。

覆土については、下層が人為堆積、上層が自然堆積かという調査時の所見がある。遺物は常滑片口底部片が出土した。

掘込区画1内溝状遺構2 (42)SK-014(第87図)

区画中央に溝状遺構1((42)SD-001)の西端を受けるかたちで、多少間をおき南東に作られた溝状遺構である。規模は長さ4.0m、幅1.0m、深さ20cm弱である。

覆土については人為堆積という調査時の所見がある。溝状遺構1((42)SD-001)と幅や覆土等が似通っており、共に区画南東部を画する性格の溝であろうか。遺物は出土しなかった。

4 掘込区画2・3(第102図、図版20)

東西方向に浅い谷が入る富士見遺跡北部の台地中央(U15・16～V15・16)に位置し、掘込区画1とは丁度20数m東側に並列する。ローム層の確認面で見ると、区画中央と周辺部では40cm～70cmの差があるので、本来は区画1と同様、多少の掘り込みがあったのであろう。しかし、地形が多少緩斜面へと移る辺りに位置するためか表土除去の過程で確認面を下げってしまったこともあって、南端の一部を除き明瞭な区画範囲を捉え得なかった。また、地下式坑や方形土坑群が集中する区画2と長方形土坑群主体の区画3は間に多少の空白地があり、それぞれ小区画として認識されていたのであろう。

掘込区画2は遺構の広がりからすると、規模が南北29m、東西24m程となり、縦長の長方形を呈する。また、その主軸方位は台地の向きと同じ北北西にとっており、これは既に概説した掘込区画1と同一である。区画内には縦横に溝状遺構が重複しているが、これらは近世の所産であり、その後半以降の遺物が主であることから、時期的にも本区画との直接的関連性はないものと考えられる。しかし、多少凹んでいたことが後世何らかの区画に至ったという可能性はあろう。

内部の空間構成は北側に地下式坑が集中する反面、南側は方形堅穴土坑(一部は住居施設か)、長方形遺構(土坑)、井戸、土坑墓がある程度グループをなして群在するという状況である。既述した掘込区画1と大枠は同じながら、互いに要素もあって、おそらく性格の相違があるのだろう。

同様に、掘込区画3も遺構の広がりからすると、その範囲は南北29m、東西25m程となるが、こちらは散在する状況であり、しかもほとんどが土坑(多くは土坑墓か)によって構成されることなど、区画性は弱かったものと思われる。墓地として捉えられようか。なお、この区画3については、等高線でもほとんど落ち込みとして捉えられないことから掘込区画というより、単なる墓域とするほうが適切かもしれない。

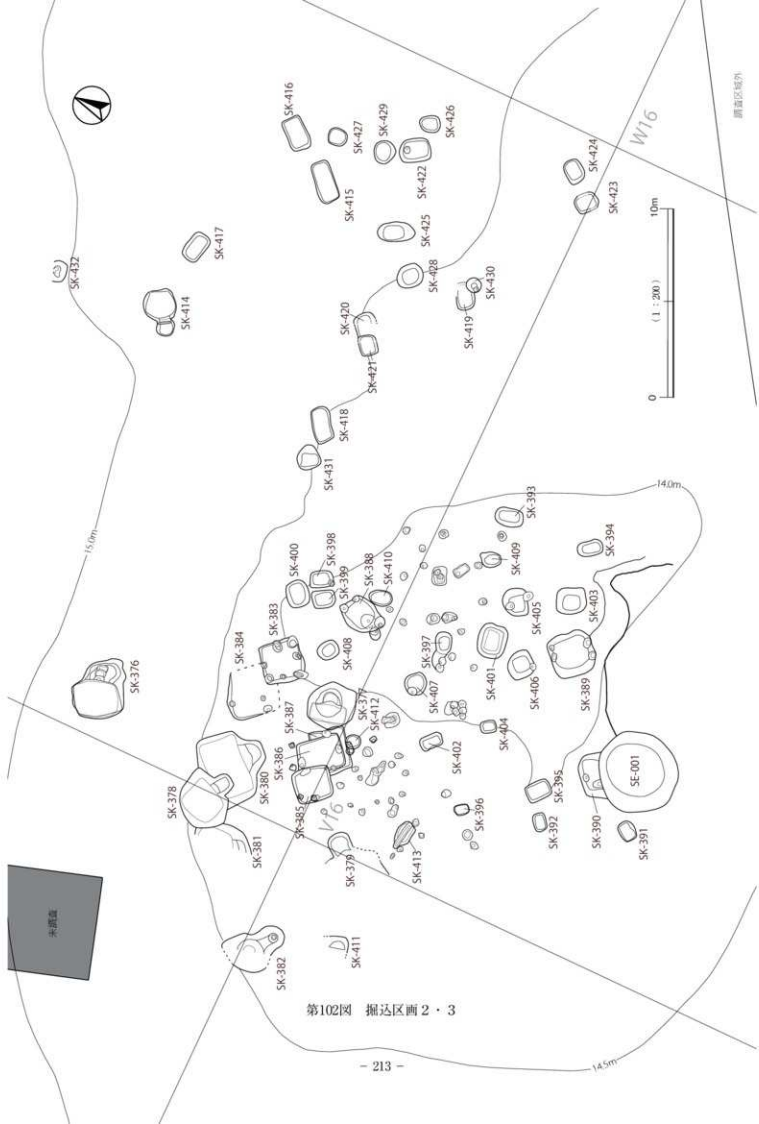
区画2・3内から出土した遺物は在地産土器(播鉢、内耳土鍋)を主体として、僅かな古瀬戸や常滑陶器、それに1点の中国産磁器が伴うのみで、砥石や石臼等その他の遺物は見られなかった。

5 掘込区画2の遺構と遺物

(1) 地下式坑

SK-376 (26)SK-042(第103図、図版22・23)

区画2の中央北端に位置する。遺構の方位は南西をとり、北端には不自然ではあるが、この点は堅坑への入口が南側に求められることと関連するのであろう。大きな方形の堅坑と、横長の地下室という特



第102图 掘达区画 2 · 3

微を有し、堅坑と地下室底面とは多少の段差を有する。堅坑は入口部を南側に広くとって中程まで斜めに掘削した後、箱形に掘り込んでいるが、底面は緩い段差を有しながら地下室底面へと至る。その規模は横幅1.1m、縦幅0.9m、深さ1.2mである。地下室は多少菱形且つ外膨らみの平面形を呈し、底面中央は多少窪んでいる。規模は横幅2.3m、奥行き1.8m、高さ1.4m（天井残存部から推測）、現存ルーム面からの深さ2.0mである。

覆土は地下室奥壁寄りに褐色土が堆積した後、天井部の崩壊土と思われるロームブロック主体の黄褐色土が全体を覆っている。その後は断続的に天井や壁の崩壊しながら堆積を繰り返して、浅い窪みとなったところで褐色土が堆積する。

遺物は出土しなかった。

SK-377 (26) SK-019 (第103図、図版23・68)

西側区画北西寄りに位置し、方位は南西をとる。半円形の堅坑と、それに比して小規模且つ横長の地下室からなり、堅坑と地下室底面とは段差を有する。堅坑は入口部を多少広めにとって約1/3まで斜めに掘削した後、箱形に掘り込んでいる。その規模は横幅0.9m、縦幅0.5m、深さ0.98mである。地下室は天井部も含め横長矩形の箱形であり、規模は横幅1.9m、奥行き0.9m、高さ1.1m、現存ルーム面からの深さ1.9mである。

覆土は堅坑から地下室前面にかけて斜めに褐色ないし暗褐色土が堆積したのち、ロームブロック主体の褐色土が地下室全体を覆い、その後に褐色土が周縁から交叉するように埋め、浅い窪みとなったところで黒褐色土が堆積するという状況である。急激な埋没というより、時間をかけて剥落・崩落が続いた結果と思われるが、それも小さな地下室という条件に因る可能性が高い。

遺物は覆土中から在地産播鉢口縁部片が1点出土したのみである。

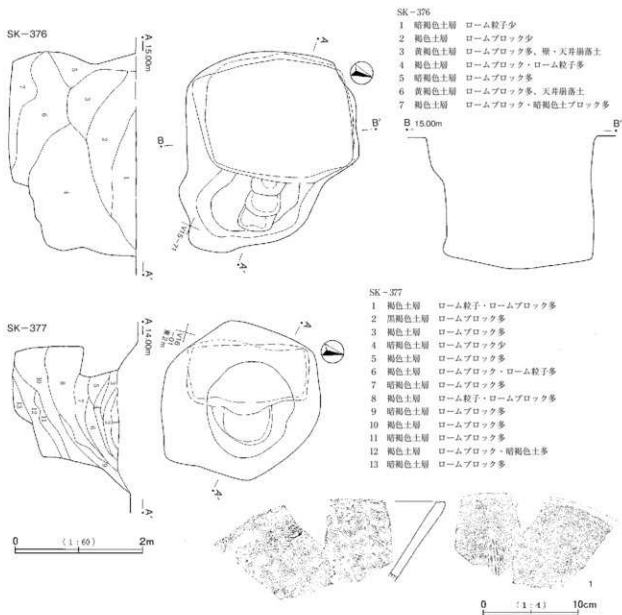
SK-378 (26) SK-008 (第104図、図版23)

西側区画北西端に位置し、方位は北北西をとる。土坑SK-380と重複するが、新旧関係は不明である。小さな方形の堅坑と、同じく方形の地下室からなり、堅坑と地下室底面とは多少の段差を有する。堅坑は箱形に掘り込まれ、規模は縦横共に0.5m、深さ0.6mながら、土坑と重複していることから、いずれにせよ下半部の値である。地下室の底面は方形であるが、上位に行くに従って歪な形状となる。規模は底面で横幅1.0m、奥行き0.9m、現存ルーム面からの深さ2.4mである。なお、天井部の高さは不明である。また、覆土の状況も同様である。

遺物は覆土中から5点出土した。1は古瀬戸灰釉平埵体部片である。2は在地産播鉢約1/3～1/4個体を復元・図示した。播目は4条である。3は古瀬戸折縁深皿底部片である。4・5は在地産内耳土鍋であり、4は角張った縦耳を有する口縁部片（耳脇に穿孔）、5は口縁部約1/3個体から復元・図示した。縦耳2個を1単位とする。

SK-379 (26) SK-009 (第105図、図版23)

区画2の北西寄りに位置し、方位は南南西をとる。年度別調査範囲の境界に当たったこともあって、地下室部分が未調査のままに終わっている。堅坑部は平面が隅丸方形をとり、規模は横幅1.1m、縦幅1.0m、深さ1.0mである。地下室は僅かに上面のプランを認め得たのみで、横幅は2.8m程になろうか。縦横に土層断面図をとってはいるものの、坑底まで至っていないことなど、いずれにせよその全体像は不明である。なお、地下室の深さは1m以上であることが判明している。



第103図 掘込区画2 地下式坑(1)

覆土は堅坑底部から地下室にかけて暗褐色土堆積後、ロームブロック主体の天井部崩落土が厚く埋めている状況であった。

遺物は出土しなかった。

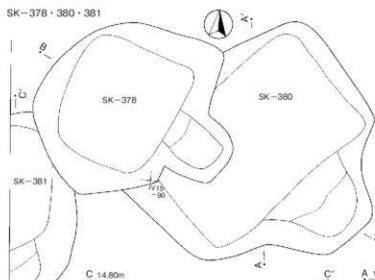
(2) 方形堅穴遺構

SK-380 (26) SK-006 (第104図、図版23・66・68・69)

その形状から地下式坑と見紛うが、堅坑に相当するピットと「地下室」との大きな段差や「地下室」の深さ(1.5m)から長方形堅穴遺構とするのが妥当と判断した。地下式坑SK-378またピットと重複しているものの、新旧関係は不明である。その規模は横幅3.8m、縦幅2.7m、深さ1.5mである。また、「堅坑」相当の掘り込みの規模は、幅2.0m、深さ0.2mである。

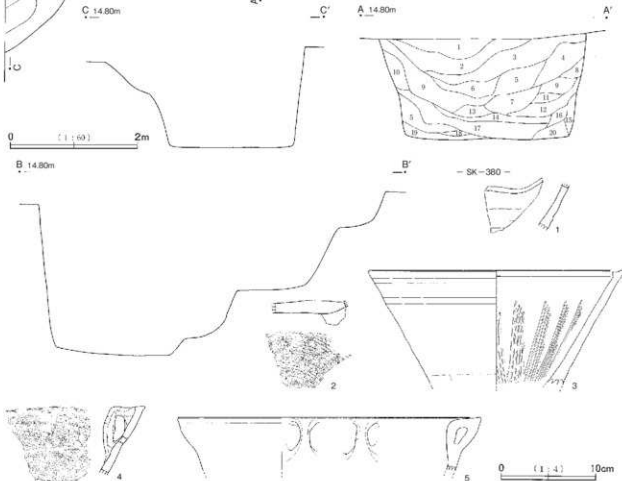
覆土は全体に周縁部から入り込むように土砂が流入した状況であり、粘土や炭化物(とりわけ上部)も

SK-378・380・381

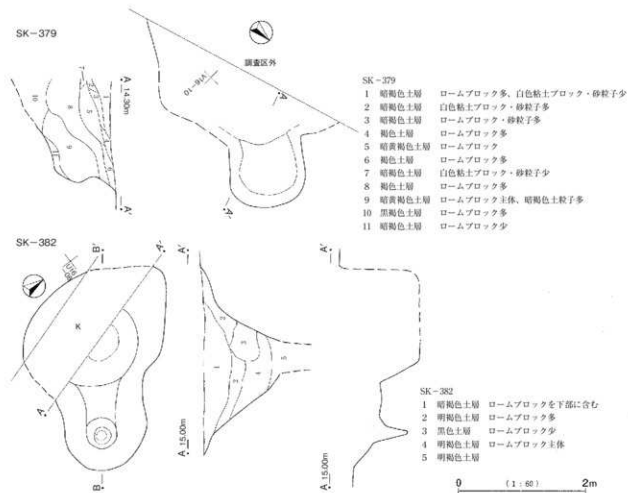


SK-380

- | | | |
|----|--------|------------------------|
| 1 | 暗褐色土層 | ロームブロック多、炭化粒子・焼土粒子 |
| 2 | 黒褐色土層 | ロームブロック少、炭化粒子 |
| 3 | 暗褐色土層 | ロームブロック多、炭化物少 |
| 4 | 黄褐色土層 | ロームブロック・ローム粒子主体 |
| 5 | 暗褐色土層 | ロームブロック・ローム粒子少 |
| 6 | 暗褐色土層 | ロームブロック多、炭化物少 |
| 7 | 暗褐色土層 | ロームブロック・ローム粒子多 |
| 8 | 暗黄褐色土層 | ロームブロック主体 |
| 9 | 暗褐色土層 | ロームブロック多 |
| 10 | 褐色土層 | ローム粒子・ロームブロック多 |
| 11 | 暗褐色土層 | ローム粒子・ロームブロック多 |
| 12 | 褐色土層 | ローム粒子・ロームブロック多 |
| 13 | 黒色土層 | ローム粒子・ロームブロック多 |
| 14 | 暗褐色土層 | ロームブロック多 |
| 15 | 黄褐色土層 | ロームブロック |
| 16 | 暗褐色土層 | ローム粒子・ロームブロック多 |
| 17 | 暗褐色土層 | ロームブロック・白色粘土ブロック多、炭化物少 |
| 18 | 黒色土層 | ロームブロック少 |
| 19 | 黒褐色土層 | ロームブロック多、白色粘土ブロック少 |
| 20 | 黄褐色土層 | ロームブロック主体 |



第104図 掘込区画2 地下式坑(2)



第105図 掘込区画2 地下式坑(3)、大形土坑

含んでいることなど、短期間に埋め戻した可能性が高い。

遺物は覆土中から3点出土した。1は古瀬戸灰軸平埵体部片である。2は折縁深皿底部片である。3は在地挿鉢約1/4個体を復元・図示した。挿目は5条である。4・5は在地産土鍋であるが、別個体と思われる。5は縦耳が2個並列し、半円状をなすのに対し、4は上に釣り上がった形状となる。なお、4は縦耳脇に焼成後の穿孔が見られる。

SK-381 (26) SK-007 (第104図、図版25)

年度別調査範囲の境界に掛かっていることもあり、約1/3の調査に終わっている。地下式坑SK-378と重複するが、新旧関係は不明である。一見地下式坑と類似するが、堅坑部分の形状が他と異なる点や「地下室」そのものが浅いことなど、長方形ないし方形堅穴遺構とするのが妥当であろう。その規模は、縦幅3.1m、深さ1.5mである。

覆土の状況は不明であり、遺物は出土しなかった。

SK-382 (39) SK-001 (第105図、図版25)

調査時の所見では地下式坑の可能性を指摘していたが、その形状などから土坑の一種と判断した。中央部を水道管の掘削により大きく破壊されているものの、概要はつかみうる。形状は楕円形の土坑に先細り

のビットが伴うかたちであり、土坑の断面形状は挿鉢状をなす。規模は長径1.2m、短径0.9mであるが、深さについては1.2m以上となる可能性もある。なお、ビットを含めた全体の長さは3.1mとなる。

覆土は中位以下が明褐色土、上部では部分的に黒色土が見られるものの、明褐色土次いで暗褐色土と推移しており、ほぼ自然堆積と判断される。

遺物は出土しなかった。

SK-383 (26) SK-020 (第106図、図版25・69)

区画2中央北寄りに位置する方形堅穴遺構である。1か所を除いて、各壁中央と隅にビットを有するが、柱穴と思われるものは東西壁際の2つで、残りは深さ10cm～20cm程度(1つは不明)のものであった。補助柱穴の痕跡であろうか。規模は縦横約1.1m、深さ35cm～40cmである。

覆土は4層に及ぶ凹レンズ状かつ縞状の堆積を示し、各層ともロームブロックをやや多く含むとはいえず、自然堆積であろう。

遺物は在地産内耳土鍋約1/3個体が出土した。

SK-384 (26) SK-033 (第106図、図版25)

区画中央北側に位置する堅穴遺構であるが、北と西側で約10cmの壁面を検出したにすぎない。残存部の形状からすると方形堅穴にならうか。やはり方形堅穴遺構であるSK-383と重複している可能性が高いが、新旧は不明である。規模は2.6m四方と推測される。壁際や底面にビットが見られるが、伴うかどうかは不明である。

遺物は出土しなかった。

SK-385 (26) SK-010 (第106図、図版25)

区画北西寄りに位置する方形堅穴遺構であり、両脇中央壁際に一対の柱穴(坑底から深さ約21cmと24cm)を有する。SK-386と重複し、当遺構がより古い。規模は約1.9m四方、深さ約40cmである。

覆土はロームブロック主体の褐色土層で、壁寄りでは炭化物が、中央部では白色粘土ブロックを含む。

遺物は出土しなかった。

SK-386 (26) SK-011 (第106図、図版25)

区画北西寄りに位置する長方形堅穴遺構であり、長軸側両脇の中央壁際に一対の柱穴(坑底からの深さ約23cmと31cm)を有する。SK-385と重複し、当遺構が新しい。規模は長径2.5m、短径2m、深さ約40cmである。

覆土はロームブロック・白色粘土ブロックを多く含む褐色土である。

遺物は出土しなかった。

SK-387 (26) SK-012 (第106図、図版25)

区画北西寄りに位置する方形堅穴遺構であり、長軸側両脇の中央壁際また壁寄りに一対の柱穴(坑底からの深さ約35cm・53cm)を有する。SK-386およびSK-385と重複し、前者よりは古いものの、後者との新旧関係は不明である。規模は長径2.2m、短径1.9m、深さ約40cmである。

覆土はロームブロックを含む褐色土である。遺物は出土しなかった。

(3) 土坑

SK-388 (26) SK-025 (第106図)

区画北東寄りに位置する浅い皿状の方形土坑である。ビット群と重複しており、伴うかどうか判別は困

難ながら(南側壁外の1つは明らかに古い)、南壁下の径70cmの大形ピットはその占める位置や深さ(坑底から約37cm)など、一連の遺構かと思われる。規模は約1.8m四方、深さ25cmである。

覆土は凹レンズ状の堆積を示し、黒色次いで褐色土層と推移しており、自然堆積と見られる。

遺物は出土しなかった。

SK-389 (26) SK-021 (第106図、図版25)

区画南側壁際に位置する浅い皿状の大形方形土坑である。長軸側両脇中央壁際の対称する位置に柱穴と思われるピットを有する。規模は縦横共に2.3m、深さ20cm～30cmであり、壁際ピットの深さはそれぞれ坑底から34cmと43cmである。なお、非対称の2つは43cmと16cmである。

覆土は底面付近では褐色土ながら、上位では黒褐色土である。なお、遺物は出土しなかった。

SK-390 (26) SE-001北側土坑(第108図)

区画南側壁際に位置する大形方形土坑である。SE-001に伴う可能性もあり、土層断面図を検討したが明確な結論に至らなかった。東側にまったく同じ規格・方位の大形方形土坑(SK-389)があり、一連の遺構の可能性もあることから、一応別遺構(その場合はSE-001より新しい)として報告する。規模は2.2m四方、深さ20cmである。

覆土は炭化物・ロームブロックを含む暗褐色土である。遺物は出土しなかった。

SK-391 (26) SK-001 (第107図、図版25)

区画南壁際に位置する長方形土坑である。規模は長径1.1m、短径0.4m、深さ約20cmである。

覆土はロームブロックを含む暗褐色土層である。遺物は出土しなかった。

SK-392 (26) SK-002 (第107図、図版25)

区画南西壁寄りに位置する整った長方形土坑である。規模は長径1.4m、短径1.0m、深さ23cmである。

覆土はロームブロックを含む暗褐色土層である。遺物は出土しなかった。

SK-393 (26) SK-017 (第107図、図版25・69)

区画南東に位置する長方形土坑である。規模は長径1.5m、短径1m、深さ60cmである。

覆土は底面にロームブロック混じりの暗褐色土次いで褐色土、上位で褐色土の堆積となる。

遺物は在地産土鍋口縁部片1点のみである。

SK-394 (26) SK-023 (第107図、図版25)

区画南東壁寄りに位置する浅い皿形の長方形土坑である。規模は長径1.3m、短径0.7m、深さ約10cmである。

覆土はロームブロック、白色粘土ブロック、炭化物を含むものであった。遺物は出土しなかった。

SK-395 (26) SK-003 (第107図、図版25)

区画南西壁寄りに位置する整った長方形土坑である。規模は長径1.0m、短径0.7m、深さ14cmである。

覆土は下層が炭化物層、上層が炭化物混じりの暗褐色土層である。遺物は出土しなかった。

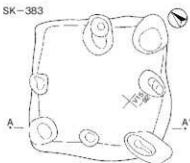
SK-396 (26) SK-004 (第107図、図版25)

区画南西寄りに位置する浅い長方形土坑である。規模は長径0.8m、短径0.6m、深さ10cm未満である。

覆土は最下層の灰色粘土混じりの暗褐色土層を確認するのみである。

遺物は出土しなかった。

SK-383



A 14.30m

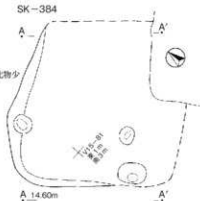


0 (1:4) 10cm

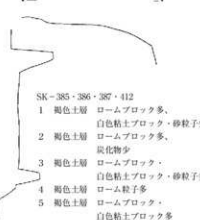
SK-383

- 1 暗褐色土層 ロームブロック多、炭化物少
- 2 褐色土層 ロームブロック多
- 3 暗褐色土層 ロームブロック多、白色粘土ブロック、炭化物少
- 4 暗褐色土層 ロームブロック多

SK-384



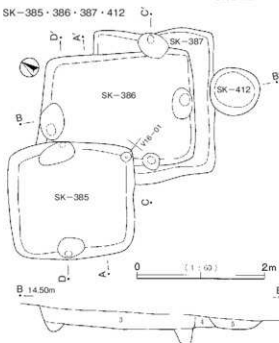
A 14.60m



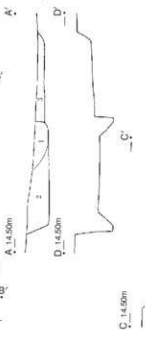
SK-385・386・387・412

- 1 褐色土層 ロームブロック多、白色粘土ブロック・砂粒子少
- 2 褐色土層 ロームブロック多、炭化物少
- 3 褐色土層 ロームブロック・白色粘土ブロック・砂粒子多
- 4 褐色土層 ローム粒子多
- 5 褐色土層 ロームブロック・白色粘土ブロック多

SK-385・386・387・412



B 14.50m

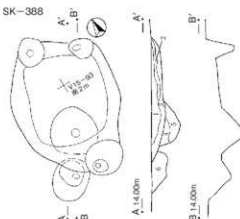


A 14.50m

D 14.50m

C 14.50m

SK-388



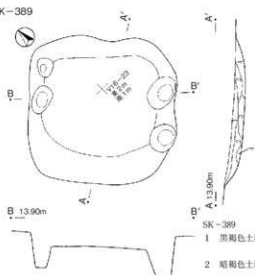
A 14.00m

B 14.00m

SK-388

- 1 暗褐色土層 ロームブロック・炭化物少
- 2 褐色土層 ロームブロック多、炭化物少
- 3 黒色土層 ロームブロック・炭化物多
- 4 黄褐色土層 ロームブロック・ローム粒子主体
- 5 褐色土層 ロームブロック・ローム粒子多
- 6 黄褐色土層 ロームブロック・ローム粒子主体

SK-389



B 13.90m

A 13.90m

SK-389

- 1 黒褐色土層 ローム粒子多、炭化物少
- 2 暗褐色土層 ロームブロック少、ローム粒子多
- 3 褐色土層 ローム粒子多
- 4 褐色土層 ロームブロック・ローム粒子多

第106図 掘込区画2 方形竪穴遺構

SK-397 (26) SK-036 (第107図、図版25)

区画中央南寄りに位置する長方形土坑である。規模は長径1.2m、短径0.85m、深さは約20cmである。ピット群中にあり、西壁は不明瞭である。

覆土の状況は不明である。遺物は出土しなかった。

SK-398 (26) SK-028 (第107図、図版69)

区画北東寄りに位置する長方形土坑である。南西隅のピットは伴うかどうかかわからないが図示する。規模は長径1.2m、短径0.9m、深さ25cm～30cmである。

覆土の状況は不明である。

遺物は在地産土鍋口縁部片が出土し、SK-399出土遺物と接合した。

SK-399 (26) SK-029 (第107図)

区画北東寄りに位置する長方形土坑であり、隣接するSK-398と方位、形状等類似する。規模は長径1.2m、短径0.9m、深さ約30cmである。

覆土の状況は不明である。遺物は在地産土鍋口縁部片が出土し、SK-398出土遺物と接合した。

SK-400 (26) SK-024 (第107図、図版66)

区画北東寄りに位置する方形土坑である。規模は長径1.4m、短径1.2m、深さ40cmである。

覆土は各層共にロームブロックをやや多く含む褐色土である。

遺物は白磁皿底部完形品のみである。高台に抉りを入れて4つに面取りし、体部下半は露胎とする。内面に4か所ピン跡が見られる。15世紀代の中国製品であろう。

SK-401 (26) SK-015 (第107図、図版26)

区画南側中央壁寄りに位置する多少漏斗状の浅い方形土坑である。規模は長径1.8m、短径1.5m、深さ約35cmである。

覆土は凹レンズ状の3層に細分され、全体に炭化物を含んでいる点は隣接するSK-406に類似する。自然堆積であろう。遺物は出土しなかった。

SK-402 (26) 遺構番号なし(第107図)

区画中央やや西寄りに位置する浅い長方形土坑である。規模は長径1.2m、短径0.7m、深さ約15cmである。

覆土の状況は不明であり、遺物も出土しなかった。

SK-403 (26) SK-022 (第107図、図版26)

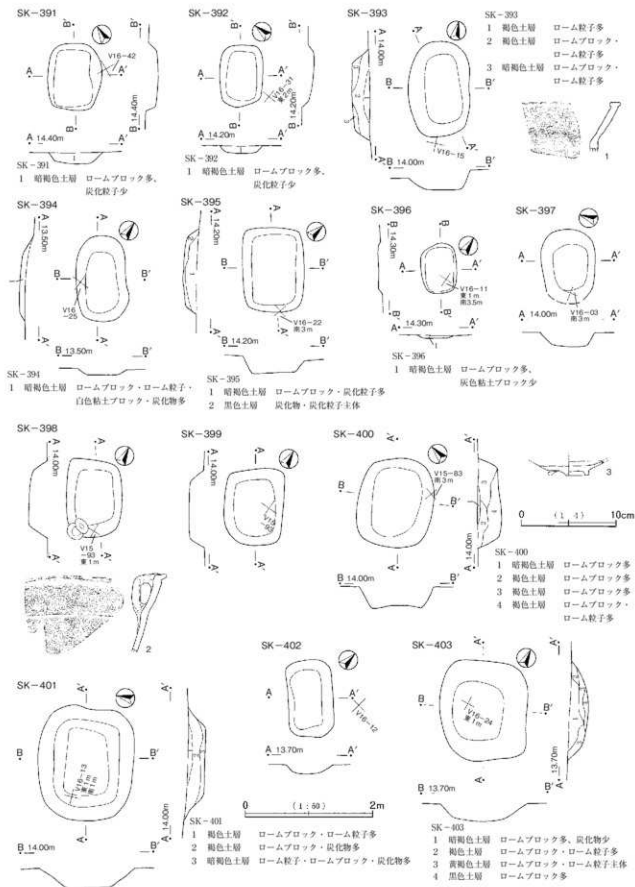
区画南東壁寄りに位置する断面皿形の方形土坑である。規模は長径1.5m、短径1.4m、深さ約25cmである。

覆土は最下層に炭化物を多く含む黒色土、上位では炭化物混じりの褐色土また暗褐色土層となる。遺物は出土しなかった。

SK-404 (26) SK-030 (第108図、図版66)

区画中央南西寄りに位置する(長)方形土坑である。規模は長径0.85m、短径0.65m、深さ約40cmである。

覆土はロームブロック主体の層でほぼ占められ、人為堆積の可能性が高い。遺物は古瀬戸平焼口縁部片、在地産内耳土鍋片(非掲載)が出土した。



第107図 掘込区画2 土坑(1)

SK-405 (26) SK-016 (第108図、図版26)

区画南側中央壁寄りに位置する方形土坑である。小ピット2基と重複するが新旧関係は不明である。規模は約1.4m四方、深さ約35cmである。

覆土は全体に炭化物を含んでいるなど隣接するSK-406に類似する。遺物は出土しなかった。

SK-406 (26) SK-014 (第108図、図版26)

区画南側中央壁寄りに位置する浅鉢状の方形土坑である。規模は1.3m四方、深さ約25cmである。

覆土は4層に細分され、全体に炭化物を含んでいる。自然堆積であろう。

遺物は出土しなかった。

SK-407 (26) SK-035 (第108図、図版26・66)

区画中央に位置する多少歪な円形土坑である。規模は径約1.1m、深さは約15cmである。壁際のピットはピット群中にあることから重複と思われるが、本遺構との新旧関係は不明である。

覆土の状況は不明である。遺物は古瀬戸灰軸平坑底部片が出土した。

SK-408 (26) SK-026 (第108図)

区画北東寄りに位置する浅い楕円形土坑である。規模は長径1.2m、短径0.9m、深さ20cmである。

覆土は交互に周縁から流れ込む自然堆積と思われ、下層に炭化物を多く含んでいる。

遺物は出土しなかった。

SK-409 (26) SK-027 (第108図)

区画南東寄りに位置する断面碗形の楕円形土坑であり、北端でピットと重複する(新旧不明)。規模は長径1.4m、短径1.1m、深さ約25cmである。

覆土はほぼロームブロック主体の褐色土であった。遺物は出土しなかった。

SK-410 (26) SK-031 (第108図)

区画中央東寄りに位置する楕円形土坑である。規模は長径1.2m、短径0.8m、深さ10cmである。底面に炭化物(焼土)が遺存した。

遺物は出土しなかった。

SK-411 (39) SK-002 (第108図)

区画西端中央に位置する土坑であるが、近世の溝また近代の攪乱により全体の形状は不明である。深さは30cmである。

覆土の状況は不明であり、遺物は出土しなかった。

SK-412 (26) SK-013 (第106図、図版25)

区画中央に位置する小形の円形土坑であり、北側の方形堅坑遺構SK-387と僅かに一部接する。調査時の記録では当遺構が新しいとする。

覆土は白色粘土を含む褐色土である。遺物は出土しなかった。

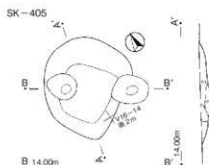
SK-413 (26) 遺構番号なし(第108図)

区画中央西寄りに位置する楕円形土坑である。中央に細溝を有する。規模は長径1.5m、短径0.8m、深さ10cmである。細溝は幅30cm、深さ8cmである。この種の形状の土坑は16世紀末～17世紀代の火葬用の穴として類例が多いが、覆土の状況は不明であり、底面の炭化物や焼土等の記載もないので、可能性を指摘するにすぎない。遺物は出土しなかった。



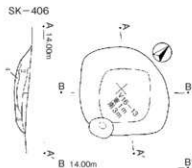
SK-404

- 1 暗褐色土層 ローム粒子少・灰色粘土ブロック少
- 2 黄褐色土層 ロームブロック多、ローム粒子主体
- 3 褐色土層 ロームブロック多
- 4 暗褐色土層 ロームブロック多



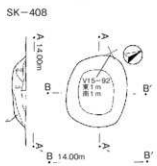
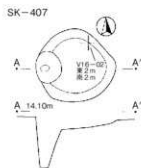
SK-405

- 1 暗褐色土層 ロームブロック・炭化物多
- 2 暗褐色土層 ロームブロック・炭化物多
- 3 黒色土層 ロームブロック少、炭化物多



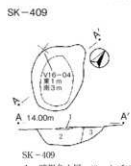
SK-406

- 1 暗褐色土層 ロームブロック多
- 2 褐色土層 ロームブロック主体、炭化物少
- 3 褐色土層 ローム粒子・炭化物・炭化粒子多
- 4 黒褐色土層 ロームブロック・炭化物多



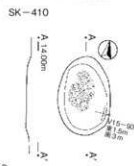
SK-408

- 1 褐色土層 ローム粒子多、炭化粒子少
- 2 暗褐色土層 ローム粒子多、炭化粒子少
- 3 暗褐色土層 ロームブロック・炭化物多
- 4 暗褐色土層 ロームブロック・炭化物・炭化粒子多



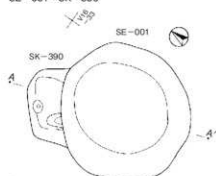
SK-409

- 1 暗褐色土層 ロームブロック多
- 2 褐色土層 ロームブロック・ローム粒子主体
- 3 褐色土層 ロームブロック多、ローム粒子主体

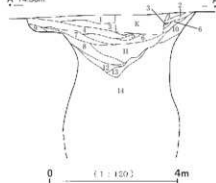


SK-410

SE-001・SK-390

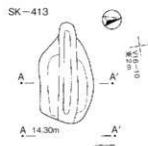


SK-390

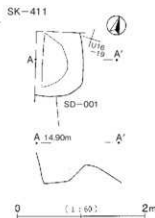


SE-001

- 1 暗褐色土層 ロームブロック主体
- 2 褐色土層 ローム粒子・ロームブロック主体
- 3 黒褐色土層 ロームブロック・炭化物混じり腐植土
- 4 暗褐色土層 ロームブロック混じり腐植土
- 5 黒褐色土層 ロームブロック混じり腐植土
- 6 暗褐色土層 ロームブロック混じり腐植土
- 7 黒褐色土層 ロームブロック混じり腐植土
- 8 褐色土層 ロームブロック混じり腐植土
- 9 暗褐色土層 ロームブロック混じり腐植土
- 10 褐色土層 ローム粒子主体
- 11 暗褐色土層 ローム粒子混じり腐植土
- 12 暗褐色土層 ローム粒子・ロームブロック混じり腐植土
- 13 褐色土層 ローム粒子・ロームブロック混じり腐植土
- 14 褐色土層 ロームブロック・暗褐色土が塊状腐植



SK-413



SK-411

第108図 掘込区画2 土坑(2)、井戸

(4) 井戸

SE-001 (26) SE-001 (第108図、図版24)

区画南西壁に掛かる位置に設けられた円形の素掘りの井戸である。重複する大形方形土坑SK-390より新しい。規模は掘形上面で径約4m、一旦括れた後に末広がりとなるが、約4mの深さまで確認したところ調査を中止したため最終的な深さは不明である。

覆土は2mまで断面図を作成した。上位1mまでは凹レンズ状、下位となるに従い、V字状の堆積状となる。多く暗褐色から黒褐色土を呈する。自然堆積に任せた覆土の様子といい、おそらく最終段階の遺構なのであろう。

遺物は出土しなかった。

6 掘込区画3の遺構 (第102図)

(1) 地下式坑

SK-414 (26) SK-005 (第109図、図版23)

東側区画中央北寄りに位置する地下式坑である。遺構の方位は北東をとり、近世の東側南北溝(26)SD-001)と重複する。方形の堅坑と、楕円形の地下室からなり、堅坑と地下室底面とは多少の段差を有する。また、堅坑底面には閉塞痕跡らしき溝が確認される。堅坑の規模は縦横共幅0.9m、深さ1.4mである。地下室は小型の楕円形ながら一部矩形となる。規模は底面で横幅・奥行共1.5m、高さ0.9m以上、現存ローム面からの深さ2.4mである。

覆土の状況は不明であり、遺物は出土しなかった。

(2) 土坑

SK-415 (26) SK-037 (第109図、図版26)

区画中央東側に位置する長方形土坑である。規模は長径2.2m、短径1.0m、深さ40cmである。

覆土は埋め戻したもので、まず北側次ぎに南側から一気に埋めている。土坑墓であろう。

遺物は出土しなかった。

SK-416 (26) SK-038 (第109図、図版26)

区画中央東側に位置する長方形土坑であり、同じく長方形土坑であるSK-415の北側に隣接する。規模は長径1.8m、短径1m、深さ45cmである。

覆土は埋め戻したもので、多方向から一気に埋めている。土坑墓であろう。遺物は出土しなかった。

SK-417 (26) SK-043 (第109図、図版26)

区画中央北寄りに位置する長方形土坑である。規模は長径1.6m、短径1.0m、深さ約15cmである。

覆土は褐色次いで暗褐色土層であった。遺物は出土しなかった。

SK-418 (26) SK-034 (第109図)

区画中央西端に位置する長方形土坑である。規模は長径1.8m、短径1.1m、深さ20cmである。

覆土は暗褐色土の単層である。遺物は出土しなかった。

SK-419 (26) SK-050A (第109図、図版26)

区画中央南西寄りに位置する長方形土坑であるが、近世溝と重複し東側は不明瞭である。規模は長径1.3m、短径0.9m、深さ25cmである。

覆土の状況は不明で、遺物は出土しなかった。

SK-420 (26) SK-040 (第109図、図版26)

区画中央西寄りに位置する長方形土坑であり、SK-421やピット群によって南側を壊されている。規模は長径1.5m、短径1.0m、深さ20cmである。

覆土の状況は不明で、遺物は出土しなかった。

SK-421 (26) SK-039 (第109図、図版26)

区画中央西寄りに位置する方形土坑であり、SK-420と重複し、本跡が新しい。規模は各辺約1.0m、深さ約20cmである。

覆土の状況は不明で、遺物は出土しなかった。

SK-422 (26) SK-053 (第109図、図版26)

区画中央東寄りに位置する長方形土坑である。底面北側に小ピット(坑底から深さ7cm)を伴う。規模は長径1.7m、短径1.2m、深さ13cmである。

覆土は褐色土の単層である。遺物は出土しなかった。

SK-423 (26) SK-045 (第110図、図版26)

区画中央南寄りに位置する方形土坑であり、カク乱によって両端の形状等不明である。規模は長径1.2m、短径1.0m、深さ約20cmである。

覆土はロームブロック主体の2層であり単純である。遺物は出土しなかった。

SK-424 (26) SK-046 (第110図、図版26)

区画中央南寄りに位置する長方形土坑である。規模は長径1.3m、短径1.0m、深さ約30cmである。

覆土はロームブロック主体の単層であり単純である。遺物は出土しなかった。

SK-425 (26) SK-051 (第110図、図版26)

区画中央に位置する両端尖頭形の細長い土坑である。規模は長径2.0m、短径1.0m、深さ約20cmである。

覆土はロームブロックを多く含む暗褐色土の単層である。遺物は出土しなかった。

SK-426 (26) SK-056 (第110図)

区画中央東寄りに位置する多少歪な方形土坑である。規模は長径1.0m、短径0.8m、深さ20cmである。

覆土の状況は不明で、遺物は出土しなかった。

SK-427 (26) SK-052 (第110図、図版26)

区画中央東寄りに位置する楕円形土坑である。規模は長径1.0m、短径0.9m、深さ28cmである。

覆土は褐色土と暗褐色土の2層であり、自然堆積であろう。遺物は出土しなかった。

SK-428 (26) SK-047 (第110図、図版26・31)

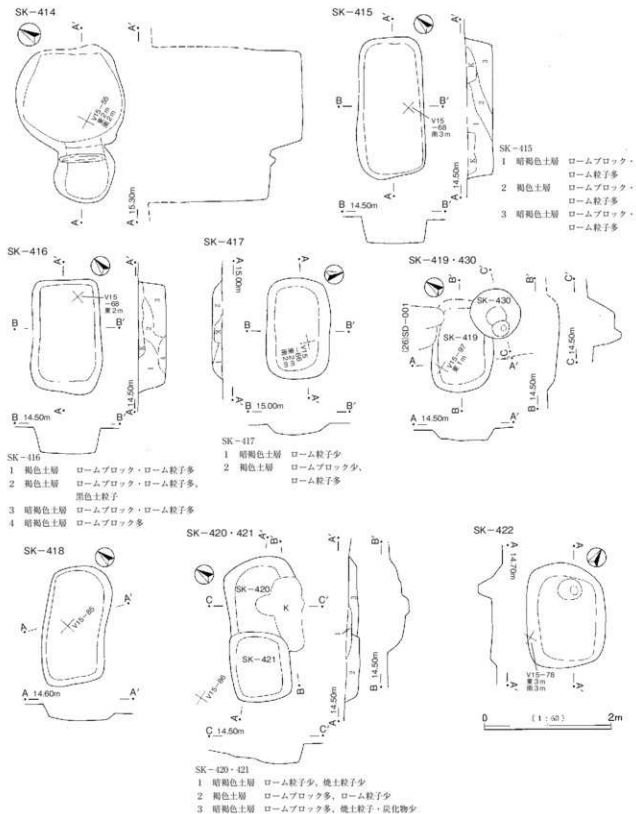
区画中央南西寄りに位置する楕円形土坑であり、近世の溝と重複する。規模は長径1.4m、短径1.2m、深さ60cmである。

覆土は褐色土層の上にロームブロック塊に近い層が堆積しており、人為堆積の可能性が高い。遺物は出土しなかった。

SK-429 (26) SK-054 (第110図)

区画北東寄りに位置する多少歪な楕円形土坑である。規模は長径約1m、短径0.8m、深さ約25cmである。

覆土は底面壁際に褐色土の堆積が見られたほかは、暗褐色土のみであり、自然堆積と思われる。遺物は



第109図 掘込区画3 地下式坑、土坑(1)

出土しなかった。

SK-430 (26) SK-0050B (第109図、図版26)

区画中央南西寄りに位置する小さな楕円形土坑である。規模は長径0.7m、短径0.6m、深さ15cmである。覆土の状況は不明で、遺物は出土しなかった。

SK-431 (26) SK-032 (第110図、図版26)

区画西側と東側の境に位置する土坑である。底面の掘形は長方形であるが、上面は東側がスロープ状となっているために多角形を呈する。それゆえ規模は凡そ1.3m四方というにすぎない。深さは約40cmである。

覆土はロームブロックを含む黄褐色また褐色土が周縁部から流れ込んだ後、暗褐色土が中央を埋めている。遺物は出土しなかった。

SK-432 (26) SK-057 (第110図)

区画中央北端に位置する土坑である。調査地区の境界に当たり北側は未調査である。形状は方形と思われる。東西径1.3mの大きさのみで、深さ、覆土の状況等は不明である。

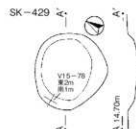
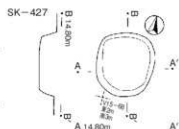
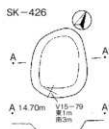
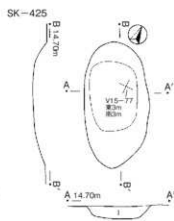
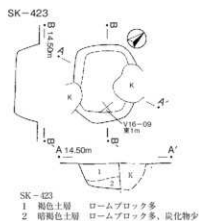
遺物は出土しなかった。

7 区画外の中世遺構

SK-433 (37) SX-001・SK-002 (第111図、図版27・66・67・70、第16表)

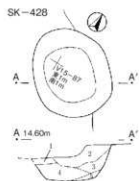
遺跡中央部に当たるU18-55~65にかけて検出された。近世の掘立柱建物であるSB-001と重複する。南側に溝状の掘り込みを有する大形の土坑(4.5m×6.8m)であり、南西の粘土貼土坑は時期的に異なるものとして調査されたが、互いの位置の関係また土層断面図の検討や出土遺物などから一連の遺構と判断した。即ちこの遺構は底面が北側から南側に傾斜しており、その水を受けるように溝が掘られ、西側延長に粘土貼土坑がある。粘土面は溝面より高いので(共に壁上面から粘土面で30cm、溝底面で80cm)、単純な水溜とは考えられない。また、粘土も長方形の範囲(1.1m×2.0m)のみで、いわゆる「粘土貼土坑」で通常見られる土坑の壁にまで貼るものではない。そうするとまた違う性格を考える必要が生じるが、覆土の特徴からも特別に指摘できるものはない。

遺物は覆土中から3点出土した。1は古瀬戸鉄軸折縁深皿口縁部片である。2は古瀬戸片口底部片である。3は常滑甕口縁部片である。4は粘板岩のいわゆる長方硯破損品である。陸部中央に顕著な使用痕と僅かな墨痕が見られる(第16表)。この他、常滑甕胴部片がある(非掲載)。なお、遺物は中世品のみであった。

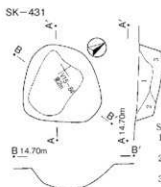


SK-427
1 暗褐色土層 ロームブロック・黒褐色土ブロック多
2 褐色土層 ロームブロック多

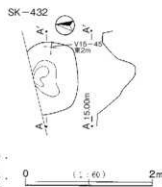
SK-425
1 暗褐色土層 ロームブロック多



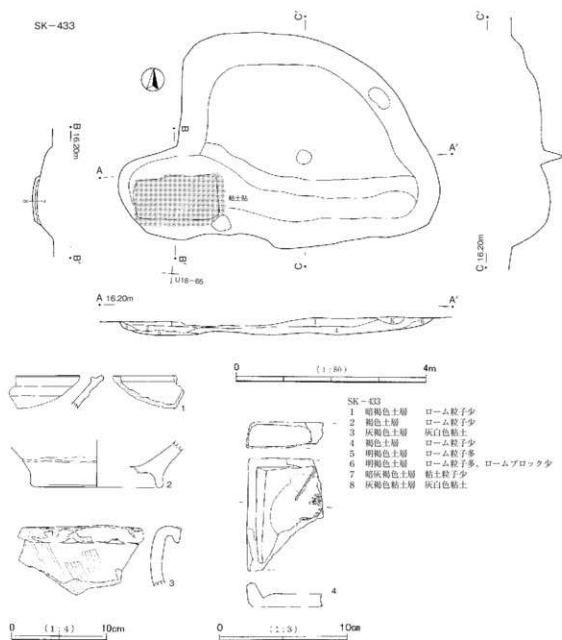
SK-428
1 暗褐色土層 ロームブロック・炭化物少
2 褐色土層 ロームブロック・ローム粒子少
3 褐色土層 ロームブロック・ローム粒子多
4 暗褐色土層 ロームブロック・炭化物多
5 暗褐色土層 ロームブロック多、焼土粒子・炭化物少



SK-431
1 暗褐色土層 ローム粒子多、炭化粒子少
2 褐色土層 ロームブロック・ローム粒子多
3 黄褐色土層 ロームブロック・ローム粒子主体



第110図 掘込区画3 土坑(2)



第111図 掘込区画外の中世土坑

8 近世の概要

富士見遺跡における近世の遺構は、牧関連遺構、道・畑地に関わる遺構、散在する土坑群の3つに大別される。牧関連遺構はかつて所在した高田台牧馬除土手との境界ラインに設けられた5列に及ぶ堀・溝群であり、南端境界溝群と呼称した。道・畑地に関わる遺構は近世後半以降の台地の開発に伴うものであり、台地中央部の南北を大きく区画するように走ることから、それぞれ南部区画溝群または北部区画溝群とわけて扱った。近世の遺物を伴う掘立柱建物もその関連の遺構であろう。一方、土坑群については、遺物が出土していない例が多く中世との峻別は必ずしも明瞭ではない。それゆえ、最初に土坑群を扱い、牧また台地の開発を物語る遺構群についてはその後に別途扱うこととした。何れも高田台牧外縁部における台地開発の歴史を物語るものである。

9 中・近世土坑群

SK-434 (32) SK-048 (第112図、図版31)

北部西側南北溝((32)SD-002)内に位置する長方形土坑である。規模は長径2.4m、短径1.5m、深さ80cmである。溝との新旧関係を含め、覆土の状況は不明である。近世の溝内という条件からすると、いわゆるイモ穴の要素があるが、形状や深さからして墓坑とみること否定できない。近世の所産を含めて報告するが、遡る可能性もあることを付記する。遺物は出土しなかった。

SK-435 (32) SK-043 (第112図、図版31)

北部西側南北溝((32)SD-002)内に位置する円形土坑(断面碗形)で、SK-434の南約2mの距離にある。規模は径3.3m、深さ1mであり、底面に小ピットが伴う。溝との新旧関係を含め、覆土の状況は不明である。近世の土坑の可能性が高いものの断定はできない。遺物は出土しなかった。

SK-436 (25) SK-007 (第112図、図版27)

南部西側溝((27)SD-001)内から横穴状に掘り込まれた方形土坑である。規模は2m四方、深さ1.2mである。溝との位置的關係からそれが機能する段階に掘られたと思われるが、土層断面図から溝の面まで埋め戻されたことが見て取れる。イモ穴の一種であろうか。

SK-437 (11) SX-001 (第112図、図版27)

南部西側南北溝((32)SD-002)と重複する浅い方形土坑である。規模は3.2m四方、深さ20cmである。坑底中央に浅いピットが付属する。

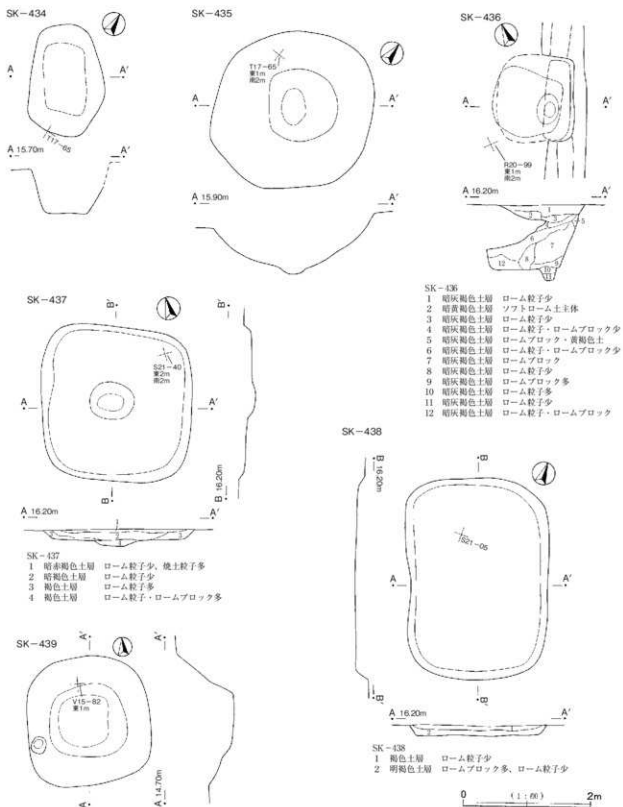
覆土は自然堆積であろう。覆土内に焼土を含み、形態とも併せると炭層の可能性が高いと考えられる。遺物は出土しなかった。

SK-438 (11) SX-002 (第112図、図版27)

南部西側区画内に位置する隅丸の浅い長方形土坑である。規模は長径4.2m、短径3.0m、深さ20cmである。覆土下位にロームブロックを多く含むことから埋め戻した可能性があるが、遺物も出土せずその性格については不明というしかない。なお、近世の内に含めたが遡る時代の可能性もあろう。

SK-439 (26) SK-018 (第112図、図版27)

北側を東西に走る近世溝((32)SD-002)内に掘り込まれた方形土坑である。規模は径2.0m、深さ約1.0mであり、中位に段差を有する。掘込区画端に位置しており、遺物は出土していないが、中世に属する可能性もないではない。溝との整合性から水溜の土坑に比定できようか。



第112図 掘込区画外の中・近世土坑(1)

SK-440 (4) SK-002 (第113・126図、図版27・71)

台地南東端の谷部に面した大きな隅丸方形の土坑であるが、平面形状は凹凸があり、底面は2段かつ一部スロープ状を呈するなど、整った掘形とは言い難い。規模は径4.5m、深さ1.4mである。壁面や底面に無数の鍍らしき痕跡が見られ、調査時の所見では土取りの跡ではないかとする。他にないタイプであり掲載した。

覆土は底面直上に泥水が流入したと思われる黒土層が薄く堆積しているほかは人為的な堆積であり、掘削後程なく埋め戻された結果であろう。

底面から平底の在産焙烙また覆土内から瀬戸・美濃の陶器小塊などが出土しており、幕末の所産であろう。

台地南側谷部からの道 (5) SD-003~005、(10) SD-001・002 (第120図、図版28、第17表)

C地区谷部からD地区台地部へと至る道であり、東西道((5) SD-001・(10) SD-001・002・(38) SD-001とそれに肩口で直交するように交叉する道)と、南北道((5) SD-003・004・005)に分けられる。道の幅は広いところで1m、深さも30cmと明瞭ながら、南北道では台地を少し行った先で、また東西道では平坦面にさしかかる辺りで消えているので、谷部のみ埋没して遺存(約50m)したのであろう。道とした根拠は底面に幅50cm程の踏み締め面があることによるが、南北道中程で中国銭5点(判明皇宗通寶・洪武通寶)が出土している。南北道は南側大部分が未調査であり、僅かに南端部((10) SD-002)を確認したのみである。その状況からしてさらに谷の下に至っていたものと思われる。一方、南北道南側では一旦狭まって消えてしまうが、その続きに相当する道が南部区画溝手前で台地縁に沿うようなかたちで検出されている。間の緩斜面が未調査ながら、本来は一連のものであろう。銭貨以外の遺物、とりわけ近世以降の陶磁器はほかは出土していない点から、中世の道の可能性もあるが、銭貨そのものが調査時に紛失していることもあり、断定に至らなかった。

10 近世区画溝群とその他関連遺構

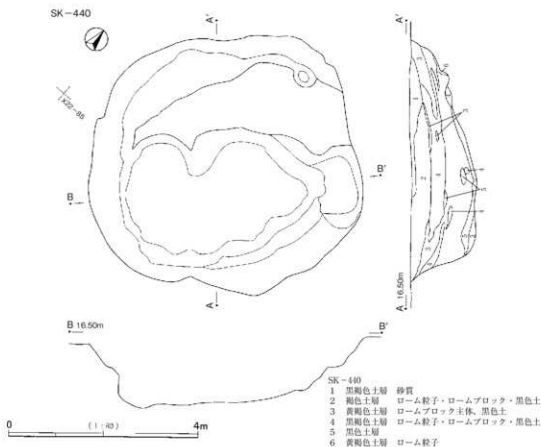
富士見遺跡では南端の台地付け根部を画するように4列の溝が走り、溝底にはシシ穴状の深い土坑や円形ピットが断続ないし近接して連続する。19世紀代の陶磁器が出土しているので、近世後期の所産でかつ富士見遺跡の台地を区切ると同時に動物の侵入に対処したものと思われる。当然そこには守るべき対象があったはずながら、台地上では屋敷地らしき痕跡はなく、縦横に区切る同時期の溝が検出されており、それは現在の耕地割とも矛盾しない。おそらく畑地の開発と同時に溝による区割りがなされ、林地との境界をなすと同時に害獣対策のための土坑列が掘られたのであろう。以下、説明上、南端境界溝群、南部区画溝群、北部区画溝群、その他関連遺構と大きく4分して概説する。

(1) 南端境界溝群(第114図)

遺跡南端は東西から入る浅い谷によって括れるように狭くなっており、そこを締め切るように5条の溝が並列して走っている。溝群の幅は約15m、長さは西側が台地肩部から先が調査範囲外となるため不明ながら、東側については肩部から斜面を下っており、約120mが確認されている。調査年次によって遺構名が一致しないなどの事情もあることから、遺構名ではなく南側から順次1列目～5列目というように呼称して説明する。

1列目溝 (30) SD-001、(35) SD-001、(36) SD-001 (第115・116図、図版28)

溝の平面形状はほぼ直線に伸び、断面形状は葉研ないし箱葉研となる。幅は広いところで2m、狭いと



第113図 掘込区画外の中・近世土坑(2)

ここで1mと一定しないが、深さは0.5mと幅がある。一方、深さは1.0m~1.3mとそれほどの差はない。なお、この堀は西端から90mまでは確認されているが、その東は不明となり、約120m行ったところで同一の堀らしきものが検出されている。確認調査及び未調査区の状態からして並行かつ連続していたとみるべきであろう。また、東端部手前では1列目の位置から北側へ交差するように横切る溝((6)SD-006)がある。その走行をみると、より南側から延びている可能性があり、そうすると1列目とした南側にもう1列存在した可能性もある。しかしこの点は調査範囲外となるため指摘のみに留める。

覆土はロームブロックを含む暗褐色から明褐色土であり、その様相から2列目との間の土手の崩落土によって埋没した可能性があらう(東端部は凹レンズ状の自然堆積)。

遺物は瀬戸・美濃船軸徳利底部片(2点同一個体か)が西端部から出土した。

2列目溝 (6)SD-003、(30)SD-002、(34)SD-001、(35)SD-002、(36)SD-002(第115・116図、図版28・29)

溝の平面形状は一部瘤状を呈する部分もあるが、ほぼ直線に延び、断面形状は底部が多少丸みを帯びる三角形となる。底面に径1.5m程の円形ビット列が連続する。幅は広いところで4m、狭いところで2mと一定しないが、これは上部の遺存状況によるのだろう。深さはビット内では1m前後、溝底で0.7m程である。こども覆土は一旦黒色土~褐色土が瘤状に堆積しており、自然堆積と見られるが、1列目と比較するとロームブロックが少ない点など相違がある。遺物は出土しなかった。

3列目溝 (30)SD-003・004、(31)SD-003・004、(35)SD-003、(36)SD-003(第115・117図、図版27・28)

溝の平面形状は西端部で瘤状を呈するものの、その他は直線状に伸び、断面形状は浅い皿形である。底面には西端部と東端部手前でシシ穴状の土坑列が見られる他は、径1m程の円形ピット列が連続する。幅は1m内外であり、シシ穴状土坑やピット列のほうがむしろ外側に出張る形状である。深さは土層断面図ラインでは約10cm強といたところだが、シシ穴状土坑のように別途記録されたものは別として、ピット列では情報に欠く部分が多い。他の溝底とのレベル差が示すとおり、相対的に溝の掘り込み自体が浅い反面、ピット自体の径は同じ分、出張ることになったと思われる。また、ピット列のみの箇所があるが、これは浅いゆえに痕跡程度のもので記録されなかった可能性が高い。覆土は腐植土混じりのローム粒子よりなり、凹レンズ状をなすなど、自然堆積であろう。遺物は出土しなかった。

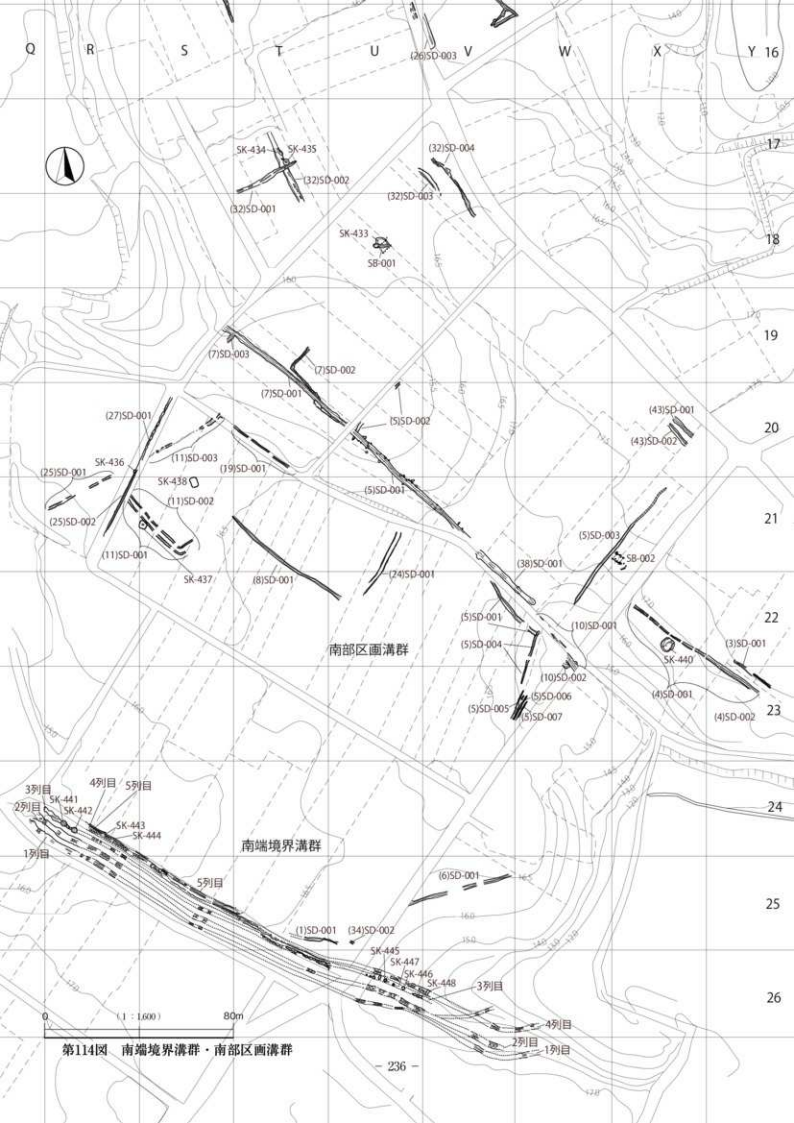
西端部溝内の土坑群は2基(両者の間は約3.5m)であるが、さらに西側に断続的に存在する可能性がある。西側の土坑SK-441は外縁部が楕円形をなす一方、中位から方形に掘り込まれ、断面形状は漏斗状となる。規模は長径2.5m、短径2.3m、深さ2.2mである。覆土の状況は不明で、遺物は出土しなかった。東側の土坑SK-442も平面形状・規模・深さ共にほぼ同じながら、断面形状は箱葉研に近い。遺物は覆土上位から馬の歯が出土した。その出土状況から横位の埋葬であろう。それに伴う覆土の状況は不明である。

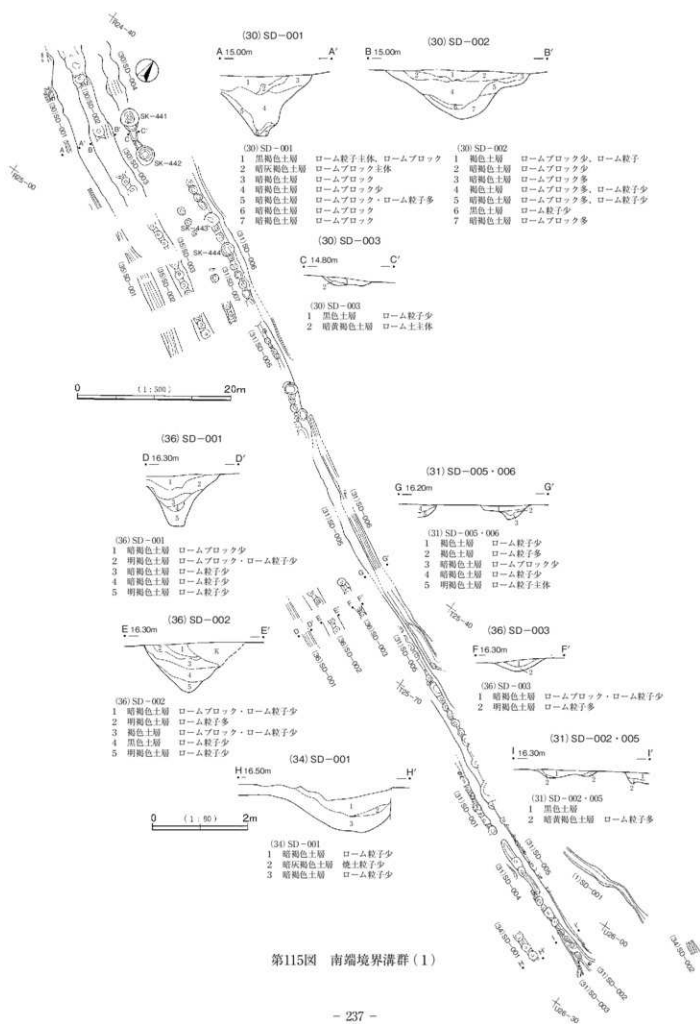
東端寄りの大形土坑群は約4mの間隔で3基連続するが、内容は一様でない。西端の土坑SK-445は底面方形を呈し、規模は径約1.4m、深さ50cmである。覆土は底面の黄褐色土は別として、黒褐色次いで黒色土でほぼ占められるものの、最上層のみ軟質の砂が堆積しており、埋め戻しが行われたものと思われる。新たな溝の掘削に伴うものであろうか。真ん中の土坑はやや歪な円形を呈し、径のわりには深く、最上層から馬の歯らしきもの(調査時の記録)が数点出土した。規模は長径1.1m、短径0.9m、深さ1.4mである。東端の土坑SK-446は楕円形の深いもので、底面の検出までに至らなかった。規模は長径1.6m、短径1.3m、深さ2m以上である。覆土は黒褐色土主体のもので、自然堆積と思われる。以上3基共に馬骨以外に遺物は出土しなかった。

4列目溝 (31)SD-005・007、(40)SD-002(第115~117図、図版27~29)

溝の平面形状はほぼ直線ながら、多少ウエーブしながら走っている。断面形状は中央ないし片側に小溝を伴う箱形である。底面には西端と東端でシシ穴状の土坑が見られるほかは、径1.0m~1.5m程の円形ピット列が連続する。幅は2m~3m、深さはピット内では0.6m~0.9m、溝底で0.5m程である。覆土は下位では黄褐色土、上位で黒色土と変化しており、自然堆積と思われる。遺物は出土しなかった。

溝内の大形土坑は西端(31)SD-007に2基(両者の間は約3m)あり、さらに西側に溝が続く可能性があることから、本来の基数は不明である。西側の土坑SK-443は多少歪な楕円形であり、断面形状は箱葉研状となる。規模は長径1.9m、短径1.7m、深さ1.9mである。覆土の状況は不明で、遺物は出土しなかった。東側の土坑SK-444も同様に多少歪んだ楕円形ながら、中位から方形に掘り込まれ、底面は長方形となる。溝が埋没した後掘られたことが土層断面図の観察からわかっている。規模については長径1.7m、短径1.6m、深さ2.5mであり、断面形状は箱葉研というより箱形に近い。覆土は腐植土主体の自然堆積であるが、中央の土坑最上層から馬の歯数本が出土した。調査の記録によれば頭部を上にして埋葬したのではとす。なお、歯以外の骨は確認できなかった。東端の土坑SK-448は平面が長方形を呈するが、底部は方形に近い形状になろう(水侵出により約2mで調査断念)。規模は長径2.4m、短径1.0m、深さ2m以上である。





(30) SD-001
A 15.00m A'

(30) SD-001
1 黒褐色土層 ローム粒子主体、ロームブロック
2 暗灰褐色土層 ロームブロック主体
3 暗褐色土層 ロームブロック
4 暗褐色土層 ロームブロック少
5 暗褐色土層 ロームブロック・ローム粒子多
6 暗褐色土層 ロームブロック
7 暗褐色土層 ロームブロック

(30) SD-002
B 15.00m B'

(30) SD-002
1 褐色土層 ロームブロック少、ローム粒子
2 暗褐色土層 ロームブロック少
3 暗褐色土層 ロームブロック多
4 褐色土層 ロームブロック多、ローム粒子少
5 暗褐色土層 ロームブロック多、ローム粒子少
6 黒色土層 ローム粒子少
7 暗褐色土層 ロームブロック多

(30) SD-003
C 14.80m C'

(30) SD-003
1 黒色土層 ローム粒子少
2 暗黄褐色土層 ローム土主体

0 (1:500) 20m

(36) SD-001
D 16.30m D'

(36) SD-001
1 暗褐色土層 ロームブロック少
2 暗褐色土層 ロームブロック、ローム粒子少
3 暗褐色土層 ローム粒子少
4 暗褐色土層 ローム粒子少
5 明褐色土層 ローム粒子少

(31) SD-005・006
G 16.20m G'

(31) SD-005・006
1 褐色土層 ローム粒子少
2 褐色土層 ローム粒子少
3 暗褐色土層 ロームブロック少
4 暗褐色土層 ローム粒子少
5 明褐色土層 ローム粒子主体

(36) SD-002
E 16.30m E'

(36) SD-002
1 暗褐色土層 ロームブロック・ローム粒子少
2 暗褐色土層 ローム粒子多
3 褐色土層 ロームブロック・ローム粒子少
4 黒色土層 ローム粒子少
5 明褐色土層 ローム粒子少

(36) SD-003
F 16.30m F'

(36) SD-003
1 暗褐色土層 ロームブロック・ローム粒子少
2 明褐色土層 ローム粒子多

(34) SD-001
H 16.50m H'

(34) SD-001
1 暗褐色土層 ローム粒子少
2 暗灰褐色土層 焼土粒子少
3 暗褐色土層 ローム粒子少

(31) SD-002・005
I 16.30m I'

(31) SD-002・005
1 黒色土層
2 暗黄褐色土層 ローム粒子多

0 (1:80) 2m

第115図 南端境界溝群(1)

覆土は黒色土主体の土であり、遺物は出土しなかった。

5 列目溝 (1)SD-001、(31)SD-006(第115図、図版29・30)

最も内側の溝であり、4列目と近接しながら並列する。溝の平面形状は細長く直線に伸び、断面形状は浅い箱形ながら、片側に小溝が伴う箇所もある。掘り直した結果かもしれない。底面にはピットは見られず、この点は1列目も同様ではあるが、こちらは幅・深さの規模ともに落ちる。幅は凡そ1m内外であり、西側に行くに従い浅くなって、一部は途切れた箇所もある。深さは10cm~30cmである。覆土は下位では黄褐色土、上位で黒色土と変化しており、自然堆積と思われる。遺物は出土しなかった。

(2) 南部区画溝群(第114図)

富士見遺跡南部は北西~南東方向に台地の長軸があるためか、ほぼその方位で南北2本の道路があり、これと直交するように数本の東西道路がある。検出された溝群は現在の道路と一部併走するかその延長にあって、道路との関係が認められない場合でもこの原則に沿っている。つまり、現代の道の基本的な枠組みは近世に求められることが確かめられたといえる。事実、明治10年代の陸軍迅速図でもこれら道路は幅こそ異なれほとんど確認することができる。なお、その性格等は個々の記載でふれたい。

中央部東西大溝 (5)SD-001・002、(7)SD-001~003(第118図、図版30)

台地南部は北西側と東側から入る谷によって、東西が画されるが、北側も小さな谷によってネック部が形成されている。この谷頭部を結ぶように多少湾曲しながら溝が走っている。長さは全体で約200mまで検出したものの、西側では谷への落ち際に留まっており、東側も谷部途中までの調査であることなど、いづれにしてもその両端については明らかにできなかった。幅は1.5m~2.5m、深さは40cm~70cm、断面形状は浅い椀形である。この大溝は、南側台地を地形なりに大きく区分けする意図で掘られたものであろう。なお、溝の北側で鍵の手状に交差する小さな溝((7)SD-002)はより新しい所産で、区画内をさらに南北に細分するものであろうか。

覆土は溝の両側(とりわけ東側)から埋没が進み、浅い窪みとなったところで黒色ないし暗褐色土が流れ込んでいる。

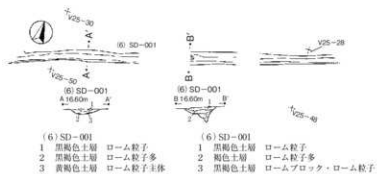
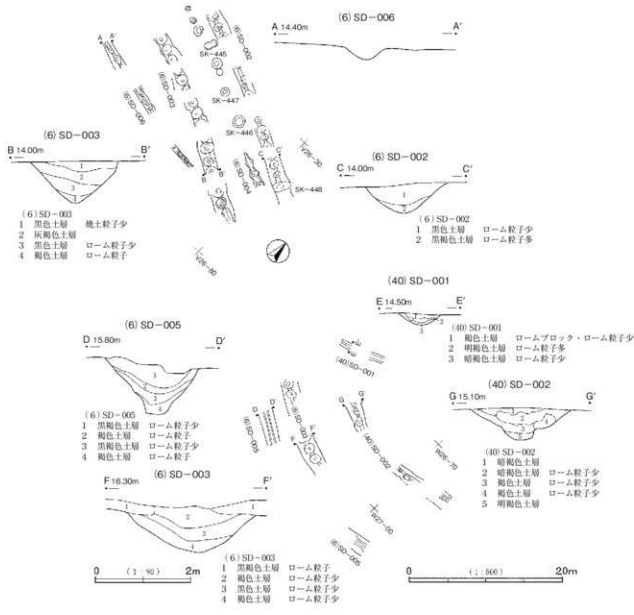
遺物は近世瀬戸・美濃播鉢片が中央部覆土中から出土したのみであった。

南側区画溝群ほか (6)SD-001、(8)SD-001、(11)SD-001~003、(19)SD-001、(24)SD-001、(25)SD-001・002、(27)SD-001(第116・118・119図、図版30)

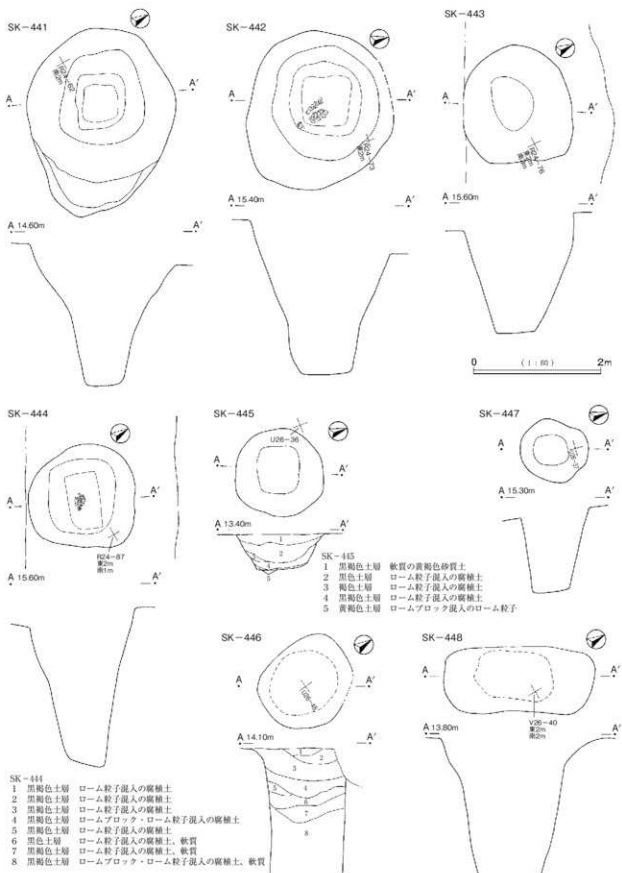
中央部東西大溝の南約60m行ったところで並走する溝((8)SD-001)、またその南西にスライドするように走る溝((11)SD-001・SD-002)、さらにその東西を画する2条の溝(東:(24)SD-001、西:(25)SD-002・(27)SD-001)を一括した。(8)SD-001は幅(1.0m~1.5m)に比して浅い溝(深さ10cm足らず)であり、迅速図では該当する箇所に道が表示されている。踏み締め面は記録されていないが、道を兼ねた畑の境界溝と見てよく、本来は中央部東西大溝と同じ長さになろう。(24)SD-001は途中で二分する境界溝、(11)SD-001・SD-002は2条一組をなすもので、同種のものであろうか。(27)SD-001は幅1mに満たない浅い溝であり、前記の迅速図ではこの溝の西側廻りが道となっていることから、道路際に掘られた境界溝と思われる。北側底面には土坑状の掘り込みが見られる。これらは中央部東西大溝と一緒に南側台地北側寄りの高まりを囲むように巡っており、内部の畑地を区画するものであろう。

なお、(27)SD-001からは19世紀前半頃の在産焙烙片が出土した(非掲載)。

この他に、この区画内現東西道路際に並行して走る溝((19)SD-001)については、道路そのものが明



第116図 南端境界溝群(2)



第117図 南端境界溝内土坑

治期以降だいに南に曲げられているので、近代の所産といえる。

また、畑の区画を斜めに交差するように西側谷部から延びる細い溝（(6)SD-001、(25)SD-001）もあるがその性格等は不明である。

北側溝群 (3)SD-001、(4)SD-001・002、(39)SD-001(第120・121・126図、図版31・71)

中央部東西大溝の東端から南側へ25mほどスライドするようにその延長上に延びる溝である。両者に直接的な繋がりはなく、C地区南東の斜面肩部を巡るものといえる。幅は1m～2m、深さは30cm～40cmであり、北側台地上の畑地を区画する溝ないしは道であろう。溝内からは遺物が多く出土している。

第126図5は瀬戸・美濃灯明皿であるが、この他に瀬戸・美濃磁器染付茶碗・皿片、同片口、在地産皿など19世紀前半～幕末期の陶磁器・土器が見られる（非掲載）。なお(39)SD-001、(4)SD-002はその末端で並列するようにはしる小溝である。

大室～船戸間を結ぶ道際の溝群 (32)SD-003・SD-004、(43)SD-001・002(第120・122・126図、図版31・71)

富士見遺跡と駒形遺跡の境界となる市道は迅速図に見える古くからの主要道（大室～船戸間を結ぶ道）であり、この道の西側に沿って2条の溝が検出されている。検出箇所はD地区とC地区に隣接した東西道路の交差点付近であり、間が不明なのはその間が未調査範囲となっているためである。本来は一繋がり（の溝と見てよいかと思われる。南北それぞれ道路を越えたところで検出されていないことからして、その枠内に収まっているのであろう。北部の溝は平面また断面共に不規則で浅く、南部の溝は整っているが、同様に浅い。あるいは、北寄りにこの区画を南北に分ける細い道を境に形状が異なるのであろうか。いずれにせよこれも区画溝の一種であろう。

南部の溝から19世紀代の焙烙口縁～底部片が出土している。

(3)北側区画溝群(第121図)

富士見台北部は北北西に台地の長軸があって、その東側寄りに1本の幹線道路が縦断する。検出された溝群はこの軸線に沿って台地中央部を約100mの幅で区画し、一部にそれと対応するような東西溝もある。しかし、この溝ラインと整合する道は少なくとも迅速図では認められない。あたかも中世の掘込溝全体を囲むように存在するなど、比較的古い区画と見てよいかもしれない。台地北部は西側縁に沿って高く、東の駒形遺跡側が一段低い方形のテラス状をなしており、近世にはここが耕地として利用され、そのための区画溝の可能性が高い。なお、この区画やや北側を東西に横断する溝（(26)SD-002）も見られることから、さらに小区画も存在したのだろう。

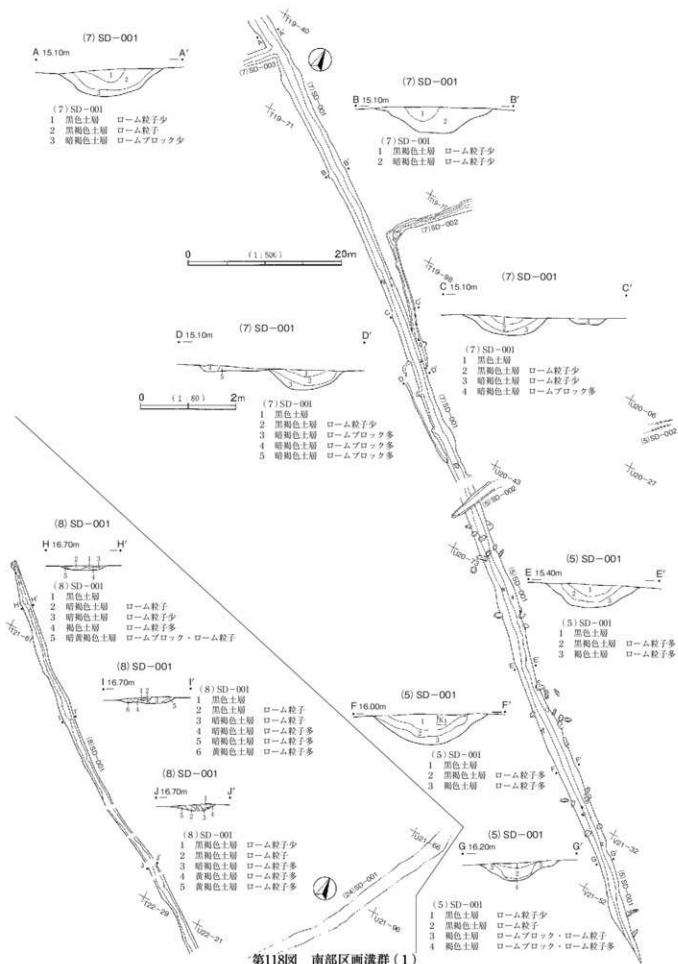
西側南北溝 (32)SD-002、(47)SD-001(第122・126図、図版31・71)

台地南東の窪地西側を縦断するように区画する溝である。中央部が不明なのはそこが確認から外れたため、本来は一繋がり（の溝と考えられる。北側は鍵の手形状に東へ曲がっており、ここも途中で途切れたようになっているが、同様の理由から東側南北溝へ繋がっていたと思われる。幅は北側で1m、南側で2mと相違があるものの、共に浅く、覆土も類似する。なお、北側については掘り直しがされている。

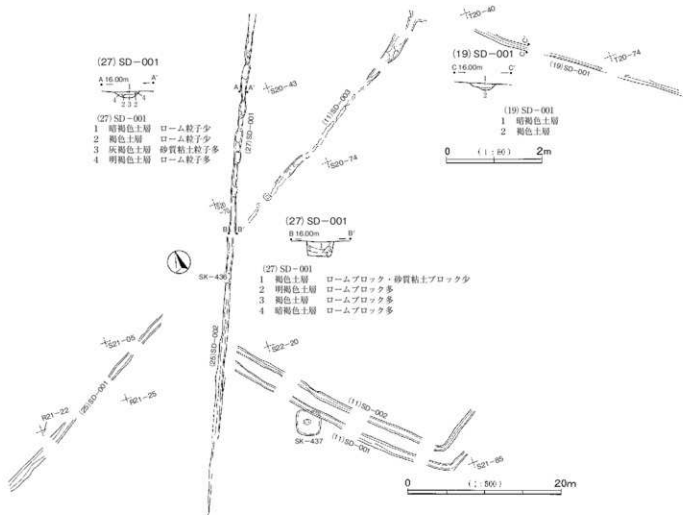
遺物は19世紀代の磁器染付蓋片が出土している。

東側南北溝 (25)SD-001、(49)SD-001(第122図、図版31)

台地南東の窪地東側を縦断するように区画する溝である。北側や南側延長部は未調査範囲に当たっており、さらに延びている可能性が高いが、指摘するに留めざるを得ない。幅は1m～2mと不定で、間に土



第118図 南部区画溝群(1)



第119図 南部区画溝群(2)

坑やピットを有し、深さも概して浅いといえ区々である。なお、底面近くで一部に踏み締め面が見られるので、初期には道として使われたこともあったのだろう。

遺物は19世紀代の瀬戸・美濃磁器染付片2点が出土している。

中央東西溝 (26) SD-002 (第122・126図、図版71)

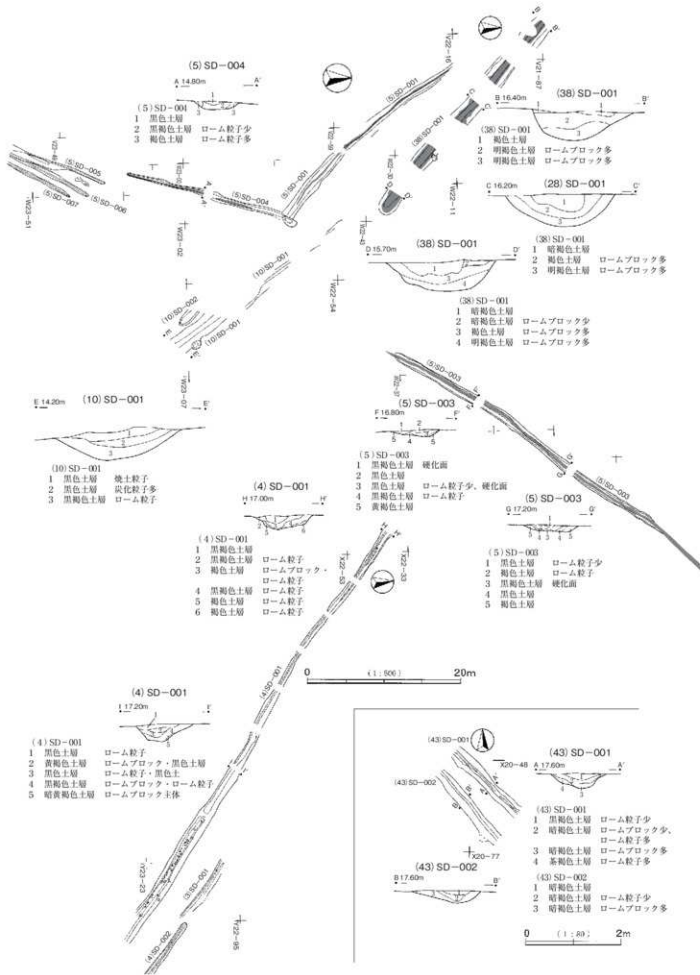
約100m四方の区画内北側寄りをやや斜めに横断する溝である。東側南北溝((26) SD-001)から始まり、何度か湾曲を繰り返しながら中世の掘込区画1の北側縁辺に続くと思われるが、西側南北溝((47) SD-001)まで至るかどうかはわからない。幅は1m弱、深さは場所によって違いがあるものの、深いところで20数cm、西端に行くに従い浅くなる。

遺物は瀬戸・美濃水堯片、備前密副部片、瀬戸・美濃染付茶碗片、在産焙烙片であり、19世紀代の製品が主である。なお、溝内に深い隅丸方形土坑SK-439が伴う。規模は約2m四方、深さは約1mである。多少漏斗状の断面を有し、その深さから水溜の機能を備えた土坑であろうか。

北部のその他の溝 (第114・122図、図版31)

(32) SD-001 西側南北溝と重複する溝であるが、新旧関係は不明である。幅約2mの浅い溝であり、東端部が途切れたようになっているので、富士見台地の北部と南部を区切るように一時的に設けられた溝であろう。

(42) SD-001 台地北端近くで地形に沿って設けられた溝であり、整った掘形(塊形)と一定の幅(約2m弱)また深さ(約30cm)を有する。さらに北側へ延びると思われるが、調査状況からして40m以上にはなり



第120図 南部区画溝群(3)・北部区画溝群(1)

得ないであろう。

(23) SD-001 現道下から見つかった溝であり、断面は半円錐形となる点に特徴がある。(49) SD-002も同様で、これらは現在の道路の枠組みが出来上がる前の所産であろうが、断片的な検出であり、その性格等は不明と言わざるを得ない。

(39) SD-001 富士見遺跡南北縦貫道下から見いだされた溝である。東側が直に掘り込まれており、側溝とみるべきであろうか。

(26) SD-003 同じく縦貫道東脇から検出された溝であり、およそ25m(以上)道と並行するも、幅が2m近くある以外は詳細不明である。中世の遺構を壊していることや、現道との関係からして近代の溝であろうか(第114図)。

(26) SD-006・007 北部東側南北溝(26) SD-001)から西側へ延びた溝であり、西側へ行くほど浅くなっているのも本来はさらに続いていたものと思われる。(26) SD-002と同様、東西を区画する目的で掘られたものであろう。

(4) その他関連遺構

SB-001 (37) SB-001(第123図)

遺跡中央部に当たるU18-55~65にかけて検出された。中世の粘土貼土坑らしきSK-433と重複し、粘土貼の一部を壊していることからより新しい。1間×2間の掘立柱建物であり、東西約4.3m、南北約3.1mの規模である。柱穴の掘形は規格のかつ整っており、深さも0.8m~1mと揃っているなど、南側のSB-002とは明らかな相違があるが、その性格については不明としか言いようがない。また、柱穴から遺物も出土しなかった。

SB-002 (5) SH-001(第123図、図版71)

遺跡南東に当たるX21-80~90にかけて検出された掘立柱建物である。ピットの径また深さが様々であり、調査時の所見も踏まえ、最も妥当性のある組み合わせを提示した。1間×2間の掘立柱建物であり、東西約3.5m、南北約3mの規模である。南側中央の柱穴から地鎮に伴うと思われるカワラケが約3個体分出土した。柱穴の径や深さ、またその不揃いなこと、加えて内部に焼土ブロックよりなる跡らしき箇所が4か所認められるなど、出作小屋ないし山小屋の類であろうか。

カワラケは柱穴覆土上位から出土した。1はほぼ完形、2は約2/3個体、3は部分的な接合ながら1個体になろうか。共に底部は回転系切り無調整であり、薄手の作りである。18世紀代以降のものであろう。

11 遺構外出土の中・近世遺物

(1) 中世陶磁器・土器(第124・126図、図版66~70、第13表)

グリッド・トレンチ及び近世遺構から出土した中世遺物のうち、実測可能なものは図化した。それ以外は第13表に記載した。以下挿図掲載分を一括して概説する。

1~23は陶磁器・土器である。1は古瀬戸鉄軸軸小皿片である。2は古瀬戸灰軸平碗口縁部片である。3は古瀬戸灰軸袴腰形香炉約1/4個体を復元・図示した。4は古瀬戸鉄軸茶入口縁部片である。5は丹波播鉢口縁部片である。6は古瀬戸鉄軸折縁中皿底部片である。7~9は常滑片口口縁部片である。10・11は常滑片口底部片である。13は常滑甕胴部片である。14は在地産播鉢約1/5個体を復元・図示した。14~17は在地産播鉢口縁部片であり、17は同一個体かと思われる底部片が同じグリッドから出土している。18は在地産播鉢体部片である。19・20は在地産播鉢底部近くの破片である。21~23は在地産内耳土鍋口縁



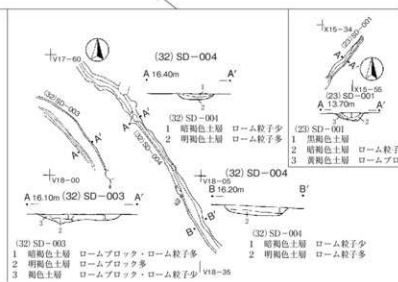
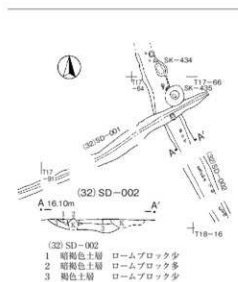
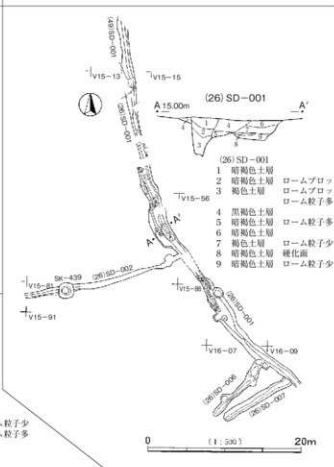
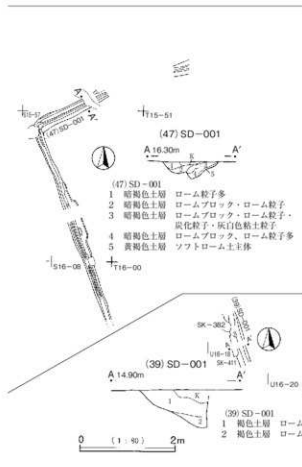
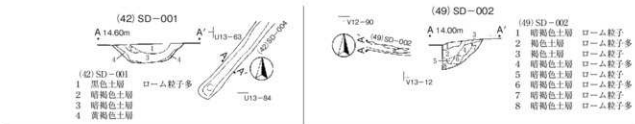
第121図 北部区画溝群(2)

部片である。

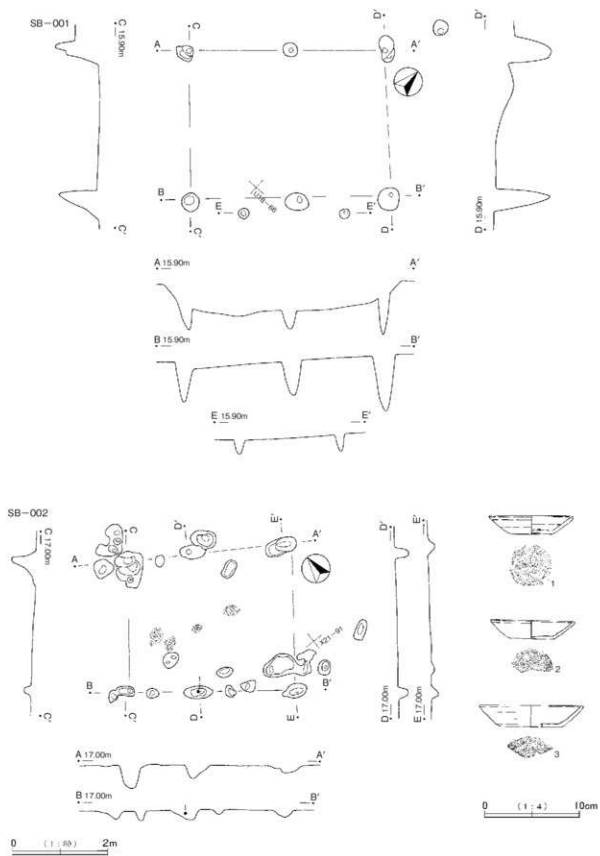
(2) 近世陶磁器・土器(第126図、図版71、第14表)

今回報告する地区内で出土した近世遺物のうち、遺存度や種類等を考慮し図化した。それ以外は第14表に記載した。以下挿図掲載分を一括して概説する。なお、掘立柱建物SB-002柱穴から出土した3点のカワラケについては遺構との関係が明瞭なことから個々の説明は該当する項目で扱った。

1~19は陶磁器・土器である。1は瀬戸・美濃陶器小碗である。約1/2を復元・図示した。胎土は多少磁器質で、内外面高台内面を除き透明釉を施す。2は肥前磁器染付蓋約1/3を復元・図示した。3は瀬戸・美濃磁器筒形染付碗約1/2強を復元・図示した。見込みに五弁花文、外面に菊花文と格子目文を配する。胎土は多少陶器質である。4は瀬戸・美濃磁器染付碗約1/2弱を復元・図示した。外面に草花



第122図 北部区画溝群 (3)



第123圖 近世掘立柱建物

文を配する。5は瀬戸・美濃陶器灯皿約1/2個体を復元・図示した。胎土は多少磁器質を呈し、内面は透明釉を施す。内面に2点ピン跡が遺存し、口縁外面にはススが附着する。6は志戸呂鉄軸灯皿ほぼ完形品である。7は瀬戸・美濃灰軸香炉底部約1/2弱を復元・図示した。8は瀬戸・美濃胎軸德利頸部～肩部約1/2弱を復元・図示した。肩部に2条の沈線を巡らす。9は備前小壺かと思われる胴部片である。13は産地不明土瓶注口部である。備前のような胎土に透明釉を施す。下半部にススが厚く附着する。いわゆる直火土瓶であろうか。11は罫・明石系播鉢口縁部片である。播目間は埋めておらず、また先端を揃えるナデ消調整もない。12は備前系播鉢体部～底部大破片である。赤褐色を呈し、胎土に礫を含む。14はカワラケ約1/2を復元・図示した。15～18は共に在地産焙烙片ながら、18は須恵質である。なお、15は角張った縦耳、18は補修孔らしき一对の穿孔が見られる。20は在地産台付受付灯皿で、ほぼ完形品である。底部内面を除き透明釉が見られる。これら近世陶磁器等の出土遺構と推定年代等は第14表に示した。

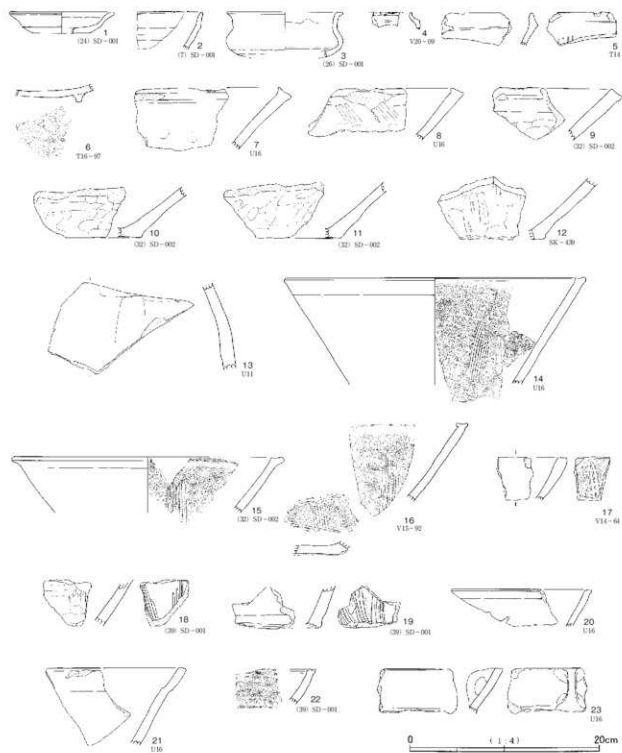
(3) 土製品・石製品・銭貨(第125図、図版70、第15～17表)

1～4は土錘である。1は自然軸がかかった大形の管状土錘であり、胎土に長石礫を多く含む。2は棗形を呈し、胎土に細かい長石粒を含む。3は外面に銷軸のかかった棗形の土錘である。4は胎土に砂を多く含む。5は瀬戸・美濃銷軸播鉢片を円盤状に加工したもので、縁の整形は雑である。6は土製のおはじきである。2～4はS13において出土しており、漁網の廃棄に伴うものであろうか。また、6は(25)SD-002からの出土である。

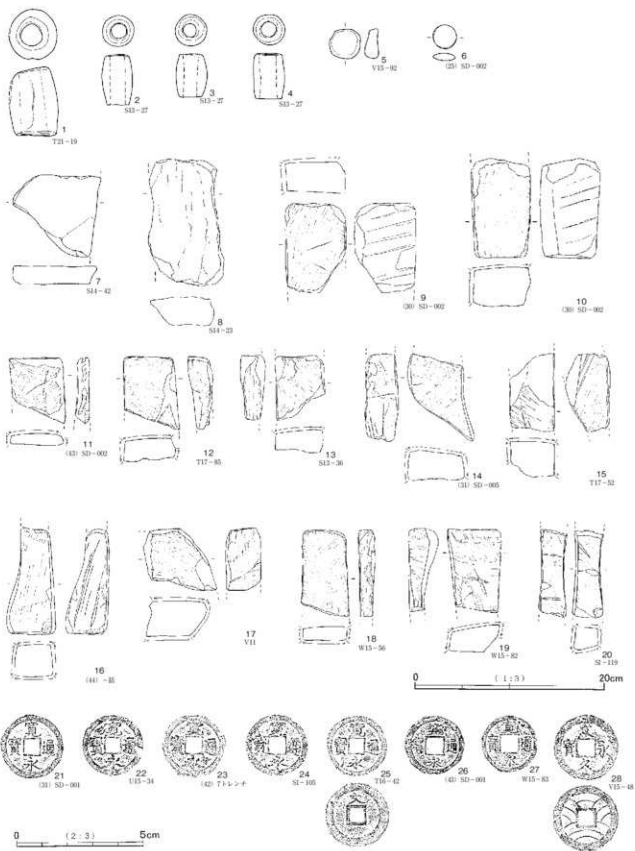
7は緑色片岩、8は雲母片岩の板破片である。2点共に遺跡北西斜面にかかるS14から出土しており、台地斜面寄りに営まれた墓地の存在を示唆する。

9～20は砥石である。9・10は灰白色の凝灰岩砥石(径0.5mm～2.0mmの褐色鉱物含む)であり、折損による廃棄と思われる。共に(30)SD-002の出土である。11～13は多少赤みを帯びた灰白色凝灰岩(褐色鉱物は微量)の砥石であり、薄くなるまで使い抜かれている(11が顕著)。これもその結果として折損による廃棄と思われる。11は溝、12・13はトレンチ出土である。14は淡緑灰色の緻密な凝灰岩砥石であり、主に側縁を使い抜いている。溝出土である。15・16は9・10と類似する石質ながら色調は11～13の間である。15は明瞭な使用面が見られない一方、16は4面共に使用している。17は細粒の砂岩砥石であり、遡る時代の可能性もある。18は黒色粘板岩の砥石であり、一面のみ使用している。19は多少青みを帯びた灰白色の砥石であり、一面はまったく未使用ながら両側縁は僅かながら磨り減っている。20は4面共に均等に使い込まれた砥石であり、石質は15・16と類似し、黒色の鉱物が混じっている。縄文時代の住居出土であるが、重複する溝に伴う遺物と思われる。なお、詳細は第16表に記載した。

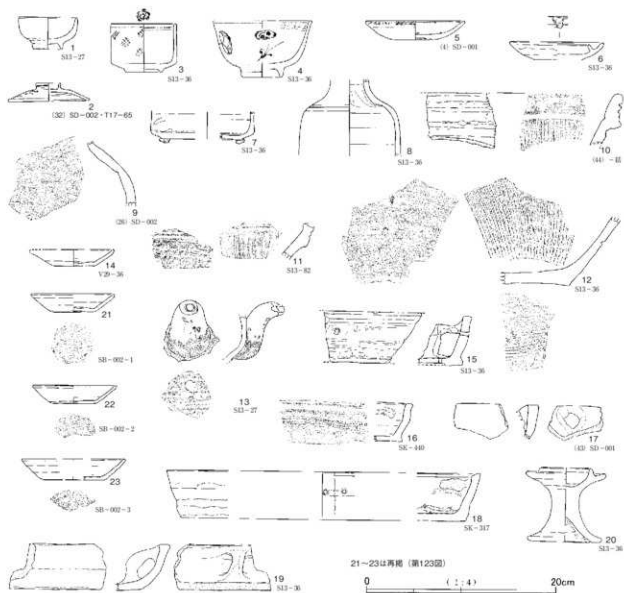
21～28は近世銭貨である。21～24は古寛永、25は文銭、26・27は新寛永、28は文久波銭にそれぞれ該当する。1点(古墳時代住居出土の24は混入か)を除いて溝、トレンチ、グリッド出土である。



第124図 遺構外出土中世陶器



第125図 中・近世遺物(土鍾・板碑・砥石・銭貨)



第126図 近世陶磁器・土器

第13表 中世陶磁器・土器一覽

中世遺跡出土

●古瀬戸類年は瀬戸良株、常滑瀬戸は中野町購入に変わったが、此處古瀬戸は小瀬戸が行った。

単位：cm

番号	時代	国産	番号	出土遺構	遺跡番号	出土地区	産地	器種	時期	遺存度	出量 出戻り数は決定)		検査	色調	胎土	備考
											口徑	底径				
1	89	67	1	SK-302 (42)SK-023	1	瀬田区雁1	常滑	壺	常滑a型式	口縁部片			灰褐色	灰褐色	長行寄瓶人	
2	89	67	2	SK-302 (42)SK-023	1	瀬田区雁1	常滑	平口	底部片	底部片			外灰褐色、内面灰褐色	灰褐色	長行寄瓶人	
3	89	68	3	SK-303 (42)SK-023	1	瀬田区雁1	在産	内注し壺	底部片	口縁部片	(27分)		外灰褐色、内面黄褐色	明赤褐色	3点破片、スクリヤ人、外瀬戸タ口調整、内瀬戸タ調整	
4	89	66	4	SK-303 (42)SK-020	1	瀬田区雁1	瀬田良株	瀬田良株壺	底部片	底部片			外灰褐色、内面黄褐色	オリーブ灰色	SK-000期上月土層片、長行寄瓶人、瀬田良株	
5	89	67	5	SK-303 (42)SK-020	1	瀬田区雁1	在産	壺	底部片	口縁部片 1/4	(22.8)		オリーブ明褐色	明赤褐色	3点破片、外瀬戸ス付	
6	89	68	6	SK-303 (42)SK-020	1	瀬田区雁1	在産	内注し壺	底部片	底部片			黄褐色	明赤褐色	瀬田ス付者	
7	89	68	7	SK-303 (42)SK-020	1	瀬田区雁1	在産	内注し壺	底部片	底部片 1/5	(1.0)		黄褐色	明赤褐色	外瀬田ス付者	
8	89	67	8	SK-303 (42)SK-020	1	瀬田区雁1	在産	内注し壺	底部片	口縁部片	(1.8)		灰緑 浅黄褐色	灰色	内瀬田ノ子ノ瓶片	
9	90	66	1	SK-304 (42)SK-028	1	瀬田区雁1 2瀬田1	平瀬	平瀬	口縁部片	口縁部片	(3.57)		灰緑 浅黄褐色	2オリーブ灰色	2点破片	
10	91	66	1	SK-304 (42)SK-028	1-4	瀬田区雁1 2瀬田1	瀬田良株	瀬田良株壺	口縁部片	口縁部片			黄褐色	明赤褐色	瀬田良株	
11	92	66	1	SK-307 (42)SK-027	1	瀬田区雁1	在産	内注し壺	底部片	口縁部片			黄褐色	明赤褐色	瀬田ス付者	
12	92	66	2	SK-307 (42)SK-027	1	瀬田区雁1	在産	内注し壺	底部片	底部片			黄褐色	明赤褐色	瀬田ス付者	
13	92	68	4	SK-307 (42)SK-027	1	瀬田区雁1	在産	内注し壺	底部片	底部片	(2.0)		黄褐色	明赤褐色	瀬田ス付者	
14	92	68	5	SK-307 (42)SK-027	1	瀬田区雁1	在産	内注し壺	底部片	底部片	(2.0)		黄褐色	明赤褐色	瀬田ス付者	
15	92	68	5	SK-307 (42)SK-027	1	瀬田区雁1	在産	内注し壺	底部片	底部片	(2.0)		黄褐色	明赤褐色	瀬田ス付者	
16	92	67	6	SK-307 (42)SK-027	1	瀬田区雁1	在産	壺	口縁部片	口縁部片			明赤褐色	明赤褐色	3点破片	
17	92	67	7	SK-307 (42)SK-027	1	瀬田区雁1	在産	壺	口縁部片	口縁部片			明赤褐色	明赤褐色	3点破片	
18	92	8	SK-307 (42)SK-027	1	瀬田区雁1	在産	壺	壺	口縁部片	口縁部片			外灰褐色、内面赤褐色	黄褐色	2点破片	
19	92	68	9	SK-307 (42)SK-027	1	瀬田区雁1	在産	壺	口縁部片	口縁部片			黄褐色	黄褐色	1.6点破片、8点 (32)SK-002、3点T17	
20	92	68	10	SK-307 (42)SK-027	1	瀬田区雁1	在産	壺	底部片	底部片			黄褐色	黄褐色	1.6点破片、8点 (32)SK-002、3点T17	
21	93	67	1	SK-309 (42)SK-026	1	瀬田区雁1	在産	壺	底部片	底部片			外灰褐色、内面灰褐色	灰褐色	瀬田ス付者	
22	93	66	2	SK-310 (42)SK-031	1	瀬田区雁1	在産	壺	底部片	底部片			外灰褐色、内面赤褐色	明赤褐色	瀬田ス付者	
23	93	66	3	SK-310 (42)SK-031	1	瀬田区雁1	在産	瀬田良株	口縁部片	口縁部片	(21.5)		オリーブ明褐色	明赤褐色	瀬田ス付者	
24	93	66	4	SK-310 (42)SK-031	1	瀬田区雁1 2瀬田1	瀬田良株	瀬田良株壺	口縁部片	口縁部片			外灰褐色、内面明赤褐色	灰褐色	瀬田良株	
25	93	66	5	SK-310 (42)SK-031	1	瀬田区雁1 2瀬田1	瀬田良株	瀬田良株壺	口縁部片	口縁部片			外灰褐色、内面明赤褐色	灰褐色	瀬田良株	
26	94	66	1	SK-310 (42)SK-021	1	瀬田区雁1	在産	平フツツ	底部片	底部片			明赤褐色	明赤褐色	2点同一器体	
27	93	68	1	SK-311 (42)SK-029	1	瀬田区雁1	在産	内注し壺	底部片	底部片			外灰褐色、内面明赤褐色	灰褐色	瀬田良株	
28	93	68	2	SK-311 (42)SK-029	1	瀬田区雁1	在産	内注し壺	底部片	底部片			外灰褐色、内面明赤褐色	灰褐色	瀬田良株	
29	93	67	8	SK-311 (42)SK-029	1	瀬田区雁1	在産	内注し壺	底部片	底部片			外灰褐色、内面明赤褐色	灰褐色	瀬田良株	
30	94	66	1	SK-312 (42)SK-032	1	瀬田区雁1	在産	壺	口縁部片	口縁部片			黄褐色	黄褐色	瀬田良株	
31	95	66	1	SK-314 (42)SK-004	1	瀬田区雁1 2瀬田1	瀬田良株	瀬田良株壺	口縁部片	口縁部片	(4.2)		灰緑 緑褐色	灰褐色	瀬田良株	
32	95	66	2	SK-314 (42)SK-004	1	瀬田区雁1 2瀬田1	瀬田良株	瀬田良株壺	口縁部片	口縁部片			灰緑 緑褐色	灰褐色	瀬田良株	
33	95	66	3	SK-314 (42)SK-004	1	瀬田区雁1 2瀬田1	瀬田良株	瀬田良株壺	口縁部片	口縁部片			灰緑 緑褐色	灰褐色	瀬田良株	
34	95	67	4	SK-314 (42)SK-004	1	瀬田区雁1 2瀬田1	瀬田良株	瀬田良株壺	口縁部片	口縁部片			灰緑 緑褐色	灰褐色	瀬田良株	
35	95	67	5	SK-314 (42)SK-004	1	瀬田区雁1 2瀬田1	瀬田良株	瀬田良株壺	口縁部片	口縁部片			灰緑 緑褐色	灰褐色	瀬田良株	
36	95	70	6	SK-314 (42)SK-004	1	瀬田区雁1	在産	壺	口縁部片	口縁部片	(2.2)		明赤褐色	明赤褐色	5点破片、1点 (42)SK-006	
37	95	69	7	SK-314 (42)SK-004	1	瀬田区雁1	在産	壺	口縁部片	口縁部片	(2.2)		明赤褐色	明赤褐色	5点破片、1点 (42)SK-006	

番号	種類	回数	番号	出上番號	出上地区	産地	時期	量行度	品質 (品質行例は規定)	船名	色調	粒上	備考
38	95	68	SK-214 (42 SK-004)	1	那志区横1	在産産	内海上瀬	体部片	白律	風津	黄褐色	黄褐色	内海から産出した穿孔孔有り
39	95	69	SK-214 (42 SK-004)	1	那志区横1	在産産	内海上瀬	後腹面片	(31A)		黄褐色	4点接合	
40	95	70	SK-214 (42 SK-004)	1	那志区横1	在産産	内海上瀬	体部片			黄褐色		
41	95	71	SK-214 (42 SK-004)	1	那志区横1	在産産	内海上瀬	体部一風部片			黄褐色		
42	95	72	SK-215 (42 SK-000)	1	那志区横1	在産産	内海上瀬	体部片			黄褐色		
43	95	73	SK-215 (42 SK-000)	1	那志区横1	在産産	内海上瀬	後腹面片	(35.5)		黄褐色	SK-020同型片と同じ一體体	
44	95	69	SK-215 (42 SK-000)	1	那志区横1	在産産	内海上瀬	後腹面片			黄褐色	同型片と同じ一體体	
45	95	69	SK-215 (42 SK-000)	1	那志区横1	在産産	内海上瀬	後腹面片			黄褐色		
46	95	69	SK-215 (42 SK-000)	1	那志区横1	在産産	内海上瀬	後腹面片			黄褐色	同型片と同じ一體体	
47	95	66	SK-215 (42 SK-001)	1	那志区横1	在産産	内海上瀬	後腹面片			黄褐色	同型片と同じ一體体	
48	95	68	SK-215 (42 SK-001)	1	那志区横1	在産産	内海上瀬	後腹面片			黄褐色	同型片と同じ一體体	
49	95	69	SK-215 (42 SK-001)	1	那志区横1	在産産	内海上瀬	後腹面片			黄褐色	同型片と同じ一體体	
50	95	66	SK-217 (42 SK-003A)	1	那志区横1	在産産	内海上瀬	後腹面片			黄褐色	同型片と同じ一體体	
51	98	66	SK-218 (42 SK-012)	2	那志区横1	在産産	内海上瀬	後腹面片			黄褐色	同型片と同じ一體体	
52	100	69	SK-320 (32 SK-000)	1	那志区横1	在産産	内海上瀬	後腹面片	(60.2)		黄褐色	同型片と同じ一體体	
53	100	69	SK-320 (32 SK-000)	1	那志区横1	在産産	内海上瀬	後腹面片			黄褐色	同型片と同じ一體体	
54	100	69	SK-325 (42 SK-013)	1	那志区横1	在産産	内海上瀬	後腹面片	(21.0)		黄褐色	同型片と同じ一體体	
55	100	69	SK-327 (42 SK-013)	1	那志区横1	在産産	内海上瀬	後腹面片			黄褐色	同型片と同じ一體体	
56	101	66	SK-361 (42 SK-021)	1	那志区横1	在産産	内海上瀬	後腹面片			黄褐色	同型片と同じ一體体	
57	103	68	SK-377 (26 SK-019)	6	那志区横2	在産産	内海上瀬	後腹面片			黄褐色	同型片と同じ一體体	
58	104	66	SK-380 (26 SK-006)	1	那志区横2	在産産	内海上瀬	後腹面片			黄褐色	同型片と同じ一體体	
59	104	66	SK-380 (26 SK-006)	1	那志区横2	在産産	内海上瀬	後腹面片			黄褐色	同型片と同じ一體体	
60	104	69	SK-380 (26 SK-006)	1	那志区横2	在産産	内海上瀬	後腹面片	26.9		黄褐色	同型片と同じ一體体	
61	104	69	SK-380 (26 SK-006)	1	那志区横2	在産産	内海上瀬	後腹面片			黄褐色	同型片と同じ一體体	
62	104	69	SK-380 (26 SK-006)	1	那志区横2	在産産	内海上瀬	後腹面片			黄褐色	同型片と同じ一體体	
63	95	66	SK-390 (26 SK-006)	1	那志区横2	在産産	内海上瀬	後腹面片			黄褐色	同型片と同じ一體体	
64	106	69	SK-399 (26 SK-029)	1	那志区横2	在産産	内海上瀬	後腹面片			黄褐色	同型片と同じ一體体	
65	107	69	SK-393 (26 SK-007)	2	那志区横2	在産産	内海上瀬	後腹面片			黄褐色	同型片と同じ一體体	
66	107	69	SK-398 (26 SK-028)	1	那志区横2	在産産	内海上瀬	後腹面片			黄褐色	同型片と同じ一體体	
67	107	66	SK-400 (26 SK-024)	9	那志区横2	在産産	内海上瀬	後腹面片			黄褐色	同型片と同じ一體体	
68	108	66	SK-404 (26 SK-030)	1	那志区横2	在産産	内海上瀬	後腹面片			黄褐色	同型片と同じ一體体	
69	108	66	SK-404 (26 SK-030)	2	那志区横2	在産産	内海上瀬	後腹面片			黄褐色	同型片と同じ一體体	
70	108	66	SK-407 (26 SK-035)	2	那志区横2	在産産	内海上瀬	後腹面片			黄褐色	同型片と同じ一體体	
71	111	66	SK-423 (27 SK-002)	1	U18-55	在産産	内海上瀬	後腹面片			黄褐色	同型片と同じ一體体	
72	111	67	SK-433 (27 SK-001)	1	U18-55	在産産	内海上瀬	後腹面片			黄褐色	同型片と同じ一體体	
73	111	67	SK-433 (27 SK-002)	1	U18-55	在産産	内海上瀬	後腹面片			黄褐色	同型片と同じ一體体	
74	124	66	SK-433 (27 SK-002)	1	U18-55	在産産	内海上瀬	後腹面片			黄褐色	同型片と同じ一體体	
75	124	66	SK-433 (27 SK-002)	1	U18-55	在産産	内海上瀬	後腹面片			黄褐色	同型片と同じ一體体	
76	124	66	SK-521-001	5	那志区横1	在産産	内海上瀬	後腹面片	(12.1)		黄褐色	同型片と同じ一體体	

第14表 近世陶磁器・土器一覽(図版71)

番号	種類	出土遺構	遺物番号	産地	器種	時期	遺存度	数量(原産地別は要)	重量	色澤	胎土	備考
1	123	1	SH-002	(5) S18001-2	コワタテ	不明	ほぼ全部	白片 灰片 8.7 4.3 1.7	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
2	123	2	SH-002	(5) S18001-2	コワタテ	6-9	ほぼ全部	8.85 4.5 1.9	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
3	123	3	SH-002	(5) S18001-2	コワタテ	6-9	ほぼ全部	10.7 6.3 2.3	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
4	126	1	SH-002	(5) S18001-2	コワタテ	6-9	ほぼ全部	5.9 3.1 3.4	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
5	126	2	SH-002	(5) S18001-2	コワタテ	6-9	ほぼ全部	5.0 3.1 3.4	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
6	126	3	SH-002	(5) S18001-2	コワタテ	6-9	ほぼ全部	6.5 3.7 3.9	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
7	126	4	SH-002	(5) S18001-2	コワタテ	6-9	ほぼ全部	10.3 6.3 2.1	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
8	126	5	SH-002	(5) S18001-2	コワタテ	6-9	ほぼ全部	10.4 4.2 2.1	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
9	126	6	SH-002	(5) S18001-2	コワタテ	6-9	ほぼ全部	10.0 5.0 1.9	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
10	126	7	SH-002	(5) S18001-2	コワタテ	6-9	ほぼ全部	10.0 5.0 1.9	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
11	126	8	SH-002	(5) S18001-2	コワタテ	6-9	ほぼ全部	8.5	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
12	126	9	SH-002	(5) S18001-2	コワタテ	6-9	ほぼ全部	8.5	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
13	126	10	SH-002	(5) S18001-2	コワタテ	6-9	ほぼ全部	8.5	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
14	126	11	SH-002	(5) S18001-2	コワタテ	6-9	ほぼ全部	8.5	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
15	126	12	SH-002	(5) S18001-2	コワタテ	6-9	ほぼ全部	8.5	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
16	126	13	SH-002	(5) S18001-2	コワタテ	6-9	ほぼ全部	8.5	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
17	126	14	SH-002	(5) S18001-2	コワタテ	6-9	ほぼ全部	8.5	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
18	126	15	SH-002	(5) S18001-2	コワタテ	6-9	ほぼ全部	8.5	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
19	126	16	SH-400	(4) SK-002	平底碗	18世紀後半～19世紀前半	ほぼ全部・底部片	8.85 4.3 1.8	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
20	126	17	SK-400	(4) SK-002	平底碗	18世紀後半～19世紀前半	ほぼ全部・底部片	4.4	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
21	126	18	SK-317	(2) SK-003	平底碗	18世紀後半～19世紀前半	ほぼ全部・底部片	5.1	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
22	126	19	SK-318	(2) SK-003	平底碗	18世紀後半～19世紀前半	ほぼ全部・底部片	4.8	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
23	126	20	SK-319	(2) SK-003	平底碗	18世紀後半～19世紀前半	ほぼ全部・底部片	5.0	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
24	126	21	SK-320	(2) SK-003	平底碗	18世紀後半～19世紀前半	ほぼ全部・底部片	7.9 7.5 7.8	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
25	126	22	SK-400	(4) SK-002	平底碗	18世紀後半～19世紀前半	ほぼ全部・底部片	8.5	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
26	126	23	SK-400	(4) SK-002	平底碗	18世紀後半～19世紀前半	ほぼ全部・底部片	8.5	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
27	126	24	SK-400	(4) SK-002	平底碗	18世紀後半～19世紀前半	ほぼ全部・底部片	8.5	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
28	126	25	SK-400	(4) SK-002	平底碗	18世紀後半～19世紀前半	ほぼ全部・底部片	8.5	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
29	126	26	SK-400	(4) SK-002	平底碗	18世紀後半～19世紀前半	ほぼ全部・底部片	8.5	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
30	126	27	SK-400	(4) SK-002	平底碗	18世紀後半～19世紀前半	ほぼ全部・底部片	8.5	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
31	126	28	SK-400	(4) SK-002	平底碗	18世紀後半～19世紀前半	ほぼ全部・底部片	8.5	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
32	126	29	SK-400	(4) SK-002	平底碗	18世紀後半～19世紀前半	ほぼ全部・底部片	8.5	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
33	126	30	SK-400	(4) SK-002	平底碗	18世紀後半～19世紀前半	ほぼ全部・底部片	8.5	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
34	126	31	SK-400	(4) SK-002	平底碗	18世紀後半～19世紀前半	ほぼ全部・底部片	8.5	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
35	126	32	SK-400	(4) SK-002	平底碗	18世紀後半～19世紀前半	ほぼ全部・底部片	8.5	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
36	126	33	SK-400	(4) SK-002	平底碗	18世紀後半～19世紀前半	ほぼ全部・底部片	8.5	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
37	126	34	SK-400	(4) SK-002	平底碗	18世紀後半～19世紀前半	ほぼ全部・底部片	8.5	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
38	126	35	SK-400	(4) SK-002	平底碗	18世紀後半～19世紀前半	ほぼ全部・底部片	8.5	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
39	126	36	SK-400	(4) SK-002	平底碗	18世紀後半～19世紀前半	ほぼ全部・底部片	8.5	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
40	126	37	SK-400	(4) SK-002	平底碗	18世紀後半～19世紀前半	ほぼ全部・底部片	8.5	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
41	126	38	SK-400	(4) SK-002	平底碗	18世紀後半～19世紀前半	ほぼ全部・底部片	8.5	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
42	126	39	SK-400	(4) SK-002	平底碗	18世紀後半～19世紀前半	ほぼ全部・底部片	8.5	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
43	126	40	SK-400	(4) SK-002	平底碗	18世紀後半～19世紀前半	ほぼ全部・底部片	8.5	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	

第15表 中・近世土製品計測表(図版70)

											破損部分は遺存値			
番号	群回番号	遺構番号		遺物番号	種類	材質	色調	時代	長cm	幅cm	厚cm	孔径mm	重量g	備考
1	125 1	T21-19	(22) T21-19	0001	管状土甕	土製	赤褐色	近世	5.40	3.70	17.0	17.0	(74.0)	外面自然釉
2	125 2	S13-27	(28) S13-27	0001	管状土甕	土製	灰黑色	近世	4.05	2.50	12.0	12.0	20.58	
3	125 3	S13-27	(28) S13-27	0001	管状土甕	陶器	紫褐色	近世	3.40	2.50	10.0	10.0	18.54	外面施釉
4	125 4	S13-27	(28) S13-27	0001	管状土甕	土製	灰黑色	近世	3.60	2.50	12.0	12.0	21.20	
5	125 5	V15-92	(26) V15-92	0001	円盤	陶器	赤褐色	近世	2.30	2.50	1.05		7.03	近世瀬戸・美濃磁器片取
6	125 6	(25) SD-002	(25) SD-002	0001	おはじき	土製	明赤褐色	近世	1.80	1.80	0.60		1.59	
7	125 7	SK-315	(42) SK-000	0001	土玉	土製	赤褐色	中世	3.10	3.40	6.5	6.5	(35.19)	一部欠損
8	125 10	SK-314	(42) SK-004	0001	土玉	土製	黒褐色	中世	2.50	2.70	4.5	4.5	(16.94)	一部欠損
9	125 11	SK-314	(42) SK-004	0001	土玉	土製	褐色	中世	2.90	2.70	4.5	4.5	18.48	
10	125 12	SK-314	(42) SK-004	0001	土玉	土製	赤褐色	中世	3.05	3.30	5.5	5.5	(22.68)	約2/3割欠
11	125 13	SK-314	(42) SK-004	0001	土玉	土製	黒褐色	中世	2.70	2.55	5.0	5.0	15.42	

第16表 中・近世石製品類計測表(図版70)

											破損部分は遺存値		
番号	群回番号	遺構番号		遺物番号	種類	材質	色調	時代	最大長cm	最大幅cm	厚mm	重量g	備考
1	89 9	SK-302	(42) SK-025	0001	火打石	玉髄	灰赤褐色	中世	45.7	34.7	20.3	18.20	
2	89 10	SK-302	(42) SK-025	0001	砥石	凝灰岩	淡緑灰色	中世	62.9	31.0	19.4	47.84	
3	90 2	SK-305	(42) SK-034	0001	砥石	凝灰岩	淡緑灰色	中世	86.7	35.0	33.8	87.54	
4	93 9	SK-311	(42) SK-029	0001	砥石	砂岩	灰色	中世	121.5	136.5	82.0	1,100.00	自然石2面使用
5	93 10	SK-311	(42) SK-029	0003 (片石)	安山岩	紫褐色	中世	191.0	135.0	113.0	3,740.00	自然石表面黒色に変化	
6	95 14	SK-314	(42) SK-004	0001	砥石	凝灰岩	灰白色	中世	35.8	29.1	12.8	17.48	
7	95 15	SK-314	(42) SK-004	0001	石臼(下臼)	花崗岩	灰色	中世	191.0mm以上	100.1	100.1	1,825.00	磨盤面に施釉
8	95 16	SK-314	(42) SK-004	0001	板押	緑色片岩	緑褐色	中世	(83.6)	(74.2)	16.2	107.58	
9	111 4	SK-433	(37) SK-001	0001	板	粘板岩	赤灰褐色	中世	61.2	88.5	20.5	101.35	
10	125 7	S14-42	(44) S14-42	0001	板押	緑色片岩	灰褐色	中世	(64.2)	(69.6)	16.8	85.26	
11	125 8	S14-23	(44) S14-23	0030	板押	泥岩片岩	緑褐色	中世	(100.5)	(60.2)	22.4	294.04	
12	125 9	(30) SD-002	(30) SD-002	0001	砥石	凝灰岩	灰白色	近世	79.1	47.5	33.6	176.68	
13	125 10	(30) SD-002	(30) SD-002	0001	砥石	凝灰岩	灰白色	近世	61.7	48.2	25.5	127.69	
14	125 11	(43) SD-002	(43) SD-002	0002	砥石	凝灰岩	淡赤褐色	近世	53.1	42.6	11.1	323.03	表面灰褐色
15	125 12	T17-85	(32) T17-85	0001	砥石	凝灰岩	淡赤褐色	近世以降	57.2	42.9	21.2	60.07	表面灰褐色
16	125 13	S13-36	(28) S13-36	0001	砥石	凝灰岩	淡赤褐色	(近世)	50.2	38.3	15.5	43.44	
17	125 14	(31) SD-005	(31) SD-005	0004	砥石	凝灰岩	淡緑灰色	近世	69.5	53.7	26.2	97.03	
18	125 15	T17-52	(32) T17-52	0001	砥石	凝灰岩	灰色	(近世)	61.3	35.9	30.2	86.86	
19	125 16	(44)-基	(44)-基	0001	砥石	凝灰岩	灰白色	近世以降	85.8	38.4	33.7	131.89	
20	125 17	V11	(46) V11	0001	砥石	砂岩	淡褐色	(近世)	50.0	57.4	27.9	98.11	
21	125 18	W15-56	(46) W15-56	0002	砥石	凝灰岩	紫褐色	(近世)	68.8	38.7	14.8	53.23	
22	125 19	W15-82	(46) W15-82	0001	砥石	凝灰岩	灰白色	近世以降	67.5	40.9	23.4	61.31	
23	125 20	SI-119	(32) SI-009	0001	砥石	凝灰岩	淡赤褐色	(近世)	67.6	34.9	22.2	47.77	近世漬上と重なる埋文自然、外面灰褐色、焼熱小

第17表 銭貨計測表(図版70)

											破損部分は遺存値			
番号	群回番号	遺構番号	遺物番号	種類	年代	背文・書体	計測値 mm				重量g	備考		
							外径	内径	内径外径	内径内径				
1		(5) SD-001		皇宗通寶	初鑄年:1029								遺構平面図に注記有	
2		(5) SD-001		洪武通寶	初鑄年:1368								遺構平面図に注記有	
3		(5) SD-001		(洪永通)									遺構平面図に注記有	
4		(5) SD-001		(洪永通)									遺構平面図に注記有	
5	99 1	SK-303	(42) SK-037	1	熙寧元寶	初鑄年:1068	行書	23.57	18.30	7.00	6.35	1.17	3.05	
6	125 21	(31) SD-001	2	寛永通寶	古寛永:17世紀前半			24.65	19.35	6.74	5.75	1.15	2.92	表面灰色
7	125 22	遺構外	(32) V15-34	1	寛永通寶	古寛永:17世紀後半		24.45	19.80	7.00	5.52	1.17	3.10	表面灰色、一部欠損
8	125 23	遺構外	(42) T16-42	1	寛永通寶	古寛永:17世紀後半		24.48	19.75	7.20	6.00	0.90	2.06	
9	125 24	SI-105	(49) SI-001	20	寛永通寶	古寛永:17世紀後半		24.13	19.80	7.80	6.55	1.12	2.85	
10	125 25	遺構外	(42) T16-42	1	寛永通寶	文銭:17世紀後半		25.23	20.30	7.05	6.10	1.28	3.44	
11	125 26	(43) SD-001	3	寛永通寶	新寛永:18世紀代			25.05	19.00	7.95	6.45	1.08	2.54	表面灰色
12	125 27	遺構外	(46) W15-83	1	寛永通寶	新寛永:18世紀代		22.32	19.25	7.95	6.95	8.97	1.98	
13	125 28	遺構外	(49) V15-48	1	文久通寶	文久3年一筆土	漢・真書	26.27	19.90	7.85	6.20	1.20	3.48	多少変形

第3章 まとめ

第1節 富士見遺跡の集落について

富士見遺跡は柏北部東地区の北西部に位置する遺跡である。柏北部東地区は利根川南岸、常磐自動車道の南東に広がる台地一帯にあたり、標高16m～18mで、利根川低地との比高は5m～10mである。周辺は、利根川東遷以前は小貝川に合流していた古常陸川水系にあり、古鬼怒湾に属する古常陸川湾の柏・我孫子低地に面していた。また、南西から入り込む奥東京湾との接点にもあたる。

富士見遺跡が立地する台地は、現在、利根川から入り込む支谷により東西を挟まれた舌状を呈し、枝分かかれする小支谷によって、いくつかの遺跡に分けられている。富士見遺跡は台地の西側に位置し、東側は胸形遺跡、南東は大松遺跡と呼称されるが、各遺跡が接する部分については一連の集落としてとらえられる部分もあり、これら集落の変遷については、既刊の報告にまとめられている⁽¹⁾。

富士見遺跡は一部に未整理地点(第51～56地点)と未調査区域があるものの、すでに報告を行ったA～C地区と合わせて全容がほぼ明らかとなった。ここでは今回新たに詳細な内容が明らかになったD・E地区を中心とした概要をまとめる。

1 縄文時代(第127～132図)

富士見遺跡全体で検出された縄文時代の竪穴住居は124軒で、各地区の内訳はA地区20軒、B地区20軒、C地区40軒、D地区34軒、E地区10軒である。

炉穴は、A～C地区では検出されていないが、D地区で5群、E地区で4群、合わせて9群を検出した。D地区中央部で検出されたSF-004以外はSF-001～003は北西縁、SF-005は西縁、SF-006～008は北縁、SF-009は東縁といずれも台地縁辺部に位置していた。このうちSF-008は遺存状態が非常に良好で、天井部が遺存し、煙道部を確認することができた。

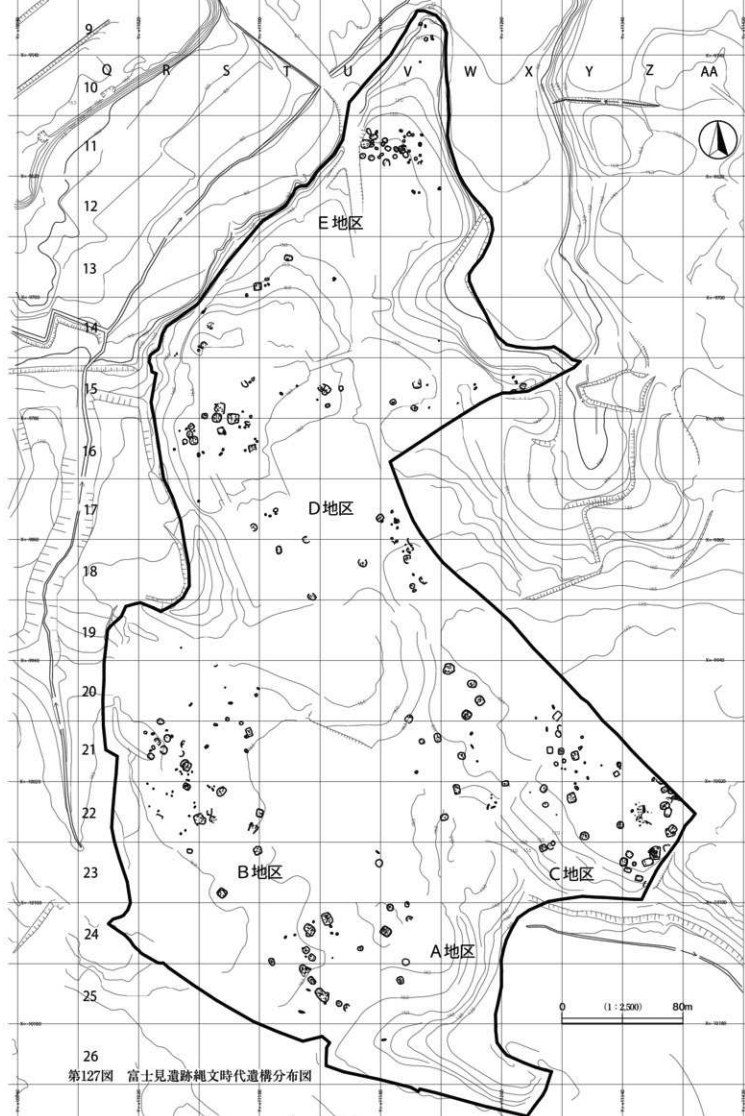
陥穴は15基検出された。A地区4基、B地区2基、C地区7基、D・E地区で各1基である。富士見遺跡南側の谷に面した部分に多く分布する。

土坑は194基を検出した。地区別の内訳は、A地区14基、B地区43基、C地区30基、D地区62基、E地区45基である。これらは竪穴住居周辺で検出されているため、関連性が考えられるものの、遺物を伴う例が少なく、時期や用途を明らかにできたものは少数であった。

A～C地区で検出した竪穴住居は、ほとんどが縄文時代前期の黒浜式期に帰属するもので、黒浜式期以外では、胸形遺跡に接するC地区に花積下層式期7軒、関山式期1軒、B地区に中期の加曾利E式期1軒が存在する。D・E地区では縄文時代前期以外に、早期・中期・後期の竪穴住居が含まれていたことがわかり、富士見遺跡の中でも南西地区(A・B地区)と南東地区(C地区)、北西地区(D地区)と北東地区(E地区)では少しずつ様相が異なっていたことが判明した。

D地区の竪穴住居の時期別内訳は、早期3軒、前期22軒、後期1軒、不明8軒である。D地区とした部分は富士見遺跡の北西にあたり、西側は谷に面し、南東はC地区、胸形遺跡と接している。未調査部分もあるが、C地区に次いで遺構が多数検出され、遺構の分布はさらにいくつかに分かれる。

ひとつはD地区北西の台地縁辺部に沿った区域で、S13・T13・R14・S14にあたる。SI-081～SI-083、SI-085の4軒の竪穴住居と周辺に所在する土坑SK-103～113からなる。また、S14北西の斜面に



第127图 富士見遺跡縄文時代遺構分布図

はSF-001～SF-003の炉穴群が所在する。SI-082が黒浜式期、SI-081・085が浮島式期、SI-083が後期の称名寺式期の竪穴住居であった。浮島式期の竪穴住居は富士見遺跡内ではこの2軒のみである。胸形遺跡でも単独で、検出されている例が多く、この台地ではそのような展開であったのであろう。また、土坑は時期や用途が明らかになったものが少ない中で、楕円形の土坑SK-104からは五領ヶ台式土器が伏せられた状態で出土し、土坑墓であったと考えられる。また、S14を中心に遺構に伴わない縄文土器・礫が多量に出土し、遺物包含層と考えられた。台地縁の緩斜面で、各時期の土器が混在するが、前期の土器(第2群)が98%を占め、前期後半(第2群5・6類)の土器がもっとも多く出土している。礫は土器よりも集中する傾向がみられ、風化しているもの、また被熱しているものが大半であった。これらは各時期を通じての廃棄場所であったのであろうが、重複して存在する称名寺式期の竪穴住居、古墳時代の竪穴住居の部分は分布が散漫で、この時期の竪穴住居の設営にあたって移動しているとも考えられる。

この区域の南側、S15・R16・S16の50m四方には、竪穴住居SI-088～100の13軒と土坑SK-114～118・123～141が検出された。西側に谷を臨む標高17m程度の平坦地で、もっとも遺構が密集している。竪穴住居は早期3軒(SI-088・90・94)、前期10軒で、前期のうち8軒が黒浜式期(SI-089・092・095～100)、2軒が諸磯式期(SI-91・93)である。黒浜式期の竪穴住居が近接しており、SI-089は石器製作跡、SI-95・97からは遺構内貝層を検出した。また諸磯式期の竪穴住居は富士見遺跡内ではこの2軒が確認されているだけである。土坑としたSK-141には焼土を伴い、被熱した五領ヶ台式土器を出土した。このような状況から、SK-141は竪穴住居の炉、または屋外炉であった可能性が考えられる。出土した土器は、前述の土坑墓SK-104出土の土器と胎土・焼成などがたいへんよく似ており、関連性がうかがえるものである。

D地区の西側V15の20m四方にはSI-108～110が所在した。このうちSI-109・110の2軒は関山式期の竪穴住居で、SI-108は遺物が少ないため断定はできないが、やはり同じ関山式期の竪穴住居である可能性が高い。また、SI-109・110の2軒からは遺構内貝層が検出された。関山式期の可能性のある竪穴住居は、C地区で1軒(SI-047)検出されている。

D地区中央にはSI-102～103が重複していた。これら以外に周辺に遺構は検出されていない。出土遺物がわずかで、時期の確定はできなかったが、前期に属する可能性が高い。3軒の新田関係はSI-103がもっとも古く、SI-102がもっとも新しいことは明らかで、SI-102は石器製作跡であった。

D地区南西にはSI-111～113・116とSK-144～147が検出された。西側の谷に面した平坦地で、南側のB地区との境に小さな谷が入り込んでいる。SI-111・112は出土遺物が少ないため確定はできないが、縄文時代前期に帰属する可能性が高い。出土土器により時期が確認できたSI-113・116は黒浜式期で、SI-116は石器製作跡であった。

U17・18～V17・18の範囲には黒浜式期を主体とした前期の竪穴住居群が検出された。SI-114・115・117～122で、東側は胸形遺跡B地区・H地区と接しており、胸形遺跡V17・W17において検出されている黒浜式期の竪穴住居群の一部としてとらえられる。このうちSI-119～121の3軒で遺構内貝層を検出した。

E地区は富士見遺跡の北東部で、台地の北端部を中心とした区域と胸形遺跡H地区と接する東端部の地域に分かれる。E地区の竪穴住居の内訳は、早期6軒、前期2軒、中期1軒、後期1軒、不明1軒である。

台地先端部は舌状に張り出した細い尾根で、さらに南北の2か所に分けられる。1か所は幅10m～20mの台地先端の斜面部で、標高は10mである。陥穴1基(SK-102)を含む5基の土坑SK-165～169が検出

された。その南の標高13m～14mの平坦部には竪穴住居8軒(SI-123～130)と炉穴5群(SF-004～008)、土坑13基(SK-170～201)が検出された。早期の竪穴住居・土坑が含まれ、炉穴も検出されている。40m四方に密集しており、竪穴住居は西側、炉穴は東縁に所在する。SI-123・124・126・128～130の6軒は大枠ながら早期条痕文期の竪穴住居、土器を出土した炉穴SF-008は茅山下層式期であった。また、SI-125は五領ヶ台式期の竪穴住居であったと考えられる。五領ヶ台式期の遺構は、D地区で2遺構検出されており、1基は土坑墓であった。いずれも西側縁辺部に沿ったところに位置している。大松遺跡でも竪穴住居1軒と土器を伴う土坑墓1基が検出され、似たような状況を見ることができる。

東端の胸形遺跡と接する部分には竪穴住居2軒SI-132・133と炉穴SF-009、土坑SK-205～209が検出され、竪穴住居は黒浜式期(SI-132)と称名寺式期(SI-133)に帰属するものであった。SK-206・207は隣接する土坑で、SK-207からは称名寺式の埋甕が出土し、焼土を伴い炉の可能性のあるSK-206と合わせて竪穴住居であったとも考えられ、富士見遺跡で確認された称名寺式期の竪穴住居はD地区S14で検出した1軒と合わせて3軒となる。

以上のことから、富士見遺跡において、まとまった数の遺構を検出した縄文時代早期から前期中葉の集落の状況を周辺の遺跡を含め、簡単にまとめると次のようになる。

早期の遺構は、出土土器が少ないために大枠でしか時期をとらえられないが、舌状に張り出した台地の北縁、東縁に炉穴・竪穴住居がつくれ、C地区にあたる南側に陥穴がつくられている。富士見遺跡E地区の北部と支谷を挟んで対岸になる胸形遺跡F地区に、早期後葉の条痕文期の竪穴住居27軒、炉穴22基以上からなる集落が検出されている。胸形遺跡では、細別時期がわかるものは子母口式期から鶴ヶ島台式期であるということで、本遺跡よりやや先行する可能性があるが、早期後葉ころに北側から入り込む支谷周辺に集落が設営され始める状況が富士見遺跡でも確認された。

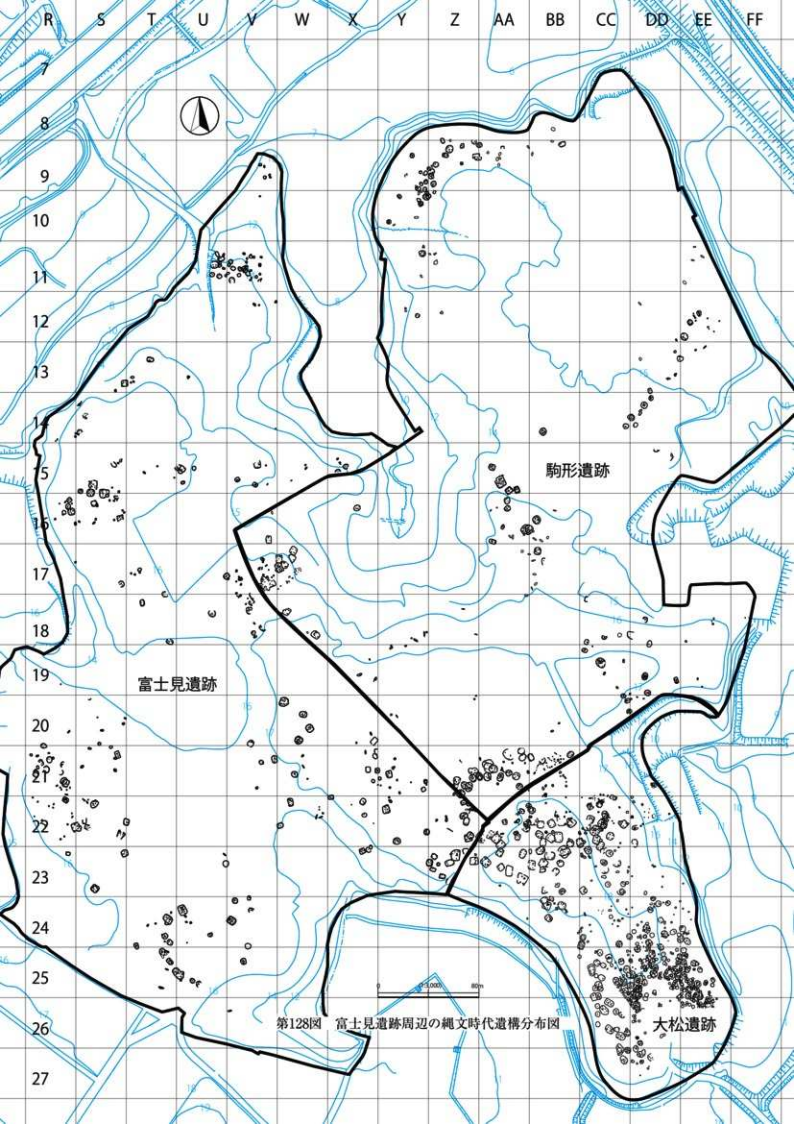
前期の花積下層式期の集落は、胸形遺跡・大松遺跡の東側を画する谷の奥部に面したところから検出されている(第129図)。富士見遺跡ではC地区南東にあたり、この時期の地点貝塚や遺構内貝層も確認されている。胸形遺跡ではB・H地区でこの時期の遺構が検出され、現在整理中の大松遺跡の北西部でも花積下層式期の竪穴住居がこれらと接するAA22～BB22にあたる部分に集中している。やはり、遺構内貝層を伴う例が多い。3遺跡で検出された竪穴住居でひとつの集落を形成しており、すべてが同時に存在したわけではないが、合わせて40軒近くになると推定される。

関山式期の遺構はD地区で3軒、C地区で1軒確認できた(第130図)。土器が出土し、時期が明確な2軒は関山Ⅱ式期で、どちらからも遺構内貝層が検出された。胸形遺跡では、北西、中央、南東に数軒のまとまりの小集落が確認されて、集落が点在するあり方が見されており、大松遺跡でも既報告部分の南側に4軒がまとめて検出されている。富士見遺跡でも同様の状況が確認された。

黒浜式期の遺構は前代に比べ飛躍的に増加し、富士見遺跡全体で確認されている(第131図)。台地縁辺部を中心に10軒～20軒程度が散漫な状況で検出されている。富士見遺跡で84軒、胸形遺跡では32軒確認されており、大松遺跡は整理中の部分があるため確定した数ではないが⁽²⁾、既報告分を合わせて50軒以上になることは確実である。これらは今後、黒浜式期の集落を考える上で重要な資料になるといえる。

2 古墳時代(第76図)

古墳時代の遺構は富士見遺跡全体で竪穴住居9軒、円墳1基を検出した。D地区に8軒、E地区に1軒で、円墳は南西のB地区(R20)から検出した。集落は西側の谷から分かれた支谷を中心に分布し、円墳



第128図 富士見遺跡周辺の縄文時代遺構分布図

富士見遺跡

駒形遺跡

大松遺跡

は谷奥部に位置する。竪穴住居の時期は前期から中期で、西寄りに位置するSI-101・115が前期、これ以外が中期に属すると考えられる。中期の竪穴住居はいずれも炉が壁に寄っており、SI-106・131などでは壁に接して検出された。カマドが出現する直前の段階である。

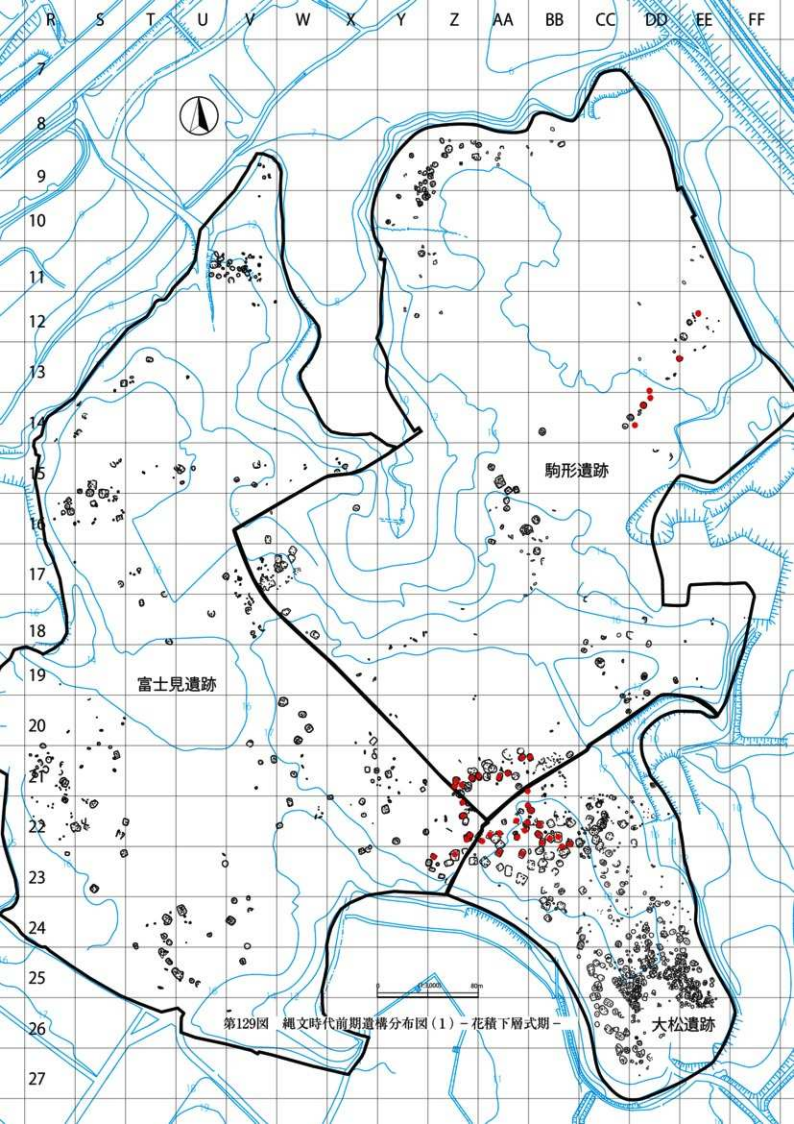
富士見遺跡と駒形遺跡の境界付近の駒形遺跡E地区(V16～X16)でも3軒の竪穴住居が検出された。時期はやはり前期から中期で、東端で検出した竪穴住居である駒形遺跡SI-103では、カマドが東隅に構築され、破損しているが烏帽子形の炉器台を出土している。この地域のカマド出現期の資料としてとらえられる。

古墳時代前期から中期に富士見遺跡から駒形遺跡にかけての小支谷の周辺で、少しずつ場所をずらしながら小規模集落を形成していたと見られる。駒形遺跡と大松遺跡の境になるDD20で、駒形遺跡東側の谷に面したところに古墳時代後期の竪穴住居が1軒検出されている。

周辺では原畑遺跡で、2軒の中期の竪穴住居が検出され(Y30)、遺構は検出されていないが、X33を中心に埴輪片がわずかながら出土しており、近辺に古墳が存在した可能性を示唆している。また南西の矢船Ⅱ遺跡は未整理で詳細は不明であるが、調査により8軒の中期の竪穴住居と古墳1基が検出され、周辺の台地に古墳時代中期の10軒以下の小集落が点在していた状況が確認されている。

注

- (1) (財)千葉県教育振興財団 2009『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書2-柏市駒形遺跡-縄文時代以降編1』
 - (財)千葉県教育振興財団 2011『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書3-柏市原畑遺跡-縄文時代以降編1』
 - (財)千葉県教育振興財団 2011『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書4-柏市大松遺跡-縄文時代以降編1』
 - (公財)千葉県教育振興財団 2013『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書5-柏市駒形遺跡-縄文時代以降編2』
 - (公財)千葉県教育振興財団 2014『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書6-柏市富士見遺跡-縄文時代以降編1』
- (2) 第129図～第132図に大松遺跡の北半部の時期別の遺構分布状況を示したが、これらは整理中の段階での所見に基づくものである。重複する竪穴住居も多く、遺物出土状況などの検討により、今後修正が生じる可能性がある。

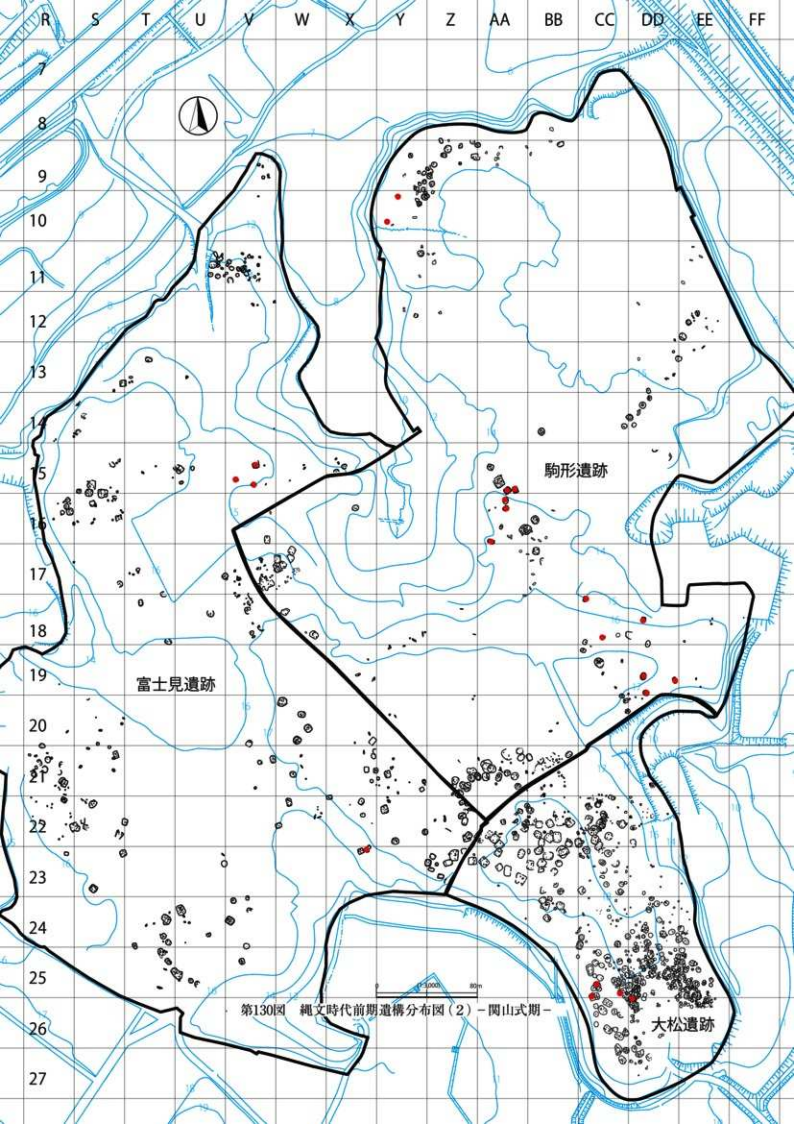


第129図 縄文時代前期遺構分布図(1) - 花積下層式期 -

富士見遺跡

駒形遺跡

大松遺跡

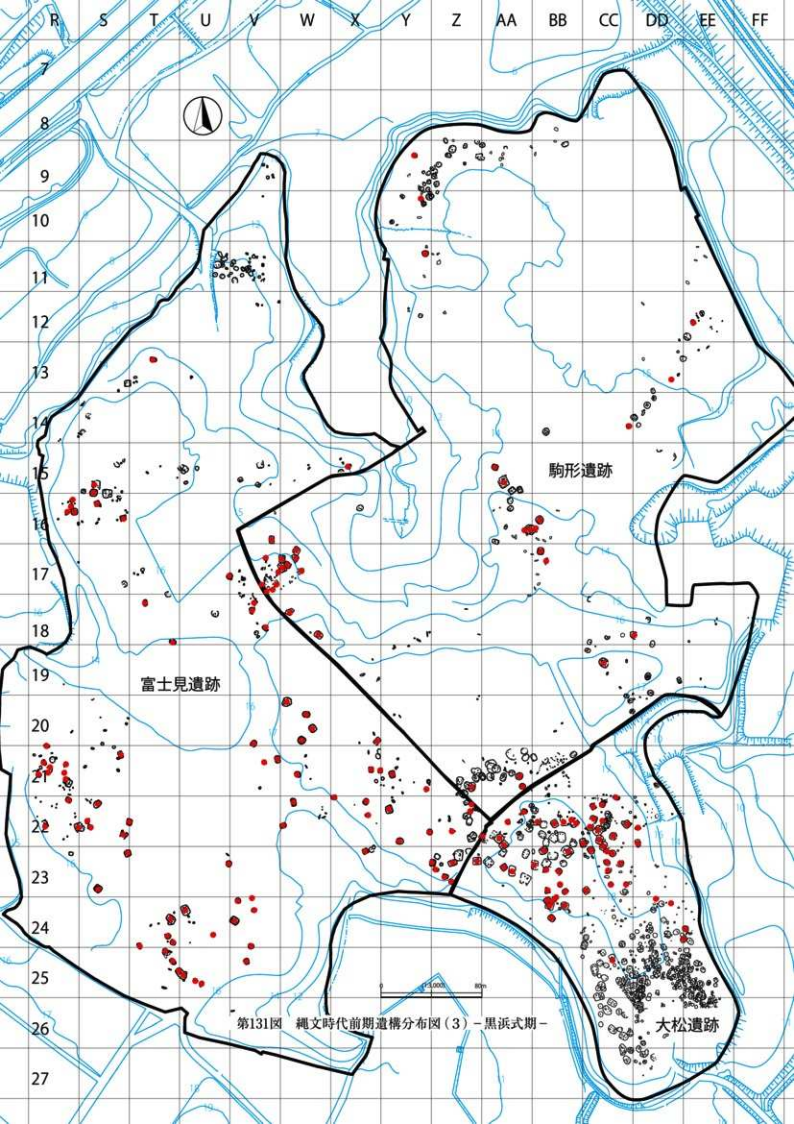


第130図 縄文時代前期遺構分布図(2) - 関山式期 -

富士見遺跡

駒形遺跡

大松遺跡

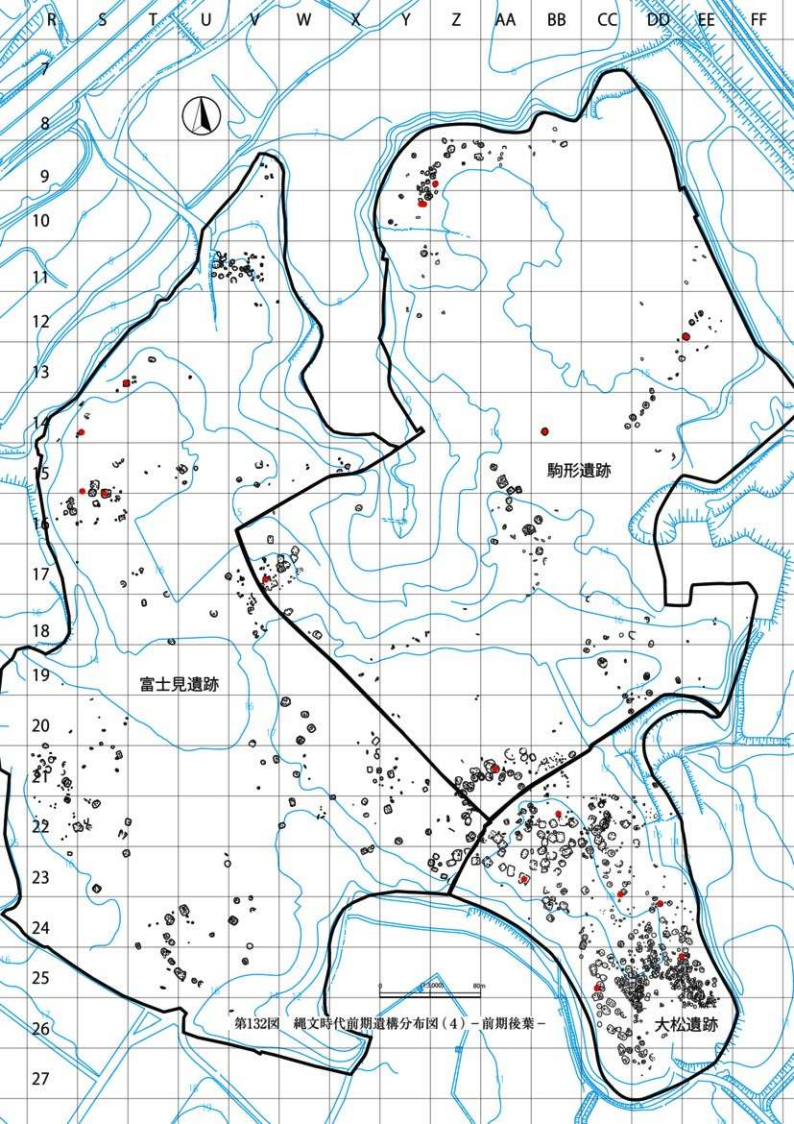


第131図 縄文時代前期遺構分布図(3) - 黒浜式期 -

富士見遺跡

駒形遺跡

大松遺跡



富士見遺跡

駒形遺跡

大松遺跡

第132図 縄文時代前期遺構分布図(4) - 前期後葉 -

第2節 縄文時代の石器－富士見遺跡の全体像－

富士見遺跡の縄文時代の石器のうち、A～C区については既に報告済みであり、今回は残りのD・E区を対象としている。しかしながら、このような地区割りには、あくまでも便宜的なものであり、本来、両者が一体であることは言うまでもない。ついては、富士見遺跡における縄文石器の全体像を明らかにするために、前回の調査成果を合体した上で総合的な検討を試みたい。

1 石器組成 (第18表)

遺跡全体 (A～E区) で縄文時代の石器は合計4,287点出土した。そのうち石核・剥片類・軽石を除いた利器 (狭義の石器) は大別20種、計1,021点を数える。

内訳は、石鏃 (石鏃未成品111点を含む) 233点、楔形石器197点、石匙8点、石錐 (石錐未成品3点を含む) 6点、二次加工ある剥片61点、使用痕ある剥片2点、打製石斧42点、磨製石斧96点、局部磨製石斧3点、礫器12点、磨石類90点、敲石50点、砥石8点、石皿82点、台石1点、石錘2点、石棒1点、有孔石製品1点、軽石石製品3点、側面調整礫123点である。

これらの利器のうち石鏃、石錐、及び楔形石器等については、遺跡内で製作された痕跡をとどめるが、他の石器群、特に礫器は搬入品である。製作地は、おそらく採取地もしくはその近傍の河原であろう。礫器のうち磨製石斧は破損後、しばしば再加工され、他の器種に転用されている。これに対して石皿には完形品は皆無であり、転用例もほとんど認められない。また、破損した石皿の平均的な厚さは約5cm (1.9cm～7.8cm) もあり使い減りによる破損の可能性は低い。したがって、使用による破損ではなく、意図的な打撃による破砕の可能性が高い。おそらく、その行為の背景には廃棄に伴う祭祀・儀礼であろう。礫器については、先に記したように、本調査区では新たに早期の遺構群が発見されており、これらに伴う可能性がある。石錘、石棒、有孔石製品は単体資料であり、その評価は難しいが、石棒については、もし前期の遺構に伴うものならば出現期の貴重な資料となる。

特異な石器として側面調整礫と軽石石製品がある。側面調整礫の機能については、先に日常的な使用、遺構出土、用材 (砂岩主体) と置き砥石の欠落の兼ね合いを考え合わせ、乳棒状磨製石斧の研磨具の可能性を指摘した。両者は、共に他の器種に比べ遺構内出土の比率が極めて高くセット関係が窺える。したがって、このような出土傾向は先の研磨具説を補強するものと言えよう (大野ほか2014)。一方、軽石石製品の機能については、古宮隆信の「底面が平坦に磨滅されていることから本来の使用目的は浮標以外のもの」との指摘 (古宮ほか1976) を受けて、大野康男は、先の報告で「髭剃り、頭髮の除去」の可能性を提起した (大野ほか2014)。確かに底面の形状から浮標 (浮子) 以外の機能が考えられるが、たとえ軟質とは言え

第18表 富士見遺跡縄文時代石器器種組成表

	石鏃	石鏃未成品	磨製石器	石匙	石錐	石錐未成品	一次加工ある剥片	使用痕ある剥片	打製石斧	磨製石斧	礫器	磨石	砥石	石皿	台石	石錘	石棒	有孔石製品	軽石石製品	側面調整礫	石核	剥片類	軽石	計		
遺構	68	68	100	5	2	3	29	0	7	68	2	1	41	21	5	39	1	0	0	3	75	6	258	7	2819	
遺構外	54	43	97	3	1	0	32	2	35	28	1	31	49	29	3	43	0	2	1	1	0	48	25	959	1	1468
総計	122	111	197	8	3	3	61	2	42	96	3	72	90	50	8	82	1	2	1	1	3	123	31	3227	8	4287

軽石は一種のヤスリであり、踵の角質部の部分除去ならともかく、それ以外の部位は往復運動によって皮膚を傷める危険性が高い。また出現期が前期前半に限定されることから、その機能は普遍的なものではなく当該期特有のものと推定される。今のところ、格別根拠はないが、以上の諸条件を勘案し機能については側面調整礫と同様に当該期特有の乳棒状磨製石斧に関連づけ、ここでは研磨用のヤスリの可能性を提起しておく。

翻って、小林康男によれば、当該期は縄文海進による地域間の違いが際だっており、太平洋岸の那珂川・利根川下流域や東京湾西岸では釣針や石錘等の漁撈具や礫器の出土が顕著であるのに対して、本遺跡の位置する東京湾東岸や奥東京湾では、漁撈具はほとんどなく、石鏃、石匙、石皿、凹石、磨製石斧などの狩猟採集関連の組成を示しているという。また、この時期の当該地域を特徴づけるものとして磨製石斧の一般化と乳棒状磨製石斧の定形化が指摘されている(小林1983)。

以上の小林の見解に照らし合わせると、本遺跡の石器組成は房総における前期前半(花積下層～黒浜式期)の典型例といえる。

なお、一般的に開山式期には磨製石斧が欠落するが、本遺跡の主体である次期の黒浜式期には、磨製石斧(乳棒状磨製石斧)が登場する。大工原豊によれば、この乳棒状磨製石斧の出現は、「縄文海進のピークと一致しており、木材利用の拡大、具体的には丸木舟の製作と連動するものであろう」という(大工原2004)。

しかしながら、第19表に示したとおり、漁撈具は非常に貧弱であり、石器組成の主体は、あくまでも狩猟具(石鏃)と植物の伐採・加工や工具として使用された磨製石斧・石皿・磨石類である。このことから本遺跡における生業は狩猟・採集を中心としていたことが窺われる。

第19表 石器の機能・用途別組成(小林1983を改変)

	生産用具			工 具	非実用的石器	
	狩猟具	植物採集・加工具	漁撈具			
使用目的等	直接生産用具	石鏃 打製石斧 礫器の一部	石錘 浮標(浮子) 軽石石製品?	石錘 砥石 磨石類の一部 敲石の一部 台石の一部	祭祀・儀礼	石棒
	間接生産用具	剥片石器の一部 石皿 磨石類の一部 敲石の一部 台石の一部	剥片石器の一部	磨製石斧 側面調整礫 礫器の一部 剥片石器の一部	装身具	有孔石製品

※太字は比較的数量が多いもの。

石鏃等の剥片石器は、おしなべてチャートを主体としているが、礫石器は個性的であり、打製石斧にはホルンフェルス、磨製石斧には緑色岩、磨石類・石皿には安山岩、側面調整礫には砂岩がそれぞれ多用されている。このことはそれぞれの機能に応じた石材の使い分けがあったことを如実に物語っている。

これらの石器石材の産地は基本的に鬼怒川系を主体とした北関東方面を中心として関東一円であるが、磨製石斧に使われている緑色岩に限っては、埼玉県の北西部方面であり、利根川支流の神流川中流などに分布する秩父帯北帯の万場サブユニットのものと推定されている(中村2013)。おそらく、この付近の河原で、当時の専業集団により集中的に生産され、生活財として供給されたのであろう。

なお軽石については、伊豆新島産のものと群馬県赤城山及び榛名山のものがあるが、新井重三によれば、後者は純度が低く、本遺跡で使用されているような白色で純度が高く比重の小さい軽石は伊豆新島産であるという(新井1983)。新井の言に従えば、これらの軽石は新島から海流に乗って最寄りの海岸に漂着したものと推定される。

引用参考文献

- 小林康男 1983「組成論」『縄文文化の研究7 道具と技術』pp.16-27 雄山閣出版株式会社
- 新井重三・後藤和民・庄司 克 1984「貝塚博物館研究資料第四集 縄文時代の石器-その石材交流に関する研究-」千葉市立加曽利貝塚博物館
- 大工原 豊 2004「(6)生活用の石器」『千葉県の歴史 資料編 考古4(遺跡・遺構・遺物)』pp.398-411
財団法人 千葉県史料研究財団編 千葉県
- 柴田 徹 2004「(7)石器の石材と産地」『千葉県の歴史 資料編 考古4(遺跡・遺構・遺物)』pp.412-423
財団法人 千葉県史料研究財団編 千葉県
- 中村由克 2013「後期旧石器時代前半期における石斧石材の特質と意義」『考古学ジャーナル』№640 pp.27-31
ニューサイエンス社
- 大野康男・倉内郁子・橋本勝雄・山口典子 2014「柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書6 柏市富士見遺跡 縄文時代以降編1」公益財団法人 千葉県教育振興財団

第3節 中世掘込遺構群 (第133図)

中世の遺構は台地北側で大きく3ブロック(掘込区画1~3)に分かれて分布した。西側と中央部は掘り込みを伴う反面、東側はある程度の集中性は認められるものの、区画性は窺えず単に墓域としたほうが適当かもしれない。何れも出土した陶磁器・土器に時期差が認められず、横一列に並んでいることなど、一時期の所産としてよいと思われる。近年、台地上とりわけその縁辺部を削平して区画地を設ける調査例は増加し、それに対して段切り遺構、台地整形区画⁽¹⁾などと呼称されてきたが、同時に台地中央部での掘り込みを伴う区画地(掘込遺構)⁽²⁾の検出例も広くみられるようになった。富士見遺跡の場合はまさしく後者に当たり、しかも、周辺を広く調査したためにその全貌が捉えられたことと、古瀬戸編年の一型式にはほぼ収まる時期内に営まれたという点から、該種遺跡の様相を知るうえで極めて貴重な調査例といってよい。以下この調査から得られた成果を項目別に列挙することとする。

1 掘込遺構の構成と居住者の階層

3区画の内、最も明瞭な区画性を示すものは西側であるが、台地中央に近いという条件から深く掘り込まれた結果かもしれない。区画内に分布する遺構は地下式坑、井戸を伴う大形楕円形遺構、方形竪穴遺構、多様な土坑群、溝状遺構からなる。その分布状況は区画北側と北側寄り縁辺部に地下式坑が、区画中央と南側東西縁辺部に土坑が偏在し、井戸を伴う大形楕円形遺構は北西壁際に設けられていた。南側中央はほぼ空白地といってよく、溝状遺構はその区画溝かもしれない。中庭的な空間であるが、掘立柱建物が存在した可能性もあろう。中側の区画は西側よりも小さく、北西に地下式坑、北東に方形竪穴遺構、それ以外は土坑が散在するという状況であり、空白地はみられない。ふたつの区画は掘立柱建物が判然としないものの、この当時の内部を構成する各要素は粘土貼土坑や火葬遺構⁽³⁾を除き揃っていることから、一応「屋敷地」⁽⁴⁾の一類型とみておきたい。問題はその階層であるが、これまた出土遺物に取り立てて云々するものは無く、中国産磁器なども僅か1点にすぎない。この当時の一般的な農民層の枠内で捉えられよう。それは区画3の墓域で副葬品が皆無であったことでも類推出来る。そうすると、古瀬戸後期Ⅲ型式内時期幅のなかに、掘り込みを伴う「屋敷地」2か所と隣接する墓所からなる一単位的生活空間が営まれたということが出来よう。

なお、関連上谷を隔てた東側の駒形遺跡⁽⁵⁾や小山台遺跡⁽⁶⁾にもふれておきたい。駒形遺跡は富士見遺跡の2倍以上の台地面を有し、その北西端と中央部西側で中世の遺構が検出されている。但し、未調査部分があるとはいえ、遺構は地下式坑と粘土貼土坑程度で、全体に中世の遺構密度は極めて薄いものであった。時期的には一部古い遺物(12世紀代)があるが、15世紀代と近世に属するものといえる。恐らく富士見遺跡と一連のものであろう。また、その東に隣接する小山台遺跡では大きく3ブロックに分かれて中世遺構群(地下式坑・溝・土坑群)が存在し、一部は「台地整形区画」を伴うようである。北側台地縁近くの2か所はその先の緩斜面が主体になるのだろうが、遺構密度はそれほど高くはない。

次に、類例との比較からその屋敷像について相対的な位置付けを試みる。

2 類例からみた屋敷像

柏市内での類例では同じく利根川(当時は常陸川)流域に面する花野井の寺前遺跡⁽⁷⁾があげられる。街道沿いの溝区画の集落(調査はその一部)と思われ、主に掘立柱建物・方形竪穴遺構・土坑群からなり、その重複状況や火葬施設の混在する状況は一定の時期幅を示すもので、古瀬戸製品でみると後期Ⅱ~Ⅳ古の間に収まる。Ⅲ主体の当遺跡と重なる時期といえる。柏市と我孫子市にまたがる中馬場・法華坊遺跡(城

跡⁽⁸⁾は溝区画の屋敷地群とそれを覆うように作られた戦国城館を広く調査した例である。城館・区画内は主に掘立柱建物と地下式坑、大小の土坑群からなり、それに井戸、粘土貼土坑と続き、土坑墓も僅かながらみられる。この遺跡の年代幅は後の集計結果に拠れば12・13世紀代以降の陶磁器もみられるものの、主体は古瀬戸後期Ⅱ以降であり、しかも中世末まで継続し、直ぐ南側には進んだ縄張の根戸城があることなど、特異な様相を示している。西側端を走る水戸街道⁽⁹⁾との整合性や「手賀沼の結節」という点も併せ「宿」⁽¹⁰⁾とされた所以であろう。その後、手賀沼北岸における交通上の要地(津・舟戸)という条件もあって、城下の宿という性格も併せ持つかたちに変化したのかもしれない。

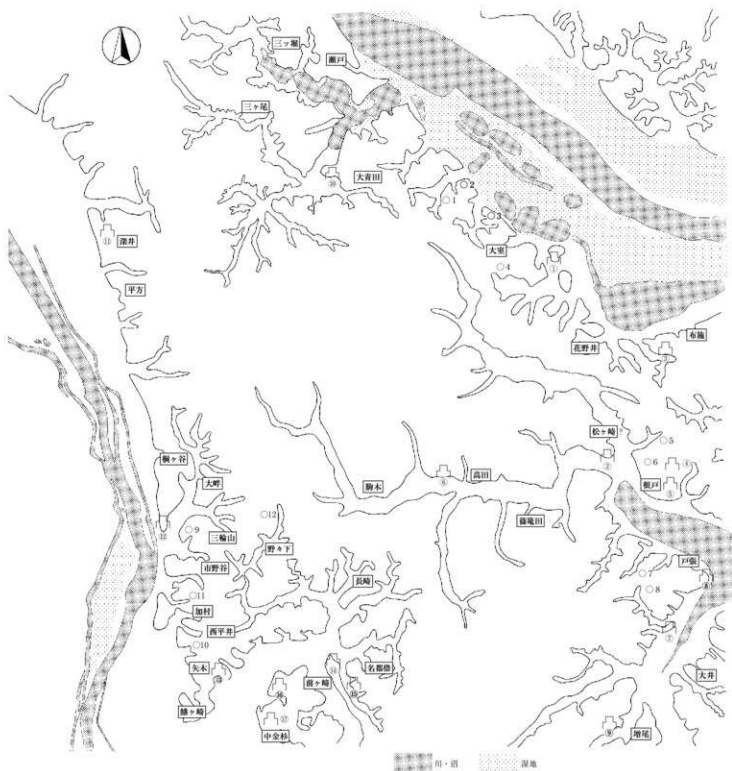
さらに近隣での調査例をみると、やはり利根川縁に立地する我孫子市中屋敷遺跡(15世紀代か、区画は不明ながら地下式坑、「竪穴建物」、土坑墓群ほか)⁽¹¹⁾、江戸川縁の流山市三輪野山第三遺跡(16～17世紀以降、2区画内に掘立柱建物、多様な「方形土壇」、井戸、粘土貼土坑、火葬土坑、土坑墓群ほか)⁽¹²⁾、同加町遺跡G地点(一部古い遺物を含むが15世紀代か、区画内に掘立柱建物、方形竪穴遺構、火葬土坑、土坑群ほか)⁽¹³⁾、同下花輪第二遺跡(時期また区画有無不明、地下式坑、粘土貼土坑、土坑墓、井戸、焼土・炭混入土坑ほか)⁽¹⁴⁾、などが主な調査例としてあげられる。また、未報告ながら加村南の西平井二階畑遺跡でも同様の遺構が調査されている⁽¹⁵⁾。さらに小規模な調査例をあげればきりが無いが、要するに東葛地域の台地上にはこの当時かなり共通した遺構群より構成される「屋敷地」が、規模の差はあるにせよ普遍的に展開していることが明らかになりつつある。それではその性格はどうみたらよいのだろうか。

3 富士見中世遺構の性格

中世～近世初めの様相を示すと考えられている船橋市西図書館蔵「下総之国図」には現在の利根川縁に西から太田－大室－花嶋－ふせの村名が確認される。この太田が青田に該当する。正保4(1647)年年貢割付状⁽¹⁶⁾には小青田村とあることから、この間に現利根川縁の小青田村と現利根川水系内陸部の大青田村に分かれたのであろう。小青田(前掲駒形遺跡や小山台遺跡もその区域内)はいわばその分村に相当し、村高は大青田の約1/6～1/10にすぎない。恐らくその背景は利根川縁という条件ではあるが、近代明治10年代の陸軍迅速図でも北側台地下には沼地が広がっており、新田開発も主に台地東西の狭い谷田と集落背後の台地上を対象とするものであったのだろう。当然そのような環境は中世にはさらに顕著(水利不全の谷間と沼沢地)で、背後は広大な台地(近世には一時大青田牧とも呼ばれた高田台牧地)が広がっていた。柏～野田市にかけての利根川縁に城館が見られないのもこのような条件と関連があろうか。以下まずこの点を踏まえながら周辺の遺跡の状況を探ってみよう。

中世花野井や中馬場・法華坊が平坦な台地上に占地し、溝による区画性を有するのは街道や城館との関係であろう。また、流山の近接する一連の遺跡群は、戦国期の情報に富む「本土寺過去帳」や「下総之国図」に「三輪山」、「加村」、「キリカヤ」、「切谷」、ニシヒライ(ニシヒライ・矢木ニシヒライ・矢木舟津・ヤキヒライ)と見え、現松戸市本土寺の教線の及んだ地域であった。そして、戦国期の花輪城や前ヶ崎城、また鎌倉期の思井堀ノ内館といった城館群に近接し、かつ江戸川低地の支谷に面した台地上にあって、中世集落(津)の一部をなすものと考えられる。この当時、江戸川低地は未開発で、且つ背後は近世小金牧が迫っていた。一字故に村を付した加村や北村のようにその間に中世の村々が営まれていたのである⁽¹⁷⁾。城館との関係(根小屋・宿)や津・舟戸の存在、街道の有無、さらには立地環境や広く歴史的な環境復原が求められる所以である。

ところで、中世の屋敷地を巡る研究環境は近年大きく前進した。台地や丘陵縁を削平して平場区画を設



〈発掘調査された遺跡〉

- 1 富士見遺跡 2 駒形遺跡 3 小山台遺跡 4 寺前遺跡 5 花戸原遺跡
 6 中馬場遺跡 7 日本橋学園遺跡 8 上根郷遺跡 9 三輪野山第Ⅲ遺跡
 10 西平井二階畑遺跡 11 地区遺跡群 12 市野谷入台遺跡

〈城館〉

- ① 大宮城 ② 松ヶ崎城 ③ 布施城 ④ 法華坊館 ⑤ 根戸城 ⑥ 高田殿内
 ⑦ 戸張城 ⑧ 戸張要害 ⑨ 増尾城 ⑩ 猪山城 ⑪ 深井城 ⑫ 花輪城
 ⑬ 思井堀ノ内館 ⑭ 前ヶ崎城 ⑮ 名都借城 ⑯ 幸田城 ⑰ 中金杉城

※ 図文字は「本土寺過去帳」・「下能国図」など中世～近世初めの資料にみられる地名であるが、現在の表記に直している（例：太田→大青田）。

第133図 富士見遺跡中世環境復原図（約 1:40,000）

ける例は14世紀後半以降に出現し¹⁹⁸⁾、15世紀代に一般化してその後半(古瀬戸後期Ⅲ以降とりわけⅣ新)にピークを迎え¹⁹⁹⁾、16世紀代(瀬戸・美濃大窯期)に入ると急速に減少することがわかってきた。台地端というより平野ないし河川沿いの台地に大規模な屋敷・墓域が出現し、そのまま大窯期へ継続する場合もあるが、せいぜい大窯の1段階程度で断絶する例がむしろ多い。掘込型も15世紀には出現し、その後は同様の推移を辿っているものの、この種遺構は館や寺社、政所なども含んでいるようであり一様ではない。また、台地中央部ならともかく、台地端近くでは区別上困難という一面もある。両者が一体となって中世宿・村落景観を形作ったとみておくべきだろう。もちろん、中世宿・村は台地のみで語られるわけではない。中世村落名は海岸平野また大小河川の氾濫原や河谷沿いに分布するのが普通で、むしろ如上の変遷は中世における台地開発の歴史を物語っているのである。それ以前の場合は、台地を掘り下げることはなく、せいぜい溝とピット群(簡素な掘立柱建物か)・土坑程度で構成され、現状では調査例も僅か且つ小規模である²⁰⁰⁾。このような台地上における中世宿・村落の出現、展開、衰退の過程はもちろん低地の状況とリンクしているはずであり、当遺跡の場合も船戸・青田(太田)集落の立地的な変遷過程のうえにたつて考える必要があるだろう。

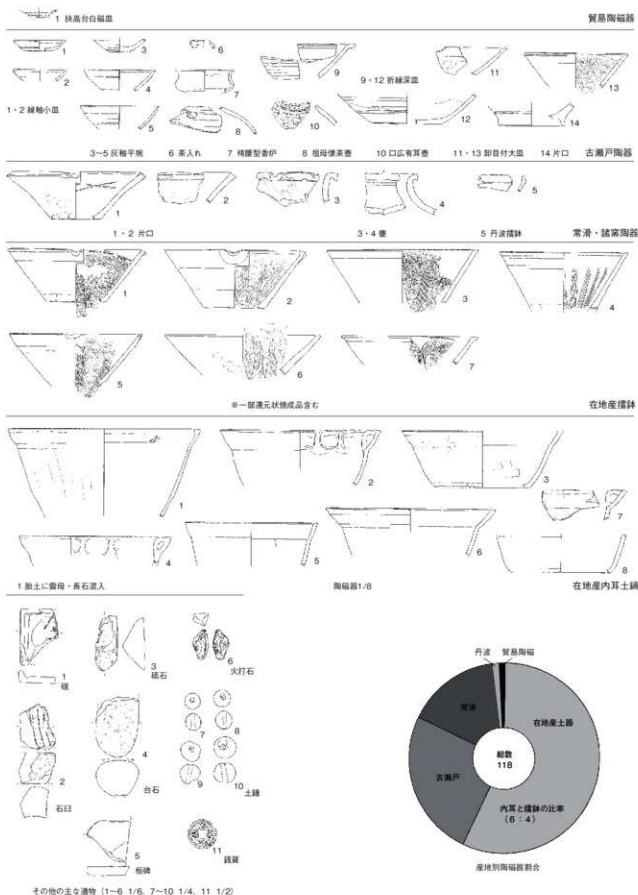
そうすると、富士見遺跡例は中世の人々が本格的に台地へ進出して程無い段階の屋敷地であったことになる。そして、城館でも寺社でもないことは類例との比較から明らかで、しかも既述した通りの遺物相を総合的に判断すればせいぜい数世代の在家村落とみてよいかもしれない。とすればそれは中世太田村から分かれた人々による富士見台新屋敷というべきながら、その生産基盤は貧弱かつ不安定であり、そのことが廃絶の一因ともなったのではなかろうか。なお、それは隣接する胸形遺跡や小山台遺跡でも程度の差はあれ共通するもので、遺構の希薄さはその表れといえるかもしれない。

4 遺物について(第134図)

最後に出土遺物について簡単にふれておきたい。その主体を占めるものは、在地産土器である。在地産といっても当地で生産したかどうかは不明であり、要するに磁器・陶器質以外の焼き物(播鉢には須恵質のものあり)をそう呼んだという一面があるが、一部雲母の入ったものは常陸産であろう。その比率は破片数ではあるが凡そ内耳土鍋6割に対して播鉢が4割であった。瀬戸播鉢かと思われるものが1点あるが、ほぼ播鉢は在地産で占められていたといえよう。機能的に類似するかと思われる常滑片口は、在地産播鉢に対して3割程度の比率を占めており、以後の時期的推移からして両者の用途は住み分けがあったのだろう。内耳土鍋は下総～上総にかけて15世紀代土器の主体をなすものであり、鉄鍋の代わりをなすものであった。

これに次ぐのが古瀬戸製品である。平坑、折縁深皿、鉀目付大皿、大小の皿の他に数は少ないが一通りの器種が入っている。この時期に至って下総でも広く普及し始めたことを示すものであろう。なお、1点丹波の播鉢がみられる。一方、常滑製品は相対的に比率を減じ、とりわけ甕に於いて顕著であり、しかも6a型式～9型式(中野編年)と幅がある。また、片口は総てⅡ型であった。貿易陶磁は14世紀の後半以降急激に減少し、古瀬戸製品と置き換わっているが、それでもこの時期に通有の扶高台白磁皿が1点ながらみられたのはその対応上有効である。しかし、時期的にそれに伴ってよい雷文帯青磁や細蓮弁文青磁碗はなく、もちろん青白磁梅瓶等の壺類は皆無であった。なお、我孫子市中屋敷遺跡(地下式坑と土坑群より構成)でも扶高台皿が出土しており一定の搬入量があったのであろう²⁰¹⁾。

在地産内耳土鍋と播鉢についてさらに補足しておきたい。出土した内耳土鍋はそのほとんどが外側に括



第134図 富士見遺跡中世出土遺物

れる口縁部を有し、古瀬戸後期Ⅲ内耳鍋の写とみてよい²²⁾。鉄鍋の模倣形ではあるが、単純に鉄鍋に取って代わったのではなく、その用途のある部分を安価故にカバーしたのであろう。また、挿鉢も口唇部に一条の凹線を有するタイプであり、同様古瀬戸後期Ⅲ挿鉢の写であろう。下総では内耳鍋がその後も継続して流通するのに対し、後期Ⅳ段階になると、急速に瀬戸の挿鉢に置き換わっていく(無くなるわけではない)。しかし、それにしてもカワラケがほとんどないのはどういうことなのだろうか。一般的にカワラケは城館・寺社・墓跡などで相対的に高い比率を示すが、ということはその対極にあるということかもしれない。

他の日常生活用品も砥石や石臼、土鍾程度で貧弱であった。硯や銭貨もみられるものの、微量である。また、金属製品や木・竹製品は残りにくいという条件を指し引いても皆無という状況であった。

以上、遺物のうえからみると、古瀬戸後期Ⅲの年代観や幅の流動性はあるとしても、恐らく15世紀前半のなかに収まるものであろう。そして、他の生活用品も含めその当時下総で流通した日常的な陶器・土器類を少ないとはいえ、一通りは消費している事実が明らかになった。もちろん量的な面からすれば、古瀬戸後期Ⅲという1型式内にほぼ収まるというこの遺跡の時期的な幅にも起因するであろうが、その意味でも貴重な資料ということが出来よう。

注

- (1) 「段切遺構」と「台地整形区画」は基本的に同じものを指しているが、県内では従来後者(伊藤智樹 1986「土壌群を伴う竪穴状区画について—台地整形区画に関連して—」研究連絡誌 第17号)が使われてきた。しかし、内容としては「土壌群を伴う竪穴状遺構」乃至は「土壌群を伴う区画遺構」として論述されており、表面のみが定着した感がある。
- (2) 筆者は「堀込遺構」として報告したが、その原型は築瀬の提唱した「堀込型屋敷」にある。築瀬は千葉市内における伝承から、「ほっこみ」とは周囲を土手などで区画されたある程度の規模を有する屋敷跡や寺跡のことを指したものとし、さらに類例を検討して「敷地を掘り下げて、その廃土を周囲に盛り上げて土塁とするタイプの屋敷」を仮に「堀込型屋敷」と呼んだ(『千葉市源町遺跡群—高津戸遺跡・南屋敷遺跡—』(財)千葉市文化財調査協会 2001)。城館との違いは周囲に堀のないことであり、それにもまた幾つかのタイプがあることを指摘している。ただ築瀬のあげたタイプは多様なものを含んでおり、いわゆる台地整形区画や城館との分離も困難である。それゆえここでは築瀬の提唱を生かしながらも「堀込遺構」とした。
- (3) 火葬に用いた地下施設については、火葬土坑、火葬墓、火葬跡など様々に呼称されている。地域性や時期的な変遷があることとて、ここでは火葬遺構として一括した。
- (4) 屋敷ということであれば、当然居住施設を前提としたものになるが、ここでは掘立柱建物は未検出であった(区画1内にその可能性はあるが)。しかし、方形竪穴遺構は区画1・2に一定数あり、柱穴をもつものもあるなど、否定材料にはならないと考える。なお、地下式坑のみで掘込が形成されるものがあるなど、この種遺構を総て原敷地とすることは出来ないだろう。あえて言えば「その一画」がそれぞれ「□×掘込」である。
- (5) (公財)千葉県教育振興財団 2013「柏北部東地区埋蔵文化財調査報告書5—柏市駒形遺跡—縄文時代以降編2」
- (6) 千葉県教育振興財団調査、未報告であり、詳細不明。
- (7) 柏市教育委員会 2002「千葉県柏市 寺前遺跡」
- (8) 数次の調査報告がある(日本国有鉄道複々線工事関係遺跡調査団 1972「中馬場遺跡・妻子原遺跡」・柏市教育委員会

- 1976「中馬場遺跡 第三次発掘調査報告書」・我孫子市教育委員会 1977「根戸城遺跡－法華坊遺跡発掘調査報告書－」・我孫子市教育委員会 1978「根戸城遺跡 法華坊遺跡・北ノ内遺跡 発掘調査報告書 第二次調査」・我孫子市教育委員会 1986「西原遺跡・根戸城跡」・柏市教育委員会 1999「柏市埋蔵文化財調査報告書38 中馬場遺跡(第4次)」)。なお、藤沢良祐の分類に基づき築瀬が出土陶磁器・土器の集計・分析を行っている(築瀬裕一 2003「柏市中馬場遺跡の中近世遺物について」『房総中近世考古』第1号)。
- (9) 1976・1977報告で環境復原がなされているが、発掘調査結果を検討する限り、旧道は現在の水戸街道より東側から台地へ上り、法華坊外郭線先を並行するかたちで北上していたと推測される。なお、法華坊遺跡はその城郭遺構について法華坊跡と呼称しており、従来は東側のみを単郭と理解されていたが、西側にも大きな郭を付設する複郭城跡であり、その南西部に街道から入る虎口があったようである。
- (10) 築瀬裕一 2003「柏市中馬場遺跡の中近世遺物について」『房総中近世考古』第1号
- (11) 1次・2次で中世の遺構が検出されている(我孫子市教育委員会 2003「平成14年度市内遺跡発掘調査報告書(中屋敷遺跡第2次ほか5遺跡)」)。
- (12) 流山市教育委員会 1988「千葉県流山市 三輪野山Ⅲ遺跡」ほか
- (13) 流山市教育委員会 2000「加地区遺跡群Ⅳ 町畑遺跡G地点」
- (14) 下花輪第二遺跡調査団 1973「流山市大町台・下花輪第二遺跡調査概報」
- (15) 流山市教育委員会 2009「中世の流山を探る」流山市立博物館調査研究報告書26
- (16) 柏市 1970「柏市市資料編七」諸家文書上
- (17) この点、既に研究蓄積がある(松下邦夫 1989・1994「中世末の流山を考える(三)－平方村、中野木村、桐ヶ谷郷七か村の中・近世考－」・矢木・八木の中近世」『流山市史研究』第6号・第11号 流山市教育委員会/流山市教育委員会 2000 流山市立博物館調査研究報告書26「中世の流山を探る」ほか)。
- (18) 古瀬戸後期Ⅱ以降に一般化する。初期の代表的な遺跡としては、成田市小菅天神台Ⅱ遺跡・名木不光寺遺跡、茂原市神田山Ⅲ遺跡などがあげられ、区画性は弱く、掘立柱建物と方形竪穴、土坑群から構成される。なお、神田山Ⅲ遺跡では地下式坑の粗型らしきタイプが見られる。
- (19) 例えば、東京湾岸の船橋市東中山台・印内台・宮本台遺跡群、千葉市中野台・伯父名台遺跡、市原市因分寺台遺跡群、印旛沼に注ぐ鹿島・高崎川流域の六崎貴船台・同外出遺跡・高岡遺跡群・白井屋敷遺跡などである。なお、関係文献は省略する。
- (20) 常滑5～7型式の片口(I・Ⅱ類)・壺・壺を主体に、古瀬戸中期様式の碗・皿、青磁碗などから構成される時期(凡そ13～14世紀)で、類型としては印西市天王台西遺跡、船橋市印内台遺跡群、成田市内野遺跡、千葉氏有吉北貝塚(上段)などがある。
- (21) 我孫子市教育委員会 2003「平成14年度市内遺跡発掘調査報告書 野守遺跡第6次 水神山古墳第2次 中屋敷遺跡第2次 チアミ遺跡第11次 君作遺跡第11次」、但し報告では単に陶器とする。
- (22) 例えば、15世紀後半以降の船橋市東中山台遺跡群では、口縁外反の上縁は無くなっている(船橋市教育委員会 2007「東中山台遺跡群(36)」ほか)。なお、掘鉢も含め築瀬による千葉県内の集合作業がある(築瀬裕一 2009「千葉県の内耳土器・焙烙・土器掘鉢・鉄鍋集成」『房総中近世考古』)。

第4節 近世溝群 (第135図)

近世の遺構はその性格上2種類に大別出来る。一つは調査区南端の台地ネック部を横断するように並列する溝群(南端境界溝群)であり、また一つは台地上の矩形の溝区画地群である。前者は高田台牧小青田の土手に伴うものであり、後者は近世以降の畑地(一部は道路側溝)と思われることから、主に牧関連の遺構についてふれることとした。

南端境界溝群は5列あり、その様相はA:断面箱葉研状の溝、B:断面V字状の溝で底面に小円形土坑列を伴う、C:溝内に円形土坑と深い大形土坑が混在する、D:断面不定形の浅い溝、の4タイプに分けられる。それぞれ1列目がA、2列目がB、3・4列目がC、5列目がDに該当する。Aタイプは当地野馬除け土手堀に通常みられるもので、本遺跡の場合、規模的にも普通ないしは僅かに小形といったところである。Bタイプは時折みられるもので、むしろ牧以外で多く確認される。Cタイプは小金牧それも高田台牧で検出例の多いものであるが、他では深穴のみが断続する例も多く、比較上これも含めておく。Dタイプは単なる溝であり、牧というより境界溝の一種かと思われる。そうすると、このA-Cタイプは牧に伴う堀つまり土手堀としてよいであろう。当地では並列する場合はむしろこれらが組み合わさって機能していたと思われる。

ところで、調査では肝心の土手本体は対象とはならなかったが、18世紀前半代の享保期には1列目の南側辺りに土手が存在したことが既に過去の研究⁽¹⁾から明らかにされている。また、その東側延長の大室字大木戸付近の調査⁽²⁾でも指摘されている。江戸中期の寛保期郷差出帳に「野馬除堀土手壱ヶ所」⁽³⁾とみえるのがこれであろう。高田台牧南側を画する篠籠田ではA-Cタイプの土手堀が並列する例⁽⁴⁾がみられるが、その間は通常土手列となっている。そうだとすれば、ここでも各堀の間には小規模ながらも土手が存在したとみてよい。二重土手ならぬ多重の土手である。もちろんこれらが同時期に作られたとは考えられず、明瞭な切り合いを示す例もあるが⁽⁵⁾、富士見の場合はほぼ並行して作られており、前の堀を意識した上で掘られた結果、多重になったのであろう。18世紀終わりの寛政期大青田村の資料には従来「一文土手堀」であったが、野馬入りを防ぎかねるので新たな土手堀を築きたいとする要望が出されている⁽⁶⁾。これは、台地上の畑地の溝などから出土した陶磁器・土器の年代(18世紀後半~19世紀前半)とも一致し、開発に対応するものと考えられる。この点、同じ下総牧ではあっても小金牧に比べて佐倉牧では通常堀の規模は小さく⁽⁷⁾、また、土手も一重である。地域差も存在するのである。

野馬除土手とはその名のとおり野馬が村内に侵入し農作物を荒らすのを防ぐ目的で掘られたものである⁽⁸⁾。その前後ないしどちらかに堀を伴うのは障壁のほかにその土砂で土手を築く利便があるためながら、他にも理由がありそうである。というのはB・Cタイプの堀は必ずこの堀底に沿って作られており、土手堀と一体化した存在だからである。先ずBタイプの堀は実は牧の土手堀のみならず、台地と斜面ないし畑と山林との境界などにもしばしばみられるもので、害獣それも小動物が想定される⁽⁹⁾。一方、Cタイプの堀はその分布が高田台牧に集中しているなど土手堀全体からすればむしろ特殊なタイプといてよい。円形の深穴を除けば基本的にBタイプとそれほど異なるものではないので、この深穴の性格をどう解するかということになろう。なお、この他にも大青田中山新田Ⅱ遺跡のように堀底に長方形の土坑が連続するタイプなどもある⁽¹⁰⁾。

ところで、牧に伴う深穴といえば先ずシシ穴(イノシシのみならずシカも含む)を思い浮かぶかもしれないが、牧以外での発見例が多く幾つものタイプが知られている。最も多いのは楕円ないし細長い落とし

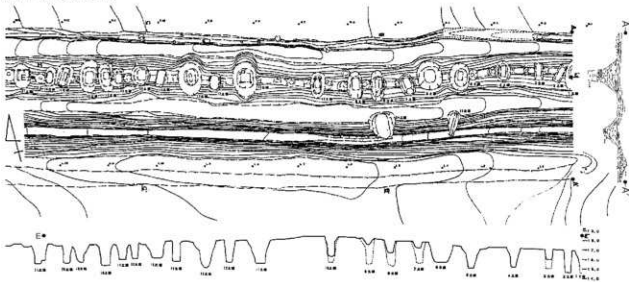


松下邦夫「小金牧、高田台牧と上野牧の牧域図」(小室田村近約1:50,000)

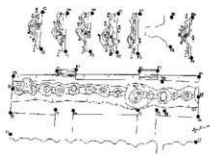
注(1) 松下文献から引用



明治10年代陸軍迅速図(約1:50,000)



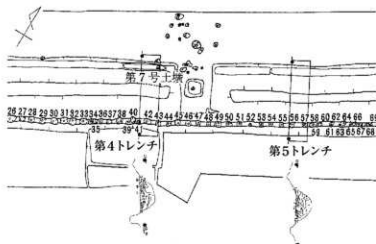
柏市篠菟田篠塚の野馬除土手と堀(〔柏市埋蔵文化財調査報告書24〕)



柏市篠菟田今泉遺跡の堀

(〔昭和62年度市内遺跡群発掘調査報告書〕)

0 (1:400) 10m



柏市高田三勢野馬除土手と堀

(〔柏市埋蔵文化財調査報告書〕1986)

第135図 高田台牧(小室田~大室~正蓮寺)と周辺の主な野馬除土手・堀調査例

穴タイプを連続させたもの⁽¹¹⁾であり、楕円や円形の井戸状深穴を断続的に連続させた例(当遺跡Cタイプ)も広く検出例がある⁽¹²⁾。前者については谷への降り口手前に設けたり、両脇から溝が派生している例が少なからず存在することから⁽¹³⁾、誘引したり、追い込めたりして捕殺する一種のワナ罠であろう⁽¹⁴⁾。それゆえ、このタイプは、牧内はもちろん何かと制約の多い野馬除土手に伴う例がほとんどなのである⁽¹⁵⁾。

一方、後者は土手堀内にも牧外の台地上にも広くみられるもの、土手堀内は通常浅い円形土坑とセットで構成される。牧内からの猪・鹿と小動物に対して牧外から侵入しようとする犬を共にブロックし、且つ横への移動を妨げたり落とし穴へ誘導する手法として用いられたのではなからうか。小金牧周辺でも野馬のみならず「猪鹿」の害は近世を通じて村人の悩みの種であり、その対策を物語る興味深い資料がある。天明元(1781)年、金ヶ作村の農民達は荒地を開発し、周囲を土手囲いとしたが、「猪鹿自由二通ぬけ」でしまうので、土手の高さを6尺、表は屏風のようにする計画である、しかし、当地では土手越えなどはいつものこととて、その際に「幅六尺深さ六尺之堀」を掘りたいと申し出ている⁽¹⁶⁾。幅に比して深さがあることから、あるいは深穴とも思われるもののそれ以上はわからない。しかし、野馬除けの土手だけでは「猪鹿」には対処出来なかったことは確かである。

高田台牧は下総牧のなかでは最も多くの「御林」を抱えていた⁽¹⁷⁾。この御林とは林地それも牧内の公儀山林のことで、村方でその経営を請け負ったためか牧絵図にも請地林とある⁽¹⁸⁾。野馬の寒暑凌ぎや里入り防止に有効であったかもしれないが、このような林は猪や鹿にはかえって好都合であった。それゆえ、この地の堀とはむしろ「猪鹿」除けを主としたものとなったのではなからうか。それに加え、小青田村では近世前半にこれといった新田開発もなく、後半に至って台地の開発が始まったものの、土手ラインを移動させる程のものではなく、その結果同一の場所で並列していったとも考えられる。しかし、それだけでは凌げ事足りることもあって、新たに堀を設ける理由としては不十分である。この辺は将来の課題であろう。なお、明治10年代の迅速図では約100m南に並行するように走る現県道我孫子・間宿線に沿って、野馬除土手らしき表示が確認される。幕末期にその後移動したのであろうか。

注

- (1) 松下邦夫 1996「近世小金牧の実測図」『流山市史研究』第13号・千葉県教育委員会 2006「高田台牧・上野牧」『房総の近世牧跡』なお、「嘉永四年 高田台牧土手間数勢子人足其外村々高反別控帳」(『白井町史』史料集I)に拠れば、船戸・小青田・正蓮寺・若芝四村の土手は享保15年の原新田高入れのとき新期に築いたものとする。
- (2) 柏市教育委員会 1997「大室宇大木戸1152-5地先野馬堀」[平成7年度 市内遺跡発掘調査報告書]
- (3) 柏市 1970「寛保元年 小青田村郷差出井文化六年増減書上帳」[柏市史資料編七] 諸家文書上
- (4) 例えば、3重の土手と2列の堀(AとCタイプ)からなる篠籠田篠塚付近(『柏市埋蔵文化財調査報告書』24・同36・同45)が好例である。
- (5) 例えば十余二鴻ノ果野馬除土手では数次にわたる堀の掘り直しが明瞭である(柏市教育委員会 1996「柏市埋蔵文化財調査報告書31」・柏市教育委員会 2005「平成15年度 柏市内遺跡発掘調査報告書」ほか)。
- (6) 柏市 1970「寛政六年 野馬防土手築立願書」[柏市史資料編七] 諸家文書上
- (7) これは土手予定地周囲の表土を一定の幅で削り取って用いたからであり、嶺岡牧における石積み土手の採用など地域性と捉えられる。
- (8) 牧に関わる用語については当時の用例を用いるのが妥当である。この点、次ぎの文献参照のこと。

中林正憲 1986 「小金の牧」の用語解説(1) - 「習志野市史」史料編(1)を中心として - 『習志野市史研究』2

- (9) 従来欄列として報告されてきたものであり、土坑の規模にも大小がある。柏市内では高田三勢例が典型例(柏市教育委員会 1986『柏市埋蔵文化財調査報告書』)である。また、「直径一〜二メートル位の穴」については既に大落し穴説がある(松下邦夫 1980「最近の私の原稿などから」『松戸史談』第20号)が、筆者はそれに加えてアナグマ等の害獣も想定している(小高 2020「中・近世のおゆみ野」『研究連絡誌』第70号ほか)。
- (10) (財)千葉県文化財センター 1984「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ-花前Ⅰ・中山新田Ⅱ・中山新田Ⅲ-」
- (11) この種類類にもその列構成上、単列型(成田市瓜生池遺跡)、並列型(印西市割野遺跡、八千代市東向遺跡、四街道市笹目沢Ⅱ遺跡、成田市寺沢遺跡、大網白里市一本松遺跡南側シシ穴群など)類例は多い、ブロック型(芝山町大里馬土手、白井市唐沢・根シシ穴遺跡)など幾つかのパターンがある。
- (12) 四街道市中ノ尾倉遺跡、佐倉市神楽場遺跡、成田市岩山中袋遺跡、東金市ヲフサ野遺跡例などであるが、Bタイプと深穴のみが並列する白井市二部山遺跡のような例もある。
- (13) 例えば谷頭に直交するように列をなす成田市瓜生池遺跡や、両方から迫る土手・溝列の開口部に深穴群を配した八千代市東向遺跡また千葉市有吉北貝塚例が好例である。
- (14) これらが勢子によって追い立て、網を併用して捕殺し槍にて突き殺す猟であることは幾つかの文献(松下邦夫 1990「猪鹿の「穴捕」と「網捕り」の仕様」『松戸史談』第30号・江戸中期佐倉市萩山例 佐倉市史編さん委員会翻刻「古今佐倉真佐子」)から明らかである。なお、季節は獣が活発化する前の春先である。
- (15) 土手に隣接して検出された芝山町大里例ほかがある。
- (16) 現在の群馬県草津市での成功例を引き合いに新たな土手堀の設置を願ったものである(松戸市 1958「天明八年二月金ヶ作村彦次右衛門頼順上書」『松戸市史料』第三集)。
- (17) 白井市 1984「小金三牧・佐倉四牧の公儀林と本敷」『白井町史』史料集Ⅰ
- (18) 例えば注1『流山市史研究』所載「小金上野高台両御牧大凡図」(江戸後期か)

引用文献一覧

- 四街道市吉岡遺跡群遺跡調査会 1986「四街道市 吉岡遺跡群発掘調査報告書」
- (財)印旛郡市文化財センター 1991「千葉県佐倉市 神楽場遺跡・五反目遺跡」
- (財)印旛郡市文化財センター 1994「千葉県印旛郡白井町 二部山遺跡発掘調査報告書」
- (財)印旛郡市文化財センター 2007「千葉県四街道市笹目沢Ⅰ遺跡(第1・2次)・笹目沢Ⅱ遺跡(第1・2次)」
- (財)山武郡市文化財センター 1995「大網山台遺跡群Ⅱ」
- (財)千葉県文化財センター 1985「東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ-成田地区-」
- (財)千葉県文化財センター 1989「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅸ」(白井根塚群・唐沢シシアナ遺跡ほか)
- (財)千葉県文化財センター 1997「土木保守管理センター等埋蔵文化財調査報告書-成田市三里塚卸牧場遺跡・芝山町岩山中袋遺跡(空港№2遺跡)-」
- (財)千葉県文化財センター 1998「千葉東南部ニュータウン20-千葉市有吉北貝塚2-」
- (財)千葉県文化財センター 1999「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ⅩⅢ」(割野遺跡ほか)
- (公財)千葉県教育振興財団 2014「西八千代北部地区埋蔵文化財調査報告書4-八千代市東向遺跡・坪井向遺跡・川向遺跡・庚申山塚群・八王子台遺跡-」

半沢幹雄 1996「東金市ヲフサ野遺跡のシシ穴」『研究連絡誌』第45号

写 真 图 版



花前I遺跡

花前II遺跡

花前III遺跡

館林II遺跡

矢船I遺跡

矢船II遺跡

駒形遺跡

富士見遺跡

大松遺跡

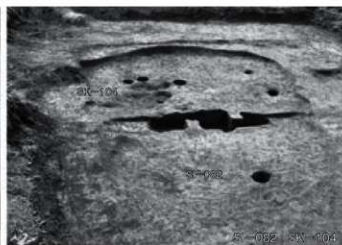
原畑遺跡

小山台遺跡

宮前遺跡

寺下前遺跡

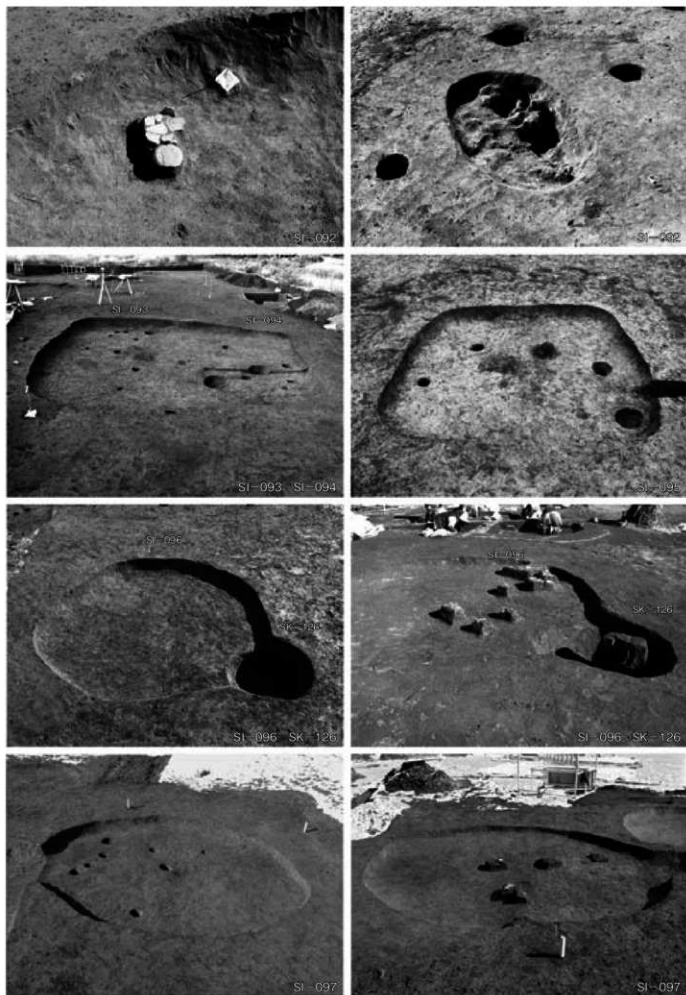
八反目台遺跡



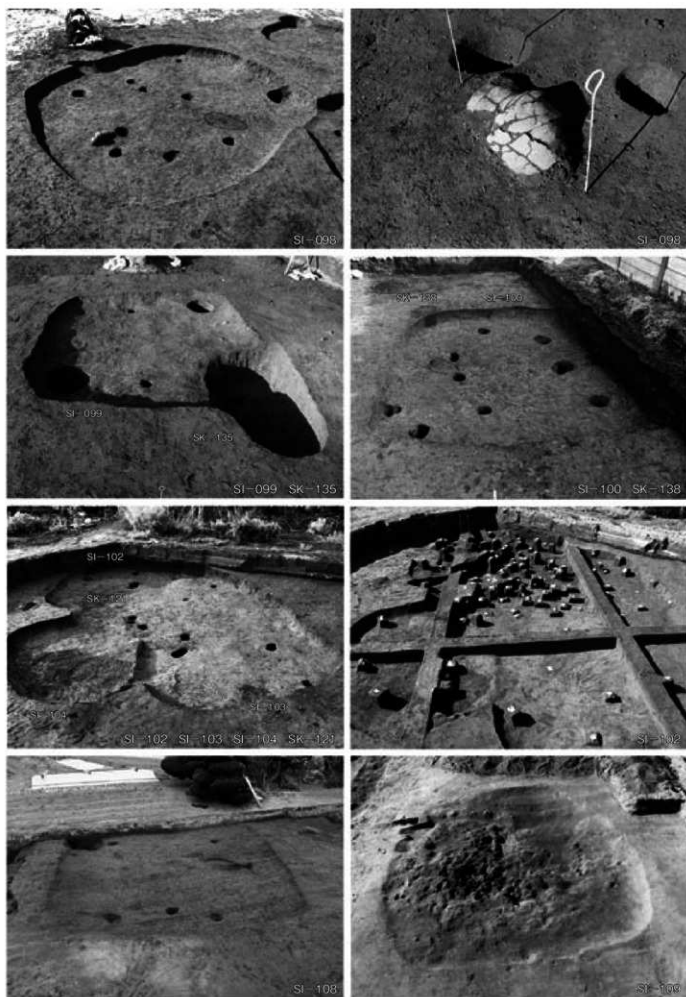
縄文時代竪穴住居 (1)



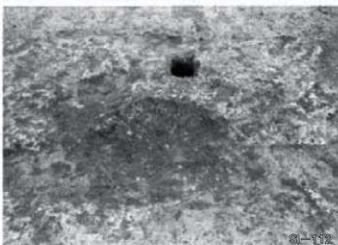
縄文時代竪穴住居 (2)



縄文時代竪穴住居 (3)



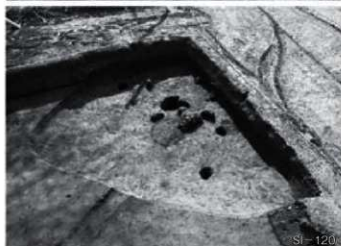
縄文時代竪穴住居 (4)

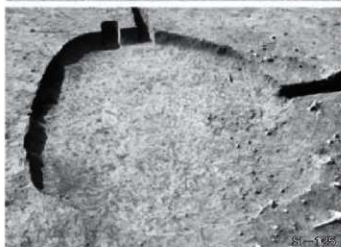
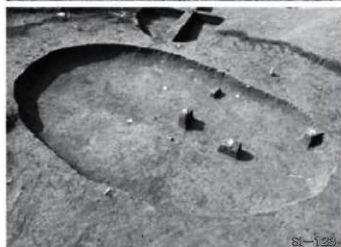


縄文時代聚穴住居 (5)



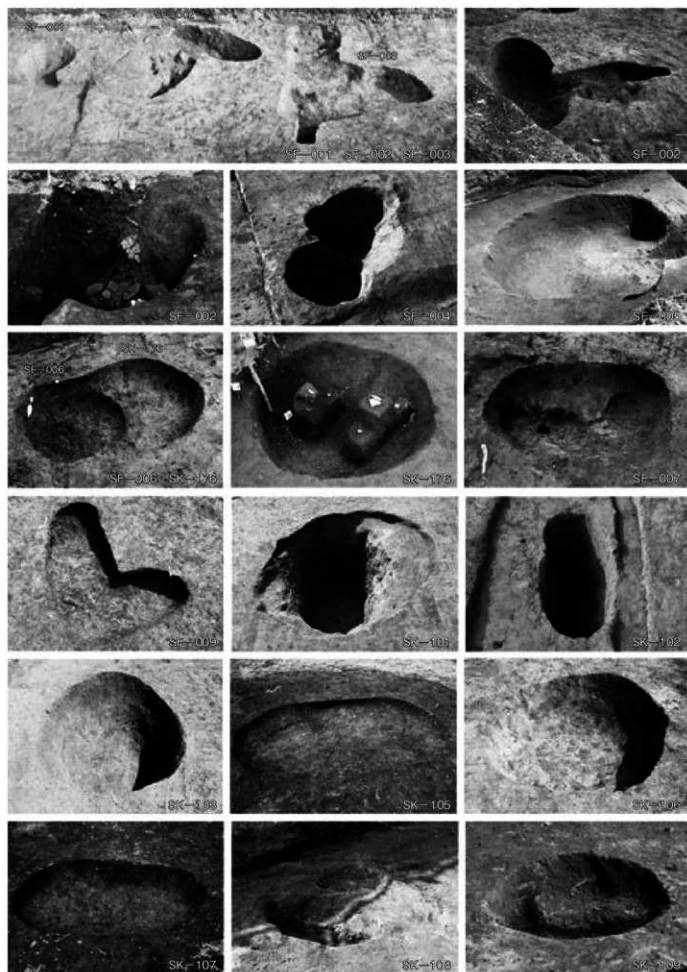
縄文時代竪穴住居 (6)



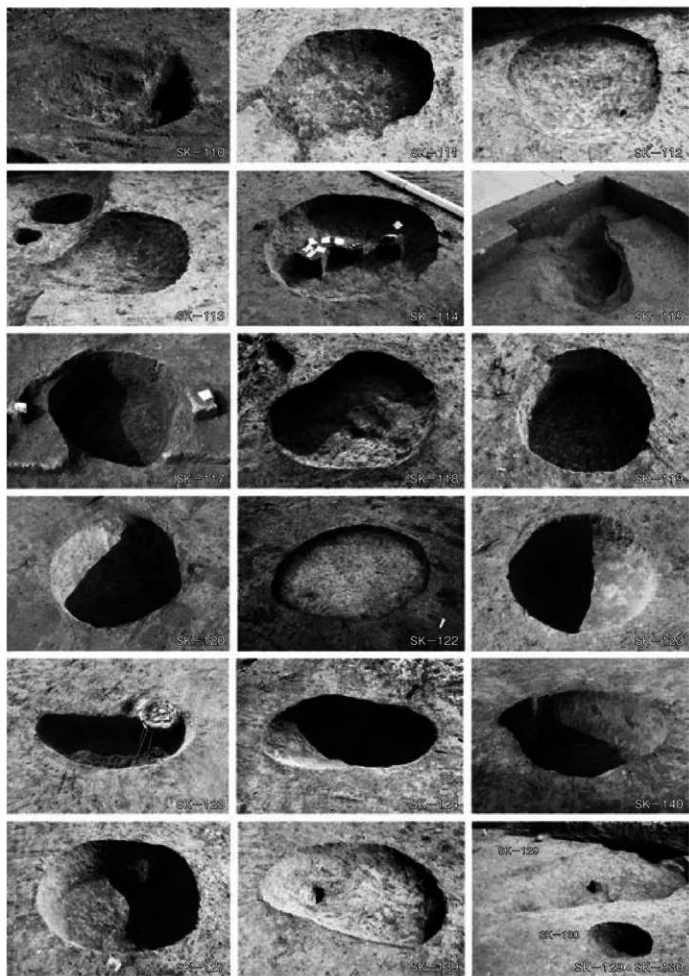


縄文時代竪穴住居 (8)

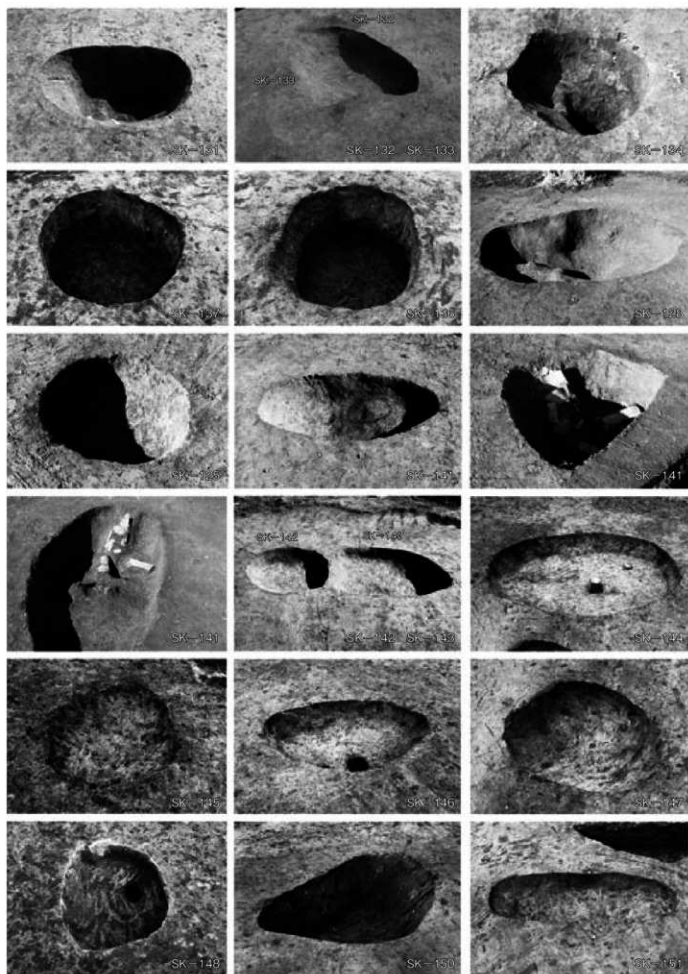




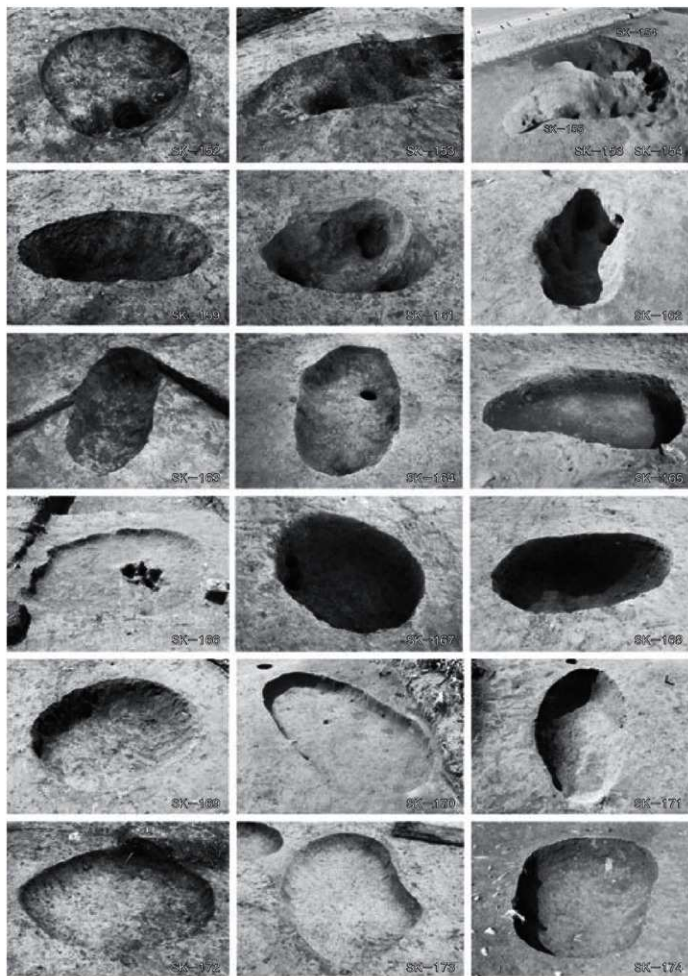
炉穴、陷穴、繩文時代土坑（1）



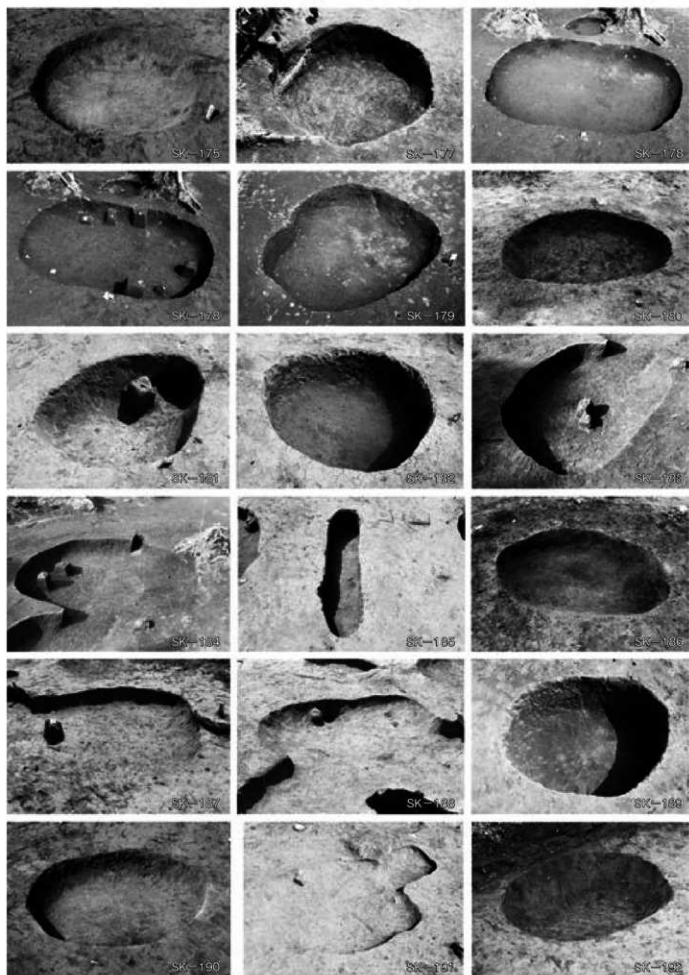
縄文時代土坑（2）



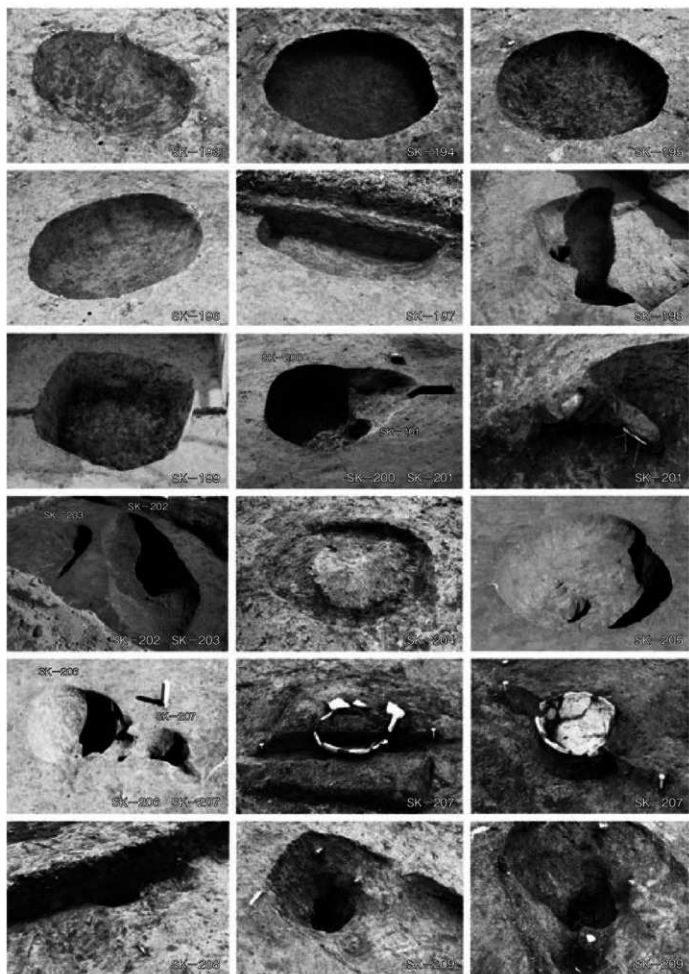
縄文時代土坑 (3)

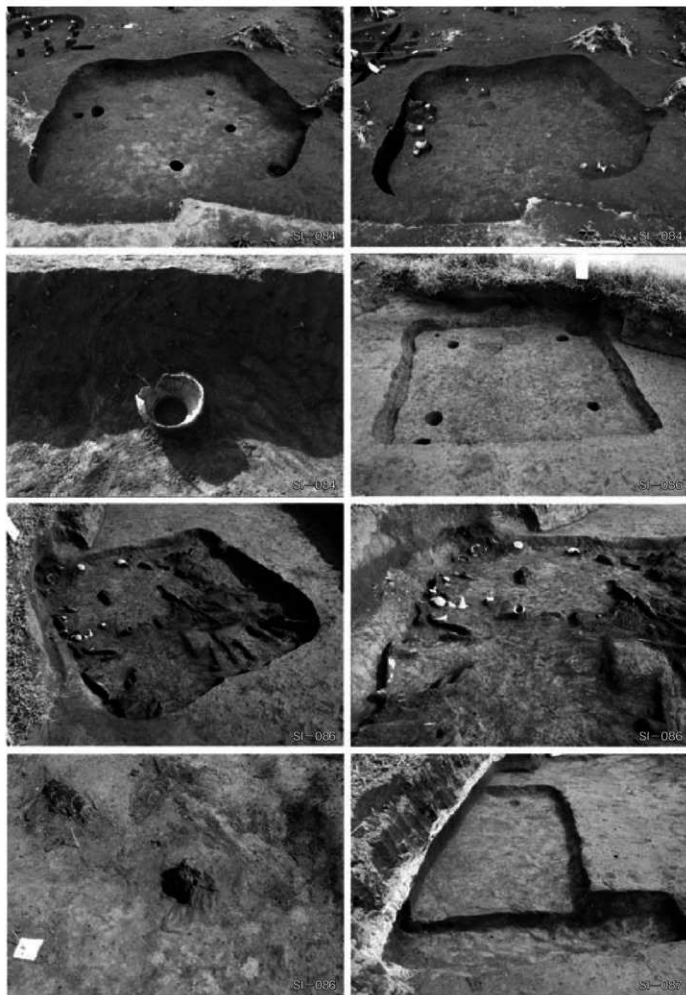


縄文時代土坑(4)

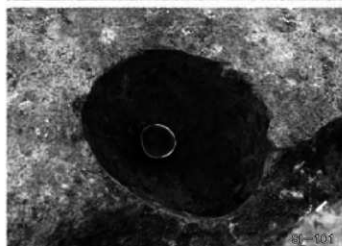


縄文時代土坑 (5)





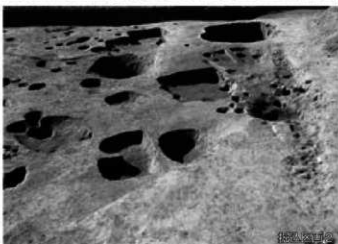
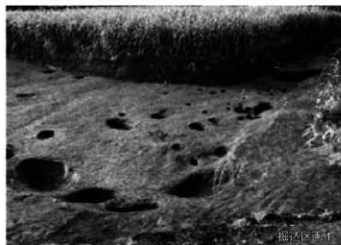
古墳時代竪穴住居 (1)



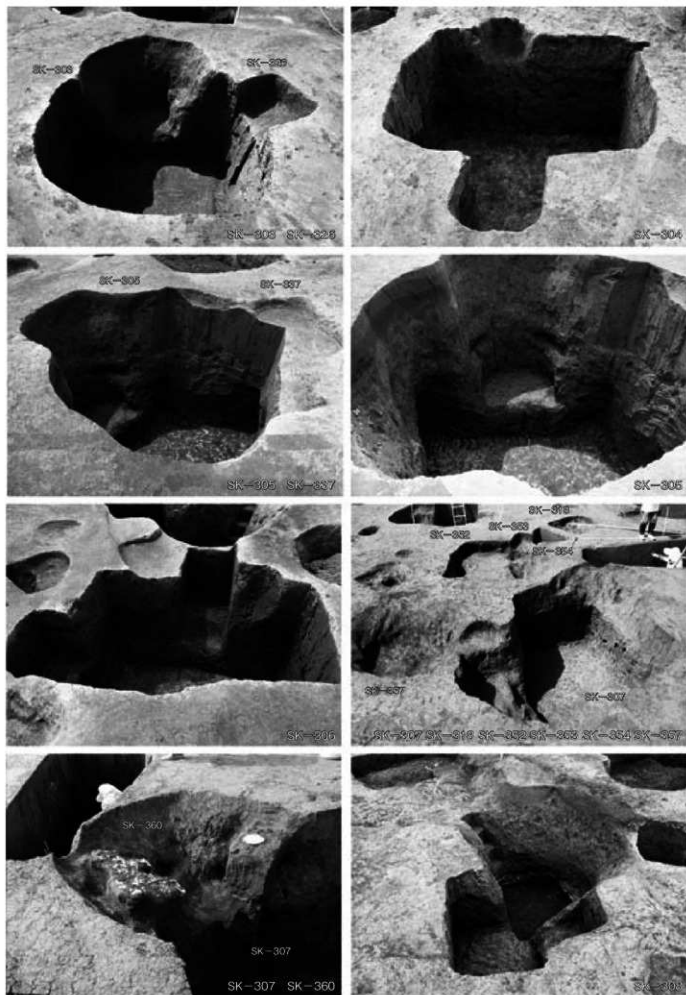
古墳時代竪穴住居 (2)



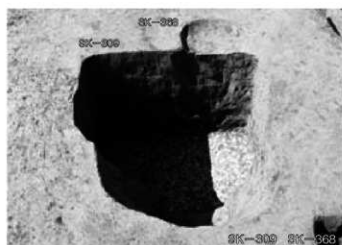
古墳時代竪穴住居 (3)、古墳



中世掘込区画、地下式坑 (1)



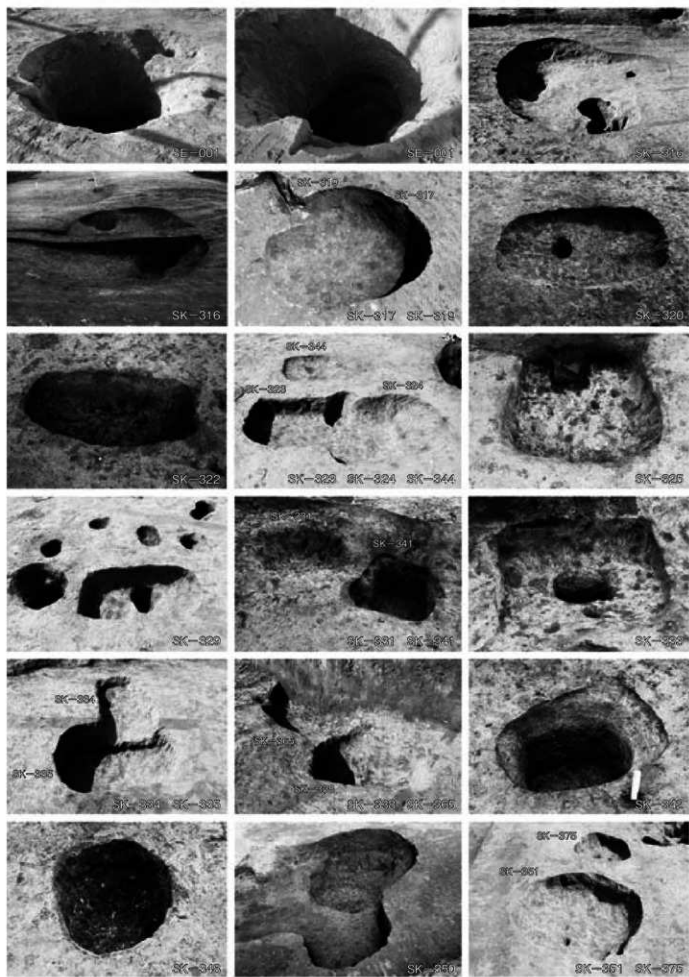
地下式坑 (2)



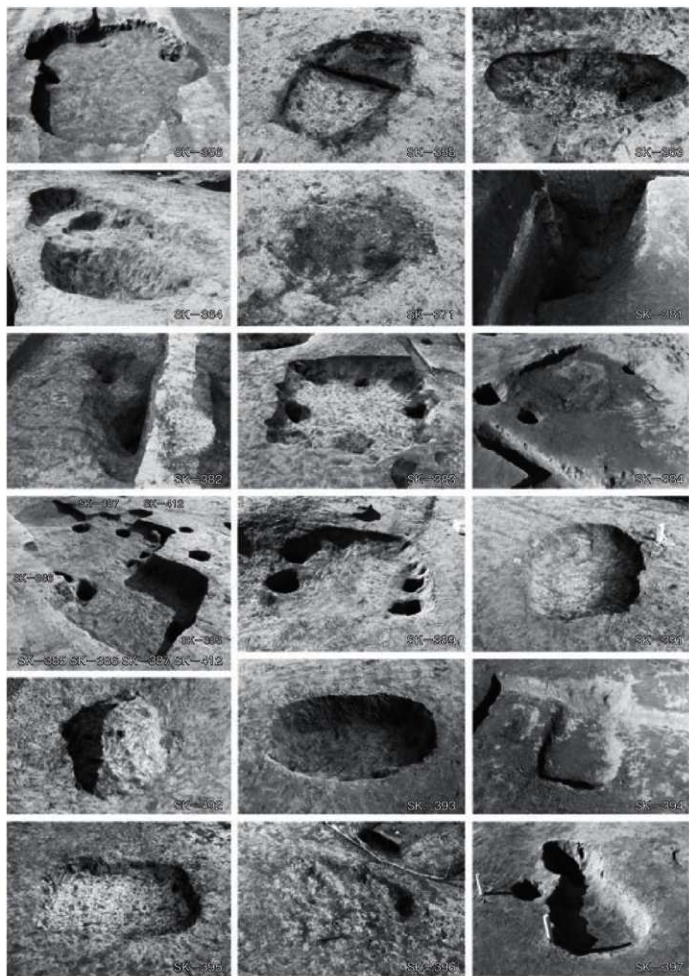
地下式坑 (3)



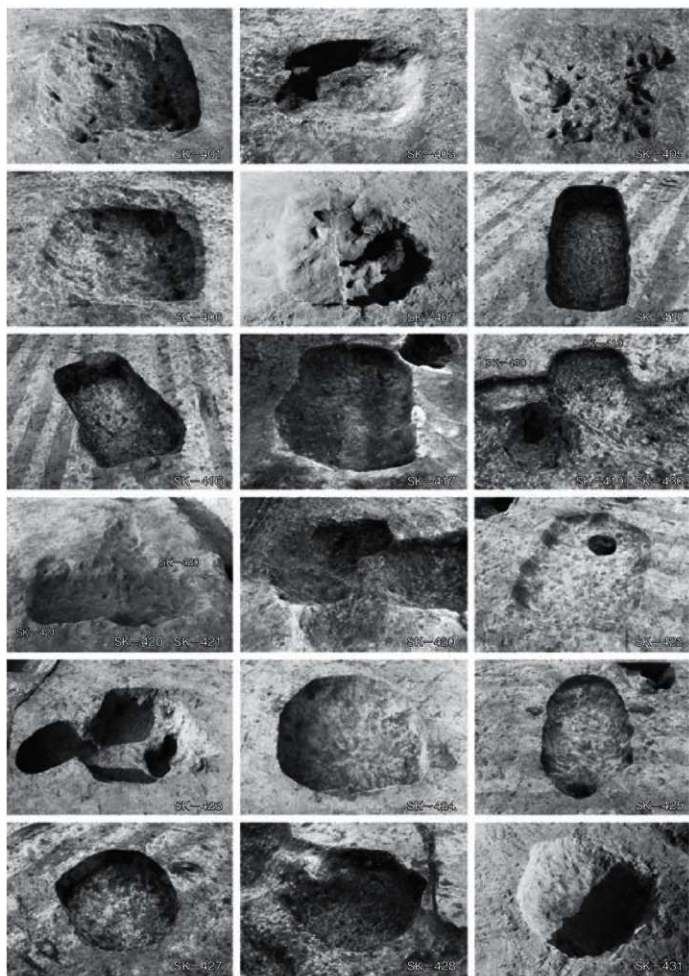
地下式坑 (4)



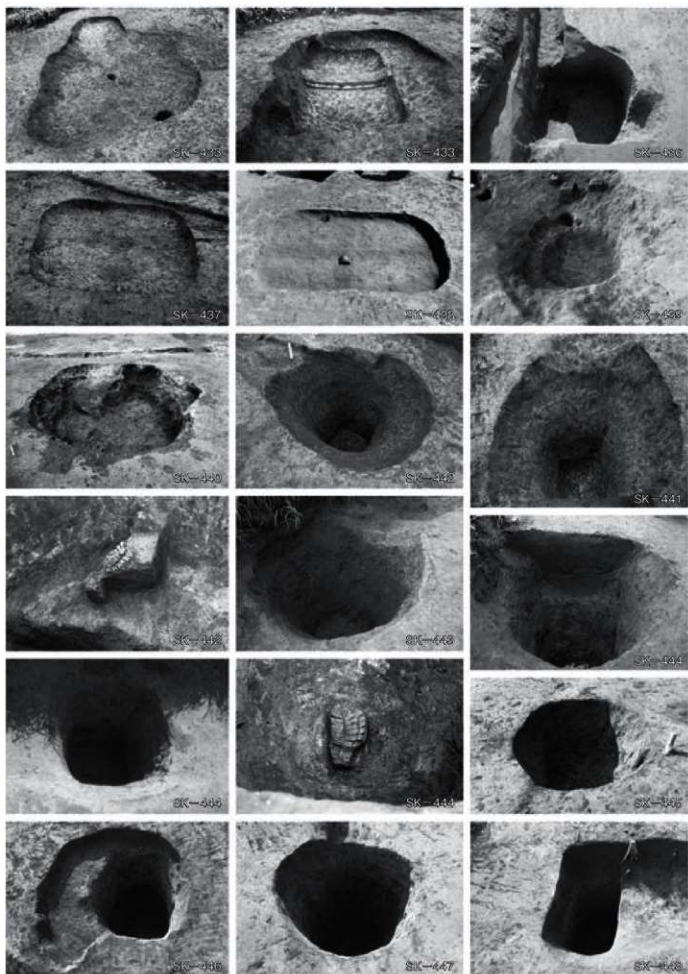
中世井戸、土坑 (1)



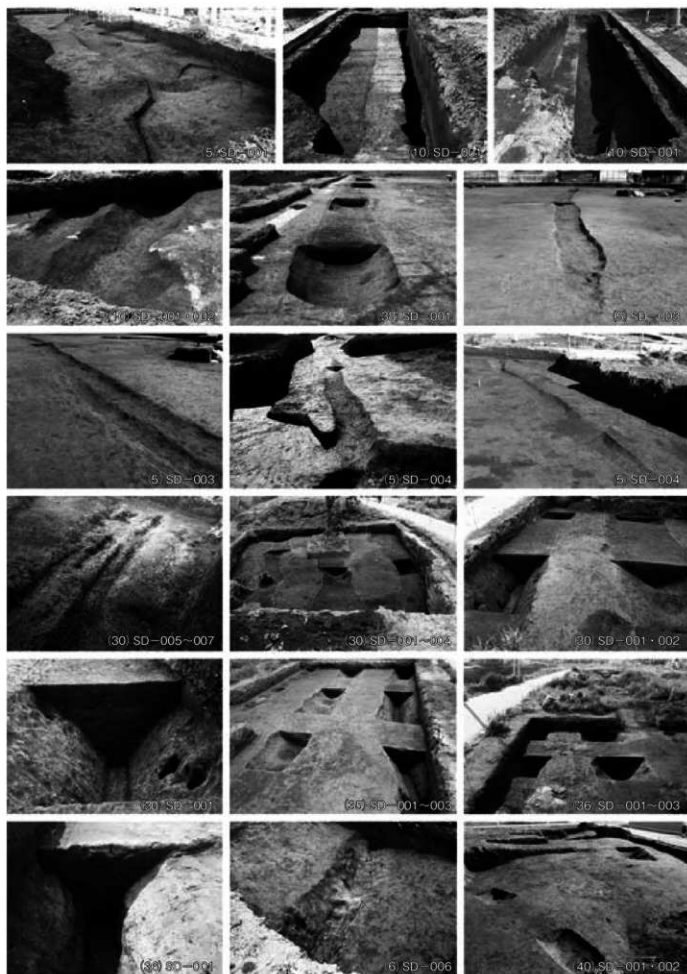
中世土坑 (2)



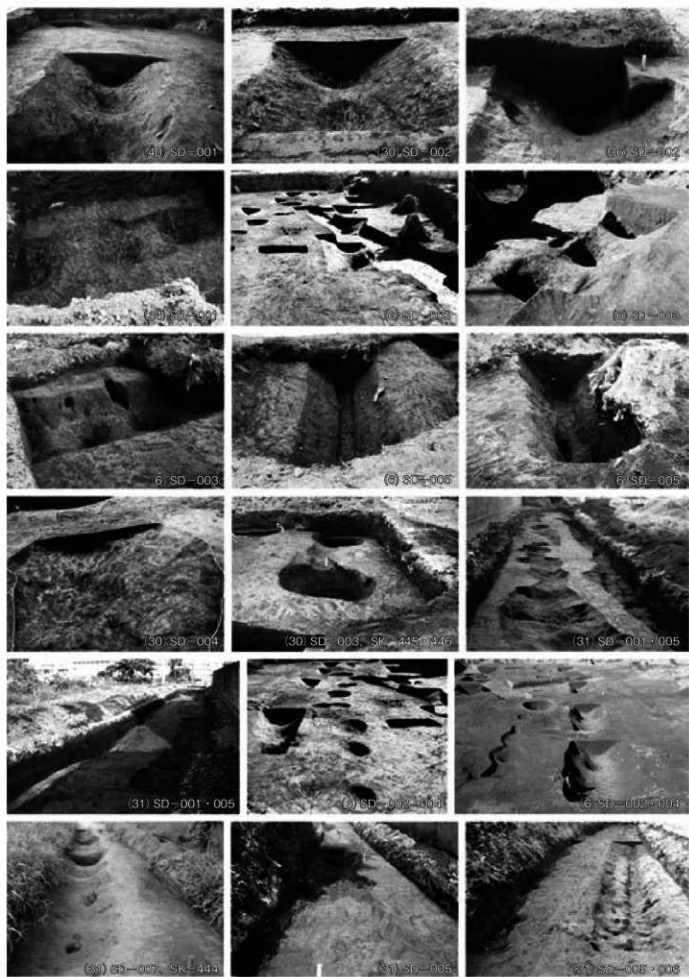
中世土坑 (3)



中世土坑(4)、近世土坑



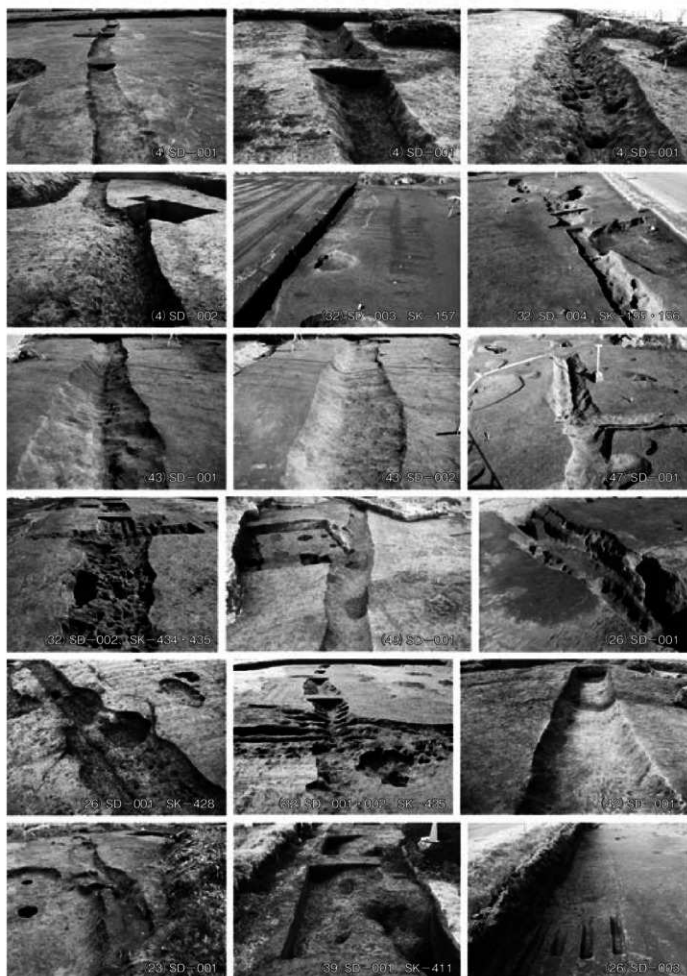
溝状遺構 (1)



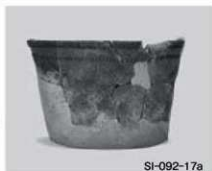
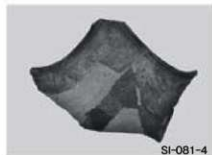
溝状遺構 (2)



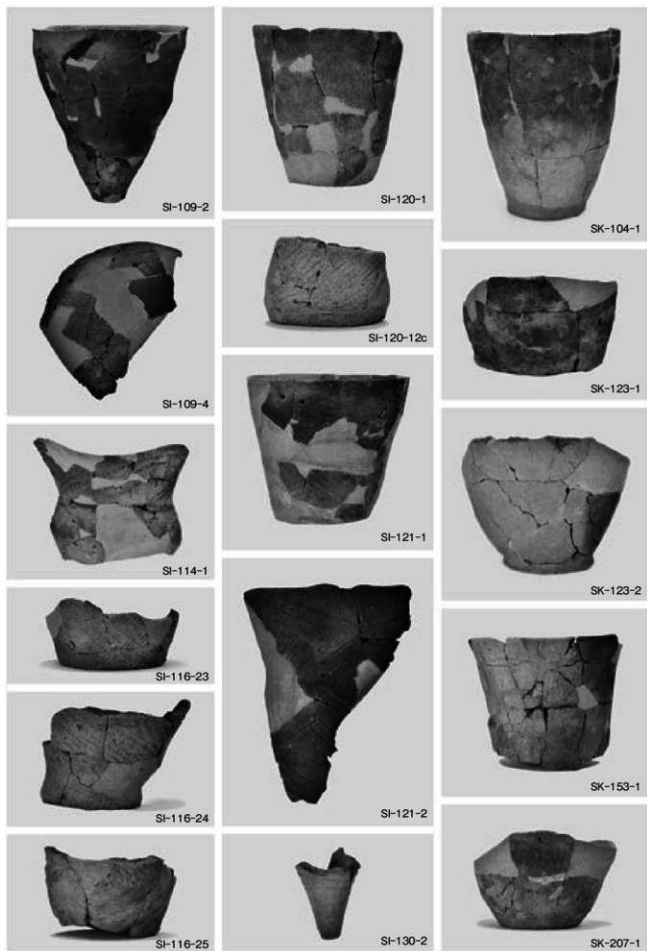
溝状遺構 (3)

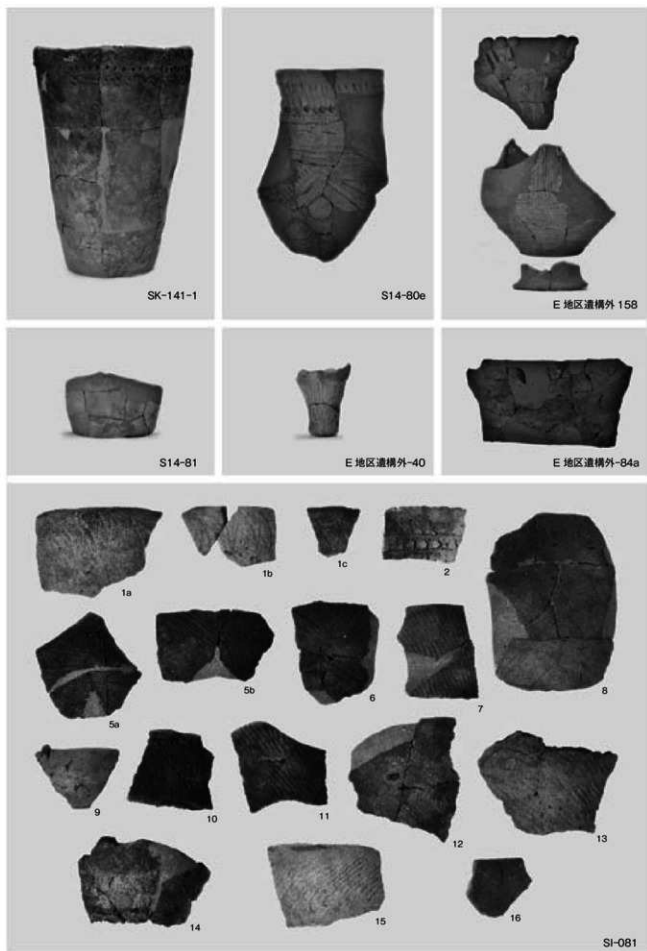


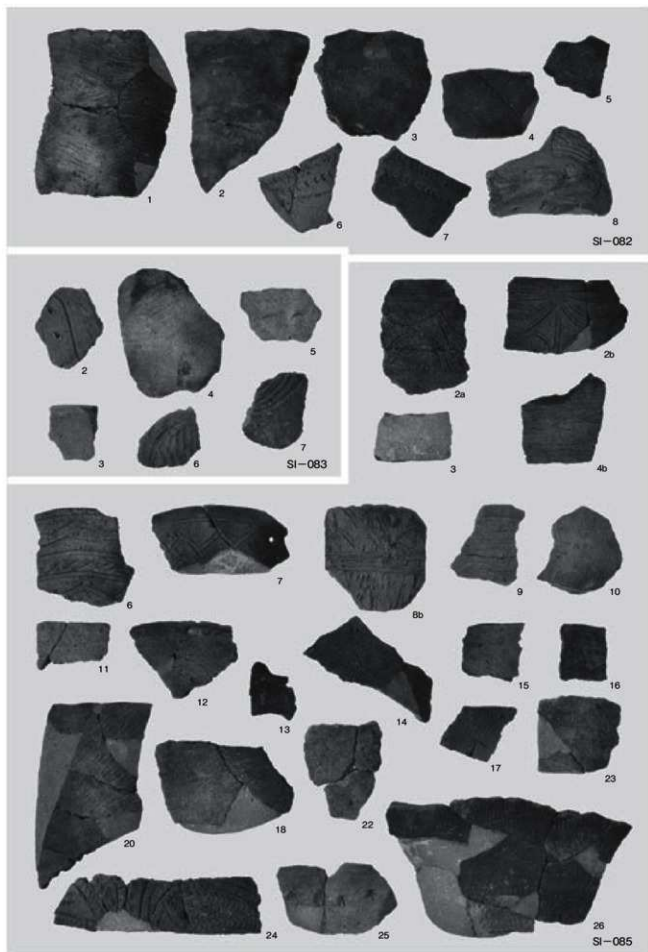
沟状遺構 (4)

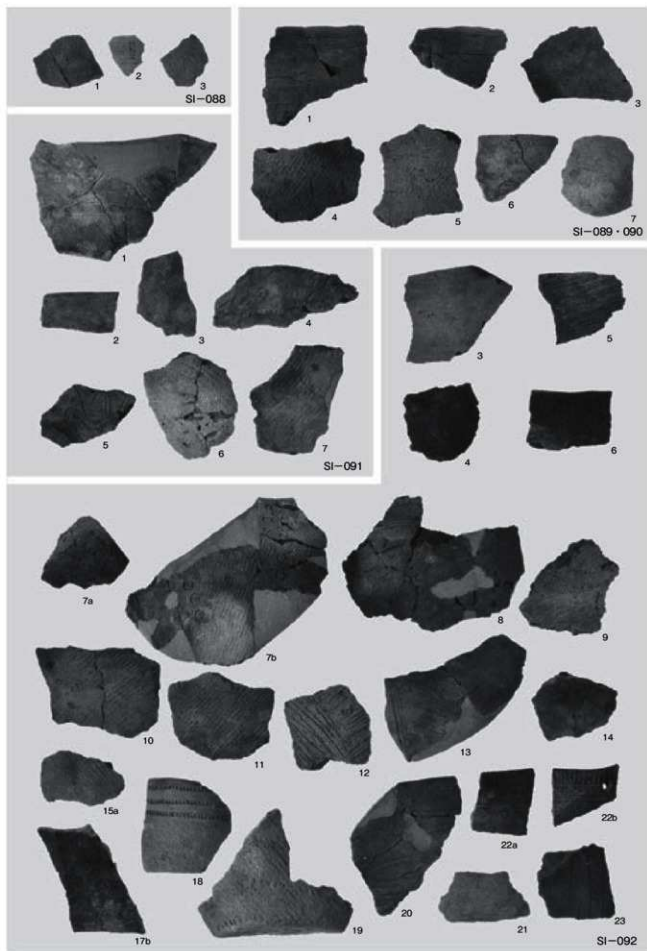


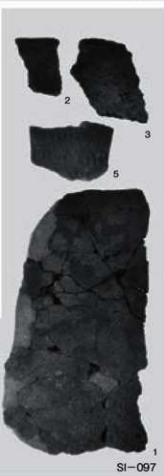
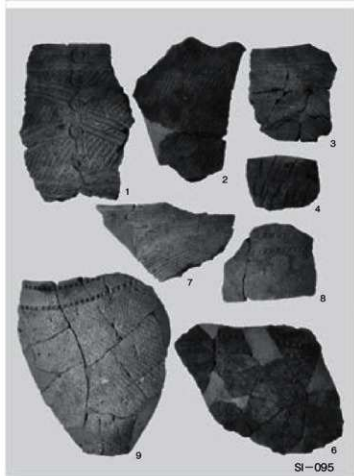
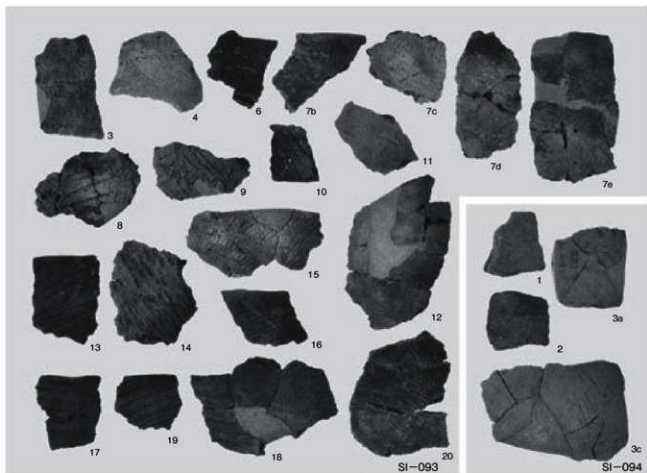


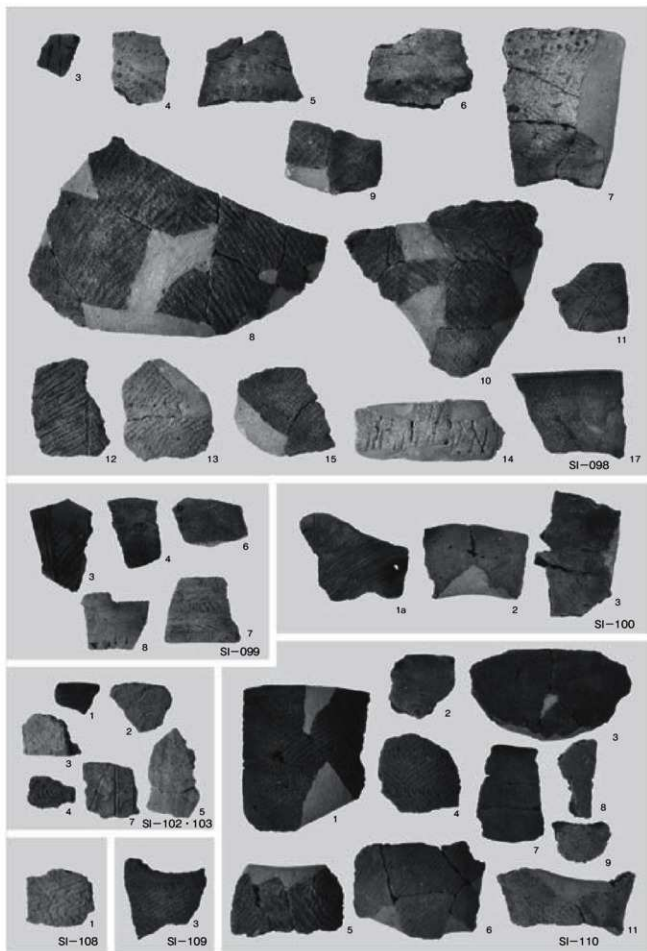


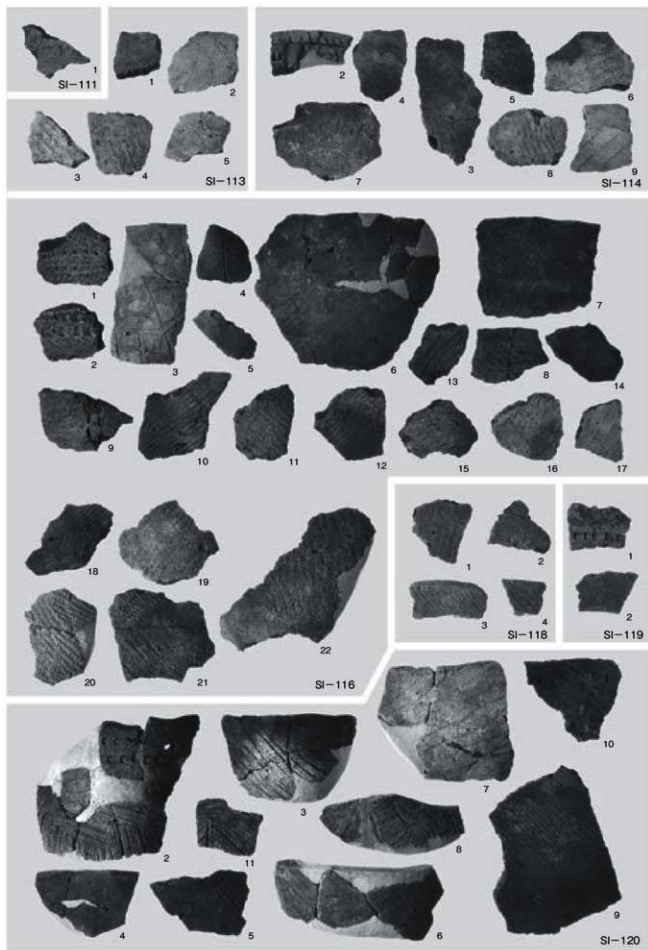


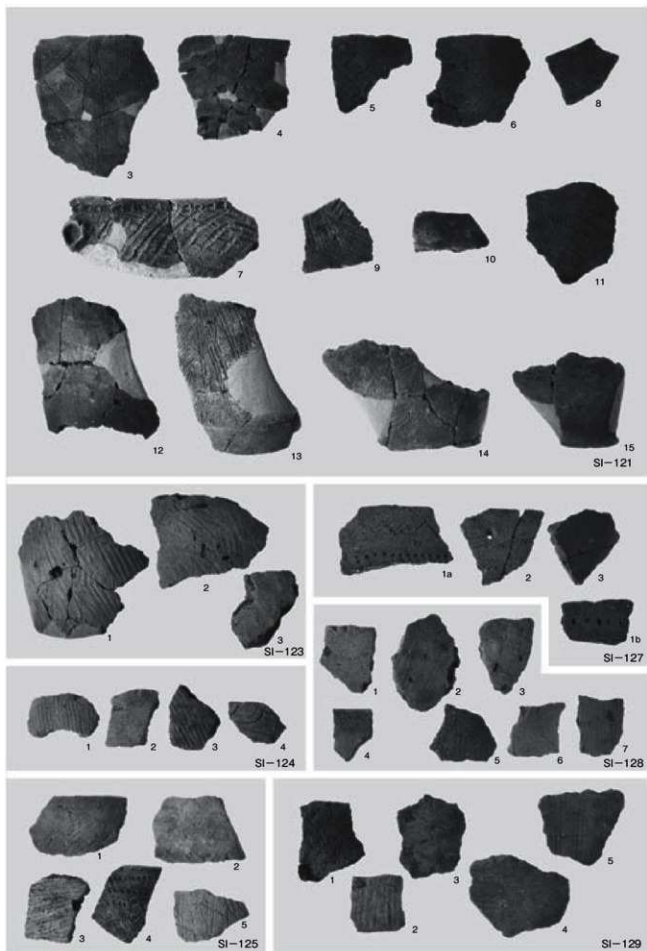


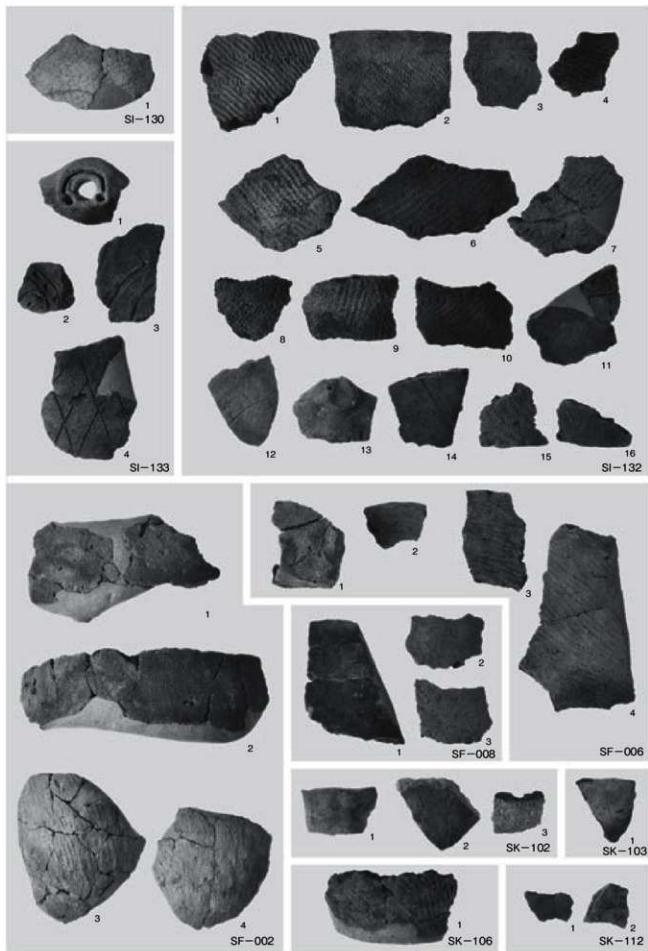


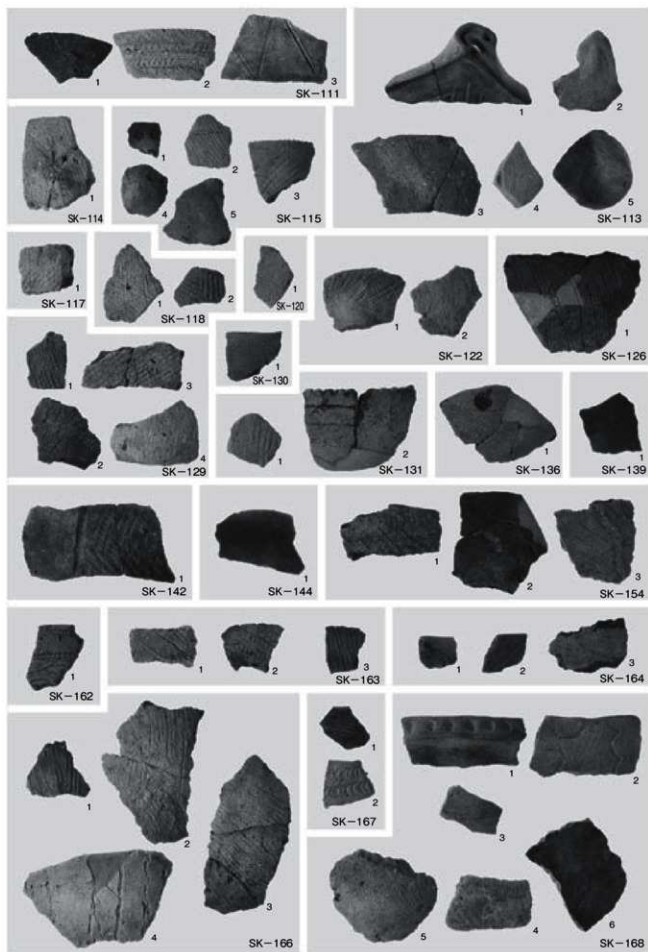


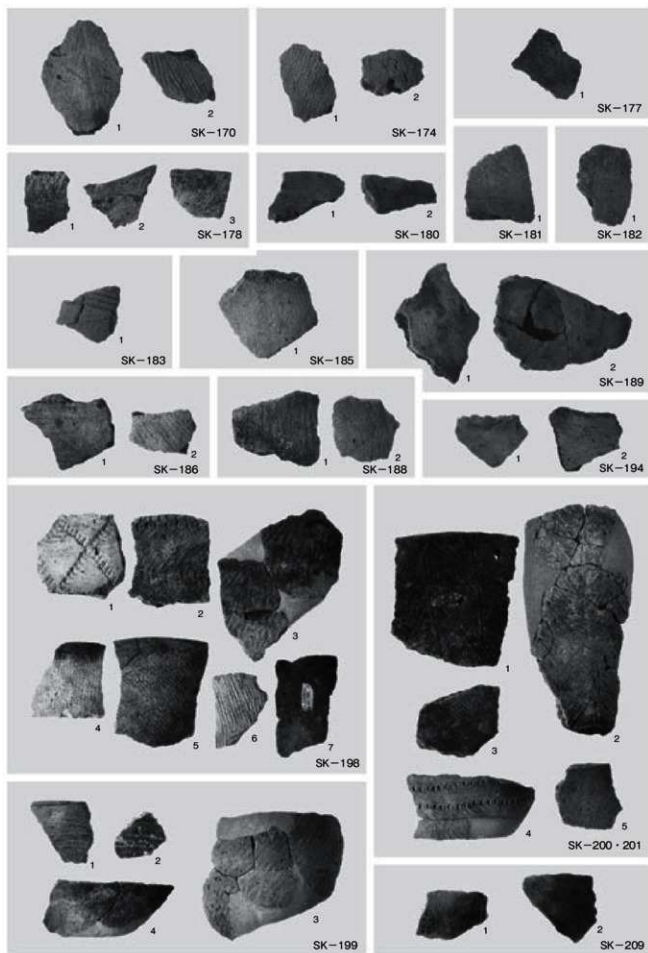


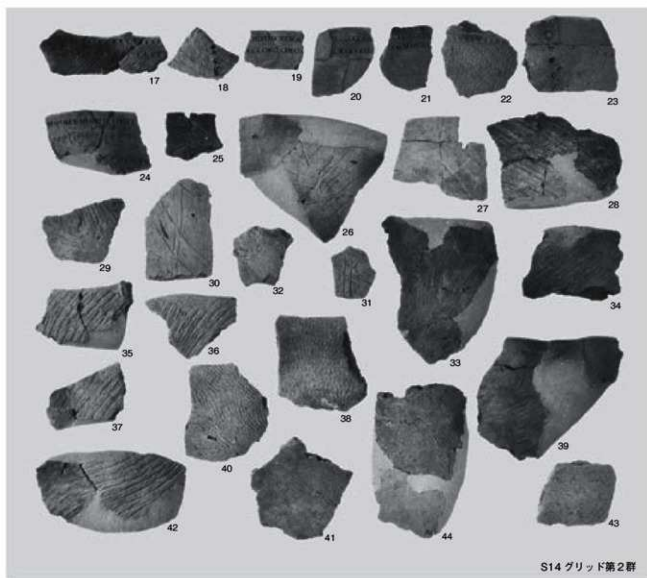
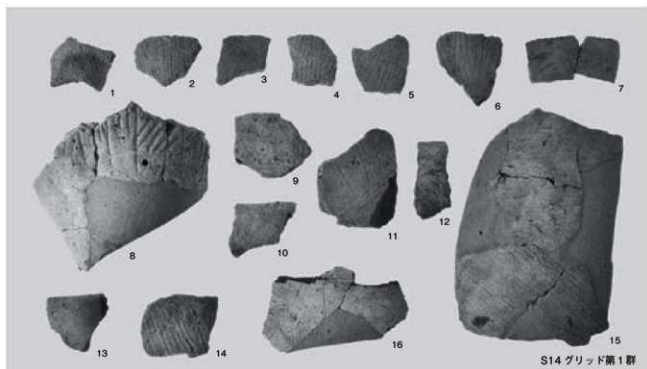


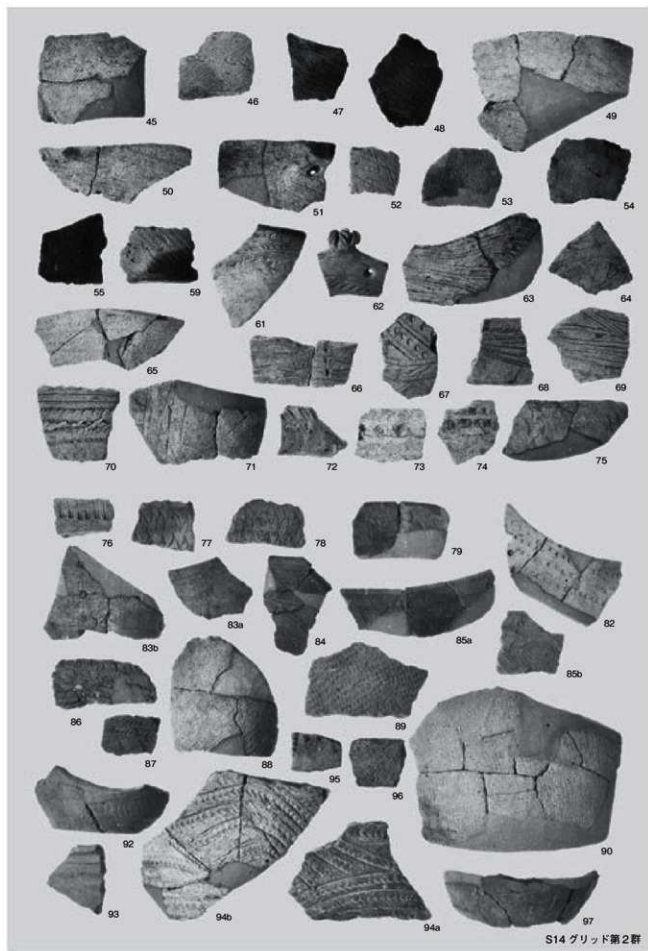




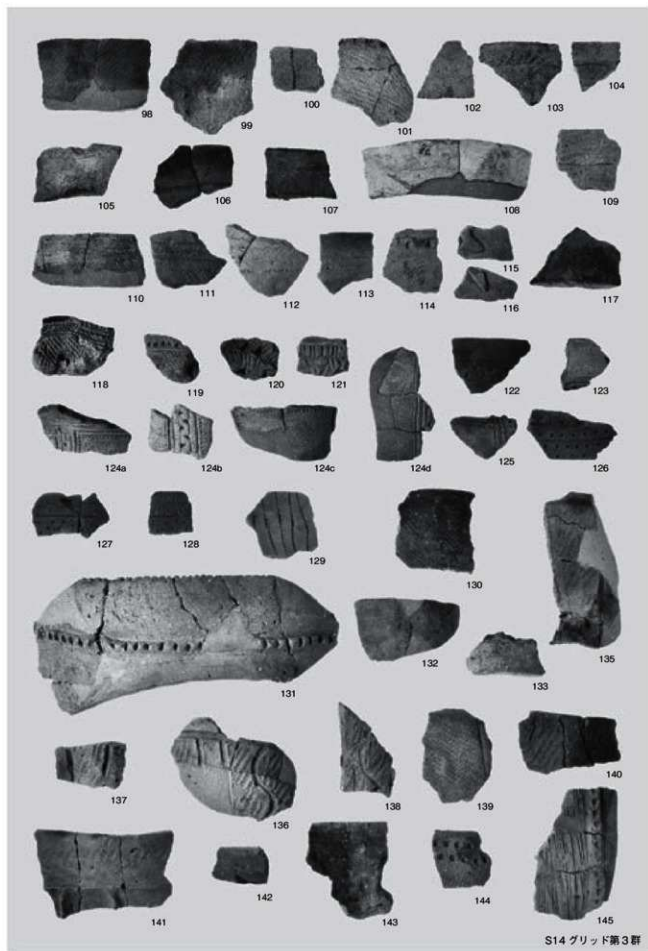


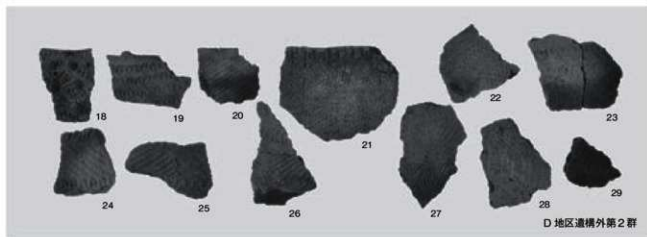
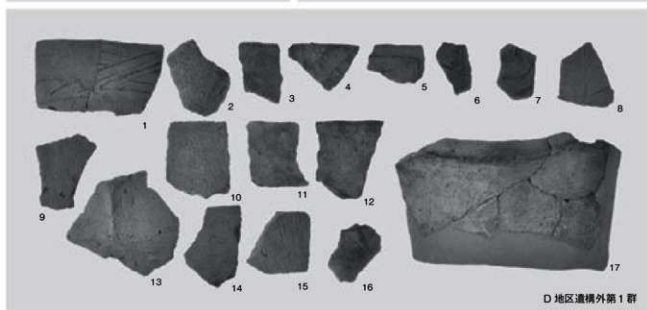
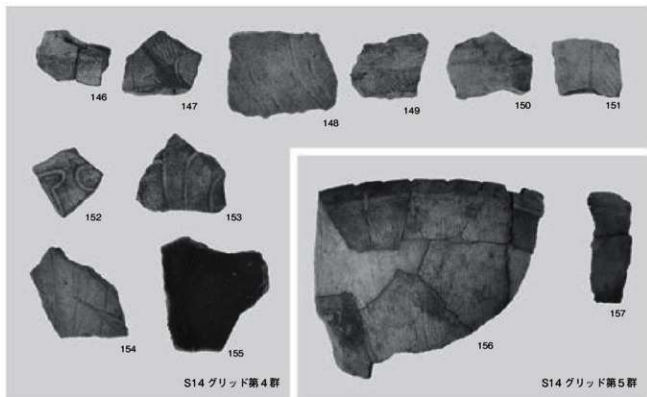


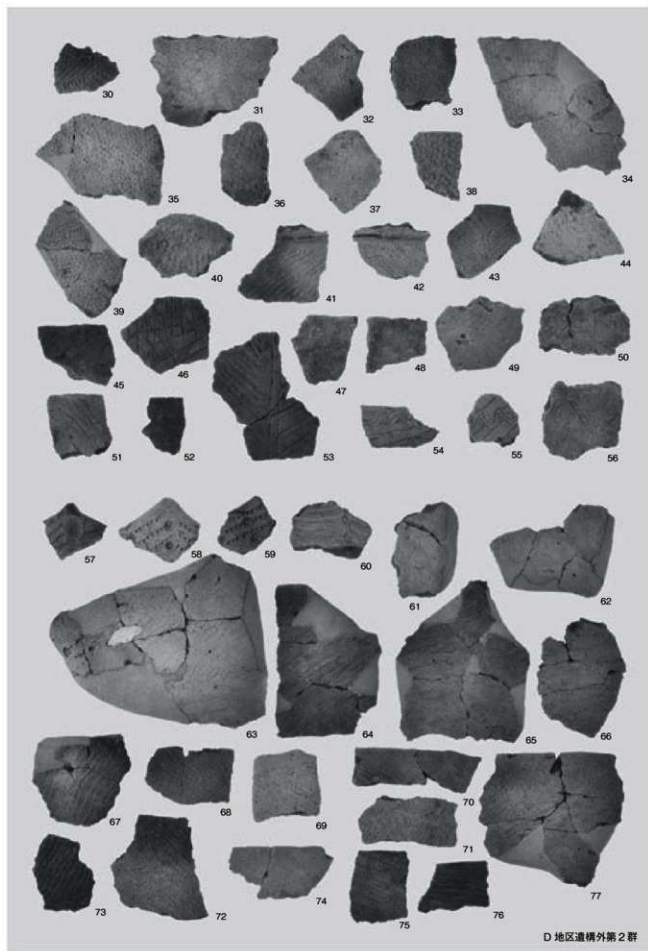




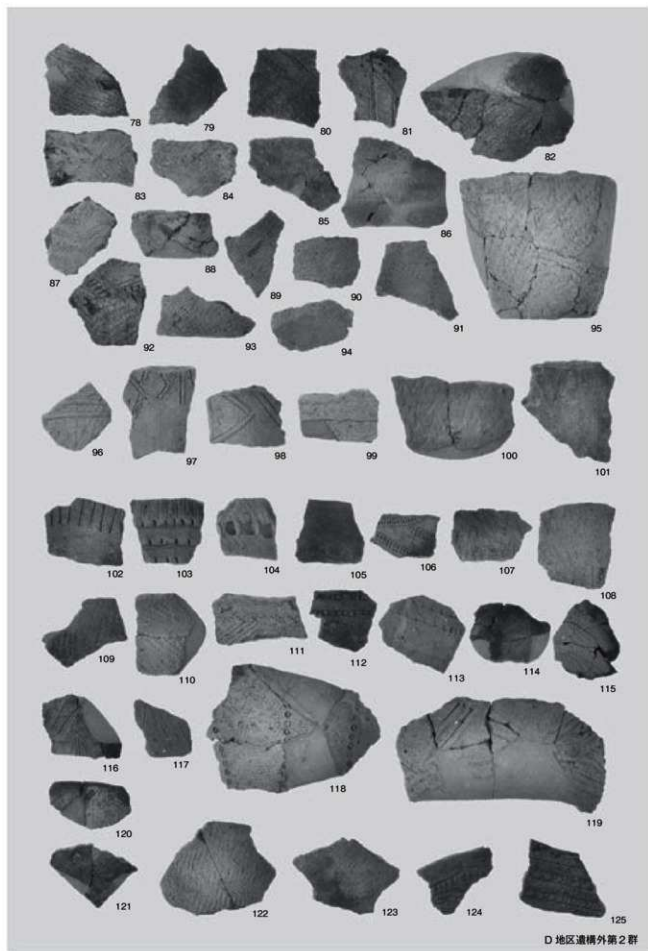
S14 グリッド第2群

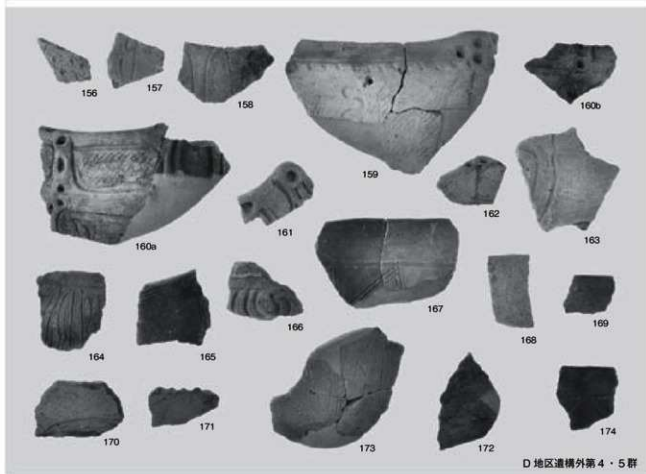
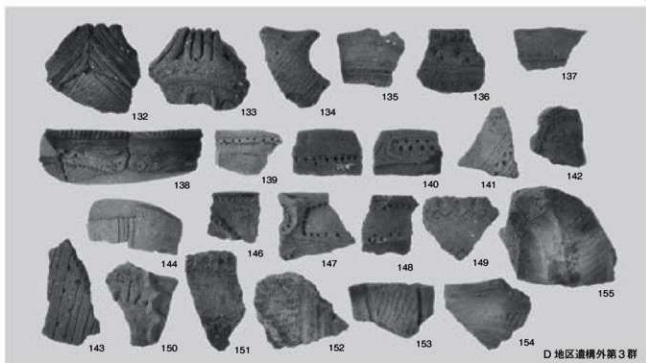


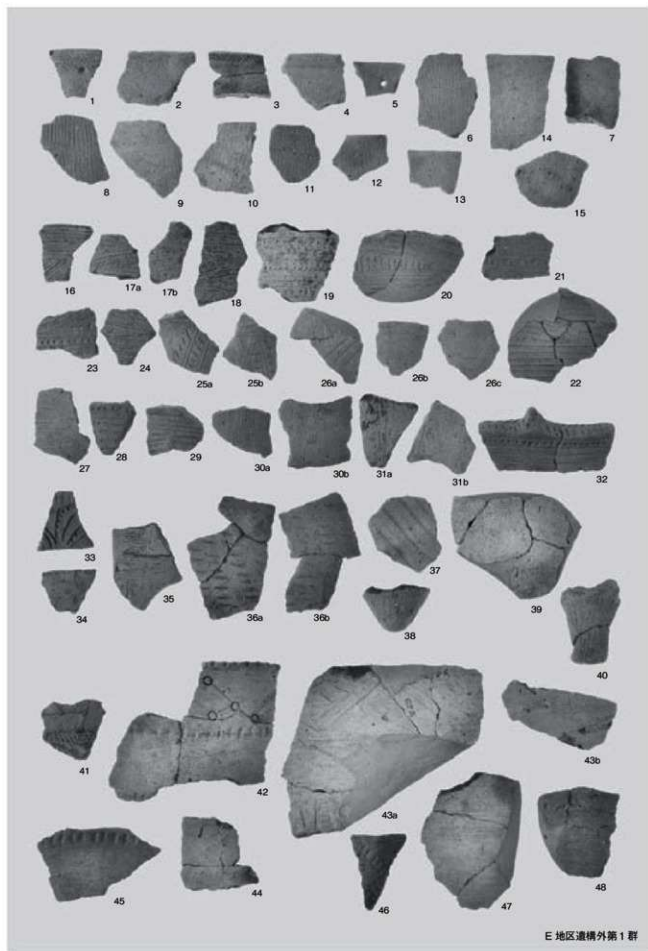




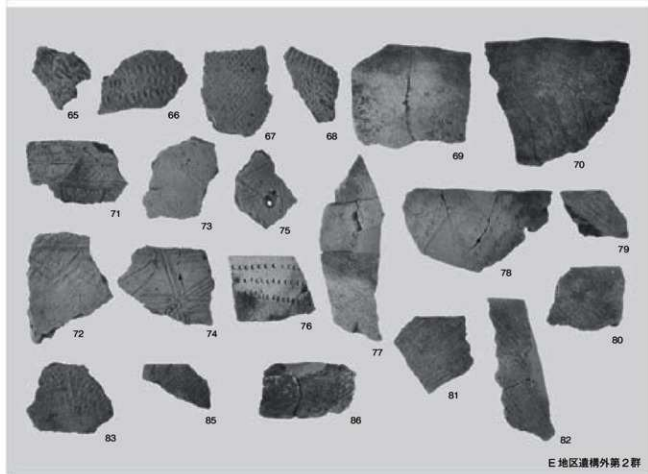
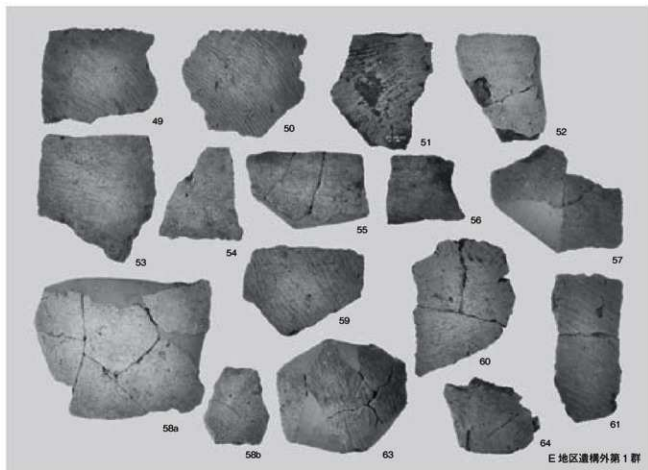
D地区遺構外第2群

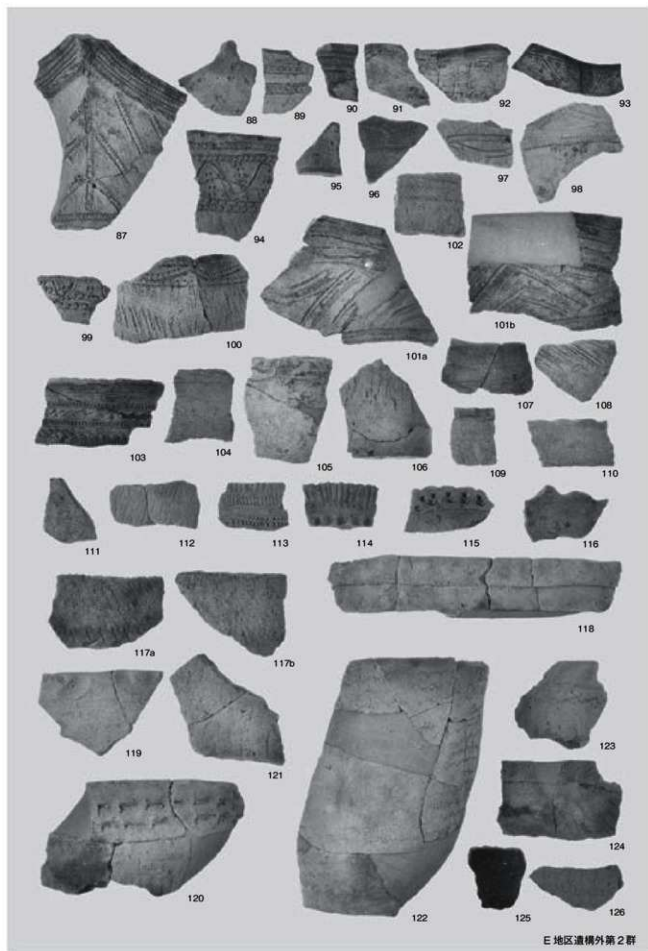




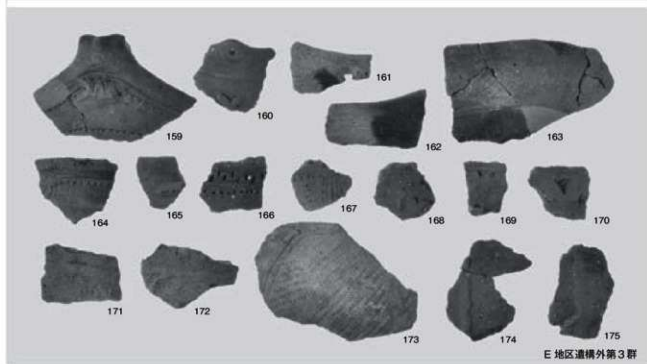
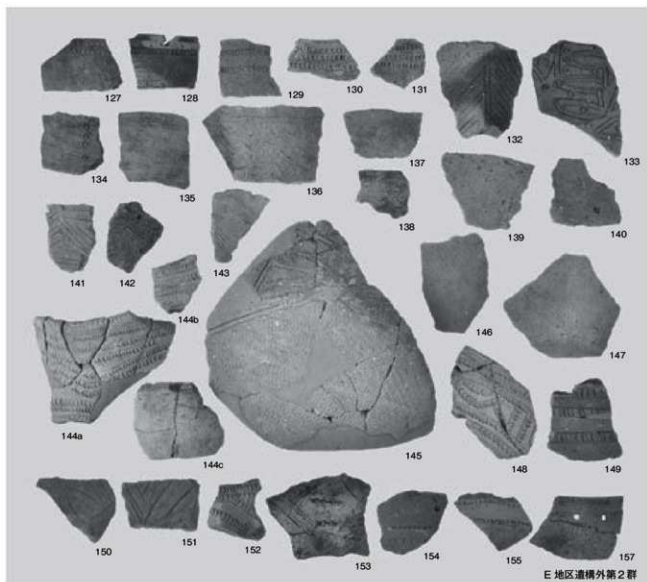


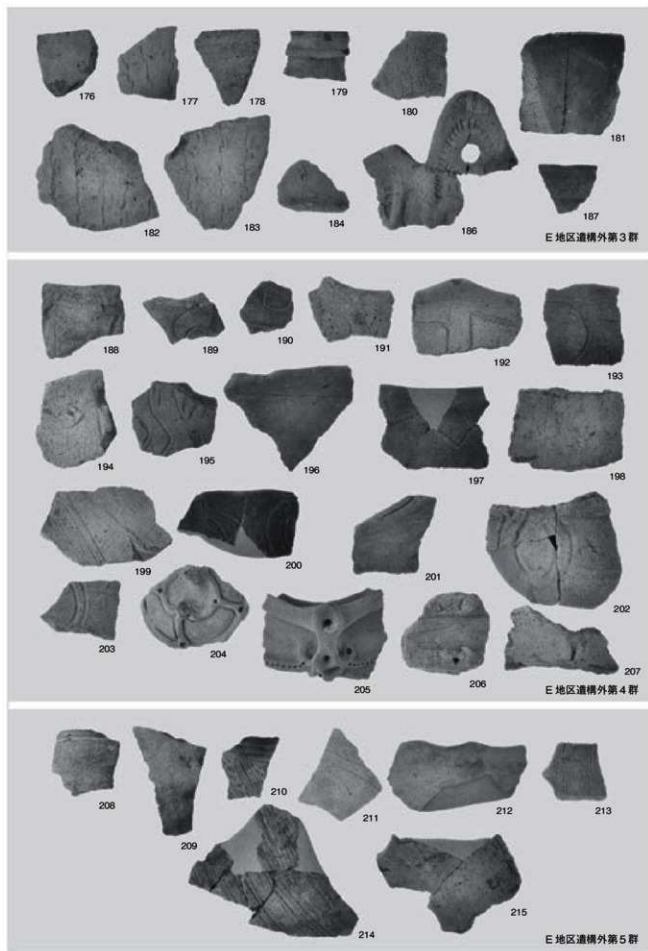
E地区遺構外第1群

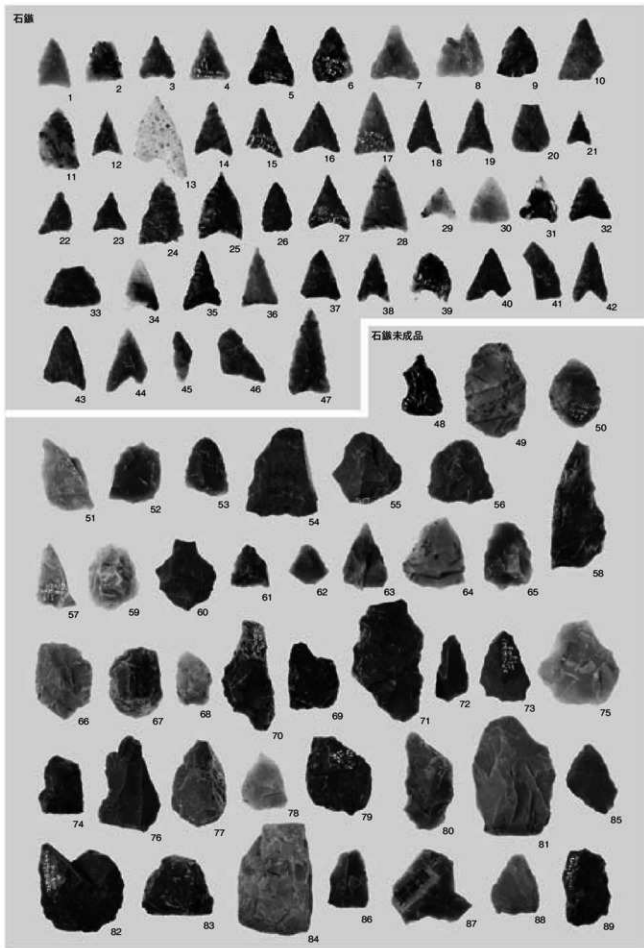




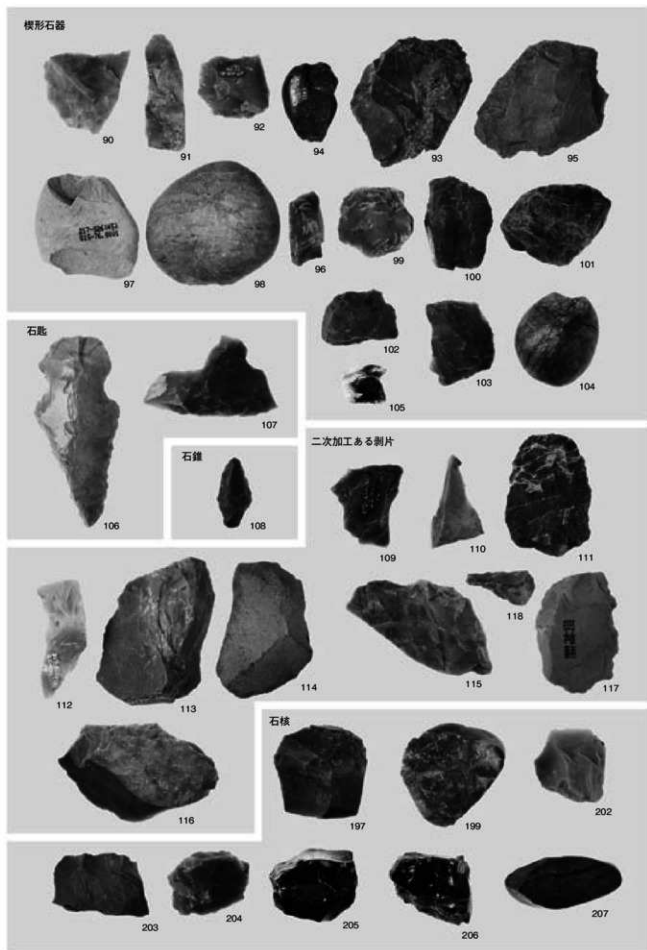
E地区遺構外第2群



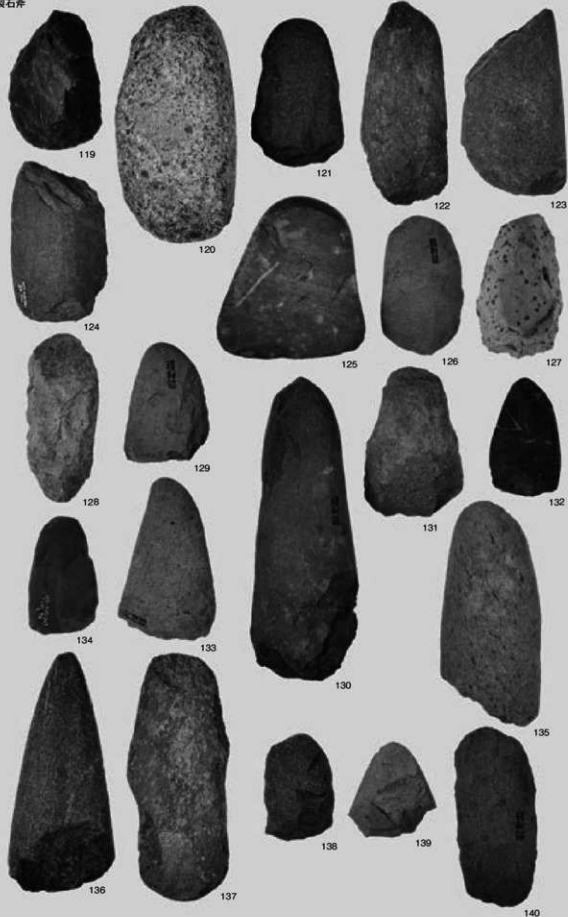


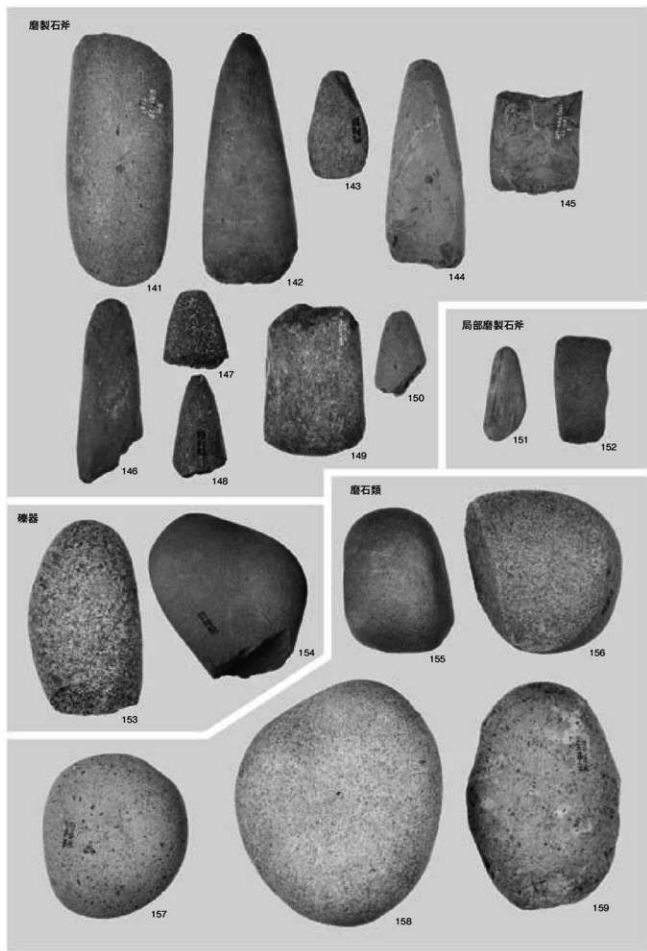


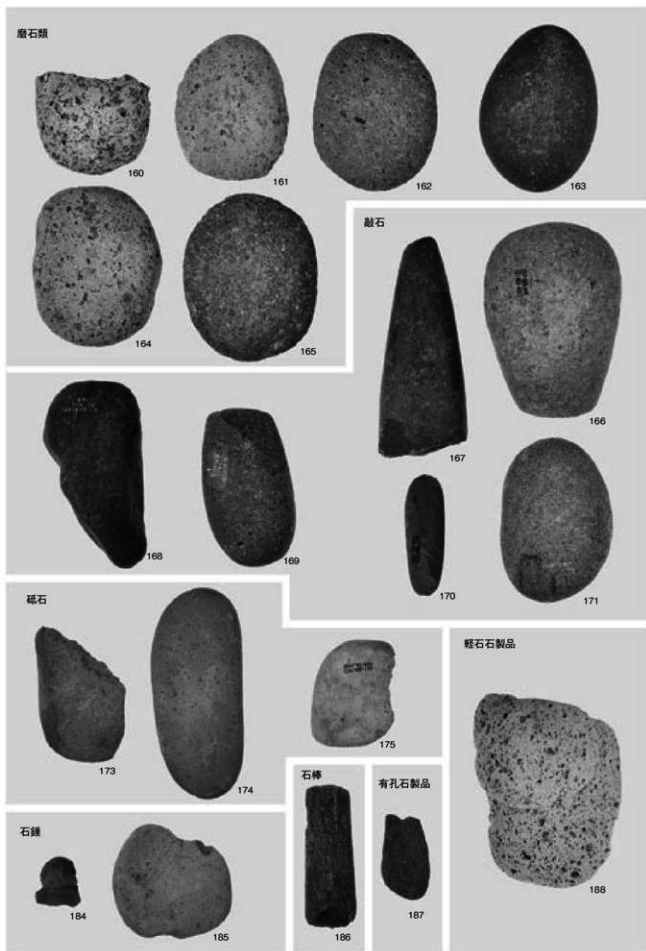
縄文時代石器 (1)

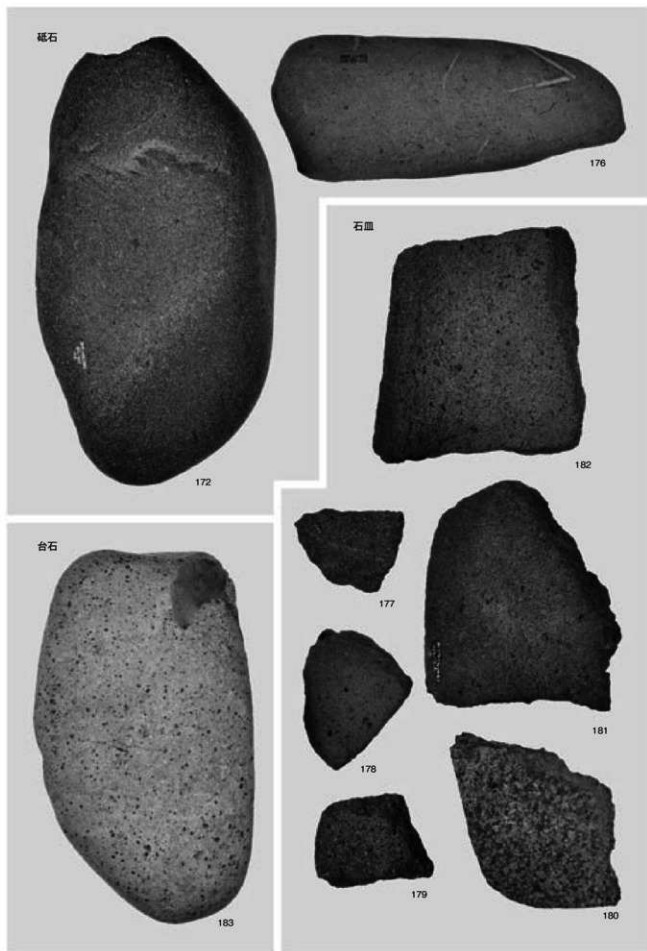


打製石斧

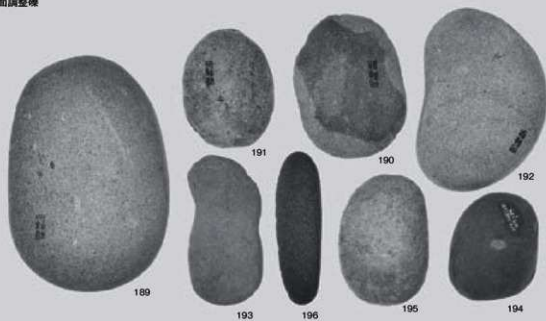








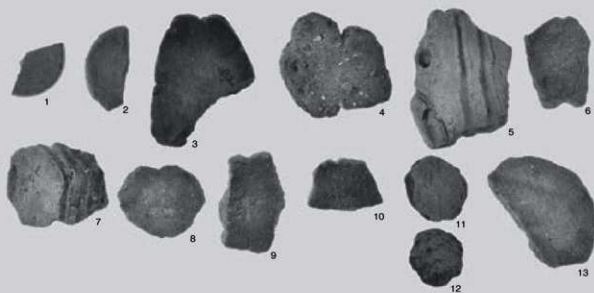
側面調整棒



石核



縄文時代石器 (7)

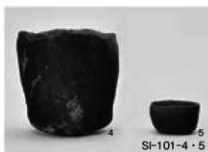


縄文時代土製品





SI-086-11



SI-101-4・5



SI-131-2



SI-086-12



SI-101-7



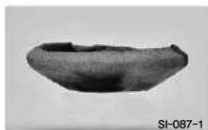
SI-131-3



SI-105-3



SI-131-6



SI-087-1



SI-107-1



SI-131-8



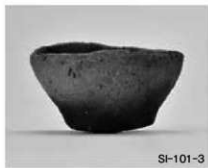
SI-087-2



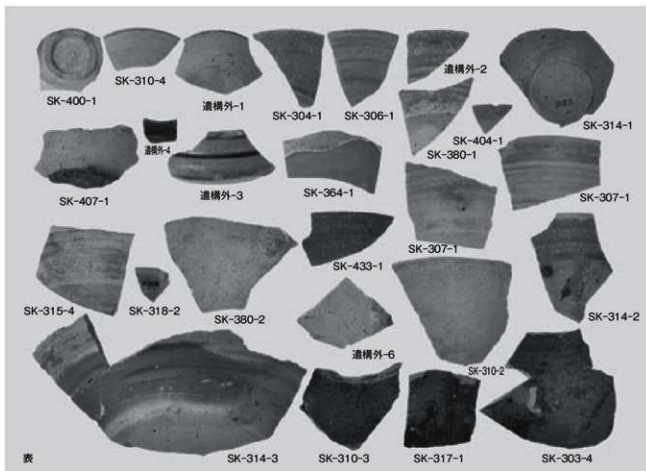
SI-115-1



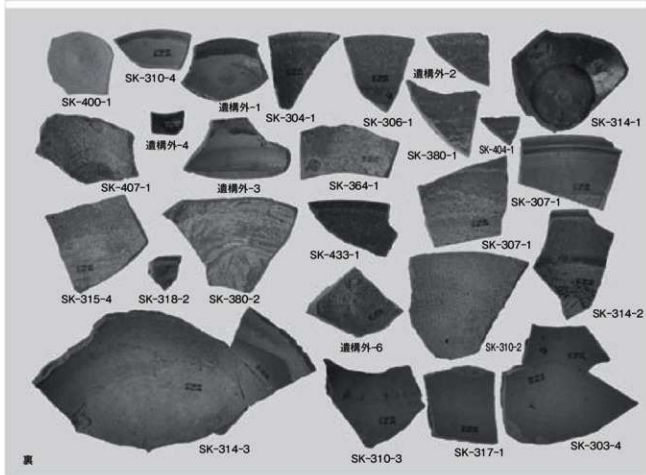
SI-131-13



SI-101-3



表



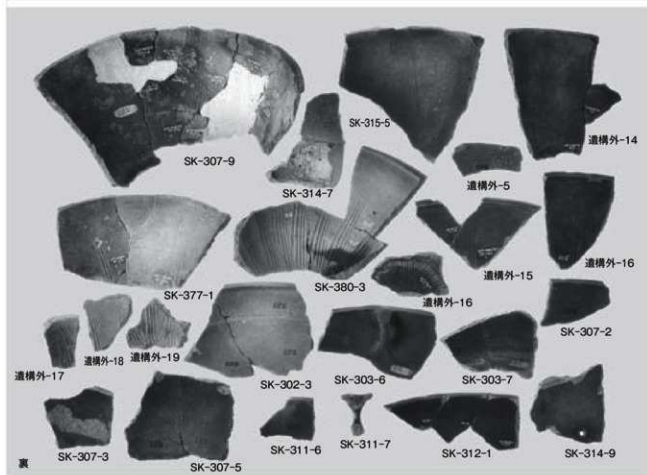
裏

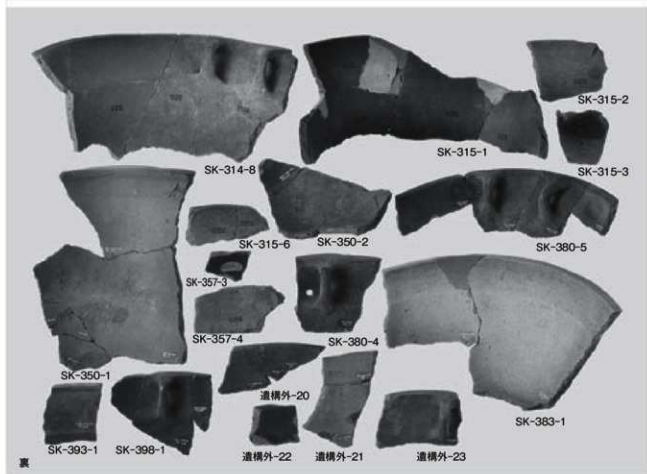


表



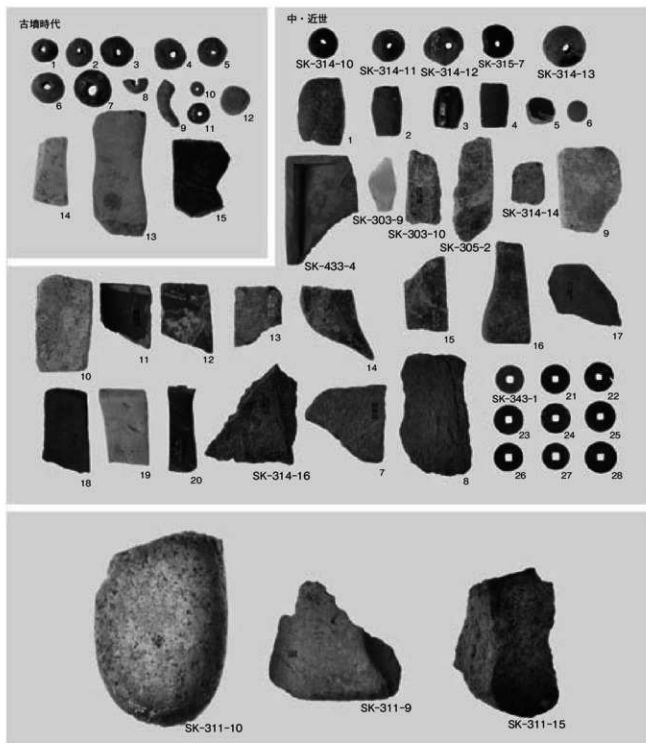
裏



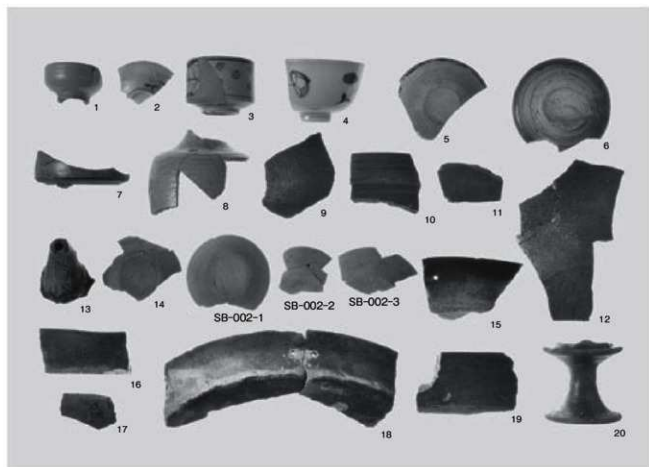




中世土器・陶磁器 (5)



中世土製品・石製品、銭貨



近世土器・陶磁器

報 告 書 抄 録

ふりがな	かしわはくぶひがしちくまいぞうぶんかざいはくつちようさほうこくしょ							
書 名	柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書							
副 書 名	柏市富士見遺跡 縄文時代以降編 2							
巻 次	7							
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第736集							
編 著 者 名	森本和男・山口典子・小高春雄・橋本勝雄							
編 集 機 関	公益財団法人千葉県教育振興財団							
所 在 地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL.043-424-4848							
発 行 年 月 日	西暦2015年3月25日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
富士見遺跡 D・E地区	千葉県柏市船戸字 富士見、小若田字立 山ほか	12217	026	35° 54' 54"	139° 50' 32"	20000109 ～ 20110204	28.045㎡	柏北部東地区土地区画 整理事業に伴う埋蔵文化 財調査
				(世界測地系)				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
富士見遺跡 D・E地区	集落跡	縄文時代	竪穴住居	44軒	縄文土器、土製品（土製円板、 土器片鉢・珠状耳飾）、石器	竪穴住居の時期は、早期 9軒、前期23軒、中期1 軒、後期2軒、不明9軒 であった。		
	包蔵地		炉穴 2基 土坑 107基 遺物包含層 1か所		（石鏃・石鏃未成品・楔形石 器・石匙・石鏝・石鏝未成品・ 打製石斧・磨製石斧・磨石類・ 敲石・石皿・顔面調整器等）			
		古墳時代	竪穴住居 円墳	9軒 1基	土師器、土玉、礫石	竪穴住居の時期は、前期 2軒、中期7軒であっ た。		
		中世	掘込区画 地下式坑 方形竪穴遺構 土坑 道路跡群	3か所 19基 9基 110基 1群	陶磁器・土器、土玉、礫石、 板碑片、硯、銭貨			
	近世	掘立柱建物 区画溝群	2棟 3群	陶磁器・土器、銭貨				
要 約	<p>富士見遺跡は、柏・我孫子低地に半島状に突き出た古常陸川南岸の標高16m～18mの台地に立地する。同じ台地上には縄文時代前期を主体とする集落を検出した駒形遺跡、縄文時代前期から中期の集落である大松遺跡が存在する。</p> <p>富士見遺跡も縄文時代前期を主体とする集落で、竪穴住居の分布からA～Eの5つの地区に分けることができる。今回報告したD・E地区は遺跡の北半部にあたり、縄文時代前期の遺構のほか、縄文時代早期・中期・後期の遺構も検出され、ほとんどが前期の竪穴住居で占められた南半部のA～C地区とは違ったあり方であった。</p> <p>縄文時代の遺構のほか、D・E地区には古墳時代前期から中期の竪穴住居9軒、B地区には円墳1基が検出され、古墳時代の人びとの足跡も確認された。</p> <p>また、富士見遺跡の中央部にあたるD地区南半部には中世の掘込区画3か所が東西に並び、区内から地下式坑・土坑も検出され、出土遺物から15世紀前半に営まれた「屋敷地」と考えられる。</p> <p>このほか南西部にはシシ穴状の土坑を伴う近世高田台牧外緑部に形成された堀・溝が検出された。</p>							

千葉県教育振興財団調査報告第736集

柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書7

－ 柏市富士見遺跡 －
縄文時代以降編2

平成27年3月25日発行

編 集	公益財団法人	千葉県教育振興財団
発 行	独立行政法人	都市再生機構
		首都圏ニュータウン本部
		東京都新宿区西新宿6-5-1
	公益財団法人	千葉県教育振興財団
		四街道市鹿渡809番地の2
印 刷	株 式 会 社	弘 文 社
		市川市市川南2-7-2
